



大正三年五月十七日印刷

大正三年五月二十日發行

譯註 國民文庫刊行會（非賣品）

不許複製

發行者 [illegible]

東京市麴町區[illegible]

印刷者 [illegible]

東京市[illegible]

印刷所 [illegible]

東京市[illegible]

發行所 三[illegible]

東京市[illegible]

（第[illegible]回）

(岡山製本)

大正三年五月十七日印刷
大正三年五月二十日發行

有朋堂文庫 (非賣品)
南總里見八犬傳六

編輯兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 三浦理

印刷者 東京市本所區番場町四番地 平井登

印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社分工場

發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 有朋堂書店

夢にあらざりける。其初夢の富士茄子、鷹と犬とは朋輩の、犬物語を盡しぬる、詩あり歌あり、又證とす。

戯墨新奇長。多編有二是書一。學レ仙師二硯壽一。毛穎汝何如。

世にわびて身は隱れ簑かくれ笠あだなる名のみ打出の槌

校訂について

一既に緒言にも述べしが如く、一に原本に準據して一字も漫に改めず、句讀の位置亦全く原本に從へり。但、原本は悉く讀點（。）のみなるを、意義に基きて句點（、）と讀點とに區別せり。

一作者自言の如く、本書の末部は作者失明の後になり、婦幼の代筆に係れるが故にや、秩祿の祿を「錄」とし「尙」と「倘」とを混淆して共に「なほ」と訓じたる等、誤字誤書と認むべきもの往々にしてこれ有れども、今敢て改竄せず。

一因に、曲亭翁、及び翁の先考先妣の墓は東京小石川茗荷谷深光寺境內に在り。併せて讀者に告ぐと云爾。

南總里見八犬傳　大尾

けれ。因て憶ふに、結城成朝は、持氏重氏の餘黨也。重氏の一字を授けられたる歟、然ば成朝の成も、字の如くにはあらで、讀てシゲトモとこそいふべけれ。この例をもて推すときは、里見義成も、當時の稱謂は、ヨシシゲなりし歟、是も亦知るべからず。しかれども本傳には、胡意其實に由らず、則世俗の訛れる隨に、ナリウヂ、ナリトモと傍訓せしは、實錄ならぬを諦す也。开が中に、兩管領、定正顯定をば、其名の和訓を異にせず、反て酷く貶せしは、古將を、弄ぶに似たれども、こも亦こゝろある所爲にて、彼兩管領は、父祖の時より、君臣の禮節を思はず、是亂世の一驍將、太平の逆臣なれば、下剋上の罪を、心誅せざることを得ず。且定正の不才なる、顯定の機變なる、俱に久しからずして、子孫凋落に至りしは、父祖の不忠の餘殃にて、竟には天理順逆の、應報あるを世の看官に、悟らせんとてかくまでに、作設けし愚意は、鄙語にいふ、胡虘より出し、眞實とやいふべかりけん。然ばこの物の本には、是等の用意多かれども、房總の人はさら也、こを悟らぬも多かるべし。と論ずる程に入定の鐘の、响くに頭陀は驚きて、憶ず小夜を深したり、告別稟す。と遽しく、身を起しつゝ跌きて、行燈托地と推仆せば、主人は、吽嗟とばかりに、叫ぶ其聲に驚かされて、愕然として覺來れば、是思ひ寐の夢なりき。噫嘻盧生の榮華は五十年、本傳作者の筆勞は、正に是二十八年、孰れか

三國の事は我國が基本也、他郷の人の作は見るに及ずとて、三國志演義を讀ざる者あらんや、笑ふべし。當時上野にも里見氏あり、安房の里見と同宗にて、桐生に在城す。後に由良國重(一書に云謙信)に討滅さる。其餘胤出羽に到りて、藻上氏に臣とし仕へて、六千石を領すといふ、里見越後是なるべし。この人後に罪ありて死を賜ひにき。其後、又奥に、忠臣里見十右衞門あり。房總の人是等をば、亦何といふや。然ば本傳には、地名なども、今と同じからざる者多くあり。譬ば安房の富山の如きば、士人、今は是をトミサンと呼做したり、しかるを本傳には、トヤマとす。是等は雅俗今昔の差別あれば也。又洲崎は、士呼スノサキ也、然るを本傳にはスサキと讀せて、江戸深川なる、洲崎と同稱にす。只是のみならず、三國志演義なる、落鳳坡又水滸傳なる史家村の如く、作者の作設けたる地名なきことを得ず。蓋稗史小說の自由なる、有憾ること尠からぬを、士人は、今の稱呼と違へりとて、笑ふもあらん。开は小說の小說たるを、知ざるなれば、辨ずるに足らず。又人名なども、胡意稱呼を異にして、實に据らざるも、間是あり。譬ば足利成氏は、讀て是をシゲウヂといふべし。何となれば、當時足利學校なる、一老僧の隨筆に、成氏を重氏と書たるあり。是に由てこれを觀ば、成氏の和訓シゲウヂなる叓疑ひなし。この義は、近曾南畝莠言、其他の隨筆にも載たれば、吾辯を俟ずして知る人は知るべ

筆さへ止るに及べり。只この落涙のみならず、吾智音の友の、本傳を見果ずして、早く鬼籍に入りし者、出羽に茂木巽あり、江戸に蒲生秀實あり、伊勢に櫟亭琴魚あり。是等は、文化文政の間に、終し壯佼也。今玆は又輪池孤雲、奈須の三翁、不録の聞えあり。其數にあらねども、去歳の秋は老妹を失ひ、今玆の春は、老荊逝きぬ。又翠君は、書畫をよくし、小説を嗜たる、同好の風流士なりしに、いまだ初老ならずして、陽月初五に彼訃あり。有恁れば廣き大江戸に、智音の友は地を拂て、今は一人もあらずなりぬ。只牟禮松阪の兩他郷に、默老篠齋桂窻の三同好あるのみ。和漢の才子、大部の書を、著す者多かれども、一世一部に過ぎざるのみ。吾は大部の戲墨四本まで、綴らまくせし故に、果さゞる者三本あり。幾まで生ても足ることなければ、長生も亦妙ならぬを、今悟るこそ悔しけれ。といひつゝ歎息したりしかば、頭陀も倶に鼻うちかみて、翁の洪歎理り也。但翁の相識智音のみならず、江湖上に、物の本を嗜る少壯の、いまだ這書を見果ずして、早逝しけるもさぞあらん。獨安房上總人は、八犬傳を見ずといへり。故何と問ば、里見氏は、我國が基本也。他郷の人の作、見るに及ずといふ者多し。と告れば主人はうち笑ひて、田舍兒の頑なる、然る僻意も多かるべし。蓋稗史物の本は、皆架空の言のみ、何ぞ其事實を問んや。只其作りざまの新奇なると、文の巧致を弄ぶのみ。譬ば吳蜀の人、

既に上にもいへる如く、婦幼に代寫させぬれば、果さんや否や、我ながらいまだ知らず。隨筆なども、文溪堂の需に應じながら、年來抄錄しける書どもを、讀せて聞まくするに、其人なければ、いよ〳〵かたかり。只長夜の徒然に、吾舊作の物の本の、三十有餘年に及べるを、婦幼に讀せてうち聞に、世を隔たる人の戲墨を、創て見る心地して、忘れたることのみ多かり。況其文の拙きはさら也、作りざまなどもいかにぞや。今ならばかくはあらじ、と思ふ事尠からず。有昔衞の蘧伯玉は、五十にして四十九年の非を知るといへり。他は異邦の大賢なれば、五年毎に一化して、非を知る事も易かるべし。幵に及ぶべくもあらざりし、吾は偶昨非を知るのみ。然ば本傳なども初筆は、二十八年前の舊作也。四輯五輯までは、體裁今と同じからず。幵は昨の我に饜て、且流行同じからねば也。因て又憶ふに、本傳第一輯二輯なる、八房の犬の毛色の、形牡丹の花に似たるとあるを訝りて、這義を吾に問し者、闗東陽、後後山英子、其他もありけり。其後故兒輿繼、鈴有年疊翠君なども訝りしを、當時吾答ず、本傳結局に至りなば、おのづから知らるべしといひしのみ。其問ける友人は、皆同好の才子なりしに、或は二十四五歳、或は三十七八歳にて、皆不幸にして身故りにき。業平朝臣の歌ならねども、吾身ひとつはもとの身にして、嚮に彼八房の犬の毛色の、一解を綴るに及びて、憮然として懷舊に得堪ず、口授の

るは、抑何なる意ぞや。世の俗情の偏強なる、理に暗く利に捷れたる、大槩はかくの如し。鄙語に云、長生すれば、恥多しとは、吾上にこそあるべけれ。とうち呟きたりければ、頭陀は然こそと慰めて、人文字ある時は、苦勞多しといにしへの、人のいひけんも理り也。就て又問まつる、朝夷巡島記、又俠客傳、美少年錄なども、倘半分にして、結局までは遠かるべきに、翁の病眼かくの如くなれば、續出さるゝ事かたかるべし。百年の後凡筆をもて、他人の是を繼ぐ者あらば、事損ねにこそ候はめ。といへば主人は點頭て、然也、唐山にもかゝる事あり。雁宕山樵が水滸後傳、天花翁が後水滸傳、及續西遊記、後西遊記の如きは、作者の隱微を知らずして、叨に蛇足を傚しゝ者也。這故に行れず。玉のいまだ、全からずとて、瓦をもて是を補はゞ、誰か連城に代まくせんや。縱卞和ならずとも、鼻を掇みて走るべし。己を知らず人を知らざる、似而非作者は唐山にもありけり。开は左まれ右もれあれ、巡島記俠客傳は、刊行浪速の書肆なれば、其書畫板下の寫本を、兩工にものさせて遣すに、吾老て厭しく、且志も異なれば、老眼かくの如くならざる時より、等閑にして、今に至れり。但俠客傳は、吾得意の戲墨にて、世の看官も、五輯六輯の出るを、俟つ者多しと聞えながら、是まで續出さゞるは、この故也。又美少年錄は、本傳と等き文溪堂の藏板なれば、いかで結局まで、編果さまく思へども、

候ひぬ。开を先生に告て、校閲を乞ざりしは故あり。先生は刊刻の疎悪なるを嫌ひ給ふに、其刻板は彫刻宜しからざれば、見せまゐらするとも、意に稱ふべからず、と思へば也といへり。這故に、吾又別人をもて遣して、いはるゝ趣こゝろ得がたし。其板疎悪ならば、吾買取るべし。其刻本を見せよ、と重ていはせしに、他又答て、否一本に倣せしにあらず、百人一首の附錄にしぬる也。其製本は皆賣出して、今はなし。異日揚せて、見せまゐらすべしといひしのみ、今日までも竟に見せず。他は十稔許さきつ比まで、年々に吾に戲墨を乞ふて、赤本事始、又女西行、又金魚傳などいふ、合卷の畫策子を、多く刊行せし者なれども、今は然る要事なければ、自恣理不盡なる事をのみいふめり。吾ゆきて談ぜばやと思へども、吾脚久しく衰て、篠轎にあらざれば、一町だも出る事得ならず。況てかゝる煩しき事に、身さへ心を役せられんは、本意にあらず。既に六日の菖蒲、十日の菊になりたるに、いふともいふかひあるべからず、と思ひ捨て果さゞりき。只彼二書を具眼の人の、惑る故をば知らで、論ずる者もあらん歟とて、言又是にしも及る也。書肆は利の爲に刊刻し、作者は名の爲に恥る事あり、氷炭何ぞ合よしあらん。或は吾舊作を再板して、新板と僞り、或は吾舊稿を購拿りて、恣に刊行す。畢竟吾名號を售る者にて、其書の好歹を知れるにあらず。吾名號を售る者の吾に告ずして、各恣な

いへり。又同人の評に、略註の中、標識稱謂辨の下に、樣といふことは、近世の俗稱也とあれども、永享中の古書に、この言あれば、近世といはんは、いかゞあるべきといへり。理りあるに似たれども、吾思ふよしはしからず。いともかしこき天朝は、天地定りてより、革命の世代なければ、二三百年の昔をも、猶近世といふべし。この辨は文多ければ略す。異日折もあらば又いふべし。又雅俗要文の顛末に似たる事あり。寛政年間、京なる中川新七といふ、書賈江戸に僑居してありし時、他が需に應じて、花鳥文素といふ、婦女子の要文一卷を、綴りて取せしは、文化元年、甲子の春の事なりき。近江屋新八と合刻にすべしといひしのみ。這年新七は京へ還りて、又來ることもなければ、其稿本はいかになりけん、聞こともあらずして、三十八年を歴たる、今茲初夏時候、吾相識書肆、森屋某といふ者、花鳥文素の稿本を、一書賈の手より買拿て、反て吾に告も知らせで、刊刻すと告る者ありしかば、吾又うち驚きて、則人を森次許遣して、花鳥文素は、昔吾中川新七に、綴て遣しゝ疎文にて、何なることを書たるやらん、今は忘れたれども、必拙かるべし。然るを吾に告ず、校閲をも乞ずして、刊刻しぬるは甚非也。和主是等の策子を、彫まくほしくば、吾又別に綴りて取すべし。先其稿本を見せよ、といはせしに、他答て花鳥文素の稿本は、既に書林行事、免許の印信あれば、曩に刊刻し

らず。剞劂又本文、及略註にも、訛謬あるを、後に思ひ得たれども、永壽堂、胡越の如くになりて、久しくなるまで、其板下の寫本を見せねば、徒にうち過ぎにき。是等も必補刻すべき者也。先自序の歳月と、馬琴の二字を、速に削去るべし、と重ていひ遣ししかば、承り候ひぬ。夙く告まつるべかりしに、然るよしには心もつかで、今さら畏り候といふ、答のみ聞えたり。鬻に發販したりしより、既に一千あまり發たりといへば、いふかひあるべしや、否や、心許なし。然而其印本を、婦幼に讀せて聞に、咸傍訓はありながら、文字の轉讀によみ惑ひて、詳ならず。靴を隔て癢を搔にも劣りたり。然ば今に至りて讀も果さねば、誤を正すに由なし。只單葉の傍訓ひとへはなるを、ヒトヘハと誤たる類、僅に二三を知るのみ。又三月の部、雛遊の略註に、飛鳥井榮雅老君の歌を引て、

都にてやよひのそらののどけくてひなのあそびも思ひやるかな

とある、のどけくてを、のどかにてと誤り、あそびものもを、をに作りしは、筆工の誤寫也。又雜部三十八の本文に、竹都神宮とあるは誤也。這義は、吾友伊勢松阪なる、小津桂窻の考ありて道く、竹の都は、齋宮のありし迹をいふ也。神宮よりは路の程、相距亘三里許なるを、淸水濱臣も知らで、神宮の事也、と思ひ誤たり。竹都を故鄉とよみし、古歌もありと

に、物故し給ひしに、翁の自序の文と歳月に、是相違あり。且其書に著作堂馬琴作、と錄しゝもこゝろ得がたし。馬琴は翁の戯號にて、合巻物の本に自稱し給ふのみ、譬ば南畝の戯號、狂詩に寢惚と號し、狂歌に四方赤良、又香花園と稱するが如し。意ふに雅俗要文は、戯作ならねば、戯號を錄し給ふべくもあらず、且文中にも誤寫あり、翁の校訂を經ざる者に似たり。這義甚麼。と問れしに、主人答て、然ばとよ其ことなれ。拙著雅俗要文は、文政十一年の春、江戸伯樂町なる、書肆永壽堂西村與八の需に應じて、同年の夏六月、稿本成しを、登時與八に取らせにき。其後彼書肆は、活業如意ならで、刊行しがたしと聞えしのみ、詣來ることもあらずして、十有餘年を歴たりしに、今玆二月時候、雅俗要文出販したり、と人の噂に聞知りて、うち驚きつゝ、其印本を買取らせて、婦幼に讀せて聞に、今客僧のいへるが如し。稿本の自序には、文政十一年夏六月の吉とあり。且其序に、永壽堂の號をも載しに、彼英文が恣に寫更めて、其堂號も自序の歳月も、皆僞りたるにぞありける。這故に吾速に人を英文許遣して、其刊行の始末を問せしに、他は永壽堂の宅眷より、吾稿本を購求めて、聽て筆工に再寫させて、刊刻し候と云。しからば何どて夙く吾に告て、校閲を乞ざるや。且自序の歳月と、序中の堂號を、恣に寫更めたるは、いよ〳〵僻事也。又是等の著述に馬琴といふ戯號を、錄したるは相應しか

名を假りて編中に、這惡論を載たる歟、是もいまだ知るべからず。亓を解嘲の文を作らは、他が謀る所に陷て、赤水餘稿の報章を、世に引くにしも似たるべし。已ねく〳〵、と推制めて、毫も掛念せざりしかば、人には告ず忘れたりしに、言の便宜に思ひ出て、僂れば三十餘年の、昔にぞなりにける。人さま〴〵の世にこそ。といひつゝ火盤を曳よせて、一霎時烟を吹程に、頭陀は只管感服して、翁は唐の張公藝の、亞流にもやあるべからん。忍辱は我佛の、第一の教なれども、野衲等が及所にあらず。現に漢學をすなる者は、反德行謹愼の理を思はず、動もすれば論を好て、人の惡をいふ者あり。況惡なきを惡として、論じて怨を思はざるは、俗にいふ、無法馬鹿物に庶かるべし。翁ならずは孰かよく、其惡論を忍ぶべき。只感服の外候はず。就て又問まつる、近會這地の書賈等が、翁の舊作なる、畫策子物の本を、恣に再板して、是を翁に告ず己が自恣、出像を新くして、剩像贊詞書などを増減もしつ、是を新板と僞り賣僻は、翁の辯論ありて、本傳の附錄などにも、識著け給ひしかば、是を知れり。しかるに、今玆(辛丑)春正月下谷なる、書肆英某が、刊行したる雅俗要文も、翁の著述なるに、猶疑ひ思ふよしあり。其書の自序に、天保十二年春正月とあり。序し給ひし亓月に、軈て彫なして、發販すべくもあらず。且編左に故賢郎、琴嶺君の略誌あり。賢郎は、七年以前、乙未夏五月八日

其編中に、吾を論ずること酷しく、且吾を比するに、原壌が蹲居を以し、吾を罵しるに賊を以す。當時吾友京師なる、角鹿比豆流、是を吾に告て、僞に解嘲の文を作らん、といひおこししを、吾許さず、且諭して道く、好て人の悪をいふ者は、聖賢の憎む所也。他と吾とは相識ならず、且纎芥の怨だもなきに、他何等の人なれば、恣に吾を論じて、忌憚ることなく罵しるや、是必狂人なるべし。狂人の走る時、不狂人も倶に走れば、是狂人に異ならず。吾少かりし時より、爭氣ある人とものいはず。他が如きは歯に掛るに足らざるに、可惜紙筆を費して、解嘲の文を作らば、大人氣なかるべし。吾今赤水餘稿を閲するに、他が第二子を悼む文に、其子の遊女冶郎に、哀慕せらるゝをもて榮とす。其心術の陋きこと知るべし。吾不肖なれども國禁を犯さず、不仁不義の行ひなし。年々に編次ずる物の本は、世に裨益なしといへども、大官允可ありて、刊行の書肆、幷に書畫工厥人貸本屋等まで、是に由て衣食すなるに、彼一人聲を嗄して、云云と罵しるは、人の名利を娟嫉にあらずや。意ふに、今江戸に戯作者多かれども、他吾をのみ論じて、這悪言を出しぬるは、既に學問ありながら、兒戯の策子を旨と綴るを、似げなしとて憎むにやあらん。是爭を好也。他焉ぞ吾志を知ん。昨今この赤水餘稿を、這地の書肆等に尋しに、其書名だも知る者なし。しからば是賣れざる兀籍也。他其書を賣んとて、吾

から、猶肚裏に殘りたる、些の書あり文あるをもて、恁ばかりの口を利而已。不幸かくの如くなる隨に、昔唐山孔門諸賢の得失を思ふに、子夏は老て子を喪ひて、竟に失明に做りし時、曾子是を弔ふてうち哭きしかば、子夏も亦うち哭きて、噫天なる乎吾罪なし、と呟きしを、曾子咎めて、商（子夏の名也）汝何ぞ罪なからんやとて、其三罪を擧て、是を責しかば、子夏杖を捨て、謝しにきといふ、語は禮の檀弓に見えたり。夫子夏の賢なるをもて、猶三罪なきことを得ず、況己が如き者は、五罪も六罪もありぬべし。しかれども、曾子の意は、子夏が三罪ある惡報にて、失明たりといふにあらず、子夏が罪なしと呟くに就きて、其三罪を責るに、老て子を喪ひ、又失明たることさへ數へて、其愆を知せし也。倘しからずは、伯牛の大賢なる、其德行顏淵閔子騫と伯仲す。然ども彼身不幸にして、癩を病て命危ふかりし時、孔子是を訪しに、其臭氣に堪ざれば、病の牀に入らずして、其窓より手を取て、死なん命なる乎、此人にしてこの病あり、とうち歎きしのみ、其罪を責ず、伯牛素より罪なければ也。約莫人の非をいふ者に二あり。其宜しからざるを擧て、愆を知しむるは、卽朋友の信也。又只己が好憎をもて、其合ざる所を擧て是を責るは、好て人の惡をいふ也。文化年間、浪速に赤水と號する者あり、播陽五島名は惠迪、字文敏と稱す。五年己辰秋、他が著したる、赤水餘稿一卷あり。

あり。又紫式部は、源氏物語を作し惡報にて、地獄に墮たり、と人の夢に見えにきといふ、寶物集(卷四)に這證文あり。水滸源語は、稗史物の本中の、大筆妙文にて、或は其傳、山賊の義俠をもてし、或は貴介淫娃の事を旨と綴りたれば、和漢同日に是等の訕ありしならん。倘しからずは、西遊宇津保も、大筆妙文なるに、是等の作者に、啞子墮獄の惡報なきは、いかにぞや。這故に唐の韓愈は、得レ譏名亦從といへり。是に由てこれを觀れば、吾も亦八犬傳を作りし惡報にて、老て半盲に做りにきといふ、譏誚もやあるべからん。非如何ともいはゞいへ。吾髫歲より讀書を好みて、和漢の歷史、諸子百家の書、小說傳奇歌書草紙物語に至るまで、覘はざる所なく、聖敎賢誨の辱きはいふもさら也、醫書佛經卜筮方位、皆其一隅を、獨學して孤陋なるも、和漢の治亂、君臣の得失、士農の務むべき所、工商の巧拙奸直、貨殖淸貧の樂む所、獵漁牧樵のある所、名所舊跡、禽獸草木の名、才と不才と、人情の厚篤浮薄、其大槩を識ることを得たる、學問の餘樂をもて、且蒙昧を醒さん爲に、戲墨の策子を編做して、書肆の需に應じたる、其潤筆にて足らざれば、每に衣食を省き、節儉を旨として、和漢必要の書籍を、購求る者五十有餘年、其書藏めて、五六千卷、六十餘櫃に至りしも、貽畀んと思ひし子は早逝し、吾も亦老眼衰耗して、讀書得ならず做りしかば、咸沽却して紙魚も漏さず、事皆畫餠になるもの

做すことを得ず。昔清人毛聲山は、小說傳奇を好む隨に、嘗三國志演義を評註したる、其妙金聖歎が、水滸傳評註の上に在り。しかるに他不幸にして、老後に失明に做りしかど、好む所を棄がたくやありけん、又琵琶記を評註しぬるに及びて、一二の子弟に口授し、代寫させてもて、稿じ果にきといへり。昔吾琵琶記を讀て是を知りぬ。他と吾はと同好にて、且眼の患も相似たれど、其評註の精妙なる、みづから筆を把れるが如し。蓋唐山は、文字の國也。子弟に文字なき者なければ、其いふ所を一字も違へず、よく代寫せしならん。天朝は言語を宗とす、素より文字の國風ならず。矧婦幼に代寫さするに、管を搦りて思を構る、波瀾曲折の文、何所より出し來つべき。僅に其意を達するのみ。然ば筆工に寫せたるも、又其刻本も、婦幼に讀せて校訂しぬれば、脫字こそ咎めもすれ、誤字は吾見るにあらざれば、开を正すに由もなし。看官かくと知らざれば、校訂疎鹵也とて笑ふもあらん。瞽者は文章の觀に管らず、と莊子いへり。文章は文字の事のみならねど、瞽者はいかにして文場に遊んや。僅に詩を賦歌を詠のみ。又枚乘が江賦に、「水母以鰕爲眼」といへり。吾鰕子をもて眼にせん歟。其鰕子も亦得がたし。寔に烏滸の遨遊なれば、好まぬ人は誹謗るもあらん。小說物の本の、大筆妙文なるを憎む者、昔も和漢に是あり、羅貫中は、水滸傳を作りし惡報にて、三世啞子を生にきといふ、續文獻通考に誚

といへども、傍訓なきは得讀ず。強て讀すれば、鴃舌侏離にて要をなさねば、援用ふべくもあらず。寫することは教もすれど、讀する事は吾見るにあらざれば、いよ〱難義にて、實にせん方なし。然ども教誨を承る者の、困じながらも倦でよく勉にあらざれば、這十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや。縫刺の技薪炊の事などこそ他が職分なれ、文墨風流の事に代らせて、其要を做さまく欲するは、理なしとも理なしと、知りつゝも月を累ねて、今玆辛丑の秋八月二十日といふ日に、本傳第百八十勝回の下編附錄目、諸將の成敗其尾を備にす、といふ結局大團圓まで、稍稿じ果たりき。噫無益し、老の諄言よ。といひつゝ呵々とうち笑へば、頭陀は感嘆の聲を得たゞず、姑且して道く、誠に翁の老實なる、和漢今も古も、稗官者流多かれども、かくまでに苦勞して、書肆の爲に難義の筆を、果し給ふは有がたき、心操なる者を、江湖上なる看官は、只等閑に見過して、反て好歹を論ずるもあらん。適この書の大部なるも、人の爲に裨益ある、有用の雜纂ならましかば、勞しても功あるべきに、然る物は世俗の、見まく欲するは稀なる故に、書肆も亦刊行せまく欲せず、求る所は只是のみ。這故に翁をして、稗官者流に做し果しぬる、こも亦天乎、命なる乎、惜むべし〱。と繰返しつゝ嘆ずれば、主人も倶に嘆息して、爾いはるゝは理りなれども、是等の策子にあらざれば、吾年々に編てもて、半業に

り代筆させて、一字毎に字を教え、一句毎に假名使を誨るに、婦人は普通の俗字だも、知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名使てにをはだにも辨へず、偏傍すらこゝろ得ざるに、只言語をのみもて、教えて寫する吾苦心は、いうべうもあらず。況て教を承て寫く者は、夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり。然而代寫一枚に滿れば、讀反させて、又教て傍訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀をこゝろ得ねば、讀時或は字を脱し、或はなき字を添て讀めり。讀すら輒からざるに、知らずこゝろ得ざる事を口授せられて、寫く者の艱難を思へば、いと痛しさに、幾度か已ばやと思ひしを、又思ひかへして、

筆捨の松のふる葉も言の葉も子等にをしえてかゝするぞ憂き

とうち詠じて、且慰めつゝ、一二巻代寫させぬる程に、他もやうやくに熟て、苦心初の如くにはあらず。偏傍などは、稍わきまへ知りて、言を費すも、舌の疲るゝまでに至らず。編中の出像は、代寫さすべき者なければ、吾只其人物を圏點して、もて畫工に傳ふるに、委細に注文を代寫させぬるのみ。稿本はさら也、書畫工の寫本も、吾いふ如く寫りや否、心許なく思へども術なし。況文中に故事などを引用ひんと思ふに、原本に渉らざれば、諳記の失あらんことを恐れて、命じて其書を拿出させて讀するに、漢籍は及ぶべくもあらず、假名まじりの古書


頭陀二たび著作堂に来訪す
迴國


仁者壽
香蝶樓
國貞画

ありて、讀がたしといへば、其を宅眷に補せなどしぬる程に、十一月に至りては、宛雲霧の中に在如く、又朧月夜に立に似て、一字も寫こと得ならずなりぬ。只筆研不自由なるのみならず、書畫を見ても楚と見えず、僅に晝夜を辨じ、東西を知るのみ、いかにともせん術なければ、書案を退け筆を投捨て、獨歎息のあまりに、

　ながらふるかひこそなけれ見えずなりし書卷川に猶わたる世は

とうち詠じて、爐に寄てのみ居程に、文溪堂及貸本屋などいふ者さへ聞知りて、皆憮しく思はぬはなく、爲に代寫すべき人を索るに、意に稱ふ然る者の、あるべくもあらず。吾も亦失明ては、生甲斐もなければ、這年の秋九月より次の年まで、人の薦る醫師を三名まで、轉藥しぬれども、いまだ毫も効驗あらず。然ば今玆(辛丑)の春に至りて、吾又おもふに、八犬傳は、今昔有がたき、大部の物の本なるに、始ありて終なくば、只看官の飽ず思はんのみならず、文溪堂が爲には、後々までも利を全くしがたくて、遺憾こそあらんずらめ。人の爲に謀りて忠ならぬは、吾も亦恥る所也。然ばとて、吾孫與邦は、倘乳臭ある机心うせず、且武藝を好める本性なれば、係る帮助になるべくもあらず。他が母は人並に、にじり書もすなれば、教て代寫させばや、とやうやくに思ひかへしつ、第百七十七回の中、音音が大茂林濱にて、再生の段よ

と尋思して、一日も筆研を排斥せず、初は硯心見難て、毫を染るに不便なりしに、それも熟ては不便にも思はず。其後故兒の憂に丁りし年も、世渡りなれば、忌ども闋ては、又筆を把らざることを得ず。其次の年、四谷へ移徙しても、左明は異なることもなければ、著編は倘年々に綴りぬる程に、戊戌の春の時候より、何となく左明も亦翳むやうなりしに、夏に至りては、いよ／＼其異なるを覺しかども、倘悟らず、こは眼鏡の曇りたる故ならめ、と謬思ひて、俗に本玉と歟いふ、水晶製の眼鏡の、價貴きを厭はで、此彼と多く購求めて、掛替々々凌ぐものから、己亥の春に至りては、いよ／＼かすみて、病眼なるを知りながら、本傳いまだ大團圓に至らねば、書肆の需を推辭も得せで、猶辛じて綴る物、この外にもありけり。恁而去歳（庚子）の春までは、本傳の稿本も、故の如く、十一行の細字にものせしかども、夏に至りては、只矇矇朧々として、細字を寫こと得ならねば、其稿本を、五行の大字にしつ、其も手摸りにて、去歲の秋九月、本傳第九輯四十五の卷まで、綴り果して、刋行の書肆、文溪堂の責を塞ぎにき。かくては明年四十六の卷以下を、綴り果さんこと心許なし。先や倘かくてある程に、今一卷なりとも綴らばや、と愚心を勵して、第輯九百七十七囘、一顆の智玉、途に一騎の驕將を懲すといふ一段を、五行或は四行の大字にものしぬるに、字行も竛竮乒乓にて、且墨の續かぬ處

の理りなれば、吾答て、教諭承り候ひぬ。名利の爲に身を忘れて、無益の筆硯に耽るにあらねども、少かりし時愁に、義俠の心ありしかば、今に至て其癖うせず。一旦書賈に諾ひし稿本を、等閑に做す時は、他等は發販の時日後れて、利を失ふこと尠からず。是も亦不義に似たれば、事のこゝに及べるを、思へば愚に候ひき、と謝して是より夜學せず、物の本の稿本も年に二板と相定て、其餘は需に應ずることなく、夜は人定を限にして、はやく枕に就しかば、身も漸々に安くおぼえて、仰臥しても瞑眩せず、をさ〱養生を宗としける程に、吾還暦の年、丁亥の夏より秋まで、大病に嬰りて、命危かりしも、幸にして瘥りにき。左右する程に、九年以前癸巳の秋、八九月の時候にやありけん、有一朝不圖起出けるに、右の一眼見ることを得ず。うち驚き且訝りて、故兒に示すに、瞳子上の方流たり、療治なさるべしといひけり。其後親族朋友、書賈等まで、治療を薦る者多かりしかど、吾敢從はず、且おもへらく、吾は幼稚より、眼の患なく、流行目だにも病ことあらず。然るを今一朝に、右明を失ひしは、年來讀書筆研の疲勞なるべく、且冬春毎に高き火桶を坐右に置きて、机邊の寒氣を防ぐ事、既に久しくなりしかば、其火氣何時となく、右明に入りて、乾かされたるにぞあらむずらん。譬ば老樹の片枝立枯たるに異ならず。非如醫療に術を盡すとも、草根木皮のよく及ぶべきにあらず、

假名使ひも、皆誤あらざるは、非除教給ふとも、容易かるべき事ならず。這義も示し給ひね。と請れて主人は嗟嘆に堪ず。然ばとよ其事なれ。言多くとも緩やかに、坐して徐に聞給へ。吾髫歳の時よりして、書讀ことを好みしかば、成長に及びては、一日も書卷を把ざることなし。恁而寛政二年の冬、創めて戯墨の、畫策子二卷を編て、書肆甘泉堂が刊行せしより、今に至て五十二年、刊行の雜書物の本共に、二百九十餘筆に及べり。這他刊布せざる筆記雜纂、或は二三葉の小紙子多かるを、數へ盡すべうもあらず。就中文化年間は、書賈に乞るゝ、大小の物の本多なりければ、日毎に夙に起出て、机案に面ひつゝ、其夜人定まで、稿本を綴りて、人の爲に疲勞を厭はず、亥の時過ては睡氣つくまで、書を讀て、みづからの樂みにす。倘佳境に入る時は、天の明るを覺えず、隣鷄の鳴くに驚されて、軈て起出て、又机案に面ふ日もありけり。恁而年來を歷ぬる隨に、逆上口痛の患起しより、年五十に至ては、齒は皆年々に脫て、一枚もあらずなりぬ。且夜枕に就く時仰ぎ臥せば、瞑眩して堪られず。横に臥せばさもなかりき。この比一名醫と晤譚の折、吾この事を告しかば、名醫驚きて、足下生來血氣人に勝れたれども、人の氣根は涯りあり。九石の弓も、毎に緊く張て緩めざれば、其弦斷ざることを得ず。其樂む所をもて、名利の爲に殉するは、賢者のせざる所也。今より些し緩めよ、といはれし義

流も、遙に吾に書を寄て、开が綴りたる策子の稿本を、示して雌黄を乞ひしもあり、或は戲墨の弟子にならまくほしとて、其親をもて請し少女もあり。近曾又一嫠婦の消息して、其子に教べきこと、内を理べきことなどを問しもありけり。志は然ることにて、感じ思はぬにあらねども、婦女子なれば答ざりき。开が中に陸奥なる、眞葛てう才女も孀婦にて、吾には七ばかりの姉なりと聞えしに、この老女は、書を善し歌をよみ、和文も亦拙からず。且殊なる男魂をもて、獨考といふ、議論の書三卷と、奥州ばなしといふ隨筆一卷、又磯づたひといふ、紀行一卷、其餘も小册子、三四卷綴りしを吾に寄て、筆削を乞ることの切なりければ、吾已ことを得ず、獨考論といふ二卷を編述て、もて是に答にき。然ども是も女流なれば、辭して久しくは交はらず。こは文政元年のことなりしに、後七稔ばかりを歷て、竟に鬼籍に入りにき、と風の便に聞えけり。是等は要なき多辯なれども、門人なしとのみいはゞ、實言ならじと思はれんかとて、漫に諄言しつるにこそ。と告れば頭陀は感嘆して、世の戲作者は門人弟子の、一名も多きを榮にして、某甲某乙と、其書に名を錄ししも見ゆめるに、翁の用意は格別にて、人の及ばぬ所なるべし。扨御眼病はいかに候や。开は易からぬ病厄なれば、いかで療養效驗あれ、と本復を祈るのみ。然るにても這稿本を、女筆にてよくも代寫せられしものかな。見るに漢字も

て、吾眞面目にあらねども、是をもて旦暮に給し、又是をもて有用の書籍を購んとする也。素より宜き技也とは思はず。己が欲せざる所をもて、何ぞ人に施すべき。入門の義は決て承がたし。各這無益なる、遊戲に光陰を費さんより、其師に就て學問せば、必裨益多かるべし。且戲墨は師に從ふて、學ぶべき者にあらず、各其才に儘するのみ。吾は唐山人の稗史小說を多く見て、其文其巧致なるを擇みて、他に效へり。唔譚の爲に訪れんは、聊も厭しからず、御所望の一條は、思ひ絕給へなどいふに、各望を失ひながら、猶懲ずまに、折々訪來ぬるもありしかば、其壯佼等のこゝろ得の爲に、身を脩め、家をとゝのふべきことを說示し、又暇ある折は、老子莊子などを講ずるに、打睡を催さゞるは稀なりき。开が中に入門御辭退の義はちから及ばず、いかで戲號に琴字を許し給へといふ。琴字をもて名號に做す者は、吾のみならず、昔も今も、儒者に琴所琴臺などあり、开は各位の隨意なるべし、といふに皆歡びて、或は琴雅又琴栖、或は琴川又琴魚など告る者、五六名ありしかども、それも一兩稔の程にして、夙く胡越の如くになりけり。今思へば、三十餘年の昔なれば、其人猶生るや、死せりや、いまだ知らず。是等の內中に、櫟亭琴魚は同じからず。他は吾知音の友、伊勢人篠齋の弟にて、窻螢餘譚靑砥石文などいふ、物の本の作者なりしに、惜むべし四十餘歲にて、身故りにき。這他女

八十勝回の下編まで、九巻にして局を結びぬ。追刻の首巻と共に、全本一百零六巻也。其四十七の巻は、楮數多きをもて、釐て上下に分ちて、四十六より五巻なるを、今玆の冬發販すべく、遺る所五十の巻より下五巻も、續きて明春出すべしと云ふ、刊行の書肆、文溪堂の情願に任せたり。是見給へ。と臂近なる、稿本四五巻を、拿抗て出し示せば、頭陀は受戴きて、讀に及ず甲乙と、開き見て且訝りて、御稿本は女筆なるべし。何どて自筆にものしたまはざるや。と問れて主人は嗟嘆に堪ず、然也。この三四年來、我老眼年々に病衰して、去歳の冬十月より、書を讀ことも字を寫ことも、絕て不自由になりしかば、只得婦幼に代筆させて、這稿本を綴りにき。といへば頭陀は眉を顰めて、开は不便なることに侍り。琴嶺君世にいまそかりせば、かゝる折筆勞の、帮助にならせ給はんに、今は千萬惜むともかひなし。稿本の代寫を命じ給ふ、門人は候はずや。と問はれて主人は頭を掉て、否とよ、洒家は昔より、戲墨に門人といふ者なし。三四十年以前、吾戲作なる畫策子に、門人魁蕾子(又作二傀儡子一)などいふ名號を出したるもあれど、开は未生の人にて、一時の戲れのみ、實に其人あるにあらず。然を文化文政年間、生狂才ある壯佼等が、吾弟子にならまくほりして、由緣に就き、紹介の人を求めて、漸次に訪來ぬる者八九名ありしかど、吾一人も是を許さず。且其輩に諭すやう、戲墨は讀書の餘樂に

保十二年辛丑の秋八月まで、星霜二十八年にて、本傳稿本思ひの隨に、全局を結ぶ折から、彼頭陀何等の風に吹れけん、いと珍らかにも訪來にけり。迭に別後の口議訖りて、頭陀が道く昔年御教諭を承まつりしより、忘れたるにあらねども、年來西海南海なる、九國四國を行脚して、淹留の地も多かりければ、幾春秋を累たる、疎濶の罪を饒させ給へ。去歳より又安房に到りて、某甲の院に居り。西にありても東にありても、只八犬傳の流行に、耳目を驚すのみなれば、いよ〳〵翁のなつかしさに、叱られまつらんとは思ひながら、俺から居し關の門を、踰て推參仕りぬ。相別まつりしより、僂れば三十稔に近かり。翁も痛く老給ひにき。琴嶺君の早逝は、八犬傳の附錄にも、識されたるものあれば、驚き悼む所なるを、今さらに又いひ出て、物を思はせまつるべうもあらず。二十稔あまり、さきつ比より、故賢郎（琴嶺をいふ）と同居にて、神田にいまするとは人傳に聞たれども、この山檟に卜居の事は、知らで尋佗たりき。八犬傳の多巻なる、第九輯四十五の巻までは、年々に續出さるゝを、待得て閱したりければ、翁の今も恙なく、在するを歡び思ふ、心いそぎのせらるゝは、一日もはやく結局編を、見まくほしう候也。稿本は遺もなく、綴り果し給ひし歟。猒じからずは一巻なりとも、內見を饒させ給へ。と乞れて、主人は頷きて、然也。九輯は多編にて、第四十六の巻より、第五十三の巻なる、第百

御著述の坊しぬる、罪を饒されしのみならず、一を聞て二を得たる、歡び何事か是に優べき。古言に云ずや、「與レ君一夕話ば、勝二於十年學一。又云。聞レ名不レ如レ見レ面。見レ面勝二於聞一名。復こそ見參仕らめ。」と告別して出てゆきけり。是年（文化甲戌）冬十二月、八犬傳第一輯十回五卷、刊行の書賈山靑堂發販す。其明年の冬、第二輯五卷出るに及びて、這書をいふ者、漸漸に多かり。第三四五輯に至りては、本傳多く賣ぬるものから、山靑堂他事に耽りて、本錢續ずやありけん、是よりの後書賈涌泉堂、其舊板を購求めて、代りて第六輯を刊行す。然ども是も亦其人にあらざれば、第七輯を彫ぬる時、文溪堂の帮助を得て、辛くして發兌しけり。この比本傳はいよゝます〳〵時好に稱ふて、其利尠からずと聞えながら、この兩書賈の等閑にて、刊行中絶しぬる者、徒に前後五六年を歷たり。恁而今の文賈文溪堂が、其舊板を咸購得て、第八輯九輯を、續刻發行しぬる隨に、是書の流行類稀にて、只江戸京攝のみならず、縣田舍間、漁浦樵山、約莫足跡の至る處、舟車の通ふ處、年貢の出る所、店賃を債らるゝ所、鷄犬の聲する處、洪鐘の響く所、國字四十七言を知る、田翁野奶山妻牧童、約莫血氣ある者、是書を見て愛玩ばざるはなしと云、風聲耳に暇なきまで、年々是を聞ざる日はなし。抑本傳初板の年より、光陰流るゝ水に似て、老の至るを知らざりける、作者古稀又半なりける、今玆天

よりて、米の價に過不及あれども、其大槩を執て、石壹兩と定めし者也。是に由て注すれば、穎壹貫文は、卽立米壹斛にて、其實は三斗五舛なるべし。這法則をもて推せば、百貫文は百石也、千貫文は千石にて、其實は百苞千苞なるを知るべし。貫多寡の事這外に仔細あるべうもおもほえず。又秩錄に高と書は、多寡の假字也。孟子に、五穀多寡、同則價相如んとあるが如し。然ども多寡も穎字の類にて、書に煩しければ、便利に就て高と書來れるなるべし。語次に云、上古唐山の聖人、唐虞三代、又成湯文武の時は、民に取るに、井田をもてす。井田は、譬ば田一町方二百四十間なれば、則是を九に界て、其眞中の一を公田とす。公田とは、貢米に備る義也。詩に雨我公田遂及我私といへるは是也。天朝も上古はかくこそありけめ。仁德天皇の御時に、三年の貢を禁めて、民を富し給ひしといふ、故事あるを思ふべし。和漢戰國の世に至りては、財用續ざれば、民に取事のおのづから、多くなるべき勢ひ也。今にして井田の法に因ば、士を養ふことを得ざるべし。今の世に生れて、古の道にかへらば、禍彼身に及ぶといひし、聖語をも亦思ふべし。只故を溫て新を知るを、學を好といふべきのみ。と叮寧反復して解示せば、頭陀は听つゝ感佩して、額衝き承て且道く、人を誨て倦ざるは、則君子の忠恕也。野衲初て推參して、

	公田	

の事をいへれど、詳ならず。這義を注しし物を見ざれば、其大槩を知るべきのみ。愚按るに、田圃の收納に永幾貫文幾百文といへり。今も算帳には是を永錢といふ。算師の人に敎るにも這法あり。この永錢を永樂錢と思ふは違へり、永は、穎の假字にて秋穗の義也。田圃物成、其價を錄す故に穎といふ。筆の異名を毛穎氏といふも、其形稻穗の孕るに似たれば也。然れども穎は其字畫多くて、世俗田舍兒などの書に煩しければ、假りて永とす。永は金壹兩を壹貫文とす。金壹分は永貳百五拾文、貳朱は百貳拾五文なるをいへばさら也、今の銀價直をもすれば、銀六拾錢は、永壹貫文也。銀に幾匁と書く匁は唐山にもありて、錢の省文也。當時米穀にのみ錢の貴きにあらず。元弘建武の比楮鈔行れ、うち續きて、京都將軍の中葉より、彌錢も銀も寡き故に、物の價の廉かりし事、室町殿日記室町殿物語などを見ても知らるゝ也。是に由てこれを觀れば、昔は錢壹貫文をもて、玄米壹石に易し也。其壹貫文は、金壹兩なれば、今も俗に云、石壹兩是也。石は斛にて、十斗を壹石とす、卽石也。又其壹貫文に所以あり、秩祿の物成の收斂は、三之一にて、米壹石なれば、是を三に分て三斗五舛を貢米とす。遺る所六斗五舛を又二にして、其一は畊者の得とし、又其一は明年の種子とす、俗に云三物成是也、四物成も是に準へて知るべし。然ば秩祿の穎壹貫文も、主士の得ぬる所、其實は三百五拾文なりけん歟、いまだ知るべからず。年の豐凶に

屬す○鬼本(其地今詳ならず)○廳南(埴生郡)武田信榮居城、里見義弘國府臺敗績後も自立す○峰上(天羽郡)天神山の上に峯上といふ所あり。里見記に載す。峯上の城主眞里谷入道道環とあり。本篇に載たる望陀郡眞里谷村の城主、是又土人相傳て同名とす。思ふに道環といふ人、峯上眞里谷を交代にせしならん。本編に漏たれば、追て記(本傳の作者曰、鬼本より以下三城は追加にて、以上二十五城也、猶一城逸す。本傳に舘山の一城あり、今其數に充つべし)

國香按るに、右四十八城の內、上總にある所二十六城、其他は下總武藏上野等にあるべし。前說に据るに、二十六城悉里見氏に屬せし事知るべし。獨廳南の城主のみ、甲州に屬せり。勝賴滅亡以後、里見にも北條にも屬せずして自立せり(以上房總志料)と讀訖る。頭陀歡びて卷を閣きて、主人に向ひて謝して道く、御庇によりて年來の、疑霧亟に霽れて、始て天日を見るが如し。現に書は讀べきものなりき。就て又問奉る。戰國の時、諸士の采邑に、貫多寡を錄しものあり。既に這房總志料にも編者の言に、里見氏の時知行割に、貫高をいふ者あれども、いまだ詳ならずといへり。翁は必考あらん、いかで教給ひね。と請れて主人は點頭て、然也、吾も亦其貫多寡には、思ひを顆めざるにあらず。北條分限帳には、諸士の采邑を、並て幾貫文幾百文と錄したり。里見氏の諸士錄もかくこそありけめ。甲斐名勝志に、粗貫多寡


里見十世十將綉像
第一義實
第三義通
第七義弘
第五義豊
第九義康
第十忠義


第二義成
第四實堯
第八義賴
第六義堯

主の姓名逸す○造海（天羽郡）今の百首浦の事也○勝見（天羽郡）房總治亂記に勝見御所蒔田左兵衞正垂支配とあり。國香按るに、御所は鎌倉持氏の餘裔歟と思ひしに、彼土人の說に、御所は新田義貞の後裔にて、寺崎の御所と稱す。天正後云々○眞里谷（望陀郡）說本編に見えたり○池和田（埴生郡）○勝浦（夷灊郡）說本編に見えたり○一宮（長柄郡）說本編に見えたり○小濱（夷灊郡）鎗田美濃守居城、房總治亂記に載す。始里見氏に從ひて三浦へ渡海す。又云土岐家臣、鎗田美濃守とあるを見れば、後に萬木に屬せしなるべし○鴻臺（夷灊郡）下總の國府臺にあらず。房總治亂記に載す。三階圖書助居城、後に萬木の土岐氏に屬す○萬木（夷灊郡）房總治亂記に載す。萬木城主土岐彈正少弼賴春は、貞賴入道啓岩の子也。國香按るに、土岐氏墓寺海雄寺といふ禪院に、爲弘爲賴賴春、三世の影像を置、啓岩事いまだ考ず。甲陽軍鑑十三將の內に、萬木少弼とあるは賴春の事也○矢嶽（夷灊郡）房總治亂に載す。麻生主水佐居城萬木に屬す○鶴城（長柄郡）治亂記に又云、鶴見彈正居城萬木に屬す○鳴土（武射郡）一作鳴東羽賀伊豫守居城○帆丘（長柄郡）黑熊大膳居城後に里見家に屬す。土氣阪井氏に亡さる○久瑠理（望陀郡）又云里見越前守居城、里見記に云、里見實堯、久瑠理の城を築くとあれば、後に里見越州をして護らせしなるべし○佐貫（天羽郡）朝倉能登守景隆居城、里見氏に

聞に寫本あれども、就中疎鹵にして、且訛舛も尠からねば、考證に備るに足らず。里見記といふ物、四五本ありと聞しかど、吾其異本をいまだ見ず。この餘は北條五代記、甲陽軍鑑、及本朝三國志などいふ俗書に、里見の事を載たれども、他郷の人の筆なれば、聞僻めたる事なきにあらず。只近曾上總國夷灊郡、臼井鄉、長者里人、中村國香の著せし、房總志料五卷あり。いまだ全豹を見に足らねども、房總の地理、及里見の舊趾なども、粗載て、且編物の考あれば、吾這著編の栞とす。憶ふに上總人の、和僧に答て四十八城の內中、今其名を存する者、二十六城といひしは、恐らく其人の考得たるにはあらで、房總志料に憑れるならん。彼書上總の附錄の卷に、四十八城の辨ありて、是を載る者二十六城也。是見給へ。と驚して、其書を拿出て開き示せば、頭陀受戴きて是を讀。國香曰、割居の時、所謂四十八城と稱する者、上總に二十六城あり、左に錄す。戰爭興廢の事は、別にしるしゝものあれば、今こゝに省く。其二十六城は○大田木(夷灊郡)政木大全居城根小屋城といふ。其後云々(是よりの下城每に編物の考あれどもこゝに要なきは略す)○土氣(山邊郡)○東鏡(山邊郡)○舍人(埴生郡)○八幡御所(市原郡)小弓義明の事說前に詳也○榎本(長柄郡)說前に見えたり○椎津(望陀郡)說前に見えたり○久保田(望陀郡)里見記に明應三年、里見義成、久保田の城を攻るとあり。城

にせん、と讀給ひし心操に同じかるべし。是に由てこれを觀ば、蓑笠の二字は、彼人の大閼日なるものを、世人並て是を思はず、其高名なる所云に、いかで一たび對面して、我曲亭と相識也とて、俗に誇まく欲する隨意、漫に刺を投じ、屢執接兒を煩せて、果さゞるも多からん。和僧先このこゝろを得て、非如那里へ造るとも、紹介なしとて饒されずは、箇樣々々にいひ哄へよ、と告ると思へば夢覺けり。正に是靈夢に似たれば、心悄地に歡びて、木更津船に載走らせつゝ、斯は訪まつりしに、果して輒く容れられず。紹介ありと佯りしは、彼夢鬼の敎に依れり。翁里見の小說を、綴らんとて、既に稿を創め給はゞ、彼家の事を識たる、舊錄軍記地圖などをも、多く看給ひたるならん。先彼四十八城の、ありし地方を知らまく欲す。いかで敎給ひね。と額衝き請ふて已ざりしを、主人は听つゝうち笑ひて、客僧妄語ならずとも、などて又かくまでに、善巧方便の多かるや。夢中に人ありて、吾に問といはれしとは、敵かでも知るき寓言ならん。开は左まれ右もあれ、今吾綴り創ぬる、里見八犬傳は、架空の言のみ、事實を正すに要なけれども、素より尙古の癖あれば、折々其書を求獵に、安房上總の地圖なども、いまだ印行の本なければ、究めて得易からず。又里見の舊記は、其寫本坊間になし、只吾知る所をもていはゞ、里見記、里見九代記、房總治亂記、里見軍記あるのみ。這內中里見軍記は、坊

と罵り給ふは、是誣言にあらずや。と詞急迫くいひ解けば、主人は聞つゝうち笑ひて、好是はいはれたり。然ば和僧の來意は什麽。と問ば頭陀答て道く、咱等は閑寂山居を好みて、山水を愛る癖あれども、寡聞駑才に候へば、古人の詩歌あるを知らず、其地の古實を搜に由なし。只名山靈場を、うち巡りて佛を拜むのみ。憖而這一兩年は、錫を安房上總に飛して、募緣久しくなる序に、在昔房總の國守と聞えし、里見氏の事實を尋ねて、其舊蹟を知らばやと、思ふこと切なれば、是を土俗に問ふものから、答ふる所詳ならず。或はいふ、昔里見氏の時、上總に四十八城あり。今其地を考るに、僅に二十六城のみ、其餘は知る者なしといひにき。是よりの後又人に問ども、益を得るよしなかりしかば、猶東西となくうち巡る程に、一日疲勞て、松の下蔭に、坐して思ず眠りし夢に、人ありて告るやう、今大江戶に、著作堂てふ僻兒あり、博識奇才なれども、人の師になることを好まず。年々に多く兒戲の策子を綴りて、もて旦暮に給するのみ。彼人今玆は、書肆の需に應じて、里見八犬傳と書名せる、大部の小說を作りまくす。里見氏の事實において、必考へたる所あらん。盍ぞ行て問ざるや。但し彼人は、未見無用の客を斁へり、且其友を擇むの故に、大都會に在ながら、同好知己の友なし。此故に彼人みづから蓑笠と號す。蓑笠は卽隱逸の義也。衣笠内大臣の歌に、身のうきときのかくれが

寄するも、皆かくの如し。多くは吾を見まくする者、兩國橋邊なる、勾欄戯場を看て、故郷へ還るの日、話柄になさまく欲するが如し。遣りね〳〵と手を掉ば、頑婢こゝろ得て、又出て頭陀に謝するに、主人の疾病をもてす。頭陀是を聞て、否野衲は、翁の相識某甲が、紹介の手簡を齎したり、枉て對面を饒させ給へ。と連りに請ふて已ざれば、主人已ことを得ず、書齋へ召容れて、對面す。主客の座定りて、其紹介の書翰を問ば、頭陀答て、否其書翰は候はず、翁はいまだ知らざる者の、只名を慕ふて訪まつるに、相識の紹介なければ、面し給はずといはるるにより、且是を僞るのみ。といふを主人は聞あへず、开は亦調戯に過たるならずや。浮屠家の五戒に、妄語を一戒とす。和僧は既に破戒の罪あり、吾何をか聞、何をかいはん。已ね〳〵。と窘めて、立まくするを頭陀推禁めて、翁且怒を治めて、吾いふよしを聞給へ。妄語は五戒の一なれども、妄語に亦二あり。或は偽りて利を欲し、又誑りて慾を遂、或は妄誕をもて、人の中を裂き、聖賢佛菩薩を誣る者は、必是人に害あり、佛の所云妄語是也。亦小兒を權が如く、實事ならねど人の惡を懲し、或は偽りをもて、人の怒を解き、誑りをもてよく人を諫る者は、是善巧方便にて、佛の所云妄語にあらず。譬ば翁の物の本を作り給ふに、必勸善懲惡を旨として、よく蒙昧を醒すが如し。こも亦善巧方便のみ。然を翁は思はずして、吾等を破戒

第九輯　卷之五十三　下

回外剩筆　頭陀枕中を話說す四十八城　稗史本傳を大成す二十八年

這編は、作者の意衷を述て、もて惣跋に代る者也。开が中に本傳の遺漏を補ふよしもこれあり。譬ば俗に云、幕の間なる戯房話說の類ならまし。

文化十一年甲戌の春正月下澣、本傳の作者曲亭主人、這小說を綴るが爲に、案を拭ひ硯に呵して、將新研を開まくす。時に廻國の頭陀あり、上總より到る。一日著作堂の松の扃を敲きて、主人に對面を請ふ。頑婢是を告ぐ。主人の道く、咱塵を厭ふの故に、問嘗に帷を垂れ客を辭して、書を讀書を綴りて、もてこの半生を送る而已。然るを世の遐邇人、親疎となく、雅俗となく、吾虛名を謬認めて、訪來て對面を請ふ者、幾許名ぞ。吾其人每に、出て言を費し、日を費やさば、かばかり煩はしき事はなし。この故に吾疾病に推て、敢面することなし。只相識の紹介ある客には、只得出て來意を聞のみ、开は相識に顧れば也。遠方なる未見の人の、書を

なれども、子孫十世に傳へしは、義實義成二世の俊德、仁義善政の餘馨にて、民の是を思ふこと、深長なりし所以なるべし。誠に是美談ならずや。詩あり歌あり證とす。

里見名臣八犬傳。精編百巻集珠全。誰云咱悪他戲謔。驚歎流行獨傑然。

ぬしをしる犬てふ八の氏人のこころ玉なすやつのおこなひ

浮萍のうきしすさびもいましめの筆をよるべの根なし言の葉

詩は自負放言に似たれども、江湖億兆の指目の、指し見所、實にかくの如き而已。然ば浮萍のうきたる根なしごとも、好看官は、是をもてみづから警人を警、然らぬも亦是に由て、彼岸に到るべき、迷ひの津を啓くもあらん歟。左にも右にも、病眼衰瞽筆硯不自由に倣りしより、只得婦幼に字を教え、假名を誨えつ、代寫させて、稍全局を結び訖。看官作者の勉たるを知るべし。又

あはれとは見る人おもへ八重すだれかかるやみ目にあみはたす書

府臺に戰ふ事、里見軍記には、義堯義弘二世、初中後三戰とす。又普通の軍記には、永祿七年の一戰のみとして、義明の陣歿も、この折の事となせるは謬也。蓋國府臺の鬪戰は、天文十一年義堯の時と、永祿七年義弘の時と、前後二度にて義明の陣歿は、天文十一年の役なれば、軍記に錄す所違へり。是等は要なき辯なれども、筆の次に誌すのみ。復說、初八犬士の、安房に聚合時、義通將として、水陸に兵馬調練の、山路にて獲たりといふ、靈芝十莖に、凋榮ありしを、今里見十世の、榮枯得失に相照して、是を考れば、正前兆たるに似たり。看官是を思ふべし。蓋八犬士一世の功名、貴介を娶て、大祿に飽るも、覺れば倶に南柯の一睡、長安飯店の、枕に異ならず。抑人世の果敢なき、慾を禁め情を裂きて、善を蘊み、惡を做さじと其行ひを愼ば、生ては天地に恥ることなく、死しては子孫の後榮ある、古の人の跡を見て善を擇みて、もて異世の師と做さば、人皆八犬士たらん事も、かたきに似て難かるべからず。約莫人に君たる者は、只良臣を擇むに在り、庶人は良友を擇むべし。良臣ありて、治らざる國なく、良友ありて、不善の人なし。何ぞ兄弟なきを憂んや。當時落魄たる浮浪の身をもて、鷄が鳴く關の東にて、基を開き、地を啓きて、竟に大諸侯に做り登しは、里見氏と北條氏のみ。北條は里見に倍して、多く國を獲たれども、早雲氏綱氏康氏政氏直五世にして後絕たり。里見は房總二國

六年義弘卒して、義頼嗣ぐ、則安房守に任ぜらる。又鬼本を居城とす。(鬼本は其地今詳ならず)天正五年北條氏と和睦して、氏政の女を妻らる。其後和議破れて、小俵兵に攻らる。十八年以後始て安堵す。この時義頼従四位侍従たり。是より後三世皆侍従に叙せらる。因て時の人、安房の侍従と唱ふ。義頼卒して、其子左馬頭義康嗣ぐ。安房の舘山を居城とす。義康の子、安房守忠義に至りて十世也。獨義豊を除きて、九世とすと云、(這家譜の一條は、作り設たるにあらず、事皆實錄によりて略記しぬるのみ)しかれども除くべからず。識者是を論じて曰、義豊は叔父實堯を撃て是を殺して、自立せる、其罪五逆に當れり。しかれども又實堯も罪あり。兄義通の託孤の遺命を受ながら、己が子に傳へまく欲して、義豊が人となるまで、久しく借て房總を返さず。この故に禍蕭牆の中より起りて、竟に身を殺すに至れり。有恁れば、里見の世代に、義豊を除くときは、又實堯をも除くべし。今實堯を除ざるときは、義豊をも除くべからずといへり。本傳の作者案ずるに、里見軍記に義豊を、義通の弟として、實堯と確執の事なし。且實堯を世代に載せず、又義弘を義堯の弟とす、幷に訛舛甚し。同書に義實は、長享三年四月七日に卒す。法號獻珠院殿建寶興公居士、義成法號は、聽月院殿大憧勝公居士、とあれども、延命寺の過去帳に据にあらざれば、眞僞いまだ詳ならず。又按ずるに、里見北條と、國

上總介に任ぜらる。天文三年實堯の子義堯、亦黨兵を將て、九瑠璃の城を襲ふ。蓋父の讐を復す也。城竟に陷りて、義豐戰歿す、義堯則自立して、左馬助に任ず。因て九瑠璃を居城とす。後に鬼本に築きて、其新城に移る。當時三浦の兵の江を渡し來て、折々寇するを防ん爲也。天文十一年秋七月、義堯足利義明と倶に、下總の國府臺に、北條氏綱と戰ふ。義明は、當時上總の八幡に居り。因て時の人八幡御所といふ。其性驍勇にして智略なし。此日の鬪戰、初は勝に乘といへども、竟に八幡の隊より敗れて義明は陣歿す。義堯敗走して上總に還る。是より葛飾半郡葛西を失ふ。上總も亦諸城主の叛く者多かり。眞里谷信政魁首たり。義堯則椎津の城を攻て、信政を誅伐す。信政戰歿して、諸城主の叛く者咸降る、義堯又上總を平均せり。恁而義堯は、天文二十年に卒りぬ。則香華院なる、府中の延命寺へ葬る。延命寺は、義堯の時、府中へ遷されしなるべし。義堯卒して、其子義弘嗣ぐ。義弘も亦驍勇にして、且鬪戰を好めり。則左馬頭に任ぜらる。上總の佐貫を居城とす。弘治元年義弘、其子義頼と倶に兵を將て、江を渡して相摸の三浦を攻て北條と戰ふ。義弘大に戰ひ克て、三浦四十八郷を略す。是より久しく里見の封内とす。永祿七年、義弘又北條氏康と、國府臺に戰ふ。義弘大くうち負て、國府臺の城陷人る。是より下總は里見に屬ず、皆北條の有に做りぬ。是より後も、北條氏と鬪戰已まず。天正

十六日に卒りぬ。次の年延徳と改元せらる。嘉吉元年より、こゝに至りて、春秋四十七年を歴たり。義實結城沒落の時、十八歳ならば、卒する年、六十五歳なるべし。則白濱延命寺へ葬る。中興の祖なるをもて、廟墓究めて嚴重也。其忌日四月十六日は、結城落城の月日と同じ、人是を一奇とす。二世義成は、文龜元年四月十五日に卒りて、三世義通嗣ぐ。義通は文龜二年二十八歳にて早逝す、又一說に永正十七年、二月朔日四十八歳にて卒す、いまだ孰か實なるを知らず。時に義通の獨子筍嬬丸、この時甫の七歳也。其幼小なる故に、義通遺言して、弟實堯（義成の二男乳名次麿）を立つ。筍嬬成長に及ばゝ、家督を渡すべしと也。實堯初は上總なる、宮本の城主にせらる。後に九瑠璃の城に移る。於是稻村の城に移住す。則上總介に任ぜらる。其性驍勇にして多慾也。大永五年實堯、房總下總常陸武藏五箇國の兵を領て、相摸の三浦を攻て戰ひ克ぬ。同六年鎌倉の戰ひに、再び克事を得たり。左右する程に、筍嬬成長して名を義豐といふ。其性勇にして武藝を嗜めり。しかれども、實堯兄義通の遺言に背きて、義豐に家督を渡さず、義豐是を怨り。是よりして房總の諸士義豐黨、實堯黨と、藩中兩個に別れて確執す。ゝ大が所云内亂是也。義豐遂に其黨兵を將て、屢稻村の城を攻て、迭に勝負あり。天文二年、稻村の城戰ひ敗れて、實堯竟に戰歿す。義豐則自立して、上總の九瑠璃を居城とす、亦

ぬ。是よりして山内扇谷の兩家衰へて、一人北條氏、武相の間に跋扈せり。然ば千葉自胤は、孤城防ぐに力及ばで、竟に北條に降りしかば、後に信濃へ移されて、子孫聞えずなりにけり。又三浦義同は、老後に入道して、法名を道寸といふ。父子倶に勇士なれば、孤城を守りて敵屈せず、屢北條と戰ふ程に、永正十八年七月十一日、竟に勢究りて、免るべくもあらざりける、義同入道道寸は、其子暴二郎と共侶に、敵を擊こと尠からず。暴二郎は戰歿し、那身は城に退きて、樓城に火を放け、腹搔斫て、煙の中に臥まくせし時、

うつものも擊るるものも土器よ碎けて後はもとのつちくれ

と辭世の歌を高く吟じて、灰燼と做りて亡にけり。丌が中に成氏は、幸にして勍敵に攻られず。那身は明應六年九月晦、享年六十四歲にて卒りぬ。其子政氏は、長尾景春入道伊玄に後見せられて、滸我の一城を保つ几目、子孫猶も相續して、基氏より九世に及べり。世の人是を鎌倉管領九代とす。又長尾景春は、爲景の時に至りて、越後はさら也、佐渡までも、盡伐從へて、春日山を居城とす。子孫是より繁昌しけり。又結城は、成朝良將なるをもて、地を削らるゝこともなく、子孫數世相續しけり。こは皆後の話也。然ば關東なる、諸將の成敗は、當時かくの如くなれども、里見は封內無異にして、後安かりける程に、義實老侯は、長享二年四月

鎌倉鶴岡の八幡宮へ參詣せしかば、この日那身は宿所に在らず。次の日、件の凶變を傳聞て、齒を切りて怨れども、及ぶべくもあらざれば、只得伴當には、亓が儘身の暇を取せて、那身は由緣の家に潛びて居り。浮浪既に年を歷て、北條氏綱に從ひしに、思ふにも似ず人並にて、徒に光陰を過すのみ、重用せらるべくもあらざれば、辭し去りて安房に赴きて、里見氏に仕しより、北條氏と鬪戰に、屢武勇を顯して、其名高く聞えけり。然ば又扇谷定正は、山內顯定に謀れて、罪なき道灌を誅ししより、白石小幡も殆みて、軍配に從はず、膽山內顯定に、五十子の城を夜擊せられて、走りて河鯉の城にて𢬵へけり。この時式部少輔朝寧は戰歿す。大石憲重憲儀、白石重勝等は、皆顯定に降參しけり。是よりして顯定は、威勢あるに似たれども、旣に後に勍敵あり。北條早雲其子氏綱は、武勇胆略に富たれば、屢小俵より推寄て、鎌倉を攻伐しかば、顯定竟に戰負て、武藏へ退きて𢬵へけり。恁而扇谷定正は、明應二年十月五日、河鯉の城にて卒りぬ。享年五十二歲也。其後顯定は、河鯉の城を攻て、朝良と戰ふ程に、北條氏綱其虛によりて、武藏を過半伐捕しかば、顯定竟に朝良と和睦して、倶に北條を防ぐ程に、明應七年六月十二日の鬪戰に、兩管領の軍敗れて、顯定陣中に戰歿す。享年五十七歲也。是より先に顯定は、祝髮入道して、法名を可諄といひけり。其子憲房殘兵を將て、上毛へ走り

の逞兵を従へて、悄地に糟屋へ推寄て、門戸を毀ち塀を破りて、短兵急に攻入りける。有恁る折しも道灌は、浴してありしかば、是を聞事遲けれども、毫も噪ぐ氣色なく、徐に湯盤を立出て、身を拭ひつゝ衣を被て、帯を結んとする程に、既に稠入る寄隊の軍兵、浴室の杉戸を蹴放ちて、鎗閃めかして、道灌の脇を禺惷と刺す。然ども道灌敢仆れず、先其帯を結び果て、引拔んとせし敵の鎗の、蛭卷楚と握禁めて、やをれ等ね、一歌あり。と制めて又聲高やかに、

　さまぐ〜の莫妄想を容れおきし勘忍嚢今破れけり

と、詠せも果ず鎗引拔て、吭を刺てぞ衝留ける。道灌がこの日の光景、在昔唐山、衞の仲由子路が戰歿の折、敵の矛に縫れながら、兜の傾きしを正しけると、同日の談也とて、識者は幷て譽にけり。又件の辭世の歌を謬傳へて、

　かゝる時さこそ命の惜からめかねてなき身と思ひしらずは

とある歌を、物にしるせしもあれども、其歌は慕景集に見えて、辭世にはあらざる也。間話休題、この日糟屋の舘には、士卒僅に五六十名ありしかば、防ぎ戰ふまでもなく、志ある兵は、稠入る敵と引組んで、刺違々々、遺なく戰歿したるける。恁而大石憲儀は、道灌の首級排て、舘に火を放け焼亡して、軈て凱陣したりける。爾程に巨田薪六郎助友は、宿願の旨ありて、

て、嵐山の城に入るに、威勢を見て利を欲する、不義の從兵尠からず。蓋政元は、素より外道を修するの故に、妻もなく子もなければ、關白尙經公の季子を養ひ執て、九郎澄之と名告せて、雪吹姫を妻せしに、雪吹姫は多病にて、幾程もなく身故りけり。其後政元は、又四國の一族讃岐守元勝が子、六郎澄元を養嗣にしけり。是によりて、阿波の長臣、三好長輝は、澄元を執立て、軈て阿波より攻登りて、香西復六を伐程に、波々伯部忠一義烈は、澄元の隊に從ふて、獨眞先に投みつゝ、戸倉鴞四郎を擊捕けり。爾程に復六は、勢究り城陷りて、那身は流箭に中りて死けり。然ば九郎澄之は、只得寄隊に降參して、祝髮入道したりける。是よりして三好氏世に顯れて、成勢竹を破如く、後竟に、天の下の政を執に至れり。休題再說、扇谷定正は、敗軍の後幾程もなく、又顯定に棄れて、軍威振ふべくもあらざれば、只得大石憲儀を、鎌倉へ遣して、屢和を講ぜしかども、顯定敢從はず、且欺きていふやう、大夫（定正をいふ）を危くせしは、巨田道灌也。他は扇谷の大夫でありながら、君の安危を見かへらず、安全として糟屋に在り。是を忠臣といふべきや。夙く道灌を誅戮し給はゞ、我扇谷と和睦して、兵を合せて會稽の、恥を雪めんといひしを、定正愚にして悟得ず、則大石憲儀を、伐隊の頭人にして、糟屋に造りて、道灌を誅せしむ。時に文明十八年七月二十六日、憲儀則一千五百

猶且聊餘譚あり。本傳に見れたる、諸將師の、後の成敗得失、いまだ詳ならざる者多かり。こも遺憾なきにあらねば、亦是實錄に据て各其尾を備にす。こも亦前後を照見べし。却說京都の管領細川政元は、文明十八年より、復召返されて、卽原職に復任す。其後將軍義尙二十五歲にて、鈎里の陣中に薨じて、義政嗣なければ、弟義視の子、義材を養ふて將軍とす。其後程なく義政も薨じぬ。是より政元權を弄び、政を恣にして、威勢肩を比る者なし。恁而永正四年の春、政元が屛居の家臣、香西復六が子、香西再六は、一日疾病なくして頓死しけり。父復六は、曩に罪ありて、今に至るまで、久しく出仕を禁められてありしに、其子德用はさら也、今又再六も、暴に身故りしかば、哀傷の涙やる方もなき折、悄地に告る者ありて、往る日我君は、再六に愛宕祭祀の供物を賜りて、𣎴を喫しより、再六主は、猛可に心地惱しくなり給ひし、などいひしかば、復六聞て、原來我子は毒殺せられし也とて、主を怨むる事酷しく、竟に政元の右筆、戶倉鴞四郎と喚做す者に、黃金多く拿せて、政元を弑せしむ。時に永正四年六月二十三日の夜、政元は愛宕祭祀の修法の爲に、浴室に入りしを、鴞四郎覘ひよりて、只一刀に刺殺しけり。當下政元の近臣、波々伯部忠一義列、這光景に驚きて、走蒐りて組んとしつゝ、又一刀瘢を負しかど、仆れたるのみ死ざりけり。恁而香西復六は、政元の養子澄之を執立


犬田老仙
犬飼老仙
犬江老仙
犬山老仙


八犬仙山中遊戯圖
犬川老仙
犬村老仙
犬塚老仙
犬阪老仙

正六年義弘卒去の時、時綱猛可に兵を起して、濱荻の地を掠めけり。當下隊下の老兵、卒日岡四郎と喚做す者、其非を擧て諫しかば、時綱酒の醉に乘して、酷く岡四郎を、鞭ち懲して、帳中に醉臥しけり。岡四郎是を怨みて、覘ひよりて時綱を刺す。時綱刺れながら、拳を固めて、岡四郎の吭骨を撻折きしかば、岡四郎も倶に死にけり。時綱横死して兒子なけれども、他は當藩第一の勇士にて、敵に名を知られし者なれば、斷絶すべからずとて、義頼則弟里見箭九郎を、政木氏の名跡にして、又政木大全と、名告たりといふ兩說あり。この他十條力二郎尺八も、子孫ありて義堯に仕ふ。石龜次團太の養嗣越鯽三も、妻を娶りて子孫あり。姥雪代四郎音音曳手單節は、皆老樂にて、長壽を得たり。又蜑崎滿呂安西、磯崎金碗天津も、子孫世々相續す。只初世の八犬士は、其終詳ならず。皆地仙に做りて、富山に在りといふのみ、正可に目擊せし者なし。この故に、二世の八犬士等、相別れし日を忌日にして、延命寺に八箇の墓表を建けり。里見義堯、其創業の功臣なるをもて、八犬士の木主を、聽月院殿（義成の法號）の位牌堂に列置せて、春秋每に、國主みづから是を祀りぬ。蓋里見十世の略家譜は、實を撈りて下に載たり。看官前後を併見べし。抑里見の家臣、有名の者、向水五十三太、枝獨鈷素手吉等に至るまで、都て恩賞に與りて、各其職に就しよしは、皆上に盡したれば、省きてこゝにいはず、

采邑各五千貫文を賜りて、倶に大兵頭とす。這八犬士も、父祖と同稱にて、武勇智計も亦父祖に劣らず。義堯義弘二世の國主に仕て、軍陣に涖む毎に、戰功あらずといふことなく、其名を阪東にぞ揚にける。然ば又政木大全孝嗣は、葛羅媛を娶りしより、二男一女あり。冢子は佐太郎といふ、後に又大全と稱す。二郎は世を早くせり。女子は成長の後、實堯の側室に做りぬ。世々大田木の城主にて、子孫稱を同くす。孝嗣より四世の孫、政木大全時綱は、一人當千の勇士にて、里見義弘に仕ふ。義弘國府臺に北條氏康と戰ひ、利なくして退く時、政木大全殿して、敵十五騎を斫て落して、主を拯ひし勇士なれども、生平に强飮なりければ、義弘の世を去りし比、政木時綱は吐血して、暴に死けり。嗣べき兒子なかりしかば、大田木の政木は絕たり。這故に、義賴の弟里見箭九郎を政木氏の名跡にして、政木大全義嗣と名告せて、安房の舘山の城、幷に采邑壹萬貫文を賜ふ。這大全も勇士にて、軍陣每に先鋒の頭人たり、其名遠近に聞えけり。然ば國人等、大田木の政木氏をいふときは、家中の政木と唱へ、又里見の政木氏をいふときは、御内の政木と唱へて、もて是を分ちぬ。或は云、政木時綱戰功多かりしかば、義弘是を譽て、濱荻の地三千貫文を、加增せんといひしかど、惜みて與ざりければ、時綱怨めり。天


犬塚しの
犬阪毛の


後の八犬士
倶に父の山
居を訪処

に他郷へ去ざるや。といへば戌孝忠與仁禮儀、義任信道悌順も、各其子を警めて、汝等倘惑を取りて、其職祿を惜むの故に、去で黨する事あらば、必や親の名を降さん。只速に去べきのみ。と異口同様に教諭ば、犬阪胤才犬山中心、犬塚戌子犬江如心、犬村儀正犬川則任、犬飼言人犬田理順等は、感涙坐に吒むまでに、踧然と畏みて、頭を低てありける程に、其事やうやく果しかば、倶に頭を擡るに、怪むべし、八個の翁は、忽焉とあらず做りて、室中に馥郁たる、異香連りに薫るのみ、其適く所を知るよしなければ、皆愕然と驚きて、原來大人達は、仙術をや得給ひけん、然しも廣き這山を、那里と投て索ぬべき。猶再會こそ願しけれ。とうち咳くのみせん術なければ、共侶に山を下りて、次の日連署の願書を、稲村の城へまゐらせつ、各病に推けて、身の暇を請稟すに、實堯も、思ふよしやありけん、其情願に儘すべしとて、八犬倶に身の暇を賜りて、采邑各五千貫文を召放る。遮莫後の八犬士は、倶に貯祿に匱しからねば、各宅眷を携て、是より久しく他郷にあり。其後幾程もなく、當主里見實堯と、其兄義通の獨子、里見義豐と確執起りて、房總果して靜ならず。後竟に實堯戰歿し、義豐も亦撃れて、義堯の世に做りしかば、士民安堵の思ひをなしぬ。其時義堯は、後の八犬士の、有所を索ねて、連りに是を招ぎしかば、犬士等は、只得宅眷を將て、上總の九瑠璃へかへり來つ。然

後には其も煩しとて、皆身の暇を取らせて、八犬同居しぬるのみ。春は麓の花鳥を友とし、秋は峯上の丹楓を裀とす。夏は溪川の水を掬び、冬は爐に團坐して、落葉を焼のみ。倶に天命を樂みて、浮世の事を忘るゝに似たり。恁而二十歳許を歷ぬる程に、竟に火食せずやありけん、折兒子等が、奴隷をもて贈りぬる、米鹽衣裳も、今は要なしとて受ず。この時城戸姫竹野姫、鄙木姫栞姫、濱路姫小波姫、弟姫は、年各既に老て、漸々に身故り給ひしかども、其良人たる八犬士は、今に至るまで、顏色衰へず、峯に上り谷に下るに、飛鳥よりも易げにて、菴に在ること稀也、と聞えしかば、後の八犬士等は、倶に心許なく思ひて、有一日各伴當を將て、うち連立て富山なる、菴に至りて親を訪ふに、戍孝胤智、仁禮儀、義任忠與、信道悌順等は、豫是を知る如く、うち聚ふて、菴の内に在り。既に座定りて、胤智諸士に向ひていふやう、汝等いまだ思はずや。先君御父子の、仁義の餘德衰へて、内亂將に起らまくす。這故に、我等八名、杖を曳き山を下りて、舘（實堯をいふ）并に義豐君（篤孺をいふ）を諫まく思へども、當舘は吝嗇也、久しく借りて返さゞれば、是を奪ふ所以を知らず。義豐君も孝順ならねば、諫て听るべきにあらず。开を听れずと知りながら、犯して身を殺すは益なし。夫危邦には入らず、亂邦には居らず。這故に酒家八名は當所を去りて、他山に移らまくす。汝等齊ぞ倶に致仕して、共

返して、改めて各其守城の頭人たるべしと命ぜらる。恁而戍孝胤智等の八犬士は、富山の峯上なる、觀音堂の側に、菴を締び且同居して、老を養まくす。七個の娵上達も、相從んとてうち泣給ひしを、犬士等各是を諫めて、富山は伏姫上の御事ありしより、女人の登る事を僥されず。いかでおん身等は留りて、兒子の養を受給へ。是も亦親たる者の樂みにあらずや。と叮寧に慰めて、一人も從ふことを許さず。既にして夫婦父子別に臨時、八犬各其兒子に、遺言していふやう、若等共侶によく勉て、君には不忠の行ひなく、母には孝を盡すべし。安房は僅に四郡にて、九萬貫文の小地也。然を先君臣等八人に、秩祿八萬貫文を賜りしは、是軍功の恩賞なれども、君臣其祿を等しくするに似たり。王制に、大夫は士の祿に倍す、君は卿の祿を十にす、といふに當らず。然ば若們が五千貫文も猶過たり。折もあらば辭ひまつりて、三千貫文にて事足るべし。君子は周くして黨せず、小人は黨して周からずといへり。若們八人は、倶に周くすべし、善惡に就て黨すべからず。國道あらば仕へよ、國道なくば致仕して淸貧を樂むべし。貴きは、其富貴を惜み、然ぬも其職祿を惜みて、退くべき時に退かざれば、竟に敗れを取ざる者稀也。是を思へ〳〵。と一口舌より出るが如く、共侶に敎訓して、うち連立つゝ富山に至りて、山居して二たび出ず。初は老實なる奴隸兩三名を使ひて、薪木の業を任用せしに、

一女は那古小七郎の妻とす。八犬士、かくの如く兒子に富て、且其才貌疎ならず。其後吾孺前は、逝去の聞えあり。仁が愛馬青海波も老て死にけり。恁而義成主世を去給ひて、嫡子義通も、亦賢良の君なれば、諸臣皆憑しく思ひたりしに、不幸短命にて、其世久しからず。這時義通の嫡子筍孺丸、尙穉かりしかば、義通の遺命によりて、弟次麿這時は、里見二郎實堯といひしを、假に嗣とす。筍孺成長らば、家督を遞與すべしと定せらる。俗に云順養嗣の類也。實堯則四世の國主に做りて、上總介に任ぜらる。遮莫其心術父兄に似ず、勇あれども吝にて、萬事に慘しかりければ、罪なくて退けらるゝ者多かりけり。當下八犬士は、延命寺へ廟參の折、閑室を借て、商量しぬる義あり。其後四五日を歷て、倶に稻村の城に參りて、實堯主に請稟すやう、臣等は先君の寵恩をもて、各一萬貫文の大祿を賜りて、各一城の主に做されしより、坐して食ひ溫に衣て、老の至るを知らず。年既に六十にあまりて、猶恁て候はゞ、賢路を塞の恐れあり。いかで城地を返しまつりて、致仕して退隱せまく欲す。愚息等は、右にも左にも、召使せ給ふべくもやといふ、連署一通の願書をまゐらせしかば、實堯則其情願に儘せて、犬士等には身の暇を賜り、其子犬塚信乃犬阪毛野、犬山道一犬川額藏、犬村角太郎犬飼玄吉、犬田小文吾、犬江眞平等には、釆邑各五千貫文を賜りて、倶に大兵頭とす。其城地は、皆召

又犬飼現八兵衛信道も三男一女あり。冢子は、犬飼玄吉言人と喚做したり、後に又現八と稱す。二郎は犬飼見兵衛道宣といふ。成長の後、滸我へ遣して、政氏に仕へしむ。三郎は甘糟糠介と名けたり。こは上總國望陀郡の鄕士とす。女子は、犬村大學の冢子、角太郎に妻せけり。又犬田豊後悌順は、二男二女あり。冢子は犬田小文吾理順と名けたり、後に又豊後と稱す。二郎は本姓那古氏を名告せて、那古子七郎順明といふ。成長の後、下總なる行德の鄕士とす。兩個の女兒は、犬江眞平、犬江大八と妻せけり。又犬塚信濃戌孝も、二男二女あり。冢子は、犬塚信乃戌子と喚做したり、後に又信濃と稱す、犬江仁が女兒を娶りぬ。二郎は、本姓大塚を名告せて、大塚番匠戌鄕といふ。成長の後、武藏なる、大塚へ遣して鄕士とす。一女は犬川義任が子に妻せ、一女は、犬田小文吾の妻とす。又犬阪下野胤智は、二男ありて女子なし。冢子は犬阪毛野胤才と喚做したり、後に又下野と稱す。二郎には、本姓粟飯原氏を名告せて、粟飯原首胤榮といふ。こは下總へ遣して、千葉の鄕士とす。又犬川長狹莊介義任は、一男二女あり。男子は犬川額藏則任と喚做したり、後に又莊介と稱す。一女は犬塚番匠に妻せ、一女は蜑崎照文の孫夫とす。又犬村大學禮儀は、二男二女あり。冢子は、犬村角太郎儀正と喚做したり、後に又大學と稱す。二郎は赤嵓正學儀武と名告せて、下野赤嵓の鄕士とす。一女は犬飼玄吉に妻せ、

さら也、傳聞く者感嘆して、敬服せざるはなかりけり。この折有人遊魂を知らず、訝りて是を犬江に質問ひしに、親兵衞答て、遊魂は文學技藝何くれとなく、凝て是を習ひし者、其志を得遂ずして、不幸短命にして死に至れば、其魂いまだ天に歸ることを得ず、執著して久しく虚空に在るを、名けて遊魂といふ是也。其遊魂或は緣に觸、或は物に感じて、人の稚子に憑くことあり、或は其子の胎内に在る時より憑くも在り、或は生れて後に憑くも在り、皆虚弱なる小兒に憑くのみ、壯健なるには憑くことを得ず。この故に神童の、短命ならぬは究めて稀也。這理をもて推ときは、亦怪むに足ざる者歟。と言詳に解示せば、其人深く感佩して、益を得たりとて歡びけり。間話休題。這他七犬士の兒子を數るに、犬山道節忠與は、三男二女あり。冢子は、犬山道一郎中心と喚做したり。後に改めて道節と稱す。二男は、落鮎餘之七有種に乞れて、他が養嗣とす。有種が妻重戸は、後に女子を生て、男子なければ也。因て落鮎餘之八有與と名告て、穗北の鄕士に做りぬ。三郎は、童年より出家を好みて、教ずしてよく佛經を讀しかば、則延命寺へ遣はして、念戌の從弟とす。後に叡山及高野山へ登りて、兼學年を經てかへり來つ、念戌和尚遷化の後、延命寺の住持に做りぬ。法名を道空といふ。這時より宗旨を改めて、眞言宗に做れるなるべし。兩個の兒女は、成長の後、十條力二郎、十條尺八郎に妻せけり。

是十二分の造化にて、倘這憂に丁らずは、我身必早逝せん。世に神童と喚做す者は、年十歳に至らずして、書を善し畫をよくし、或は詩を賦し歌を詠み、文學をすら得ぬるもあるは、必人の遊魂の、虚弱の小兒に憑たる也。この故に神童は短命にして久しからず。倘幸に不死して、壯年に至る時は、其遊魂血氣に壓れて、久しく那身に宿ることを得ず、忽然として立去故に、其人遂に愚に復りて、後は聞えず做る者多かり。我は其等と同じからず、年八九歳の頃よりして、身長は四尺にあまりて、文學武藝筋力剽姚、世にも人にも勝れしは、皆是神授の所以なれば、三十にして愚にも復らず、今にもあれ姫神の、我身を守らず做り給はゞ、立地に命終らん。爾るを餘命を貪りて、後妻を娶らんや。古は男子三十にして、室ありといへり、我は十歳にして室ある故に、三十にして鰥夫に做りぬ。物の發生早き者は、死亡も亦速也。桃は三年にして花さき、實を結ぶ故に、三十年にして必枯。こゝをもて桃の一名を短命樹とす。鳥は十七日或は二十一日にして、其卵孚る。この故に飼鳥は、七八年にして必死す。獸は或は三月或は五月にして生るゝも、人の食を喫ふ者は、八九年にして必斃る。只野山に在る鳥獸の、天地と其氣を同くしぬるは、人に神仙ある如く、命の長短、この涯りにあらず。我も野山の鳥獸に做らはまく欲す、已ねく〵。と頭を掉りて、說くこと備なりければ、媒妁兒はいふも

本貫は、必下總なるべし。只這四家老の、子孫久しく相續したるのみならず、八犬士も、主君の姫上達を娶しより、各男女の兒子に匱しからず。开が中に、犬江親兵衞は、十八歳の時より子を擧けて、二男一女あり、冢は犬江眞平如心と喚做したり。父退隱の後、親兵衞と改名す。二男を犬江大八といふ。犬江依介に兒子なければ、他等夫婦に取せて依介の養嗣とす。初親兵衞が、安房の舘山の城を賜りて、那里に移住し時より、大母妙眞を、瀧田より迎拿て、孝養盡さゞることなきに、靜岑姫もよく岳母に仕へ給しかば、妙眞は過分き城主の大母に成登りて、何足らざる事もなく、年七十七八歳にて、病苦もあらず身故りけり。只親兵衞に闕たる所は、靜岑姫、不幸短命にて、三十九歳の秋身故り給ひぬ。是年親兵衞は三十歳、冢子眞平は十三歳次子大八は十一歳、女子は甫の八歳也。この故に後妻を、媒妁する者多くあれども、親兵衞敢て承引ず、且いふやう、人各妻を娶るは、子を欲するの故也。後なきを不幸の第一とす。我は既に、男女の兒子三人あり。且故妻は主君の姫上也。決て後妻を娶るべからず。憶ふに舘の姫上八人の内中、靜岑は其長女にて、年十九なりし時、十歳の我仁に、這天緣を結れしは、盈て虧るの所以なるべし。抑仁は九歳の春、富山に出世したりしより、事皆做し得ずといふ者なく、身は下總市河なる、市人房八が獨子にて、僅に甫の九歳より、舘山兩所の城主に做りしは、

第九輯　卷之五十三　上

第百八十勝回下編大團圓

犬士退隱して天命を樂む
諸將の得失其尾を備にす

爾程に、八犬士等は、丶大禪師の別に臨みて、いはれし義の理りなれば、倶に退隱の思ひあり。是よりの後國政は、都て四家老に相讓りて、折々稻村へ出仕しぬるのみ、房總既に無異にして、人を用る時ならねば也。有恁し程に東六郎辰相、荒川兵庫助淸澄は、老病既に身に逼りて、うち續きて身故りしかば、其子印東小六明相、荒川太郞一郞淸英、倶に父の職を紹ぎて、家老に做さる。是より十世忠義の時に至るまで、這四臣の子孫世錄にして家老たり。其が中に杉倉武者助直元は、兒子なし。この故に、弟木曾三介季元を養嗣とす。杉倉、本姓は木曾氏也、父氏元故ありて、母の姓を冒して、杉倉と稱したりしを、季元に至りて、本姓に復れり。是よりの後、一世は杉倉一世は木曾と名告しかば、古記錄に載る所、里見の四家老、杉倉、堀内、東、荒川と識しゝもあり、又木曾堀内印東荒川、と識ししもあるは這所以也。東は印東の略稱にて、

とて、甲乙倶に徵されしかば、大田木の浦人歡びて、遂に恒例に倣りにけり。憖而義成の徳を慕へる、近國の氓多く聚ひ來て、上總の郡縣、ます〳〵繁昌したりしかば、政木大全利害を演て、請ふて處々の要害に、城を築くこと尠からず。後竟に四十八箇所に至りしかば、世の人相傳へて、是を里見の四十八城といひけり。是より下は、又本回の下編に、解分るを聽ねかし。

り。恁而許多の年を歷て、里見四代の國主、實堯の時に、樵夫の富山に入る者あり。一日一個の老僧、忽然と出て來て、遙に樵夫を喚ていふやう、我は、大禪師也。汝我爲に稻村の城に參りて、實堯主に告よ。御父祖の俊德稍衰て、內亂將起まくす。宜く仁義忠孝を宗として、善政怠り給ふなと言傳よ。努な忘れそ。と宣示して、走ること奔馬の像く、忽地見えずなりにけり。しかれども件の樵夫は、言の忌々しきに憚りて、此義を訴ざりけれども、果して毫も違ざりける、こは是後の話也。是より先に、犬田豐後が居城せる、那古の浦は、一名を鏡の浦といふ。這地方の棘鬣魚は、安房の名物なれば、平生に國守へ獻じて、もて食膳の料とす。又政木大全が居城せる、大田木の棘鬣魚も、上總の名物なれども、路遠ければ、守の食膳に備られず。遮莫大田木の漁夫は、猶誇りて、我浦の棘鬣魚は、那古に勝れりといひしを、犬田豐後聞知りて、有年の春鹽鯛を、政木大全に贈るとて、歌を詠て遣しける。其歌

　曳おろす霞の網による浪の花さくら鯛は那古の浦裏

とありしかば、政木大全も亦、鹽鯛を犬田に贈るに、歌をもて返しとす。其歌

　こゝの海八重の潮路のさくら鯛名に大田木をよしのといふらん

後に義成主、此事を傳へ聞て、贈答共に感心のあまり、冬は大田木の棘鬣魚をも、食膳に備よ

かへり來つ、事恁々と聞え上れば、義成則念戍を召よせて、みづから其委曲を聞給ふに、念戍がいふやう、那嵒崛を塞ぎたる磐石は、非如百千人の膂力ありとも、輙く啓くべうは候はず。其大石に書寫しゝ歌あり。

こゝも亦浮世の人の訪來れば空ゆく雲に身をまかせてん

と讀れたるのみ、外には見る所も候はず。と云を義成主打聞て、那は古歌か、新詠か。と問給へば、親兵衛答て、古歌にて候。有昔建武の頃、中納言藤房卿、出家隱遁の後、みづから侃山子と號して、越前なる鷹巣山に幽栖し給ひし時、新田の勇將畑六郎左衛門尉時能が、其頭に陣してありければ、士卒水を徵め難て、山深く入る程に、藤房入道を見出して、訝りて其出處を問ふに、實を告給はず、只東國の者也、とのみ答給ひしかば、士卒等いよ〳〵訝りて、驚てかへり來て時能に告るに、時能聞て、那は必藤房入道にこそをはすべけれ。我ゆきて見んとて、みづから其地方に至るに、主は早く立去りて、坐したる石に、寫遺しゝ件の歌あり。この事物に見えて候也。禪師は是を思ひよせて、其古歌をもて心操を、示されたるにこそ。といふ、考照具なりければ、義成聞つゝ嗟嘆に堪ず、原來幾番訪ふとても、對面稱ふべからずとて、竟にこの議は已にけり。是よりの後富山に入る者、折々那嵒崛にて、誦經の聲するを聞ことあ

き者也。佛は則影像あり。是を天地に譬れば、神は天也、佛は地也。又人身に譬れば、神は則魂也、佛は則魄の如し。神は陽佛は陰、陰、陽の理を知らずして、叨に祀るは淫祠也。大和なる三輪の神は、只無扉門のみにして、神殿なきを見て知るべし。有恁れば今より、峯の奥の院を、我姉神安居の地として、春秋毎に祭るべし。這義を封内なる、士民に遺なく徇示しね。と仰に犬士等感服して猶餘談にぞ及びける。爾程に、大の伴當等は、禪師あらず做りぬと聞知りて、驚き噪ぐこと大かたならず、軈て延命寺へ走りかへりて、住持念戍に告しかば、念戍も亦驚きて、原來師父は富山にゆきて、定に入り給ふならん。いかで今一番、對面せまくほしけれとて、猛可に伴當を將て、富山に赴くに、路にて日の暮しかば、準備の蕉火を振照させて、當晩那嵒崛に走り著て見るに、怪むべし、嵒崛は、最凄じき磐石を建掛て、其入處を塞ぎしかば、縱多力雄の神也とも、輙く開くべくもあらざれば、念戍憶ず嘆息して、原來對面を饒されずとて、嵒崛にうち向ひて、跪きつゝ念佛して、退りて稻村殿に告稟さんとて、其方を投ていそぐ程に、既にして天は明けり。然ば又この旦、犬江親兵衛は、義成主の仰によりて、大禪師の在處を索て、君命を傳んとて、伴當を從へて、富山を投てゆく程に、途にて念戍に逢しかば、件の趣を聞知りて、ゆくとも甲斐なしと思ふにぞ、只得念戍と共侶に、稻村の城へ

敢て受ず、先退院の歡びを稟さんとて、稻村の城に來にける折、八犬士はうち聚ひて、君邊に侍りしかば、義成則ゝ大を召よせて、對面し給ふ。其禮果て、ゝ大がいふやう、臣僧多年の宿願を遂て、富山に入りて還らじと思へば、見參は今日を涯りなるべし。就て告稟さまく思ふ義あり。富山の嵒嵎に、伏姫神の禿倉を置て、衆人に拜せ給ふは、姫神の御本意にあらず。何となれば、姫神は原是富山なる、觀世音の化現也。然ば姫神を拜まく欲する衆生は、富山の峰の觀世音に、詣るに如はなし。臣僧這神慮を知る故に、那宸筆の勅額をば、峯の背なる、手製の石室へ藏めまつりぬ。今よりして後伏姫神を、大悲の奧の院として拜せたまはゞ、利益御子孫に及せ給ふなるべし。然ば臣僧は、那嵒嵎を鎖塞ぎて、長く定に入らまく欲す。といひつつ八犬士を見かへりて、和殿等も聞つらん、功成名遂て身退くは、謙の上吉なる者也。何どて兒子に職を讓りて、致仕して隱逸を樂まざるや。いふべき事は只是のみ。舘願くは今日よりして、長く我身の暇を賜るべし。といひも訖らず身を起して、走りて庭より出ると見えしが、忽然としてあらずなりけり。義成主も八犬士も、這光景に、呆果て、倶に其方を見送るのみ、又いふよしもなかりける。姑且して義成主は、悔て八犬士等に語るらく、曩に我富山姫の勅額を、もて神體にして、且富山なる嵒嵎に、禿倉を置しは愆なりき。何となれば、神は形質な

山へ赴けば、明日よりして寺に留守なし。洒家は這里にて祈禱して、白濱へ還りてん。各よく勉給へ。其四天の玉眼は、和殿等の感得せし、靈玉をもて造りしかば、是各分身の、善神に相同じ。开を瘞る地方には、洒家豫表を建たり。其地を穿つ事一丈二尺は、是地枝十二生肖に象る也。塚を築くこと十尺たるべし。是十幹に象る也。四天王の配分は、其東西南北を分ちて、長櫃に寫たり。塚の表は、東に柳、西に楓、南に檜、北に冬青を栽るを好とす。努な愆ちそ。と説諭せば、犬士等都てこゝろ得て、各其投す方に到るに、安房は四郡にして廣からねば、一兩日にして、國の四隅に來にけり。是より先に、地方の村長莊客等は、國守の下知によりて、稻村より石の韓櫃を、車もて牽よせ來て、四天の舁れて來給ふを、俟こと四隅皆異ならねば、犬士等各、其表木ある地を穿せて、天神王を素樸の厨子の儘に、石の櫃を歛て、是を瘞るに、丶大の教に違ふことなし。恁而塚を築き立させて、栽る樹も、折から五月雨の時候なれば、枯るゝ者なかりけり。八犬士各這義を做し果して、稻村の城へかへり來ぬる程に、又念戌は、徒弟等と倶に、佛像五十軀を、鋸山へ瘞め果て、延命寺へかへり來にけり。是より後丶大禪師は、連りに退院を請稟しかは、義成主已ことを得ず、念戌を延命寺の、二世の住持たるべしとて、則照書を賜りつ、丶大には別に坊料を宛行ふべしとありしを、丶大は固辭て

種佛五十軀は、政木大全、江田宗盈等に下知して、多く夫役を出さすべき歟。と問れて、丶大は頭を掉て、否、然る物々しき事は要なし、那里へは念戌と、夫役十四五名にて事足るべし。種を植るは、小壯兒を宜しとす。老人の植たるは、發生薄き者なれば也。却這事を果しなば、念戌に當山の、住持を仰付させ給ひて、臣僧には速に、身の暇を賜るべし。と願ふを義成主うち聞て、亓は左も右も異日制度せん。長談に日は闌たり、卒退らんとて立給へば、八犬士二家老は、伴の士卒を促し聚合て、稻村の城へ倶しにけり。恁而有司奉りて、四天を歛むべき素樸の厨子と石の韓櫃、佛像五十軀を歛むる、小瓶などを、石陶の工匠等に課するに、約莫三十日許にして、遺なく作り出せしかば、丶大禪師は念戌を將て、八犬士と共侶に、許多の夫役を從へつゝ、富山の嵒嶇に赴きて、丶大禪師の作立て、開眼しける四天佛像を出しまつるに、其佛像五十軀は、念戌則受拿て、准備の瓶に歛つゝ、車に登し夫役に推させて、延命寺へかへり來つ、次の日四五個の徒弟と倶に、夫役に又其車を推させて、鋸山を投ていそぎけり。

爾程に八犬士は、須彌の四天神王の木像を、四箇の長櫃にうち歛て、先隊配を定むるに、東方へは犬塚犬江、西方へは犬川犬飼、南方へは犬村犬田、北方へは犬阪犬山、各夫役を從へて、立別れつゝ路次をいそぐに、丶大は一人嵒嶇を出ず、犬士等に告ていふやう、念戌鋸

又別義に候はず、昔仁が富山にて、姫神傳授の神藥は、東西和睦の後、無異にして、金瘡兒に用ることもなければ、年來那藥籠を、祕藏しぬるのみなりしに、昨日家僕に、急病の者ありしかは、そを救んと思ひつゝ、那藥籠を開きて見るに、藥は耗て其香もなし。曩には幾百幾千人に、用ひても竭ざる神藥の、十餘年を歷たりとも、銷耗たるは奇からずや、是見給へ。といひつゝも、腰に吊たる藥籠を、拿出て軈て開き示せば、丶大はさこそと點頭て、祝して義成主に稟すやう、君歡せ給へかし。當國いよ〳〵無異なる故に、死を起し生に回す、神藥耗てあらず做りぬ。故何となれば、初は素藤の逆亂あり、後には兩管領の攻伐あり。這故に、伏姫神豫より、犬江親兵衛に、那神藥を授給ひて、兩敵の死を救ひ給ひしは、則是君の御仁心を、帮助させ給ひしなるべし。爾るに干戈理りて、房總長く無異なる故に、姫神則那神藥を、執復し給ひしならん。世の常言に、藥は死ざる病人を治し、神は高運の凡夫を護といへり。國無異にして非命の者なく、蒲團の上にて病臥者に、姫神何ぞ佻々しく、神藥を授給はんや。是に由てこれを觀れば、愛たき祥に候ひき。と祝せば犬士等二家老も、倶に千歲をぞ唱ける。當下義成踧然と謝して答給ふやう、我身素より薄德なれども、倘禪師のいふ如くならば、實に幸甚し。却須彌の四天塚は、則禪師先達たるべく、八犬士を總轄にせん。又鋸山へ植るといふ、

犬阪犬塚は、幼稚き時より故ありて、俱に女装して、名も亦信乃毛野なんど、女子に似たるは、亦是陽中の陰也。且犬塚は濱路といふ、結髪の少女あり、又犬村は、雛衣といふ賢妻あり。則是、陽は獨立ざるの義也。爾るに濱路雛衣、及犬江が母沼藺は、皆是良善心烈の婦人なるに、非命に那身を殺せしは、果報虐きに似たれども、こも亦故あり。譬ば草木の花開て、將に實を結まくする時に、必先虚花あり。這虚花ありて、後に實花あり。恁れば件の三婦人は、犬塚犬村等が爲に虚花なれども、其心烈貞實なる、名を千載の後に貽さば、猶千葉荼蘼花の實なくして、花を賞玩せらるゝ如し。既に這虚花散て、濱路姫、鄙木姫の實花あり。こゝに至りて實を結びて、子孫繁昌すべき者也。又只塚村のみならず、八犬士功成名遂て、俱に八個の小姐を、各娶まつるに及びて、陰陽配偶備れり。於是乎純陽たる、牡丹の花の痣子耗て、陰陽冲對の義を表したり。誠や因果も盡る時あり。無漏より出て有漏に入り、有漏より出て無漏に入る、小中大の三乘は、人に少壯老の三齡あるが如し。佛是をもて教とす。各疑ひ給ふな。と辯舌水の流るゝ如く、天機を發きて解諭せば、義成主を首にて、八犬士二家老も、俱に感嘆の聲を合して、玄妙也とぞ稱ける。姑且して犬江親兵衞は、ゝ大禪師に向ひていふやう、玉の文字の耗たるに就て、又一奇異候へども、衆議多端なりければ、言後れて今に及べり。そは

智玉なるも、知らざるを知らずとす、是則上智也。曲學者は知らざることも、知らずといふを恥として、强て臆説を做す故に、胡盧になること多かり。禪師は只是神識也、何ぞ一言一句を惜みて、我のみならず世の人の、疑ひを解ざるや。と徵に、丶大は阿と應て、姑息して答るやう、仰寔に理り也。那八房の犬の死も、又八犬士の出身出世も、皆臣僧より出し來たれば、件の隱微を解ん事、必人に讓るべからず。然を漫に推辭しは、愆り〳〵。今臣僧が一解は、伏姫神の敎に依れり。徐に聞し食ねかし。と謝して則解ていふやう、丶大嘗本草を按ずるに、牡丹は牝なし、這故に宿根より叢生す。因て名けて牡丹といふ。是に由りて之を見れば、牡丹は皆牝のみにして純陽の花也。又八房の犬は、其母犬死して、狸兒に乳育れたる牡狗にて、生涯對すべき牝狗を得ず、是も亦純陽の畜生也。こゝをもて那身の雜毛、形狀牡丹の花に似て、其數八あり。八は則陰數の終にて、陽中の陰也。十は一に通ふ故に、陰數の終とせず。老侯這犬を八房と名け給ひしは、後竟に八犬士等、安房にまゐり聚ふべき讖也。又八犬士は、各其父母ありといへども、那宿因を推す時は、伏姫上の御子にて、胞兄弟に同じ。約莫這八個の兄弟は、皆男子なれば純陽なり。且各身に在る所の痣子、形狀牡丹の花に似たるは、那八房に類る兀自、亦是弟兄純陽の義を表せし也。しかれども、陽は獨不立、陰は獨不行、この故に

のみにあらず。牡丹は上古這大皇國になし。延喜天暦の比也けん、渤海國の商船、創て載て來にければ、牡丹の和名をふかみぐさといふ。ふかみは渤海の假字也。崇德帝の御時より牡丹の歌あり。且牡丹は、極寒の地に宜しからず。東南溫煖の地方に、相應しと聞えしかば、當時詔して、其根を紀伊薩摩安房へ植させ給へり。是よりの後處々に分根して、今は諸國に多くあり。然ばにや、老舘是等の故事に思召合させて、八房の名は出來し也。我少かりし時、御說を、承りて是を知れり。然るを世の生文人は、這深義あるを知らねば、憖に賢して、八房を改めて、八總に作るもあるは、老舘の御本意にあらず。开は左まれ右もあれ、那八房の犬の雜毛の、形狀牡丹の花に似たるは、是甚麽なる因緣ぞ。且汝等八人の痣子は、他に類りたりとても、又皆牡丹の花に似たるは、必其由あるならん。這義を解きね、聞まくほし。と問れて胤智沈吟じて、御諚承り候へども、其義は臣等不用意にて、いまだ考候はず。縱些の考證ありとも、事皆臣等義兄弟の、身に係りたる隱微に侍れば、忌ざることを得ざる也。、大禪師は悟道の後、疑しき事あれば、神物ありて告るが如く、立地に發明す、といはれしことも候へば、質し給はゞ分明ならん。といふを、大は推禁めて、犬阪漫語をな稟しそ。和殿は是生智也、何等の知らざることあらん。洒家に讓ることかは。と推辭を義成主聞あへず、さないひそ禪師。下野が

なるを知る由あらん。這兩箇の照据あるをもて、當館に徴使れて、功名共に做し得て後に、玉の文字も身の痣子も、あらず做りしは是果也。這奇事の終なくば、玉に疵あり、人に痣子あり、無垢清白とすべからず。誠に佛法無量の方便、役行者と伏姫神の、利益歟造化の小兒の所爲歟、思議すべからず候。と甲一句乙一句、迭に語を續ぎ、意衷を演て、各〻玉を拿出つゝ、護身囊にうち載て、倶に丶大に返しけり。當下義成主忻然と、犬士等にうち向ひて、現に物に本末あり、事に終始あり。我今日這牡丹亭に來て、汝等が身に在る所の、形狀牡丹に似たりし痣子の、皆銷耗しを正可に知りぬ。其痣散て這花あり、こも感應といひつべし。就て我這年來、偸地に疑ひ思ふよしあり。犬阪下野は智玉なれば、必や知る由あらん。といはれて胤智額を衝て、开は何事に候。と問ば義成主含笑て、然ばとよ、汝等八箇の身に在りし痣子の、形狀牡丹の花に似たるは、原是八房の犬の、毛色に類りたるなるべし。那犬は、白きに黑き雜毛八箇ありて、形狀牡丹の花に似たれば、當時我老舘の、是に名けて、八房の犬と喚做し給へり。是を八總といはずして、八房と寫せ給ひしも、亦是所以あり。房も總も和名ふさ也。蓋房は並屋也。こゝをもて、婦人の乳を乳房といふ、其兩箇相並びて、總の垂たるに似たれば也。又蜂巣を密房といふ、こも亦垂たる總に似たり。こゝをもて、和訓總と房と通用す。但這字義ある

して、異議する者ぞなかりける。开が中に、戌孝胤智仁等がいふやう、只今師父の教諭に就て、思ひ合する事こそ候へ。臣等が感得の靈玉は、生平に護身嚢に藏めたるを、月の朔望毎に、拿出して拜するのみ。然るに昨日も例の如く、出して拜まくするに、幾の程にか文字は耗て、故の白玉に做りにけり。开は臣等三人の玉のみならず、這義を自餘の犬士に問ふに、道節大學莊介現八、豐後等が藏めたるも、皆白玉に做りぬといへり。と告れば現八拔み出て、又只玉の文字のみならず、臣等八人が身に在る痣子の、形狀牡丹の花に似たるも、隣國和睦の比よりして、其痣子年々に薄く做る隨に、本月に至りては、皆銷耗て、迹なく做りぬ。然ども、義兄弟等が痣子は、或は胛或は肋背臀、股肘などに在故に、衣に隱れて人に知られず、其身にも見えざるがあれども。臣等が痣子は面部にあれは、人はさら也鏡を照せば、みづから見るにかたからず、是御覽ぜよ。と片頬を示せば、義成主も、大師弟も、直元貞住に至るまで、左見右見つゝ倶にいふやう、現に犬飼の面部の痣子は、近曾薄く做りしかば、旣にして銷耗しに、心つきなく候ひき。自餘の諸犬も恁ぞあるべき。奇く妙なることにこそ。といへば忠與禮儀、義任悌順も膝を拔めて、言語齊一答るやう、事と物には因果あり。因は始也、果は終なり、我們が玉の文字と身に在る痣子は、則是因也。倘この玉と痣子なくば、何をもて伏姬上の、御子

したり。今按ずるに、蓮は其字、艸に從ひ車に從ひ辵に從ふ。輪囘は車の囘るが如し。是則當館の、仁心善政の積徳にて、恩怨應報の輪囘、正に盡るの兆なるべし。又各々所藏の靈玉は、仁義八行の文字ありといへども、君仁にして臣も亦仁ならば、別に仁義八行と名る者なし、老子に所云、大道廢れて仁義起るとは是也。所云大道は至仁至善也。人至仁至善なれば、不仁不善と名くべき者なし。大道廢れて、不仁者あり、惡人あり。於是乎、聖人仁義禮智孝悌忠信の八行を立て、もて人に教へ、人を警めたり。和殿等八犬は、倶に八行具足の人也、何ぞ其文字の見れたる靈玉の、冥助をのみ負んや。縱其玉あらずとも、各八人の一生涯は、姫神豈棄給ふべからず。目今玉を我に返しね、もて四天の玉眼にせん。古俗、良將の勇臣の、殊に勝れたるを四人擇て、是を須彌の四天に擬へて、もて四天王と稱する者尠からず。所云、源頼光朝臣に從事せる衞府の勇士、渡邊綱、阪田公時、卜部季武、碓氷貞光是也。這他源義經主の勇臣、龜井片岡、伊勢駿河、義貞朝臣の勇臣、栗生篠塚畑亘利、皆是人の知る所、枚擧るに暇あらず。然るを當館は、那四天王に一倍せる、八犬士の賢臣あり。這八犬を四箇に約めて、四天の八目と倣す時は、八犬にして四天也。天は一に從ひ、大に從ふ。四天にして八犬也。犬は大に從ひ、ヽに從ふ。八犬變じて、四天と倣りて、永久當家の鎭守たらば、抑亦よからずやといふ、辯論精細なりければ、義成主を首にて、諸犬二家老感服

感嘆せざるべき。直元も貞住も、倶に奇異の思ひを做して、數珠を念戌に返しけり。當下義成主は、又丶大にうち向ひて、喃禪師、這義に就て八犬士に、何等の商量あるやらん。と問れて丶大は答ていふやう、否、別議には候はず、伏姫上の御紀なる、那水晶の數珠はしも、役行者の靈物なれば、憖に後に至りて、凡僧の手に落すべからず。這故に那數珠百顆の玉をもて、五十體の佛像の、玉眼に仕りぬ。其算識の八箇の玉を、犬士に乞ふて須彌の四天の玉眼にせまく欲す。開眼遂に具足せば、臣僧又宿願あり。件の須彌の四天神王を、當國安房の四隅に瘞めて、最も畏き平安京なる、將軍塚に擬へなば、十世の季まで動ぎなき、當家御子孫の爲に、守護神に做るべし。又二十五の古佛、二十五の菩薩は、御封内當國なる、鋸山に安措して、堂を造らず其が儘に、分ちて件の山に瘞めん。是佛種を藝るの義也。臣僧嘗鋸山を相するに、正に是房總第一番の佛地也。今かくの如く做す時は、二三百年の後に至りて、我瘞めたる種佛、五十體に十倍せる、五百の石佛を造り立て、件の山に措者あらん歟、未知るべからねども、這宿願を果しなば、速に身の暇を賜りて、富山に入りて終を俟ん。這義は舘に、稟上るのみにあらず、犬士達も聞給へ。昔年水陸施餓饑の折、各所藏の靈玉を、我に返さんといひしかど、我這宿願ある故に、代るに甕襲の玉をもてせり。爾るに其甕襲の玉は、變じて金蓮金花と做りて、散亂して消滅

て數珠一聯を刻得たり。約莫這細工を歲月十餘年にして、稍落成仕りぬ。是を當寺にて彫刻せざるは、寺内も尙俗氣あり。今の法師は、寂滅爲樂の敎を思はで、富貴利達を願へば也。又富山の神嶇に詣る者も、樵夫も臣僧を見ることを得ず。況刻做したる、佛像あるを知らざるは、雲霧起籠たるにあらず、其人々の凡眼汚穢れて、視ども見ることを得ざる也。既にして古佛諸菩薩五十體は、開眼しまつりしかども、四天神王は、いまだ開眼を得ず。這義に就て八犬士等に、商量すべく思ひたりしに、いまだ其義に及ずして、舘に問れまつりしかば、憶ず多辯仕りぬ。佛像は尙神嶇に有り、數珠は當寺の什物にせまく思ひて、念戍に取せ侍りき。疑しく思召さば、御覽に入れん稟せ。といふを念戍こゝろ得て、身を起しつゝ數珠櫃より、數珠を拿出つ盞に載て、義成主に見せまゐらするに、いまだ手に拿ずして、異香一室に滿しかば、義成主は妙に奇しき、其言を听くのみならず、數珠の異香に驚き感じて、やをら手に拿うち戴きて、後方に侍りし禮儀を見かへりて、やゝ大學汝が昔年の辯論も、當らざるにあらねども、禪師の直話は叮寧にて、いよゝ疑ひを解に足れり。是見よかし。と渡し給ふ、數珠を禮儀受戴きて、御諚の如く禪師の道德、神通自得の妙要は、這數珠にても猜せらる。昔年臣等が云云と、推量せしは疎にて、心裡恥しく候。と答て軈て件の數珠を、自餘の犬士に遞與して見すれば、孰か

を厭ひ山に入りて、遂に形を煉り性を易て、嵒居水飮、修し得て神仙に做る者に似たり。但神仙のみならず、佛も亦雲に駕り波を踏む、法術無量なるをもて、佛を稱て金仙とす。开は左まれ右もあれ、臣僧出沒自由を得しより、疑しきことあれば、立地に悟り、人召時は遠きも聞ゆ。こゝをもて念戌が、請ふことありて鳴す鉦は、富山にありても、我耳に入れり。譬ば唐山、魯の曾參が至孝なる、出て日暮るゝまでかへらざる時、其母俟不樂て、則門に立出て、望て指を噬時は、曾子の胸忽地痛て、母の待事を知る故に、いそぎてかへり來ぬるが如し。蓋念戌が老實なる、師に仕ふるの誠心もて、うち鳴す鉦なれば、幽冥に通ずるなるべし。世に神佛を祈る者に、利益は其人の至誠深信に在り。誠は必神の如し、那鉦念戌が鳴すにあらざれば、遠く我耳に入ることなし。是其誠を知るべきのみ。爾るに往る文明十六年の冬、這白濱に波濤の打寄ける異圍材あり。其材の周匝十圍許、長は一丈五六尺なるべし。其色黑くして香氣あり。聊削拿て燒試るに、疑ひもなき沈なり。臣僧則木匠に課て其材を斫せて、分ちて五十五材とす。是を富山の嵒崛に藏めたり。しかれども人是を知らず。是よりの後、臣僧暇ある毎に、飄々然として、富山の崛に造りて、旦夕は姫神の奉爲に讀經し奉り、晝は則其材を刻て、須彌の四天神王を作り奉り、又二十五の菩薩と、二十五の古佛を爲り奉り、其餘材をも




義成延命寺
の書院に牡
丹を観る

せ給へかし。と亦他事もなく請稟せば、義成聞つゝ沈吟じて、其情願は今に創めず、禪師當山に入院の比、老舘の諭給ひて、十稔と契り給ひしを、今さら禁めがたけれども、我年來凝思ふ由あり。禪師は身の暇ある毎に、忽焉として寺に居らず。留守する念戍等が所要ありて、急に請まく欲する時は、本尊をうち念じて、連りに鉦をうち鳴せば、禪師は亦忽然と、寺にかへり來ぬるにあらずや。或は又富山に入る者、那嵒嵎に、禪師の經を讀聲聞え、又有一時は、木を穿つ、鑿の音する日も是あり。しかれども其形體を見ず。我其噂を聞こと、稍久しくなりぬれども、よき折なければ問ざりき。このことある歟、いかにぞや。と問れて、丶大は驚く色なく、然也、且始より稟上ん。臣僧祝髪入道せしより、施主の欵待にあらざれば、敢亦火食せず、日毎に蔬菜果子を生食して、只水を飲のみ。願ふ所は伏姫神の御菩提と、當家の御子孫繁昌を、祈ること間斷なし。この故に、身は當寺の方丈に在り、心は富山の嵒嵎に在り。約莫かくの如くにして、喜怒哀樂の境を免れ、榮枯得失、好憎褒貶に掛念せざれば、我身の有を忘るゝ時あり。こゝをもて、ゆかまく欲する地方あれば、忽焉として適ざることなく、還まく欲すれば、忽焉としてかへらざることなし。然ればとて、脚地を踏まず、雲に駕るにあらざれども、出沒思ひの隨なるは、是何等の所以なるや、我いまだ是を知らず。我知らずして自在なるは、那世

す。但年首五節供の拜禮、臨時吉凶の參勤、或は事の決しがたき折は、八犬士皆參集ひて、國政に與りけり。既に文明は、十八年にて盡て、且長享も亦わづかに二年にして、延德と紀元せらる。延德より、又明應と改りぬ。嘉吉元年より、明應九年に至りて、星霜六十年を經たり。這年四月十六日（一云十四日）は、結城落城の昔を偲ぶ、季基朝臣の六十年忌、義實老侯の十三年忌に丁るをもて、この日義成主は、早天より稻村の城を出て、延命寺へ參詣あり。兩家老杉倉堀内有司近習の每伴當たり。又八犬士も參會す。既にして廟墓燒香の事果て、義成主は客殿に在り。住持、大禪師は、沙彌念戌をもて看茶の禮あり。八犬士犬塚信濃戌孝、犬阪下野胤智、犬江親兵衞仁犬山道節帶刀忠與、犬村大學禮儀、犬川長狹莊介義任、犬飼現八兵衞信道、犬田豐後悌順、兩家老杉倉武者助直元、堀内雜魚太郎貞住ぞ侍りける。折から這客殿の庭に、牡丹花開滿て、紅白色を交へたる、香風馥郁として、得もいはれぬ看弄になれば、義成主は立難て、端近く居ましつゝ、大禪師に法談させて、憶ず時を移し給ふ。其語次に、ゝ大のいふやう、臣僧當山に住持しぬるは、素より情願に候はねども、恩命默止がたければ、既に十七八年を歷たり。鑑する如く、徒弟念戌は年來に倣りぬ。尙壯年に侍れども、佛學既に煉熟して、法脉を嗣に宜し。いかで傳燈の素懷を遂て、身の暇を賜らまく欲す。這義を饒さ

利尭元を、使者として安房へ遣し、又三河なる隣尾判官伊近の使者、錦織機馬、伊勢の國司北畠中將の使者、網曳平大夫周魚等、各稲村の城に來聘して、海上通船の好を脩まくす。義成則、是を受て、更に蜑崎十一郎照文、其女婿十二郎照章、田税戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能等を、答禮の使として、件の諸侯の居城へ遣すに、贈物各差あり。是より年毎に嘉例となりて、義通の時までも、疎からずぞありける。最後に、結城の判官成朝は、能化院の權僧正影西と、小山大夫次郎朝重を使者として、里見と好を結びしかば、義成も亦、大禪師に、犬江親兵衛蜑崎照文を相副て、結城へ遣しける事の趣は、前板百二十九回に見えたる如し。又篦大刀自は、義成の仁義に感服して、和順の思ひありといへども、女流なれば、好を結ぶに及ばず。只稲戸津衛由充のみ、年の春毎に、使を犬川犬田許遣して、義成主の爲に、千歳を壽ぎける。是より房總無異にして、敢干戈を動すことなく、四民業を樂みて、不孝の子、不忠の臣なく、畊す者は畔を讓り、商ふ者は價を貳せず、路に遺たるを拾はず、夜戸を鎖さず。年に荒凶なく、鰥寡孤獨も、饑ず凍ず。皆是義成主の、仁義善政の餘澤なれば、民の是を仰ぐこと、日月の如く、赤子の父母を慕ふに似たり。然ば里見の封内、かくの如く無異なれば、八犬士等は、倶に休暇の命を得て、各其居城に在り。其内中四犬士は、稲村に在勤して、代るに半年を以

感じける。姑且して義成主は、戍孝仁を見かへりて、是まで事を辯論せしは、犬阪下野を首にて、自餘の犬士等と、政木大全に至るまで、我其言を听て、益を得たるも多かれども、大學は言葉寡くて、辯を好まずと思ひしに、那蟬脫の辨の如きは、人の及ばぬ所にして、我疑ひ氷解せり。現に術者の腰を折ば、其術行れざることある者也。好々我こゝろ得たり。大全は逆旅の疲勞もあらん、根小屋へ退りて休息せよとて、开が儘身の暇を賜りて、この日の餘談は果にけり。恁而この年、致仕の老臣、杉倉木曾介氏元、小森衞士篤宗、浦安兵馬乘勝等、うち續きて身故りぬ。又長享二年に、堀内藏人貞行も、衰病によりて、古人に做りぬ。しかれども杉倉武者介直元、堀内雜魚太郎貞住は、既に親の職を繼ぎて家老なり。又小森但一郎高宗、浦安牛助友勝等は、皆當職にあり。然ば又この年の夏四月十六日に、義實老侯卒り給へり。義成父子君臣の歎き、いふべうもあらず。其安葬の事、兒孫親族蟄喪の事なども、都等閑ならぬを、看官宜く猜すべし。爾程に近國他鄕の大小名、里見の仁義に感悅し、或は英武に憚る者、各々使者もをて好を結まくす。却其諸家は、足利左兵衞督成氏、千葉介自胤を首にて、下總には千葉新介孝胤、常陸には佐武高久鹿島の黨、武藏相摸には、扇谷山内の兩管領、三浦陸奥守義同、長尾判官景春等、和睦の後、使者往來して、會盟に叛かず。又甲斐の武田信昌は、家臣廿

で、目今孝嗣がいへる如く、尸解に等しき蟬脫ならんか。譬ば無學の木訥法師、或は無智の愚夫愚婦も、行住座臥に念佛して、極樂往生を樂ふ者は、おのづからに、死期を知りて、其日に至りて死するも是あり。況や、丶大禪師は、正直無慾の活佛也。其出家の始より、伏姬上の御恩德を、報んとのみ念ずる故に、那身は延命寺に住持して、衆從の長たるを榮とせず、いかで富山に山籠して、生の涯り姬上の、御菩提を弔まつらまく、願ふ心の移らねば、身は生ながら尸解して、心神富山に往還する事、是なしとすべからず。和漢の高僧遷化の後、亡骸柩を蛻出して、他鄉の山澤に遊ぶ者あるを、漢籍に尸解といへり。唐の高僧傳なる、達摩多羅是也。又我國紫野なる、一休和尙も、近日尸解の聞えあり。只生ながら蟬脫しぬる者、是あることを聞ざれば、則新奇といはまくのみ。邈古唐山なる黃帝は、夢に華胥國に遊びしといふ故事あり。又天朝なる小野篁は、生平に冥府に往還せしといへり。是等は恐らく神遊にて、魂幽冥に遊びしならん。然ば尸解蟬脫とは、異なるに似たれども、這理をもて推す時は、丶大禪師の蟬脫も、幻術ならぬを知るに足れり。然を今憖に、其義を禪師に質し給はゞ、禪師は本意を失ふて、事の障になるべくもや候はん。只知らぬ面色にて、其終を俟せ給はゞ、必做すことあるなるべしと云、辯論いよ〳〵具なれば、義成主の感悅はさら也、戍孝仁孝嗣も、精論也とて

聲の聞ゆる日もあり。又手斧の音、木を穿つ鑿の槌音しぬる日もありければ、其人驚き怪みて、人々に告などせしかば、言遂に延命寺へ聞えにけり。是によりて念戍等は、稍悟るよしありて、原來師父は、暇ある毎に、富山に造りて石窟に、籠給ふにぞあらむずらん、とは思へども覿面に、問質さんはさすがにて、尙疑ひは解ずとぞ。こも奇事に候はずや。遮莫風聲のみなれば、虛實を知るべくも候はず。禪師の參上りし折に、問せ給はゞ分明ならん。と言詳に告稟せば、戍孝も俱にいふやう、其義は臣等も聞しかど、事怪きに過たれば、然しも虛實を測難て、稟上ず候ひき。といへば孝嗣も亦いふやう、臣等は逆旅に在りしかば、其風聲は聞ざれども、禪師の道德をもて推す時は、尸解に等しき蟬脫の、通力をや得給ひけん、虛談にはあらじといふ衆評を、義成主うち聞て、親兵衛が言具にて、大全がいふ所も亦所以あり。因て我憶ふに、ゝ大は素より老實なる出家人なり。世の常言にいはずや、正法に不思議なし。非除ゝ大は、道德熟して、通力自在なりとても、幻術外道に等しかるべき、出沒不測の行ひあらば、君子は反て信ずべからず。但し大學のみいふよしもなし、意見もあらば聞まく欲。と問れて禮儀額を衝て、否臣等とても必然の義は、稟上がたく候へども。禪師の出沒不測なるも、那幻術には同じから

し上るのみといふ、答詳なりければ、義成主の歡びはさら也、犬塚犬江政木等の、三士も倶に感服す。开が中に義成主は、憶ずも額を撫て、大學說得て誠に好。犬阪下野は智玉にて、學問も亦淺薄ならねば、我問ふ毎に其答、中らずといふことなし。然るを又這大學あり、禮讓のみかは、理を究めたり。こも學問の力にこそ。と稱え給へば三士等も、御意の如し。と答ける。當下犬江仁がいふやう、狐龍化石の奇談には似ざれども、又一奇談候を、舘はいまだ聞し召さずや。一向人の噂に聞に、、大禪師は去歲よりして、延命寺に在りながら、法務の暇ある時は、忽焉として那地適けん、人是を知る者なし。かくの如くなる事日毎にて、稍久しくなる隨に、衆徒も是を怪まず。禪師豫より、徒弟念戊に敎示すらく、我方丈に居ざる時、倘火急の所要ありて、我を請まく欲しなば、汝本尊を念じまつりて、連りに鉦をうち鳴しね。然ば必驗ありて、我立地にかへり來てん、努な疑ひそ、といはれしかば、念戊則其意を得て、事ある時は、敎の如く、鉦を鳴して請來たすに、禪師は果して响に應じて、忽然とかへり來て、勤務に就くこと常の如し。念戊等訝りて、其往復する地方を問ふに、禪師答ずうち笑ひて、开は汝們が知る所にあらず、後々に至りなば、悟るよしもあらんといひけり。有恁し程に富山なる、伏姬神の神社に詣る者、時として那嵒嵎の頭に、雲霧深く起籠て、拜れ給はざる日もこれあり、

築志潟松浦佐用媛夫戀に、領巾振りしより負る山の名

といふ歌あれども、恐らく古俗附會の亊にて、海邊に立たる天然石の、偶人形に似たるを見て、望夫石の名を負せしにもや候はむ。唐山にも望夫石あり、和漢同日の談なるべし。又那張良が下邳の滑橋にて、六韜三略を、傳授せられしといふ黄石公は、未生の人にて寓言のみ。其實は張良己が術を神にせんとて、黄石公といふ異人を作設て、後十三年を歴て、其師の化して、黄なる石に做りしに逢にきなどいひしを、時の人悟ずして、傳へて故事に做りたるにもや候はむ。縱是等のことありとても、求めて得べき事ならねば、必とすべからず。這故に聖人は、怪力亂神を語ず候也。丌は左まれ右もあれ、狐龍化石の事を憶ふに、他命終るに及びて、必石に做らんと思ひて、石に做りたるにはあるべからず。譬ば雷霆の墜たる迹に、小斧に似たる石あり、小鎚に似たる石あるを、雷斧雷鎚と喚做したり。或は又奥羽北越下野などにて、大風雨の時鏃に似たる小石の、墜る亊あるを、土人名けて、神軍の矢の根石とぞいふなる。是等は風に吹颺られし沙礫の、雲雷の氣に蒸れて、凝りて形を做せるのみ、別に其石あるにあらず。是に由りて之を觀れば、狐龍の化石もこの理に等しく、他既に數盡て、命終らんとする時に、雲雷の氣に蒸れて、石に做りて墜たるならん、と思へば疑ひもなく候歟。こは只愚按の及ぶ所を、稟

第九輯　卷之五十二

第百八十勝回中編

延命寺に義成牡丹花を賞す
富山の窟に念戌遺題の歌を見る

登時義成主は、狐龍化石の一奇談に、感嘆愈淺からず、戌孝仁孝嗣と、禮儀等にうち向ひて、物の化石は珍しからず、狐の化して石に做りしは、近曾奈須野なる、殺生石の事をいふ者あり。又人の化して石に做りしは、大伴左手彦が妻、松浦佐用媛、又秩父重保が妻の如きは、共に其古蹟ありて、望夫石の名を遺したり。唐山にもこの事ある歟、漢の張良が師也といふ、黄石公是也。しかれども、虚實いまだ詳ならず。就中狐の龍に化したるすら、思ひがけなき事なるに、幵が亦石に做りたるは、一大奇事といふべきのみ。大學は和漢の學に富り、必意見あるならん。這義怎麽。と問給へば、禮儀答て、然ン候。愚按には候へども、化石は多く水土によれり。譬ば那化石谷の如き、鼻紙まれ手拭まれ、其溪水に浸すこと、三四十日に及ぶ時は、化して石に做るを見て知るべし。又那望夫石の如きは、萬葉集に

て新を知るを、學を好むといふべきのみ。こは是後の話也。却說犬江親兵衛は、この日義成主に、政木狐の叓の顚末を、箇樣〳〵。と告稟せば、又政木孝嗣も、狐龍の化石に做りて、金光寺の門前に天降りしを、寺内に埋めし事さへ聞え上るに、義成連りに笑局に入りて、餘談盡せず見え給ふ。この段は猶長やかなれば、這勝囘も上中下に奮て、又下囘に解分るを聽ねかし。

て、闘戰闌ならん時、渡して城の後より稠入らば、防ぎがたくや候はん。といふをうち聞犬塚犬江は、愕然と面を注して、臣等も曩に、那城内に在りしかど、其義にこゝろ屬ざりき。然るを大全が見出して、稟上るこそ幸なりけれ。といへは義成主點頭て、好々我こゝろ得たり。祕よく〳〵。と推禁めて、其後國府臺の城の頭人眞間井秋季、繼橋喬梁に、手書を賜りて、悄地に其義を戒め給ふ。其書の末に

遠くともむかへば隱れなき敵の見えぬうしろに用心をせよ

とありしかば、秋季喬梁謹承て、城の後に由斷せず、戍を固くしたりしに、是よりの後數世を累て、里見義弘の時に至りて、北條氏と、國府臺の闘戰に、敵那城の後の岐川に、鸛の降たるを見出して、淺瀨なるを悟りしかば、一隊は急に城を攻、一隊は悄地に後なる、淺瀨を渡し塀を破りて、短兵急に攻入りければ、里見の士卒得勝ずして、竟に落城したりといふ。蓋義弘は、武勇餘あれども、文學に疎ければ、先祖の遺訓を知ずやありけん、惜むべき事ならずや。今國府臺の城迹を見るに、那岐川は、橫八九間もあるべき、深水にて、鸛の脚の立べくもあらず。今の如くならんには、敵の輙く渡しがたからんに、當時は實に淺沼なるに、暴河の水を入れて、川の如くに見せたるなるべし。畊田鋤れて海となる、古今の變革疑ふべからず。故を溫

時遺なく還して、雜費の資助にしけり。又犬山道節が、二親と異母の女弟濱路の墓を、安房の延命寺に建るに及びて、戍孝又其資助になること尠からず。濱路の墓ば、犬塚が建べかりしを、道節は、圓塚山にて、濱路の横死の折に環會て、且其寃家、綱乾左母二郎を撃果し、又濱路の亡骸を、火葬しける因緣あり。爰是始ありて、終なくばあるべからずとて、強て施主になりたる也。是等は上に略して、こゝに詳にす。看官前後を併見るべし。却說政木孝嗣は、大田木へ歸城の後、稻村の城へ參上りて、歸府を告奉るに、犬塚犬江犬村の三犬士も、旣に出仕してありしかば、孝嗣は親兵衛に、狐龍化石の事の趣を、云々と告知らするに、親兵衛自餘の二犬士も、其奇に驚くまでに、靈物の終あるを、倶に感じあへりける。恁而件の三犬士は、義成主に、政木孝嗣が、國中を檢歷し果て、謝恩の爲に參上りしよしを、告まつりしかば、義成則孝嗣を召よせて、旅中の事を問給ふに、件の三犬士も侍りたり。當下義成主は、孝嗣を近く侍らせて、汝經歷の間、我封内の要害は、皆檢しつらん。意見もあらば聞まほし。と仰に孝嗣額を衝て、然ン候。御要害皆堅固にて、稟上べき事も候はず、但し國府臺の一城は、前は暴河にて、後も岐川なれば大敵をも防ぐに足れり。然けれども、後の川は淺瀨にて、其實は沼也。曩に臣等、那里に在りし日、件の川に、鵠の降て、求食を見たり。敵倘其淺沼なるを知り

の日を累て、上總を遺なく檢果しかば、下總へ趣きて、東西と經歷しつ、遂に武藏へ立踰て、二親の墓詣せし事などは、既に前回に具なれば、言削て寫さず。看官前後を照して見るべし。恁而政木孝嗣は、この年九月の下澣に屆りて、雜色村までかへり來つ、軈て金光寺へ立よりて、曩に住持に憑みたる、狐龍の塚を閲するに、廣常の五輪石塔婆を去ると、五十歩許にして、件の化石を埋めたる所あり。塚の高さ三尺許にて、上に一箇の窣都婆を建たり。孝嗣心歡びて、寺の玄關に呼戸ひつゝ、却役僧に謝義を舒て、退りて大田木へ歸城しつ、其後使を金光寺と、舘山の城へ遣して、住持と江田宗盈に、化石埋葬の雜費を還しつ、又金光寺へは、米錢さへ布施して、歡びの心を盡ける。然程に土人等其塚を見て奇特を稱て、訛りて狐塚と喚做しゝかば、金光寺の山號なる、古塚山の字を易て、狐塚山とぞ唱ける。按ずるに、房總志料上總部、雜色村の條下に云、古江の金光寺に狐塚あり、今は其所知れず。是に因て金光寺の山號を、古塚山といひしを、後に狐字を嫌ひて、醫王山と號すといへり。又廣常の石塔婆の苔蘚の、瘧疾を治することなども、同書に載たるを借用す。看官作者の用意を知るべし。閒話休題。是年八犬士も、婚姻の後、義成主に請まつりて、各故鄕に赴きて、二親及親族の墓詣せしことなどは、既に前回に寫しし如し。幵が中に、犬塚信濃戍孝は、曩に義兄弟等が貸たる金を、この

常に樂ふ所は只是のみ、何ぞ裨益なしといふや。然れども陽春白雪は調高かり。恐らく俚耳に入りがたからん、と思ふは什麽と理を推て、言詳に辨ずれば、信隆は阿とばかりに、一霎時感嘆の聲を得たゝず、叉宗盈も通豐も、膝の找むを覺ぬまでに、耳を欹け心を澄して、正論々々。とぞ稱ける。姑且して信隆は、急に貌を更めて、孝嗣に謝していふやう、適愛たき和殿の英才、今の世には多く得がたし。里見殿の盛德なる、八犬士さへ和殿さへ、王佐の才ある賢者等を、得給ひぬるこそ幸なれ。我聞所をもていはゞ、山林房八と、和殿を犬士の外にせしは、造化の小兒の手脫落歟、然ずは是も天命ならん。惜むべし〳〵。と譽るを孝嗣應はせで、庭の樹立を見かへりて、日景は既に斜になりぬ。所要は夙く果たるに、鈍や晤譚に時を移しぬ、退りて路をいそぐべし。といへば信隆諸なひて、咱等も潛行なるに、虛々として居べきにあらず、卒供侶にと身を起せば、宗盈と通豐は、留難つゝ目送る程に、役僧も亦出て來て、且管待の疎略を陪話て、玄關まで送りける。恁而武田信隆は、伴當等をいそがし立て、別れて廳南へかへりゆく程に、孝嗣も亦伴當を從へて、這邊なる村里を、漏さず巡歷したりける。爾程に武田信隆は、其通路思惟るに、里見君臣の英武才幹、且政木孝嗣の、妙論理辯に感服して、及びがたしと心に恥て、是より機變を行ふことなく、生涯里見に從ひける。然ば政木孝嗣は、又幾

後竟に燃ずなりぬ。有恁れば其火井は、昭烈の爲には祥瑞なれども、後帝には、凶兆也。又曹操曹丕は漢賊也。曹丕が漢の獻帝に逼りて、其位を簒ふに當りて、魏王宮前なる露井より、黄龍出て天に升りぬ。魏は土德にして、色は黄を貴べり。則是曹丕が漢帝の禪を受て、大位に即べき祥なりとて、年號を黄初とす。しかれども其實は簒奪也、何の受禪か是あらん。譬ば曹丕の如きは、人を結梱て其衣裳を剝拿りて、我這人より、衣裳を惠れたりといふが如し。然を天神地祇順逆の理を知らで、只其勢利に、媚るの故に、以祥瑞を降さんや。縦其事ありとても、偶然にして嘉瑞にあらず。然ばにや、順逆邪正差あれども、魏も亦蜀漢に後るゝ者僅に一稔、竟に司馬氏に簒奪せられて、こも亦四十餘年にして、國既に亡びにけり。是に由てこれを觀れば、成敗をもて人を論ずる者は、天命を知らざる也。又德を脩ずして、祥瑞を頼みて、みづから允さば、世の胡盧にならんのみ。最憚りあることながら、老舘の見給ひたる、那白龍の祥瑞も、亦當舘の御善政も、城を屠り地を略して、我封内を廣くすべき爲にあらず、民の父母たる心をもて、國安かれと思召すのみ。人分を知ざれば、貪て飽ことなし。貪て飽ことなければ、蓄害踵を旋すべからず。非如我君、房總兩國の守にして、地を增給ふ事あらずとも、良將の御名後世に流芳して、御子孫長久ならんには、仁義善政の大益あり。仁君賢者の愼懋めて、

舘は、龍の腹をのみ見給ひて、龍の頭を見給はず。因て思ふに、老侯御父子は、仁義賢明の君なれども、徳を中國に施すことを得ず、反て八犬士の如き、賢佐腹心の良臣を、得給ふべき祥にやありけん。又那時隨從の兩家臣、杉倉氏元堀内貞行が、只其龍の尾をのみ見たるは、子孫末世に至るまで、當家の家宰たりぬべき、祥なりけるか、いまだ知ず。然ば君賢にして、臣も亦賢なれども、只褊小の國を有ちて、兵馬連帥の大權を執るに由なき者和漢に多かり、是則天也命也。請唐山漢末三國の成敗をもて、是に譬ん。那昭烈（劉備字玄德）は賢君也。當時十八諸侯ありといへども、其仁義忠信によく及ぶ者なし。且是に相たる者、諸葛亮、龐統、法松費禕、蔣琬、馬良、姜維の如き、賢佐忠誠の衆臣あり。又五虎の勇臣、關羽張飛、趙雲馬超黄忠の如き者尠からず。しかれども、吳魏を討夷げて、漢室を再興することを得ず、巴蜀褊小の地を有ちて、僅に帝號を稱するのみ、是則天也命也、人力の及ぶべきにあらず。後帝劉禪不肖にして、佞人黄皓を愛ししかば、父子纔に二世、四十餘年にして、國亡びにけり。初昭烈の蜀にうち入りし時、成都に火井あり。是よりして、其火漸に壯になりぬ。漢は火徳也、色は赤を貴べり。是昭烈の漢に續て、大位に卽べき祥也といへり。然ばにや其帝號を稱するに及びて、件の火井いよ／＼燃て間斷なし。旣而昭烈帝は崩じ、諸葛武侯も薨じてより、其火漸に衰て、

猶疑ひ思ふよしあり。嘗聞義實老侯少かりし時、結城落城の日に死を免れて、いかで安房へ渡さんとて、相摸なる三浦の海邊に、船を徵め給ふ程に、白龍俄然と海より起りて、天に登るを見給ひにきといへり。龍は鱗虫の君にして、其德を王者に比す。源氏は素より金德にて、色は白を貴べり。然ばにや、義實主、安房に造りて幾程もなく、神餘が爲に義旗を揚て、逆臣山下定包を、誅戮せしより、滿呂安西さへ伏誅して、安房四郡を併呑し、更に上總を討從へて、をさ〳〵賢君の聞えあり。其子義成主又出藍の譽れ高く、遂に上總人の從ざるを威服して、下總半國を討靡け、善政施さゞる所なければ、國民皆堯舜の思ひを倣せり。其仁義良善の、君たるを思ふに、今の諸侯多しといへども、儔あるべくもあらず。剩又、八犬士又和殿の如き、英武賢才の良臣多かり。且白龍の祥瑞ありしを思へば、竟に足利氏に代りて、天下の連帥たるべき者は、必里見氏なるべきに、然はなくて、東南の一隅、褊小なる、安房上總を領するのみ、下總半國の外に、又地を增事を得ず。去歲の冬、兩管領と戰克て、偶攻捕たる敵の三四箇城も、和睦の後は返し與へて、鄙語にいふ濟ても三百、勞して功なきはいかにぞや。然ば祥瑞も負みがたく、仁義も亦益なし。賢兄必辨あらん、爭何ぞや。と論ずれば、孝嗣莞爾とうち笑て、否、我思ふよしはしからず。那白龍の事はしも、孝嗣も亦傳聞ながら、那時瀧田の老

那奈須野なる毒石は、砒霜礜石の類なるを、附會していふならん。非如其事ありとても、玉藻如きは邪物にて、至る所人に孽す。政木狐は靈狐也、勤所世に功あり。廣常這理を知らざらんや。那人倘靈ありとても、決て忌嫌ふべからず。長老こゝろ安かるべし。と解れて住持は頭を撫て、拙僧輇才にして失言せり。いかで海容あれかし。と勸解れば宗盈執合して、政木主說得て妙也。長老も亦出家の本性、愆を飾らぬは、人の及ばぬ所にて、共に感心の外候はず。那化石を牽入れて、埋るまでの夫役等は、卑職都て衆莊客に、課て事よく計ひてん。といふに住持も孝嗣も、相歡びつゝ是を謝して、要談既に果しかば、住持は辭して退りけり。登時又役僧は、沙彌に課て、茶を薦め、果子を薦めなどする程に、信隆は孝嗣の才を感じて且いふやう、大全主は妙年なれども、玉藻狐の事などは、論辯老儒も及ぶべからず。就て學問せまほしきよしあり。狐龍の事は、何等の書に載たるを知らず、必出所あるならん、聞まく欲しう候。と問ば孝嗣、然ばとよ、狐龍の事は、曩に犬江親兵衛が、既に見る所ありて、奇事記に出たりといひにき。今按ずるに、淵鑑類函、狐部にも載たれど、空言ならんと思ひしに、疑ひ解て候也。といふに信隆點頭て、現に書は見るべき者也かし。今博識の教なくば、誰か狐龍の出所を知らん。歡び是に優者なし。然ども、狐龍升天の事に就て、

又いふやう、這奇事は我のみならず、當時犬江親兵衛も、目撃したる所にて、狐龍の先言果して違はず、一大奇事に候はずや。といふこと詳なりければ、主客一齊駭嘆じて、異聞なりとぞ稱ける。當下孝嗣又いふやう、右に就て咱等情願あり、いかで件の狐龍の化石を、當寺内に埋葬して、塚を築まく欲す。雜費は大田木へ歸城の後、必調進致すべし。といふを住持はうち聞て、其義こゝろえ候へども、當寺には上總介廣常の、五輪石塔婆あり、在昔近衛院天皇の御時に、妖狐變じて、宮嬪玉藻前に化て、帝を惱し奉りしかば、詔して天文博士、加茂泰親に禳せ給へば、妖狐竟に勝ずして、走りて下野なる、奈須野に到て躱れたり。於是三浦介義明、上總介廣常、千葉介常胤等に詔して、奈須野に到て狐を獵しむ。件の妖狐は廣常が、射箭に竟に斃されて、化して一箇の毒石に做りぬ。世にいふ殺生石是也。彼と此とは異なれども、其政木狐とやらんの、化して石に做りたるを、當寺に埋葬致なば、是廣常の忌む所、那靈安からずやあるべからん。這義怎麽と談ずるを、孝嗣は聞あへず、長老の言錯へり。那九尾の妖狐、玉藻前の小說は、近曾明舶の齎したる、封神演義に倣ひたる、稗官者流の新作也、素よりあるべき事ならず。然を昨今世に見れたる、下學集に是を載、又能樂の謠曲にも、殺生石と題目して、作設たりければ、奇に走る今の世俗、いひもて傳へて故事と思へり。

孝嗣は、武田信隆江田宗盈、畑通豊等に案内をせられて、先廣常の墓石を見るに、果して山脚なる、沙洞の内に在り。現に蕞小なる、無銘の五輪堂なれども、半分は亡て、高さ二尺に足らず、只青苔に裹れて、それかとも見えざれば、孝嗣は憮然として、一霎時謁して且いふやう、在昔上總介廣常は、當國の介にして、二萬騎の大將なりき。しかれども身は誅せられ、國亡びて、子孫斷絶したるより、今に至りて觀べき者は、只半體の五輪堂のみ、抑亦悲しからずや。世に相將の威權壯なるときは、車馬門前に滿ざる日なく、倘其職を去るときは、殿庭に雀羅を張べし。榮枯得失の理り、誰かは竟に免るべき。といへば信隆、宗盈通豊皆共侶に嗟嘆しつ、打連立て玄關に赴けば、役僧早く出迎へて、軈て客殿に請待す。孝嗣則正客たり。宗盈信隆は左右に打、通豊は下座にぞ侍りける。恁而看茶の禮畢りて、住持出て對面す。當下江田宗盈は、住持に孝嗣を引合して、化石の事を説示せば、孝嗣則住持に向ひて、方僅當寺の門前に、天降りし狐龍の化石は、咱等と由縁ある白狐の、終焉を示せし也。其故は箇樣々々。と政木狐の事の顚末、他は孝嗣の母に受たる、舊恩を報ん爲に、去々歳の夏、前面の岡にて、妖術をもて孝嗣の、寃屈の死刑を救ひし事、當日他は功課滿て、狐龍に變て、不忍の池より升天しぬる折、後三稔を歷たらんには、當國にて其終を、見るよしあらん、といひしことまで、説示して


江田宗みつ


金光寺の門前に狐龍正覚を示す
のぶたか
たくつぐ

白狐既に千歳を歴て、其功徳多かる時は、化して龍になる物あり、是を狐龍と喚做したり。こは傳聞の事ならず、去々歳の夏前面の岡にて、我必死を救ひたる、政木狐即是也。這政木狐の事はしも、說まくするに言多ければ、爾には盡しがたかりき。といふ間に兩個の武士も共侶に、巽みて孝嗣にうち向ひて、こは政木主、初て拜面仕る。卑職等は、舘山の城の頭人、江田九一郎宗盈、畑夏作通豐にて候也。近曾舘の仰によりて、廳南より移轉して、舘山に在番仕り候へば、這頭なる、神社佛閣の、古記錄什物を展檢の爲に、今日しも當寺へ來にけるに、料らず武田主に來會せられ、今又和殿に對面の、歡びは只是のみならず、耳新しき狐龍の化石を、見聞幸ひ多かりき。といへば孝嗣禮を返して、豫て聞知る江田畑兩生、思ひがけなき對面は、よき折からに候也。却這化石の事に就て、當寺の住持に面談して、請まくほしう思ふよしあり、いかで詞を添給ひね。と憑ば宗盈異義もなく、开はこゝろ得候也。誘給へ客殿にて、且猶餘談を承らん。武田主も共侶に。と誘引立れば、畑通豐は、先に立つゝ案內をす。然ば政木孝嗣は、信隆宗盈と共侶に、自他の作當を相從へて、引れて寺內へ入る程に、沙彌道人は側聞して、疾方丈へ告んとて、走りて先へ退りける、迹には近所の莊客們、天より墜たる石を見んとて、走り聚ふ者堵の如し。又寺よりも年少き生僧等の、立出て觀も多かるべし。爾程に政木

墜たる化石と孝嗣主僕の、立在たるを見出して、胆を潰しつ指さして、那人達は震れもせで、よくこそ堪たれ、最奇也。といふ間に、一個の武士は、孝嗣を得と見て、幵は政木主ならざるや。武田信隆にて候。といはれて又孝嗣も、急に其方を見かへりて、然也いぬる比稲村にて、初て對面致たる、武田主恙なきや。聽南より路近からぬ、當寺へ何等の所用ありて、みづから詣給ひたる。と問れて信隆、然ン候。咱等は前月瘧疾にて、醫療卽効なかりしかば、俗說に從ふて、當寺へ使を遣しつゝ、上總介廣常の、五輪石塔婆の苔を採せて、そを腹用し候ひしに、疾病立地に瘥り果しかば、感謝に堪ず悄々地に、賽をしぬる也。和殿は又何等の所用ありて、這頭を過り給ひぬる。折から今の暴雨天變、恐るべき這大石に、撲れ給はざりけるは、是高運の致す所、神明佛陀の加護ならん。寔に賀すべし〳〵。と祝せば孝嗣禮を返して、原來廣常の墓石の苔は、效驗虛談にあらざりけり。洒家は新參にて、いまだ二總の地理を知ねば、舘に願ひ奉りて、隈なく履歷しぬる隨に、當寺に廣常の、五輪塔ありと聞知りて、見ばやと思ひて來にけるに、暴雨に路を去あへず、剩化石の天降るに逢ぬ。在昔唐山姬周の時、宋に石墜る者云云と、春秋左傳に見えたり。或は又星墜て、石になるといふ者あれども、是はそれには同じからず。見給へ狐龍の化石也。といふを信隆訝りて、狐龍は抑何なる物ぞ。と問ば孝嗣、然ばとよ。

忌を犯せしかば、頼朝卿に疑れて、罪なくて誅せられにき。其は壽永二年の事なるを、載て東鑑に詳也。先や我も立よりて、其石塔婆を見てゆかん。と應つゝ歩を遽めて、稍金光寺の、門前投て來にける程に、天猛可に結陰りて、疾雷光勁風に、雨さへ颯と降沃ぎて、乾坤忽地野干玉の、烏夜になりぬるほどしもあらず、數道の金光四下を射て、天より撞と墜る物あり。其音大地も頽るゝ如く、人堪べくもあらざれば、孝嗣主僕は吁嗟とばかり、走りて老たる松の下に、身を潛しつゝ忙然と、聚立てありける程に、姑且して雨歇天霽て、日光隈なく刺す隨に、孝嗣主僕は睛を定めて、目今天より墜たるは、何なるらんとて、俱に見るに、正に是最大きなる石にぞありける。譬ば其形狀、宛蟠る龍の像く、頭は虬に似て虬にあらず、狐にも似たる樣にて、尾とおぼしき者九つありて、縱横約三尺計、紛ふべくもあらぬ白石なれば、伴當訝る其が中に、孝嗣はつら〱、と見つゝ吁嗟に思ふやう、原來這狐龍の化石は、政木狐が、約束違はず、他は旣に數盡て、終をこゝに示せしならん。奇也々々。とばかりに、只顧感嘆しぬる折から、這寺の門内より、沙彌道人と共侶に、立出る三個の武士あり。一個は年四十許、兩個は三十前後にて孰も骨相鄙ならず、一對ならねど各々、身には葛の野袴に、裙裂の單外套を被て、大小の兩刀を帶たるが、伴當夥兵とおぼしき者、十四五名ぞ從ふたる。約莫この僧俗は、

既に大田木の城主たれども、いまだ房總の地理を知らねば、この年の夏義成主に願ひ稟して、國中を偏歴す。素より微行なれば、伴當などは最略して、士卒六七名に過ざるべし。身も亦騎馬ならずして、歩よりゆくを便利とす。先大田木根小屋の城より遠からぬ、夷灊天羽の二郡より創んとて、背善村硯の里、雜色村を過る程に、伴當の中に、鄕導の老兵ありて、孝嗣に告るやう、方僅過せ給ひし背善村、(又布施村に作る)は在昔上總介廣常の、住し所にて舘の迹あり。然るを今は土人も知る者稀也。又こゝより程遠からぬ、舘山の城の四下は、昔者廣常の山莊なりければ、今も舘山の名貽りたり。然ば安房なる舘山と同じからず。是等は見ぬ世の事なれば、正き照据も候はず。今現に硯に隣れる乙接村には、那神童、增松和子の實父、阿彌七叟の宿所あり。それよりも猶近かる、這雜色村の內中、字古江てふ地方に、醫王山金光寺と喚做したる一座の梵刹あり。こは台家にて、本尊は大日如來也。這金光寺に廣常の子息の墳墓あり。因て山號を古塚山とも喚做したり。這寺內なる山脚を穿ちて、洞の如くなる所に、故たる無銘の五輪石塔婆あり。土俗相傳て、上總介廣常の墓なりといへり。瘧疾を患る者、其石塔の苔蘚を削拿て、水に浸して飲時は卽功あり。瘥ざる者あることなしとて、折々其苔を採る者絕ず候。といふを孝嗣うち聞て、上總介廣常は、鎌倉創業の功臣なれども、功に誇りて忌憚らず、屢嫌

みにして、いまだ臥簟を倶にせず。悄地に是に告ていふやう、見らるゝ如く我身は大人備て、心術こそ穉からね、年倘十五にだも足らざるに、夙く色情を動すべからず。倘今男女の交を做さば、曩に八百比丘尼狸の妖術にて、立し浮名も亦さらに、人の疑ひを遺すべし。この故に、我年十七に至るまで、峰上隔つる山鷄の、雌雄の宿に傚まくす。この義を饒し給へかし。と又他事もなく解示すを、靜峰姫うち聞て、宣ふ趣理りに侍り。關雎は樂て、淫せずとか聞にき。夫婦は一世の恩愛なるに、なでふ添臥をいそぐべき。左にも右にも御身の隨意、行ひ給へ。と應つゝ、是よりの後六稔あまり、枕を並て睡ることなけれど、然ばとて疎からず。生平に良人を敬ひて、反て意中に親みあり。恁而親兵衛が年十七といふ春の比より、夫婦始めて衾を累て、比目連理の枕を並ぶる、遊仙窟中の夢を結びしを、人後に聞知りて、感嘆せざるはなかりける。こは是後の話也。然ば犬士等が婚姻の後、政木大全孝嗣も、亦君命によりて、犬阪犬川媒妁にて、眞利谷柳丸の女兒葛羅媛と、婚姻の歡びあり。上總なる椎津の城より、嬿女同國夷灊郡、大田木の城へ迎入れられて、偕老同穴の契淺からず。又照文の女兒山鳩は、年十二の比より、吾嬬前に、給事してありしを、この時十八歳にて、身の暇を給はりて、養嗣紀二六の十二郎照章に妻せけり。皆是君恩の厚きによれば、各其歡び知るべし。爾程に政木孝嗣は、

第百八十勝回上

孤龍化石を貽して、大蟬脱す
八行璧を反して八行十世に傳ふ
信隆宗盈古江に孝嗣に逢ふ（此附目も附錄目による）
政木大全論辯和漢を引く

復說、武田信隆が、聽南の城に還任して、本領安堵せしのみならず、千代丸圖書助豐俊も、戰功によりて罪を許され、其舊領なる、上總國榎本の城へ還任せしより、宅眷老黨いへばさら也、安房上總に躱居たる、千代丸の殘兵等、早く是を聞知りて、且驚き且歡び勇みて、日ならず聚ひ來にければ、城内士卒に匱からず、家門繁昌したりける。恁而次の年の春二月、義成主の八箇の小姐子、八犬士に遣嫁の事あり。媒妁兒東辰相荒川清澄、這他老黨有司奉りて、男女の作當を點配す。納釆調度送りの式などは、當時よめむかへといふ書に詳にて、足利家の時俗の禮を粗知るに足れば、又いふべくもあらず。この時犬士等の新城は、いまだ落成せざるもあれども、居宅は都て造り出せしかば、各其所を得て、新嫁をぞ迎へける。洞房花燭の歡會は、賢も不肖も異なる事なかるべし。亓が中に犬江親兵衛のみ、當晩靜峰姬と、閨衣合巹の

く欲しと願ひしかば、畢が儘瀧田の城に在せて、蟇崎照文の隊に隷られけり。恁而犬阪胤智は、武田信隆に相倶して、廳南の城に來つ、城の頭人江田宗盈畑道豐等に、君命を傳へ示して、城渡のことを課するに、他等も其こゝろ得あれば、事立地に整ひて、信隆と交代す。又宗盈道豐は、這回の相計宜しければとて、義成下知して、他等をば、犬江親兵衛が返しまつりし、上總國舘山の、城の頭人に做し給ふ。這義も胤智傳達したれば、宗盈道豐は、宅眷幷に士卒四五百名を將て、徑に舘山に赴きて、那里の番士と交代して、生涯其城を守りけり。又犬阪胤智は、廳南の村長莊客等に、義成主の下知を傳て、城主信隆と和睦せしめ、且隊兵二百名を留めて、稻村へかへり去りぬ。然ば信隆の宅眷殘兵の、遠近に潛居たる者、主の還任を傳聞て、皆歡びてかへり來にければ、稍大勢になる隨に、里見の士卒二百名をば、武田の老黨を相添て、稻村へぞ返しける。是よりの後信隆は、よく其城地を理しかば、久しく廳南を有ちける。按ずるに房總志料上總の部に、里見義弘の時、廳南の城主に、武田信榮といふ者あり、甲斐の武田の庶流也。この信榮は、里見に從はず、獨立也といへり。意ふに件の信榮は、信隆より、二三世の孫なるべし。但信榮の事、いまだ詳ならざれども、作者前後に借用す、看官是等の用意を知るべし。

伏せり。然ばとて賞罰明ならざれば、後の驕臣を懲しがたかり。信隆をば、印東小六荒川太郎一郎に預けてん。城内なる一室に、五十日閉籠措べし。恪ても怨むこゝろなくば、我對面して舊地を返さん。下野と道節は、この義を小六太郎一郎に傳ふべし。と掟て江田宗盈には、下知狀を賜りつ、畑夏作を勞ひて、廳南へ還し給ひけり。爾程に信隆は、明相清英管りて、籠居五十日に及ぶものから、聊も怨言なく、只恩免を請ふと聞えしかば、義成主憐て、這年の冬十月に、武田信隆を召出して、正廳にて對面あり。八犬士四家老、幷に政木大全、印東小六荒川太郎一郎等ぞ侍りける。登時義成主仰出さるゝやう、武田信隆機變をもて、獨立の罪ありといへども、竟にみづから新にして、眞實歸降しぬる上は、舊罪を赦免して、舊領廳南の城地を返し與ふ。今より機變を行ふことなく、只善政を旨とせよ。縱機變をもて、恣に城に入るとも、民從ずは誰と倶に守らん。この義をよく〳〵思ふべし。と叮寧に誡め給へば、信隆は頭を敲きて、承服せずといふことなし。義成又仰するやう、信隆士卒減少して、五六十名に過ずといへば、當城の士卒を假して、犬阪下野に送らせん。夙く還任致すべしとて、身の暇を賜りけり。然ば犬阪胤智は、士卒三四百名を將て、信隆を送りつゝ、廳南へ赴折、義成主は、保質一條丹四郎信有をも、信隆に從はせて、返し給ふべかりしに、他は里見の德を慕ふて、仕ま

仆れしのみ、是も命に恙なければ、宗盈急に醫師を招きて、甲乙倶に療治せしむるに、五六日を經ば安かるべしといへり。是によりて莊客們をば、金瘡兒と倶に還し遣りつ、信隆主僕をそが儘に、城内に扶入るゝに、信隆先非を後悔して、宗盈に勸解るやう、咱等洲崎の陣に參らずして、當城にうち入りしは、兩岐武士にならじとて也。故何とならば、定正主の隊を離れて、裏伐せざるは是義也。倘欺きて裏伐をせば、那は又惡の惡たる者にて、兇賊に等しかるべし。然ば裏伐をせざれども、當家の御方に參り上は、功なしとすべからず。又里見殿に請稟さで、當城にうち入りしは、曩に賜りし照書あり、且這地は我父祖三世の舊領なれば、民皆舊恩を忘ることなく、必や信隆に、從ふならんと思ひしに、思ひきや莊客們は、里見殿の善政を、慕ふて信隆を德とせず、反て事を惹出して、這辱めにあひけるは、人を知ず、己を知ざる、信隆が不覺にて、後悔臍を噬るのみ。いかで稲村へ推參して、是等の罪を謝せまく欲す。この義を執達あれかし。と喞言がましくうち陪話て、則神文の誓書一通をまゐらせて、赤心を示しゝかば、宗盈やうやく受容れて、臣畑道豐に、其義を課て、士卒百五十名と倶に、信隆を送りて參著仕りぬ。と言詳に告稟せば、義成是をうち聞て、信隆の誓書を、道節に讀せ給ふに、歸降の文分明也。義成憶ず含笑て、然ばこそいはざる事歟、信隆竟に敗を取て、今は眞實に歸

二の城へ、盾籠るべしといひしを、村長等は承引ず、詞ひとしく辭ふやう、當所は里見殿の御領になりしより、御仁政を承まつりて、御恩の下に候に、御身に從へといふ、御下知もなきに、なでふ然る僻事を仕らん。思ひもかけぬ事なりとて、立去まく欲しゝを、信隆急に喚禁めて、諭ども听ざれば、竟に怒に得堪ずして、刀を晃りと拔く手も見せず、一人を礑と斫仆せば、大家驚き且怒て、狼藉者あり〳〵、拯へ〳〵。と叫ぶにぞ、四下近き莊客們、手手に連枷を携て、百十數名走り來つ、信隆主僕を捕稠て、面も振せず撃惱せば、信隆の伴當も、刀をもつて受流し、打拂つゝ戰へども、多勢なれば物ともせず。剩加勢の莊客們、彌が上に聚合來て、只直打に撃しかば、信隆の伴當は、一箇も遺なく撃仆され、信隆も防難て、既に必死に見えたる折から、城の頭人江田盈宗、馬を驀しつ馳出て、喚はりつ騎入〳〵、莊客們を禁る程に、宗盈の隊の兵も、赶つゝ城より走り來て、倶に信隆を救ひけり。當下江田宗盈は、村長故老等を召よせて、事の起原を尋ぬるに、信隆が理不盡なる、然まで罪なき莊客を、矢庭に手撃にせし故に、壯佼兒毎が堪難て、この趣舍に候といふ、言分明なりしかば、宗盈は村長們が訟に及ずして、苟且にも舊領主と、鬪諍に及びしを、叱りて痍負を勦らするに、斫られたる莊客は、窮所にあらねば死に至らず。又信隆の伴當は、撲傷なれば手を折かれ、脚を折かれて

隆奸詐也といへども、他も一箇の豪傑なれば、道理を知ぬ者にあらず。他が出沒恣にて、廳南にうち入りしは、稟解よしあるならん。然ば舘の御計ひ、寬仁大度に優ことあらじ。といふ詞いまだ訖ず、一箇の青侍、廳の檐廊へ來て告るやう、廳南なる江田九一郎宗盈が、武田信隆の事に就て、稟上べき義ありとて、第二の頭人畑夏作が、信隆を將て參上りぬ。といふを義成主うち聞て、世の常言、噂をすれば、影刺とはこの事ならん、先夏作を召べし。と仰に青侍こゝろ得て、遽しく退りしかば、八犬士兩家老は、席を正して俟程に、畑夏作通豐は、行裝の儘にして、青侍に引れ來て、義成主に拜見す。登時義成主は、犬阪犬山二犬をもて先其故を問せ給ふに、夏作則稟すやう、武田信隆が、非理非法の爲體は、曩に訴奉りし如し。爾るに信隆が隊兵は、甲斐の武田の士卒なれば、他が威勢踰りて、戰粟さへに竭るを見て久しく留んことを欲せず。日毎に十人二十人、病に假托けなどしつゝ、甲斐へかへり去しかば、殘は信隆が從來なる、隊の兵五六十人に做りにけり。信隆是にこゝろ憂ひて、いかでこの地の莊客們に、舊恩を説示して、我軍役に充んと思ひて、有一日小鷹獵に假托けて、士卒十名許を將て、悄地に城外へ立出て、地方の村長故老等を、幾名か召よせて且いふやう、若們は我舊領の民なれば、今より我に從ふて、二季の調貢はさら也、壯なる兵毎は、我を資て第

悔あらん。この義を思ひ給はずや。といはれて宗盈爭難て、則急遞脚の使者をもて、信隆の非理非法を、舘に訴奉りて、御旨を請けるに、舘は驚き給ふことなく、其使者に仰するやう、現に武田信隆は、智計あるに似たれども、其性奸慳にして獨立まく欲す。こゝをもて當城に來て、恩を謝せず、徑に舊城にうち入て、蚤く宗盈等に代らまくす。他が理不盡勿論なれども、今急に撃果さば、人の不仁に倣ふに似たり。非如舊城廳南なる、二の丸に籠るとも、僅に三四百の隊兵をもて、何事をか做得べき。廳南の民他が舊恩を德とせで、義成が民たらまく欲さば、信隆竟に身を措難て、悔て罪を謝する日あらん。他が敗を取折まで、うち捨て置べしとて、則下知狀を宗盈等に賜りて、其使者を返し給ひけり。是よりの後信隆は、二の城に在る所の、戰粟を拿用ひて、己が自恣せざる事なければ、江田宗盈憤忿に得堪ず、屢使を參らせて、撃果さんとて、請稟しゝかど、舘はなほも許給はず、只うち捨て閣べしとて、殊なる御下知なき故に、未だ和殿等には仰渡されず、保質一條丹四郎をも、丌が儘瀧田に閣るゝのみ。と告るを道節聞あへず、そも亦舘の御仁恕ながら、信隆が奸詐なる、曩には舘を欺きまつりて、反て寄隊を裏伐せず、推て廳南に赴きて、舊地を横領せまく欲する、其罪いよ〱輕からず。そをしも誅伐做されずは、猶叛く者多かるべし。と議するを胤智推禁めて、犬山丌は違へり、信

と請稟しつ、保質一條丹四郎信有をまゐらせて、舊罪赦免を願ひしかば、舘其義を御許容ありて、當日戰功愆ずは、則他が願ひの隨意、其舊領なる、廳南の城地を返し給ふべしとて、照文一通を拿せ給ひき。這義は犬阪犬山の、奉行ひし所なれば、いはでもしるき事ながら、端倪は且如のごとし。爾るに信隆は、十二月八日の鬪戰に、定正主に從ひながら、洲崎へはうち向はず、徑に艦を横行て、上總の浦邊に推渡し、悄地に廳南の城に造りて、城の頭人江田九一郎宗盈に告るやう、咱等は里見殿と約束あるにより、則寄隊を欺き離れて、目今歸著致したり。當所は里見殿の返し給ひける、我舊城で候へば、速に開渡し候へとて、挑みしを、宗盈听かず、然ばとよ、舘の御照書ありとも、未當所へ御下知なきに、なでふ當城を遞與さんや。其義ならば且退きて、後の御沙汰を俟候へ。といふを信隆聞あへず、既に照書ある上は、又今さらに何をか俟ん。疑しくば稻村へ夙く使を走らしね。今速に遞與がたくば、咱は我二の城に、うち入てん。と答も果ず三七二十一に、隊兵三百四五十名を、薦めて二の城へ稠入りつゝ、那里を守る老兵を、一人も漏さず追出して、門戸を閉て執合ねば、江田宗盈怒に得堪ず、急に士卒を推薦めて、擊果さんとて敦圍きしを、第二の頭人畑夏作、遽しく諫めていふやう、信隆傍若無人なれども、舘の御書を照据にしぬるに、其義を訴まつらずして、同士擊をせば、後

且甲斐峯の奇事あり。竟に我戌孝と、婚姻自然に定りしは、造化の小兒の配劑歟、一大奇事に候ひき。といへば禮儀も倶にいふやう、臣等とても雛衣が、腹を劈き玉を蜚て、親の讐たる妖怪を、仆をせし他が功を思へば、復娶るべくもあらざりしに、雛衣鄙木の稱呼似たるは、實に舘の御諭にて、斷し那緒を續るゝ者歟。といふを義任推禁めて、卒先舘に拜見して、君恩を謝し奉るべし。といふに大家諸なひて、辰相清澄共侶に、義成主の身邊へ參りて、許嫁の恩偶を拜しまつりしかば、義成主笑しげに、各天緣既に熟して、我女兒每對を得たれば、歡び是に優すことなし。就て嚮にもいひけらし、眞利谷柳丸の女兒、葛羅媛の婚姻の事、我意ふに、政木大全に妻せなば、才貌家門相應しからん。この義は明春下野長狹等媒妁して、宜く相計得させよかし。と仰に犬士等皆歡びて、孝嗣も亦新參にて、勤功久しからざるに、今又恁る恩命を、他承り候はゞ、さこそ感悅仕らめ。といふに辰相清澄も、倶に祝頌したりける。

姑且して道節がいふやう、四境いよ〳〵理りて、君恩隈なく候に、只廳南の一條のみ、いまだ其後の御制度を承はらず。那義は什麼。と問稟せば、義成主點頭て、然ばとよ其事は、六郎兵庫こそよく知りたれ、先始より告ずや。と仰に辰相清澄は、阿と應つゝ忠與等に向ひて、各位も知如く、降人武田左京亮信隆は、去歲の十二月初旬、水路の寄隊に從ふて、裏伐すべし。

水の皮也。こゝをもて其字水に従ひ皮に従ふ。智も亦動かざれば用る所なし、是智者の水を楽む所以歟。又弟が悌順に帰や、悌は則兄に仕るの道なり。且悌順は、仁が外伯父なれども、反て悌玉を得たり。其八行に由時は、仁義の弟ならざることを得ず。この故に弟姫をもて妻とす。皆是名詮暗合あり、寔に不測の事ならずや。と其理を推て解き給へば、辰相清澄感服して、隠微発揮の御妙解にて、肇て解語仕りぬ。現に天縁の動きなき、自然の妙契を知るに足れり。と称て敬祝したりしかば、義成又課るやう、配偶既に定りぬれば、夙く納采の義を行ふべし。然ども犬士等は、いまだ其城に従らねば、是等の事にも不自由ならん。六郎兵庫相資て、東西皆質素に整へさせよ。と遺なくこゝろを得させ給へば、辰相清澄承りて、軈て退り出にける。然ば辰相清澄は、次の日犬士等が出仕の折、義成主の解給ひたる、名詮暗合の妙契と、納采進上すべしとある、仰を具に告知すれば、大家感ずる开が中に、胤智がいふやう、名義暗合の事はしも、昨宵臣等も宿所に還りて、不図思ひ得たりしかども、然までに深くは考果さず。寔に館の御宏才、感心の外候はずとて、其一二を説示せば、戍孝も倶にいふやう、故の濱路の事はしも、只結髪のみなるに、苦節を守りて命を惜まず。歹人左母二郎に殺されて、烈女の名をのみ遺しゝかば、我他し女子をば、娶らじとのみ思ひしに、恐ながら姫上も、亦他と同名にて、

照にとて老女に遞與ば、受戴きて退りけり。恁而八犬士は、當席を退きて、倶に宿所に罷るなるべし。又辰相淸澄は、軈て後室へ赴きて、義成主に見參して、姫上達の御配偶は、箇樣々々と聞え上て、寫しゝ一通を呈閲しぬれば、義成主含笑ながら、つら〳〵と是を見て、六郎兵庫は心も屬ずや。我女兒毎の婚嫺は、前よりして定まるに似たり。故何とならば、皆是名詮自性あり。譬ば靜峯が仁の妻たるは、語に所云仁は靜也、仁者は山を樂むとあるに庶し。然ども靜峯は十九歲にて、仁には九歲の姉也。何ぞ這年の長たるをもて、那年の殊に劣たるに合せしや、こも亦後に知るよしあらん。且城之戸が義任に於るや、古語に義を守ること城の如しといふに由あり。又鄙木が禮儀に於るや、其故妻の雛衣と文字こそ異なれ、唱は似たり。且鄙は犬村の村に對すべし。又竹野が忠與に於るや、忠は苦節に顯る、節は道節の節にて、卽竹節也、野は犬山の山に對すべし。又濱路は甲斐にありし時、戍孝の帮助を得て、且道節に那窮阨を拯れたり。矧又戍孝が、故の結髮の少女の名も、濱路とか聞にき。开は苦節に身を殺して、今又ここに濱路あり。これ再生にあらずして、他に代るとやいふべからん。又栞が信道に歸や、こも由あり、道の信を做す者は栞也。栞に据ざれば道に惑ふべし。又小波が胤智に歸や、こも亦語に所云智は動く、智者は水を樂むとあるに庶し。水の動く時は、波ならざるなし。波は則




其二
八小姐天縁良對を爭ぬる処
きのと姫





翠簾を隔て八犬士赤縄を援
のぶみち

えざるを憾とすべし。姑且して、給事の老女出て來て、二家老と八犬士に、今宵の壽祝を舒などして、却辰相淸澄に事の進退を相譚ふよしあり。其言果て退けば、翠簾の内に氣色して、絳に染做したる、八條の太緒を出されけり。辰相夙く是を見て、立て其緒の端を拿て、徐に曳よするに、長さ一丈二尺許あり。既に曳出し畢りて、八條を揃て席上に閣けば、八犬士等こゝろ得て、倶に徐に進みよりて、手に〳〵其緒の端を拿て、各左手に是を結びつゝ、引けば聊手敵あり。迭に引きつ引れつして、竟に放ち給ひしを、各急に手繰り寄すれば、果して那方の緒の端に、各其名簿を附られけり。辰相則膝を找めて、一箇々々に其牌を、拿抗げつゝ得と見て、聲高やかに、是を讀を、内外齊一うち听くに、第一靜峯姫上は、犬江親兵衛仁、第二城之戸姫上は、犬川長狹莊介義任、第三鄙木姫上は、犬村大學禮儀、第四竹野姫上は、犬山道節帶刀忠與、第五濱路姫上は、犬塚信濃戍孝、第六栞姫上は、犬飼現八兵衛信道、第七小波姫上は、犬阪下野胤智、第八弟姫上は、犬田豐後悌順、各是を引得たり。天縁の致す所、御配偶皆定りぬ。千秋々々、萬々春。と祝すれば、翠簾の内にも女房等の衆聲にて、萬神々々。とぞ應へける。當下荒川淸澄は、准備の料紙硯をもて、件の男女十六人の、名字二通を寫す程に、給事の老女又出て來て、兩家老八犬士に、事の歡びを舒などす。淸澄則疋配の一通を、

處にも銀燭多かるべし。翠簾の間洩灯花は、馨こぼれて風さそふ、春の曛昏にも似たるべく、色濃かりける丹楓の山に、秋の斜日の刺すが如し。誠や義成主の、八個の伶愛の、第一の君を、靜峯姫と喚做して、十九歳にぞなり給ふ。第二の君は城之戸姫、第三の君は鄙木姫、こは同庚にて、十八也。第四の君竹野姫と、第五の君濱路姫も十七八歳、第六の君栞姫、第七の君小波姫は、共に二八になり給ふ。第八の君弟姫は、年三五なりけれども、既に生情憑て、身長も大人備給へば、女兒君達には優れるに似たり。反て第一の君は、形貌小さく瘦肉なれば、那掌中に舞ひしといふ、趙飛燕にや似給ひけん、孰も稀なる美人なれば、肌膚は雪を塊ね、玉を延たるに異ならず。翠雲の長やかなる、立ば裳裙に至るべし。花ならば、いまだ開も揃はず、月ならば十あまり、三日の影とやいふべからん。心ざまも皆愚ならず、走筆縫刺の技はさら也、管絃の游にしも疎からず。生平に宇通保源氏物語を、枕の友にして、歌をさへ讀給ふもあり、或は物の本を好みて、文の才あるも、綴りて人に見せ給はねば、世には聞えざるなるべし。閒話題休。恁而這八個の姫上達は、頭には玉を鏤たる、花の釵兒を戴き、身には縫箔摺箔、色色の衣を被飾りて、儲の席に就給へば、給事の女房等も、今宵を晴と打扮て、各々も侍坐したり。是やこの錦の上に花を添たる、溫柔妖艷の妙なるも、皆珠簾の内なれば、犬士等の目に見

しぬるとも、又倶にせざるとも、那は我知る所にあらず。只常人の上をもて、年を論じて云云と、推辭は要なき事にこそ。と理逼て諭給へば、辰相淸澄膝を抉めて、御諚寔に其理あり。親兵衞が奇才なるも、其義に思ひ足らざりしは、年に泥みし故にこそ。と執合すれば、八犬士等も、犬田豐後を首にて、仁に代りて勅命の、歡びを稟すにぞ、親兵衞今は已ことを得ず、四家老等にうち向ひて、卒爾の異義をぞ謝しにける。恁而八犬士四家老は、今宵の一義をいそがれて、身の暇を賜りつ、退りて准備を做す程に、秋の日早く暮初て、點燭時候に做りしかば、犬塚信濃犬川莊介、犬山道節犬飼現八兵衞、犬田豐後犬村大學、犬阪下野犬江親兵衞は、倶に光絹衣長祉袴にて、東辰相荒川淸澄に引れつゝ、後堂と前亭の間なる、山鷄の間に伺候して、序次程よく羅列れたる、左右には銀燭、いくらともなく建列ねて、白晝の如く明かるに、夜の櫻の杪に似たる、犬士の骨相同じからねど、孰も二十前後なる、威風凛々として、反て猛からず、笑るときは三歲の小兒もなづくべく、怒るときは、蓋世の勇士も憚るべし。面白きあり淺黑きあり、身長高きあり、高からざるあり。鼻直く唇横る、人面の相似たるも、並ては同じからざるに、こは是仁義八行の、玉を連ねし、好男子、劣勝りはなかりける。このとき前面の座席には、錦繡の間道ある翠簾を、透間もなく掛亘して、這裏面を姬上達の著座とす。其

せしかば、准備を做すにぞあらんずらむ。恁而這八士八女の嫻組相定りて、納采の義を行ふとも、婚姻は、桃の夭々たる、來春二月下旬に做すべし。犬士の地ありて城なき者には、修造料として、金三千兩を給ふべし。速に工を起して、城郭修造をいそぐならば、來春婚姻の折までに、家作は大槩落成すべし。豫この義をこゝろ得てよ。と言叮寧に示し給へば、犬士等齊一額を衝て、君恩遺る所なきを、拜しまつりつ、おそる〳〵、其歡びを稟しけり。姑且して親兵衛は、辰相清澄にうち向ひて、言卒爾に候へども、禮に男子は、三十にして室あり。後世は和漢是に拘らず、十七八より娶る者あれども、臣等は年尙十五に足らず。勿論仱くして、男女の婚嫻を定るを、唐山にては、結髮の夫妻といふ、國俗の所云ゆひなづけ是なり。しかして成長に及びて、婚姻を執行ふ者多く是あり。いまだ十六歲未滿にして、婚姻を做す男子あることを聞かず。臣等も亦是によりて、結髮の義は承まつるべし、婚姻合巹の大禮は、御猶豫をこそ願しけれ。と推辭を義成主うち聞て、親兵衛、爿は理りあるに似たれども、我思ふよしはしからず。汝は生年二五なれども、身の長は十七八なる、少年に異ならず。膂力は萬夫に敵すべく、心術は白頭なる、宿儒も及ざる所あり。何ぞ只年を數へて、婚姻を遲礙せんや。且明春の婚姻に、汝一人を漏しなば、汝の妻たらん者、必や怨むべし。娶りて後十七歲まで、閨房を倶に

いへり。又唐人いふ所も是に似たり。或はいふ、月下に一個の翁あり、書册を開きて是を見る、世間良賤男女の姓名と、其年歳を識さゞる者あることなし。是によりて赤繩をもて、男女の脚に繫ぐときは、非如讐敵也とても、夫婦に做らざることを得ず。或はいふ、氷下に兩個の翁あり、相對て相譚す。氷上の人是を聞ば、世に在る所の、男女の疋配の事なりきといへり。こゝをもて媒妁兒を、月老と云、又氷人といふ。又唐山の妓院にて祭る神を、白眉神といふ。國俗の所云、かよふ神に似て、月老氷人と同じからず。那は左まれ右もあれ、我女兒等の疋配は、他等に各一條の繩を拿せて、犬士等に是を牽せん。其繩の本には、一條毎に名簿を締著て、誰繩なるを知らすべし。犬士等各、其牽所の繩によりて、甲は乙、丙は丁と、妻たるべきを知るときは、こも天緣といひつべし。縱些の過不及ありとも、誰にか訴誰をか怨ん。這義什麼。と詳なる、示談に辰相淸澄等は、直元貞住共侶に、只管に感じて已まず。八犬士等も今さらに、異議すべくもあらざれば、其計ひの精妙なるを、稱て承服したりしかば、義成主うち含笑て、然ば我も歡び思へり。事生急に似たれども、今日は黃道吉日也、先赤繩を行ひてん。女子は夜を宜とす。この故に婚姻の婚の字は、女に從ひ昏に從へり。犬士等は點燭時候より、倶に朝服を整へて、六郎兵庫助等を案内にて、出居の方まで參るべし。既に我女兒等には、這こゝろを得さ

稟し止め給はゞ、猶この上の幸ならん。いかで〳〵。と諄返す、甲一句乙一句、迭に語を續言を續て、一口中より出るが如く、連りに推辭て已ざりしを、義成主推禁めて、然ないひそ、犬氏の毎。非如連城の大諸侯なりとも、賢に憑ずして、富貴を負むは、我欲せざる所也。然ば忠臣は位貴く、任重くして、兵權掌にありといへども、いよ〳〵忠誠にして、其君を後にすることなし。蜀漢の諸葛武侯、我國南朝なる、北畠准后の如き是也。矧又我八犬の賢臣を得て、いまだ嫁ざる八個の女兒あり。竟に犬氏に妻するは、抑又天緣ならずや。我意既に決せり。必な辭ひそ。と面正しくぞ諭給ふ。君命脱るゝ路もなき、八犬士等はおそる〳〵、稍言承を稟すにぞ、辰相清澄も歡びて、直元貞住共侶に、祝して千歲をぞ唱へける。當下義成又宣ふやう、柯を伐者は、必斧をもてす、妻を娶る者は必媒をもてす、周人の詩に詠ずる所、載て三百篇の中に在り。今我六郎兵庫助をもて、這婚姻の媒妁にせん。武者助雜魚太郎は、俱にこの義を相副て、有司に所要を課すべし。但し我八個の女兒は、年に多少ありといへども、犬士の年は相似たり。犬阪犬江只是のみ、自餘の六犬士に年劣りたり。然ば今、孰をもて孰に妻せん、この義分別すべからず。誠や和漢古俗の常言に、約莫男女の疋配は、其神ありて是を掌る。我國俗の道く、年の十月每に、諸神出雲の大社に聚合給ひて、世間の男女の爲に、疋配を儆し給ふと

欲す。いはでもしるき犬士の賢才、其忠其功、八人ながら、我女婿に做すに足れり。各這意を得よかし。と亦他事もなく仰すれば、八犬士等は阿とばかりに、應難たる开が程に、辰相と清澄は、倶に答稟すやう、御意承り奉りぬ。八犬士は、伏姫上の、御子たるべき宿因あり。然ば賢慮の至所誰か不の字を稟すべき。臣等も其義を豫より、願しくこそ候ひけれ。といふを道節押禁めて、御家老、开は憚りながら、臣等が思ふよしはしからず。抑臣等義兄弟、八名は當家に宿因ありとも、只一戰の微功をもて、各城主になされしすら、胸安からざる所あり。然るを況、姫君達をもて、妻とし下し給はらば、盈て溢るゝ冥加に盡ん。この義は獨忠與が、賢達て辭ひ稟すにあらず、都一心異體なる、義兄弟等も同意にこそ。と議して左右を見かへれば、戌孝胤智自餘の犬士も、然也々々。と點頭て、犬山說得て寔に好。慤いはゞ畏けれども、目今舘の御威德もて、姫上達を近國なる、大諸侯に妻せ給ふとも、皆歡びて是を容れん。何ぞ家臣の渾家に做さんや。且臣等八名は、伏姫神の故をもて、夙く知られまつりしかども、仕ふる所は新參にて、勤勞久しからざるに、上大夫の席に置れて、釆地一萬貫の城主たるは、最過分き君恩にて、人の媢嫉も影護かり。然を又御配偶は、實に是物體なし。約莫人の臣として、富貴其君を推ときは、亡ざる者あること稀也。伏請御家老達、臣等が爲に御配偶の、御沙汰を

第九輯　卷之五十一

第百八十回下

義成功臣を重賞して八女を妻す(重出)
信隆舊城に還任して罪過を免る

再説、義成主は、八犬士四家老(辰相清澄直元貞住)等を召聚て且宣ふやう、這回柳丸に從ふて參向したる、眞利谷の老毎が、我近習に就て、請ふ旨あり。其所以は柳丸に一個の女兒あり、葛羅媛と喚做して、今玆は十六歲に做りぬ。是が爲に婚姻を徵れども、いまだ相應しき所緣候はず。願ふは安房上總なる、諸城主の子息達を擇せ給ひて、這婚姻を御媒妁あらば、幸甚しからんといへり。眞利谷は、我外戚なれば、他等が情願由なきにあらず。我も亦憶ふ義あれども、それよりも猶いそぐべきは、汝等も知る如く、我に八個の女兒あり。丌が中に妾腹なるも多かれど、其母或は產後に身故り、或は短命なりければ、皆吾嬬が養ひにて、年迫になりにたり。有恁れば、孰も嫡腹に異ならず。我も亦他等が爲に、をさ〳〵壻を擇みしかども、一女もいまだ所緣なきは、反て他等が幸なるかな。我今八個の女兒をもて、八犬士等に妻せまく

寺の衆徒讀經して、遷座の作法を遂られしかば、遠近の男女山路を厭はで、詣る者ぞ多かりける。有恁し程に上總なる、故の椎津の城主、眞里谷信昭の嫡子、柳丸、年十一歳にて、初て稻村へ參勤す。老黨鞠谷毛大夫綺妙等作當たり。去稔父信昭の歿後に、家臣等確執のことおこるにより、參勤頗延引に及ぶといふ。眞里谷は里見の通家なれば、權且稻村の城内に留らる。柳丸見參の日に、黃金五枚と、土宜を呈して贄とす。義成則柳丸に大刀を賜ふ。この頃又義成主は、八犬士四家老等を召聚合て、八個の息女達を、婚姻の一義あり。亓は又本回下の編に、解分るを聽ねかし。

と仰らる。又東西和睦の祝壽を稟さんとて參りぬる、上甘理墨之介弘世の使者、天津九三四郎員明、及菫野阿彌七椿村の墜八、次團太等に就て來ぬる、今井河原の木瓜八、安房上總下總なる、村長故老等に至るまで、東西を賜ふこと尠からず。其後丶大禪師を召よせて、義成みづから、其年來の大功德を譽て、宋版の一切經と、唐の畫本立が畫きたる、白衣觀音の大懸幅と、沈香十斤を賜ふ。又妙眞音音曳手單節は、共に女流なれば、別席に召よせて、義成みづから其功を譽て、有名の短刀各一口、夏冬の衣各二襲、金子各一百兩を賜りける。然ば這君恩に預る者、孰か拜舞せざるべき、歡びの聲內外に充て、被ぎ連つゝ退るとて、一霎時は推も分られず。國守の慈善と其富を、仰ぎて感ぜざるはなかりけり。恁而義成主は、又丶大禪師と八犬士等を、召合せて宣ふやう、嚮に朝廷より、我姊君を神に做されて、賜りたる勅額は、我意ふに、富山の嵒崛に、石の禿倉を造り建て、藏めてもて神體に做さん。且嵒崛の前に、石の無扉門を建て、勅額の摸寫字を掛べし。這義は禪師と八犬士等奉行して、早く石工に課て、等閑にすべからず、只清淨を旨とせよ。と言叮寧に仰すれば、丶大犬士等承りて、其次の日より作事を起して、匠工等をいそがす程に、約莫三十日許にて、夙く落成してければ、則勅額を神體にして、洲崎明神の神人等、祝詞を誦み、法樂を獻り、丶大禪師を開始にて、大山寺及延命


富山姫御祭禮
富山姫御祭禮


富山姫の神遷座行列

義成主に見參す。他は京師に在りし時、犬江親兵衞の帮助に做りしといふ、有功の者なればとて、瀧田の城の、番卒の頭人に做されけり。這他戰功ある勇士の毎、小森但一郎高宗印東小六明相、荒川太郎一郎清英鳥山眞人由世は、兵頭の上席を饒さる。又浦安牛助友勝田税力助逸友、登桐山八郎良于木曾三介季元、田税戸賀九郎逸時苫屋八郎景能を、倶に稻村の兵頭に做さる。又小水門目堅宗鰐船貝六郎繁足、東峯萠三春高も瀧田の城の兵頭たるべく、白濱十郎七浦二郎、朝夷三彌は故の如く、右衞門佐殿に仕へまつりて、近習の上席たるべしとて、都て其秩祿を、加增し給ふこと、各差あり。又眞間井樅二郎季秋繼橋綿四郎喬梁、潤鷲手古内美容振照倶教二弘經等には、舊祿各一倍の加恩あり。又須々利壇五郎二四的寄舍五郎は、既に恩賞ありて、國府臺の城に在番せしを、今番又召よせて、其隊下の衆兵に、白銀二百枚を賜ふ。五十三太素手吉が乾兒數十名に、賜も亦是に同じ。又鮠内葉四郎、猨岡(又狙岡に作る)猿八、濳地喜勘太詰茂住橘等は、月俸を加增ありて、且白銀各二十枚を賜ふ。犬阪下野犬江親兵衞執達たり、他等は拜見せざる者なれば也。這餘諸軍兵、都て恩賞に漏る者なし。最後に致仕の老臣、杉倉木曾介氏元堀内藏人貞行、幷に小森篤宗浦安乘勝を召よせて、其兒子等の軍功の賞として、氏元貞行には、養老料、美田各五百貫文、衞士兵馬には、各三百貫文を賜ふべし。

珍説を撈りて、利害あらば、稲村へ注進すべし。又豪荊は、當家の祈願所に做さる。今よりして年毎に米粟百苞を賜ふべし。と恩命あり。且有種の妻、重戸は賢女にて、よく良人を諫めて、愆なからしめしよしも、聞召たりとて、譽させたまふ。次に石龜次團太越鮒三、向水五十三太枝獨鈷素手吉、犬江屋依介等は、倶に見參を饒されて且恩賞あり。次團太は行德鹽濱の長に做され、且鮒三は其次役にせらる。又依介五十三太素手吉は、故の如く、市河兩國河原に在住して、國府臺の城に事ある時、船隊の頭人たるべしとて、月俸各五十口を賜ふ。這四個の町人は、或は犬江親兵衛に從ひ、或は政木大全に從ふて、忠あり義あり、戰功あれば、倶に武士に執立て、庿字帶刀を允し給ひけり。是等は皆新恩の儕なれば、賞を先にせられしなるべし。譜第の家臣の功ある者に恩賞は、蜑崎十一郎照文を首とす。抑照文は、招賢の使を承りて、丶大法師と共侶に、關の八州を、巡歷しける始より、三たび京師に使しぬるまで、功あらずといふことなし。こゝをもて、職祿を推登して、瀧田の城の大兵頭とす。秩祿も亦加增して、二千貫文を賜ふべし。且那身は、男兒なき故に、親族の子也といふ、若黨直塚紀二六を、女壻養嗣にして、女兒山鳩を、妻せまくほしといふ、宿願も、既に聞し召容させ給ひぬ。願ひの隨意たるべしとて、則紀二六を召出さる。然ば直塚紀二六は、蜑崎十二郎照章と改名して、

郎與保、其孫十條力二郎十條尺八郎、滿呂復五郎重時滿呂再太郎信重、安西就介景重磯崎增松有親、舘持(又盾持に作る)傔仗朝經、大樟村主俊故等を、一同に召出して、與保は苛子崎の賊難以來、屢犬江仁を帮助て、大功あり。こゝをもて推登して、兵頭に做さる。十條力二尺八は、尙幼小なれども、大母音音又兩母親、曳手單節が、苦肉の計を行ひ得たる、那大功の賞として、弟兄共に、次麿君の陪堂に做さる。月俸は、二十口に、十口を加增して、各三十口を賜ふべしと也。又重時信重景重有親は、戰功孰も尠からず。こゝをもて、重時を兵頭に做さる。信重景重有親は、右衞門佐殿(義通君)に仕へて、倶に近習たるべし。と仰らる。又朝經俊故は、嚮に恩賞を行れて、其地の長に做されたり。いよ〳〵民を憐みて、循吏の操を愆べからず。とぞ掟給ふ。其後落鮎餘之七有種、誼夾院豪荊等、義成主に見參す。這有種は、義士也、八犬士のいまだ當家に仕へざる以前より、其帮助になりしこと尠からず、と聞えたり。況僅なる小兵をもて、忍岡の城を拔くに及て、犬山道節が軍勞に代りしこと、最賞すべし。豪荊も亦俠者なり、よく有種を帮助て、當家の爲に忠あり。こゝをもて有種には、下總葛飾の郡にて、新領五百貫文を賜ふ。舊地穗北五箇村と共に、宜く是を管領すべし。但房總は、東南の一隅にて、他鄕の風俗を、具に知るに由なし。有種は幸に武藏に在り。生平に隣國の

同　國神餘城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬飼現八兵衛佐金碗信道
同　國那古城主　采邑一萬貫文　上大夫　犬田豐後介金碗悌順

とぞありける。次に東六郎辰相、荒川兵庫助淸澄を、召よせて恩賞あり。這兩家老は、忠誠舊老、氏元貞行に劣らず。曩に素藤對治の折も、這回大敵防戰の日も、進退よく度に稱ふて、備らざる所なし。こゝをもて采邑三千貫文の舊地に、今亦各二千貫文を加增す、共に本領五千貫文たるべしと仰らる。次に杉倉武者助直元、堀内雜魚太郎貞住に恩賞あり。他等は這回の鬪戰に、勳績伯仲す、倶に其父の重職を嗣に足れり。こゝをもて家老とす。采邑は父の時の如く、三千貫文たるべし。と仰渡されける。却其次に、政木大全孝嗣を召よせて、大田木の城主に做さる。他は素藤對治の日も、犬江親兵衛を帮助て、戰功あり。嚮には又葛飾の鬪戰に、其毎五十三太素手吉等、數十名を將て、御曹司の危戰を援まつりて、强敵長尾景春を防ぎ得たる、其軍功鮮少ならず、因て這恩賞あり。格式は、四家老の次席にて、采邑五千貫文を賜ふべしと仰らる。次に千代丸圖書助豐俊を召よせて、那身は都て約束違はず、軍師胤智の計策に從ふて、よく大敵を火攻したる、其大功、既に舊罪を償ふに足れり。こゝをもて、舊地を返し賜りて、故の如く、上總國榎本の城主に做さる。舊臣を召聚へて、還任すべし。と掟給ふ。次に姥雪代四

て、各一城の主に做されて、采邑各一萬貫文を賜ふべしと仰らる。但し上總は郡縣廣く、且富饒の地なれども、稻村へ遠ければ、股肱の家臣を置べからず。この故に、胡意當國にて宛行はる。この中犬江親兵衛は、曩に上總なる舘山の城主に做されしかども、多事にしていまだ在任せず、且秩祿の定なかりき。然るを這回改めて、當國舘山の城主とす。其城なき地には、速に城郭を執建て、在任すべし。格式は家老の上席にて、上大夫たるべし。と自親仰渡されて、且東辰相をもて、其城邑の目錄を成下されしかば、君恩既に身に餘る、八犬士はおそる〵〵、共侶に承まつりて、退きて其目錄を拜見しぬれば、恩賞都て異同なく、仁の字をもて首とす。其次第左の如し。

安房國舘山城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬江親兵衛尉金碗仁
同　國東條城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬塚信濃介金碗戍孝
同　國犬懸城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬阪下野介金碗胤智
同　國御厨城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬村大學頭金碗禮儀
同　國朝夷城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬山道節帯刀先生金碗忠與
同國小長狹城主	采邑一萬貫文	上大夫	犬川長狹莊介金碗義任

の沙汰にあるべしとて、休暇の命さへありしかば、件の九士一僧は、軈て瀧田へ赴きて、義實老侯に拜見す。其告まつる事每に、義實歡びいふべうもあらず、那歸路にて三髑髏の事、桐一文字の大刀の事、美濃の金蓮寺と、信濃の拈華庵にてありし奇事、犬田豐後が力技の、千萬人に勝れしよしさへ、越に刱めて聞知りて、感嘆特にあさからず。只義實主のみならず、後には義成義通君、兩家老諸士さへに、件の奇事を聞知りて、駭嘆ぜざるはなく、皆戍孝の孝感を、傳へて稱賛したりける。恁而義成主は、有功の諸臣等を賞祿の沙汰あるべしとて、一日瀧田へ赴きて、義實老侯と商量あり。こゝをもて國府臺の城の番士の頭人、眞間井樅二郎繼橋綿四郎、潤鷲手古内振照倶教二、文明の岡なる、鳥山眞人はさら也、行德口の戍に置れたる、石龜次團太越鯛三、市河なる犬江屋依介、兩國河原なる、向水五十三太枝獨鈷素手吉に至るまで、咸稻村へ召よせらる。有恁し程に、落鮎餘之七有種は、誼夾院村なる、法印豪荊を將て、先度の謝恩の爲にとて、穗北の莊より詣來にければ、幷は幸の折なりとて、則犬山道節に課て、其伴當と倶に、稻村の城内に召置る。時に八月十五日は、黃道上吉の順日なれば、國守里見左少將義成主、烏帽子朝服にて、今朝しも辰の比及に、正廳に著坐あり。兩家老八犬士、諸侍皆熨斗目衣長社衦にて、出仕せざるはなし。第一番に八犬士を召出して、這囘の軍功の賞とし

に、慤まで佛事のうち續くを、厭はで綴り果しぬる、作者の用意を思ふべし。蓋先祖父母弟兄の爲に、祀を等閑にせず、追薦の佛事法會を修する義は、孝子忠信、順孫義士の上に、必欠べからざる所にて、本傳の大關目、善を勸め惡を懲す、約束の終にて、這事なくばあるべからず。然ども佛事は、孰も佛事にて、別にせんかたなき者なるに、其事相似て其趣の異なるを、好看官は、おのづから知るべく、克念ふ者は、鑒かで反て喜するもあらん。左にも右にも老婆深切、みづから爰に評註す。覆醬をもて見ることなくば、知音の友に庶幾とせん歟。

第百八十回中　義成功臣を重賞して八女を妻す

却說、八犬士、大照文は、主僕百十數名、其船州崎にかへり來つ、則勅額と御教書を相捧げて、稻村に歸城して、這義を聞え上しかば、兩家老東辰相、荒川淸澄執達にて、次の日義成主に見參す。京師の首尾、伏姬神に勅額の事、ゝ大を大禪師に做されしよしまで、詳に聞え上て、件の勅額と、室町殿の御敎書を見せまゐらすれば、義成主、拜戴欣悅大かたならず、ゝ大照文犬士等を勞ふて、汝等は、徑に瀧田の城へ參りて、這義を老舘に稟上よ。勅額の事は異日

敎書あり、然を濤風の害怕を思はで、近きを貪るべきにあらず、只下總を歷て上總に至る、陸路こそ宜しからめ。と議するを、丶大は聞あへず、いかでかは然る迂遠き路をゆかん。犬塚の改葬にて、美濃路に三日を費したれば、日を縮めて早く還るべし。今尙秋暑の時なれば、冬の海の暴に似ず。況八犬士は、身を衞る靈玉あり。且勅額の故をもて、伏姬神の擁護もあらんに、何等の害怕あるべきや。と議すれば犬士等皆諾なひて、師父の決斷勇あり理あり、徑に水路をかへらんずとて、則這浦にて、巨舫一艘を傭ひ得て、這夜七月二十二日の月の出る時候より、纜を解するに、果して順風なりければ、同船の主僕百十數名、枕を高うしぬる夢裏に、船の走ること幾十里なりけん、次の日の巳の左側に、洲崎の港口に入りにけり。

作者云、本編は腹稿より、都文多くなるをもて、四十六の卷端に附錄目を追加したれども、本文には、皆故の題目のみにて、附錄目を省くものから、這一回は、故の題目になき所にて、且長編なれば、別に附錄目をもて一回とす。こも腹稿にありながら、法會の屢なる故に、棄去ばや、と思ひしかども、幵も又遺憾しければ、うち棄難て這一回あり。抑結城の法會より、うち續きて白濱延命寺に改葬の事あり。其後又水陸施餓饑の大法會あり。旣にして最後に至りて、金蓮寺にて追葬の事、及拈華庵の結局あり。約莫一部の稗史小說

又犬田豐後は、祖父母と母の墓は、行德に在り、父文五兵衛の墓は、瀧田に在り。又犬江親兵衛の大父、并に二親、山林房八と沼藺の墓は、市河の郷に在り。是等は里見の封内なるに、且犬江屋依介と、其妻水澪と、迭代によく詣て、忌日に香華を絶ことなし。又政木大全も、父河鯉守如の墓を建まく思ひて、この後里見殿に願ひ稟して、那武藏豐島なる、日比の寶傳寺に赴きしに、那里は犬阪胤智が、五十子の城に在りし時、孝嗣の爲に、守如の墓を造建て、且寺の頽破に及びしを修復したり、とこの折捌て聞知りて、感涙坐に叱むまでに、歡ぶこと大かたならず。又永年の香華、墓所料なども、既に胤智が寄布したりと聞えしかば、今さら別に供養すべき事あらず。只香華院に墓ある、祖先と母の爲に、多く香華料を寄進しけり。然るにても、犬阪は、其朋友の爲にしも、恁る大功德を做しながら、反て孝嗣に告も知せず、其おのづから知るに隨せしを、孝嗣深く感佩して、稻村へかへり來つ、這義を胤智にいひ出て、君子と稱て、三拜の禮を行へども足れりとせず。是よりの後、胤智に逢ふ毎に、必其席を避て、諸兄の禮ある如く、敬ざる日はなかりける。是等は皆後の話說なれども、今語次宜しければ、集めて茲に結ぶのみ。閒話休題。爾程に、八犬士、大照文は、柴浦へ來ぬる程に、去向水陸の便宜を相議ふに、照文がいふやう、這里より水路を洲崎へ還らば、速にして便路なれども、勅額あり、御

貪りて饜ことなければ、那身に大損なしといへども、子孫に迨りて禍あり、咸失ざる者なし。寡欲は其身のみならず、子孫長久の至寶也、愼ずはあるべからず。閒話休題。爾程に八犬士、大照文は、又五七日の旅宿をしつゝ、武藏國豐島なる柴浦に來にけり。今來ぬる路の程、菅菰大塚の鄕は、犬塚信濃の故鄕にて、二親の墓は香華院に在り。又犬川荘介の母の行婦塚あり。父犬川衞士の墓は、伊豆の堀越に在り。又大塚には、犬飼現八兵衞が實父、糠介の墓もあれば、倶に立よりて墓詣をすべく、後來不轉の香華料をも、寄進せまくほしけれども、既に美濃路にて、改葬の觸穢已ことを得ず、淹留三日に及びしに、今又其頭に路草を喫ば、親の爲とはいひながら、公道を疎にして、私事に耽るに似たり。墓詣の事はしも、異日の便宜を俟には不如、と思ひかへしつ皆共侶に、件の浦邊に造りし也。然ば這三犬士は、次の年に至りて、義成主に願ひ稟しつ、倶に大塚の鄕にゆきて、是等の本意を果せし也。又道節は、父犬山道策と實母と、女弟濱路の魂を招きて、其墓を安房の延命寺に建立す。又犬阪下野は、其父粟原首胤度と、嫡母稻城、異母兄、夢之介、女兄玉枕、及實母の墓さへ、右に同じ寺に建て、子々孫々に至るまで、年忌月忌の祀、怠る事なかりしとぞ。這他犬村大學は、初犬飼現八に伴れて、舊里赤品を出し時、實父母、養父母、及故妻雛衣の香華料を、多く香院華へ寄布したれば、其墓穨轉すべくもあらず。

留めていふやう、小可が白屋は是よりして遠からず。嚮に暇ある折に走かへりつ、老婆に御賜の多かると、垂井の首尾を報しかば、他も歡び意外に出て、前より茶を煮て待侍り、卒立寄せ給へかし。と請ふを戌孝聞あへず、否とよ、這一路人多かるに、俟せて那里へいなれんや。遺憾く思へども、こゝにて袂を分つべし。といひつゝ先件若黨に吩咐て、携たる桐一文字の、大刀を篭篣の内に藏めさせて、却局平に身の暇を、拿らせつ軈て衆人と、倶に路次をいそぐにぞ、局平は猶去難て、後に跟つゝ來にけるを、戌孝も諸犬士も、見かへりつ辭し諭しゝかば、路十町許來て、只得其里にて別を告て、己が宿所へ還りける。局平幷に石工野見六の事、這下に話説なし。然ば大塚戌孝は、件の桐一文字の大刀を、異日刀匠に研せけるに、素より雙なき名刀なれば、年來土中に在りしかど、聊も土蝕せず、又いふべくもあらざれば、則桐一文字の鞘と、鍔さへ是に皆具して、表裝に手を盡させしかば、桐一文字の短刀と、大小一對の名物に做りしより、後兒孫にぞ傳へける。故ある哉戌孝の忠孝なる、那村雨の大刀の如きは、久しく其身の物に做りしを、毫も吝嗇の心なく、父の遺訓を果さんとて、成氏主に返しゝより、いまだ幾ならずして、於是に祖傳の名刀を得たり。便是天の配劑、善に報ふに善を以す、物の損益都皆、善惡邪正に緣ざることなし。世人多く這理を知ず、只不義の利を欲するまでに、

を守りねかし。と憑みつ、懐を掻撈りて、圓金十兩を數出して、先其五兩を庵主に施し、五兩を局平に與へていふやう、其五金と這五兩は、幷氏の爲に香華料なり。僧俗兩個に等分て、戍孝が寸志のみ。といはれて含笑む庵主はさら也、局平は呆るゝまでに、頭を搔つ手を摩つ、こは又思ひがけもなき、嚮には身に餘りぬる、御恩を受まつりしに、這里の御墓を守ればとて、折々草を芟拂ひ、忌日に樒を贖るのみ、何ばかりの費あるべき。然るを又這御金子を、受まつるべきことかは。と推辭ば庵主も倶にいふやう、嚮にもいへることながら、幷氏は當庵開基の施主にて、累代の檀那なりしかば、其後なきを憐て、先住の時墓を建にき。況忌日の香華をや。這御施入は要なし。と辭ふを戍孝推復して、开は其該の事ながら、外祖の祀を人に任せて、恁ばかりの義に及ずは、枯者の爲に宜かるべからず。枉て愚意に從ひてよ。と諭しつ金子を受拿せて、別を告て桐一文字の、大刀を引提て立出れば、庵主と女僧は滿面春色、こは無造作や物體なし。御蔭で水を得たりしに、千葉荼蘼の花をしも、開せ給はる功德廣大、彌陀佛彌陀佛。と念じつゝ、送れば亦局平も、只得金子を受斂めて、走下つゝ兩折戸の、邊に跪居て待なるべし。這時犬阪犬江犬山、犬村犬田犬飼等の諸犬士は、丶大照文と共侶に、既に出て門前に在り、戍孝が來ぬると聽て、伴當夫役を從へて、又復路次をいそがまくす。當下局平は犬塚を

賛歌第三、　信濃なる戸がしく山に在神も豈まさらめや神ならぬ神　犬飼信道
賛歌第四、　山を抜力もあるに健雄等が移すに石のかたきものかな　犬田悌順
賛歌第五、　井は成ぬひさごもて汲め雲近く水遠かりし山もとの庵　犬山忠與
賛歌第六、　垂乳母の住にし里に來見ば山ふところの宿もなつかし　犬塚成孝
賛歌第七、　劍大刀三世奇事の本末をむすぶは後の庵あるじかな　犬川義任
賛歌第八、　小篠原分つゝ岐岨の山の井に心汲見よのこす言の葉　犬江仁
賛歌第九、　糸芳宜に交る山邊のしのすゝきそよげば匂ふ秋の初風　蜑崎照文
賛歌第十、　峯の松うろに生出て風さそふ聲を麓のむろに入るめり　大禪師、大

善業不滅不斷加持、劫火卽滅八功德水、平等利益とぞありける。巧拙各差あれども、皆實詠にあらぬもなければ、知るも知らぬも推並て、感嘆しぬるも故あるかな。恁而犬塚戍孝は、又庵室にかへり坐して、且局平を召よせて、更に庵主に向ひていふやう、咱等は是紈袴の身にて、其地も相距こと亦近からねば、異日の墓詣は究てかたかり。といひつゝ局平を見かへりて、那局平は我外祖、井直秀の老僕の子にて、舊緣も候へば、今より後は他をもて、當庵の施主に做すべし。といひつゝ局平を召近づけて、汝は素是老實家也。今よりして我に代りて、井氏の墓

時沈吟じて、稍其巨石に書寫れば、ゝ大も我み近づき來て、よみ見て莞爾とうち笑て、諸彦旨くやられしな。我も亦蛙に劣りて、歌らしき歌は得よまねども、並べて恥を遺すべし。いでいで。といひつゝも、且照文に筆を借て、寫し果て又いふやう、各々恁玉を連ねし歌を、自筆にものしたれども、是鏤たるにあらざれば、竟に風雨に磨滅して、一句もあらずなりぬべし。庵主の爲に加持してん。といひつゝ又石に向ひて、數珠さやさやと推揉て、一霎時呪文を唱へつゝ、一喝してぞ退きける。然ば這復泉の記も、跋贊の十歌も、後百年を歴ぬるまで、石面に耗ずして、幽に讀れたりといふ、こは是後の話也。當下八犬士は、聚合て復泉の記を默讀す。讀果る時大學は、代りて贊歌を唫誦しけり。其聲朗にして妙なれば、拙き歌も聞に堪たる、自他迭に唱嘆して、歡ばざるはなかりける。然ば其記文の後に詞章あり、且十歌ありて曰、文明十六年秋七月十六日、犬村大學頭金碗禮儀が、拈華庵主の爲に述ける、復泉の記の後に題せる、一路人等が十歌一贊左の如し。犬塚信濃介戍孝、孝感、懷舊の歌も亦この中に在り。又禮儀を首とす、石面各卽事自筆なり。歌に曰、

贊歌第一、　壯士が千曳の石をおきかへてすみよき庵の苔淸水かな　犬村禮儀

贊歌第二、　埋れ井の石蓋ひらき涌く水におほし力の名をや流さん　犬阪胤智

て、潑と散水に、四下の人さへ辟易して、犬家咄と笑けり。姑且して犬村大學は、犬田豊後に向ひていふやう、和殿并に、犬江犬山犬飼は、力藝を見して、庵主に水を得させたり。是も亦仁の一術にて、武の至りといひつべし。咱等は又文をもて、復泉の記を貽さんとて、墨斗の筆を拔出しつゝ、徐に件の立石に、找み近づき翰を染て、石の平坦なる處へ、記文一編を寫著るに、毫も稿を設ることなく、蓮の糸を引く如く、速に綴り果て、編左に歌もて賛しけり。（作者云、這復泉の記は、必漢文なるべし。漢文は看官の反ていぶせく思ふもあらん、且文の多くなるべきを厭ふの故に、省きてこゝには載ざる也）當下、胤智是を見て、犬田が膂力には及ぶべからず、犬村の文も亦得がたし。然ばとて今言なくば、後に悔しかりぬべし。我も似而非歌を添んとて、隨卽其毫を借て、又一詠を寫しゝかば、餘の六犬士も興に乘して、各々歌を詠出つゝ、次第を追ふて錄しゝかば、蟹崎照文も庭門より、杖み入りつゝ列々と、見つゝ只管感歎しぬるを、親兵衞急に呼禁めて、蟹崎叟々々々、和殿は何どて一歌を、惜みて倶に賛せざるや。といはれて照文頭を搔て、咱等は、風流に疎ければ、這夥計には入りがたかり。と辭ふを親兵衞諸犬士も、うち笑つゝ敢饒さず、幵は好もあれ歹もあれ、這大皇國人にして、這大皇國歌を讀ずは、水に栖む蛙、花に鳴く鶯にも劣るべし。よみね〳〵。と譴られて、困じて一雲

孝うち聞て、开は不便なることなりき。然でも庭の樹粒繁く、剰東を大石に、窒れたれば、這座席の、薄闇きも故あるかな。といひつゝも又其石を見て、檐廓に尻を掛たる、犬田豊後を呼被て、哥々よ、和殿の膂力には、那大石を北のかたへ、轉し遣んも易かるべし。といへば悌順含笑て、否、我とても、五大力士にあらざれば、よくすべくは思はねども、何事も人の爲也。成歟不成歟試てん。といひつゝ羅外套を脱措て、野袴の稜括み、刀を背のかたへ繞して、身を起しつゝ其大石の、邊へ进み近づきて、猶よく胸に是を計るに、石の高は、五尺許、上尖りて下太く、徑四五尺なるべければ、井を窒ぎしも理りにて、幾百貫目あるやらん、實に千曳の大石なるを、悌順は物ともせず、隻手を掛て推試るに、齒の搖ぐが如搖めきけり。是では好。と兩手を掛て、曳と噎きて捩反せば、千曳の大石根を離れて、只是臼を轉す像く、悌順の手に從ふて、二三杖北のかたへ、移るを楚と推居けり。大石既に除れし、迹には地泉涌出て、庭に溢れて已ざれば、親兵衛道節、現八兵衛は、其頭にありける圓石の、輕重或は八九十斤、或は百斤有餘なるを、最も易像に拿撓聚へて、敗井の匝に居しかば、立地に井幹成て、其水溢れずなりにけり。今這事の光景に、庵主はさら也、庭門の、邊に在りける局平も、日今水を汲拿りて、かへり來にける同宿の、女僧さへ倶に膽を潰して、引提し手桶を取落せば、箍は斷離れ

鞴は則這刀の、鞴なること、是も亦、自然に出て疑ふべからず。爾るに這大刀は、那三髑髏より、猶下に在しならん。這故に局平は、知らで穿出さゞりけんに、反て庵主の獲にせられて、我視に被る不思議さよ。恁と知ねど那折に、金蓮寺へ寄進せで、故のごとく這大刀の、裝に做すに便よき、事の暗合是も亦、自然に出て鞴の出處を、今正可に知る娯しさよ、と肚裏なる自問自答を、言には出さで然氣なく、又庵主にうち向ひて、這大刀咱等買とるべし、價は何ばかりに候や。と問ふを庵主は聞あへず、否、價は愚僧も知ず、鐚二百まれ三百まれ、宜く取せ給ひね。といふに戍孝懷より、取出す小方金二片を、鼻紙にうち載て、卒とて庵主に與れば、庵主は受得て怡悦に堪ず、こは過分なる造化也。と謝して硯を曳よせて、受取手實を戍孝に、寫て渡しつ聲高やかに、尼前よ、其頭に在刀禰們は、主の一路人にぞあらむずらん。推並て茶をまゐらせずや。と追從欵待喋々しきを、女僧は答て、否水なし、汲もて來てん。と手桶を引提て、出て東の方へゆきしを、戍孝は訝りて、又庵主にうち向ひて、這庵に井はなきや。と問へば答て、然ン候。素は這庭の、東の方に清水あり、二六時中涌出て、水には富候ひしに、十歳有餘前つ秋、酷く地震し時、上の山なる大石滾墜て、井幹をうち碎きしのみならず、搖入て、井を窒ぎしかば、是より水を失ひつ、今では四五町東なる、石溜を汲拿り候のみ。と告るを戍

思ふ心をいへばえに、いはでぞ忍ぶ故事を、人こそ知らね、それならで、壁の下に倚かけたる、敗刀一口あり、柄と鞘は朽果たれども、由來ありぬべく思ひしかば、庵主に向ひて、件の刀は、故もやある。と尋るに、庵主答て、否、那敗刀は然したる故も候ばず。十日有餘前の夜の事なるべし、只今詣給ひし、墓の邊を、穿起しゝ者ありし歟、とおぼしくて、其頭の土の異なれば、拙僧是を見て思ふやう、こは倘枉死せし人の亡骸を、悄地にもて來て埋めたる、歹人の所爲ならずや、と尋思しぬれば、うちも措れず、鍬もて其頭を、穿返して見てけるに、那敗刀の出たるのみ、白骨だにもあることなし。刀は土中に久しく在けん朽たれば、錢にはならねど、好者もあるならば、售らばやと思ふのみ。と報るを戍孝うち聞て、思合するよしあるを、然氣は得せで、件の刀を、請拿りて、是を見るに、實に土中に幾稔歟、埋れて在にけん、表裝は皆亡たれども、鍔と刃は朽もせず、且柄下に四字銘ありて、桐一文字と讀れしかば、愕然と驚くまでに、且感じ且歡びて、肚裏に思ふやう、原來這刀は、我大父、戰死の折までも、腰に佩給ひしを、我父其首級と共に、奪拿りて、蚤く多兵を殺脫て、其首と共侶に、那里へ埋め給ひけん。我は親の話說に、首級の事を聞しのみ、大刀の事を聞ざれども、這大刀あればかの折に、埋め給ひしに疑ひなし。然ばこそあれいぬる比、大父の靈の前價代に、野見六に拿らせ給ひたる、

小道場なれば、客殿はなし。多客を容るゝに足らざれば、丶大と自餘の犬士等は、退きて外面に在り。或は庵の檐廊に、尻を掛るもありけり。裏面には庵主と同宿の、老女僧とのみ居れり。當下戌孝は、庵主に向ひて、在俗は安房の里見の家臣にて、犬塚信濃戌孝と喚做す者也。當所に墓ある、井丹三直秀翁と其孺人は、我母の二親なれば、外戚也。偶這地を過るをもて、參詣し候ひぬ。と告て香奠の裹金、一枚可を呈すれば、庵主は滿面うち笑れて、受戴つゝ佛前へ、供じて却答るやう、那井氏のことはしも、昔當庵の大檀那で候ひしに、嘉吉の亂に那家滅亡て、墓表だになかりしを、前代の庵主の時、幾稔か劵縁して、這庵室を再興の折、件の墓をも建たる也。昔年蚊牛と喚做しゝ庵主枉死して、庵も共に燒亡たれば、久しく無住で候ひしを、前代の傳眞庵主は、拙僧の師にて候ひき。原來和君は、那井氏の御外戚に候歟。倘青年に見え給ふに、御孝順なることかな。といふ間に、同宿の、女僧が茶を煮て薦めけり。當下戌孝は、茶を受飲みつゝ、列々と、四下を見つゝ思ふやう、昔我父少かりし時、這庵室に歇を投めて、破戒無慙の庵主を誅して、料らずも我母刀自に、名告會給ひしは、是天緣の盡ざる所、孺伏の創成りしとぞ。我總角の比、親の夜話に、聞にしことを、思ひきや、今其庵に立よりて、後の庵主に逢んとは、一善一惡人同じからず、一去一來其地は同じ。浮世は環に似たりけり、と

身裝して俟なるべし。恁而、大諸犬士は、主僕の早飯果ると軈て、故のごとくに行裝を整つゝ、住持役僧等に別れを告て、件當夫役と局平等を將て、金蓮寺を立去つ、ゆくこといまだ二町に過ず。照文も亦、紀二六以下の伴當に、那敕額の長櫃を舁せつゝ、這方を投て來ぬるに逢ひけり。當時迭に近づく隨に、一霎時路傍に立在て、會話をすめり。开が中に照文は、今朝聞知りたる、那奇事をいひ出て、犬塚が孝感の、幽冥に通ぜしを稱贊す。戍孝は亦、小篠村に立よらまく欲するよしさへ、告つゝ皆ゆくめり。是より亦主僕故の如く、百十數名になりしかば、夫役等は立替りて、長櫃を舁つゝ從ふ。この日より、二日にして、未下る時候、小篠村に來にければ、局平は拈華庵の墓所なる、井氏夫妻の墳墓に案内をす。奴隷の每と夫役等は、憩ひて柴門の外面に在り。又局平は水を汲み、樒を求め來て、件の墓に建などす。當下戍孝は、拱みて其墓を見るに、親の話說に聞しには似ず、何人の建たりけん、三重の墓石ありて、直秀夫妻の法號と、歲月を勒したり。开が右の方は、昔年父番作が、那三首級を、悄地に瘞めける處なるべし。曩に局平が穿起しゝ壤の、尙乾きも得せで、土潑迹に似たり。戍孝はこの墓あるを訝りながら、跪き合掌して、念じ果て退けば、自餘の犬士も、大禪師も、迭代に廻向しけり。恁而戍孝は、又局平を案内にして、拈華庵に呼門て、則庵主に對面す。素より村落の

憑まく思へば也。抑汝の老實なる、德によりて、料らずも、三髑髏を、改葬しける歡びは、亦いふべくもあらずかし。是を褒賞に取するぞとて、圓金二十枚を與れば、局平は夢かとばかりに、天に歡び地に喜びて、受戴きつゝ、懷へ楚と斂めて答るやう、然までのことをせざりしに、這大金を賜りぬる、冥加あまりて胸安からず。是もて田圃を買殖して、宅眷を優に養てん。那里へいなせ給ふとも、郷導を仕らん。と惴るを戍孝うち笑て、否とよ、異なる路にあらず。改葬三日の忌はしも、今日までにて果ぬれば、明日より東へ還る序に、小篠村へ立よりて、我外祖父母、井丹三直秀翁、夫妻の墓に、詣まく欲す。其頭の案內を憑のみ。といふを局平聞あへず、开は易しとも易かりき。と答て軈て伴當の居る、憩所へ退りけり。當下戍孝は、夫役の老立たる者、兩三名を召よせて、他等が穸を穿り、墓碑を建て、髑穢を歛ざりける、其老實なる挊きを譽て、身淨の折乾にとて、小方金十片を拿らせしかば、夫役等は、皆雀躍して、歡ばざるはなかりける。左右する程に、日の暮しかば、丶大犬士等は、住持に明日の別れを告て、今宵も亦這精舍に明しつ、詰朝は主僕夙く起出けるに、役僧浴室の准備あり。といへば大家迭代に浴して、忌闋の身を潔す。這時犬士等は、漕地喜勘太を、照文の宿所へ遣して、今日這地を立去べき事と、改葬及墓石の奇事を告などす。照文も其こゝろ得あれば、

見るに、春王安王の墓表は、石も最上にて、細工も精しく、前々代なる、當時の住持の命じたる、弟兄の法號を彫做して、嘉吉元年五月十六日と勒したり。這二基の墓表は、今も垂井の金蓮寺に在り。又大塚三戌の墓表は、石も劣りて形狀小さく、是には只義烈塚翁之墓と勒したり。這墓表は今有無を知らず。然ば犬塚等諸犬士丶大禪師は、共侶に是を見て、是も亦那靈の、心を用ひし所歟、と思へばいよ〳〵感嘆す。爾程に息部局平も、夫役等も、件の奇事を聞知りて、駭嘆ぜざるはなく、招ざれども出て來て、壤を運び墳を築き、よく野見六を帮助しかば、未だ半日ならずして、三墓を皆建果て、野見六は辭し去りけり。折から追薦の讀經すと聞えしかば、諸犬士丶大は、衣裳法衣を更めて、本堂に列坐しぬること昨日の如し。住持は導師を丶大に讓れども敢せず、丶大は猶客座に在りて、助聲しぬるのみ。這次の日もかくの如し。三日にして、追薦の佛事果しかば、戌孝等は墓詣して、香を燒き花を手賻け、又客殿に退きて、義兄弟等と商量しつ、役僧を招きよせて、目錄をもて布施を渡すに、改葬三日の法事料金十兩、主僕三十餘名、三宿の房錢金五兩、春王安王、并に三戌の祠堂料、金三十五兩、通計五十金なるを、役僧見つゝ歡び受て、退きて住持に告て、照書一通を呈閲す。其後又戌孝は、局平を客殿へ、招きよせていふやう、汝は大昨日より、辭し去んといひしかど、我留在らせしは、案内を

なる哉。都の價は幾許ぞ。と問へば野見六然ゝ候。三箇の御墓の石の價と、細工料と相共に、十五金にて承まつりにき。といふに戌孝點頭て、則圓金十五枚を拿出し、別に一枚を相添て、是を野見六に拿らせていふやう、汝始より疑はで、那誂を果せしかば、我は意外の便宜を得たり。其の一兩は賞錢ぞ。といはれて野見六怡悦に堪ず、こは有がたきまで辱き、御好意を受まつりぬ。と應て金を財嚢に藏めて、卒や御墓を建候はん。といひつゝ軈て先に立ば、戌孝は、先其石を見んとて、倶に身を起す。ゝ大禪師もうち連立て、外面投て出にけり。姑且して道節がいふやう、哥々等はいかに思ふやらん、昨今の奇事は、去歳の四月、結城にて法會の折、季基朝臣の御墓石を、造り出せし、那十僧の奇事に似て、二の町なれば珍しからず。といふを胤智推禁めて、然ないひそ、犬山。甲と乙とは、其事相似て、其趣は同じからず。則正對也。矧又犬塚は孝子也。こゝをもて孝玉を感得して、其名を戌孝とす。是等の孝感なからずや。是も亦勸懲に、係る所を思はずして、只相似たりとのみいはゞ、目屎の亡ぬ人なるべし。といひつゝ呵々とうち笑へば、道節も自笑して、敢又掛念せず、自餘の犬士と倶にいふやう、犬阪解得て穩當なり。誘給へ、墓石を、疾見ずばあるべからず。といひつゝ倶に刀を引提て、外面へとて立にけり。恁而八犬士、ゝ大禪師は、野見六が造り做したる、君臣三個の墓碑を

僧驚き見て、否々、鍔はありけるに、幾の程にか失にけん、不思議々々々。とばかりに倘疑は解ざりけり。然ば、大も諸犬士も、倶にこゝろに悟れども、安定にいふよしなかりける。當下戍孝膝拍鳴らして、是にて思ひ合すれば、曩に這野見六に、三箇の墓石を誂て、爲らせしといふ、那武士は、正に是我大父、大塚翁の亡魂の、假に顯れたるにぞあらんずらん。然ばこそあれ、兩公達の、鍔を前價の代にしたり。且這靹は土蝕あり。意ふに我大父の腰刀の、戰死の折紛失して、年來土中に埋れたる、其靹をのみ拿出されけん、今其所を、知りがたきを遺憾とす。最も怪しき事ならずや。といふに、大も諸犬士も、住持役僧野見六まで、寔に然也、然もこそとて、感嘆せざるはなかりける。恁而戍孝は、件の二鍔を故の如く、兩箇の短刀の、柄下に返し納めて、桐一文字の靹を留めて、短刀をのみ返していふやう、目今見聞給ひぬる、一大奇事も候へば、願ふは其短刀を、いよ〳〵雙なき寺寶になされて、記錄に載させ給へかし。と貟めば住持は異議もなく、其義心得候ひぬ。法筵讀經に程もなければ、退りて准備をしつべしとて、其短刀兩口を、役僧に拿受らせて、辭して奥へぞ退りける。恁而戍孝は、又野見六に向ひていふやう、汝も既に知る如く、汝に墓碑を作らせしは、我大父の靈なるべし。事怪きに過たれども、倘其事徵りせば、いかにして今日速に、墓石を建ることを得べけんや。實に大父の賜

文字としるしもありし歟とおぼゆ。あらば开は暗記の失なり。皆當に桐一文字に作るべし）自他緇の相似たるは、要なからずや、と沈吟じつゝ、役僧に向ひていふやう、言卒爾には候へども、當山の寶藏に、春王安王君の像見なる、短刀は候はずや。且當日、這寺内にて戰死したる、大塚匠作三戍の軀はいかになりにけん。且其折三戍の身に著たる、鎖衣身甲大刀などを藏められず候や。と問へば役僧も沈吟じて、否、大塚翁の亡骸は、當時總大將清方主の下知によりて、市に棄たり、と傳へ聞るのみ、开が大刀などは候はず。但し春王安王君の短刀は、今も藏めて寶藏に在り。只年の六月毎に、出して虫を拂ふのみ。といふを戍孝うち聞て、しからば最自由ながら、其短刀を見まくほし。いかで方丈へ願せ給ひて、疾一見を饒し給へかし。と請れて役僧推辭に由なく、應をしつゝ退きて、俟すること半晌許。恁而住持の老僧は、那兩口の短刀を表皮の儘に役僧に、持せて客殿へ出て來つ、戍孝等にうち向ひて、只今何か奇事あるにより、一見を請れたる、那兩公達の短刀を、稍拿出させ候ひぬ。といへば役僧心得て、卒とて遞與す短刀兩口を、戍孝やをら受拿りて、表皮の紉を解開きつゝ、拿出して是を見るに、是則右手挿なるべし、長短は共に一尺有餘、表裝は同樣にて、兩口ながら鍔なければ、いよ〳〵疑訝りて、住持と役僧に示していふやう、這短刀には鍔あらず、素より恁而候や。と問れて兩

小可則心得果て、手實一通を寫てまゐらする時、其姓名を問けるに、否、我名は告るに及ず、徑に犬塚信濃と錄しね、那人必知るよしあらん、と解示しつゝ手實を受拿りて、飄然として出て行給ひにき。恁而昨日は、細工成就の、約束の日で候へば、形の如くに彫果て、施主方を俟程に、宵昨御寺の役僧樣より、御使を下されて、客人犬塚主の所要あり。翌の朝開に來よ、とありしかば、必是誂られたる、三箇の墓表のことなるべし、と小可早く心得て、皆地車にうち載て、牽せて參候ひぬ。と言詳に報しかば、犬塚が疑惑はさら也、諸犬士ゝ大も訝りて、倶に眉をぞ顰ける。當下戌孝は、又里見六にうち向ひて、汝が今告知せぬる、此事は實なるべし。なれどもいまだ心得ず。那内金の代に受しといふ、鍔と鞘をもて來ぬるや。と問れて野見六應も果ず。懷紙をうち開きて、开はこゝに候。といひつゝ、件の二種を渡せば、戌孝受拿りて、左見右見ても思ひ得ず、自餘の犬士に示していふやう、見給へ這小鍔は、童佩にぞあらんずらん、鞘は桐葉に一の字を彫たり。是則今我佩たる短刀の鞘に似たり。這短刀の事はしも、犬川こそよく知りたれ。昔大父匠作翁の、世に在そかりし時、小母龜篠刀自に取せ給ひしを、故ありて、我戌孝に傳へたる、桐一文字即是也。（作者曰、桐一文字を先々の回に、謬て菊一

石多く積登しゝを、車奴五名六名に牽せ來て、御客人犬塚主に、拜面せまくほしといひけり。こゝへ召よせ候はんや。といふに戍孝訝りて、开は心得ぬことにこそ候へ。歎しからずは召せ給へ。と應をすれば、役僧は道人を招きよせて、那野見六を召せけり、姑且して、石工野見六は、手に茶染の絹の無裡外套を、疊し隨に握り持て、客殿の邊に來て、先役僧に會釋しつ、却次の間に跪きて、小可は字賀地野見六にて候也。犬塚樣は在するや。と問ば戍孝找み出て、犬塚信濃は則我也。汝は我を知たる歟。と問返されて野見六は、膝を找めつ近づきて、然ン候。今より三十日有餘前の日に、年紀五十八九なる、一個の武士、我店舖に來給ひて、三座の墓石を誂給ふ、石の小大に注文あり。是は當驛內なる、金蓮寺に建る墓表ぞかし。七月某の日までに、遲滯なく造り出しね。其折安房の里見の家臣、犬塚信濃戍孝と、喚做す武士の來ぬることありて、墓石の價を遞與すべし。心得てよ、と宣せしかば、小可答て、仰承り候ひぬ。然けれども、些の內金を賜らずは、作事の手創を致しがたかり。其金子攜へ給ひしや、と問へば那武士沈吟じて、否とよ今日は、我懷に財なし。然ばとて遲滯すべからず、といひつゝ懷を搔撈りて、純金なる小鍔二枚と、又純金なる兩箇の鞢を拿出して、そを小可に渡て宣ふやう、こは三箇ながら純金なれば、價十餘金に當るべき東西ぞ。權且是を留め措きね。犬

に舘の賜りたる、路費の黄白猶有べし。しかれども、我主僕百十數名、この地に逗留の房錢と、追薦三日の法事料、幷に祠堂金と、建立三個の墓石料に、必や足らざるべし。故に我、自餘の義兄弟等と、夙く商量したる義あり。我先盤纒の餘るべきを、三十金和殿に借すべし、いでく。といひつゝも、懐を搔撈て、件の金を拿出せば、下野親兵衛、莊介豐後、現八兵衛大學も、各財嚢を解開きて、手に手に拿出す三十金を、軈て一緒にうち合すれば、二百十兩とぞ數れける。當下自餘の六犬士も倶にいふやう、犬塚今這金をもて、和殿の急を資助ぬる、我們が斷金の志は反て薄く、舘の御恩澤は究めて厚かり。そも和殿の孝感にて、よき折からにありけるかな。と異口同樣に稱れば、戍孝は然也。と應て、件の金を受藏きて、懐なる勒肚に、楚と斂めて答るやう、寔に一心異體なる、義兄弟にあらざりせば、何人かよく我を資助ん。开も亦舘の賜也。恁ばかりは沒らざるべけれど、這儘先預りてん。と答て感嘆したりける。這時、大は厠に登りて、姑且這里に在ざりければ、後にこそ義を聞知なるべし。折から又撞出す、人定鐘の响くにぞ、沙彌道人出て來て、爲に蚊帳を垂れ、臥簟を設て退けば、、大犬士は共侶に、軈て枕に就きにける。この次の朝、大犬士等は、倶に夙く起出て、齋も既に果し折、役僧が告るやう、昨宵示させ給ひし義を、石匠野見六許いひ遣しけるに、野見六は、目今地車三輛に、墓

誼什麽。と談ずれば、役僧答て、开はいと易かり。方僅住持いへることあり、御一路人の大禪師は、活佛にこそ在べけれ。一宿也とも東道せば、結緣の歡びありとて信服せり。然せる欵待なきを歎ひ給はずは、幾までも在せかし。といふに戌孝歡びて、开は幸多かりき。就て問まくほしき義あり。本驛に石工ありや、あらば課て、三個の墓表を、作せまく欲するのみ。といふを役僧うち聞て、然なり、這驛內に、宇賀地野見六と喚做したる、一個の石匠あり、弟子兩三名を使ひ得て、細工も亦拙からず。年來當山へ出入しぬる、定職匠で候へば、今宵人を遣して、其義を心得させてん、明日は夙めて參るべし。と應に戌孝歡び承て、そも亦便宜のことなりき。必憑奉る。といふに役僧心得果て、又遽しく退りけり。姑且して住持の老僧は、一個の沙彌に指燭を秉らせて、徐やかに出て來つ、丶大と犬士等に、非時の疎略なりしを陪話て且いふやう、只今役僧に示させ給ひし、御追薦の讀經の事、各當寺へ止宿のことは、都て心得候ひぬ。禪師は實に神僧にて、野衲等が及ぶ所にあらず。明日より二日の法事には、導師に憑奉る。と讓るを、丶大は聞あへず、いかでかは其誼に當らん。只是和僧の引接こそ、施主の願ふ所なれ。と答て餘談に暨びしかば、住持はいよ〱敬服して、敢又多辯せず、辭して方丈へ退りけり。既にして這客殿に、他人あらずなりしかば、道節がいふやう、犬塚和殿も、襄

を照すに似たれば、金蓮寺の法師等は、這光景に駭嘆じて、敬服せざるはなかりけり。這時匠作三戍の穸は、距こと西へ七八歩にして、夫役等是をも穿果しかば、戍孝則其髑髏を安葬して、四僧經を讀、ヽ大引導す、其所作始に異ならず。事既に果しかば、夫役等手に〳〵鍬を採りて、三個の葬穴を埋るに、穿る時よりも最蚤くて、故の土饅頭に做しょかば、寺僧等三箇の卒都婆を建て、香案を備ふるに、犬塚を首にて、諸犬士都て燒香し果て、却夫役等を譽て、ヽ大と倶に、寺僧に引れて、又客殿にかへり來ぬる程に、夏の夜なれば短くて、道人が撞出す、初更の鐘鎬々たり。登時役僧出て來て、ヽ大犬士等に齋を薦む。夜分なれば非時と唱ふ。湯淘飯なれども、三四の蔬菜あり。伴當夫役局平まで、皆從者子舍に聚合せて、夜飯の欵待に遇るなるべし。當下戍孝は、諸犬と倶に、役僧にうち向ひて、改葬非時の欵待を謝して、且いふやう、我們は這回京師より、神號の勅額を衞奉つりて、安房の稻村へ還者也。爾るに改葬は三日の忌あり。この故に一路人、蜑崎照文と喚做す者、伴當數十名を從へて、守て本驛の客店に在り。我們主僕三十餘名、今日葬事に觸し者は、他と同宿すべからず。勿論那三髑髏の爲に、今日よりして三箇日、追薦の佛事をせまく欲す。殊に自由に候へども、三日の讀經果るまで、我們主僕三十餘名に、止宿を饒し給はんや。饒され難ば驛内にて、別に歇店を求むべし。この

を丶大は聞あへず、いかでかは其義に及ん。拙衲は客僧のみ。那三髑髏は、和僧の道徳に、縁ざることを得ざるべし。先追葬をいそがせたまへ。といふに住持は應をしつゝ、辭して方丈へ退りけり。恁而犬塚信濃戍孝は、伴若黨漕地喜勘太と、息部局平を召登して、兩箇の小瓶を拿下させて、却役僧に案内を請へば、役僧則先に立て、春王安王の軀を瘞めし、舊塚の邊に造らしむ。諸犬士丶大も戍孝と、共侶に行て是を見るに、只一丘の土饅頭のみ、朽たる卒都婆二本あり。戍孝も亦諸犬士も、愁然として、懷舊懷古の、憂情に勝ざりしを、然而在るべきにあらざれば、夫役等に吩咐て、件の塚を穿起さするに、夫役等は皆こゝろ得て、則當寺の道人に、鋤鍬幾挺歟借出させて、力を勠して穿程に、既にして日の暮しかば、犬士等則役僧に薪材を乞て、もて篝火にして夜作の便にす。既に故骨に逮ぶ時、法師四口許出て來て、或は線香を燒、或は木魚をうち鳴しつゝ、異口同音に讀經する程に、丶大も亦復是を幇助て、讀こと約莫半晌許、既にして讀訖て、先春王安王の髑髏を斂めたる、小瓶を穸に下さしむ。當下法師等は、丶大に引導を請しかば、丶大は謙讓三番にして、饒すべくもあらざれば、竟に左に蕉火を採り、右に木钁を携て、找みて穸にうち莅て、高く引導の語句を誦して、偈を唱へ喝を吐く、其聲の妙なるのみかは、骨相威ありて猛からず、且其眉間より、毫光粲然と散徹して、宛穸

前の倚子に凭りて、兩箇の小瓶にうち向ひて、眼を閉て念誦を凝せば、高足發聲の法師、其間毎に鐃鈸をうち鳴して、既に讀經を促がせば、衆僧各經卷の繙きて、異口同聲に誦出せば、住持も倶に聲を合せて、諳讀すること半晌許、丶大も倶に是を帮助て、同經同調、聲を惜まず、清亮として高ければ、宛春の百千鳥、百囀のそが中に、迦陵頻伽の聲ある如く、淸濁雲壤爭難たる、衆僧憶ず睛を擧て、驚き見て憚る色あり。恁而讀經果しかば、住持は倚子を退けて、衆僧と共侶に、又經を讀梆兒をうち鳴して、うち匝ること許多番、既に輪り果し時、住持則本尊を膜拜して、香を燒き佛足を戴き、念じ訖りつ退きて、小瓶の髑髏に廻向しつ、水を手嚩樒葉を採りて散し、眼を閉合掌して、春王安王弟兄と、大塚匠作の法號を喚起し、且菩提を唱へ、施主の功德を讃し、更に諷誦文を諳讀し、訖て徐に退きて、軈て胡床に著く程に、高足發聲の法師、鉦をうち鳴して、高く六字の名號を唱れば、衆僧倶に聲を合て、連りに念佛する程に、一僧身を起し來て、施主に燒香を薦れば、則戌孝を首にて、犬士等皆迭代りに找み出で、燒香禮拜して退けば、最後に、丶大も燒香す。是にて法事は果にけり。登時住持は胡床を離れ來て、先戌孝等にうち向ひて、改葬の功德を稱えて、更に、丶大に名對面して、且いふやう、師兄は大禪師の高僧にて、をはすると承れば、導師に憑み奉るべかりしに、其義を後に聞知たれば、憶ず無禮を仕りぬ。と勸解

客殿に造らしむ。戍孝是に坐を譲りて、改葬の事恁々。と速なりしを告知すれば、大家歡ぶ
幵が中に、丶大は然こそと微笑て、洒家は使の來ぬると聽て、其誼なちんと思ひしかば、夫
役等をさへ將て來れり。他等に課て故墳を、穿起させん爲なりき。といふ間に役僧は、又遽
しく出て來つ、衆人にうち向て、長老諸彥光臨を辱くす。住持拜面すべけれども、法事に
程なく候へば、葬果て見參しつべし。各禮服の御准備候や。と問へば戍孝、然ン候。衣
裳は、皆准備あり、いそがせ給へ。と促せば、役僧は阿と應も果ず、走りて奥へぞ退りける。
恁而沙彌喝食等は、丶大及諸犬士に茶を看め、果子を薦る程に、讀經の法師等を、本堂へ、聚る
鐘を撞鳴せば、沙彌等も侍らずなりにけり。登時八犬士は、伴當に持せたる、袱裹を解開き
て、手に〳〵拿出す、白麻の衣、麻の祉衿を被更れば、丶大は素より袈裟法衣にて、又執裝ふ
こともなく、犬士と倶に身を起して、齊一本堂に赴きつ、俗を離れて客坐に居り。施主は戍孝
を首にて、犬士等程よく列坐せり。既にして、讀經の法師十口許、同色の袈裟法衣にて、うち
連立て出て來つ、先本尊を膜拜して、經案を並べたる、左右二側に連り立て、銅鑼を鳴し、木
魚を敲き、梵唄數聲唱る程に、徐に出來る住持の老僧、萌葱紋沙の僧衣に、純絳の錦綉の袈裟被
て、手に拂子を採れりける。左右に從ふ兩個の沙彌あり、手爐を執り、如意を執れり。住持則佛

家に、憚りなきにあらねども、既に許多の年を歷て、三四の御代代らせ給へば、今は忌べくも候はず、心得てこそ候なれ。といふ答に障りなかりしかば、戍孝歡びて又いふやう、咱等は去向をいそぐ者也。且一路の主僕百二三十名あり、开が中に、七人は、咱等が義兄弟にて、一個は今番京師にて、大禪師に做されたる、丶大と喚做す師父にて侍り。皆葬事を資んとて、倶に當驛の客店に在り。尙日影は高かるに、今より改葬せまく欲す、この誼を許容れ給ひねかし。と請れて住持は推辭に由はく、开は性急なる事ながら、旅中とあれば是非に及ず、左にも右にも行ひてん。と答て侍坐の役僧に、事恁々と吩咐て、辭して奧へぞ退りける。當下戍孝は、件の一義を、丶大禪師、と七犬士等に告んとて、玄關に出て來つ、伴若黨に吩咐て、驛の客店へ遣しつ、却局平が齎したる、兩箇の小瓶の朸を解せて、悄地に蓋を開きて見るに、果して一箇の小瓶には、小き兩箇の髑髏あり、又一箇の小瓶には、大人の髑髏ありければ、哀悼の淚胸に滿て、泫然たるを然氣なく、手早く蓋をうち覆ひて、故の像くに掛る索を、局平に手傳せて、然而役僧に髑髏の事を、告げて指揮に任せしかば、役僧則心得て、一兩個の道人に、兩箇の小瓶を受拏らせて、軈て本堂なる、佛の御前へぞ居にける。爾程に、犬阪犬江犬山犬村、犬川犬田犬飼等の七犬士は、丶大禪師を先に立て、伴當夫役過半を將て、金蓮寺に來にければ、道人案內して、

姫神の勅額に、然しも憚りなきにあらず。各位は先へいに給へ、咱等は這誼を做し果して、後よりこそゆくべけれ。といふを七犬士等は聞あへず、いかでかは然る僻ことをせん。和殿の大父は、我們が、大父にしも異ならず。然ば共侶に逗留して、其葬を幇助てん。と議すれば丶大も俱にいふやう、佛事は是出家の役也、見捨てゆくべき足は得もたず。咱等も俱にと議し澁るを、照文は推禁めて、所詮甲乙といはんより、皆這驛に逗留して、其葬を果して後に、俱にかへりゆくとても、既に御名代の事果たれば、懈るに似て怠るにあらず。咱等は勅額を守り奉りて、當驛の歇店に在ん、這義いかに。と談ずれば、大家聞つゝ點頭て、其議說得て穩便也。と惴るを信濃は禁めていふやう、幵は辱き事ながら、今多人數にして、寺内に入らば、反て事の障りあらん。各々位は、先宿投て、事の成るを竢給へ。咱等は這局平と、伴當四五名を從へて、入りて寺僧に相譚ふべし。といふに大家諾ひて、先紀二六喜勘太等に吩咐て、好宿執れとて遣しけり。爾程に犬塚信濃戍孝は、局平等を從へて、金蓮寺の玄關に呼門つ、則役僧に面談して、告るに追葬の事に及べば、役僧亟に答難て、軈て客殿に請待しつ、茶を肴めなどする程に、住持出て對面す。當下戍孝は住持に向ひて、告ること右の如く、且局平が靈夢の事さへ、明々地に說示せば、住持は聞つゝ感歎して、那兩公達のことはしも、然しも京都將軍

舊里に在り。寒農で候へば、母の世に在りし時も、主家の後の事などは聞も知ず候ひしに、去る夜三夜、靈夢の告ありけり。譬ば甲冑したる一個の老武者、我枕方に立給ひて、我は嘉吉に戰歿したる、春王安王君の小傳、大塚匠作三戌是なり、當日我子番作一戌が、忠義の搼きにて、兩公達の御首級及我首を、埋て恁々の地方に在り。然ども美濃の金蓮寺は、兩公達御終焉の梵刹なれば、那里へ返しまゐらせまく欲す。汝悄地に主僕の三箇の髑髏を穿拿りて、垂井の寺へ齎ゆかば、其日必我孫なる、里見の家臣犬士の一人、犬塚信濃戌孝と、喚做す者に逢ふことあらん、其折這誼を他に告なば、戌孝宜く計ふべし。努な疑ひそ、よくせよ。と示さるゝこと一度のみならず、靈夢三夜に及びしかば、うちも閣れず件の如く、做て齎し候ひしに、果して刀禰に逢まつるは、噫奇かりとも異かりける、神謀に候はずや。と言老實達て告るになん。戌孝は愕然とうち驚きつゝ、且歡びて、原來汝は然る者也し歟。我も亦昨夜の夢に、其誼を親の告給ひき、と見し靈夢はありながら、泡沫夢幻の果敢なきを、憑むべきにあらざれば、人には說も知せざりしに、自他夢の異ならずは、今さら何ぞ疑ふべき。誠に不思議の事なりき。と答て軈て自餘の犬士と、丶大照文を見かへりて、各目今聞るゝ如し。咱等は當寺の住持に告て、兩公達と我大父の、髑髏を改葬るべし。なれども律令に改葬は、子孫必三日の忌あり。伏




金蓮寺の門前に成孝局平に逢ふ

蠣崎某甲を撃捕りて、春王安王君の御首級と、父匠作の首を奪ふて、多兵を殺脱け辛くして、信濃路に走りつゝ、御嶽大井の間なる、小道場の墓所に三級の首を、悄地に瘞め奉りにき、と我身髫歳なりし時、親の昔話に聞知りたり。今料らずも這地を過れば、誘立よりて、故にし迹を見てゆくべし。といふに大家諸て、しかるべし。と應つゝ、ゆくこと兩三町にして、と見れば一座の梵刹ありて、其三門に揭げたる扁額に、金蓮寺と書したれば、問でもしるき茲也けりとて、犬塚を先にして、大家寺内に入らまくせし時、但見東のかたよりして、年齡四十有餘なる賤夫の、行裝鄙俗たるが、兩箇の小瓶を膝著たる、枴を肩にうち掛つゝ、遽しく來ぬる程に、八犬士等を見出しけん、いよく走り近づきて、犬塚信濃にうち向ひて、恐ながら問侍らん。這刀禰們の御中に、安房の里見殿の御家臣なる、犬塚主は在さずや。と問れて信濃は訝りながら、幵は何事ぞ。汝の問ふ、犬塚信濃は我也。と名告に件の賤夫は、奇也々々と含笑て、やをら枴をうち下して、跪居て信濃に告るやう、最卒爾には候へども、小可ば信濃なる、大井の驛に程遠からぬ、小篠村の莊客にて、息部局平と、喚做す者で候也。言長くとも聞し食ね。烏滸がましき說ながら、小可が親也ける、息部是非六は、信濃國の人氏也し、井丹三直秀主の老僕にて、嘉吉の亂は殉肚斫て、人に譽られ候ひき。當時小可は總角にて、母と倶に

妙也。彌善政を施し、隣國と和順して、東國泰平の功を愆つべからず。と仰出させて、且御教書を渡し、歸國の暇を賜りける。義尙公は豫より、欲し給ふよしありて、八犬士の武藝を試相て、殊に勝れたる者を、留めて、京師の扞城にしつべし、と思食たりけれども、京家の武士、近習の壯佼等が、那才を忌み、能を媢みて、迭代りに譏しつゝ、傾け稟す者多かりしかば、遂に其義を停られて、歸國を許し給ひし也。且この時管領政元は、當職を罷られて、本領阿波に在りしかば、八犬士は皆幸に、恩怨の間を免れて、安房へかへり行のみならず、伏姬の神號勅額、ゝ大禪師の僧官は、思ふに優たる朝恩なるに、歡び勇まざるはなく、廣當直親に別を告て、次の日三條の歇處を立去りつ、伴當夫役を從へて、岐岨路を安房へいそぐものから、ゝ大は禪師に倣されしを、敢歡ぶ心なく、あらずもがなと思ひけり。恁而這一僧九士は、主僕百十數名、東を投てかへりゆく。其路只一日ならず、又日に歩み夜に歇り、美濃の垂井を過る時、犬塚信濃は、ゝ大照文と、自餘の七犬士等を喚留めていふやう、這里なる金蓮寺は、在昔嘉吉元年五月十六日、春王安王君御事ありし時、我大父大塚匠作三戍、其御終焉を見るに得堪ず、多兵を敵手に血戰して、竟に戰歿してけるに、我父番作一戍は、當年少年なりけれども、忠孝の武勇に匱しからねば、當日群集の中に在り。親を援けて跳出つゝ、兩公達を創手なりける、牡

殿に擬せられて、倶に天盃を下されける。其後仰出さるゝやう、里見左少將、其父治部卿と、君臣新恩の官職を、辭奉らまく欲する義は勅許あり。今よりして後、君臣倶に宜く前官たるべき者也。就て左少將の女兒、伏姫の孝烈なる、死後には屢神靈を顯して、祐けて其國に大功ありし事、又、大が多年行脚の事、今茲は水陸施餓鬼の折、法驗利益掲焉なりしを、秋篠將曹廣當が奏聞にて、叡感特に淺からず。この故に伏姫を、齋きて富山の神に做すべく、ゝ大法師を推登して、大禪師に做すべし、と宣下あり。如旃最も畏き、帝宸翰を染させ給ひし、富山姫神社といふ、五大字の勅額を賜りつ、且、大禪師には、位記と僧衣を恩賜あり。八犬士と照文には、巻絹各二卷をぞ下されける。寔に異例の朝恩なれば、ゝ大照文八犬士等は、倶に戰々競々と、拜しまつりつ、歡びあまりて、宛天の浮橋を、渡し果せし心地して、被き連てぞ退出ける。然ばこの日關白殿を首にて、百官束帶の袖を連ねて、是を觀る者尠からず、帝も珠簾の裡よりして、那毎を矚して、うち含笑せ給ひけり。然ば又この次の日に、ゝ大照文八犬士等は、室町殿へ詣でつゝ、義尙公に見參す。管領政長、評定衆諸侍、熊谷直親に至るまで、咸正廳に出仕して里見の毎を召よせらる。室町殿著坐の時、管領政長奉りて、ゝ大照文犬士等に、台命を傳るやう、房州朝武の恩命に從ひまつりて、定正顯定と、和睦尤神

餘日になりしかば、朝廷には、秋篠廣當が、奏聞にて聞召す所、里見義成の仁義善政、幷に八犬士の忠孝智勇、其淵源は伏姫の、孝烈神靈の致所、且、大法師が二十餘年の、行脚勤苦の利益をもて、八犬士を索得て、里見の家臣に做しゝこと、他が出家堅固の功德、都佛意に稱ふべき事、及蜑崎照文が、年來招賢の使して、功多かりし事までも、廣當が安房の稻村にて、人の噂に聞知る處、正しかりける其顚末の、奇くも又妙なれば、帝を首奉り、關白殿下殿上人、地下の毎に至るまで、疾其十個の僧俗を、見まくほしう思召しかば、屢室町殿へ、他等が參內を御催促ありけり。有恁し程に、義尙公の、病著瘥り給ひしかば、先里見の使者每を、參內させて、後に當御所へ召すべしとて、則管領政長より、丶大照文八犬士等に、この義を下知ありしかば、丶大照文犬士等は、次の日朝服を整へつ、且伴當夫役に、臨時の調貢を捧げさせて、南大門より參內す。秋篠廣當案內に立て、御階の下に參しむ。當下、大照文は、義實義成の奉獻の上書と、當職の辭表を呈すれば、執奏の公卿受拿りて、且仰する義あり。照文、大は、左少將と、治部卿の名代なれば、權に升殿を許させ給ふ。又八犬士等は陪臣にて、且自分の拜禮なれども、國の爲に亂を撥め、或は靈虎を對治して、宸襟を休め奉りける、其功、共に鮮少ならず。こゝをもて、曩に持資入道道灌が、上洛參內の例に依るべしとて、是亦權に升

しかば、ゝ大照文八犬士を、正廳へ召よせて、管領畠山政長對面あり。熊谷直親執達たり。當下政長は、ゝ大照文八犬士等にうち向ひて、義實義成父子の、忠信善政と、八犬士諸臣等の、勳功を先嚮て、今日しも汝達將軍家(足利義尚)に、拜見の誼を饒さるべきに、上には昨日より、御欠安をはしませば、目今の誼に及れず。且汝達が參內も、異日の御沙汰にあるべき也。宿所に退りて其折を、俟奉るべしとありしかば、ゝ大照文八犬士等は、先度に懲りて妙ならず、と思ふもの兀辭難て、只得唯々と承まつりて、退りて軈て東山殿へ、詣て東西を獻するも尠からず。其歸路に管領政長、及評定衆の、諸邸をうち巡りて、獻殘の人情を齎するも亦差あり。諸禮やうやく事果て、三條の宿所に還りしより、日を累ぬれども御沙汰なければ、誰か逗留の徒然に堪ざるべき。ゝ大法師は炎暑を犯して、日毎々々に歇店を出て、洛內洛外いへばさら也、日枝鞍馬愛宕の山、或は紫野なる大德寺に參禪して、一休和尙の迹を尋て、靈山靈地名所舊蹟に至ざる隈なかりしかば、犬塚犬阪自餘の犬士も、又照文も迭代りに、杖を京師の名所に曳ども、獨犬江親兵衛のみ、京童が聞知りて、靈虎射ける勇少年が、復來て在るを觀つべしとて、他が出るを等と聞えしかば、うるさく思ひて宿所に在り。他は京師に去歲の秋より、逗留久しかりければ、自餘の犬士に同じからで、珍らしからぬ故もあるべし。慫徒に日を過しつゝ、十

して多からず。餽内葉四郎猨岡猿八、直塚紀二六漕地喜勘太を首にて、輕卒奴隷夫役あり。廣當の從者と倶に、百五六十名許なるべし。六月六日の早天に、主僕巨舫にうち乘りて、大磯を投て漕するに、且開涼しき順風にて、この日亭午の時候に、件の浦に來にければ、這里より船を洲崎へ返して、陸路を西へ赴くに、貌姑峯足柄は、胤智が故鄕にて、伊豆は莊介の故國なれば、有繋に懷舊の情なきにあらず。恁而、日に歩み、夜に歇り、ゆくこと十餘日にして、障ることなく京師に來にけり。登時秋篠廣當は、室町殿へも、朝廷へも、返命を奏せんとて、別れて其方に赴きしかば、丶大照文八犬士等は、三條頭に歇店を求めて、軈て熊谷が宿所にゆきて、義實義成義通の名代、丶大照文幷に八犬士等、東西和睦恩命の御答、又君臣拜任の御禮に、參上の義を告しかば、直親則對面しつ、其上洛の速なるを勞ひて、明日室町東山の、兩御所へ參上るべしとて、其進退を指揮あり。且扇谷山内の使者、白石重勝齋藤高實は、拜禮の事果て、大昨日歸國を許されしかば、岐岨路を東へ退りたり。恁れば各も、遲參すべからず、と期を推て、幵が儘旅宿へ返されけり。然ば次の日、丶大照文八犬士等は、倶に朝服を整へて、件當夫役を從へつゝ、巳牌の左側に、室町殿へ參上りて、里見義實義成親子の、名代の使者、幷に家臣八犬士等、謝恩の爲に上洛の義を聞え上て、義成主の呈書と、拜任の贄多種を進らせ

恁の仰候ひきとて、件の一議を告知らすれば、丶大は听つゝ眼を睜て、开はいと難義の御諚也。出家人がいかにして、各位と共侶に、然る晴がましき御名代に、立て京師へや參るべき、とは思ひ候へども、我身の昔を見かへれば、必死の罪を宥められて、頭髻を首に換させ給ひし、老侯の御大恩を、今さら空に仕らんや。況今那君の、御名代に擇れしは、生甲斐ありといひつべし。縱水火の中也とも、辭ひまつらば不義不忠也。御諚承り候ひぬ、參るべし〳〵。と繰返しつゝ答稟せば、義成主歡びて、然らば事旣に急也。照文は明日、丶大を將て、瀧田へまゐりて老舘に、この義を具に聞え上て、猶御旨を請まつりね。親兵衛信濃下野等、自餘の犬士も共侶に、逆旅の准備をいそぐべし。又六郎兵庫助は、朝廷幷に室町殿へ、獻るべき東西を有司に課て調達すべし。と言遺もなく宣はすれば、大家齊一言承して、うち連立てぞ退出ける。左右する程に、暑熱彌增、六月五日の朝、秋篠將曹廣當は、明日の旦開に當所を退りて、歸京すべしといふ、告ありしかば、義成主は又、親兵衛と照文をもて、餞別の人情あり。去向は洲崎の港口より、相摸なる、大磯へ推渡して、東海道を上りゆくべし、と豫定められしかば、犬江親兵衛犬塚信濃、犬阪下野犬山道節、犬村大學犬川莊介、犬田豐後犬飼現八兵衞等は、蜑崎照文、丶大法師と、皆廣當に相俱して、出船の纜を解まくす。約莫這僧俗十名の伴當は、胡意略

りしかば、親兵衞も照文も、一議に及ず諾なひて、退りて先兩家老と、七犬士等に告知らせて、却一同に義成主へ、那議を聞え上しかば、義成主點頭て、然らば我と義通の名代には、照文兼帶たるべき者歟、八犬士等は受領の拜禮に、上洛せずばあるべからず。但し老舘(義實をいふ)の御名代には何人を欲得參すべき、御意を伺ひまつらん歟。と問れて親兵衞照文は、阿と應つつ共侶に、膝を找めて稟すやう、其義は往日、老舘の、御意を承りしこと候ひき。這回上洛の御名代には、ゝ大こそ相應しからめ。我は久しき桑門兒なり、非如升進の朝恩ありとも、義成義通と同じかるべからず。且ゝ大は、二十餘年、行脚は東の八箇國のみ、いまだ皇城の地を踏ざれば、よき折からにてあらむずらん、と仰られ候ひき。といふに義成主又點頭て、有理其御意こそ最妙なれ。然らば、ゝ大を召べし。といそがし給へば、照文答て、否、那法師は、東西御和睦の、歡びを稟上んとて、方僅參りにき、と聞えしかば、遠侍にもや候はん。と告れば義成主微笑て、其は幸のこと也かし。疾召よせよ。と吩咐給へば、後方に侍りし近習の毎、應も果ず身を起して、次の間投て退りける。姑且して、ゝ大法師は、引れて君邊に來にけり。當下辰相清澄照文も、犬士等も卒とばかりに、軈て席を讓りしかば、ゝ大法師は恭しく、義成主に拜見して、和睦の歡びを稟すにぞ、親兵衞照文執合して、師父はいまだ知給はじ。目今恁

第九輯　卷之五十

第百八十回上附目錄

一姫一僧死生榮貴を等くす
孝感力藝詠歌奇異を贊す

却說、扇谷山内の兩管領、(定正顯定)里見と和睦整ひて、會盟の義を果せしかば、誂使熊谷二郎左衛門尉直親は、既に歸京の聞えあり。是により定正顯定は、使者を室町殿へまゐらせて、罪過恩免を、拜謝し奉らんとて、定正の使者、白石城介重勝、顯定の使者、齋藤左兵衛佐高實、兩家の伴當尠からず、隨即直親に相倶して、明日啓行を致すといふ。この日直親より、快船の使をもて、勅使代秋篠廣當に、件の義を告しかど、廣當は、敢いそがず、先其使をかへし遣りて、却犬江親兵衛と、蟹崎照文を招きよせて、告るに件の義をもてして、聲を低て又いふやう、熊谷歸京の告あれども、這回は咱等、他と一路兒に做るべからず。何とならば、他は兩管領の使者を倶したり。我は是勅使代にて、且各を伴ふべければ、他が下風に立がたかり。こゝをもて四五日を歴て、歸路に赴まく思ふ也。先この義を安房殿へ、稟し給へとあ

ど、看官に夙く結局までの趣を、知せまほしくて、其題目を總目錄中に附載しに、今編次るに及びて、豫思ひしよりいと長くなるものから、其題目を增改んはさすがにて、一回を上下に分ち、或は三折して上中下を二卷にしつる者是也。是故に四十六の卷端に附錄目を出したり。(本書は目錄中に納む)宜く是と併見るべし。

本傳刊行の書肆、文溪堂贅言す。今板結局編、第百七十七回以下の題目は、前板に出されしより、文多くなるをもて、附錄目數回を新に題して、全部一百零六卷回外剩筆まで、一百九十一回にて、結局大團圓に成べきよしは、作翁の自注に見えたる如し。爾るに這大部の書に總目錄なくば、四方の君子、披閱の時每に、搜索に便りなかるべく、且遺忘に備るに足ざるべければ、今番又翁に乞ふて、首卷一卷を刊附す。首卷は所云總序、全部總目錄、八犬士略傳、姓氏目錄等是也、這卷あるときは、則看官時に臨みて、某の事は、某の卷某の回にあり、といふよしを、知るに速にして、利便是より捷はなし。況全傳中に、善惡賢不肖の人物、其姓名を漏さで、悉皆記憶すべからず。爾るを姓氏目錄に据時は、搜索の暇を費さずして、當に掌を指が如くなるべし。言に半頁の餘紙あるをもて、賜顧億兆の君子に這故由を告奉るになん。

倶に反命を致す程に、夕陽西に斜也。登時義成義通は、八犬士を將て、臺を下りて、倶に波濤盡處に立程に、定正顯定も、來會の大小名を將て、倶に濱邊に立出で、東西一霎時眺望て、各揖讓して退散す。是にて會盟果にけり。爾程に、武藏相摸安房上總なる、漁戸等は、この次の日より、江海の境を論ぜず、自他うち交りて、網を下すに、倶に海幸多なりければ、いよゝ生活の便著を得たり。又武藏下總の境なる、兩國河及墨田河に、浮橋を架渡して、良賤往還の便とす。こゝをもて兩國の士民、相親みて、胡越も肝胆に做りにけり。按ずるに夫木集に、康正の年間、墨田河に浮橋架しを詠る歌あり。其歌

すみだ河むかしは聞かず今こそは身をうき橋のある世なりけれ

康正より文明まで遠からず、看官作者の用意を知るべし。

本傳豐俊の像贊に、

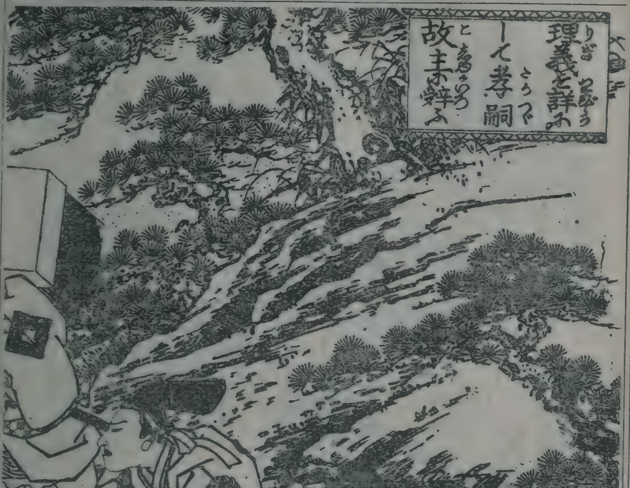
墨田河すみわびて渡りやすからぬ世をうき橋は昔なりけり

と詠りしは、右の歌を取れる也。畢竟扇谷山内の兩管領、里見氏と和睦會盟して、後の話甚麽ぞや。丹は又下回に解分るを聽ねかし。

作者云、前にもいへる如く、本輯百七十七回以下は、前板發兌の時、倘腹稿のみなりしか

て、我に仕へよ。然ば舊領に十倍して、多く美祿を食せまく欲す、這義誰何と挑みけり。孝嗣是をうち聞て、詞徐に答るやう、御諚承り候ひぬ。臣等も又是人也、其根を忘れて杪に憑んや。しかれども臣が君を棄たるにあらず、君が臣を殺せる也。夫覆水は盆に復らず、咄言は駟も及ぶべからず。かの折靈狐の冥助なくば、今いかにして、君に見參せん。廷尉（憲儀をいふ）我爲に謝せよ。君が惡ませ給ひたる、河鯉佐太郎は既に死りぬ。今は義に便り恩に緣る、里見の忠臣政木大全が、榮利の爲に哄誘されて、不義の奴になるべくも候はず、暇稟すと面も強、袖を拂ひつ件當を、いそがし立て又快船に、乘てぞ洲崎へ還りける。憲儀は興醒て、只得孝嗣の答へをもて、返命をしてければ、定正听て、眼を睜り、口を鉗みつ鼻息のみ、又いふよしもなかりけり。然ばこの日東西の、使者の快船、水路六里を往還しぬる程、洲崎の臺にては、當所洲崎明神の神人等、舞樂を奏す。犬塚信濃犬山道節、倶に扇子を開きて、立て舞ふに、よく曲節に稱ひしかば、人咸驚き見て、何れの日に學び得たるやとて、感ぜざる者なかりける。然ば又三浦の濱なる假家には、鎌倉より招きよせたる、能樂人等、祝言の能樂を謠頌す。其吹鼓の音迭に浦風に勾引れて、最も幽に聞えけり。既にして助友東震は、誓書を捧て三浦にかへり來つ、又胤智孝嗣は、連署の誓書と、定正顯定の謝書を受拿りて、洲崎の臺にかへり來て、




理義を詳み
して孝嗣
故主に辞ふ

憑る時にも阿容ず、後れず。扇谷の内人に、只這俊傑二名ありて、先度の恥を雪めたりとて、人皆是を譽にけり。然ば這時犬阪胤智、政木孝嗣が、三浦の假家へ造りて、定正顯定に、會盟の誓書を呈閲しぬるも、贄物の二樽三荷を進呈せしも、前に寫しゝ趣と、然ばかり差別なければ備にせず、其誓書は、犬村大學が綴る所也。是も又五箇條にて、自他示し合さねども、道理を知る者の藻する文は、宛符節を合せたる如く、好相似たるを、人一奇とす。定正是を白石重勝に讀せて、顯定幷に來會の諸侯と倶に听けり。听果て、又定正顯定より下、長尾景春の名代、直江兼充に至るまで、連署姓名の下に、各花押を寫して、又各各指を刺、血を染けるを、定正拿て、胤智に遞與すを、受戴きて得と見て、謝して懐にして罷出る時、定正則大刀一口を牽出物とす。次に政木孝嗣入り替り、假家に登り來て、又君命を演て、贄物の目錄を呈すれば、定正羞て答る所を知らず。顯定代りて、謝して亦、大刀一口を拿らせけり。這時犬阪下野は既に、伴の士卒を將て、船に乘りかへり去りぬ。孝嗣も推續きて、船に乘らまくする程に、定正は大石憲儀をもて、急に是を赶しめて、且いはするやう、前には我愆て、罪なき汝を死地に置り。其寃枉の分明なるよしは、往る日朝良朝寧が稲村よりかへり來て、詳に告しかば、只後悔の外あらず。汝倘三世の恩義を忘るゝことなく、忠孝の心、今も移らずは、立かへり來

む。助友則袴の括緒を解捨て、誓書を雙の手に、捧げて階を登れば、犬村大學立迎て、引て義成主に見しむ。助友先義成主を拜すれば、義成急に禮を返して、其來意を聞まくす。當下助友は、東西和睦、會盟の一義を演て、齎したる誓書を呈閱す。則是持資入道道灌が、糟屋の舘に在りて、定正顯定の爲に綴る所也、義成是を犬村大學に讀するに、誓は則五箇條にて、善政を施して、農を薦め、天子將軍に、調貢を懈る事なく、よく隣國に交りて、暴をもて、境を犯す事なく、賞罰を正くして、賢を求め、佞を遠ざけ、嫡子を廢て庶子を立ることなかれ、妾をもて妻に倣すことなかれ。凶年には隣國相資て、其足らざるを補ひ、不忠不義の行ひ是あるべからずといふ、其要領を載たれば、義成則姓名の下に、花押を寫して、指を刺て血を濺ぎ、是を助友に遞與て、且其使節を勞ひて、大刀一口を授け鳧。助友謝して退ぞけば、小幡東震の船既に造りて、贄物を進呈す。里見の靑侍等、是を受拿るに、白酒一樽、黑酒一樽鹽鴈二折櫃、生鯛二折櫃、乾魚二折櫃是也。東震則其目錄を執りて、階を登る時、犬江親兵衞立迎て、引て義成主に其義を告れば、東震は目錄を呈閱して、東西會盟の事果たる、兩管領の歡びを傳達す。義成是を謝して、又東震に大刀一口を拿せけり。抑巨田助友の心術人柄は、人の知る所也。這小幡東震は、年尚小けれども、父東良の風ありて、忠義廉恥に薄からねば、

には、諚使熊谷直親あり、洲崎の臺には、勅使代秋篠廣當あり、倶に這會盟を檢する也けり。この日は朝より天よく晴たれば、這里よりも那里よりも、千里鏡を用ひずして、頭人寸馬瞭焉たり。恁而巳の左側に三浦の濱にて、暗號の烽火を颺しかば、洲崎にても亦烽火をもて答とす。登時三浦の方より、巨田薪六郎助友、麻の肩衣長袴にて、黃金裝の大刀を跨たる、項には誓書を藏めたる、細小櫃を掛て、船の中央にうち乘れば、從ふ士卒五六名、舵工は八名艪も八挺、艪拍子揃へて漕出せば、次に快船又一艘、小幡木工太郎東震は、這會盟の贄使にて、其禮服は助友に異ならず、二樽三荷を相載て、從ふ士卒八九名、こも八挺艪もて漕せたり。有恁し程に、洲崎の浦より、漕出す二艘の快船あり、其一船は別人ならず、誓書の正使、犬阪下野胤智也。次なる船は、贄使政木大全孝嗣乘れり。各禮服從者贄物、上に寫すと相似たれば、今亦名狀すべからず。然ば東西四艘の快船は、波上三里の程にて、端なくも遭際ふ兀自、疾こと飛鳥に異ならねば、助友東震も、胤智孝嗣も、迭に目禮しぬるのみ、一瞬間に行過けり。約莫船の迅速なるを、唐山にては快船といふ、快く走ればなるべし。國俗の所云鯨船、又今俗の云、推送り船の類にて、今這四箇の船の迅速なるを思ふべし。閒話休題。爾程に巨田助友は、其船蚤く洲崎に屆りて、伴當を將て浦邊に登れば、警固の走卒兩三名、案內して臺下に造らし

輔朝寧、并に大石石見守憲重、其子源左衞門尉憲儀、齋藤左兵衞佐高實、其子兵衞太郎盛實、長尾太郎爲景、白石城介重勝、巨田薪六郎助友、小幡木工太郎東農、原播磨介胤久等是也。這餘足利左兵衞督成氏の名代、下河邊莊司行包、長尾判官景春の名代、直江莊司兼光來會す。成氏は先度に懲たり、又景春は獨立の志あれば、各病著に假托て、老黨をもて名代とす。この他箙の大刀自は、女流なれば會盟に與らず、且越路は遠ければ、稻戸津衞由充も、辭して來會せざる也。この日諸家の從臣士卒に至りては、枚擧に遑あらず。假屋の三面には、紫の幔幕に、白く竹に群雀の、花號染做したるを、掛亘らして、猩緋の氈をもて席とす。其左右には、數鎗五十條を架渡して、小幡馬纒あり。捍棒を執る走卒二百名、汀渚に在りて警衞す。其小頭人、各麻裃を、卬く褙みて、十手を執る者四五名在り。前濱には准備の快船二艘を維ぎて、其船毎に究竟なる、舵工八九名ぞ侍りける。然ば又安房の洲崎の浦には、去歲の初冬造らせたる、望海の臺あれば、別に假屋を儲るに及ず、只中黑の、花號ある幕を、張亘したるのみにて、外物を飾る事なし。恁而這朝里見左少將義成、右衞門佐義通、倶に朝衣朝冠にて、件の臺に著座在り。兩家老八犬士諸兵頭、有司近習に至るまで、皆禮服の袖を連ねて、相從ふ者尠からず、其姓名は省て具にせず。快船の准備なども自他異なるべくもあらず。三浦の假屋

誂使熊谷直親を、瀧田の城へ請待して、勸盃饗饌の、欵待大方ならざれば、八犬士等參仕へて、其席にぞ預りける。是よりの後、廣當直親は、這地に所要なけれども、東西の會盟を見果ずして、歸洛せんはさすがにて、直親は水路より、鎌倉及五十子に赴きて、其義を專催促す。廣當は猶稻村の城内に在り、這故に東西の使者往來して、會盟の日を定めらる。唐山戰國の時、諸侯其國境に出て、倶に血を歃りて、誓を做せり。しかれども、武藏相摸と、安房上總は、海を隔たれば、會すべき所なし。因て思ふに、相摸の三浦と、安房の洲崎は、海上僅に六里に過ず。こゝをもて天よく晴たる日に相臨めば、浦の苫家も、濱の雛松も、瞭然として好見えざる者なし。然ば會盟の日に、定正顯定は三浦の濱に出べし。又義成は洲崎の浦に出て、適に相臨む時、東西の使者快船にうち乘りて、且往來して、誓書獻酬の義を行ふときは、則會盟紛れあるべからずといふ、熊谷直親豫より、秋篠廣當と商量して、相定る所也。是より東西其準備あり。時に六月朔は、黴雨新に霽て、薄暑炎熱を增折なるに、この日は黃道上吉にて、且海邊納涼の爲にも宜しければとて、豫て卜定せられけり。爾程に、扇谷定正山内顯定は、三浦の濱邊に一座數間の、假屋を架させて、當日辰牌より、朝服にて出座せり。這日來會の諸侯は、千葉介自胤、三浦陸奧守義同、其子暴二郎義武、上杉五郎憲房、扇谷五郎丸朝良、式部少

が二隊の士卒一萬餘名、印東小六荒川太郎一郎等と倶に、一百餘艘の船に乘走らせて、同港口に歸著せり。皆稻村の城に參集ひしかば、屋の上に屋を重るまでに人多くして、熱鬧いふべうもあらず。然ば犬江親兵衛は出て、祖母妙眞を港口に迎へ、姥雪代四郎は、十條力二尺八を携て、出て音音曳手單節に、夙く這童弟兄を見せまく欲す。約莫這祖孫母子の功をありて、恙なき再會に、老を忘れし鹿杖の、つくとも盡ぬ迭の長談は、短き筆に、細寫すべくもあらず、看官是を査すべし。恁而其次の日に、犬阪犬村犬山等を首にて、武藏相摸に、久しく在城せし諸頭人は、皆義成主に見參して、忠戰軍功を賞せらる。妙眞音音曳手單節は、別に又這事あり、義成の夫人、吾嬬前にも拜見して、東西多く賜りける。這餘の士卒も咸恩命を稟ざる者なく、都て休暇の命ありて、各安堵の思ひを做すめり。是より又五七日を經て、犬塚信濃は、下總葛飾なる、暴河の邊に、成氏主を送り果て、士卒二百餘名を將て、稻村の城へかへり來にけり。恁てぞ東西の擾亂、餘波なく治りて、房總平安なりければ、良賤士民相賀して、置酒して千歲を唱ざるはなし。然程に、瀧田なる義實老侯は、義成義通其身まで、思ひがけなき升進の事、且八個の犬士まで受領の歡びに堪ず、我老髖たれども、是なき朝恩武恩を、稟奉りながら、其兩御使に對面せで、居ながら這生緒を、貪るべきにあらずとて、一日勅使代、秋篠廣當と、

ぬ。人各其君の爲にす。滸我は隣國也といへども、今より後は君の爲に、寸忠だも致すべからず。願ふは御身を愛し給ひね。夜も深て候へば、枕に就せ給はずや。といへば、成氏嗟嘆して、いはるゝ所寔に爾也。明日こそ別になりにけれ。といふに又望見一郎、科革七郎も共侶に、戍孝にうち向ひて、辭別の詞を盡しけり。抑這壯佼等は、曩に犬江が神藥にて、死を起されし恩義あるに、今亦犬塚が忠孝の、志を見聞しかば、いよ〳〵敬服の思ひあり、悄地に別を惜みける。恁而次の日は、天好晴しかば、成氏は辰牌時候に、國府臺の城を立出て、暴河に造りて、船に乘る程に、下河邊二郎、眞中大内藏、望見科革を首にて、滸我の作當百十數名、犬塚信濃も士卒を將て、其馬頭上まで送りける。休題說、往る二十一日に、政木大全滿呂復五郎等は、諸敗將の還る船を、洲崎の港口に送り果て、犬川莊介、犬田豐後等と倶に、稻村の城に退る程に、犬村大學、堀内雜魚太郎、田稅戸賀九郎、苫屋八郎等が、一隊の士卒三百餘名を將て、新井よりかへり來ぬる船十艘許、洲崎の港口に果にけり。其後又妙眞音音曳手單節は、浦安牛助と、猨岡猿八等の、士卒三十餘名同船して、是も洲崎にかへり來つ、其詰朝犬阪下野は、士卒三四千名、船七八十艘にうち乘りて、小森但一郎、木曾三介、千代丸圖書助、小水門目、鮠内葉四郎等と倶に、五十子より歸帆の聞えあり。この日又犬山道節帶刀と、登桐山八郎

まくらかの滸我の旅人むら雨のたちかへり來てぬらす袖かな

又其次に、おなじ心を、とありて、

そらにしるき人の誠は雲ならでひとふりおくるむら雨の大刀

と讀れしかば、戍孝屢うち唫じて、深く感じて且いふやう、恐ながら當意即妙、是をこそ子孫に傳へて、家の寶に仕らめ。一唱三歎餘興自禁ぜず。いと無禮には候へども、御返しを仕るべうもや。といへば成氏、それよかんなん。いかにぞや〳〵。と問れて戍孝阿と答へて、聲朗に詠ずらく、

今ぞほす身のぬれ衣はむら雨に親の遺せし言の葉の露

兩三番吟ずる程に成氏耳を欹て、聞つゝ憶ず膝拍鳴して、適愛たき實詠達意、求ずしておのづから妙也。願ふは是へ寫著てよ。と請つゝ刀の嚢を拿りて、裏をかへして差寄するを、戍孝は敢せず、其義は許させ給ひね。と固辭ども何でふ聽べき。望見科革硯を薦めて、卒とばかりに促せば、戍孝竟に脱るゝ路なく、裏の黄光絹へ件の歌を、書寫てまゐらすれば、成氏は、其墨の乾くを等て、大刀を嚢に斂る程に、短夜既に深初て、二更の鐘聲聞えけり。登時犬塚戍孝は、件の便面を推疊て、懐に楚と夾めて、又成氏に稟すやう、既に這年來の、志は仕り

も、我一介つ微恩もなきに、いかにして其名刀を得受んや。願ふは和郎の家に傳へて、子孫の寶貨にせよかし。と辭ふを戍孝聞あへず、御諚では候へども、臣等は家に傳へたる、桐一文字の短刀あり、近日又里見殿より賜りたる、名刀も候へば、自餘の刀劍は欲からず。這村雨は御家の重寶、他人の貨に做すべからず。この故に匠作番作、父子二世の、忠心を、臣等に遺りて果せる也。辭はせ給ふことかは。と解れて成氏感謝に堪ず、寔に然也、我愆ぬ。いで〳〵。と應つゝ大刀を受拿れば、主客の胸も上天も、霽けん雷の音絕て、檐の溜水猶遺る、殘滴のみぞ聞えける。當下成氏は、感淚坐に唔むまでに、村雨の大刀を幾番歟、うち戴きつゝ傍に閣て、又戍孝に謝するやう、信濃よ、和郎の至孝鯁義を思へば、いよ〳〵恥しき、我菲德を爭何はせん。今此奇貨を惠れしに、旅にしあれば、酬ん東西なし。其義を一筆示さんとて、侍座せし望見一郞に、逆旅硯を執出させて、墨を搨せて毫を染れば、科革七郞こゝろ得て、指燭を秉て照す程に、成氏は坐右なる、便面をうち啓きて、管を握りつ苦吟じて、幾桁歟寫著しを、みづから讀見て含咲ながら、拙けれども是を見よ。といひつゝも臂を伸して、開きし隨に授る便面を、戍孝は遽しく、膝を進めつ、受け戴きて、却燈燭の下に身をよせて、睛を定めて、是を見れば、正に是成氏の自詠の歌にて、

心慌しく、愚意の及ぶ所をもて、うち驚し奉る、不敬を饒させ給へかし。といひつゝ後方に措たりし、刀櫃を、やをら曳よせ蓋を開きて、拿出す件の大刀を、嚢の儘に膝に推立て、隻手を衝て稟すやう、いはでもしるき這御大刀は、則君の御先考、持氏朝臣の御紀にて、春王安王君の御遺物なれば、いかで君に獻せよ、と教えたる、亡父の志を、今果しぬる臣等が歡び、何事か是に勝べき。遮莫先途の失あれば、眞の村雨丸歟、あらざる歟、御面前に試てん、饒させ給へ。といひつゝも、幵が儘些退きて、嚢の紉解き執出す、件の刀を引拔ば、三尺の氷、夏猶寒き稀世の名刀、燈燭忽地光を增て、四下も赫奕可なる、其柄を佶と握持て、輪丁とうち振る程に、怪むべし刃尖より、颯と濆る水氣あり、露歟霤歟、潑々と這席上に降沃ぐを、成氏主僕は憶ずも、袖もて急にうち拂へば、燈燭反て滅んとす。折から又簷上を過る、驟雨の音凄じく、風さへ烈き雷霆の、磤々と鳴亘る、四月下旬の闇き夜に、窻の隙洩る電光、走るや雲の行住ひ、それかとばかり見えねども、彼と此とは一時の感應、又いふべくもあらざれば、成氏憶ず聲を被て、やよや信濃疑ひ解たり。先其刃を斂めずや。と詞急迫しく制れば、戍孝は阿と應て、准備の帛紗を懷より撈り出しつ、濡たる刃を推拭つゝ鞘に斂めて、膝を拱めて左右の手に、捧げて卒とて呈するを、成氏は左右なく受ず、やよや義士、志は然ことなれど


なり氏


孝子孝を
全ふして
遺訓を果す

充は、士卒五六十名を將て、船より出て城に來つ、望見一郎科革七郎等に對面して、本月二十一日には、逆風にて船我まねば、憶はず遲參したる事、且昨早に暴河までかへり來て、御歸路を俟奉りしとて、其顚末を聞え上しかば、成氏聞て、其身も性急にて、他等を俟ざりし愆あれば、敢其遲參を咎めず。然ば我は翌の朝開に、船にて滸我へ還るべし、其准備をせよとありしかば、行正直充こゝろ得て、船なる士卒に下知を傳へて、那身は臺の城内に在り、船まで伴をせんとて也。然ば秋季喬梁等は、猛可に二三百個の歇客ありて、一霎時は混雜しぬれども、素より准備に匱しからねば、親疎の歇處を點配して、上下の夕饌朝餉の備疎ならず。既にして日の暮しかば、成氏は、浴し夕饌果て、臥房に隣れる褊室に在り、望見一郎科革七郎のみ侍りて、最徒然に見えしかば、犬塚信濃戌孝參りて、四表八表の話說などして、是を慰めまゐらせける。折から驟雨の、降み降らずみ窻を打つ、夜風の音も平ならぬ、身は草枕旅ながら、椎の葉に裝る飯ならで、人の情の淺からぬを、淺くは思はぬ成氏も、今昔の事をいひ出て、閑談いよ〳〵蕭然也。登時戌孝は、謹で成氏に稟すやう、曩に御聞に入れ奉りし、村雨丸の一刀は、いかで君に進らせて、愚父犬塚番作の、末期の遺訓を果さばや、と思ひしのみにて、稻村にては、御同居の敗將達に憚りあれば、稟し出る便宜もなく、今宵涯りの御別れに、なりては

船三四艘に、頭人下河邊二郎行正、間中大内藏直充と、士卒二百餘名うち乘りて、二十一日の下晡に、洲崎の浦へ來著せり。這日順風ならざれば、遲參這時に及びしといふ。しかれども成氏は、陸地を滸我へかへらんとて、里見の士卒に送られて、稻村の城を立去給ひぬ、と聞えしかば、行正直充駭怕れて、爾らんには、赶奉るとも及ぶべからず。疾船を漕復して、葛飾眞間の渡りにて、待奉るにしくことあらじとて則湊吏人に就て、來由を、稻村の城へ告訴しつ、次の日徐に追風を俟得て、其船各帆を抗て、下總を投て走らせけり。爾程に成氏は、犬塚信濃に送られて、三四日の旅宿をしつゝ、安房より上總路を經て、下總なる眞間の里に來にける時、既に申牌に及びて、驟雨連りに降沃げば、犬塚信濃計ひて、成氏の轎子を、國府臺の城へ舁入れさせて、則こゝを歇舍とす。當城の番士の頭人、眞間井樅二郎秋季、纖綿四郎喬梁等は、豫てこのこゝろ得あれば、敢慌てず、則振照倶數二潤鷲手古内をもて、是を迎させて、城の客の間に請待す。須々利壇五郎二四的寄舍五郎等も、這城内に在り、倶に這應接に預りける。是より先に成氏を迎の頭人、下河邊行正眞中直充等は、其船昨朝暴河に泝り來て、國府臺の城下に歇りて在り。昨日使をもて、當城の番士等に、成氏這地を過らせ給はば、知せ給はるべし、といはせしかば、番士等則こゝろ得て、今這告あるにより、行正と直

馮きて、戌孝を勞ひて、迎に來たる科革七郎、望見一郎等を急しつゝ、里見の諸臣に別を告て、遽しく立出る程に、犬塚信濃戌孝は、行裝を整て、望見一郎科革七郎等と倶に內玄關に俟て在り。滸我の伴當五十名、里見の士卒二百名、義成主又命じて、犬飼現八と田税力助をもて、其夜は歇舍まで送り行しむ。是等の伴當も二三十名なるべし。成氏既に立出る時、義通君は、杉倉直元等を從へて、玄關まで是を送りぬ。這逆旅の准備は、成氏は轎子にて、戌孝信道逸友等は、各騎馬にて從ふめり。弓箭鉄砲、鎗棒柳箱を執る者尠からず。恁てぞ稲村の城の後門より、撞出しつ齊々と、上總路を投て倶して行ける。然ば這急事にて、嚮に義成の云云とありける御弓の莊の事は、成氏の辭ひし隨にて、其議は已しかど、是よりの後、里見義堯の時に至りて、滸我より足利義明を招きよせて、上總の御弓に在しめて、北條氏と力戰の、後盾にしたりしかば、時の人義明を、御弓の御所とぞ稱ける。是其緣故なるべし。閒話不題。却說成氏は、自他の伴當に、倶せられてかへり行程に、這日は三四里にして、既に夕陽に及びしかば、犬塚犬飼等相計て、路傍なる寺院を宿とす。現八力助等は這里にて、又成氏に謁して、辭し去まくする時、成氏是を勞ふて、義成の好意を謝せらる。現八等は、其身の伴當を將て、逸時と共侶に、路をいそぎつ其曉天に、稲村へぞ歸りける。然ば又滸我より來ぬる成氏を、迎の

程、義成又對面して、みづから是を慰めらる。其語次、御所（成氏をいふ）は春王安王君の令弟にてをはすれば、我大父里見季基と、然しも舊緣なきにあらず。是までの力戰は、右まれ左まれ、既に恡親しう交り奉れば、舊交を結ばまく欲す。今はしも御領の郡縣多からずと聞ぬ。上總なる御弓の莊を、馬の飼料にまゐらすべし。といはれて成氏慙愧に堪ず、推禁めて答るやう、开は辱く候へども、我愚にして順逆の理に暗く、惑ふて和殿を伐まくせしすら、後悔臍を噬るのみ、いかにして其莊園を受んや。それよりも願しきは、歸郷の憶念箭の如し。些の伴當を貸給へ、當國より上總を歷て、陸路を濟我へ還るべし。今の情願は是のみ。と又他事もなく請求むれば、義成聞て異議もなく、尊公其義はいよ〳〵易かり。御舊緣も候へば、犬塚信濃戍孝をもて、君を送らせ奉りてん。今宵は猶又逗留あれ、明日こそしかるべかめれ。と留むるを、成氏は、聞も訖らず頭を掉りて、最自由に候へども、今より徑に去まく欲す。諸敗將は殲返されしに、我のみ猶も淹留せば、後の外聞も影護かり。倘送りの士卒、急に整はずは、我伴當をのみ將ていなん。いかで〳〵。と性急なる、需めに義成禁難て、しからば御意に任せんとて、退きて犬塚信濃に、事恡々と吩咐給へば、戍孝蚤くこゝろ得て、其士卒を整るに、素より武備ある家風にあなれば、いまだ一時ならずして、士卒の支度成りぬといふ。成氏是に勢

間にて酒飯の欵待あり。職政景澄、及弘望等は、其身幷に繩内外介の爲に、犬江が神藥の奇效にて、必死の刀瘡の愈たる喜びを演などす。然ば憲房朝良以下の敗將齋藤盛實に至るまで、迎の士卒を待不娱て、他等が饗饌果ると軈て、各急に別を告げて、立去らまく欲せしかば、義成則諸敗將に、良馬各一疋を牽出物として、政木孝嗣蒲呂重時等をもて、是を港口まで送らしむ。惟稲戸津衞由充のみ、歸帆をいそがず、先衆人を出し果して、徐に辭し去まくする時、義成主は、犬川莊介犬田豐後をもていはするやう、稲戸翁は、這二犬士に舊恩あり。他等は旣に報恩の志を、遂たりとか聞ぬれど、いまだ嗛るべくもあらず。越後は鹽に匱き地方也。我今より、義任悌順に代りて、年毎に行德鹽一千苞を賜るべし、必辭ふべからず。とありしかば、由充は額に汗して、弃は思ひがけもなき、いかで饒させ給ひね。と推辭めども、何でふ听れん。是よりの後年毎に、其餽送物ありしとぞ。恁而由充は、妻有荻野井等を從へて、犬川犬田に送れて、迎の船にうち乘りつゝ、夙く三浦へうち渡して、陸路を越後へ還りけり。只由充のみならず、諸敗將の迎の船も、皆三浦より出し來て、倶に三浦へ歸著せり。蓋安房の洲崎より、相摸なる三浦まで、海上僅に六里なれば、其近きに由れる也。弃が中に成氏のみ、迎の伴當多からぬに、憲房朝良の下風に立て、相摸へ渡さんことの朽惜ければ、立も得去らで在し

頭。這朝稻村の城内には、諸敗將に留別の饗饌あり。中酒の時に及びて、義成義通、出て慇懃の詞を盡さる。左右する程に、諸敗將を迎の船、多く洲崎の浦に來にけり。第一番は、憲房を迎として、山内の家臣、建柴浦介弘望、老兵十名雜兵三百餘名、第二に朝良朝寧を迎として、萬戸月十字七宿尻城戸介、及大石憲重が兵頭萱菰三布七、闗口小田八等是に從ふ、士卒二百餘名也。這四個の頭人は、去歳の十二月、本所の敗軍に、各深痍に堪難て、一旦仆れしもありしかど、辛く命を免れて、河鯉へ來て將息して、其瘡稍瘥し也。上に見えたる三三、三十は入間九郎松山五六の子弟にぞありける。間話休題、第三番は、自胤を迎の士卒、一百五六十名也。原胤久這里に侍れば、胤介等は參らずと云。第四番は、爲景を迎の頭人、宇佐美三郎職政梶原后平二景澄、士卒三百餘名、第五番は義同義武を迎の頭人、小磯眞砂、士卒二百餘名也。第六番は稻戸由充を迎の頭人、妻有復六荻野井三郎、士卒二百餘名也。只成氏の迎の伴當のみ多からず。望見一郎科革七郎士卒五十餘名と、船一艘にうち乘りて、河鯉の城より來れり。滸我は路遠ければ、那里の士卒は、いまだ來著せざるなるべし。當下里見の有司、港口の小吏出迎へて、其頭人等と、士卒各二三十名を、引て稻村の城に來にけり。其他は皆船に在らせて、亂雜を防ぐといふ。犬塚信濃犬江親兵衞、犬川莊介犬田豐後、犬飼現八兵衞等奉りて、客の

は明相清英有種等、と倶に、忍岡の城を辭去れば、扇谷の士卒入替りて、白石重勝入間三三松山三十等と、倶に是を守れり。一進一退交情異也、人其順なるをもて賢とす。這擧に在ても里見の德を、思はざる者なかりける。然ば這時道節が准備の船は、兩國河に多くあり。且附從ひし兵毎は、馬淵場九郎の殘黨と、武藏相摸なる、野武士毎なれば、城に留らん事を欲せず。里見の民たらまく願ひしかば、今道節が隊に在る者、九千餘名と聞えたり。道節は是等を將て、兩國河原に趣く程に、有種も鄕人を將て、水送にとて倶にゆくめり。恁る折から登桐山八郎良于は、石濱の城を原胤介等に遞與て、士卒一千許を將て、這河原に退き來つ、道節等と共侶に、船出をせまく欲すれば也。聞に千葉の老黨、原胤介等は、曩に行德口の敗軍に駭怕れて、主君幷に家臣の家眷を將て、河鯉へ脱れ去りしに、この日皆衞復して、歡びの聲城に滿けり。然ば良于は、道節等に對面して、且是等のよしを告げて、准備の船に乘まくす。這地の船長五十三太素手吉は、扇谷の封内に居まく欲せず、東の岸へ徙らんとて、倶に材を採りに、下總へゆきしかば、留守なる篙師等、里見の舵工を相資けて、衆船を遣まくす。准備に辱りなかりしかば、道節山八郎は、明相清英等と共侶に、各士卒を分ち乘する、其船一百許なるべし。有種は其乘果るまで、鄕人と共侶に、河原に一霎時目送りて、日暮て穗北へ還りける。話分兩

領たるべき義を、往る日巨田助友に、掟たる趣を告知せて、和殿は咱等と共侶に、稻村へ參り給へ。里見殿を後盾にせば、今より後も安かるべし。と諭せば、有種、然ン候。在下素より其意あり、なれども東西和睦して、和君等安房へ還り給はゞ、我鄕黨呫みて、影護くぞあらむずらん。先我宅眷に、よく安堵させて後にこそ、稻村へ參るべけれ。と推辭めば道節理ありと答て、猶も餘談に及ぶ程に、白石重勝等が士卒を將て、城受拿に來にければ、道節先重勝と、入間三三松山三十と、伴當十名許を城に入れて、明相淸英有種と共侶に、重勝等に對面していふやう、當城は是なる有種が、僅に一臂の力をもて、攻捕りて會稽の恥を雪めし處也。然ども今和睦の上は、返しまゐらするに異議あらず。但穗北五箇村は有種が自得の所領也、以て這城と易まく欲す。この義はいぬる日巨田生に、我談ずる所也。こゝろ得られし歟、甚麽ぞや。と問へば重勝答ていふやう、其義は助友が言上にて、寡君定正の證文こゝにあり。といひつゝ軈て一通を、拿出て遞與すを道節は、受拿りつ開き見て、有種自得の莊園にて、扇谷殿の賜ふにあらねば、這照書は要なけれども、忍岡の城郭と、交易すべき物也といふ、文言を載られたれば、後々に子孫の爲也、藏め措くもよかゝなん。と應て軈て有種に、渡せば有種も亦閱して、然而重勝に初對面の口誼を、云云と舒などす。既にして受授の事果しかば、道節

く城外に留在せて、助友と東震は、有名の老兵百名許を從へて、徐に城に入りしかば、犬阪下野胤智は、鮠内葉四郎をもて、是を迎へさせて、小森高宗木曾季元、千代丸豊俊小水門堅宗等と倶に、助友東震に對面す。迭の口誼言訖て、河堀殿と貌姑姫の、恙なきよしを告などす。恁而城遞與の作法あり。亓は犬村大學が做しゝ事の趣と、異なるべくもあらざれば、言省て備にせず。當下犬阪下野は、城兵の降參せしは、皆助友に返して倶せず、只從來の士卒三千餘名を三隊に分て、其二隊は高宗季元、豊俊堅宗を頭人とす。三隊の士卒を出し果て、助友が亦城外に在せたる人馬を徐に繰入れけり。出る者も入る者も、齊々整々として混雜せず。犬阪が准備の船は、多く柴浦にあるをもて、皆那浦に赴ける。この日又扇谷より、忍岡の城受拿の頭人は、白石城介重勝にて、入間三三松山三十を副とす。其隊の士卒一千有餘、昨夜半より河鯉の城を出て、忍岡を投て來にけり。是より先に犬山道節忠與は、印東小六明相、荒川太郎一郎清英と倶に、城遞與の准備あり。使を穗北へ遣して、落鮎餘之七有種に、和睦の一義を告知せて、他が加勢に在陣させたる、五百の雄兵を、皆忍岡へ召よせけり。登時落鮎有種は、家僕小才二世智介と、鄉民一百有餘を將て、忍岡の城に來にければ、道節則明相清英等と、共侶に對面して、今番和議の成りし事の顚末と、穗北幷に隣里四箇村は、有種の所

ふ。舵工等則こゝろ得て、漕出して程もなく、船を那浦に欹しかば、音音は一個の雑兵をもて、海苔七夫婦を召よせていふやう、汝等咱を見忘れはせじ。去歳の十二月八日の事ぞよ、咱この浦に流寓りて、命終らんとせし折に、汝等の介抱にて、身は恙なく思ひの隨に、敵を謀りつ、功成りて、此人々と共侶に、目今安房へ還る也。咱は則里見殿の家臣なる、姥雪代四郎が老婆音音是也。又這同船三個の婦人は、犬江親兵衛主の大母妙眞刀自幷に我二個の媳婦、曳手單節と呼做す者ぞ。汝等耳の底に藏て、後の話柄にせよ。然ども今も旅なれば、汝等に報ひに做すべき東西なし、先是を取するぞとて、曩に河堀殿の賜りたる、唐織の夾衣を、曳手單節が品までも、三襲拿出て與れば、妙眞も又其衣を、那賞錄にとて拿らせけり。然ばこそあれ海苔七夫婦は、憶はざりける那媼女の、此光景に胆を潰して、呆るゝ事半晌許、夫婦兩手に件の衣を、受けつ捧げつ夢かとばかりに、滿面都てうち笑れて、其歡びをいはまくするを、音音は急に推禁めて、咱等は去向をいそぐ也。暇ある日に、稲村の城内へ尋來よ。さらば〳〵。といふ間に、又漕出す順風の船を、禁め難たる海苔七は、妻共侶に建柴の、立盡すまで見送りけり。海苔七夫婦の事、這下に話なし。有恁し程に、巨田薪六郎助友は、小幡木工頭東良の獨子なる、小幡木工太郎東震と倶に、二三千の士卒を將て、五十子の城に來ぬる程に、人馬を多

我は舘の御迎に、河鯉へこそゆくべけれ。と呟きつ、反橋雑記が將て來たる、人馬を幾許か分たせて、伴當にしつ馬に跨りて、綱坂四郎と共侶に、开が儘出てゆきしかば、咱等は季元と相共に、雑記畔四郎に城を遞與て、且從來の隊の兵をのみ、倶してかへり來つる也。と告れば又木曾三介季元も、其足らざるを補ふて、那里の光景を報る折から、妙眞音音曳手單節は、後堂より倶に退き來て、ありし事の趣を、犬阪に告知すれば、胤智聞つゝ含咲て、小森生の計ひも、妙眞音音刀自等の寡欲なるも、皆是忠義の眞面目にて、最愉快といひつべし。城遞與の時分も近づきぬ。といひつゝ先雑兵をもて、浦安牛助友勝を召よせて、且いふやう、今日城遞與の事果て、我們稲村へ退る折、這四個の婦女子を、同船せば云云、と後に人の議論あらん。和殿は是始より、這勇婦烈女等と、倶に大功を成しゝ人也。いかで今より同船して、稲村へ送り給ひね。然ば猨岡猿八と、雑兵二三十名を從せん、こゝろ得てよ。といそがせば、友勝は異義もなく、高宗季元、妙眞音音曳手單節に、和睦の歡びを演などして、退りて準備を做す程に、胤智は又猿八等に、其事を吩咐るに、船は多く柴浦に維ぎてあり。然ば音音等四個の婦女子は、犬阪以下の頭人に、別れを告げつ身裝して、友勝猿八等と倶に、伴の雑兵を將て、城を出て、柴浦より船に乗る時に、音音は舵工を召よせて、咱等は大茂林に所要あり、那里へ船を寄よとい

共侶に別を告て、既に和睦整て、今日は城を返さるべし。這故に奴毎は、身の暇を賜りて、船出して安房へ還り侍らん。玉椿の八千歳まで、恙なく在さんことを、祈りまつり侍るのみ。舘（定正をいふ）程なく還らせ給はゞ、憂を轉して御歡びは、八入ならん、と杳まつりぬ。今はしも御別になり侍りぬ。といひ果て倶に身を起せば、河堀殿も貌姑姫も、禁難つゝ云云と、詞寡く勞ひ給ふ。當下侍坐せし女房が、一兩個こゝろ得て、鈴鐸の間までぞ送りける。有恁し程に、小森但一郎高宗、木曾三介季元は、正兵一千餘人を將て、大塚の城よりかへり來つ、犬阪下野に告るやう、嚮に大石憲重の兵頭、反橋雜記、丁田畔四郎と喚做す者、殘兵二三百名を將て、城を受拿んとて來にけり。幵が頭人は、豫より放免せらるべしと聞えたる、大石源左衞門憲儀也、綱坂四郎相從へり。這故に咱等敢饒さず、窘めて且道く、源左殿は、當城主、大石氏の嫡子なれども、去歳より久く擒にせられし、刑餘放免の罪人也。綱坂四郎も是に同じ。這城郭は、源左殿に返すにあらず、扇谷殿に返しまゐらするなれば、何ぞ刑餘の人に遞與さん。和殿兩個は、且退きね。扇谷殿より遣されたる、反橋丁田に城を遞與て、咱等退りて後にこそ、出入は和殿等の、隨意なること勿論なるべけれ、目今は容がたしとて、城門より內に饒さねば、憲儀大く腹を立て、好々其義ならば、


そとひめ


四犬女功成りて衞を両夫人と解く
ひとよ
おとね

雪代四郎與保が渾家よ、媳婦よと人に知られて、東西賢しくは侍らぬに、是賜りて何にせん。畏うは侍れども、是は這儘措せ給へ。と異口同樣に辭ふのみ、敢受べき意なければ、河堀殿は困じ果て、後方に侍る女房に、恁々と吩付て、唐織の夾衣の、蘭奢の熏得もえならぬを、四襲許出させて、廣蓋にうち載しを、妙眞等四箇の婦女子に、みづから薦めて宣やう、汝等の緶直なる、東西受られねば、術もなけれど、時は今四月の下浣にて、今日は殊更溫暖なるに、去歳の儘なる小袖では、汗に堪ずやあらんずらん、切て是をば受てよ。と言叮寧に諭給へば、妙眞音音曳手單節は、貴人の恁までに、理り迫て云云と、宣するを、猶幾番も、固辭んはさすがにて、只得俱に受戴きて、被ぎて軈て退きて、各うち被て出て來つ、皆席末に居並びて、其歡びを稟にぞ、河堀殿は本意ありとて、徐に其方を見かへり給へば、他等は今給はりたる、夾衣を下にして、今までなる舊衣を、各胡意上に被たれば、河堀殿訝りて、先其所以を問給へば、妙眞音音等答ていふやう、這舊衣は去歳の冬、我瀧田の老侯の被けさせ給ひたる、恩賜の東西で侍るかし。今給はりたる夾衣は、則是時服にて、且綺羅やかに侍れども、いかにして這新賜を、那舊恩に思ひ易んや。こゝをもて舊衣を、今も猶上に被たるは、餘馨を拜して、本を忘れぬ、愚意にこそ侍れ。と解れて、さてはとばかりに、河堀殿は興醒て、又いふよしも

恥て其歡びをいふのみ、阿容々々として退きて、且城兵に送られて、五十子の城を出しかど、投て往方を定め得ず、左にも右にも面伏なれば、舘（定正をいふ）の迎にまゐらんとて、河鯉の城へいそぐ程に、其路一里有餘にして、大塚の城の兵頭なりける、反橋雜記、丁田畔四郎等が、大塚の城を受拿んとて、殘兵僅に二三百名を領て、河鯉の城より來ぬるに逢ひけり。憲儀是に勢憑きて、然ば先我城を受拿て、明日河鯉の城へ參んとて、其里より路を引復せば、綱坂四郎も已ことを得ず、憲儀に相倶して、大塚の城へいそぎけり。然ば又去歳の冬より、五十子の城に在りける、妙眞音音曳手單節は、河堀殿と貌姑姫を、守護の爲に附られて、那十個の女房等と、倶に最正首に仕ふる程に、東西和睦整ひて、既に城遞與の日に做りしかば、這朝胤智は、河堀殿に見參して、和睦の事恁々と、城遞與の事さへ告まゐらせて、且妙眞音音曳手單節は、胤智等に先だちて、船もて安房へ返さんとて、心得さしつ遽しく、亦外面へ退出しかば、妙眞音音、曳手單節は辭去まく欲する程に、河堀殿も貌姑姫も、他等が日屬正首に、仕へたりける好意を感じて、別を惜み給ふ事、大かたならず。金銀をもて鏤たる、手匣玳瑁の櫛釵兒などを、手自許多取出て、餞別にとて與へ給ふを、妙眞音音曳手單節は、推辭て敢一箇も受ず。奴四人は數ならぬ、原は賤婦人にて侍れども、里見殿の御恩にて、犬江親兵衞仁が大母姥

て、纜紼と斫捨れば、順風に任する舵工毎が、本船伴船十餘艘、艕拍子齊しく漕もて去るを、招かひなき村長莊客、沙に滾び邑に携りて、喚聲のみぞ浦風に、吹送られて遠離り行、船まで幽に聞えける。然ばこの後里見實堯又里見義弘の時に至りて、伐て鎌倉に亂入りし日に、三浦四十八郷を殺捕りて、久しく里見の所領に做しゝは、這時既に那地の民の、德を慕へる餘波にて、義成主と禮儀の、植し善根なるべし、と時の識者は論じける。こは是後の話也。爾程に、犬阪下野胤智は、五十子の城にかへり來て、城遞與しの事遺もなく、新井大塚及石濱なる三箇城へ、義成主の下知を傳へて、且浦安牛助、千代丸圖書助等と倶に、各士卒を部して、件の准備を做す程に、二十一日に做りしかば、這朝犬阪胤智は、去歳の冬より當城に囚置たる、大石憲儀と、綱坂四郎等を牽出させて、告るに和議の成りしをもてして、且いふやう、我當城に和殿等を、久しく屏居あらせしは、河堀殿と貌姑姫の、こゝに在する故にして、和殿等と共侶に、這城郭を領守る、胤智が用心なり。しかるに東西和睦成りて、今日は當所と、大塚忍岡の城までも、皆是扇谷殿に、返しまゐらするなれば、和殿等這里に在らでも好、在らば面目なかるべし。この故に放免す、去向は各隨意せよ。こは胤智が寸志なりとて、大刀兵具と、始憲儀綱坂等が、乘たる馬さへ牽出させて、皆是を拿らせしかば、憲儀と綱坂四郎等は、

水崎蜑人小磯眞砂は、殘兵三四百人を將て、沼田の城より這里に來て、大學幷に貞澄逸時、景能等に、和睦の歡びを演などす。當下大學は、戰粟錢財、武具調度に至るまで、皆算帳に寫し、目錄に合して、是を蜑人眞砂等に遞與すに、明白にして犯し掠る者なし。且いふやう、甲良龜九郎等、城兵の苟且我に從ひしは、城内に三浦殿の宅眷と、士卒の妻子等のあれば也。恁ればば他們に不忠の罪なし、我其義を寫して、玄關に貼し置きぬ。義同義武かへり來まさば、各這意を傳へよかし。と言詳に敎諭せば、蜑人眞砂等歡び承て、敢違ふ者なかりけり。然ばこの日城内の掃除なども、屆ざる所なく、傲慢不禮の事あらず、禮儀の禮儀たる、其名虛しからざれば、蜑人眞砂從兵まで、いよゝます〳〵敬服して、別を惜む意あり。恁而犬村大學は、堀内貞澄田稅逸時、苫屋景能等と倶に、安房より從ひ來つる、隊兵僅に三百餘名を將て、新井の城を辭し去りつ、水路を安房へ還らまくする程に、三浦四十八鄕なる、村長莊客等は、猶別を惜む者あり。其每數百名、沙を蹶揚て赶もて來つ、大學が乘たる船の、纜を曳止めて、相公などて我們を、棄て安房へ還り給ふぞや。願ふは這地に在城して、猶善政を施し給はゞ、凍餓死亡の憂ひなく、樂しく妻孥を養ふべし。いかで〳〵。と諸聲に、叫びて放つべくもあらざれば、大學是を慰めて、諭せども只貴緣るを、貞澄も亦逸時景能も、禁め難つゝ大刀引拔き

が中に、甲良龜九郎找み出て、其義心得候へども、三浦親子は暴雄也、當城に還り來ば、我們が敵に降りしを、憎みて必殺やせん。願ふは安房へ倶し給ひね。と請へば又三浦四十八鄉なる、鄉士豪民村長們も、異口同樣に願ふやう、己等は御威勢に怕れて、從まつりしに候はず、安房の舘の御仁政を、慕ひまつれる故なれば、いかでこの儘幾までも、御領の民たらまく欲す。這義を饒させ給へかし。と勸解るを大學聞あへず、爾いふを我叱るにあらねど、城を返して其地を返さず、且其民を奪なば、和睦の名ありて、和睦の實なし。我何ぞ然る變詐をせんや。甲良生も這議を思ひね。一旦我に降りしとても、三浦殿親子は先度に懲りて、若們を罪すべからず。心許なく思ひなば、我又在是せん術あり、必怕べからず。と諭つ一紙の告文に、降人甲良龜九郎、幷に三浦の民每の、罪なきよしを書寫て、城の玄關にぞ貼しける。有恁し程に、堀內貞澄は、鎌倉より退き來て、則犬村大學に、鎌倉の事の趣を、恁々と告しかば大學則其隊の士卒と、三浦四十八鄉の士民に、身の暇を取らせて、各其地に返し遣るに、皆戀々として、去るに忍びず、猶云云と請ふ者ありしを、大學饒さず、且いふやう、若們知ずや、鄙語云、幹木に勝る杪材なし。今新恩を甘じて、舊地を去らば、後悔あらん。然とも所依なき者あらば、異日稻村へまゐるべし。今番は倶しがたしとて、皆悉出し遣りけり。有恁りし程に、

して、城遞與しの事を命ぜられ、且堀内貞住、小森高宗登桐良于等にも、この旨を傳へよとて、照書一通を渡し給ひしかば、三犬士等承りて、退りて軈て件の士卒を、いそがし立て水路より、新井五十子忍岡の、城を投てぞ還りける。左右する程に、四月二十一日になりしかば、山内の家老、齋藤高實、幷に兵頭蕤内外助惟定等は、士卒一千許を將て、鎌倉にかへり來て、其主山内顯定の、館を受拿らまくす。又其隊の頭人、建柴浦介弘望は、士卒一二百名を將て、船にて憲房の迎にゆくめり。この時堀内雜魚太郎貞澄は、犬阪下野に傳達せられて、其下知を得たりしかば、隨卽齋藤高實に、鎌倉の館を遞與すに、敢秋毫も犯すことなく、隊の兵三千餘名を將て、先新井まで退くに、士卒都禮讓の貌あり、毫も亂雜ある事なければ、齋藤高實はさら也、山内の士卒咸敬服して、及び難しと思ひけり。爾程に新井なる、犬村大學は、旣に城遞與しの准備あり。田税戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能等と、商量して、降人甲良龜九郎等をもて、三浦義同の宅眷に、和議の成しよしを告て、且城兵の降參したる、と三浦四十八鄕の士民の、相從へるを召聚合て、則宣示やう、若們時の勢を見て、苟且我に從ふといへども、今は東西和議成て、當城も亦故の如く、三浦殿に返しまゐらすれば、若們も故の如く、亦是城主の民たるべし。各々這意を得よかし。と言叮寧に說諭ば。大家聞つゝ嘆息して、答難たる形

ひね。と演て件の三方托に、載たる小箱を遞與すにぞ、助友は謹み承て、先其小箱を熟覽るに、蓋に十二の文字ありて、豆有ニ一頁一長杉無ニ木吉。義成封、とありしかば、助友眉をうち顰めて、左さま右さま、思ひ惟るに、豆一頁ある者は、是頭の字也、又長杉に木なくして吉とは、長彡吉の三字也、是を合すれば其字是髻也。頭と連續做す時は、則是頭髻也。然ば這箱の內なるは、去歲の十二月八日の夜艾、我君矢口の河邊にて、敵の伏兵を免れ難て、那隊の頭人小水門目に、拿らせ給ひし、御頭髻を、今返さるゝにぞあらむずらん、と夙く悟りつ且恥て、うち戴きつゝ其箱を、懷に楚と夾て、却胤智に答るやう、仁君誓の御貺、御意の趣承りぬ。立歸りて寡君に渡さば、さぞな歡び候はん。城受取に定められたる、二十一日には程もあらず、身の暇を給はりてん。と詞急しく別を告て、旅舘を投て立てゆくを、犬阪下野政木大全、留もあへず共侶に、玄關までぞ送りける。恁而亘田薪六郎助友は、いそぎて旅舘へ還と軈て、高實行包胤介等の、五個の使者に商量し果て、且秋篠廣當熊谷直親に、ありし事の趣を、恁々と告知せて、歸帆の免を得たりしかば、五個の使者と共侶に、當晩洲崎の港口より、各快船にうち乘て、其投方へぞ走らせける。伴當孰も多からず、船さへ舵工さへ傭得て、亟の所用に充しとぞ、這事後に聞えける。然ば其次の日に、犬阪下野犬山道節、大村大學は、義成主に見參

んを歎ふて、我們は先旅舘に退りて、歸帆の准備をすべけれとて、直江水崎も共侶に、告別しつ身を起せば、犬塚信濃遽しく、立て遙に送りける。當下犬江親兵衛は、助友に向ひていふやう、言新しく候へども、御家の忠臣、河鯉守如の獨子なる、河鯉佐太郎孝嗣は、靈狐の冥助にて、讒死の刃を免れしより、政木大全と名を改めて、今は當家の家臣たり。其枉寃の罪なるよしは、扇谷の兩公子に、孝嗣みづから聞え上て、那寃を解たれば、後にこそ听るべけれ。這義を心得給ひねかし。と告れば助友嗟嘆して、現に河鯉親子の如きは、忠臣也孝子なるに、讒者の爲に害はれて、親は死し、子は免かれて、今より隣國の股肱に做れるは、悔て及ばぬ事ながら、這折をもて對面して、後の交を結ばまく欲す。這誼を饒し給はずや。といふに親兵衛歡びて、悄と重紙戸をうち鳴せば、外面に立在たる、政木大全孝嗣は、方三四寸なる梧桐の小箱を、三方托にうち載て、丌を携つ内に入りて、先其小箱を犬阪の、身邊にやをら閣程に、親兵衛則孝嗣を、先助友に引合すれば、迭の口宣他事もなく、和睦の歡びを演にける。其言訖て犬阪下野は、件の三方托を曳よせて、却助友に告るやう、嚮には扇谷殿和睦の誓にとて、箭を折て贈り給ひしを、寡君既に拜受せり。是によりて義成も、亦這一種をもて贈り物とす。正に是東西唇齒の交を、結びて相背ざらん照据なり。這義宜し賢侯へ、聞え上させ給

る程に、外面に咳して、突と内に入る者あり、是則別人ならず、犬山道節帶刀先生忠與也。犬塚犬阪の間に坐して、佗と助友に向ひていふやう、既に面善にて候へども、折なければいまだ御意を得ず。和議成りて候へば、約束の日に至りて、城地を返しまゐらせん事勿論也。遮莫千住竹塚に遠からぬ、穗北の莊は、落鮎餘之七有種の乾父なる、氷垣殘三夏行が、自得開發の新田にて、今は有種が所得也。然を有種は、根角谷中二が讒言にて、一旦沒落したれども、扇谷殿敗北の折、有種悄地に便宜を得て、忍岡の城を拔き、且穗北の莊を掠復して、一時に恥を雪めたり。然ども東西和睦の上は、有種に説諭して、忍岡の城は、形の如く、返しまゐらせん事、異議あるべくも候はず。但穗北の莊と、其前後左右なる四箇村は、皆有種に隨從せり。有恁れば件の五箇村は、有種が自得にて、返しまゐらすべき莊園にあらず。那有種は、いまだ當家に仕へざれども、其岳丈夏行と倶に、原是豐島の殘黨なれば、我忠與と、空谷跫音の憶なきにあらず。這義什麼。と論ずれば、助友听つゝ點頭て、其義こゝろ得候ひぬ。豫より聞く、那有種は、人の許せる武勇の義士也。其所得の莊園を、今更誰か掠奪せん。其義寡君（定正いをふ）に聞え上て、子々孫々に至るまで、除地たらん事勿論也、這義は心安かるべし。と誓ふが如く答ふる折から、犬江親兵衛も出て來て、這席に入りしかば、高實行包胤介は、言の長くなら

第九輯　卷之四十九

第百七十九回下

戌孝孝を全して故君に別る
孝嗣義に仗りて舊主に辭ふ
（此の題目も附目錄による）

再說、巨田助友齋藤高實、下河邊行包原胤介、直江莊司兼光、水崎蚕人等は、犬阪犬塚、犬村犬川等の、諸犬士に案內をせられて、在奧て乾淨處たる坐席に造るに、成氏憲房、朝良朝寧、自胤等の諸敗將は、既に其告あるをもて、皆うち聚ひてこゝに居り。管衞の武士二三十名、其戶口にぞ侍りける。當下助友高實、行包等の六個の使者は、諸犬士に相引れて、各其主に拜謁す。面正しくもなき所以なれば、只恙なきを祝しつ、且和議のなりしを告て、近き日に迎の士卒をまゐらすべしなどいふのみ。況諸敗將は、孰か一人も恥ざるべき、應だに果敢々々しからぬを、憲重胤久執合して、里見の慈善と、犬江が神藥の、効驗を告などす。是だに諛言に似たれば、助友は好も聞かず、軈て身の暇を告て、行包高實等と倶に、皆客の間に退けば、犬阪下野犬塚信濃、是を送りて異日を契るに、助友等は、對面の歡びを演て、辭し去まくしぬ

月二十一日は吉日也、この日しかるべしとて、這議を以答しかば、二犬士則義成主に聞え

上て、件の六個の使人を、引て成氏以下の諸敗將に、對面を饒しける。這段は尙長やかにて𢿙

に盡すべくもあらざれば、又卷を更めて、且本回の局末に、解分るを聽ねかし。

帶刀犬飼現八兵衛等、兩御使に拜見して、受領の歡びを稟すものから、是より後も謙遜して、守介尉頭は、各省て敢唱ず。就中忠與義任は、後々までも、猶只道節荘介とのみ呼せて、官名を稱する事なし。況六位たる事は、祕して人に知せねば、世には聞えずなりにけり。こは是後の話也。恁而兩家老諸兵頭も、兩御使に拜謁して、配饌の欵待淺からず、給侍の青士入り替り立代り、山海の美味を盡せる、盛饌はいふべくもあらず。最後に、義通父に代りて、廣當直親に酒杯を薦めて、大刀馬代各白銀一百枚を牽れけり。然ば京家の雜掌、伴當奴隷に至るまで、咸珍饌に飽ざるはなく、且折乾さへ賜りて、いよ〳〵醉を盡しけり。既にして日は傾きて、又當席も果しかば、兩御使廣當直親は、辭て照文等に送られて、倶に旅館へ退りけり。この日亘田助友齋藤高實、下河邊行包原胤輔、直江水崎等は、客の間にて饗饌の儲にあへり。犬阪下野犬塚信濃、犬村大學犬川長狹等、迭代に出て來て、酒盃を薦むれども、助友等は辭ひて多く喫まず、只城遞與の日を定められて、退りて准備せまくほしといひけり。既にして酒盃納りて、又犬塚犬阪は、共侶に出て來て、件の六個の使人に、君命を傳るやう、和議既に成る上は、那五箇城を返して、敗將達を送り遣らん事、今さらに仔細なし。那君達に面談して、時日を定むべし。とありしかば、助友高實行包等、相歡びて商量するに、今より六日の後、本

倶にいふやう、昔鎌倉の右大臣(實朝)居ながら大任を稟まつりしより、其身は在國して、受領しぬるも尠からず。然をいはんや、戰國割据の今の世は、上洛最容易からず。何ぞ居ながら受まつるを、僭上とのみ之せんや。この義は室町殿の執奏にて、定められたる恩賞なるに、其を強て辭ひ稟さば、違勅の罪を爭何はせん。御承勿論なるべし。と解れて義成脱るゝ路なく、沈吟じたる頭を擡て、八個の犬士を見かへりて、汝等も承りつらん、我當惑を査しねかし。といはれて犬士等阿とばかりに、應て毛野に目を注すれば、毛野は夙く心得て、則答稟やう、我君御父子の御榮爵は、臣等が願ふ所也。然ども思ひがけもなき、臣等が受領は胸安からず。縱些の階級ありとても、君臣ともに受領の名あらば、是上を亂るゝ也。這義ばかりは幾番も、只御辭表を願ふのみ。といへば親兵衛信乃、道節大角莊介現八も、又小文吾も共侶に、同意のよしをいはまくするを、義成急に推禁めて、こゝにて論議は不敬也。先承まつりて後にこそ。と諭しつ又廣當直親に、勅答異議もなかりしかば、廣當直親相歡びて、いふかひありとぞ稱ける。然ば次の間に、這問答をうち聞ぬる、兩家老諸士の毎、憶ずも歡びの聲を合せて、千歲を唱ざる者なかりけり。勅答既に果しかば、饗應使犬江親兵衞、蜑崎照文等、兩御使に案內して、別廳にて、盃酒の禮あり。犬塚信濃、犬阪下野犬村大學、犬川長狹莊介、犬田豐後、犬山

勅使代臣廣當を、遙に安房へ遣されて、朝恩を知しめらる。這御旨は室町殿に、仰合さるゝ所也。熊谷生の齎したる、御教書もあるなるべし。と備に告げ詳に示して、准備の廣蓋に、冠烏帽子、朝服を幾領か載たるを、數通の位記と倶に遞與せば、又熊谷直親も、室町殿の御教書を、拿出て義成主に渡しけり。這時義實老侯の名代なる、堀内藏人貞行は、兩家老等と倶に、次の間に在りしを、召れて當席に入りて拜聽す。然ば外廂に侍りたる、八犬士等は、朝賞の過きにうち驚きて、皆平伏たる儘にして、頭を擡るはなかりけり。當下義成主は、謹で勅答すらく、臣義成纖芥の微功をもて、父祖三人家臣某等八人も倶に、重爵の勅賞を承る事、今古に例あるべくも候はず。且父義實の如きは、捨て榮利に心なし。老病那身に逼るの故に、名代をもて拜走す。是だに不敬に候に、何ぞ散位を辱う仕るべき。況犬江親兵衛等、八人の受領は勿體なし。義成僅に、房總二箇國の守にして、受領の家臣八人あらば、非如勅賞なりとても、僭上に似て罪免るべからず。物盈る時は必虧く、亭午の日輪、三五の明月、孰か傾き虧ざるべき。義成は其盈るを願はず、盈ず虧ずしてあるべきのみ。いかで辭表を獻らまく欲す、御執成こそ願しけれ。と辭ふを廣當聞あへず、其謙遜は然る事ながら、王事盬ことなし。綸言は汗の如し、出て二たび返さるべからず、只承まつるにしくことあらじ。と諭せば直親も

其忠誠を致す事、再度に及べり。矧又去歳の冬は、三路の大敵をよく防ぎて、一歩も境に入るゝことなく、一時に强敵を擊退けて、國民塗炭を免れたり。是併其家臣、八犬士と喚做す者の、智計武勇の羽翼に由れる、其功豈鮮少ならんや。夫大功ある者は、必重賞を行ふべし。賞罰正からざるときは、賢路塞れ、小人時を得て、民從はず。この故に義成朝臣を正四位上、左少將とす。安房守兼上總介故の如し。嫡子太郎義通を、從五位下、右衞門佐とす。其父義實朝臣は、隱遁既に久しといへども、創業の武功虛しからず、麟兒鳳孫、克く箕裘を嗣ぐに足れり。こゝをもて治部卿とす。又其家臣、犬江親兵衞てふ者は、去年京師に使せし時、飄く虎妖を對治して、良賤安堵の思ひを做せり。この故に、勅使代、秋篠廣當をもて、中途に他を追しめて、爵位の宣下あるものから、他亦稟す由ありて、辭ひて稟まつらざりき。故に今度改めて、並て其八犬士を、從六位の下に敘すべし。且犬江親兵衞仁を、兵衞尉に、犬阪毛野胤智を、下野介に、犬塚信乃戍孝を、信濃介に、犬山道節忠與を、帶刀先生に、犬村大角禮儀を、大學頭に、犬川莊介義任を長狹介に、犬飼現八信道を兵衞權佐に、犬田小文吾悌順を豐後介に做さる、倶に忠戰大功の朝賞也。這義は義成朝臣承まつりて、件の八人に配當すべし、と天皇が詔して宣へり。是に由りて、上卿及大使右少辨奉り、臨時の除目を行れて、

は亂軍の中にして、面を認られざるなるべし。幵が中に、水崎蜑人の如きは、かの折犬村主に戰ひ負て、小磯眞砂と共侶に、深痍に堪ず身を免かれて、其後河鯉の城に來て在りしかば、今番の使に立られたり。只這漢のみならず、小磯眞砂、又滸我の近臣、望見一郎品革七郎、又稻戸津衞の從軍なる、妻有復六荻野井三郎も、かの折本所の戰場を免れたれども、敢越の片貝へ還らず。津衞の安危を知まくほしとて、河鯉の城に來て、今も猶淹留す、津衞の迎に來つべき者也。昨は呉越の怨敵たり、今は虞芮の良隣に、做れるは仁義の餘德ならん。いかで教を願ふのみ。と謝すれば毛野も、信乃親兵衞も、大角莊助、現八小文吾も、和議の成りしを祝着す。幵が中に道節のみ、聞ざる如く默然たり。當下義成掌鳴して、誰か在る、這六個の使人を、客の間に案内をせずや。と喚立られて阿と答る、田稅逸友滿呂重時は、次の間より身を起し來て、助友以下の使臣に、案内をしつゝ以て退けば、迹には眞の雜掌のみ、五六名ぞ遺りける。爾程に、秋篠將曹廣當は、佶と義成にうち向ひて、房州升進の宣下あり。と告れば義成答も果ず、義通と共侶に、席を避て拜聽す。廣當威儀を繕ひて、宣下の趣 別義にあらず。天　皇　詔してのたまはく、里見安房守、兼上總介源 の朝臣は、禮を好みて富ども驕らず、善政仁義にあらざる者なく、國治りて民親み、賢佐多しと聞えたり。是を以逈に貢獻の使者をまゐらせて、


けの


其二
げん八




稲村の城に
義成勅使
詐使を迎ふ

めつ、恭しく義成にうち向ひて、賢侯其義は御こゝろ休かれ。臣等は、京家の人ならず、實は、扇谷山内、滸我三將の老黨なる、亘田薪六郎助友、齋藤左兵衛佐高實、下河邊莊司行包等で候也。又只我們のみならず、千葉の老黨原胤久の弟なる、原赤石介胤輔、長尾の老黨直江莊司、三浦の兵頭水崎蠻人等も這里に侍り。寡君定正顯定は、將軍家の御譴責に畏みて、和睦の御承を仕るといへども、いまだ賢侯の同意あるべきや否を知ず。この故に京家の御使に請まつりて、我們其作當に打扮て、倶して推參仕りぬ。事機變に似て機變にあらず。いかで海容を願奉る。と異口同樣に陳謝して、携來たる素朴の三方托に、定正顯定の、折て和睦の誓にしたる、白羽の征箭二條載たるを、助友高實拿揚て、義成主に晉呈す。當下下河邊原、直江水崎等四老黨も、倶に義成にうち向ひて、額を衝き拜謝して、和親の使者の禮を盡せば、熊谷直親執合て、房州疎略をな咎め給ひそ。兩管領諸敗將は、只管和議をいそぐの故に、我其使を將て來れり。と陪語れば義成異議もなく、其義こゝろ得候ひぬ。と應て傍を見かへりて、件の使者に答るやう、憶ざりける、亟の通交、義成も亦歡び思へり。和睦の事は別議なし、餘事は後刻談ずべし。倶に客の間に退きて、侯こそ便宜なるべけれ。と亟の應に助友等は、相歡びて言承しつ、却八犬士にうち向ひて、名對面して且いふやう、曩には兩敵斷殺時、或は黃昏、或

て、唇齒の思ひを做すべきのみ。這義に叛き候はゞ、天誅國罰兩ながら、身に受て子孫斷絕せん。言偽りなき照据にとて、則連署誓文に血を濺ぎ、各征箭を折添てまゐらせたり。人過ちて改るに憚りなし、兩管領かくの如くなる上は、荷擔の諸將孰か違ん。房州は忠義孝順の人也。其義は室町殿も知し召ぬ。速に御承ありて、捕所の敵城を返すべく、虜にしたる敗將等を、速に放還さば、公私の幸甚しからん。這義は諚意のみならず、最も畏き天朝も、叡慮安からざる所あり。且房州再三貢獻の忠誠と、其家臣八犬と唱ふる者の、戰功を叡聞ありて、連りに御感のあまり、勅使代秋篠主を添られたり。無異の御承しかるべし。と說れて義成喜悅に堪ず、謹答るやう、御諚承り候ひぬ。曩には義成、水陸三路の、大敵に當るといへども、只防ぐを旨として、殺伐を好とせざりしに、諸隊の壯佼八犬士等が、北るを逐ふて、敵の棄たる城に据りたるも是あり。或は又殺さで生拘候ひし、敵將も多かるは、只其暴を懲さん爲のみ。久しく留むべきにあらざりしを、いかにせん、大敵遠く跡を埋めて、和を講ずる者なかりしかば、今に至り候ひぬ。然るを天威御武德の過分き、恩命を辱くす。何をか違背仕らん。速に那城を返し、敗將を送り遣ん事、臣が情願に候へども、いまだ兩管領より和睦の使者なし。この義誰何と請問へば、外廂に羅列れたる、京家の雜掌兩三個、遽しく膝を找

餘之七は穗北に在り。又眞間井樅二郎繼橋綿四郎、潤鷲手古内振照倶敎二、二四的寄舍五郎須須利團五郎等は、國府臺の城に在り、鳥山眞人は、岡山の壘に在り、石龜次團太越艚三は、行德に在り。又楯持傔杖、大樟村主は、既に身の暇を給はりて、其本領に在り。又直塚紀二六、犬江屋依助も、有功の者なれども、他等は蜑崎が家僕也、市河の町人なれば、こゝに數ふべくもあらず。向水五十三太、枝獨鈷素手吉等も是に同じ、看官是を思ひねかし。却說、熊谷直親は、義成にうち向ひて、房州將軍家の御諚あり。といへば義成阿と應て、膝を找めて拜聽す。直親大紋の袖掻合せて、抑舊冬兵亂の事、其基本を原ぬるに、扇谷定正が、聊なる怨によりて、山内顯定と、近國雷同の兵を連ねて、安房上總を伐まくす。其鬪戰破れしより、東國いまだ靜ならず。這義既に京師に聞えて、上の御心安からず。因て詮議を遂らるゝ所、定正顯定の非理分明也。この故に、我直親を御使に做されて、御譴責あり。直親則上野沼田、白井及河鯉の城に發向して、上意を傳へて其罪を責るに、定正顯定、長尾爲景に至るまで、各其非を後悔して、稟し解くに詞なく、罪過を恩免あるならば、里見義成と和睦して、東國太平の功を奏すべし。但定正顯定の兒子、及合戰の諸將の、敵に生拘られて、今猶稻村の城に在る者、主僕十二人なるべし。義成速に和議を容れて、其敗將等を返し候はゞ、兩國是より好みを結び

兵衞蟹崎照文は、光絹衣麻𧘕袴にて、京家の旅館に伺候して、時分宜きよしを報しかば、勅使代廣當諚使直親は、立烏帽子大紋の直垂にて、小刀を腰に跨て、出て案内に就きしかば、隨從の雜掌十餘名、素袍烏帽子にて、大刀を執り、征箭を執れるもありて。各主に倶してゆくめり。恁而件の兩御使は、引れて儲の席に近づく程に、國守安房守義成主は、嫡子義通と共侶に、朝服に身を整て、三四間出て是を迎へて、正廳の上坐に請待す。隨從の雜掌は、廳の外廂に羅列たり。當下這席に與れる、犬阪毛野犬塚信乃、犬山道節犬村大角、犬川莊介犬飼現八、犬田小文吾は、各禮服にて、犬江親兵衞蟹崎十一郎と、倶に亦是外廂に侍り。這他次の間には、東六郎荒川兵庫助、杉倉武者助政木大全、田税力助姥雪代四郎、蒲呂復五郎蒲呂再太郎、安西就介磯崎增松、朝夷三彌白濱十郎、七浦二郎東峯萠三、鱆船貝六郎大岸法六郎に至るまで、皆禮服の袖を列ねて、伺候せずといふ者なし。又義實老侯の名代には、堀内藏人ぞ侍りける。この餘杉倉木曾介浦安兵馬小森衞門等は致仕の老人なれば召れず。天津九左四郎も是に同じ、各其宿所に在り。又堀内雜魚太郎は、鎌倉に在陣す。又小森但一郎浦安牛助、千代丸圖書助、木曾三介小水門目、音音妙眞、曳手單節、猨岡猿八鮑内葉四郎等は、五十子及大塚の城に在り。印東小六荒川太郎一郎は、前に見えたり。又登桐山八郎は、石濱の城に在り。落鮎

墜したる、扇谷朝寧は、流れて、下總葛飾なる、矢斫河に造りし時、犬飼現八に拯れて、且親兵衛が神薬の即効にて、甦生りつ矢傷愈て、生拘兒等と共侶に、稲村の城に在りと聞知りて、怒罵ること大方ならず、且いふやう、舘は慈善を旨とし給ふ、御軍令ありとても、射て墜したる敵の大將を、救ふて活し置ならば、戰ざるにしくことなし。好々那奴が稲村に在る程は、非如幾番召さるゝとも、我は得ゆかじ〱。と敦圉猛く發憤しを、明相に諫められて、本城に來にけれども、尙憤り解けざれば、其詰朝先信乃に、件の怨をいひ出て、云云と論ぜしを、信乃は徐に和解ていふやう、犬山幵は無理也。那扇谷は、和殿の故主の寃家なりとも、去歳の春、那頭鎧を射て墜して、志を果しゝにあらずや。然ば去歳の冬の鬪戰は、當舘の御大事にて、我私の志を、行ふべき時にあらず。犬飼犬江は、這義をもて、倶に那死を救しのみ。敢敵を愛するにあらねど、朝寧かの折命終らば、後に和睦ありとても、猶怨を遺さるべし。然では後の患ひ也。この義を忘れ給ひし歟。と解かれて道節言下に悟りて、寔に爾也々々。と應て又多辯せず。是よりの後現八親兵衛と、團坐する日の多かれども、這義を毫もいひ出す、倘問人のある時は、幵をしも他事に紛らして、說誇ることなかりしかば、信乃は悄地に感嘆して、哥々は理非に醒て惑はず、君子の風ありとぞいひける。間話休題、時に四月十六日、當旦犬江親

澄以下の衆臣、各主に從ふて、うち連立て退散す。登時預人等、多く出て來て、成氏以下の十二敗將に、請ふて臥房へ案内をす。爾程に信乃現八は、成氏を送て枕に就せ、毛野は自胤を送り、政木大全は、朝良朝寧を送り、莊介小文吾は、稻戸由充を送りけり。各所緣あれば也。この他齋藤盛實は、憲房の伴に立ぬ。又爲景憲重胤久は、親兵衞と預人に送られて、各臥房にぞ入りにける。

第百七十九回中

義成十二敗將に面す
助友祕封一匣を受　（此の附目も總目錄によりて補ひたり）

却說、義成親子は、其夜分、成氏以下、十二個の敗將に、對面の次の日に、京師の兩御使に拜謁して、勅詔并に、室町殿の台命を承るべしとて、この朝勅使代秋篠將曹廣當と、旋使熊谷二郎左衞門尉直親を、稻村の城内なる、正廳へ請待す。この故に犬山道節忠與と、犬村大角禮儀は、召れて昨日新井忍岡の兩城より、各快船にうち乘りて、昨宵更闌て、稻村に參上す。伴當僅に三十名に過ず。又那兩城は、田稅戸賀九郎逸時苫屋八郎景能、印東小六明相、荒川太郎一郎清英等、衆兵を將て是を守れり。爾程に道節は、去歲の冬の水戰に、射て海底に

嗟嘆に堪ず、其はいはるゝ事ながら、拙巧何ぞ負むに足らん。盛實先生拘られて、後に摠敗軍に做りしより、身も亦擒にせられて、いまだ親の安危を知ず。恁而在る事、一日も千秋に異ならず。這意を察し給ひね。と謝すれば義成感歎して、孝なる哉若き人、末憑しく候。と譽れば成氏側より、然也々々と點頭て、這子の如きは、親に從ふ、愆に似て愆にあらず。咱等は初國府臺にて、信乃現八にいはれし義あり、過ちて改ざりける、過ちを爭可はせん。悔て及ばぬ事ながら、只在村こそ恨しけれ。と陪話るを義成推禁めて、君は貴人にして且舊好あり。那御愆なかりせば、駕を藏藩へ枉られんや。憂苦を轉じて歡びと、做し給はんも遠からじ。と慰むる詞も果ぬ折から、土圭鱗りて初更になりにけり。憲重是をうち聞て、胤久盛實等に目を注して、找み出つゝ義成主に、今宵の對面を謝していふやう、有がたきまで御懇命、孰か感悦せざるべき。既に初夜にて候へば、華胄の暇を賜るべくや。と執合すれば、爲景は獨傲然とうち笑て、現に敗軍の將には、兵を談ずべからず、俘囚の人には、安樂を示すべからず。我言なきはこの故也。不禮にはあらず退りてん。と誇るを成氏睨へ禁めて、憲房朝良自胤等と、倶に謝義の詞を連ねて、主人の退坐を乞しかば、義成聞て敢て強ず、現に今宵は初對面なり。長談燭を續べきにあらず、復こそ見參すべけれとて、義通と共侶に、辭別して退給へば、辰相濟

れども猛く勇のあまり、深川に和老を赶稠たる、滿呂復五郎もこゝに在り。其を悄地に船をもて、朝良主と共侶に、迎拿りしは要ある事にて、陣歿させじと思へば也。其作者はこゝに在り。といひつゝ毛野を指示せば、由充は阿とばかりに、應も果ず左見右見て、現に賢君の下には、八行の臣多かり。由充が不肖なる、我身一個の敗軍ならねど、當日死ざるを怨とす。非如報恩の義を以、首を接るゝことありとも、今さら何を面目にして、越路に退り候はんや。と言蕭然に答るを、毛野はさこそと慰めて、其慷慨は理りながら、かの折和殿の拯ふたる、朝良主は、箙殿の外孫にてましますに、當日那君陣沒あらば、和殿も必命を殞さん、この故に、我胤智先見あり。計りて當城へ迎へ拿りしは、虜に做すべき爲にあらず、是則莊介小文吾に、代れる二度の報恩のみ。といへば莊介小文吾も、慰めて倶にいふやう、稻戸主、和殿節を折き自然に儘せて、身を敵城に置といへども、忠義に厥たる所なし。其賢良の故をもて、我君格別の管待あり。是亦臣等が願ふ所、徐に歸北の折を俟て、後の好を修め給へ。と諭せば由充頷くのみ、又いふよしもなかりけり。當下義成主は、憲房にうち向ひて、山内の公子、那騑馬三連車は奇妙なりき。然けれども奇功あるときは、奇物是を破ることあり。和君の後れたるにあらず、魯般が雲梯も、墨翟に折かれたり。さのみな思ひ屈し給ひそ。と慰められて憲房は、憮然として

で、殺さば必後の世まで、不明の譏を貽さんに、靈狐の冥助にて、今賢君に仕るは、則自他の幸也。相心得て候。と應をすれば、義成主は、謝して且笑しげに、この義も亦易かりき。却三浦殿親子の如きは、阪東一の勇士なるに、犬村大角禮儀が、僅に三百の小兵をもて、克得て城を受拿て、主を當所に徙しゝは、成敗時運に由れるのみ。矧叉筋力をもて、理義を破らず、其進退を敵に儘て、多く士卒を害ざりしは、是大勇の致す所、識者は必感歎すべし。且和殿親子は、我當然の敵ならねば、疾にも送り還すべきを、いまだ其義に曁ざりしは、我這意を知しめて、後の好を修んとて也。今一霎時の程なるべし。と慰められて義同は、蹴然として答るやう、示教の赴承りぬ。かくいへばとて誇るにあらねど、我力山をも抜くべし、只仁と義には敵しがたかり。我倘こゝに置れずは、和君幷に犬士等の、大仁大義を具に知らんや。孩兒が爲にも後學にて、歡ばしくこそ候なれ。と謝すれば義武頭を擡げて、間常には迂遠なりと、思ひし仁義の微妙を知りぬ。譬ば雲と水との如し、斫れども斫れず、拂へども去らず。然るを武勇を負みしは、愚なりき。と呟くを、義成急に推禁めて、御父子の謙遜當りがたかり。是よりの後交を、結ばれなば幸ならん。といひつゝ傍を見かへりて、稲戸叟徒然ならん。和老は莊介小文吾と舊交ありて、且這囘行德口の闘戰に、他等が報恩の事はしも、我も粗聞知りぬ。然

烏滸がましくは候へども、我仁が稟す義あるを聞給ひね。孝嗣が死刑の折、箙大刀自に形を變じて、根角谷中二等を愚にしつゝ、旨く那死を救ひし白狐は、孝嗣の母に受たる恩を、報んと爲の所行なるよしも、後に備に知られたり。この頃某は故ありて、武藏に旅宿しぬる程に、豫聞知る孝嗣が、寃屈の死刑の痛ましさに、いかで末期を見まくほしくて、忍岡邊に赴きつ、他が必死を免し時、料りて其强弱勇怯を試して、友垣を締びにき。然を根角谷中二們は、淺慮なる臆斷もて、孝嗣を救ひしは、親兵衛が幻術の致所と聞え上て、いよ〳〵君を惑し、と人の噂に聞えたり。夫幻術は魔法なり、仁人賢者の做す事ならんや。某は姫神傳授の神藥をもて、人の必死を起す事多かり。往日朝寧主も、死して甦生りしは、我神藥の奇功なれども、那佞人們は、亦誣て幻術なりといひもやせん。この義によりて悟らせ給はゞ、孝嗣が忠と不忠の御疑ひは解けつべし。讒者の舌は劍に似たり、市に三虎を做すときは、曾子の母をも欺くべし、怕るべきに候はずや。と憚る色なく解醒せば、朝良朝寧やうやく悟りて、倶に呆るゝこと半晌許、姑且して朝良のいふやう、家兄はいかに所給ひけん、孝嗣の言誠に以あり。犬江が議論はいよ〳〵妙也。咱等饒されて歸城せば、必よ親に報ん。といへば朝寧も倶にいふやう、曩に孝嗣が罪過のことは、親の讞斷なりければ、我知る所ならねども、當時虛實を正しも得せ

意に稱ふて、最芽出たし。就て又扇谷の兩公子に、請まくほしき一義あり。御家の忠臣河鯉守如が、獨子也と聞えたる、河鯉佐太郎孝嗣は、嚮に姓名を政木大全と改めて、今這席末に在り。他は刑餘の人なれども、其罪にあらずと聞ぬ。いかで御目を賜りね。と引合すれば孝嗣は、挨み出つつ、朝良と朝寧にうち向ひ、額を衝きて、姑且して稟すやう、身の非を飾るに似たれども、臣等御家に在りし日は、只忠孝の二をもて、仕へ奉るの外あらざりしに、讒者の僞に誣られて、竟に死刑に行はれ、白刃頭に莅む折、靈狐の冥助によりて、不測に必死を免かれて、且犬江親兵衛に邂逅の歡びあり。それより後は箇樣々々、如此々々の事候とて、親兵衛に從ふて、素藤對治の首より這囘又親兵衛の、恩義の爲に葛飾の鬪戰に、義通君の先途を援て、强敵長尾景春を、防ぎ得たる事の尾まで、其崖略を陳ていふやう、是は此一旦の恩義に報ひ候のみ。身の薄命を見かへれば、榮利を求むるに意なきを、憖に犬士等の薦めにより、里見殿に知られまつりて、竟に亦脫るゝ路なく、昨今仕へて、一隊の長の後にこそ候なれ。然とても、今この時なくば、いかにして兩公達に、見參を饒されんや。稟す義を悟らせ給ひて、御歸城の後老舘（定正をいふ）に仰上らるゝ事あらば、臣等が寃屈の罪解けん。只身の幸のみならず、亡父も冥土黄泉にて、さぞな歡び候はめ。這義を願奉る。と請へば亦親兵衛も、挨み出つゝ朝良と、朝寧にうち向ひて、

きたる、頭を擡げて自胤に、うち向ひて、且いふやう、曩に淺草野邊にして、料らず見參に入りし後の事を、又稟解候はん。かの折君に知られまつりて、然しも恩遇なきにあらねど、逆臣馬加大記常武が拄へて、私宅に抑留めて、悄地に他が逆謀の、幇助にせまく欲せしを、某緊しく說破りて、其非を擧て窘めしかば、常武陽には從へども、是より言の漏れもやせん、と怕れて軈て某を、別室に閉籠て、久しくなるまで放ち遣らず。折から常武が賀席にて、肇て對面したる、儛妓旦開野は、假少女なるを知らず、他が復讐の後にこそ、迭に奇き過世ある、義兄弟たるべきよしを悟れども、言を盡すに遑なく、但其幇助に儘せつゝ、他鄕に走り候き。遮莫君が御內には、常武が餘黨多かれば、猶胤智と某を、誣て云云といひしもあらん。今又見參の折をもて、胤智と共侶に、舊寃を解まく欲す。這義を思し召れずや。と言爽に辯ずれば、自胤は聞く事每に、恥て身を措所を知らず、赧然として答るやう、犬阪といひ犬田と云、我に由緣のありけるを、我愚にして用ることを知らず、反て今日まで常武等が、奸詐逆謀を悟るに由なく、剩這回兩管領の、催促に從ふて、倶に敗軍の辱に遇けるを、只後悔の外あらず。尙幸に和義成て、城地に還ることを得て、使札の往來を饒されなば、教を承まく願ふのみ。と謝するを義成うち聞て、千葉殿㤪思ひ給はど、只胤智悌順の歡びのみならず、我も亦いふかひありて、本

五十子の城に在り。去歳の正月の下浣、相摸へ使を奉りて、那地へ啓行すと聞えしかば、鈴の茂林邊に埋伏して、其首捕て、親弟兄の怨を雪め候ひにき。この義に就て傳聞の錯誤も候はん。いかで扇谷の兩公達も、倶に聞し召ねかし。臣等が後の復讐は、便是御家の忠臣、河鯉權佐守如の汲引に由れり。守如は那縁連が、奸佞君を惑はするを、憎みて除まく欲する程に、他は臣等が寃家なるを聞知りて、其起行を報るのみ。當日犬山道節が、復讎の事あらんとは、夢にだも是を知ず。臣等も亦其折までは、道節と相知ず、事おのづから合期して、扇谷殿の道節に、逐れ給ひしのみならず、五十子の城はしも、犬塚信乃に拔れしかば、縁連の黨人は、守如謀叛ありと讒て、いよ〳〵君を惑はせしかば、憐むべし、守如と蟹目前さへ身を措離て、倶に刃に伏給ひき、と世の風聲に聞えたり。臣等は是過世ある、八個の義兄弟候を、後に悟りて共侶に、近曾當家に仕へしより、皆用ひらるゝ事淺からず。既に微功を成といへども、臣等は水軍の隊の長にて、君が御隊に向ざりしは、是切もの幸也。いかで惑を解せ給ひて、佞臣常武縁連が、奸詐殘忍の酷しかりけると、首が忠誠鯁義に枉死の、玉と石とを分たせ給ひて、死後に賞罰の御沙汰あらば、善政枯骨に及といはん。這義を訟まつらん爲に、憶ず多辯に倣り候き。と報る誠は感激の、目皮の露に知られけり。當下犬田小文吾も、膝を找めつ額衝

を見かへれば、屏風の陰に扣たる、犬阪毛野と政木大全は、倶に禮服晴やかに、出て席上にうち向ひて、仰ぎ見つ頓首せり。登時義成主は、先自胤に告るやう、千葉殿這壯佼を認り給へりや。是は此蔽藩の軍師、犬阪毛野金碗胤智是也。其素生を原るに、貴藩の忠臣と聞えたる、粟飯原首が遺腹の子也。餘事は他が口中にあらん、胤智進みて、見參せずや。といわれて毛野は阿と應て、恭しく自胤に、うち向ひて告るやう、言新しく候へども、臣等が父粟飯原首は、原是千葉の親族にて、君に仕へて私なく、常に諫を呈りて、安危を未然に計るものから、佞臣馬加常武に、讒訴せられて、剩籠山縁連に撃れしを、常武猶も讒言して、臣等が嫡母と兄女兄さへに、慘刻誅戮せられたり。臣等が母は妾にて、那身に遺腹ありければ、難を免かれ辛くして、相摸の國、足柄の山脚なる、犬阪村に潜て居。臣等が成長に及びて、父の枉死と寃家の上を、言詳に説示して、幾程もなく身故りにき。是より後一日も、臣等は復讐の志移らず。假少女子に身を做して、儛妓旦開野と喚れつゝ、竟に馬加常武か、酒宴の席に招れたる、當晩寃家常武と、一家の主僕を鏖にして、垣を乘て出る程に、這時までは宿世ある、義兄弟とは知ざりし、犬田小文吾悌順が、常武に禁錮られて、別室に在りしを幇助にして、城を出船に乗りて、別れて他郷に走りにき。又那寃家籠山逸東太縁連は、爾後扇谷殿に仕へて、

く、竟に諸君子を屈請して、當城に留め侍るは、是豈義成が情願ならんや。爭何せん、兩管領は、敗軍の後、跡を埋めて、和睦の議なく、其家臣等は守る所の城を棄て、走りて其往方を知せず。諸君を迎拿らまくする者、一人も是あるを聞ねば、只得今日に至れる也。然るを思ひがけもなく、京師より兩御使あり。一個は勅使代秋篠將曹廣當、一個は室町殿より遣されける、熊谷二郎左衛門尉直親是也。今日しも蔽藩に光臨せらる。いまだ對面せざれども、聞くに和睦の一義也といへり。義成苟も、居ながら勅諚と台命を承らん事、武門の面目冥加に餘れる歡び、何者か是に優すべき。この折をもて諸君子に、意衷を告まく欲する故に、推て見參に入り候ひき。と口誼に羞たる成氏憲房、以下の敗將、應難つゝ阿とばかりに、言詳ならざれば、大石憲重原胤久、おそる／＼席末より、找み出て答るやう、今にはじめぬ御懇命、我們主僕十二名、倶に俘囚でありながら、坐して食ひ溫に衣て、朝夕の安かるは、君が博愛の餘恩にて、仁者不殺の眞心を、感佩の外候はず。と執合すれば、成氏憲房、朝良朝寧自胤も、倶に日屬の慈恩を謝して、其寬仁を稱贊す。義成是をうち聞て、滸我殿は我大父季基の時より、舊交なきにあらず。又兩管領の賢息達も、倘愆る端に遇ざりせば、いかにして蔽藩に、駕を枉らるゝよしあらんや。就て朝良朝寧主、并に千葉殿に請まほしき一義あり。といひつゝ後方

果しかば、又給侍の諸士は、成氏以下十二個の敗將を、請ふて廣書院へ遷しけり。當下犬塚信乃犬川荘介、犬飼現八犬田小文吾、犬江親兵衛等皆禮服にて出て來つ、倶に恭しく、席上にうち向ひて、信乃がいふやう、滸我殿以下の諸君子に告奉る、寡君義成の口状あり、久しく旅舘の御徒然を、慰めまゐらするよしもなく、對面の義に及ばざりしは、素より是故ある事にて、義成の本意にあらず。事やうやくに便宜を得たれば、今宵見參に入らまく欲す。先這義を造稟せとある、君命にこそ候なれ。といはれて成氏以下の敗將は、生憖して恥たる色あり。この時席上に、幾箇ともなく建列ねたる、菊燈臺は、灯花の色を增て、白晝の如く明ければ、照る金屛の後より、里見安房守義成主、其子太郎義通と倶に、立烏帽子長袴にて、小刀を腰に跨て、出て主坐に著給へば、兩家老辰助清澄、并に杉倉武者助、姥雪代四郎、及蒲呂復五郎も、嚮に行徳より召復されて、倶に相從ふて席末にあり。この餘蒲呂再太郎、安西就介、磯崎增松は、或は兩主君の大刀を執り、或は手燭を秉て、扈從して後方に侍り。親兵衛と荘介は、這席の奏者にて、主に向ひて諸敗將の、姓名を通達す。義成是をうち听て、拔みて件の人々にうち向ひて、名對面の禮正しく、且いふやう、諸君いよ〳〵恙まさずや。義成不慮に、罪を兩管領家に得てしより、料らずも水陸の鬪戰に、八犬士等が防禦の備は、反て勝に乘ざることな


十二敗將稲村の城に幽せらる
なり氏



幾日もあらず、時に四月十五日、京師の御使、秋篠將曹廣當、熊谷二郎左衛門尉直親は、儲り船にうち乘て、洲崎の浦に來著す。從ふ伴船五六艘、犬江親兵衛、蜑崎照文は、別船にて先に我み、犬阪毛野は、後に從ふ、這三士の從者も少からず。既に港口に造りては、有司地方の小吏人們出迎へて、前駈して稻村の城に案内しつ、儲の旅舘に請待す。欸待大賓の禮を以す。毛野親兵衛照文は、倶に義成主の身邊に參りて、報稟す義あり。義成いよ〳〵歡びて、大敵既に承服の聞えある、兩御使來臨を忝くす。對面は必明日なるべし。しからんには、今宵我久しくこゝに留在らせたる、滸我殿以下の敵將等に對面して、愚意を示さずはあるべからず。先這一義を急ぐべし。と詞委なく吩咐給へば、毛野親兵衛照文等は、敢異議なく言承して、退りて辰助清澄と、信乃荘介、現八小文吾、幷に政木大全等に、旨を傳へて共侶に、事の准備をしたりける。恁而成氏憲房、朝良朝寧、自胤爲景、義同義武、憲重胤久、盛實及由充に至るまで、預りの諸士、一箇々々に、沐浴させて、新しき衣裳を薦めなどす。成氏以下の囚徒は、此光景に胸安からず、原來今宵我們が、首を刎ん爲にこそ、這管待を做すならめ、と思へども今さらに、人に問べき由なければ、倒に覺期を究めて、他等が、隨意せざるはなし。斯而夕饌も

ふべけれ。我亦思ふに、那御使の來著までは、猶數日の暇あらん。法六郎も宿所に退りて、後の勤に就べき者也。辰相清澄這意を得て、宜く他等を勸るべし。と例の仁慈を示し給へば、大家いよ／＼感服して、この日の席は果にけり。是よりして稲村の城内には、京師の御使を管待の、准備遑なく且し暮して、十有餘日を歷ぬる程に、有一日五十子の城より、犬阪毛野は快船の使に消息を齎して、兩家老五犬士等に報るやう、這囘參向の勅使代、秋篠氏、幷に室町殿の御使、熊谷生は、兩管領を御譴責の事果て、近日渡海の聞えあり。兩三日に過べからず。其御儲をいそがせ給へ、胤智案內を仕らん。急々如律令とありしかば、義成是をうち聞て、家老辰相清澄、及信乃親兵衞、莊介現八、小文吾等を、召集合て商議あり、且課るやう、那御使が立よるとも、五十子は敵城なり。又在る所の浮寶は、皆是戰艦なるべし。其汚穢たる物をもて、那人々を迎んは不敬也。この故に親兵衞と照文は、洲崎の浦なる巨舫五六艘と、士卒一百五六十名を將て、那御使を迎ふべし。又信乃莊介現八小文吾は、這囘の饗應使とす。六郎兵庫助もこの意を得て、旨を照文に傳ふべく、又毛野が使には、囘翰を拏らせて、この意を得さすべし。事忽緒にすべからず。と掟ていそがせ給ふにぞ、大家都てこゝろ得果て、次の日親兵衞と照文は、准備の船を裝めつゝ、士卒を將て平天より、柴浦を投ていそぎける。是よりの後

とばかりに、膝行頓首受戴きて、こは過分き御賜、鄙語云、愆の功名にてこそ候に、冥加に餘る畏さよ。と稟しつ些退きて、却二家老と五犬士に、君恩を謝にける。當下大岸法六郎も、御目前に召出されて、先には照文に従ふて、副使をよくしたりとて、褒美の詞を賜りける、甲乙面目身に餘るを、清澄さこそと執合して、且いふやう、去歳の冬照文を、京師へ遣さるゝ時、呈書を齎せ給はず。吉凶料りがたければ、那地に到りてものせよとて、只素紙に御印章を、做されて渡し給ひしに、法六郎さへ附られしは、後の便宜に做りけるを、神ならずして豫より、知るよしもなく候き。といへば辰相、然也と應へて、聞くが如きは阿漕にて、那疑を解きたるも、御印章によりて也。又京師にて蜑崎が、思ひの隨に計り得て、御書を自由に寫せしも、御印章ある故なれば、其妙さらにいふべからず。と譽れば信乃も親兵衛も、共侶にうち點頭て、事皆人意の表に出ぬる、十一郎の揣る所、術よく事の整ひしは、是我君の御盛徳と、伏姫神の冥助もあらん。左にも右にも蜑崎生の、全功にこそ候なれ。と執合すれば、莊介現八、小文吾も感じて已ず。現に蜑崎の新智玉には、必や犬阪も、一階を讓るべし。と稱て笑局に入しかば、照文は額に汗して、當りがたしと謝にける。當下義成は、又照文に課するやう、汝は疲勞もあるべけれど、徑に瀧田へ罷歸りて、京師首尾を老舘に、悉と告奉らば、さぞな歡び給

毛野又照文に談ずらく、室町殿の御威徳もて、兩管領承服せば、那御使秋篠熊谷は、必當城に來著して、水路を安房へ渡すなるべし。其折、我胤智は、兩御使の案内に立て、稻村の城にかへり參りてん。和殿は夙く歸城して、この義を舘へ告まつりね。この餘の事は恁恁と、後の進退を解示して、酒飯を羞めなどする程に、日は暮て順風なりければ、柴浦に維せたる、船に臣等主僕を載て、波の上安らかに、通宵走る風のまに〳〵、洲崎へ歸著仕りにき。と言詳に告稟せば、義成主を首にて、親兵衛自餘の四犬士二家老、憶ずも皆うち笑れて、奇也々々と稱賛す。就中に義成主は、特に怡悦に堪ずやありけん、照文を身邊近く、進ませて宣ふやう、料らざりける汝の挊き、是第一の奇功、八犬士に伯仲す、といふとも、過たりとすべからず。現に禍福は糾ふ纆の如し。約莫倚伏の至る所、事塞翁が馬ならぬはなし。初我照文に使を課て、重て京師へ遣せしは、仁を迎へ執せん爲也。然るを仁は使を俟で、おのづからにかへり來て、且葛西にて軍功あり。又照文は、風難に船を破られ漂泊して、阿漕に去歳を暮しつゝ、この春更に京師の上りて、我爲にしも計り得て、大敵和平の時宜に造るは、是我素懷を果せる所以、其績拔萃なり。勸賞は異日にあらん、是を當座の褒美にとて、急に傍を見かへりて、刀架に措れたる、刀を手づから拿揚て、卒とて是を與へ給へば、照文は阿

と、八犬士の大功を、感思召よしありて、勅使を遣さるべしと聞えけり。是によりて秋篠將曹廣當を、勅使代に做されて、室町殿の御使、熊谷二郎左衛門尉直親と共侶に、安房へ參向すべしと也。爾程に件の兩御使、秋篠廣當、熊谷直親は、伴當を多く領て、三月十二日に啓行して、岐岨路より、先上毛に造らまくす。這時山内顯定は、上毛沼田の城に在り、又長尾景春は、同國白井の城に在り、又扇谷定正は、武藏なる、入間の河鯉に在城すと云ふ、其聞え紛れなければ、那三將に上意を示して、其罪を譴め、以後を儆め、承服和平に至るの日、兩御使は、其家臣等を將て、水路を安房へうち渡して、上意を傳ふべしと定めらる。是によりて照文等は、上毛より兩御使に相別れて、那敵城へは立よらず。登時熊谷直親は、照文に示していふやう、汝は夙く安房へ退りて、この義を房州へ傳ふべく、又武藏相摸なる、新井、五十子、忍岡の城にありとか聞えたる、三犬士にも告示して、退城の准備を做さしむべし、とある、中途よりこの指揮に儘せて、臣等は法六郎と倶に、伴當夫役を從へて、昨日五十子の城に來つ、件の首尾を、犬阪毛野等に告しかば、毛野等が歡びいふべうもあらず、軈て忍岡と新井の城へ使をもて、道節大角に傳達す。この他大塚石濱の城なる、登桐三八郎良于、小森但一郎高宗と、穗北なる落鮎餘之七有種には、別に使をもて、必通達すべしといふ。

貶は上意に依らん。旅亭に退りて御沙汰を等ね。と應て照文等を返しけり。却照文等は逗留の間ひ、攝籙へも廻勤して、朝廷へ貢を獻り、搢紳家へ人情も、先例によりて漏すことなし。爾程に室町殿は、那訴を聞食て、管領幷に評定衆を、召聚へて詮議あり。里見義成は、是謹愼の君子にて、貢進の禮兩三番に及べり。是によりて之を觀れば、今愁訴する所、情願忠義を知るに足り。しかれども子路ならぬ者の、片言をもて孰かよく、訟を定むべき。夙く間諜兒を、武藏と安房へ遣して、那兩敵の善惡邪正を、搜らせ給ふべくもやといふ、衆議一決したりしかば、義尙則政長に課するよしあり。政長是を承はりて、退りて軈て間諜兒を、東へとてぞ遣しける。恁而三月の初旬に至りて、那間諜兒等かへり來て、定正顯定兩管領の、非議を告る事具にて、且我舘の御仁心、幷に八犬士諸勇士の才幹武略、戰功大義の一伍一十を、聞るが隨に稟上しといふ、この義も後に洩聞えにき。然ば室町殿には、重て詮議を遂られて、褒貶賞罰の制度ありけん、照文等を管領邸へ召よせて、政長則上意を傳るやう、這回房州の愁訴、既に其實を得たり。こゝをもて御使を、東國へ遣されて、定正顯定を御譴責ありて、房州と和睦仕るべき、旨を御下知あるべし。汝等は御使の鄉導を仕りて、俱に東へ退りねとて、御教書を遞與されけり。事の便宜は是のみならず、掛向は最も畏き天朝にも、我舘の御忠信

侯を連ね兵を合せて、義成を伐まくす。義成素より罪なくて、罪を連帥に得て、脱るゝ路なく、房總褊小の士卒をもて、三路の大敵を防戰ひしより、只一日にして勝ことを得て、水には數千の戰艦を燒淪め、陸には數萬の大敵を擊走せたり。是併蔽藩の八犬士、犬阪犬塚、犬村犬江、犬山犬飼、犬川犬田なンど喚做す者の、智計武勇によりて也。大敵既に迹を埋めて、水陸の路闢けしかば、使臣蜑崎十一郎照文、大岸法六郎澄妙等をもて、隨卽微功を訴まつりて、黃白方物を貢進す。願ふは夙く御制度ありて、兩管領の暴を禁め給はり、東國の大小名和平して、國民塗炭を免れなば、獨義成の歡びのみならず、八箇國の良賤男女、咸柳營の御武德を仰まつりて、家舞戶謠、置酒して太平を樂むべし。この義を以て穩便なる、御下知をこそ願しけれ。是卽義成が呈書に載する所、陪臣照文等が、意見をもて稟すにあらず、いかで宜く御亮査あらまくほしう候なれ。とおそる〳〵愁訴して、則室町殿（足利義尙）へ一千金、東山殿（義政）へ一千金、管領政長及當時の權家、伊勢氏を首にて、黃白の贈ものあり。土宜方物も形の如く、數を盡して使札の禮とす。政長則其義を容て、且いふやう、東國兵亂の事はしも、上にも既に聞食て、驚き思召す所也。房州（義成をいふ）の愁訴實に是其理あり。矧又貢進の禮屢々にて、忠誠を表せらる、今さら何等の疑ひあらん。この義を備に聞え上て、褒

を、知し召なば後々まで、首尾よからずや、と思ひ得て、法六郎に恁々々と、意衷を示しつ、國司の恩義を、網曳周魚に謝し、且別を告て、我主僕數十名、一人も恙ある事なく、那巨船にうち乘て、纜を解く旦開の順風に、西を投てぞ走らせける。恁而二月の初旬に至りて、船浪花津に果しかば、隨即那津に旅宿を投めて、阿漕の船は船工篙師等も、倶にかへし遣しつ、却我伴當の心利たるを、兩三名、悄地に京師に遣して、事の便宜を撈らするに、當春京都の管領政元主は、故ありて罷られにき。畠山政長主、一個管領たりといへば、こも亦幸ありに似たり。因て大岸法六に、機密を示し心得させて、那御印章ある紙を用て、室町殿へ進らせ給ふ、呈書一通と、奏啓の上書をさへ、形の如くに書寫させて、調貢の黄金土宜を、目錄に合せ配當して、長櫃幾箇にか藏めしを、夫役に舁せ京師に上りて、去歳の秋相識れる、客舍を宿としつ、次の日大岸法六と倶に、朝服を整へて、伴當夫役を從へつゝ、室町殿へ參上るに、法六郎を副使とす。田税苫屋の兩人は、那類怪の故をもて、遠江灘にて相別れて、御使に人足らねば也。恁而臣等と、法六郎等は、管領政長主に就て、先館の御書を進らせて、且稟らすく、寡君義成、年來仁政を布施して、民を拊國を治めて、敢隣國を犯すことなく、常に上を敬ひて、調貢の禮懈ることあらず。爾るに關東の兩管領、定正顯定、其政公ならず、叨に私怨をもて、諸

見は原是南朝の忠臣にて、我先祖と同義烈の好あり。今は山海、千里に分据しぬれば、疎濶胡越に似たれども、其家臣たる者の、渡海幸なく破船して、我封内阿漕の浦に、寓りしを反て疑ふて、禁獄久しくなるまでに、留め措しこそ無慙なれ。夙く異船もて、其投方へ、送り遣すべき者也。とありしかば、網曳平大夫周魚奉りて、臣等主僕を牢舍より、扶け出しつ勦りて、國司の仰恁々と、事の情由さへ解き示しつ、則巨船一艘に、所持の金銀方物まで、一箇も遺なく返し載て、且能工篙師、十餘名を假し加えて、船出を風に儘されたる、深切初に同じからねば、臣等が歡びいふべうもあらず。且肚裏に思ふやう、我君天の資によりて、水陸の大敵成敗績して、房總無異の聞えあるに、今さら這里より船を返して、安房へいなんは、要なき所行なり。然ばとて、犬江は既にかへり參りて、國府臺の闘戰に、奇功ありといふ、こも亦多氣の間諜兒が、國司へ注進せしとか聞ぬ。然らば京師へ赴くとも、是も要なき事なるべし。いかにせまし、と分よしもなく、左さま右さま尋思をしぬれば、究竟の一義なきにあらず。この折を以て、京師に上りて、兩管領の暴倣す、大兵をもて我君を、伐滅さまく欲したる、闘戰の顚末を、室町殿に告奉り、天朝に奏聞を經て、調貢の金子と土宜を、公武二庭に獻らば、我君忠恕孝順なる、年來の御仁心、この時にしも顯れて、室町殿にも朝廷にも、其私なき誠心

舘を功攻伐の事の風聲、那地へも聞えしかば、臣等はいよ〳〵胸安からず。いかで身を免れて、徑に還りて御先途に、逢ばやと思ふのみ、計の出る所を知ねば、只得舘の御印章ある、修善寺紙を拿出して、網曳周魚に示しつゝ、里見の使臣なる照据に做せども、北畠家と一たびも、書札の往來なき故に、周魚は其をしも信とせず、放ち還すべくもあらざりしに、其頃北畠殿は、東闘戰孰まれ、敗軍の艦海を渡して、這地に來ぬるもあらん歟とて、海邊の戍りを固くしつ、且間諜兒を、武藏と安房へ遣して、兩敵の勝敗を、備に知まく欲しけん、今茲正月下浣、件の間諜兒毎は、多氣の城にかへり來つ、兩管領敗軍の事の趣、いへばさら也、犬阪犬村犬山は、北るを赶つゝ武藏へ渡して、五十子、新井、大塚、忍岡の四箇城を、輒く捕たる事の顚末、又行德國府臺の鬪戰に、我御曹司を首にて、犬川犬田犬塚犬飼の、武勇智計をもて、敵將多く虜にせられし、山内顯定主と、扇谷朝良主、千葉長尾の敗北まで、具に注進したりといふ、事の便宜は是のみならず、臣等が去歳の初冬に、京師へ使を命ぜられて、船路を西へ赴きける、其祕事さへ間諜兒が、撈聞知る據ありけん、都北畠殿へ告稟しゝといふ、このこと後に知られけり。是によりて始より、臣等が言の僞詐ならぬを、やうやくに悟られけん、周魚に見せたる御印章を、よく認る者ありしかば、いよ〳〵那里の疑ひ解けて、北畠殿下知すらく、里

よしは、故ありて既に聞し召ぬ。其義は則箇樣々々と、田税戸賀九郎と、苫屋八郎等が、主僕十餘名、新井の浦に漂著して、奇功ありし事の趣の、其大略を解示して、和殿は亦何等の故に、京師に久しく淹留したる、歸帆の遲かりしは甚麼ぞや。と問へば照文、然ン候。逸時景能の事はしも、臣等も故ありて聞知りぬ。其義は後に稟上ん。既に知し召れたる、那類怪の厄解けし時、臣等が船は西を投て、走ること一日一夜、津の海近くなる程に、劼風猛可に吹起りて、檣を折り楫を摧き、船覆らんとしぬる者、幾番といふことを知ねば、人我生たる心地なく、波と風とに儘しつゝ、漂ふこと又一日一夜、風波やうやく歇りて、我船は神風の伊勢の阿漕に寓にけり。この地は、則伊勢の國司、北畠殿の封内にて、陣題網曳平大夫周魚と、喚做す者の沙汰として、半死半生なる我們主僕を、浦の守屋に扶容させて、醫師幷に漁夫等に課せて、看病等閑なく、一個々々に湯液を薦めて、勦り叮寧なりければ、我身夫役に至るまで、死ざることを得たれども、船には金子と方物の、最多くなるを訝りて、周魚悄地に思ふやう、他等は嚮に相告て、安房の里見の使臣なり、といひしは必詭言にて、實は海賊なるべしとて、敢一人も漏すことなく、緊しく牢舍に繫措せて、來由を國司に訟けり。然ば是等の穿鑿に、去歲は果敢なく暮んとす。有恁し程に、扇谷山内の兩管領、諸侯を連ね兵を合せて、

き春の日の、詞敵にし給ひけり。然ば又直塚紀二六は、蟹崎の家にかへり來て、則主人の女房に、京師にてありし事、箇樣々々と報るのみ、曩に照文は、犬江親兵衛を迎執ん爲に、二たび使を命せられて、京師へ赴く水路にて、類の怪異ありし事は、往日苫屋八郎景能の注進にて、其大概を知られしのみ、後の安危を知よしもなく、今に至て信なければ、いかに〳〵と思ふのみ、胸安からねば紀二六も、倶に額を病しめて、慰め難つ過す日の、春いたづらに暮んとす。花落て若葉做す、蒼山近く見る序に、懷日はいとゞ遙なる、憂苦をやるかたなかりけり。有恁し程に、當春三月廿八日に、蟹崎十一郎照文が、恙もあらで京師より、歸帆の告ありしかば、義成主は歡びて、兩家老辰相清澄、幷に犬塚信乃、犬江親兵衛、犬川莊介、犬飼現八、犬田小文吾、政木大全、杉倉直元等を召聚へて、專他を俟給ふ程に、この日照文は、刀筆吏大岸法六郎と倶に、夥兵伴當夫役們を領て、かへり來ぬる其船、洲崎の港口に果しは、今朝巳牌の時候なるべし。是より路次をいそぎつゝ、約莫二三時程に、夙く稻村の城に參しかば、義成則衆議廳にて對面あり、法六郎も召よせられて、照文と倶に見參す。兩家老五犬士は、侍坐して其言を听せらる。當下犬江親兵衛は、君命により拔み出て、照文に向ひていふやう、蟹崎生、近曾我歸東の義は、後にこそ聞るべけれ。又曩に遠江灘にて、和殿の船に類怪の憑きける

第九輯　卷之四十八

第百七十九回上

照文歸東して房總福多し
東西和睦して兩國津を開く

仁人仁を欲すれば仁こゝに至る。仁外にあらず、仁必其人に在、義外にあらず、義必其人に在、只求ると求ざるのみ。里見安房守義成主、博愛仁恕の心もて、水陸の施餓鬼果しかば、大法師を首にて、來會の大衆數百口、次の日稻村の城へ召登されて、義成隨即對面あり。齋を賜り布施を牽る、其管待淺からず。各身の暇を賜りて、咸其寺にぞ返されける。是よりして犬江親兵衛も、暇あることを得て、瀧田の城にかへり來つ、姥雪代四郎と共侶に、義實老侯に見參して、君恩の辱きを拜しまつりなどすめり。當下義實主は、親兵衛が京師にてありし奇事、且今番の戰功の事の顚末、又代四郎が三河なる、苛子崎の賊難と、京師にても親兵衛の幇助に倣りし事までを、猶詳に聲させて、甲乙となく听給ふに、先茶を賜り、果子を賜り、且饌をしも賜りて、終日にしていまだ飽ねば、其次の日も次の日も、只這老少兩個をのみ、召せて長

良、朝寧自胤はさらなり、義同親子憲重、胤久爲景、盛實に至るまで、倶に傲慢の角折れて、兩敵戰死數萬の亡魂、拔苦與樂の利益に遇へるは、正に是里見の仁義と、丶大法師の大功德に、あらずと孰かいふべきやとて、感嘆敬服せざるはなく、爲に貌を改めて、いよ／＼後悔したりける。因て憶ふに、甕襲の玉には、地水火風の四大あり。よく其風を發すに及びて、兵燹をもて水陸なる、大敵を對治せり。是其所用四大ならずや。且始は八百比丘尼に獲られて風を起して害に災し、後に毛野が八百八人の、籌策を資けたり。是八百の正對ならずや。且阿耨多羅三藐三菩提の、九言八箇の玉に變りては、萬鬼を濟度の利益あり。恁れば八犬八行の、仁義の玉に伯仲す。初邪物を帮助しは、那宋人の不龜手の藥の、比喩にも似たるべし。畢竟、大が、水陸道場大施餓鬼の、本願成就して、後の話說甚麼ぞや。那は又下の回に解分るを聽ねかし。

作者云、前にもいへる如く、本回は曩に、腹稿のみなりし時、全部百八十一回に定めて、結局までの、題目を出し措きしかば、今綴るに及びて、題目外の話說なきことを得ず。この故に、本輯四十六の箇端に、出せし附錄日數箇條これあり。道節湯島に、兩奸賊を擒にする段、里見の三陣、凱旋衆議の段を照し見るべし。


水陸道場
施餓鬼の
功徳窮民
免苦抜苦
與樂



使たり。當下朝良、朝寧憲重は、孝嗣を見て羞る色あり。孝嗣も亦、この折を得て、いはまく欲き事多かれども、憚りあれば外々しく、管待を致すのみ。然る程に夕陽西に斜にして、法會の讀經果しかば、ゝ大法師は身を起して、艫頭なる餓鬼架に、うち向ひつゝ香を燒水を賻け、眼を閉合掌して、舊臘八日水陸三所に戰歿したる、自他の萬靈、施主里見殿の所願によりて、經充讀誦の利益違はず、往生得脫、一蓮托生、等見菩提と念じつゝ、且偈を倡る者五言四句、其聲淸亮にして高ければ、上は紫微有頂天に屆るべく、下は金輪捺落まで、聞えやすらむと思ふ可に、水と陸との衆人は、愕然とうち驚くまでに、咸眼も遙に長視たる。當下ゝ大は、阿耨多羅三藐三菩提の識算ある、數珠を取出つ推揉て、又偈を唱へ章を誦し、念佛十遍聲の中に、數珠をうち揮りうち拂ふ、縱橫無㝵の法力に、奇しきかな、識算の、八の玉を串きし、數珠の緒、弗と振斷離られて、海へ冭と入よと見へける、那時遲し這時速し、渦く潮水に波瀾逆立て、百千萬の白小玉、忽焉として立升る、白氣と倶に中天に冲りて、宛衆星の、烏夜に晃くに異ならず。又其許多の白小玉、亦只數萬の、金蓮金華と變じて赫奕、光明粲然、沒日と共に西に靡きて、搔銷す如く見へずなる隨に、天には殘る二藍の、瑞雲の中に音樂聞えて、暮果るまで奏々たり。今這奇特を目撃せる者、義通主從、犬士の毎、稻戸由充、敵の敗將成氏、憲房朝

聲澄て、衆口の多かるも、只一舌より出るが如く、細大音聲、口調錯はず、其聲龍宮城まで暢ふべく、天衆も越に來向して、這大法會を資くるなるべく、江河の鱗介波濤を開きて、菩提心をや發すらん。この七箇日雨ふらず、この日は特に海暖く、虚空に蕭颯の風なければ、潮水平坦にして、眠鷗流れず、幾群の知鳥は、倶に嵓に羽を斂め、磯松に集る老鶂は、これが爲に求漁らざるべし。この日稻村の城内には、里見義通御曹司、舍弟の君、次麿朧子と共侶に、洲崎の浦に置れたる、望洋臺に出給へば、兩家老東辰相、荒川淸澄、又姥雪代四郞、白濱十郞、朝夷三彌、七浦二郞、滿呂再太郞、安西就介、磯崎增松等伴當たり。又十條力二郞、十條尺八胞兄弟は、この時堀内許より召よせられ、兩君公達に、見參しまつりて、扈從して君邊に在り。年尙二五に足らねども、最大人しやかなるを、人見て譽ぬはなかりけり。この折をもて、敵の敗將、滸我の成氏主幷に、兩管領の子息憲房、朝良朝寧、千葉自胤を首にて、稻戸由充、三浦義同、其子義武、大石憲重、長尾爲景、原胤久齋藤盛實等、俘囚に做りてこの地に在る者も、鬱散の爲にとて、皆饒されて、出て左右の假屋に在り、警固の士卒こゝに多かり。義通先諸の敗將に對面して、禮正しく、親の誠心を舒傳ふるに、懇懃の詞を罄さる。この故に犬塚信乃、犬江親兵衛犬川莊介、政木大全孝嗣等は、義成主の命により、船を洲崎の浦に返して、この日

郎小頭人たり。石龜次團太越鮒三等是に從ふ。又國府臺より葛西龜蟻は、犬飼現八頭人にて、眞間井樅二郎、繼橋綿四郎是に從ふ。潤鷲手古内振照倶敎二小頭人たり。又墨田河の西河原、石濱の城の下は、登桐山八郎頭人にて、老兵士卒施行に與り、從ふ者尠からず。又岡山の壘の頭人、鳥山眞人等も、出て這事に與るなるべし。都這數箇所に積措れたる米錢は、猛可に小山の出來し像く、舛奴あり檢鈔あり。施行は人別に、米一斗錢五百文と定めらる。女子と小兒は、この半分を取らするといふ。夫役の莊客、其地の村長等、相從ふ者枚擧るに遑あらず。爾程に、この年來、軍役に疲れ果て、家を喪ひ子を售、妻孥離散して、饑渇に堪ざる、他方の窮民、乞兒裲草兒は、老たるを扶け稺を扱き、或は赤子を駝敗嚢を引提つゝ、陸續として來ぬる者、蟻兒の甘きに聚ふが像く、其米錢の多にして、施さるゝ東西も亦、過分に胆を潰して、感涙を流すもあり、手を戰して拜むもありて、德を仰ぎ恩を謝し、其米錢を賜りて、還りゆくあり、來ぬるあり、彼岸七日を涯りにて、施す東は敢泰らず、受る者は嗟來の怨みなく、今戰世の暴虐の中に、這活阿彌陀も在せし歟とて、喜悦の聲洋々と、耳に盈ざる日はなかりけり。既して結願の日に做りしかば、丶大法師の施餓饑船は、新井の澳に經讀果て、洲崎のかたに漕もて來ぬれば、隨從の一百餘艘は、相去こと遠からず、導師の船を圍繞しつ、いよ〳〵讀經の

喝食行童手爐を執り、如意を執りて、相立者三四名、讀經の僧一百名、左右二側に排列たる、船毎に幔幕舩帷を引渡して、舳頭に造り建たる餓鬼架あり。過去七佛の名號、及涅槃偈四句の幡を、八隅に建て、三界萬靈の位牌あり。種々の供物に至りては、細に名狀すべからず。かくの如き施餓鬼船、一百零八艘、又伴船あり、齋船あり、三たびの食饍を、掌る者是に從ふ。又信乃親兵衞、莊介并に政木孝嗣、杉倉直元、田稅逸友等は、身甲の上に朝服して、各船に中黑の花號ある白旗を建、弓箭銕砲、鎗棒眉尖刀を飾措て、非常の爲に、士卒各一百名を將て、倶に出て海上にあり。其船都て、武藏の方へ泝りて、則墨田河を法會の始とす。第一日は墨田河より兩國河まで、第二日は兩國河より科革澳まで、是より將次第を追ふて、七日は新井の澳より、洲崎に至りて結願とす。船毎に大衆一百名、二六時中讀經の聲、蠅々乎として、蚊虻の群たる如し。この時陸には施行の事あり。相摸は鎌倉より新井浦河まで、犬村大角堀內雜魚太郎頭人として、或は城下或は港口に、米錢許多く積措て、老兵士卒是に與る。又假名川より高嶼までは、犬阪毛野浦安牛助、千代丸圖書助等是を行ふ。小湊（又小水門に作る）目鮠內葉四郎等小頭人たり。又大塚礫川の邊は、小森但一郎木曾三介、兩國河原は、鱆船貝六、東峰萠三に、五十三太素手吉を副とす。又行德より本所深川は、犬田小文吾頭人にて、滿呂復五

にて、彼岸七箇日、是を做すべし。又下總は、滿呂復五郎、眞間井樅二郎等に課て、葛西行德國府臺にて、施行せん事勿論なるべし。なれども重時秋季等のみにては、其人たるべからず。行德本所へは小文吾、國府臺葛西へは現八、倶に施行の頭人として、士卒を將て那地に造りて、重時秋季等に指揮すべし。又船施餓鬼の頭人は、親兵衞信乃莊介たるべく、政木大全、杉倉武者助、田税力助を副とせん。這議を夙く、毛野大角、道節等に傳ふべく、安房上總下總なる僧俗に徇知すべし。又、大には箇樣々々。と言叮寧に課れば、大家ひとしく言承して、この日の衆議は果にけり。却說當日になる隨に、房總なる諸山諸寺の長老道德、施餓鬼の法會を帮助んとて、各徒弟を從へて、延命寺に來會す。又只房總のみならず、武藏相摸なる、老僧智識も、皆この事を傳聞て、倶に感悅せざるはなく、各安房に推渡り來て、法會に與らまく欲する者、百をもて計ふべし。丶大則其德を推、才を試て、役を課ること、各差あり。この時信乃親兵衞莊介は、孝嗣直元、逸友等と倶に、洲崎の浦に、施餓鬼船、百十數艘を相浮めて、件の大衆を分ち載す。其中央なる巨舫には、丶大法師、香染の法衣に、烏綸子の袈裟被て、手に白毛の拂子を拿れる、打扮華美ならねども、眉秀鼻皐、面色威ありて猛からず、宛逹磨の後身歟、と思ふ可の骨相に、衆僧都て敬服して、相譲らざる者ぞなき。後方には沙彌念戊、

といへば親兵衛莊介も、寔に然なりと應つゝ、義成の見て渡し給ふ、數珠を受拿りうち戴きて、現八小文吾と共侶に、其識數の玉を見て、齊一いよ〳〵感歎す。當下義成主は、、大に向ひて、現に那甕襲の玉はしも、邪物の手より出るといへども、那奇風を發すに至りて、我を帮助て大敵を、擊退けたる大功あり。其後八箇の小玉と變じて、斯る奇特を示す事、今番施餓饑の發願は、佛意に稱ふ祥にやあらん。先このよしを老侮に、示して施行をいそぐべし。と仰に信乃等はこゝろ得て、然而辰相淸澄と、直元逸友孝嗣さへ、同席に召集へて、事恁々と傳ふれば、大家其奇に驚き嘆じて、施行の一事を稱贊す。當下義成又課すらく、軍師胤智の意見に由に、今番施行の米錢は、皆敵城に多くあり。則是をもて、其所用に充てんと請稟したり。然れども、我今作善を行ふに及びて、只敵の東西をのみ、執て其所用に充なば、矛と盾とを賣に似て、是人の財をもて、是を人に施して、己が德と做すに同じ。我も亦這回の軍用に貯たる、米錢なきにあらず。則甲と乙とをもて、施行の所用に做す時は、是自他平等利益の義にて、眞の施行といひつべし。水には則船を浮めて、衆徒讀經して、兩敵の寃鬼を濟ひ、陸には則施行して、窮民を救ふべし。法會は則、大をもて、導師たらしめん事、いふまでもあらず。施行は則毛野大角、道節高宗、季元良于等に課て、約莫鎌倉より石濱まで、武相なる海邊

提とす。又一說に、阿耨多羅三藐三菩提は、儒に所謂仁に同じ。人至仁なる時は、必是正覺を成して、菩提に至らざる者なし。譬ば孟子に、君仁なれば不仁なく、君義なれば不義なし、といふが如し。人の一身五臟の神君至仁なるときは、手脚の是を資る者、敢不仁を爲すことあらず。是を阿耨多羅三藐三菩提といふべし。是に由て之を觀れば、八犬士等の感得したる、那仁義八行の八の玉は、人間所要の至寶にて、死を弔ひ滅を濟ふ、佛會には相應からず。この故に易るに、此八の玉をもて、今番の所用に倣さしめ給ふ。是も亦役行者の、善巧方便なるべき歟、佛法不可思議、廣大無量、奇々玄妙に候はずや。と言詳に說示しつゝ、件の玉を識數に、串きとめし水晶の、數珠を取出て見せまゐらすれば、義成主を首にて、信乃親兵衛、丶大介小文吾、現八も共侶に、其事を听、其奇に感じて、耳を傾け目を注して、稱贊聲を齊くす。丶大が中に信乃がいふやう、師父阿耨多羅の注釋は、寔に是精妙にて、雅俗の惑ひを醒すに足れり。昔後醍醐天皇、叡山に行幸の折、津守國香の歌に、

契りあればこの山も見つ阿耨多羅三藐三菩提のたねや植けん

とよみけるを、太平記第二の卷に載たり。意ふに國香は、阿耨多羅云云を、只正覺を、成すの義とや見たりけん、國香を今も世にあらせて、師父の諺解を聞せなば、他其是を何とかいはん。

導師に御沙汰ありて、しかるべし。とぞ答へける。當下信乃がいふやう、師父今番施餓鬼の、導師に做り給はゞ、伏姫上の御紀なる、那水晶の數珠をこそ、必用ひ給ふべけれ。其記數の八個の玉は、我們感得したりしより、今に至りて返まつらず。義兄弟等全聚ふて、當家に仕奉る上は、必本に返すべき、東西にこそ候べけれ。といへば親兵衛荘介、小文吾現八も共侶に、件の數珠は役行者の、伏姫上に授給ひし、靈寶物に候はずや。然らば今番の大好事に、一百八玉具足せば、這功德をもて、那寃鬼を、鎭むるに足りぬべし。と議するを、大は聞あへず、否とよ、今番は和殿等の、感得の玉を借るに及ず、最も不測の事こそ候へ。館も聞召ねかし。曩に臣僧谷山にて、奇風を發たる、甕襲の玉は、囊に藏め懐にして、寺に還りて取出て見けるに、怪むべし件の玉は、毛皮自然に裂破れて、內に八個の白玉あり、うち驚きつゝ拿抗見るに、亦是其玉毎に、自然と顯れし八箇の文字あり。奇き事いふべうもあらねば、件の玉を甲乙と、うち合せつゝ讀見るに、正に是阿耨多羅三藐三菩提と讀れたり。但三の字ある玉は一箇なるを、先多羅の下、藐の上に措て、是を三藐と讀み、又菩提の上に措更て、三菩提と讀べし。有慿ればー字兩用にて、九言なるも、八玉にて足れりとす。按ずるに瑯琊代醉篇に、阿耨多羅を、等見の義と注し、三藐三菩提を、成正覺とす。是則等く、正覺を成を見の義にて、正覺を菩

士、阿とばかりに、頭を低たる亓が中に、信乃先答てまうすやう、其義は臣等も豫てより、心づきて候へば、うち譚ひ候のみ、那珍客の欵待にて、暇を得ず候へば、いまだ稟上ざりき。といへば莊介小文吾、現八親兵衛も共侶に、毛野が意見は始より、思ひ量りし所也。いかで師父を召寄て、仰合させ給へかし。と異口同樣に請ひしかば、義成然こそと點頭て、亓は我夙意も相同じ。丶大は去歳の十二月、那奇風の功成りし後、毛野が使と共侶に、洲崎へかへり來にけるが、亓が儘延命寺へ退りて出も來ず、單方丈に屏居て、口に讀經の聲を絶ず、人には逢ずと聞えたり。遮莫是等の好事を告なば、歡て參るべし。我今手書を遣して、召寄て這意を得させん。然はとて使者を走らせて、丶大を召せ給ひけり。恁而次の日、丶大法師は、一僕をのみ從へて、稻村の城に來にければ、義成則五犬士を召合せて、件の一義に及給ふを、丶大は聞果て稟すやう、那鏖の劇策は、臣僧始より好とせず、云云と論じて推辭しを、毛野大角が口車に、載てこよなき罪惡を釀させたり。しかるに、今罪障懺悔の爲にとて、冥福を修させ給ふは、矛と盾とを賣るに似たり。人を殺すを不仁と知らば、始より殺さずして、好事をせざるにしくはなし。然れども今に至りては、經典供養の力を借らずは、何をもて無數無量の、寃鬼を濟度做す據や候べき。況窮民丐兒們に、米錢施行は、經を讀て死を弔ふに、猶勝れり。速

早晩に暖くて、野邊の柴鶺鴒軒端に來鳴て、梅の盛も稍過めり、左右する程に二月になりぬ。有一日五十子の城より、犬阪毛野が、使の雜兵兩三名、快船にうち乘りて、洲崎に來著し、稻村の城に詣て、毛野が意見一通を呈閲す。義成則在城の五犬士（犬江犬塚犬川犬飼犬田）を召聚へて、其書を親兵衞に、讀せて聞給ふに、毛野が意見に道く、臣胤智既に、八百八人の計略をもて、水には數千の敵船を燒盡し、亦義兄弟等は、陸に數萬の敵兵を斫て、もて房總三州を、泰山の安に置り。是豈我仁君の、御本意ならんや、實に已ことを得ざるのみ。時は今仲春にして、且時正に向んとす。時正は晝夜等分の義にて、佛說にこの七箇日を彼岸とす。彼岸は西方淨土也。此岸は則娑婆にて、中流は是煩惱也。是をもて、念佛者流この日に于て、冥福を修する時は、則死人成佛の便りとす。伏請、丶大師父に課て、自他戰歿數萬の士卒の爲に、水陸の施餓饑を修行せしめ、且年來の軍役に疲勞たる、他方の窮民丐兒們に、米錢多く取せ給はば、仁政正に死を起して、且枯骨に及ぶといふべし。武藏相摸は、新井五十子、大塚忍岡、這諸城には、軍用の爲に、敵の積貯へたる米錢多かり。是併民の膏腴を絞りたる者也。宜しく是をもて、彼施行に充べし。時は失ふべからず。臣胤智悲泣哀悼の至に堪ず。誠惶誠恐死罪死罪謹言とぞ書たりける。義成是をうち聞て、汝等この義をいかに思ふ。と問れて五犬

が、勝軍の趣は、各既に其注進によりて、こゝにも具に知られしを、又いふべくもあらず。然ばとて、仁君謙遜の心に似げなく、闘戰全勝の勢に乘せて、人の地を略し、人の城を奪ふべきにあらねども、他が棄て主なき城を、守らざらんはさすがにて、今茲も日數僅になりぬ。有恁し程に、犬川莊介、犬田小文吾は、稲戸津衞由充を、叮寧に訪慰めて、義成の仁慈の心操を、傳へ知せずといふことなく、且曩に深川の闘戰に、小文吾が心ありて、赶ふことの遲かりしに、蒲呂復五郎が、既に逼りて、免るべくもあらざりしを、軍師犬阪が逆より、悄地に籌策をもて、東峯萌三、鱆船貝六、犬江屋依介等に課て、船もて迎へ捉せしを、當日は小文吾莊介も、復五郎も知ずして、敵の援兵なりとのみ、思ひしよしを云云と、解も示せば由充も、朝良も、亦今さらに、犬川犬田が報恩德義、毛野が智計を感嘆しつゝ、心程恥しく思ひけり。又只由充朝良のみならず、憲房朝寧成氏、自胤以下の敗將、憲重胤久、盛實等はさら也、獍勇萬夫を物ともせざりし、義同も義武も、里見君臣の欵待厚く、仁にして且禮ある、誠心誠意に感服して、先非を悔ざる者もなく、爲に貌を更めて、俱に歸降の心あり。定正が賢者を娼嫉して、無名の軍を起せしを、恨しとのみ思ひけり。恁而新の年立かへりて、文明十六年に做りぬ。春は貴きも賤きも、某の禮某の式とて、壽祝に事繁く、迭に交加て、盃を薦めなどしつゝ、光陰の過るを覺ず。日影遲々々、

ころを得よかし。と最懇切に仰すれば、復五郎親子就介等が、歡びはさら也、增松は是等の恩言に、感涙漫に唱みて、倶に言承を稟しけり。其後又義成主は、犬江親兵衛犬川莊介して、滿呂復五郎、石龜次團太、越鮒三、一二四的寄舍五郎、須々利團五郎等を召出し、又犬川莊介犬田小文吾して、盾持傔杖、大樟村主、天津九三四郎等を召聚へて、且宣ふやう、汝達の戰功は、既に感思食ぬ。各秩祿は、異日定めらるべし。就て大義なるべけれども、滿呂復五郎は、行德に造りて、權且那地を治むべし。石龜次團太越鮒三、をもて次役とす。又一二四的寄舍五郎、須々利團五郎は、國府臺の城の小頭人とす。其徒六十餘人と倶に、喬梁秋季の隊に就て、宜く那地を戍るべし。又盾持傔杖大樟村主は、身の暇を賜りて、大刀各一口と、時服一襲を被けて、其地の吏に做され、且其鄕黨、千百十數名は、都て三稔の調貢を、免除せらる。又天津九三四郎にも、身の暇を賜りて、且恩賜の大刀、時服は右に同じ。其主上甘理墨之助に、いよく忠義を盡すべし。と仰らる。この他阿彌七墜八をも召させて、這兩人は、菫野椿村の邑長に做されて、且諸役免除せらる。是も又身の暇を賜りけり。猶この外に功ある者、市川の依助、兩國河原なる、向水五十三太、枝獨鈷素手吉はいまだ參らず。他等は異日召よせて、恩賞あるべしとて、先大槩の制度を盡されけり。是より先に犬村大角、犬阪毛野、犬山道節、落鮎餘之七等

あらまほしく候なれ。と議すれば貞行辰相清澄、及莊介現八小文吾も、大家是に從ふて、しかるべし。とぞ答ける。義成つら〳〵うち听て、今戌孝が意見に依、衆議恁地ならば、權且對面の議を止めん。朝夕の起臥、三たびの饗饌、何くれとなく、心を用ひて、我恁までに、客を愛する誠心を傳へよかし。就中稻戸由充は、其心ざま賢良にて、且人を知のよしあればや、莊介小文吾は受たる、舊恩ありとか聞ぬ。この故に他をば、虜にすべからざりしを、箙大刀自の外孫なる、朝良をのみ生拘らば、他必忠義の爲に、死ざることを得ざるべし。こゝをもて胤智は、豫計る所あり、さてこそ春高繁足して、他をも倶に捕寄たれ。因て莊介小文吾を、朝良由充の爲に東道とす。この意をも宜く傳ふべし。這餘の事は恁々と、言遺もなく仰すれば、大家倶に言承して、先這廳は果にけり。恁而又義成主は、犬川莊介犬田小文吾して、滿呂復五郎、再太郎、安西就介、磯崎增松等を召よせて、復五郎は願ひのまに〳〵、滿呂再太郎をもて、養嗣たらしむべし。又安西就介磯崎增松は、尙總角にして這回の軍功、諸勇士と拮抗す。こは其亡親の、靈の致す所歟、寔に奇どくといひつべし。こゝをもて、當家譜第の家臣とす。聞くに、增松は乳名のみ、いまだ實名なきにあらずや。彼は阿彌七といふ實父あり、又南彌六といふ義父あり。一人は篤實一人は義烈、這親にして個子あり。こゝをもて、名けて有親とす。我このこ

を行れて、這回の軍功を賞せらる。荒川清澄堀内貞行等も、這席にぞ與りける。當下義成主は、二家老（東荒川）一老臣（堀内）五犬士（犬江犬塚犬飼犬川犬田）を身邊近く召よせて、各いかに思ふやらん。這回生口の人々は、皆是貴人也、城主也、我焉ぞ慢侮せんや。昔源平の鬪戰に、平三位重衡生拘れて、鎌倉に囚置れし時、頼朝對面して、其不幸を慰問の義あり。其後宗盛虜になりて、鎌倉に呈送せられし時、頼朝是と對面せず、他は則大臣なれども、既に解官の罪人也。是時に當て、頼朝の冠位昇進したれば也。抑平家は源氏の爲に、是累世の寃家にして、上一人（後白川）の奉爲には、是驕僭の亂賊也。今他をもて例とすべからず。我今主客の義によりて、對面すべきや、せざるべきや、各意見聞まく欲し。いかにぞや〳〵。と問れて、大家阿とばかりに、頓に答はなかりける。姑且して犬塚信乃は、辰相清澄、貞行等に會釋して、主に向ひて答るやう、諸老の御承を等ずして、答まつるは烏滸がましく、最憚に候へども愚意をもて稟上ん。君今那敵將達に、御對面の一條は、實に寛仁大度にて、博愛至極といひつべし。しかれども、いまだ和を講ぜずして、佻々しく對面あらば、他いかにして恥ざるべき。人を愛する心をもて、反て人を辱るは、事の宜きにあらざるべし。といへば親兵衞もこの議を好して、現に戌孝が意見は、愚意も相同。那人々御仁心に、感服の後にこそ、御對面

なく、諸侯離れ叛きて、且怨る者多しと聞えしかば、義成主則下知して、今は封内に在陣は、要なかるべしとて、國府臺、及行徳口なる、諸將を皆召返させ給ふ。然ば義通君は、犬塚信乃、犬飼現八、東六郎、杉倉武者助、田税力助等と倶に、生拘の敵將、成氏憲房、朝寧爲景、幷に、齋藤盛實等を領て、稻村に凱陣す。國府臺の城には、眞間井樅二郎、繼橋綿四郎、潤鷲手古内、振照倶教二等ありて、故の如くこゝを戍れり。又今井の柵は、犬川莊介犬田小文吾、是を破却して、滿呂復五郎父子、安西就介、大樟村主、盾持儀杖等と倶に、生口自胤憲重、胤久を領て、亦是稻村へ凱陣す。總兵一萬五六千名、騎馬武者歩兵列を正して、甲冑華麗に、齊々たらずといふ者なし。しかれども生拘の人々は、皆是寃家ながら、貴介公子也、一城の主將也、囚徒をもてすべからずとて、猛可に數間の、房屋を造立て、其第一の房には成氏、第二は憲房、第三は朝寧、第四は自胤、第五は爲景の房とす。又憲重、胤久、盛實は、各其主憲房朝寧、自胤爲景と同居にせらる。屛居の徒然を慰ることもあらんかとて也。又義同と義武は、天井を隔たる別室に置る。唯朝良と由充は、客房に在らせて、宛放免の如くにて、欵待も亦重かり。この時犬江親兵衛們も、咸洲崎より召返して、那里には遠見の士卒、一二百名を置れけり。義通以下、防禦使諸頭人凱陣の次の日に、皆召集合て、義成則正聽にて對面あり。兩茶片茶の禮

忠孝なる、豫聞召所也。今よりして犬士等と倶に、當家の股肱たるべしとて、名刀一口を賜りける。堀内貞行執達たり。且貞行は、親兵衞代四郎に、妙眞音音曳手單節が、五十子の城にて、奇功ありし事、毛野が注進の趣を告知せなどす。甲乙の會話を具にせんは、腐々しくて細しきに過たれば、言省て漏しつ、看官是を査すべし。是より先に東峯春高、䑸船繁足が、軍師犬阪の密策によりて、悄地に捕てまゐらせたる、行德口へ寄隊の敵將、扇谷朝良と、箙大刀自の代軍、稻戸津衞由充あり。又犬村大角が、虜にしてまゐらせたる、敵將三浦義同義武あり。義成是を陣中に留めず、軈稻村の城へ遣て、次麿に預けらる。しかれども囚徒をもて見ることなく、賓客の禮厚して、日毎の欵待淺からず。親兵衞がかへり來ぬる上はとて、他を洲崎の守將にして、義成は貞行を將て、稻村へ還り給ひけり。孝嗣與保以下の輩は、皆親兵衞に從ふて、丌が儘洲崎に在陣す。仁がことは、嚮に國府臺より、使价をまゐらせし時、夙く瀧田の城へも聞えて、義實老侯歡び大かたならず、疾見まほしく思ひ給へども、猶陣中に在るをもて、時々食餌衣服などを賜りて、其徒然を訪せ給ひけり。左右する程、今玆も將に暮んとす。曩に水陸三所の大敵は、同日に咸敗北の後、山内顯定は、上野なる、沼田の城に在り、長尾景春は、白井の城に在り、扇谷定正は、武藏國入間郡、河鯉の城に在り、倶に再戰の勢も

に從ふ。按ずるに武藏に忍岡と、唱る地方二箇所あり。古歌に詠る忍岡は、即多摩郡にて、多摩川（又玉川に作る）に遠からず。又不忍の池の前面、湯島の稍盡處の出崎をも不忍の名に對へて、こゝをも俗に忍岡といふ。一名向岡是也、こは俗稱なるを知るべし。閒話休題、又穂北の莊には、落鮎餘之七有種、犬山が加勢五百名を領てこゝに在り。又相摸なる新井の城には、防禦使犬村大角禮儀あり。臨時追加の頭人、田税戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能是に從ふ。又鎌倉には、堀内雑魚太郎貞住あり、安房の洲崎の本陣には、防禦使犬江親兵衛仁あり、政木大全孝嗣、姥雪代四郎與保、東峯萌三春高、鮹船貝六郎繁足、須々利壇五郎有數、一二四的寄舍五郎園平、天津九三四郎員明、磯崎增松有親、直塚紀二六、滸地喜勘太等是に從ふ。石亀次團太、越鮒三、菫野の阿彌七、椿村の墜八も亦這隊にあり。蓋主將義成朝臣は、大敵敗績の後、犬江親兵衛が、姥雪代四郎等と倶に、京師よりかへり來て、葛西の闘戰に軍功あり。政木孝嗣們の、勇士伴當十數名を將て、昨日洲崎の陣營に參りしかば、義成主は、仁が京師に在りし日の奇談、及葛西行徳口の、闘戰の顚末さへ、詳に聞知りて、或は驚き、或はうち笑れて、賞感特に淺からず。政木孝嗣以下、姥雪代四郎、及新參にて戰功ある者、皆見參を饒されて、其忠其義を舉させ給ふ。就中孝嗣次團太等は、曩に素藤對治の日も戰功あり。且孝嗣が

第九輯　卷之四十七下

第百七十八回下

里見諸將士稻村の城に凱旋す
安房侯博愛隣國の窮民を賑す　（此の附目原本になし附録目によりて補へり）

然ば這時下總葛飾なる、國府臺の城には、里見安房太郎義通朝臣あり。從軍の執事東六郎辰相、杉倉武者助直元、田税力助逸友、繼橋綿四郎喬梁、眞間井樅二郎秋季、潤鷲手古内美容、振照倶教二弘經あり。就中這隊の防禦使は、犬塚信乃戍孝と、犬飼現八信道是也。又行德口なる今井の柵には、兩防禦使、犬川莊介義任、犬田小文吾悌順あり。其隊の頭人滿呂復五郎重時、盾持儀伎朝經、大樟村主俊故、滿呂再太郎信重、安西就介景重あり。武藏石濱の城には、登桐山八郎良于あり。同國五十子の城には、軍師犬阪毛野胤智あり。其隊の頭人浦安牛助友勝、千代丸圖書助豐俊、小湊（又小水門に作る）目堅宗等是に從ふ。勇婦音音、又妙眞曳手單節、鮠内葉四郎、猨岡猿八も亦這隊に在り。又大塚の城には、小森但一郎高宗、木曾三助季元あり。又忍岡の城には、防禦使犬山道節忠與あり、其隊の頭人印東小六明相、荒川太郎一郎清英等是

子の手を拔きて、皆歡びてかへり來にけり。然れども、穗北は猶敵地なれば、犬山が加勢の五百名は、𢌞が儘這頭に在陣して、久しくなるまで戍りけり。

とし譽て、其議寔にしかるべし。遮莫敵を侮らば、必や愆あらん。我五百個の雄兵をもて、和殿等を送らせん。戰飯軍用の錢財は、當城内に多くあり、和殿の隨意たるべし。といはれて有種怡悦に堪ず、遽しく退きて、穗北人等に那議を告て、准備夙くも整ひしかば、次の日の早天に、落鮎餘之七有種は、小才二世智介梨八等、及穗北人百四五十名と、犬山が加勢の軍兵五百名を、前後に立て、騎馬苛めしき甲冑器械、細に名狀すべからず。既にして有種は、穗北の莊に近づく程に、這里には根角谷中二、穴栗專作等の、宅眷の敵を避て在るも多かり。或は又那奸黨に諛媚て、利を欲する莊客賈豎の、家を作て居るも、尠からざりしに、忍岡の城は、有種に攻落されて、谷中二專作は、道節が隊に生捕られ、竟に誅戮せられしと聞知りて、駭怕れ慌惑ひて、逃去まく欲しゝを、穗北の隣村人等追蒐て、鋤鍬をもて、撃殺しゝも多かりとぞ。其事後に聞えける。然ば有種は、於是重ねて手も濡さで、故の莊園を、拿復しけるのみならず、谷中二が建て、尙新しき廬舍多くあれば、其身はさら也鄕人們にも、分ち拿せつ、膝を容るゝに便りよければ、四五日を歷、鄕人を幾名歟、下總猨島の、諠㗛院へ遣しつ、豪荊并に、子院なる勇僧們に、多く東西を贈りなどして、自他の宅眷を召返せしかば、有種の妻、重戸を首にて、鄕人の母女房、老たるは杖に携り、壯なるは、袱裏笈等などを搭駝ひつゝ、穉

稱えける。この日法印豪荆は、有種道節明相清英等に別を告て、且いふやう、下總には猶落鮎と穗北人們の宅眷あり。野衲等、久しくこゝに留るべからず、身の暇を賜るべしといひしを、有種も道節も、今さらに禁難て、則其意に任するものから、道節は只管に、其軍功を譽ていふやう、和僧今番の挊きは、勇士も及びがたき所也。異日寡君に聞え上なば、恩賞望の隨なるべしとて、其こゝろを得さすれば、豪荆是を聞あへず、いかでかは然る望をせん。落鮎は俗縁あり、義に伎る所已ことを得ず、聊こゝに力を勠して、爲に怨を復しゝのみ。其義は、本意に候はず。暇稟すと身を起して、譽ぬ者なんなかりける。是よりの後、近郡近鄉なる、鄉士豪民の善に與して、里見の徳を慕ふ故に、道節が隊に附まく欲して、當城に來ぬる者、日毎々々に多かりければ、道節が軍威いよ〳〵壯にて、一萬餘騎にぞ做りにける。當下有種は、又道節に談ずるやう、當城は大人旣に將として、印東荒川の勇士あり、且軍兵に匱しからねば、在下こゝに居ても要なし。聞に我穗北の莊は根角谷中二が、是を別莊にして、家作苛めしく建連ねたりとぞいふなる。今這時に拿復さずは、孰の日をか俟べきや。明日は故鄉人等を將て、那里にうち入り候はむ。敵倘殘居る者ありとも、獵場の獸に似たるべし。一個も漏さず擊捕りてん。と惴を道節勇

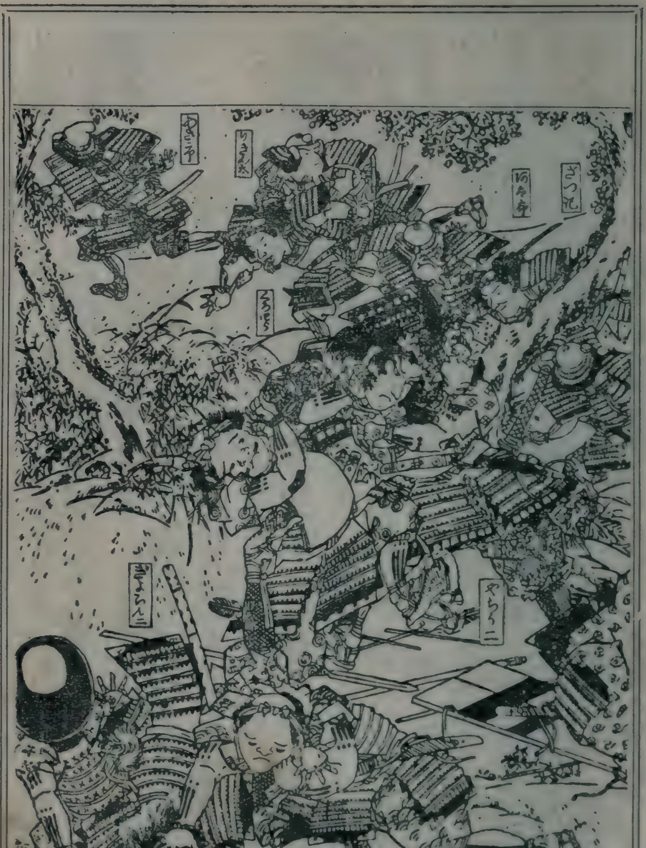
つ、先五十子の城に造りて、犬阪に別議なくば、水路を洲崎へ參れとて、いそがし立てぞ遣しける。恁而次の日、這豐島郡なる、莊客百十數名、穗北の隣村なる、者每を先に立て、忍岡の城に來て、道節に訴るやう、今番生拘せ給ひたる、箕田馭蘭二、根角谷中二、穴栗專作は、我們が親兄弟の寃家にて候へば、いかで那身を賜りて、斫切みて亡人の、怨を復まく欲し候也、この義を許させ給ひねかし。と異口同樣に願ふにぞ、道節听つゝ頷きて、現に然もあらむ、今這時に、民の寃を解ずもあらば、善惡應報の、天理空しきに似たり。他們が情願に任せよとて、隨卽馭蘭二谷中二專作を、牢舍より出させて、其莊客們に拿らするに、檢使の士卒をさへ遣しゝかば、大家都て歡び勇みて、則馭蘭二谷中二專作を、受拿りつ牽立て、軈て城外に牽出して、其罪を責言りて、馭蘭二谷中二專作を、一個々々に誅するに、先手を斫落し、足を斫落し、胸を劈き、大小腸を裂出し、竟に首を擊落すに、猶怨盡ざる莊客の、悍く壯なる者每は、其宍を啖ふもありけり。檢使則、其首三級を梟首て、もて遠近に示しゝかば、觀者日每に堵の如く、愉快しとぞ稱えける。この時世智介梨八夫婦、幷に穗北の隣村人の、牢舍に疲勞て、病臥しゝ者每も、其疾病瘥り果しかば、道節則、其村人に是を渡して、皆其家に還ることを得さするに、大家其再生の恩を拜しつ、喜悅の聲、洋々と耳に盈て、民の父母とぞ




有種豪荊
夜忍岡の
城を抜く

英等に撃破られて、剰馭蘭二谷中二は、生拘られて這里に牽來つ、利金太淺市、雜記畔四郎等は、其隊の毎共侶に、撃れたる歟、逃たる歟、存亡知ず做りし也。然ば今落鮎有種が、犬山道節に解知せぬる、那身の來方、豪荊が義俠、及當城を攻落しぬる事の顚末、又生口の敵兵の、招了にて知られたる、根角谷中二箕田馭蘭二、反橋雜記等が、落合し事までも、都て上の如くにあなれば、道節は聞事毎に、感歎の聲を得斷ず、爲に貌を改めて、有種に向ひていふやう、思ふに優たる和殿の武略、豪荊法印の義俠胆勇、多く得がたき美談なる哉。就て這生口馭蘭二谷中二、専作等は、年來其君を惑して、榮利を欲りし、那民を虐げて、罪なきを害するも、尠からずと聞えたり。然ば今番定正に、說薦めて、無名の軍を起させて、人をも身をも喪ふは、皆是這奴們群小の、致す所と我聞ぬ。異日安房へ牽もて參らは、是舘（義成をいふ）の御仁心にて、宥免あらんも知るべからず。今速に誅せずは、何をもてよく勸懲を正さん。權且牢獄に係ぎ置て、明日八劍に行ふべし。と敦圉猛く罵示せば、隊の兵毎阿と應て、谷中二馭蘭二、専作等を、倶に牽立て退出けり。恁而犬山道節は、這地の事の趣と、落鮎有種の事までも、洲崎の御陣へ注進すべく、犬阪へも示し合せんとて、軈て呈書一通と、毛野に與ふる手簡さへ、遺なく自書寫めて、心利たる士卒四五名に、事恁々と分付て、件の書翰を齎し

只其以後を警懲して、療養餘の人に異ならねば、世智介は、且怕れ、且感服して、聲を呑つゝ泣にけり。爾程に根角谷中二、赤耳九二郎、當場阿太郎等は、一千の城兵ありながら、防戰ふ心なく、慌て城を逃去るものから、又よく思へば、後難の怕れあり。徑に五十子の城に參りて、箕田馭蘭二等に力を勠して、那里に敵を待んとて、其方を投て行程に、又那箕田馭蘭二は、犬阪毛野胤智に、鈍くも城を攻落されて、韮見利金太、布留川淺市等と倶に、城兵多く從へて、這方を投て來ぬるに逢ひけり。又只是のみにあらず、大塚の城の頭人、反橋雜記、丁田畔四郎等は、主の宅眷に相倶して、城を落て來にければ、谷中二は歡びて、今這二隊の帮助を借りて、いかで又忍岡の城を拿復さんとて、馭蘭二雜記等に商量するに、雜記も亦この議を好として、然ば倶したる女性達をば、五十八月の城へ遣して、後安く做さんとて、主の憲重憲儀の妻子と、己等が宅眷には、老兵八九名を從せて、那里へとて落し遣程に、但見る西北のかたよりして、來ぬる一隊の敵兵あり。其頭人は、正に是犬山道節忠與なるを、谷中二、馭蘭二雜記等は、夢にも知ず、只是烏合の野武士等が、御方の敗軍を聞知りて、或は落人を剝略べく、或は城を攻破りて、不義の利を欲するならん。先那奴們を擊捕りて、其威勢に乘してこそ、忍岡の城を拿復さめとて、三隊を分ちて四所に、埋伏をしてけるに、反て道節明相、淸




道節
道節途に三城の殘兵を破る

鮎有種は、思ふにも似ず城兵の、脆くて骨を折までもなく、今立地に怨を復して、會稽の恥を雪めしかば、豪荆と倶に、躬方の僧俗を勞ふて、撃捕る所の敵兵を實檢するに、當城の小頭人、穴栗專作を首にて、刀瘡兒死人七八十名これあるのみ、這餘は皆悉落亡て、一時に城を獲たりける。开が中に穴栗專作は、深痍なれどもいまだ死なず、他は根角谷中二、箕田馭蘭二等と同惡にて、民を虐げて、非義を恣にしたる奸賊なれば、そが儘緊しく結梱せて、且城内を展檢するに、婦幼も遺る者なく、米粟尤多くあり。軈て四門を守らせて、却牢舍より、世智介幷に梨八夫婦、及穗北の隣村なる、莊客と其妻子弟まで、罪なくて緝捕れたる者、二三十名を扶出すに、他等は久しく禁獄せられて、且呵責の笞に堪ざりければ、皆半死半生にてありしかど、幸に命恙なければ、有種豪荆、勦り慰めて、准備の藥を與へなどしつ、皆閑室に臥しめて、火をもて那身を溫めしかば、世智介梨八夫婦はさら也、其每推なべて、墮獄の餓鬼が佛菩薩の、救ひを得たる心地して、皆感涙を落すまでに、歡ばざるはなかりける。开が中に世智介は、曩に小才二と共侶に、主の密使に立し時、梨八許立寄たりとも、酒亂に己を忘れて、那禍鬼を惹出ししより、落鮎一家、隣村の莊客まで、其餘殃に遇せたる、罪輕きにあらねども、只是一時の口過にて、素より惡意ある者ならねば、有種今は深くも憎まず

に甚麽ぞや、いまだ虚實を質さずして、大門を開く事やある。先御曹司と一二の近習を、容まゐらせて後にこそ、御伴當を饒べけれ。角門よりとく〳〵と、下知に門子應をしつゝ、卒先郎君入らせ給へ。といひつゝ開く角門より、衝入る者は別人ならず、落鮎餘之七有種と、誼夾院の住持法印豪荊、及其徒弟兩個の勇僧、突叮坊豪的、師椀坊豪菁、なンど喚做したる、武勇劒法覺ある、四人齊一腰刀を、拔く手も見せず守門の、雜兵四五人斫仆して、返す刃に專作が、片腕托地と釬かけて、斫られて苦と叫びも果ず、臀居に撻と平張けり。是にぞ駭怕るゝ衆兵、敵あり敵あり。と喚りて、逃るを透さず赶蒐て、斫仆し又斫散す、其間に外面なる僧俗一百五六十名、角門より稠入々々、豫て准備に携來つる、中黑の旗豐島の旗を、九尺柄の鎗尖に結附て、突と推建つゝ聲高やかに、里見の防禦使犬川犬田が、先隊の頭人、落鮎有種こゝに在り、新附の修驗者誼夾院豪荊、こゝに在り。と名告被け相喚りて、二の城門投て攻入る程に、根角谷中二、赤耳九二郎、當場阿太郎、老兵頭人、既に皆鬼胎を抱きて、宅眷を落せし折なるに、梟して敵は逆寄して、犬川犬田、落鮎なンど、咸城内に攻入りけん、名告諸聲聞えしより、いよいよ驚きます〳〵怕れて、拄一拄も防ぎ得ず、曳板の响子に群鳥の、潑と立つ像く後門より、崩を突て逃出れば、城兵約莫一千有餘、勇も不勇も推並て、うち續きてぞ逃去りける。然ば落

僧俗二百五六十名、搭駝來れる筵裹を、手ばやく各解披きて、武器に身を固め、太刀を跨、器械を携て、齊一脚を亂しつゝ、走りて忍岡の正門に造りて、城門を敲きつ聲震立て、やをれ城内の人々、誰かある。今日の闘戰利あらずして、行德幷に國府臺まで、總頽れに做りしかば、御方の士卒幾千名歟、陣沒したる幵が中に、御曹司（朝良をいふ）は幸に、一方を殺啓きて、目今當城に渡らせ給へり。とく〳〵迎奉らずや。と繰返しつゝいそがしけり。この時這忍岡の城兵們は、行德口へ寄隊の士卒幾名歟、方僅こゝに脱れ來て、寄隊敗軍の爲體、朝良は辛くして、近習の士に資られて、兩國河原の方にや落させ給ひけん、御往方を知ずといふ。城兵是に驚謼ぎて、頭人根角谷中二に告知せ、兵頭當場阿太郎、赤耳九二郎、小頭人穴栗專作等、うち集合て商量するに、谷中二がいふやう、里見の犬士等勝に乘て、當城に逆寄せば、人多からぬ這城にて、防戰ふとも、幾までか拄べき。所詮敵の旗と見えぬ間に、宅眷を穗北の別莊へ落し遣りて、後易して進退せんとて、猛可に城内なる婦幼に、老兵を隷などして、悄地に後門より出し遣りける、事慌しき折なるに、今又定正の嫡子、朝良の敗績して、行德より脱れ來ぬる、と聞く者誰か驚ざらん。慌て城門を開むとせしを、這隊の小頭人、穴栗專作、叶嗟とばかり推禁めて、等ね兵毎、非如御曹司の渡らせ給ふとも、野干玉の夜

亡たる歟、撃れたる歟、敵は一人もあらずなりぬ。但里見の防禦使は、いまだ當城にかへり來といふ。其言疑ふべくもあらねば、有種豪荊、いへばさら也、這隊の僧俗忽地に、望を失ひ呆れ果て、いかにせまし、とうち相譚ふに、有種一霎時沈吟じて、闘戰既に事果て、今さら城に參りなば、鄙語云、闘諍の後の棒三昧、只胡盧に做らんのみ。因て憶ふに、寄隊酷くうち負て、往方も知ず做りしといへば、約莫豐島に在る所の敵の城は、士卒咸耳怕して、脫路を見るならん。就中忍岡の城の頭人は、我郷黨の怨ある、根角谷中二麗廉ならずや。他は貪りて飽ことなく、民を虐げて、罪なきを殺すこと、大魚の細鱗を呑が如く、其惡箕田馭蘭二と伯仲す。先や今宵那城を攻落して、谷中二を生拘ば、大塚石濱の兩城は、攻ずとも必落ん。この義什麽と請問へば、大家ひとしく諾なひて、开は究竟の便直なり。然らばいそげ。と矢斫の河も、宮門河をもうち渡して、不忍の池の畔に來ぬる程に、夜は丑三に做りぬべし。酷く走りしことなれば、寒夜も皆汗に得堪ず、喘を止めて這里那里に、立休ひつゝ又相譚ふに、豪荊聲を悄して、今這小兵をもて、城を拔まく欲するに、筋力をもて勝を取がたかり。只詭の計にしくことなかるべし。其計策は箇樣々々。と詞急迫しく咡き示せば、有種自餘の僧俗も、聞く者歡ざるはなく、甲に傳へ乙に傳へて、大家其意を得たりしかば、有種豪荊、いへばさら也、夥方の

助ざらんや。先間諜兒をもて、寄隊の來方を撈るべく、子院の甲乙、穗北の郷人を召集へて、彼等が意見を聞べしとて、次の日件の毎を、招鳩めて、かの義を告て意見を問ふに、大家死をもて資んとて、各神水を啜り、誓をしつゝ、悄々地に軍陣の、准備を做す程に、十二月の初旬になりぬ。この時豪荊が遣したる、間諜兒かへり來て、寄隊の來方を報るを聞くに、陸路は、國府臺へうち向ふ、寄隊兩大將にて如此々々也。又里見方は、義通君を大將にて、犬塚犬飼防禦使たり。又行德口へは如此々々也、洲崎へは箇樣々々と、三所兩敵の交名を、聞ぬる隨に報にけり。登時有種は、豪荊們に談ずるやう、今我義旗勤軍の屆る所、洲崎は路遙にして、事の急に逢ひがたかり。行德國府臺は便路にて、且遠からず、就中國府臺は、寄隊數萬の大軍にて、顯定成氏兩將ならずや。況て里見方は、義通君大將にて、犬塚犬飼防禦使ならば、這隊に就て軍忠を盡さん。然はとて事をいそがするに、不慮の軍陣なる故に、左に右に東西整はで、思ふにも似ず日を過しつゝ、十二月八日の早天に、有種幷に、法印豪荊を兩頭人にて、四十八院の山伏、穗北の郷黨、そが子弟に至るまで、壯なる者二百五六十名、甲冑器械は、筵席に裹みなどしつゝ、各々是を搭駝て、國府臺を投ていそぐものから、路近からねば時移りて、この日申の左側に、國府臺の、近村に來て聞に、隔昨日よりの鬪戰に、寄隊は酷くうち負て、今日しも山内滸我の兩將は、落

を合せて、水陸よりうち向ふと云、大兵約莫十萬餘騎、陸は行德國府臺、水路は安房の洲崎を投て、攻寄すると風聲あり。其言孟浪ならざれば、有種聞て驚き憂ひて、悄地に法印豪荊に、意衷を示して談ずるやう、里見殿は、曩に我義父、氷垣夏行翁の、老病に臥しゝ折、東西賜りける恩惠あり。然らでも彼八犬士は、我等幸に、一面の交を辱くす。那が中に、犬山道節忠與は、原是煉馬の殘黨なれば、我舊君、豐島殿と同宗の家臣なりき。この故に、曩には那犬士の毎幾番か我に薦めて、里見に仕へよ、といはれしかども、其比は、氷垣翁の老病を看放ちがたく、且翁が開發相傳の、田園を棄て、他鄕へ移らん事の本意ならねば、いまだ果さゞりけるに、幾程もなく禍鬼起りて、穗北を棄て走る時、いかで安房に赴きて、犬士に就て里見殿に仕へよ、と人のいひしかど、然しも一介の功もなきに、身の措處あらずとて、安房へいなんはさすがにて、竟に此地に來つるなり。然るに今里見殿に大敵あり、危窮存亡の秋と聞ながら、報恩の義に及ばずは、勇士の本意とすべからず。おん身一臂の力を勠して、我を帮助て、軍功を、立ることを得させ給はゞ、其功をもて、里見殿に、仕へて二たび家を起さん。此義誰何。と請問へば、豪荊はつら〳〵と、听つゝ莞然とうち笑て、和殿の情願極て佳。里見殿は賢君にて、且仁政の聞えあり。和殿この折をもて、義旗を揚なば、名あり忠あり、我いかにして帮

小可が上はしも、首をいへば箇様々々、尾は又恁々做りとて、言詳に説出すを、道節明相清英等は、齊一耳を欹て、倶に佳境に入りにける。其顚末を尋ぬるに、初落鮎有種は、扇谷の討隊の頭人、箕田馭蘭二に、根角谷中二が多勢を領て、うち向ふと聞へし時、妻の重戸が諫によりて、急を鄕黨に告知せて、穗北の家を自燒しつ、鄕人を咸相伴ふて、重戸の叔父のいまそかりける、下總の國、猨島郡、誼夾院村に赴きて、那小父に危窮を告て、權且這里に潛びて居り。抑當村に誼夾院と呼做したる、一座の修驗院ありけり。住持は豪荆といふ山伏にて、昔は子院、四十八箇寺ありしに、近世痛く衰て、今は本山のみなれども、其餘波近鄕に在り、皆半僧半俗にて、武藝を好み、且各耕し耘りて、もて口を餬へども、倘本山に事ある時は、四十八院咸集ひて、相資けずといふことなし。況て豪荆法印は、其性特に任俠にて、法師に似げなき腕扱なれば、平生に弱きを助けて、強きを折き、人に不平を解まくす。然ば今落鮎夫婦が寃家の爲に、地を棄、家を燒き、宅眷を携へ、鄕黨を相伴ふて、悄地にこゝに尋ね來つ、事の難義を告知せて、其資助を憑みしかば、豪荆は推辭氣色なく、最精悍しく管待て、落鮎の宅眷はさら也、穗北の鄕人、幷が妻孥子弟まで、西東に潛せて、よく是を舍藏こと、五六箇月に做りし比、忽地扇谷定正の、里見を攻伐の事聞えて、山內顯定と兩旗にて、且諸侯を連ね兵

く程に、明相と清英は、豫聞知る那人歟。思ひがけずとばかりに、引て道節に逢すれば、道節は遽しく、馬より閃りと下立て、こは落鮎生、一別以來恙無や。和殿は亦幾の間に、當城を攻落したる、料らざりける對面にこそ。其所以きかまほしけれ。と問ば有種さン候。小可が出沒は、言一朝に罄しがたかり。先城内へ倶し侍らん、人馬を憩へ給ひね。と答て却明相清英等に、名對面しつ勞ふて、引て城中に請ずれば、道節は、明相清英等と、倶に找み入る程に、自餘の老兵小頭人們も、士卒を徐に繰入れて、三隊に別れて東西に、聚ひて亂雜ある事なし。恁而落鮎有種は、道節及明相清英等を誘引て、城の正廳に造る程に、五十有餘の法師武者と、落鮎の家の老僕小才二と、穗北の故老們出迎へて、上坐に請待しつ、賓主の席定りて、手炙の火盤を薦め、且煎茶を看めなどす。當下道節は、有種にうち向ひて、昨日洲崎の澳の水戰に、犬阪が計略をもて、大敵を鏖にしける、事の始めより、道節が敵の副將、朝寧を射て、水中に墜しゝ事、又河崎河原にて、定正を赶撃し時、巨田助友が援兵の事、又こゝへ來ぬる時、湯島なる岡山にて、根角谷中二、箕田馭蘭二、反橋雜記等の三城の、合兵と鬪戰克て、谷中二馭蘭二等を生拘て、牽もて來つる事の終りまで、其大略を說示して、却落鮎が上を問へば、有種は聞事毎に、感歎せずといふことなく、義成の武德仁政、二犬士の才略武勇を、譽る事大方ならず、

内、城樓の下に、中黒及揚羽の蝶の、花號染做たる、旌旗騎馬表を、幾旒か建たるが、寒き西北の風のまに〳〵、翩飜たる光景に、他は甚麽、とばかりに、明相淸英、いへばさら也、道節幷に從兵們も、眉を顰めつ疑惑ふて、思ひ難たる幵が中に、道節は人をもて、明相淸英にいはするやう、今這忍岡の城に、躬方の旌旗を建たるは、只是我を惑する、敵の計策なるか、然ずは亦智玉が、薄情や我を脫し拔きて、夙く這城をも攻拔たるか、且城に向て名告喚りて、那虛實を覘ふべし。といふに明相等こゝろ得て、馬を正門の橋近く騎拔めて、聲高やかに喚るやう、やをれ城內の人々にものいはん。這城の頭人は、敵歟躬方歟こゝろ得がたし。我は里見の防禦小頭人、印東小六明相、荒川太一郞淸英是也。這隊の防禦使犬山道節主の武勇をもて、方偉來ぬる中途にて、當城の頭人根角谷中二、及五十子の城の頭人、箕田駮蘭二等と戰ふて、且痍負せて生拘りしを、牽せ來て這里に在り。門戶を開て迎へずや。と繰返しつゝ呼門ば、城兵等は、應と答て、先挾牕を開きつゝ、左見右見ること半晌許、軈て城門を開せて、頭人とおぼしき武者、葱白縅の鎧に繁鋲打たる釬、媿頭の脛衣穿て、紉短に締做し、黃金製作の大刀を佩きて、頭鎧を從者に持せたるが、士卒二十名許を從へて、遽しく出て來つ、みづから名告答るやう、犬山主は那里に在する。恁いふ我は落鮎餘之七有種にて候ぞ。と報知せつゝ近づ

あるべきを、猶よく思ふに、谷中二は、間諜兒をもて、我去向を聞知りて、悄地に城を出て、這頭に埋伏して、我を撃まく欲する程に、馭蘭二雜記等、兩城の落武者毎は、料らず其首に落合て、却大勢に做りたるならん。といへば明相然也。と答へて、現に御推考然も候はめ。愚按には候へども、敵の遺せし旌旗戰幟あれば、幵をもて根角谷中二が、かへり來ぬると佯りて、忍岡の城に造らば、城兵必欺れて、城門を開きて吾を容れん。といへば清英もこの義を喜して、登時我們先に找みて、手に唾して城を捕べし。いそがせ給へ。と薦れば、道節頭をうち揮て、其計略亙きにあらねど、根角が殘兵脫還らば、城兵蚤く我詭詐を知らん。且野干玉の烏夜ならば、其計畧行はれもせめ。非如敵の旌旗戰幟もて、揣らまく欲するとも、今這白晝に城に莅まば、面善兒のなき故に、城兵必疑ふべし。然危き技をせんより、今谷中二馭蘭二等を、明明地に曳吊ゆきて、見せて城兵等を罵り權さば、城兵必害怕れて、我に降らん。倘又城に猛者ありて、防戰はまく欲するならば、筋力をもて是を捕らん。外に援のなき城也、踏潰すに手の隙沒むや。卒ゆくべしとて、馬を找れば、明相清英この議に任して、既に半生半死なる、谷中二と馭蘭二等を、雜兵に吊らせ先に立て、明相清英先鋒たり。道節も推續きて、三千の從兵前後を亂さず、既にして忍岡の、城に近づき來ぬる程に、と見れば正門の塀の

る者ぞ多かりける。然ば又印東明相荒川清英は、這時までも根角谷中二、赤耳九二郎、當場阿太郎等の一隊と挑戰ふ程に、左右後陣の敵兵は、咸道節に撃破られて、立脚もなく做りしかば、敵の頭人谷中二九二郎、士卒も倶に驚怕れて、呀と叫びつゝ敗れ走るを、明相と清英は、隊兵を駈て攻伏々々、明相は根角谷中二に、鎗を合せ手を痍して、馬より撻と突落す。其間に荒川清英は、赤耳九二郎を刺仆し、又當場阿太郎に手を痍して、猶も雙て敵を撃、這壯佼等の挊きに、躬方は勇みて、後れんことを怕れ、敵は影を躱し迹を埋る、鬪戰夙く果しかば、道節は开が儘に、馬を樹下に騎居て、士卒の集合ふを俟程に、印東明相、荒川清英は、生口根角谷中二を、雜兵に牽せ來て、この餘敵の小頭人、赤耳九二郎當場阿太郎、とか喚做す兵毎は、深痍に堪ず死たれば、其首を捕ずと云。又道節が隊に生拘たる、箕田馭蘭二は、こも深痍にてものいふ事を得ず。韮見利金太、布留川淺市、反橋雜記、丁田畔四郎等は、或は撃れ或は逃亡て、敵一人もあらずなりぬ。當下道節は、明相清英等が、今日の挊きを譽て且いふやう、我聞箕田馭蘭二は、是五十子の城の留守居なり。又反橋雜記、丁田畔四郎は、是大石が兵頭にて、逃て大塚より來つるならん。又根角谷中二、赤耳九二郎、當場阿太郎等は、則忍岡の頭人也。然るを五十子大塚の、城の落武者等が、谷中二と一隊に做りて、我を中途に撃まくせしは、所以

て蒐れば、明相淸英毫とも譟ず、徐々として士卒を拔めて、中を割せず左右をも撃せず、道節も亦是を助けて、息をも養ず、挑戰ふ。左右の茂林の方よりして、又起り立二隊の軍兵、箕田馭蘭二、韮見利金太、布留川淺市、甲乙三騎、其兵約莫一千許、道節が備の眞中へ、咄と譟て推蒐るを、道節譟がず開き合せて、右に引受け左に拄て、士卒を使ふに手脚の像く、毫も透間あることなければ、明相と淸英は、是に氣を得て手を摧く、鬪戰闌なる折から、後陣のかたに又敵あり、是則別人ならず、大塚の城の頭人、反橋雜記丁田畔四郎が、其隊の殘兵四五百名を、眞先に拔めて、犬山の、後陣を撃こと急なりければ、道節が其隊の老兵、小頭人も皆駭き慌て、返し合するに暇なく、這隊よりして敗れしかば、是にぞ敵は威勢を得て、前後左右揉合せつゝ、洩さじとてぞ攻戰ふ。鋒尖鋭かりけるを、道節は物ともせず、馬を前後に馳融し、又只左右に相中りて、鎗もて敵を刺倒す、武藝饒勇向ふに前なき一人當千、いはでもしるき、犬士に誰か克つ者あらん。箕田馭蘭二韮見利金太、憶ずも辟易して、俱に深痍を負しかば、其隊の兵們、潑と頽れて、風に木の葉の散る像く、鋒を倒して逃しかば、道節は又奮然と、後陣の敵に突蒐る、本事に倣ふ老兵小頭人、取て返しつ力を勠せて、皆只恥を雪ん、と思はぬ者もなき勢に、反橋丁田が五百の士卒は、一霎時こそあれ怺難て、逃んとしつゝ度を失ふて、撃る

して、犬阪既に忍岡の城攻を、咱等に譲らんといひしといへば、縦那城、五十子大塚の、落武者等が加りて、幾千幾萬人、盾籠りて防戰ふとも、今日我一時に踏潰さん。各粉骨摧身して、我を佐けて大功を做しね。卒とく／＼。といそがせば、明相清英いへばさら也、士卒咸諾ひて、勇みて其隊配に相從ふ。明相清英先鋒たり、道節は中軍にて、一二の老兵小頭人を後陣とす。隊伍齊々整々と、不忍の池の那方なる、忍岡の城を投てうち向ふ。當日礫川湯島の間は、森々たる岡山にて、處々に繁り植たる、冬青樹に路を去あへず、既にして犬山が一軍は、湯島を過らんとしぬる時、道節は馬上より、去向を佗と見亙して、急に先鋒の士卒們を喚止めて、且宣示すらく、我今前面の茂林を見るに、正に是隱々として、立升る殺氣あり。意ふに敵の伏兵あらん、疾搦出して撃捕りね。と諭る詞も果ぬ折から、件の茂林より忽焉と、咸聲大く發りて、撃出す火銃の、煙と倶に顯れ出る、敵兵約一千有餘、眞先に找む其隊の頭人、烏革緘の鎧に、同緘の五枚首甲の、火形打たるを豬頸に被做し、腰に大小二口の刀を跨へて、馬を跳せ鎗を拈て、四下に响く聲高やかに、里見の葉武者們胆な潰しそ。扇谷殿の御内にて、忍岡の城の頭人、根角谷中二麗廉、這隊に在り。先度の恥を雪まくす、本事を見よや。と喚れば、左右に從ふ兩個の小頭人、赤耳九二郎當場阿太郎、士卒を駈て三七二十一に、殺頽さんと競ふ

第一番に城を落しかば、丁田畔四郎は、三四百の士卒と倶に、各資財什物を、或は車に載、或は馬に駝して、後門より出去程に、我們夙く推寄來て、咄と噇きて攻撃しかば、然らでも皆是怯鬼に、誘引れぬる城兵等は、孰か拄一拄も拄ゆべき。只雛蜘を散すが像く、逃て四零八落に倣りしかば、我們は手も濡さで、當城を獲て守るのみ。勿論那義は、生拘の、敵兵に聞く所なり。と告るをうち听く、明相清英、憶ずもうち含笑れて、事の便宜と、犬阪の、軍略智計を感嘆す。开が中に道節は、連りに耳を攲けて、聞果て且いふやう、現に兵は拙速を貴ぶべし、久くして、巧なるを良とせず。犬阪が爲す所は、速にして拙からず。咱等は昨宵愁に、中途より走加りぬる、兵毎に拘づらひて、時後れぬる悔しさよ。然らんには、忍岡をも、亦犬阪に先せられし歟。といふを高宗推禁めて、否とよ。忍岡の城攻の事はしも、昨宵咱等が薦めしかども、犬阪主從はず、那里は和君に讓らんとて、士卒を紛けて伐せ給はず。然れば亦五十子と、這城内なる落武者の、咸忍岡へや集合けん、然らば那里は大勢ならん。と告るを道節聞あへず、好々我こゝろ得たり。暇まうすと身を起せば、明相と清英は、又高宗と季元等に、別れを告て相從ふを、留め難たる高宗季元、猶も去向の小心を、願しくこそ。とばかりに、門内までぞ送りける。然れば亦犬山道節は、大塚の城を、退き出ると开が儘、老兵士卒に意衷を示

びける。恁而犬山道節は、大塚の城に近づく程に、先一二騎の斥候を遣して、敵の形勢を知まくするに、其兵毎かへり來て、那里の城は、御方の士卒入替りてや守るらん。建たる當家の旌旗戰幟、多く見えて候。と報しかば、道節は、騎たる馬を、駐めて呆るゝ事半晌許。原來亦智嚢が、那里の城をも捕たるよ。然ばとて、這里まで來ながら、城を守る頭人等に、對面せずはあるべからず。さても〳〵。とばかりに、拺ぬ馬に鞭うちつゝ、既に其城門に近づく隨に、軈て一兩個の士卒を走らせて、城の頭人に告しかば、小森但一郎高宗、木曾三介季元等は、其虚實を問糾すに、疑ふべくもあらざれば、隨卽門戸を開かせて、道節をぞ迎へける。當下犬山道節は、三千の隊の兵を、开が儘大塚の城外に住め在らせて、那身は明相淸英と、僅に三騎、士卒百名許を將て、城に入て高宗季元等に對面して、當城を攻落したる、其敏捷を譽て、且敵の落方を尋るに、高宗季元がいふやう、咱等は昨宵、犬阪主の指揮によりて、一千許の隊兵を將て、當城にうち向ひしに、這里を守る大石が士卒等は、管領昨日の、水戰にうち負けて、落て其往方を知らず、剩五十子の城は、犬阪に逆寄せられて、沒落しつといふよしを、當城の頭人、反橋雜記、丁田畔四郎等聞知りて、然では這城保ちがたかり。敵に逆寄せられぬ間に、忍岡へ退きて、那里と一隊に倣らむとて、雜記は、主の大石が宅眷に、己が妻孥等を相添して、

第九輯 巻之四十七上

第百七十八回上

有種恥を雪て郷黨を復歸す
大水陸に衆鬼を濟度す

是より先に、犬山道節忠與は、十二月八日の黄昏時候、河崎矢口の間河原にて、定正の援兵なる、巨田助友を撃走らせし折、印東明相荒川清英等の意見に任せて、故の海邊に退く程に、馬淵場九郎が殘兵、及近郷なる、豪氏の子弟毎が、多く走り加りて、既に多勢に做りしかば、姑且其里に人馬を憩へて、且當晩間諜兒をもて、五十子の城の虚實を覘せしに、那里は夙く犬阪毛野が、江を渡し來つ城を抜て、威勢正に破竹の像く、當家の旗を四門に建て、紛ふべくもあらずといふ。道節聞て且歡び且羞て、明相清英等にいふやう、聞ね。又智嚢が逸早く、五十子の城を攻落たり。有恁れば我は大石が、大塚の城を抜べく、忍岡の城をも捕るべし。疾打立ね。といそがして、人には飽まで戰飯を使はせ、馬には多く豆草を飼ふて、九日の曉天に、河崎なる海畔を立て、陸地より、菅菰大塚を投て推寄する、其兵新舊うち合して、三千餘名に及

智が、五十子の城を拂て、又道節が進退甚麽ぞや。开は又下の回に、解分るを聽ねかし。

不平に思ひしに、毛野が是等の善政を、歡ざるはなかりける。こは是後の話說也。畢竟犬阪胤

に、毛野又告ること初の如く、且いふやう、那河鯉翁は、咱等一面の交あり。他は扇谷の孤忠にして、反て枉死の悼あり。其子孝嗣、亦是忠孝なるも、反て奸黨に誣られて、死刑に逮びて免れたれども、猶幸なくて、存亡今に詳ならず。我今五十子の城に在りて、民の憂苦を解まく欲す。矧那親子の如きは、忠義を後世に傳ずはあるべからず。速に墓石を造建て、祠堂料を寄附すべし。且觀に、當寺は、頗頽破に及べり、宜く修復致すべし。其財用は形の如く、明日城内にて遞與すべし。この義をこゝろ得給ひね。と言叮寧に解示しつゝ、硯を請ふて、手自證文一通を、書寫て取すれば、住持は歡び受收めて、却いふやう、寔に御意の如く、河鯉生は、曩に枉死の折、一旦城陷りしかば、當寺の檀越ならねども、其子佐太郎主、親の屍骸を舁入れさせて、安葬の議を憑れしかば、則執置き候のみ。管領家へ憚りて、いまだ墓石を建ざりしに、里見殿施主に做り給ひて、我寺をしも修造あるは、幸甚しく候なれ。仰こゝろ得候ひぬ。と應て又茶を肴め、果子を薦めて管待しけり。恁而次の日、寶傳寺の住持は、一二の徒弟を從へて、五十子の城に來にければ、毛野は則友勝豊俊等に、件の義を言示して、住持に幾裹の金子を取らせて、いよ〳〵修造をいそがしゝかば、守如の墓石はさらなり、寺も程なく造り更て、昔にかはらずなりにけり。然ば五十子の民毎は、守如の枉死、孝嗣の無實の罪を、日屬

の沙彌出て來て、うち驚きたる面色しつゝ、おそる〳〵左見右見て、那里よりぞ。と尋れば、毛野は自践み向ひて、咱等は是里見の軍師、犬阪毛野胤智也。當時河鯉權佐翁の、墳墓ありと聞知りて、拜奠の爲に立よりにき。いかで案内を憑むのみ。といはれて沙彌は阿と應へて、遽しく又内に入りぬ。姑且して間道筵と、淺青磁の香爐とを、右に携へ左りに引提て、復遽しく出て來つ、誘とばかりに、庭木履を穿つゝ、先に立ければ、毛野は引れて、本堂の傍なる、卒都婆墻ある處に造れば、花も丹楓もなかりける、冬の柳の樹の下に、只一塊の土饅頭ありて、一箇の卒都婆を建たるのみ、いまだ其墓表の石あらず。是なん河鯉翁の墳墓なりとて、沙彌は筵を布き、香爐を居て、傍に立て懷より、鈴拿出しうち鳴しつゝ、偈を唱念佛して、那廻向をぞ帮助ける。登時毛野は、後方なる、老兵等を見かへりて、我今故人を祭らまく欲するに、猛可の事にて祭文の儲なし。文は花也、言は實也、只方寸の懷ひを述て、誠を盡さば、亡靈も受ん。我拙きを笑ひなせそ。といひつゝ貌を改めて、墓に向ひつ香を燒きて、跪き合掌して、聲朗に吟誦しけり。其意忠信にして那死を悼み、其言簡約にして那子を憐ぶ、誠心誠意よく亡靈を慰めて、夜臺の眠を覺すに足べし。祭畢りて退けば、沙彌は又先に立て、客殿へ案内をしつゝ、茶を看めなどする程に、住持の老僧立出て、毛野に對面して姓名を問、來意を尋る

毎を釋饒して、庖厨の事を做さしめしかば、河堀殿と貌姑姫は、三飡も生平に易らず、又妙眞音音等が、里見殿の仁心を、言に觸れては說出て、定正主の愆を、云云と諭しゝかば、河堀殿も貌姑姫も、是によりてぞ稍覺て、左にも右にも佞人們の、不忠を憎み賜ひける。有恁れば毛野は士卒に下知して、城の四門を守らするに、千代丸豊俊、浦安友勝、小湊堅宗、猨岡猿八等を頭人、及小頭人とす。爾程に、隣里近鄕なる、鄕士豪民莊客們の、里見の仁政を慕ふ者、招かざるに聚ひ來て、請ふて軍役に達まく欲する者、千をもて數ふべし。こゝをもて犬阪が、軍威いよ〳〵揭焉にて、草木も靡く可なれば、次の日毛野は馬にうち跨り、二三百の、隊の兵を相從へて、城外四境をうち巡りつゝ、民の訟へを听定むるに、鄕の故老們、簞食壺漿して、歡び迎ざるはなし。恁而ゆく〳〵、日比と喚做す鄕盡處に、一座の小道場ありけり。前門破れ傾きて、松の垂枝に掩はれたれども、鉦鼓の音近く聞えて、夕讀經の聲すなるを、鄕導人毛野に告て、こゝなん日比の寶傳寺と喚做したる、舊院にて候が、這寺內に、扇谷の一忠臣、河鯉權佐守如の墓候也。といふを毛野うち聞て、馬を駐めつ寺內を見入れて、原來是要ある人の墳墓なり。卒立寄て廻向をせんず。といひつゝ馬より下立て、軈て找み入る程に、士卒は都て鎗を建、馬を繫ぎて、門前に在り。一二の老兵從ふて、立關に喚門へば、一個

箇樣々々。と宣教て、呈書一通と、定正の頭髻を筥に藏め、手自封じて遞與せしかば、蘗四郎はこゝろ得果て、事の准備を做す程に、丶大は又毛野に問れて、谷山に在りし日の事、且犬村大角の事、又水路躬方の勝軍にて、這五十子の城さへ、毛野が夙く攻落しゝを、那里の風聞に聞知りて、船を借んと思ひつゝ、當城に來ぬる由を、云云と告などす。其言佳境に入らまくせし時、蘗四郎は准備し果て、卒とて、丶大を促せば、丶大は毛野等に別を告げて、身を起しつゝ蘗四郎等に、別れて倶に柴浦に、出て快船にうち乘りて、洲崎を投てぞ漕せける。然ば又この朝、犬阪毛野は、妙眞音音浦安友勝等を案内にしつゝ、則後堂に赴きて、堀河殿と、貌姑姫に見參す。其事男女の禮を亂さず、詮ずる所は定正の、佞人に惑はされたる、這回の軍旅の非を擧て、義成の寬仁を說示しつゝ且いふやう、臣等當城に艦を寄しは、敢殺戮を旨としぬるにあらず、只管領の側なる、佞人們を鋤除きて、兩家の和睦を揣らまくす。然ば其間、兩御達を、安房へ移しまゐらすべけれども、水路は風濤の怕れをはしますべければ、猶この儘なるもけしうはあらず。這里に侍る妙眞音音、曳手單節は、皆是忠信貞實なる、女毎に候へば、御陪堂にまゐらする。この他年來給事の、女房等も候へば、必御心安かるべし。と言叮寧に慰めて、是よりの後朝夕に、安否を訪ざる事もなく、且生拘りの內中に、庖人もあれば、這者

塚へとていそぎけり。爾間に犬阪毛野は、今日の勝軍の事の趣を、洲崎の御陣へ、告稟さんとて、祐筆を召よせて、旣に其義に及ぶ程に、雜兵等が炊き果たる、戰飯を薦めなどす。左右する程に天は明けて、正門を衞る士卒等が、案內をしつゝ丶大法師の、谷山より出て來給ひぬ、と聞えしかば、毛野はみづから立迎へて、上坐に推升し、且那奇風の大功を稱贊しぬるを、丶大は歡ぶ氣色なく、愁然として嗟嘆に堪ず。姑息していふやう、軍師昨日の勝軍は、是賀すべきに似たれども、我年來の出家の功德は、竟に墮獄の惡趣に做りぬ。抑昨日の火攻に、敵兵の燒れ死せし者幾千百にありけむ歟、憐むべきことならずや。甲も乙も奇玉をもて、風を起せし我罪重かり。已なん〳〵。と怨ずるを、毛野は听つゝ慰めて、師父の自譴は然ることながら、曩にも諭し稟しゝごとく、惡を懲すも佛の方便、時宜によりては殺生も、反て佛意に叛ざるべき、師父の大功仰ぐべし。小子今快船をもて、洲崎へ使をまゐらせんとす、師父をも載て送らすべし。先齋をまゐらせん。この連日山蟄の、疲勞を歇し給ひね。と解れて丶大は領くのみ、麻の薄黑の法衣、栲の淨衣の垢染しを、脫更もせず爪繰る數珠の、外には所作もなかりける。恁而主客の早饍果て、毛野は鮠內葉四郎を、身邊近く召よせて、汝は丶大師に倶し、七八個の、雜兵を從へて、洲崎の御陣へ參りねかし。去向は水路を快船たるべし。却言上の趣は、


けの
友かつ


智玉長く
驅て敵城を
拔く

さじ、と思へばなり。和殿この義を知りたるや。といはれて憲儀答へに出なく、黄蘗を嘗たる唖子の像く、口を含めつ眼を睜りて、いはまくしつゝ竟に得いはず、姑息して聲細やかに、軍師我實に罪あり、枉て放免を願ふのみ。と勸解れば、毛野は小湊目に、恁々と分付て、却憲儀を牽立させて、弁が儘獄舎へ遣しけり。恁而又毛野は、小森高宗に談ずるやう、我憶ふに、大石が大塚の城を守る士卒等の、管領太く敗北して、當城も敵に捕られしと傳へ聞なば、必や駭怕れて、城を棄て走るべし。然らば那空城を、我よりして守らずは、野武士山賊の寓者あらん。和殿は木曾三助と共侶に、一千の隊兵を將て、夙く那里へ赴きて、箇樣々々に相計ひたまへ。と具にこゝろを得さすれば、高宗聞て、其義承り候ひぬ。但し大塚の城よりも、忍岡こそ要緊ならめ、この義誰何。と請問へば、毛野は莞爾とうち笑て、然なり、忍岡の城はしも、道節が捕るにやあらむ。嚮に犬山は、定正主を追伐しに、巨田助友が援兵に拒られて、遂に撃漏せしにあらずや。然るを今當城を、我逸早く拔きたれば、犬山必性起て、忍岡へ推寄て、那城を捕るなるべし。爾らば那里の敵城は、他に讓らまく思ふ也。木曾生も這意を得て、倶に大塚へ推寄給へ。當城に敵の棄置きたる、冷飯處々にあるならん、腰戰飯を遣るべからず、とく〳〵。と急せば、高宗季元敬服して、當晩一千の士卒を將て、悄地に城を立出て、大

に起して、矢場に俘にすべかりしに、定正主僕は悲み請ふて、言果べくもあらざれば、則主僕の願ひに任せて、定正の手自剪て、首級に換たる、頭髻を受拿り、命を免しつ、且事の照驗の爲に、憲儀を領て來ぬる故に、定正には鮀内葉四郎に、一百個の隊兵を分ちて、他を送らせしよしを報に、葉四郎は又巨田助友が、快船にうち乘て、泝り來ぬるに逢しかば、則助友が乞ふに任して、却定正を那隊に遞與して、河崎にかへり來つ、堅宗と一隊になりける、事の趣を演述す。又堅宗は、間諜兒をもて夙く知りける、道節が一隊をもて、定正を赶撃ける折、巨田薪六郎助友が、僅に五百の隊兵をもて、道節を防ぎ戰ひし事の光景を、聞つる隨に告にけり。當下毛野は、儼然と、憲儀にうち向ひて、やをれ大石生、和殿親子は管領家の元老にして、其君を輔けてもて、賢良たらしむる事を要せず、反て那惡に逢ふて、無名非理の大兵を起させて、罪なき隣國を略まく欲す。この故に、十萬の衆ありといへども、小敵に撃敗られて、終に其君辱められ、其身は俘囚に做りぬ。しかれども我君里見殿は、仁義禮智の心をもて、只其暴虐を防ぐのみ。今全勝の勢に乘して、人の地を略し、人の城を捕にあらねども、我當城に船を寄しは、只其惡を懲さん爲也。この故に、嚮に我伏兵をもて、管領を矢口河原に稠籠たれども、胡意饒して虜に做さず。是則我君仁義の本意にて、然しも大職たる那人を、楚囚に做

儕と共侶に、立躱れて在りけるを、見出されて捕揣られにき。といへば女房們も倶にいふやう、嚮に敵亂入りぬと聞えし時、朋輩等と共侶に、慌て走り出しかど、御母君と姫君を、倶しまゐらせんと思ひしかば、我們十名は立離れて、後堂に還り來にけるに、一方はをはしまさで、斫れし兩個の雜兵の屍骸ありければ、怕れて又外面へ、走り出つゝ猛者達に、趕れて捕へられ侍り。とおそる〳〵陳ずるを、毛野は听つゝ點頭て、しからば是この男女は、箕田馼蘭二們に立勝りて、聊忠信ある者也。倶に綁縛の索を釋して、妙眞音音、曳手單節と相共に、兩個の女君に仕へしめよ。其頭人は、浦安生、一二百の老兵を從へて、宜後堂を守るべし。但し綱阪四郎と廩人們の事は、猶思ふよしあれば、そが儘にして屏居め置きね。この餘の事は恁々と、言遺もなく宣示せば、友勝は妙眞音音と倶に、女房等を受拿て、老兵許多從へつゝ、いそぎて後堂へ赴けば、豐俊は又綱阪四郎と、廩人們を开が儘に、隊の兵每に牽立させて、外面投て退りけり。〇恁而當晩子二刻左側に、小湊目堅宗は、猨岡猿八、鮠内葉四郎と倶に、毛野が進退に從ひて、既に去向を知りたれば、生口大石憲儀を、隊の者每に牽せつゝ、五十子の城に來にければ、毛野は則城の正廳の、局の內へ召入れて對面す。登時堅宗は、嚮に河崎矢口の間河原にて、定正主僕僅に二騎、道節が虎口を遁れて、那里に津りを討めける折、目は伏兵一度

の告げ給ひし如く、件の兩個の歹人を、眉尖刀に被け芟除きて、河堀殿と貎姑姫を、茶亭に俱しつ共侶に、事の鎭るを俟侍りき。と報るを毛野は列々と、听果て感じて已まず、憶ずも手を拍鳴らして、果せるかな、勇婦の進退、孰れか忠義ならざらん、做し得て各皆妙也。河堀殿と貎姑姫の、惴りて自殺あるならば、我兩舘の御仁慈も、徒事となるまでに、長く怨を結れんに、那死を拯ひまゐらせしは、時に丁て其功拔萃、賞すべし〳〵。我も見參すべけれども、女儀に夜分は憚りあり。先後室に返し入れて、刀自等宿直して是を衛りね。事の起本に保質に、捉れし刀自等は主と做りて、反て兩個の保質を、捕獲しは不用意にて、造化精妙、亦奇也。縱定正主、殘兵をもて當城に推寄來て、とり復さまく欲するとも、河堀殿を城樓に升して、那罪を責て拒みなば、我兵僅に百人なりとも、他何ともすべからず。といひつゝ高宗を見かへりて、守城の准備を示す折から、千代丸圖書助豐俊は、落後れたる綱阪四郎と、庖人廩人們を生拘りて、結扭りてもて雜兵に牽せ、又當城に給事の女房十名許を捕禁めて、腰索被けて將て來つゝ、隨即毛野に報ていふやう、這者每は逃惑ふて、猶城中に在りしかば、擒捕て候也。其姓名は箇樣々々。と言詳に訴ふれは、毛野うち听て、鞫問するに、綱阪四郎がいふよう、小可は二の城門を攻破れし時、河堀殿と貎姑姫を、扶出しまゐらせん、と思ふによりて逃も得さらず、這

二の城門を守りけり。恁而ぞ初更の左側に、小森但一郎高宗は、其隊の士卒十名許と倶に、音音妙眞を將て來て、來由を胤智に報にけり。當下毛野は、先妙眞にうち向ひて、什麼妙眞刀自、曳手單節は恙なきや。音音媼御は、艦に遺されて、這里に在らじと思ひしに、釬脛衣に身甲は、故こそあらめ、甚麼ぞや。と問へば妙眞先答るに、こゝに在りける程の事、又技太郎餅九郎が、曳手單節に、掛想せし事を始にて、且いふやう、嚮に河堀殿と貌姑姫の、自殺し給はんとなされし時、憶ずも參り合せて、其死を禁め侍りし折、技太餅九が索ね來て、主家の亂を己が利にして、剰曳手單節を挑みつゝ、從はざれば火銃もて、權していよ〳〵逼りし程に、料らずも音音の刀自の、幇助によりて、歹人等を、撃果し給ひしかば、倶に件の兩柱の御達を勦り慰稟して、園の茶亭に退りて侍り。と一五一十を述知すれば、音音は亦大茂林の澳邊にて、仁田山晉六が柴薪船を、計りて燒亡せし事の始より、那身は海に沒り、火を免かれて、泅ぎて大茂林濱に造りし折、海苔七夫婦に死を救れし、事の趣を告げて又いふやう、折から扇谷の殘兵の、皆結梱られて歸り來ぬる、其艦流れ寄しかば、他們を漫に哄誘して、這城内に紛れ入りしに、おん身幷に勇士達の、推續きて當城に、攻入り給ひしを知ざりしかど、この刀自と曳手單節を、索ねて救出さまく、思ふの故に、事の紛れに、後堂深く、潛び入りしに、今妙眞刀自

助豐俊は、敵の頭人韮見利金太們が逃るを赶つゝ、二の城門に、士卒を駈て攻戰へば、城の頭人箕田馭蘭二、兵頭綱阪四郎布留川淺市、力を戮せて隊兵を奬し、こゝを先途と防ぎ戰ふ、其兵四五千あるをもて、左右なく攻も破られず。毛野は馬上に是を見て、弓に矢刺ふて驃と射る。矢局錯はず馭蘭二は、肩尖丁と射られしかば、得堪ず馬より落にけり。是にぞ驚く城の士卒は、備を亂して、潑と退くを、透さず稠入る先鋒の頭人、高宗豐俊いへばさら也、浦安友勝、木曾季元、士卒を薦めて、三七二十一に、攻伏々々亂入る。然しも烈しき大刀風に、城兵防ぐに力なく、才に金瘡兒馭蘭二を、肩に掛つゝ後門投て、咄と頽れて逃走れば、綱阪四郎布留川淺市、心ならずも逃走る、躬方の士卒に誘引れて、後門よりぞ落亡ける。恁而犬阪毛野胤智は、一擧に城を攻落して、馬を本城に乘入るゝに、敵一人もあることなければ、權且こゝに屯して、高宗豐俊を召ていふやう、我聞當城には、定正主の後母河堀殿と、朝寧の夫人貌姑姫あり。又妙眞曳手單節の上も心許なし、夙く其在處を索ねて、宜く勦り慰むべし。但那五婦女子のみならず、女流は都て罪なし、必な驚かしそ。一所に集合て扶持すべし。且寶藏と倉廩は、我手自封すべし、和殿們もよく心を屬て、士卒の亂妨を警めよ。とく〳〵。と急がせば、高宗豐俊相心得て、軈て士卒を部して、城中隈なく巡索す。この時自餘の士卒們は、庭上に篝を燒て、一

り。這里に在す兩夫人は、定正主の奶々君と、新婦君にこそをはすめれ。城陷りぬ、と聞給ひてや、自殺せまくし給ふ程に、我們料らずこゝに來て、やうやく拿禁侍りし折に、那技太郎と餅九郎が、亂を利と做す不忠の本性、剩奴家姉妹を挑まむとて、火銃をもて權せしかば、防ぐに術のなかりしに、折よくおん身が武者打扮して、來つゝ件の歹人等を、推果給ひしは、今に肇ぬ武勇の擇き、愉快こそ侍るなれ。と告れば音音は悉しく、河堀殿と貌姑姫に、うち向ひつゝ額を衝きて、奴家は里見の一家臣、姥雪代四郎が妻音音にて侍り。目今軍師犬阪毛野が、當城を攻懲すといへども、但君の側なる、佞人を鋤除かん爲のみ、御達を苦しめ奉るに侍らず。然れども這里に在ましては、軍兵の亂妨も、測りがたく侍るなれば、權且御園へ出させ給へ。誘とく〳〵。と薦稟せば、河堀殿目を推拭ふて、年來仕る女房們は、己が自恣咸逃去りけん、有恁瀨に立つ者はなく、反て敵の妻孥女兒に、伴れぬる鈍ましさよ。とうち佗給へば貌姑姫も、只潸然と泣沈みて、立難給ふを、音音妙眞、曳手單節は慰めて、却後園の那方に見ゆる、茶亭へとて倶しにけり。姑且して、給事の女房の、聊忠心ある者十名許返し來つ、河堀殿と貌姑姫を索るに、雜色とおぼしきが二人まで、斫殺されて俯たるのみ、那二方の見え給はねば、うち驚き且怕れて、又外面へ退りけり。爾程に犬阪毛野が先鋒なる、小森但一郎高宗、千代丸圖書

ゐらせんや。況筋なき不義淫奔、矢銃をもて權すとも、誰かは枉て從ふべき。といはせも果ず技太郎と餅九郎は、脚踏鳴して、眼を瞋らす聲又苛どく、女流に似げなき大胆無敵、其義ならば思ひ知せん、覺期をせよ。と罵りて、火蓋を鑚らんとせし程に、後方に覘ふ一個の雜兵、忽地聲を震立て、白物等。と喚禁れば、驚き見かへる技太郎が、技は果敢なく眉尖刀に、細項丁と芟られて、軀は撻と仆れしかば、是にぞ駭く餅九郎も、倶に見かへる程しもあらせず、又只件の雜兵が、入む眉尖刀に右の腕を、ばらりずんと芟られて、持たる鉄砲共侶に、忽地撲地と薙落されて、臀居に撻と平張けり。思ひがけなき今這帮助に、又うち驚き且歡ぶ、曳手胞姉妹妙眞は、共侶に聲をかけて、料らざりける危窮の助劍、抑おん身は、何人ぞ。と問ふ間に雜兵は、戰笠やをら脱棄るを、と見れば是別人ならず、正に音音にてありければ、こはこはいかに。とばかりに、妙眞曳手單節等は、滿面笑るゝ歡びに、先二口の短刀を、鞘に納めつ身を起し來て、卒這方へと請薦れば、音音は眉尖刀搔遣りて、跪きつゝ却いふやう、奴家が恁る打扮して、這城内に潛入りしは、特に所以ある事なれども、开は後にこそ告侍らめ。旣に躬方は全勝にて、水路の鬪戰のみならず、犬阪主の一隊の雄兵、當城に推寄來て、正門は旣に敗れたり。と告れば妙眞曳手等は、いよ〱歡び、ます〱安心て、原來事皆便宜に侍


ひくて


五十子の城小
四勇婦大功を
成そ

敵方の、間諜兒にてありけるよ。と事問ふ詞も果ぬ折から、四下に响く空銃に、大家耳を串れて、吐嗟とばかり駭つゝ、俱に前面を佶と見る、隔の襖戸蹴開きて、現れ出る兩個の猛者あり、是則別人ならず、亦那朝時技太郎、天喦餅九郎にぞありける。但見る、打扮一對なる、身には肚甲肱釬脛衣、戰笠眉深に髯咋反らして、訛聲高く喚るやう、知ずや是意中人達、豫の目算鬪踣ふて、鎗打負給ひしかば、里見の軍師に逆寄せられて、夙落城に程もなし。我情人達を掻攫ひて、且大塚の城に退らん、と思ひつゝ索ねしに、得見えざるこそ故ありけれ。奥跋入りして何するやらん。這里に造りて我們が、主張亦更りたり。河堀殿と姫上と、いまだ出も得やらずして、這里に在しは奇貨なる哉。兀自里見に降參して、這二方を獻せなば、咱等兩個は、一城の主に倣らんも易かるべし。开して和女等を妻にして、旦な夕なに長視なば、鄙語に云牝丹餅で・臀を打るゝ榮耀の上裝、恁ばかり愛たき事はなし。疾引立て一緒にいなずや。倘詩の語のと不の字をいはゞ、可愛さ反憎さも百倍、三人ながら擊殺して、然而爾後に里見に降らん。應とも否とも答ずや。と兩聲俱に苛めしく、嗜きに嗜ざく准備の銕砲、蚤く手に〳〵拿直して、銃杪其方に推向れば、吐嗟と驚く妙眞と、俱に曳手等胞姊妹は、其身を盾に河堀と、貎姑姫を背にして、戰れぬる聲慌々しく、やよ等給へ、和主們の手を借りて、這二方を俱しま

て、幾間ともなき奥坐席を、其首歟這里歟、と索ね入る程に、翠簾吊渡せし奥の一室に、果して兩個の夫人在り。問でもしるき、那打扮、貴人なるべく見えたるが、迭に短刀拔持て、自殺せまくしたりける、那時遲し、這時速し、妙眞曳手單節等は、這光景を見てしより、忽地ヤヤと聲を被けて、走り入りつゝ右ひだりより、拳に携りて推禁れば、河堀殿も貌姑姫も、吐嗟とばかり駭れぬる、猿馬を鎭め左見右見て、思ひがけなや、汝等は、抑是何人ぞ。と訝り問れて、妙眞等は、猶手を放さず、答るやう、識せ給はぬは理り也。奴家每は里見の家臣、犬江親兵衛が祖母妙眞、後の十條力二郎尺八が母曳手單節にて侍り。この他姥雲代四郎の妻、音音と俱に、軍師大阪毛野の籌策に從ふて、降人千代丸圖書助の舊臣、某甲等の宅眷也、と詭りて、密使に立しかば、我們三名をは、保質にとて、這城內に留措れ、音音は、仁田山晉六に預けられて、丌が儘艦に遺り侍り。然るに今日の水戰、寄隊敗北の聞えあり、反て犬阪に逆寄せられて、當城將陷んとす。然けれども、我主君里見殿は仁者也。豈人の城を屠り、人の宅眷を殺戮して、己を利する慮をし給はんや。憶ふに今日の城攻は、管領非理の攻伐を、懲さんと欲するのみ。然るを惴りて自殺あらば、義成の本意にあらず、枉て止り給ひね。と迭代に諫諭して、持たる短刀挑放せば、河堀殿も貌姑姫も、其手に携りうち泣て、原來是汝等は、思ひがけなき

奥在たる一室に在り。身の憂かりしに就て亦、心にかゝる音音が上を、いかに〳〵と思ふのみ、然しも人には問難て、做す事もなく且し暮す程に、この日黄昏時に及びて、城中猛可に噪ぎ起て、里見の軍師が逆寄して、正門は既に破られたり、と罵る聲のみ聞えしかば、這保質等を守の頭人、大石憲重の家臣なりける、那朝時技太郎天岳餅九郎等はさら也、雜色奴隷も咸逃去けん、其頭に人の在ることとなければ、妙眞曳手單節等は、一たびはうち驚き、一たびは歡び思ふ、額を集めて、安危を計るに、曳手單節がいふやう、聞くが如きは、今日の闘戰、御方の全勝疑ひもなく、犬阪主が逆寄し來て、城を攻落すにぞあらんずらむ。然らば我身の出入に、路廣くこそなりけめ。といへば、妙眞點頭て然也。我們は左まれ右まれ、這城内には、河堀殿と喚れ給ふ、定正主の奶々君もをはしまし、及朝寧主の夫人なる、貌姑姫も在すと聞ぬ。這兵亂に那二柱の、老夫人新夫人に、恙もあらば、我兩舘の、御仁心に違ひまつりて、後々の爲に可かるべし。非如案内を知ずとも、悄地に後堂に赴きて、那方樣に倶しまゐらせて、犬阪主に渡しなば、我們が質に捉られて、這里に在りける甲斐はあらん。この義什麼。と問けば、曳手單節は歡び承て、現其進退奇妙に侍り。時後れなば、悔かるべし。誘給へとて身を起せば、妙眞も倶に裳を褰げ

つゝ東西へ、走る者のみ多かれば、言問ふべくもあらざりける、音音は奥へ紛れ入る程に、給事の女房等が、良賤尊卑の差別なく、外面投て惑ひ出るを、某ならぬ歟、と見つゝ問つゝ、遣違して、猶奥深く入る途に、遺たる眉尖刀一挺あり。是究竟と拿揚て、挾みつゝ立つ奥の間に、男女爭ふ聲しけり。原るに、這城内に河堀殿と喚做たる、定正の繼母ありけり。年齢は六十許なるべし。又式部少輔朝寧の妻を、貌姑姫と喚做すあり。是は此京師なる、某甲中納言の息女なりしを、定正近曾乞下して、朝寧にぞ妻せける。今玆は十七八にもやあるらむ、間嘗に深窓に凭て、立ときは蘭麝衣裳に薫り、臥ときは狐貉を褥にして、冬の夜も猶暖く、夏の日も將涼しかるべき、錦の上に花を添る樂に耽れども、雪中に炭を贈る、貧民の情を知らず、三飡は、鼎を列ねて、桂を薪にし玉を炊く。幾の侍妾、前に侍り後に從ふ。恁る富貴の身にしあれど、今城陷り國破れて、敵亂入すと聞えしかば、恩顧の老黨傳給の女房も、何里ゆきけん、在ることとなければ、河堀殿と貌姑姫は、出も得やらずうち對ひて、こはいかにせんとばかりに、せん術知ず共侶に、うち泣て在せしに、城に兵火係りぬ、と聞えしかば、左ても右ても免れがたき、命を今さら惜んや。只この儘に刃に伏て、死天の逆旅に相伴んとて、手に〳〵短刀拿揚て、念佛唱る雨聲も、細るばかりの歎きをしつゝ、倶に刃を拔放ちて、既にかうよ、と見

は、敵の多少を知ざれば、右往左往逃迷ふて、撃るゝ者ぞ多かりける。當下里見の士卒們は、夙く正門をうち開きつゝ、守屋の邊りに繫れたる、馬の絆を斫斷々々、馬二三頭牽出して、高宗豐俊に跨すれば、殘れる馬は烟りに怕れて、正門の橋を驀直に、渡して遠く馳去れば、城兵いよ〳〵度を失ふて、頽れ蒐りつ、正門より、逃出る者多かれば、這隊は遂に敗られけり。浩る處に、犬阪毛野胤智は、浦安友勝木曾季元と共侶に、三千有餘の隊兵を將て、那殘兵の跡を跟つゝ、五十子の城に近づく程に、城内猛可に忽劇しく、忽焉として起升る、兵火と倶に、城のかたより、放馬二三頭、這方を投て馳來ぬるを、毛野は蚤くも先鋒の士卒に、下知して馬を捉駐させて、軈て其身と友勝季元等の、騎馬にしつ諸兵を勸めて、短兵急に推寄て、城の正門に乘入るれば、韮見利金太隊の兵毎も、防ぐに由なく、第二の城門に、萎みて敵を拄へけり。是より先に烈婦音音は、那殘兵にうち交りて、輒く城に入りし時、日は旣に暮たれば、躬方の頭人高宗豐俊が、二十個の隊兵を領て、紛れ入りしをいまだ知ねど、いかで妙眞曳手單節の、在處を索ねて拯ひ出す、便りも欲得、と逸早く、紛れて深く潛び入て、這里歟那里歟と索る程に、城兵猛可に罵譟ぎて、敵旣に逆寄して正門は剛才攻捕られたり。那頭人は名に聞えたる、安房の軍師犬阪ぞとよ。然では這城保ちがたけん、宅眷を撃すな疾退らずや。と叫び

に燒れ水に溺れ、然らぬは撃れ生拘られて、免るゝ者あることなかりし、开が中に小可毎は、堅を摧き銃を劈き、大刀器械も皆打折られて、免るべくもあらざりしを、やうやく艦を漕退けて、惜からざる命を有ちしは、いかでこの義を御留守達に、告稟さんと思へば也。只副將軍のみならず、老舘は、いかに在らん、火水の爲に亡給ひし歟、撃れ給ひし歟、知るよしもなき、敵は必勝に乘りて、逃るを赶つゝ長く驅て、當城に推寄來つべし。御用心あれかし。と詞急迫しく異口同樣に、示合せし己が非を、飾りて倶に訴れば、城兵等が驚き、いへばさら也、韮見利金太膽を潰しつ、睨むが像く眼を睜りて、そは安からぬ事にこそあれ、疾箕田殿に告知しね。諸門の隊配り要緊ならん。といふに、士卒等心得て、走りて二の城門三の城門、諸隊に急を告しかば、當城を與り守る、箕田馭蘭二圓通等、孰か駭噪がざらん。いまだ敵の旗をも不見して、落支度をなす者のみなりしを、馭蘭二罵勵して、其隊の小頭們と共侶に、出て隊配を做す程に、城中猛可に放火の者あり。守屋より其火發りて、早く城樓に燃移る、烟裏に敵兵あり、其兵幾人なるを知らず。胡歩亂行ぐ城兵們を、中るに儘せて斫仆す、刀尖銳く聲高やかに、若們知ずや、里見の軍師、犬阪毛野が先鋒の頭人、小森高宗千代丸豐俊、こゝに在りこゝに在り。と名告被け、相喚りて、四下を靡かす大刀風に、暗さは鳥らし、城兵等

こゝろを得て、其隊の雄兵二十名と、倶に那艦に棄措れたる、敵の笠識と戰幟を、手々に拿りつゝ身に著て、岸に登りつ那殘兵の、後を跟つゝゆく程に、旣にして黄昏たり。且朝寧の殘兵們は、去向を急げば見かへる者なく、我衆々にうち交る、敵ありとしも知ざりけり。却說件の殘兵們は、倶に五十子の城に來つ、正門の橋に立集合て、聲高やかに喚るやう、什麽御内人達にもの稟さん。是は安房の水戰敗れて、辛して脫れ來つる、副將軍（朝寧をいふ）の御隊の兵なる、某甲某乙等で候也。火急の注進候ぞ、蚤く御城門を開きてよ。と異口同音に呼門へば、這里を守る城兵們は、うち驚きつゝ、狹牕より、其每の形狀を差覘くに、御方の戰幟笠識を、身に帶ざる者もなく、且其名告る姓名も、皆是相識る同士なれば、黄昏なれども、毫も狐疑せず、這隊の頭人韮見利金太、士卒に下知して、正門なる、角門を開すれば、那殘兵們は、いふもさら也、音音も倶に内に入る。背に從ふ高宗豐俊、隊の二十個の雄兵も、推續きつゝ稠入りしを、曛昏なれば誰も他も、咎る者ぞなかりける。當下件の殘兵們は、老兵を前に立せて、跪づきたる其が中に、老兵等は面なげに、利金太にうち向ひて、いまだ聞給はずや、思ふにも似ぬ今日の敗戰、御方は反て衆艦を、敵に火攻せられしかば、誰か一人も免るべき。副將軍は、里見の防禦使、犬山道節に射て落されて、千尋の水底に淪み給ひぬ。然れば那隊の勇士等は、獎

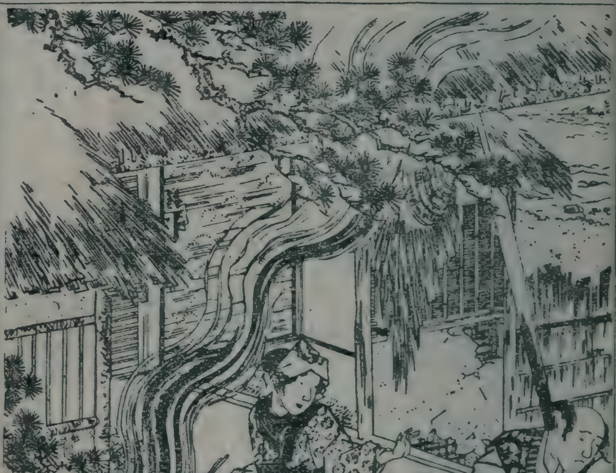
らず。然れども這儘にして、倶してゆかば、入ることを許さるべからず。艦には戰笠肱盾脛衣あり、那もて男裝させて、黄昏時にうち紛らせて、倶に大城に入るならば、看咎むる者なかるべし。といふを大家諾なひて、軈て音音に身甲させて、且戰笠を戴せつゝ、後より見つ、前より見つ、適雄々しき武者態なる哉。物足らざるは我們すら、大刀器械を敵に捕られて、腰空しきを爭何はせん。只笠識と戰幟を、照驗にして名告をせば、必城門を開れん、いそげ〱。と散動めきて、音音を後方に立せつゝ、五十子を投て走りけり。有恁し程に、犬阪毛野胤智は、洲崎の澳の水戰に、敵船多く火攻して、躬方全勝なりければ、猶五十子の城を拔て、妙眞曳手單節們を、拯ひ拿んと逸早く、其隊の頭人小森但一郎高宗、千代丸圖書介豐俊、浦安牛助友勝、木曾三介季元等と、三千の雄兵一百餘の快船を、順風に儘漕走らする、波上自由にて、疾こと宛月の兎の、流を逐ふに異ならねば、下晡になりし時候、大茂林浦に來にければ、船を水際へ就させて、と見れば磯松に維れたる、一箇の戰艦あり。原來那燹を発れたる、敵兵蚤く逃去りて、這里より城に還りにけん、と思ひつゝ佗と前面を見れば、那殘兵にぞあらんずらん、三四十個の仂武者毎、五十子の方へ集ひゆくあり。他們は必這艦より、出て城へ敗軍を、告んとて急ぐならん、と猜しつ高宗豐俊を、招き寄つゝ意衷を示して、計策を授くれば、高宗豐俊

は今日の水戰敗れて、敵の爲に生拘られしを、辛くして脱れ來れり。なれども皆此儘にて、五十子の大城へは還りがたかり、いかで這索を解きてよ。と憑めば音音は見かへりて、こは料らざる便宜を得たり、と思ふ心を色には出さず、艦の邊りへ立寄りて、左見右見つゝ含笑て、开は解ことは解べけれども、倘連累をせられぬる、祟もあらば爭何はせん。と濫るを大家聞あへず、否とよ、何等の祟あらん。今我們が這索を解くこそ、上に忠節なれば、異日賞祿を賜るべけれ。やよ疑はで解きねかし。やよとく〳〵。と急がせども、音音は胡意從はず、異日の賞祿を何にせん。然らば奴家も情願あり、獨女を五十子の、大城の奧へ炊妾に、まゐらせてあるなれば、他が上心許なし。奴家も倶してゆき給はゞ、今其索を解き侍らん。といふを老兵等うち听て、开は亦要ある事ながら、敗軍の我們が、老女を倶していなれんや。と推辭むを音音は冷笑ひて、しからば外を憑給ひね。奴家は退らん然らばよ。といひ捨て立去らまくするを、大家ヤヤ。と喚停て、开は短慮也、領て行ん、やよ疾せよ。と乞求れば、音音は猶も瞽せて、艦の纜拿延て、汀渚の松に結び留れば、殘兵等は動搖々々と、艦より出て立つ程に、音音は先兩三個の、索を手ばやく解捨れば、解れし老兵手傳ふて、甲を解けば乙も亦、解れつ解きつ、各各兩手自由になりにけり。登時又老兵等がいふやう、約束なれば這媼を、伴なはずはあるべか

主人の妻に、脚半草履借受て、脚に引掛て立出れば、海苔七も女房も、蚤く來ませよ、喃嫗御。と喚ぶ兩聲を聞捨て、歩をはやめて出にけり。恁而音音は單身、殘る夕陽に片光明なる、澳を眺めつ安からぬ、肚の裏に思ふやう、約莫今日の水戰は、犬阪主の謀りし如く、寄隊は反て火攻せられて、鏖にこそ做りにけめ。然れども、敵の總大將定正主は、倘免れて城に還らば、怒に乘して、三個の保質、妙眞刀自と、曳手單節は殺されん。我身今幸に再生たる甲斐ありて、那里に潛入ことを得て、いかで三個を拯拿る、便直欲得、と胸にのみ、思へども尙思難て、計の出る所を知らず。いかにせまし、とばかりに、立も得去らで在りける程に、洲崎の方より流れ來る、寄隊の殘船一艘ありけり、是則別艦ならず、曩に寄隊の副將なる、上杉朝寧の隊の從兵也。他們は州崎の鬪戰敗れて、朝寧は犬山道節に射て落され、又那毎は、印東明相荒川清英等に擊捕られ、其他は皆降りしを、道節允さず、結杻らせて、命を助て推流させたる、其艦にてありければ、殘兵約莫三四十人あり。他們は今料らずも、五十子近き這浦に、艦の寄りしを歡べども、身は背手に結杻られて、皆重索を掛られたる、這容にして阿容々々と、城にいなんはさすがにて、艦より出も難たりしに、一個の老嫗の這水際に、立在けるを見出しぬる、兩三個の老兵が、最面なげに聲をかけて、やよ喃嫗御よ、汝は這頭の者なるべし。我們

の蔭に寓に似たり。咱等は這大茂林にて、浮屠家海苔七と喚なさるゝ、老網漁で侍るかし。是を一期の縁にして、這頭へ又來ますことあらば、必よ訪せ給へ、澁茶なりともまゐらせてん。と夫婦進に眞實立て、飯を煮復しなどしつゝ、饌を薦る東道態に、音音は歡大方ならず、懐にしたりける、長財嚢を解撈りて、貯稼の方金、一片を取り出して、こは聊に侍れども、命拾し歡なる、折乾とも見給ひね。といひつゝ傍に措れたる、敗方盆にうち載て、卒とばかりに取らすれば、主人夫婦はうち含笑て、こは思ひがけもなき、恁ばかりの宿したればとて、是賜りて何にせん。と推辭むを音音は云云と、薦めて敢饒さねば、海苔七はやうやくに、歡受てうち戴く、金子を女房に遞與しけり。左右する程に、下晡に做りしかば、海苔七は音音にいふやう、媼御は浦河へ還り給ふとも、又上總へゆき給ふとも、今日の事には成りがたかり、今宵は這里に明し給ひね。おん身昔年は蜑戸なればこそ、一里有餘の暴波路を、泅ざても溺れざりければ、腹病患べき潮毒なけん、宿するとてもけしうはあらず。といへば亦女房も、倶に留る懇態に、音音はいよ〳〵感謝に堪ず、そは忝く侍るかし。尚暮には程も侍らん、奴家と倶に入水せし、傭舵工はいかに做りけん、其亡骸の這濱邊に、流寓ことなからずや。奴家は恁幸ひに、身は溫り地炕火にて、滯さへ衣の乾きしかば、其頭へ出て見て來てん。といひ喘めつゝ

媼御は那里の人ぞ。と問へば答て、然なりとばかりに、應難つゝやうやくにいふやう、奴家は浦河なる、漁夫の母にて侍り。今日は安房の州崎の澳にて、水戰あるを得しらで上總へ急要ある故に、未明に船を出させて、傭舵工して漕せしに、猛可に風波吹暴れて、流さるゝこと幾里なりけん、這頭の浦に寄まくせし時、哀しや船は巖に碎けて、舵工さへ我身は暴波の、底ともわかず陷入りしに、我身は素是女良の蜑戸にて、少かりし時は、千仞の海の底に屆りて、貝採技を、生活にせし甲斐に、沈む兀自溺れもせず、命を涯りに暴波を、凌て泅ぐこと幾町なりけん、稍這浦に泅ぎ著て、磯に登と思ひしのみ、那が儘息は絕にけん、其後の事を知ざりき。と虛談實言うち交て、告るをうち听く主人夫婦は、然もこそあらめ、と共侶に、うち頷くのみ疑はず、言語齊一答るやう、現少かりし時蜑戸ならずは、其船破れ身は入水して、暴き今日の風波を、凌て泅ぐ事を得て、毫も潮水を吞ざればこそ、甦生りて恙もなけれ。嚮に媼御は那隨に、這頭で命終なば、地方の厄會なるべきに、恁ばかり芽出たき事はなし。今日は扇谷の管領樣の、安房の里見を攻伐給ふ、水戰ある故に、這頭の船さへ咸徵れしかば、漁獵技の便著なく、皆屛居て在ぬはなし。然るを嚮に憶りなく、那里に媼御の仆れしを、見出したればうちも措れず。近隣人們の手を借りて、我屋に軃て舁もて容れて、看病しも是一河の流を汲み、一樹


女房


大茂林濱
海苔七
音音を救ふ
おとね

に没て、且風波に揉しかば、身は冷、手脚疲勞果て、我にもあらず倣りにけん、岩に携りつ身を起して、ゆくこと僅に兩三歩、憶ず撲地と轉輾びて、开が儘息は絕にけり。浩る處に、這浦邊なる、漁戸們が、今日しも那水戰の勝敗を、心許なく思ふにやあらん、兩三人立出て、澳の方を眺亘して、立在むこと半晌許、憶ずも、磯松の邊りに、音音が臥たるを、見出しつゝ、訝りて、皆立よりて又よく見るに、六十有餘の老婦にて、全身潮水に濡たれば、原來破船の浮死骸の、今朝の這暴波に、打揚られたる者なる歟とて、推流さんとて左右より、その手を拿りて曳起すに、動脈猶あるに似て、身も亦溫也ければ、原來いまだ死絕ざりけり、疾喚活よ。と聲を合して、喚はりつ胸を揣て、介抱に術を盡す程に、音音は才に息出て、眼を睜り手を動かせども、いまだものいふことを得ざれば、漁戸們はうちも閣れず、且憐且勦りて、軈て苫屋に吊もてゆきて、地炕の邊りに臥しめて、隣人們は復こそ來めとて、己が宿所へ還りけり。恁而家主の女房が、屢柴を折燒きつゝ、那身を溫ること、兩三時剋、且貯藏の淸心丹を薦る程に、音音はやうやく我に復りて、愕然として醒たる如く、身を起しつゝ膝折布きて、主人夫婦に向ひていふやう、料らざりける御好意にて、一旦死したる我身ならんに、今再生の歡びあり、こよなき御恩で侍るかし。と謝すれば主人は女房と、共侶に含笑て、原來本腹めされし歟。抑〱

馬幾疋を、奪拿せたるにより、兇民們起り立て、御難義に及せ給へり。若那暴徼りせば、道節が追擊まつらまく欲するとも、時後れて及ぶべからず。然らば臣等が援兵もて、敵の伏兵小湊們を、擊破り、追走らせて、必や辱に、逢せまつるべからざりしに、今は千萬いふとも益なし、卒河鯉の城に倶しまつらん、この議に儘せ給はずや。と言丁寧に諫れば、定正はいよ〳〵ます〳〵、恥て亟には答も得せず、姑且していふやう、曩には我、思ひ惑ふて、汝の親道灌を、久しく遠離たるのみならず、汝の諫を听ずして、この大敗に及びしに、青松の操、終始易らず、今日の忠戰再度の送迎、現我家の范蠡なる哉。今より志を更めて、賢に親み佞を退けて、會稽の恥を雪めまく欲す、左にも右にも從ざらんや。河鯉へこそゆくべけれ。といふに助友歡び承て、軈て定正を請立せつゝ、其馬をしも船に乘せて、隊兵と倶に前岸へ渡して、又定正を馬に乘て、那身も倶に一疋の、遺れる馬にうち跨つゝ、且隊の兵を相從せて、通衍路次をいそぎけり。休題再說。この日十二月八日の曉天に、烈婦音音は料らずも、那大茂林の澳邊にて、仁田山晉六武佐の、柴薪船を燔擊せし時、那身は蚤く大洋に、跳入りつゝ、燬を免れて、浮つ沈つ泅ぐ程に、音音は武藏の川畔にて、成長たる甲斐ありて、水戲自得の老婦にあなれば、約莫一里有餘なる、波瀾を凌ぎつ辛くして、大茂林濱に就しかど、大寒の日に潮に

には今宵の好意を、感謝に堪ずといはまくを、宜く心得給ひてよ。といへば定正も見かへりて、詞短く勞ふを、葉四郎は、唯々とばかりに、言承しつゝ退きて、隊の兵を領て河崎なる、馬頭上を投て還りゆく。手火の光りの見えずなるまで、助友遙に目送りて、卒といひつゝ兩刀を、軈て主君にまゐらすれば、定正は面なげに、拿りつゝやをら腰に帶て、やよ薪六郎、折よく來ぬる汝の船もて、蚤く前岸へうち渡しね。五十子の城に歸りて、意衷を罄さん、やよとく〳〵。といそがせば、助友答て、否、五十子の御城は、敵既に攻捕りて、入替り候ひけめ。聞くに那八犬士等は、一個も兵法未練の者なし。就中犬阪毛野は、智術に長たりとぞいふなる。料るに、嚮に犬山道節は、君を赶奉り、毛野は徑に衆艦を、柴浦に漕よせて、五十子を略り候ひけん。しからんには、御留守に侍るなる、箕田馭蘭二なンどが、いかにしてよく他を防ぎ得ん。水路に自家の敗軍を耳怯して、逃去たるにぞ候はん。臣等が隊兵今も猶、一千も候はゞ、後攻をすべけれども、先に犬山道節の、多勢の兵を防ぎ戰ひし時、士卒を多く撃せしかば、思ふのみにて其甲斐なし。且河鯉の城に造らせ給へ。恁而敵の進退と、那里の安危を問定めて、徐に五十子へ還らせ給はゞ、殊なる御失なかるべし。嚮に臣等は、悄地に遠見の士卒を遣して、君の脱れ來給ふべき道路を、覘せしによりて夙く知りぬ。初河崎にて憲儀等が、那牛馬買賣なる

る絶に語言、は しれら去て將に敵は身那、てりつませ剪を髻て容阿、で はの思を節苦、ふいと

といふ、苦節を思はで、阿容て髻を剪せまつりて、那身は敵に將て去られしは、言語に絶たる僻事なるを、今論ずるとも亦益なし。他は左もあれ右もあれ、恙もまさで拜見は、有がたきまで本意に稱ふて、歡しく候なれ。と答て傍なる敵兵の、蕉火の、光に就て、名告をしつゝ、鯱內葉四郎們に、事の歡びを舒しかば、葉四郎は、一個の雜兵に持せたる、定正の兩刀を、助友に遞與していふやう、いまだ聞知り給はずや。寡君義成は仁義を宗とす。こゝをもて、八犬士の每はさら也、物數ならぬ我隊長、小湊目堅宗等に至るまで、皆軍令に從ふて、殺伐をもて功とせず。この故に虜にすべき、敵の總大將を、送りてこゝに至れる也。この他は亮査し給ひね。といへば助友羞たる色あり、少選して答るやう、いはるゝ處然もあるべし。里見殿君臣の、賢にして仁心なるに、及ぶべくもあらねども、藏藩にも人なきにあらず。譬ば我父道灌の如きは、當家の大夫でありながら、今番の敗れを豫より、知りつゝ糟屋に屏居して、諫難しを甚麼ぞや、と論ずる者もありぬべし。遮莫世の常言にいはずや、良月明ならまく欲すれば、浮雲是を掩ひ、蕙蘭繁らまく欲すれば、秋風是を破れり。況や船中流に横りて、渡すに由もなき者をや。縱犯し諫るとも、大厦の將に傾んとするときに、一木のよく拄べきにあらず。和殿安房へかへり去らば、異日いかで我與に、犬阪犬山諸犬士に、この義を言傳給ひねかし。又小湊生

内葉四郎と隊の兵は、うち圍みてぞ羅列れたる。當下定正は、又助友にうち向ひて、やよ薪六郎、今さら告るは面伏なれども、我那里見の伏兵なる、小湊口堅宗とやらンが、數百の敵に捕稠られて、免るべくもあらざりしを、大石憲儀の意見によりて、頭髻を剪て堅宗に取せ、且憲儀は、我に代りて、敵に擒にせられしものから、那堅宗は、反て好意ある者にて、我に從者なきを憐て、亓が一隊の兵百名許をもて、我を送らせてこゝに造れり。曩には汝の諫めを听かで、我身單になるまでに、多く士卒を喪ひしを、百千番悔て及ず。汝は亦何によりて、我が這河原に來ぬるを知りて、那犬山道節の、多兵を防ぎて、身は恙なく、又逢ふことを得て我を迎る、忠誠感ずるにあまりあり。賞すべし〳〵。と只顧譽て已ざりしを、助友は嗟嘆に堪ず、愁然として答るやう、既にこの期に至りては、臣等が前言不幸にして、當りしを又いふべからず。臣等が今宵この地に在りて、赶來ぬる敵を防ぎしは、別に仔細も候はず。今日の順風の巽なれば、柴浦へは斜也、君退せ給ふ時、必や河崎へ、御船を寄させ給ふべけれ、と思慮りつ、一旦は、道節が雄兵を、防ぎ得て候へども、里見の軍師犬阪毛野も、豫この義を思ひけん、他先だちて伏兵を、這頭に在せたりければ、竟に臣等が援兵は、徒事に做りたりしを、今承る悔しさよ。然るを大石憲儀は、一騎にて從ひまつるとも、君辱めらるゝときは、臣死する

得させて、隊の雜兵に分捕の、馬を牽せつ主共侶に、追立々々、河崎なる、馬頭上を投て還りゆく程に、長き河原に風寒き、八日の月は沒果て、路闇ければ蕉火を、作らしつ、振照させて、連りに去向をいそぎけり。爾程に定正は、大石憲儀の意見に儘して、耻を忍びつ阿容々々と、頭髻を剪りて、敵に遞與しつ、辛く命を免れたれども、尙俘囚に異ならず、身に寸鐵だも帶ることなく、そが儘馬に乘せられて、敵の小頭人鯱內葉四郎が、一隊の士卒に送られて、津を索ねてゆく程に、葉四郎も亦隊の兵に、蕉火を作らせて、烏夜を照せる火光を見てや、下流より忽焉と、泝り來る快船あり、其船三四艘なるべし。一艘毎に擐甲たる武者、二三十名うち乘て、或は艣を推し竿を使ふ、波の上自由なりけん、先に找みし船の內より、忽地に聲をかけて、其里にゆかせ給ふ、騎馬の一人は、我君扇谷殿にをはしまさずや。恁いふは、巨田薪六郎助友にて候也。と名告るをうち聞く定正は、歡しさに耻を思はで、馬を駐めつ見かへりて、原來助友、恙なかりし歟。我は汝の援によりて、那犬山道節の、圍を辛く免れて、大石憲儀と僅に二騎、來ぬる路にて又敵ありき。と告るを聞つゝ助友は、軈て船より立出て、主の身邊に來ぬる程に、後れし船も皆漕著て、岸に寄りつゝ扣て在り。只助友と同船なる、士卒のみ相從ふて、主の後方に侍りしを、定正見つゝ面なげに、やをら馬より下立て、程よき石に尻を掛れば、鯱


定正


敗將頭髻を切て
みかたの首級に易

も、仁も不仁も敵にこそよらめ。他が自殺に嫌ひあらば、生拘りて牽もてゆかん。今さら辞思するとかは。といひつゝ蚤く身を起して、走り蒐らまく欲せしを、目は饒さず、呼禁めて、やよ卒爾すな、猨岡鮑内、この擧は軍師犬阪主の、先見あり、我其敎に依らまく欲す、慌るは要なき事にこそ。と諭して憲儀に答るやう、管領みづから頭髻を剪て、首級に代んとある情願は、我君仁慈の旨に稱へば、其義は枉て饒すべし。然ども正しき照驗なくては、我私に似て影護かり。故に和殿を將てゆかん。といふを憲儀うち聞て、开は歡しき事ながら、我身あらずば孰か又、寡君に俱して投かたに至らん。我身も髪皆剃拿られて、法師になるとも敎しからず。いかでこの義を饒してよ、いかでいかで。と諄返すを、目は听かず頭を掉て、否とよ、定正主は、我士卒をもて送らせん。鮑内は、定正主の、糠を舐りて糟に及ぼす、慾には涯りなき者也。恁ても異議せば目に物見せん。猨岡は這大石を、牽立ずや。といそがする、事の勢已べからさる、定正連りに嘆息しつゝ、やをら兜を脱棄て、引抜く匕首拿直しつゝ、頭髻を弗と剪棄て、遞與すを目は受拿て、隨卽鮑内葉四郎に、雜兵一百名を分ち授けて、もて定正の送とす。當下葉四郎は、定正の、佩し兩刀を、請つゝ拿て、身に著させず。又猨岡猿八は、憲儀の兩刀甲冑を剝脱拿て、腰索被て牽立れば、小湊目は葉四郎を、警めつこゝろ

剪て敵に遞與さば、上は先祖を辱め、下は兒孫に汚名を傳る、恥の上の恥ならずや。只潔く死するに不如。と澁れば憲儀聲を顰て、君忘れ給ひし歟。昔建武二年冬十一月、等持院尊氏將軍、鎌倉に在そかりし時、大塔宮の御事によりて、後醍醐天皇、逆鱗甚しく、義貞主を、討隊の總大將に做されて、官軍多く發向すと聞えしかば、等持院殿驚き怕れて、逆意なき證据にとて、みづから頭髻を剪給ひしを、錦小路殿(直義をいふ)幷に當家の御先祖(上杉憲顯をいふ)切に諫給ひしかば、只得思ひかへさせ給ひて、貌姑峯竹下にて官軍を、撃破り給ひしより、竟に御運を開かせ給ひて、傳へて今の柳營(義尙をいふ)に至らせ給ふに候はずや。然ば其頃那御頭髻の、短きを紛せんとて、近習外樣の武士までも、故意頭髻を短くして、咸其髷をせざりしを、一束剪と唱へたる、風俗今に改めず。恁る先蹤候に、非如今の難義の爲に、頭髻を剪せ給ふとも、御恥辱に似て恥辱にあらず。夫大功は細謹を顧ず、大禮は小讓を、辭せずといひし古語あるを、何どてや思召さゞりけん、只任用せ給ひね。と說諭しつゝ目に向ひて、請ふこと始に異ならねば、目は頭を皷けて、さまでに悲み請るゝを、聽かで稠腹を斫せなば、我君仁義を旨とし給ふ、軍令に悖るに似たり。といふを葉四郎猿八は、愀ず左右より挨み出て、倶に目を諫ていふやう、小湊主、物數ならぬ卑職等が、賢達て云云と、意見は烏滸がましく候へど

いかでかは然る事をせん。憲儀は我愛臣也、免れがたくば共侶に、左も右もなるべけれ。といはれて憲儀感謝に得堪ず、跪きつゝ遽しく、又貝目に向ひていふやう、喃小湊主、今の言を聞れしならん。願ふは佛眼佛意をもて、いかで見遁し給ひねかし。と陪話るを目は冷笑ひて、开は又武士に似げなからずや。抑這回の闘戰は、寡君義成の本意にあらず、管領非義の大兵をもて、安房下總を水陸より、攻伐るゝ事急なれば、身の危きを防ん爲に、軍師胤智と、防禦使忠與禮儀等をもて、水路の勝負を試しに、天道は順を祐けて、不義の驕慢を罪する所以にや、小兵をもて大敵に、克ことを得てこゝに至れり。然るを義成戰ひ負なば、馬前に命を乞ふとても、管領饒給はんや。人をも身をも思はぬまでに、阿容たる言を孰か听くべき。遮莫義成は仁君也、安房へ倶しまゐらするとも、御命に及ぶべくもあらず。疾々立せ給ひね。と讉促して饒さねば、定正竟に脱るゝ路なく、敵に一霎時の暇を請ふて、腹を斫らんと坐を占るを、憲儀急に推禁めて、又呼きつゝ頷せて、又復目に向ひていふやう、既に和殿の稱する如く、安房侯(義成をいふ)實に仁君ならば、人を殺して、己を利するを、豈歡び給はんや。こゝをもて、寡君みづから頭髻を剪て、首級に代んと宣へり。この義を承容給ひねかし。と口說を定正喚禁めて、やよ憲儀、又よく思へば、我管領の大職に在りながら、然しも命の惜かりとて、頭髻を

這頭にも船はなきや、喚べども呼べども應をせざれば、憲儀いよ〳〵焦燥て、やをれ艄兒等那里に在る。目今上の還らせ給ひぬ、疾々船を寄せずや。と連りに喚る聲と共に、背に响く數箇の鉄砲、憶ず耳を串れて、吐嗟と叫ぶ定正憲儀、馬さへ怯て跳り狂ふを、主從急に騎馭めて、倶に見かへる程しもあらせず、推捕籠たる一隊の敵兵、四下に响く聲高やかに、定正逃るとも路はなし。軍師犬阪の軍配に從ふて、是この一隊の頭人たる、小湊目堅宗、從軍の小頭人、鮑内葉四郎、猨岡猿八こゝに在り。自殺して首を遞與すや、然らずは人馬共侶に、縢げて安房へ牽もてゆかん、甚麽ぞや。と罵責る、三方間なき空銃の、音さへ劇しかりければ、定正憲儀いよ〳〵慌て、堪ずや揑と韮下る、馬を幵が儘盾にしつ、憲儀聲を戰して、やよや等ね、追隊の頭人。我は大石憲儀也。寡君みづから宣ふ義あり、一霎時々々々。と請制めて、却定正にうち向ひて、詞急迫しく叫く程に、小湊目は、隊の兵を、推制め從へて、我み出つゝ左見右見て、佗と憲儀にうち向ひて、和殿等主從この期に及びて、又何事をいはまくするや。と問へば憲儀、然ばとよ、古よりして常言に、窮鳥懐に入るときは、獵夫も捉らずといへり。思ふに違ひし今日の敗軍、兩三番の虎口を脱れて、和殿の獲にせられなば、恥又是より甚しきはなし。我今こゝに自殺して、首を和殿に捕すべし。いかで寡君を饒しねかし。といふを定正推禁めて、

たる、敵の援兵出も來ば、後悔其里に達がたからん。鄙語に云、三歳になる子に、淺瀬を敎らるゝとは、我上にこそありけれ。といひつゝ呵々とうち笑へば、明相淸英歡びて、弱冠なる我們が、愚意を稟し試しに、海容あるは公私の幸也、還らせ給へ。といそがせば、道節答て、然ばとよ、我憶ふに、妙眞音音、曳手單節は、保質に捕入れられて、五十子の城に在るなるべし。然るを定正城に還らば、他等は必殺されん。且河崎まで退きて、蚤く間諜兒をもて、那里の虛實を覘ふて、翌の早天に推寄て、徑に城を攻落して、四個の女子を救ひ拿るべし。此義を心得給ひね。といふに明相淸英は、再議に及ばず諾なひつゝ、俱に士卒を從へて、仄に見ゆる八日の月の、影を燭に河崎邊なる、故の馬頭上に退く程に、馬淵場九郎の殘黨を首にて、那這の俠客野武士の毎、里見の德を慕ふ者、招ざるに走集ひて、皆道節の隊に附しかば、一夜の間に道節の、軍威いよ〳〵壯にて、從兵新舊うち合せて、三千餘人に做りにけり。案下某生再說、扇谷定正は、犬山道節に追迫られて、既に必死の窮難做りしを、曩には憎しと思ひたる、巨田薪六郎助友が、這敗軍を量得て、其去向さへ覘ひ知りけん、折よく彼隊に拯れて、細魚の網を漏たる像く、兩敵の勝負を見もかへらず、身は只大石憲儀と、僅に二騎、いかで前岸へ渡さんとて、矢口を投ていそぐ程に、既にして日は暮たり。幽けき月を心當に、件の津に來にけるに、

騎のみ、いまだ矢口を渡り果べくもあらず。我馬疲勞れて斃れたれども、其頭に敵の乘棄たる馬あらむ、索ねて蚤く牽もて來よ。とく〳〵せずや。と焦燥叫ぶを、明相清英左右より、急に推禁めて、且諫るやう、犬山大人听給へ、弱冠なる我們が、詞齊く賢達て、意見を舒るは烏滸がましくて、釋迦に說經、孔子に語道の、諺に似て候へども、既に舘の御軍令に、逃敵は追棄よとある、御條目を忘れ給ひし歟。定正主は大人の爲に、舊君先考の仇也とも、既にこの春高畷にて、那人の頭鎧を射て落して、怨を復し給ひしに候はずや。然るを又今日は其子朝寧を、遠箭に被て射給ひしは、事十二分の首尾なるに、飽ずや敵地に深入して、夜を犯しつゝ還ることを、忘れ給ふは甚麽ぞや。言憚に候へども、只是千慮の一失歟、三省再思あらまく欲し。と詞齊しく論ずるを、道節听つゝ含笑て、現いはれたり、其理あり。實に今日の鬪戰は、是兩舘の奉爲にて、我私の所以ならねども、定正は敵の魁首也、今根を斷て葉を枯らさずば、後に又患を做さん。然ば舘の御軍令は、仁義を旨とし給へども、一方に將たる者は、詔勅だも用ひざる所あり。こゝをもて、曩に御軍令を出されし時、我又舘に請まつりて、恁々と議し稟したり。然るを仁の一字に泥みて、那宋襄の故轍を踏まば、世の胡盧にならんのみ。しかれども和殿等の、意見も亦金玉也。今夜を犯して敵地に入りて、人馬の疲勞を思ずは、又助友に相似

この折を得て舊君先父の、怨を復し果さん、と思ふ勢烈火の如く、馬を縦横に馳融して、敵を斫ること數を知らず。又明相清英も、千變萬化の術を盡して、堅を摧き鋭を劈く、其隊の雄兵一人として、那進退に由らぬもなきに、敵の隊兵に三倍せる、多勢の僞に殺頽されて、助友が頼切たる、生入秋狐等はさら也、士卒多く撃捕られて、助友も舒の外に、淺痍二箇所負ひしかば、是まで也とや思ひけん、百には足らずなりにたる、殘兵を引團めて、且戰ひ、且退くこと二町許、水際に繁き枯葦を、推分けつ踏開きて、裏面に入るよと見る程に、道節透さず赶蒐來ぬる、其馬疲勞れ跌きて、撻と平張俯しゝかど、主は慌ず騎たる儘に、蚤く腰鞒を解捨て、傍に下立つ程しもあらず、明相清英隊の兵們も、推續きつゝ赶逼り來て、只這一舉に助友を、手捕にせんとて競ふ甲斐なく、那敵豫准備あり。這頭の枯葦の那方には、隱し措きたる快船三四艘あり。闘戰既に難義に及びて、助友は殘兵等と、共に其船にうち乘りて、手手に漕ひらき水渚を離れて、前面の岸に退くを、道節明相清英等は、夜視にも夙く透し覷て、他よく。と叫ぶのみ、赶まくするに船なければ、矢口の津へ泝る、敵の往方を目送りたる、丌が中に道節は、憶ずも太息吻て、舊の河原へ退きて、士卒を奬す聲高やかに、やをれ兵毎、助友奴は、豫より、活路造りて、逃亡たれども、那奴は我志す敵にあらず。憶ふに定正は、主從僅に二三

第九輯　卷之四十六

第百七十七回

一顆の智玉途に一騎の驕將を懲す
四個の保質反て兩個の保質を捉る
建柴道場毛野守如の墓に謁す
湯島の茂林に道節三隊敵を破る（此題目は附錄目によりて補ふ）

却說、犬山道節忠與は、印東小六明相、荒川太郎一郎清英等と共侶に、千三百餘の隊兵をもて、寄隊水路の總大將、扇谷定正の、逃るを遠く追蒐來つ、河崎矢口の間河原にて、赶逼り又擊破りて、既に擒にすべかりしに、扇谷の忠臣也ける、巨田薪六郎助友が、僅に五百の兵を將て、逆安危を計りたる、路の去向の埋伏差はず、見れ出つゝ道節們を、遮り禁めて防戰ふ、其鋒尖凡庸ならず。兵法七書は父道灌の、教に仗りて奧義を極めし、進退よく其度に稱ふて、寡をもて衆に敵するに足る。武勇も亦義秀親衡に、伯仲すべき本事あり。且相從ふ隊長に、最中隼人、生入永六、秋瓠小紋次なンど、喚做たる手煆煉每、主を資けて相戰ふ、大刀風烈しかりければ、左右なく擊も破られず。遮莫追隊の頭人は、則是犬士の一人、名高る犬山忠與が、

局大團圓まで、編果さまく思ひし故也。爾るに作者病眼の障りありて、一稔後れしかば、今改正して二十八年とす。只是のみならず、一回を釐て上下、或は上中下、と二回三回に做しぬるよしは、上にいへる如し。釐ずして、一巻一回なるも、こゝに附錄目を見せしは、看官の爲に、栞に做さんとて也。其餘の附錄目も、其巻の端に出す者は、第百八十回の上、一姫一僧云々の一回と、第百八十勝回の中編と、下編云々の二回と是のみ。其餘は只回を釐て、二回三回に做すのみにて、附錄目を出さず、先案後案同じからねど、首の六回を幹にして、附錄目は枝葉なれば也。此彼都合せざるもあるを、看官訝り思はんかとて、事の所以を識者爾也。

八犬傳第九輯卷之四十六簡端附言

本編の題目は、先板卷の四十五までの、總目錄の下に、夙く附出せしは、いかで看官に、結局までの趣を、知らせまく欲しし僻所爲にて、彼六回は、當日腹稿の大槩を擧たるのみ。其後本編を編るに及びて、豫思ひしより、長くならざることを得ず。然ども一卷毎に定數ありて、作者の自由に做しがたければ、已ことを得ず、一回を釐て、或は上下、或は上中下と、二回三回に分ちて、其數に合せたり。抑一回を釐て、二回三回に做すことは、唐山の稗史小說にこの例なし。只源氏物語に、若菜の上下ありといへども、本傳は源語に倣はず、專唐山の稗史に憑る兀自、文溪堂の性急にて、半冊稿じ畢れば、隨て奪ひ去りて、淨書劂人の手に遞與す故に、後に至りて、不都合なきことを得ず。先刊刻なる所の五卷を、發販せんとて、いそがるれば、這簡端の餘紙にしも、事情を略記して、もて其責を塞ぐ而已。

天保十二年辛丑秋長月之吉　　蓑笠漁隱

先板九輯、卷の四十一の簡端に附載し、回外剩筆の題目に、二十七年とあるは、去年の冬結

承りぬ。と應も果ず、入亂れてぞ戰ひける。正に是老龍虎魁、雌雄を爭ふ、豈凡庸の鬪戰ならんや、一場の大殺思ふべし。然ば足曳の山も、是が爲に鳴動して、群獸走り、勇魚取る海も、是が爲に風噪ぎて、鮮介も沈みやせん。この段は尙長やかにて、五卷にしていまだ足らず、腹稿あまりあるをもて、又三卷を增て局を結ばん。江湖上の諸看官、這兩雄の勝負を知まく欲くば、又卷を更めて、且下の回に、解分るを聽ねかし。

あらざれば、暮初る路の昬きを勦ずして、明相清英と俱に、馬を憩へもあへず、鞭を鳴らし隊兵を驅て、那里までもと赶ふたりける。爾程に扇谷定正は、大石憲儀と俱に主從二騎、僅に從ふ近習三名を、左右に立せつ、津を索ねて手束弓、矢口を投てゆく程に、赶蒐來ぬる荒川淸英、印東明相二騎の頭人、隊兵を找めて蹬焉と、人馬の脚响近づきて、免るべくもあらざれば、定正に相從ふ、三個の近習等已ことを得ず、引返し相逆へて、防ぎ戰ふ歟と見る程に、怯れたりけん、然はあらで、這頭に隈ある竹藪に、潛り入つゝ逃亡けり。明相淸英是を見て、定正今は沒脚蟹也。手捕にせん、と馬を並べて、速に競ふ那時遲し、這時速し、那聚竹の藪屏を、內より托地と推倒して、顯れ出る、援助の隊長、後より續く雄兵四五百、蚤く隊を建固めて、銕砲隙なく發出す、銃响烈しかりければ、明相淸英士卒を制めて、敢叨に戰はず。當下件の隊長は、今竹藪に逃入し、定正の近習三名を、逃しも遣らず擊捕りけん、鎗の尖頭に串きし、其首級を振棄て、敵に向ひて喚るやう、追隊の壯佼等慌りなせそ。我は父道灌の密意に因て、隊の兵を將て這地方に、來つゝ我君を俟得たる、巨田新六郎助友也。と名告も果ぬその折に、道節馬を走らせ來つ、原來助友ごさんなれ。那奴は荒芽山の宿怨あり。先那奴より擊捕ずば、竟に定正を漏しやせん。印東荒川、躊躇ふことかは、兵每蒐れ。と焦燥ば、明相淸英血氣の衆兵、


河崎河原に道節大に助友と戰ふ
道節


とけとも

る者甲乙倶に三騎なる、左に荒川太郎一郎清英あり、右に印東小六明相あり。隊の兵一千五六百名一隊に做して前後を亂さず、魚鱗鶴翼に相備て、群たる虎の谷を下りて、羊を逐へる威勢振然、四下に响く武者聲尖鋭く、蓬し定正、背な見せそ。往る正月高畷にて、儞が頭甲を射て落して、舊君の讐を復すものから、いまだ首級を捕ずして、盡すに足らねば飽りとせざりし、煉馬の舊臣武藏の豪傑、今は里見の防禦使なる、犬山道節金碗忠與なるぞ。忘れはせじ返せ返せ。と喚れば、驚き怕るゝ定正はさら也、憲儀廣原達賴后綱、數世も倶に吐嗟とばかり、胸を潰せる再度の勁敵、免るべくもあらざれば、殘兵四百五六十名を、拔めて路を斷窒ぎて、敵を河原へ出さじとて、一霎時は防ぎ戰へども、印東明相荒川清英眞先に馬を馳入れて、鎗もて敵を刺仆す、武勇に傚ふ其隊の雄兵、咄と噇て三七二十一に、駈敗り又擊亂せば、然らでも儀たる士卒們は、この勁敵に殺頽されて、或は痍を負ひ命を殞し、殘るは夙く逃亡て、隊斑になりしかば、數世は印東小六に擊れ、又白峯廣原と信城達賴は道節清英に擊れけり。牙が中に獨箕田后綱は數箇所の痛痍を負ながら、只定正を一歩も、遠く落さんと思ひしかば、近習の壯佼兩三人と、倶に踏止り血戰して、竟に一騎も免るゝ者なく、亂軍の中に皆戰死して、人に臣たる義を失はず、敵ながらもこの人ありとて、道節は是を譽にけり。然ばとて定正を、漏すべきに

綱と鎗を交へて一上一下と挑戰ふ、修煉拙きにあらねども、其器械竹槍なれば竟に尖頭を打折られて、怯むを后綱ャと聲かけて、胸前冐煞と刺しゝかば、得堪ず地上に撞と墜ち、馬は離れて横路のかたへ、走れば人も逃迷ひて、撃るゝ者ぞ多かりける。然ば數世が援によりて、然しも剛かる多勢の逆徒は、或は撃れ或は又往方は知ず逃亡て、路の障㝵の開けしかば、大家歡ぶそが中に、定正は今料らずも彥別夜叉吾が忠戰を、いと訝しく思ひしかば、則大石憲儀をもて、騎馬の邊に召よせて、みづから來意を聞まくするに、彥別數世はおそる〳〵憲儀に向ひて稟すやう、臣等はいぬる夜里見の防禦使、犬田小文吾悌順に、妙見島の柵を攻破られて、憶ず敗軍に及びしかば、只得殘兵百五六十名を從へて、船に乘りつゝ虎口を脫れて、再戰せまく思ふにも似ず、其船海へ推流されて、一日二日と漂ひつゝ、今日しも河崎の浦に船の寄りし時、那地の逆徒多く聚合て、舘を追蒐まつらんとて、既に打出にきといふ、風聲はやく聞えしかば、うち驚きつゝ御迹を、慕ふてこゝに來にけるに、果して中途に御難義あり。因て一臂の力を勠せて、御伴の衆と共侶に、賊徒を夷げ候ひき。と實事虛談うちまぜて、今この僥幸の功を負みて說誇る、詞もいまだ果ざる折から、又この河原の横路より、赶蒐來ぬる勁敵あり、是則別人ならず、犬山道節忠與也。剛才この地の闘戰に、主を喪ひて走り來ぬる、馬を捕駐てうち乘

引提て、馬盗兒を逃すな。と異口同音に喚りて、驀地に近づくを、后綱佗と見かへりて、原來那牛馬經紀們が、馬を召れしを怨みまつりて、上を怕れぬ無法の狼藉、天罰思ひ知せんず。と罵ながら乘たる馬の、鑣づらを旋らして、來ぬるを遲し、と俟つ程もなく、現戰世の習俗にて、市人も皆武を好めば、場九郎們は物ともせず、蒐れ〳〵。と器械を振閃めかして攻戰ふ。この時后綱に從ふて、敵を拄る士卒一百餘名、尙寡きにあらねども、鬻に水戰に火攻せられて、辛く命を免れしより、纔戰飯だもあることなければ、饑て鬪戰如意ならず。恁る烏合の小敵に殺頽されて立脚もなく、后綱危く見えしかば、定正も亦已ことを得ず、憲儀廣原達賴等と、從ふ殘兵二百を拯めて、后綱を援んとて馬を返してうち向ふ。浩處に一隊の軍兵敵の背に出來るあり、其勢僅に百五六十名皆步行立なるそが中に、隊の頭人とおぼしき猛者、鎗挾みて聲高やかに、やをれ尶尬兒每無禮なせそ。管領家の四家老第一、大石石見守憲重の隊長に、然る兵ありと知られたる、下總妙見島の柵の頭人なりける、彥別夜叉吾數世こゝに在り、頭を並べて刃を受よ。と名告喚り、威勢猛く、隊兵を蒐て攻破れば、箕田后綱この隊の兵も、思ひがけなき援兵に、誰か歡び勇ざらん。水母の骨にあふ心地して、怯む逆徒を前後より、息をも養ず攻しかば、馬淵の徒前後の敵に中りかねて、多く擊るゝ𢀖が中に、頭領馬淵場九郎は、箕田后

させ給ひし歟、と思ふに胸の安からねば、先士卒兩三名を陸に登せて、這頭の風聲を撈らするに、姑且して其兵等は、慌しくかへり來て、箇樣々々と告るを听くに、定正は、殘兵僅に三百餘名を將て、方僅この地へ脫れ來つ、馬市なる馬幾疋歟、豪奪させてうち乘て、矢口のかたへ赴きし事、又牛馬經紀們が芥を怨て、破落戶を三四百名、聚合て赶てゆきし事、聞知る隨に告しかば、數世は驚き且歡びて、隊の兵每に談ずるやう、我妙見島にては、犬田奴に擒にせられて、大刀戎衣も身に添ず、汝達と共侶に、這船に乘せられて、放流されたりしより、稍この浦に寓けるに、幸にして自家の焦船、同じ浦邊に流れ來て、器械あり、戎衣あり、各々と倶に是を穿て、この弓を彎き、この鎗をもて、舘に寇し奉る、歹人們を追擊て、鏖に做すならば、先途の恥を雪るに足るべく、本領安堵疑ひなし。とく〳〵せよ。といそがせば、大家倶に威勢憑て、急れ、御作仕らん。と答て手に〳〵焦艦なる、鎧を拿て投被々々、締る表帶上挿の、箭を駝ひ弓を拿るもあり、或は鎗を挾む、准備はやくも整へば、然らばいそげ。と先に立つ、數世に從ふ其隊の殘兵、河原傳ひに矢口を投て、飛が似くに追蒐けり。爾程に、扇谷定正は、箕田后綱が意見に因て、憲儀廣原達賴等と、殘兵三百許を將て、矢口を投ていそぐ程に、忽焉として赶來る敵あり、其兵約莫三四百名、皆沒戎衣にて、騎馬五六人あり、手々に器械を

を從へて、活路索て渡せられしと云、那爲體を見ずや聞ずや、鐚百までの損ならば、厄落しと
思ふて已もせめ、圓金の耳を揃ねば、賣買ならぬ活馬を、幾頭か奪略られて、和郎等明日より
何をもて、宅眷に糜々を喫するぞ。疾赶蒐て拿復さずや、遲魯さも事によるものを、腰脱毎奴。
と罵奬せば、是にぞ勇む牛馬經紀、里の壯佼破落戸、事を好むも、好ぬも、多勢を負む似而非
武者汰に、竹槍造作、腰刀、赤樫の棒、猪水竿、或は纏額縄襷、各手ばやく身を固る、場九
郎を首にて、拿殘されし馬牽よせて、うち跨る者五六名、大家競ふ幷が程に、武勇を好む破落
戸、這里那里より走加りて、三百餘名になりしかば、恁ては他と對應すべし。疾赶蒐よ。と脚を
亂して、咄と嘘て赶たりける。有恁る折から這津に、又一夥の落人あり、是則別人ならず、
曩に妙見島の柵破れて、犬田小文吾に擒にせられし、彦別夜叉吾數世也。彼は犬田が慈善にて、
其隊の兵一百五六十名と共侶に、虛舟に載られて、流し放されたりけるに、其船大洋に流れ漂
ふて、或は西、或は東して、兩三日を歷ぬる程に、今日しも辰巳の追風を得て、この河崎の浦
に漂著しけるに、定正の隊の戰艦、洲崎の澳にて、敵に火攻せられし、其一艦舳頭のみ焦て、
乘れる人は一個もあらで、脫棄たる甲冑と、器械のみいと多く、燔殘りたる氷幟さへあるを
見るに、扇谷家の戰艦なるを知るに足れり。原來今日那澳に鬪戰ありて、舘(定正をいふ)は負

田夫野人の侮りて、御下知に從ひまつらぬを、怒らせ給ふは鄙語にいふ、乞兒に棒擊に似たるべし。敵手に足らぬ者と知りつゝ、這里にて時を移し給はゞ、遠く追來ぬる敵もやあらん。然ば這河上なる、矢口まで造らせ給ひて、津を求め給ふとも、然ばかり路の遠きにあらず。この義を思ひ給はずや。と利害を舒て諫めしかば、憲儀は有理とばかり、答ていまだ決め得ず。定正是をうち聞て、后綱の意見、誠に然なり。然ば矢口に造らんとて、そが儘馬を步すれば、廣原憲儀は左右に從ひ、又達賴は先に立ち、后綱は殿して、從ふ殘兵恍惚なくも、馬を逐ひつゝいそぎけり。爾程に、剛才定正の士卒等に、慘く擊仆されたる、牛馬經紀五六名あり、倶に沙に塗れ頭髻を亂して、身を起しつゝ罵れば、伙家の伯樂里の壯佼、數十名走り集りて情由を聞くあり、生所なるも、倶に遺恨に堪ざれば、慰めはせで向火を、附るのみにて術もなき、开が中に、馬淵場九郎長連と喚做たる老御者あり、牛馬經紀們の乾父にて、毎に氣を使ひ事を好み、俠氣をもて自負む、破落戸なりければ、那理不盡なる扇谷の、士卒を憎むこと大かたならず。先撻れたる乾兒等を、叱窘めて、且いふやう、縱管領殿の、威勢をもてせらるゝとも、經紀兒の賣買東西を、奪ふて誰か承服せん。是等の暴は今日のみならず、上が上なれば、下までも、買係りに錢を還さず、民を虐げて身を肥したる、報ひは今日の敗軍、僅に二百歟三百の、殘兵

繋ぎてありしを、憲儀見かへり熟視て、兵毎那他を見よ。那馬多く那里に在り、捉て舘を乗せまつるべく、我們もうち乗て、五十子へ御伴せん。牽もて來よ。と吩咐れは、士卒們唯々と應も果ず、走りゆきつ　聲苛めしく、やをれ馬主毎、この馬守の御用也、牽もてゆくぞ。と喚りて絆兒を解きつ五六疋、奪拿んとしてければ、牛馬經紀等驚き慌て、こは理不盡に候はずや。縱守の御用也とも、こは皆人に賣りたる馬也。邪を價だも賜らで、召さるゝことや候。といはせも果ず、又辭劇しく、這奴等大胆不敬也。非如千金の馬にもせよ、舘の急に召さるゝに、獻らずば日に物見せん、覺期をせよ。と罵りて、握固めし拳の電光、右よりも左よりも、毆き仆し又踊躍りて、其好馬を五六疋、追立々々牽もて來ぬれば、憲儀は含笑て、麁惡なれども鞍鐙、孰も一具あれば、尤好、卒々といひつゝも、先一疋を牽よせさせて、軈て定正にうち乘らせて、却憲儀廣原、達頼后綱もうち乘て、俱して河崎河原に造りて、前岸へ渡さまく欲するに、艄公等は今の強虐を、遙に見つゝ害怕やしけん、船を夙くも漕退けて、前面の水際に繫ぎて在り、雖喚々々漕もてよせねば、定正連りに焦燥て、とく／＼喚べといそがせば、憲儀いよ／＼怒に得堪ず、士卒に下知して、艄公等を、遠箭に被て射て殺しね。と敦圉暴く罵るを、后綱急に禁めていふやう、我舘の御威德あるも、鬪戰敗れしこの爲體にて、御歸城をいそがせ給へば、

倉廩をうち開きて、鰥寡孤獨を賑しければ、民皆其德澤をうち仰ぎて、父母の思ひを做すのみならず、鎌倉及新井の郊外には、近屬豺狼多くありて、夜々人を害ひしに、禮儀が件の城に在りし日は、豺狼皆夜に紛れて、他所へ移らざるはなかりけり。豈只豺狼のみならんや、暴主奸相、佞人賊民の、好みて良善を殘害して、其宍を喫む者も、必や憚るべし。實に是孟子の所云、君仁なれば不仁なし、君義なれば不義あらず。里見殿父子、この年來、行ひ給ふ善政の枝舖なれば、然もあらんとて、心あるも心なきも、謳歌俚談にしたりける。話分兩頭。是より先に扇谷定正は、洲崎の澳の鬪戰に、犬阪毛野に火攻せられて、命も既に危ふかりしを、箕田源二兵衞后綱、白峰麻生介廣原等に扶掖れて、辛くして免れて、蚤く雛艘に乘移りて、武藏を投て漕去る程に、從ふ兵多からず。この時同船して左右に侍る者は、大石源左衞門尉憲儀、白峰麻生介廣原、箕田源二兵衞后綱、信城左傳遠頼、只是のみ。この餘は士卒三百餘名、初五萬五千なりける、大兵に比れば、什一にだも足らねども、順風よければ漕脱て、約三時許の程に、逃水蚤き武藏なる、河崎の浦に船果しかば、乘棄て陸に登るに、こゝより五十子の城へは、三四里に過ぎねども、水路を來ぬれば馬はなし。然しも總大將の御歸城に、御歩行にてはいかがあらん、と呟く者ありしに、この日河崎の鄕に馬市あり、牛馬經紀們多く集會て、馬幾疋か

は、誰か一個も留るべき。家火を船に運載て、宅眷を將て、水路より落亡たり、と聞えけり。有恁し程に三浦四十八郷なる、郷士豪氏、村長莊客等は、年來里見の仁政を、慕しく思ひしかば、各々戎衣して、新井の城に詣來つゝ、倶に大角の隊に屬て、當城を守らんと願ふ者、千をもて數ふべし。又只是のみにあらず、嚮に城を棄て逃亡たる、新井の城の士卒們と、甲良甕九郎さへかへり來て、箭を折り誓を做して、降を請ふ者城に充けり。こゝをもて大角は、招ずして得ぬる所、七千あまりの隊の兵あり。然ば鎌倉は、都會の地にて、且阪東の咽喉なり。倘長氏に据られなば、後々までの害ならんとて、隨卽堀内雜魚太郎貞住に、雄兵三千餘名を授けて、那地へ遣して鎭守とす。貞住則山内の館を陣營にして、民に蒞むに善政をもてせしかば、賊民の亂妨あることなし。こも大角の敎によりて也。恁而又犬村大角は、苫屋八郎景能に課て、この地の勝軍の顚末と、那身幷に逸時の奇功の趣を、洲崎の御陣へ注進して、生口義同義武を、舘へまゐらすべしとて、隊の兵三百名を授けて、注進狀一通を遞與しゝかば、景能則快船十艘に、從兵を分ち乘せて、義同親子を守護しつゝ、洲崎を投て漕せけり。爾程に犬村大角は、坐ながら三浦四十八郷を管領して、善政行はざる所なく、村長耆老に約するに、法度を寛くすれども敢叛く者なく、稅斂の多かりしを、寡く拿れども調ざる者あらず。こゝをもて

に乗て、共侶にとは思へども、婦幼は故らに、風濤の害怕あらん。この故に、御達は皆當城に留在せて、宜く扶持致すべし。この義は心易かりてん。且里見殿は仁君也、和君御父子那地に造り給はゞ、敵俘囚をもて見ることなく、禮貌必厚かるべし。恁而東西和睦ならば、御父子共に、當城に返されん事、日を僂へて俟つべきのみ、この義も心易かりてん。と詞徐に說諭せば、義武聞つゝ嗟嘆して、默然として羞る色あり。姑且して義同は、叉きたる手を解て、腕を拊つゝ答るやう、いはるゝ趣皆理あり。咱等親子は馬を馳、弓を射刀を舞するを、年來業としつるのみ、文學智術に淺ければ、心鈍くも謀られて、且盜に糧を齎し、仇に刃を借すまでに、禍竟に、蕭牆の内より起るを悟らず、城陷りて、親子楚囚になりぬ。首を捕れなば幸ならんに、豈遙々と安房へいなんや。願しからぬ情にこそ。と辭ふを大角慰めて、又逸時景能に、こゝろ得さしつ這親子を、別室に移して守せけり。恁而大角は、士卒を水陸へ遣して、洲崎の水戰の勝敗と、山内顯定の、鎌倉なる舘の光景を撈らするに、洲崎の鬪戰は、寄隊衆艦を皆火攻せられて、自家十二分の勝軍なりきと云。又鎌倉なる顯定の舘には、老黨齋藤左兵衛高實が、水戰の大敗と、新井の城さへ犬村殿に、攻落されしと聞知りて、驚怕ること大かたならず。軈て主君の宅眷に倶して、舘を棄蹟を埋めて、往方もしらずなりしかば、況や山内の家臣等

も、媚て憐を求る者は、四足を括られたる故也。况や義同義武は、倶に是武勇に富たり、膂力百人を合すべき、勁敵なるに甚麽ぞや、被たる索を饒し給ふは、只是千慮の一失敗。慈悲も作善も敵にこそよらめ、寔に危き所行なるべし。といふを大角聞あへず、否とよ、鼎を揚げ角を劈く、多力兇猛の敵といふとも、仁義によく勝ことなし。然ば我君至仁至義の、軍令に遵由りて、この親子の索を饒すは、敵ながらも城主たる、禮を失はじと思ふのみ。然るを他等不仁にして、暴をもて我を害さば、各手を空くして、他を殺さで、見てのみ已んや。然らば彼等が悪名を、永く世に貽さんのみ、權且洒家に任せ給へ。と諭しつゝ軈て義同と、義武の索を解棄て、且慰めていふやう、成敗は天也、時運の然らしむる所、誰か和君親子を勇なしとせん。しかれども、今我爲に虜にせられて、馬前の奴に傚れる者は、不仁をもて仁を伐つ、兩管領の悪を資けて、暴をなさまく欲せし故也。抑我君里見殿は、行ひ仁義にあらざることなし。こゝをもて我們まで、其仁心を仰ぎ稟て、犬阪犬山と共侶に、今番水隊の防禦使なれば、只大敵を防ぐのみ、多く敵を殺し、長く駈て、城を攻め地を略して、境を增すことを饒されず。然けれども、闘戰の常情にて、時氣と勢に乗るときは、敵の城地に馬を繋ぎて、我隊の兵の集合るを、憩はせざることを得ず。恁れば其間、和君御父子を水路より、蔽藩稲村へ送るべし。宅眷達をも船

奇功を譽て且いふやう、今𠠇て聞く和殿等は、先に御使に立ながら、京師へ得ゆかずなりにける、風濤の艱み漂泊の苦み、是を思ひ彼を懐へば、蜑崎は恙なきや、測知るべき事ならねども、今さら女々しく思ふて益なし。和殿等風波の災なく、共に京師へ參上らば、那御使は果すべけれど、今番の大事に遇ざれば、後に悔しかりつらんに、此敵城に抑留せられて、洒家と一功を同くしぬる、禍福は糾ふ纆に似たり。こも伏姬神の冥助なる歟、不測といふも餘りあり。因て思ふに、和殿等がこゝに在りし程、詭詐の姓名も、當意卽妙といひつべし。其故甚麽とならば、勇無頭九郎は田力の義也。勇は工に從ひ田に從ひ力に從ふ。頭の工なきときは、田力ならざることを得ず。及草占は苫屋の苫にて、この義は誰も悟り易かり。先義同と義武を、この處へ召よせ給へ。我對面して、いふよしあり、とく〳〵。といそがせば、逸時景能こゝろ得果て、倶に次の間へ退りけり。然ばこの時、三浦義同義武は、里見の士卒にうち守られて、次の間にありしかば、逸時景能の實名實事を、遺もなく洩聞しかば、肇て夢の覺たる如く、いとゞ悔しく思ひけり。恁而逸時景能は、義同義武を牽立來て、則正廳の簷廊へ、程よく楚と推居れば、大角見つゝ身を起して、先義同と義武を、受拿りつ、そが儘に、上坐に推登して、被たる索を解んとするを、貞住逸時景能等は、うち驚きつゝ掖止めて、詞齊一諫るやう、虎狼の猛かる

頭人にして、我兵貌に扱使ひぬ。といふを逸時受續ぎて、爾程に我們は、折を覘ひ脱れ去りて、安房へ還らまく思ふのみ、いまだ便宜を得ざりき。然ば昨夕犬村主、和君が赤嵒百中と、名告て當城に來給ひて、船を借給ひし時、夜目なりければよくも見ず、姓名も亦異なれば、心もつかでありけるに、當晩又義武が、みづから和君を追止んとて、隊の者多く從へて、出てゆきしをも患ひとせず、猶外事に思ひしに、義武の獍勇なるも、病後とはいひながら、果敢なく和君に生拘られて、今朝しも牽もて此城に、推よせ來給ふ折に及びて、那赤嵒百中は、卽里見の犬士なる、犬村某甲にてありけり、と越に肇て聞知りて、其歡びに堪ざれば、先疾城門を推開きて、迎入れまく思ひしかども、我腹心の隊の兵は、十一名に過ざるに、慌らば愆あるべし、と思難つゝありける程に、義同火急の拙策を、拈り出しつ城樓に登りて、みづから和君と問答して、油斷を覘ひ銕砲もて、打落さんと計りける、その折の幇助にとて、咱等二人を從へたれば、心よろこびて後方に居り。義同悄地に膝下に置きし、准備の銕砲の、火索を夙く拿棄しを、義同は知ずして、發まくするに、火索なければ、うち驚きつゝ度を失ひて、見かへる腕を左右より、扼り推伏せて、結梱りて牽建候ひき。と迭代の長談脩話に、貞住并に諸士老兵、事の便宜は恁までに、幸ありけるよ。と稱えたる、就中大角は、熟と听果て、逸時と景能の、

ふこそよけれ、と思ふこゝろを伴當等にも、得させて軈て立出て、却番卒にうち向ひて、則賴陳ずるやう、我們は三河なる、鄰尾判官伊近の家臣なる、勇無頭九郎、草占八郎と喚做す者にて、倶したるは伴當也。伊近這度兩管領家の、里見を攻伐給ふよしを傳へ聞て、いかで加勢の軍兵を、まゐらすべう思へども、素より城地褊小にて、士卒多からず候へば、辭し稟せよとある君命により、我們則使に立て、五十子の城に赴く水路にて、暴風に吹勾引れて、この浦に歇り候也、と實しやかに告しかば、番卒等は然もこそとて、軈て城へ將てゆきて、事恁恁と愬へけり。登時三浦義同は、左右に下知して我們兩個を、問注所なる局の內へ、召よせさせつ立出て、みづから其來由を問ふに、いふこと始に殊ならねば、敢又疑はず、脫たる板齒を顯して、呵々と笑ひて却いふやう、鄰尾が忠ある志は、現賞すべき事なれども、若們主僕十餘名、多寡の知れたる人數にて、五十子の城へ參るとも、然せる御用に立べくもあらず、我折をもて傳達せん。今當城に士卒多からねば、權且こゝに留措ん。武藝に本事あるならば、前後の門を守るべし、といはれて我們推辭に由なく、开は辱く候也。武藝は人並に候へども、何まれ仰付させ給へ、仕り候はん、といふに義同歡びて、次の日又我們兩個を、馬場に召よせて、弓箭銃術何くれとなく、武藝を盡させて試けるに、孰も正鵠を外さねば、則正門の小

にけん、本船ば風のまに〳〵、西へ走りて見えずなりぬ。然ばとて亦我們が、乘たる艇舫は覆りもせず、回く潮水に搖られ〳〵て、或は東に吹續され、或は西へ推流されて、大洋に漂ふこと、一日一夜に候ひき。といへば景能語を續て、恁而其次の日、船は人さへ恙なく、流寓りつゝ三河なる、苛子崎に就しかば、港口人等の帮助に因て、旅宿を求めて那地に在り。漂流の事の顚末、領主鄰尾殿に聞えしかば、隨郎別船をもて、安房へ返すべしとありしに、漂流艱苦の傷れにやあらん、逸時幷に伴當にも、病煩ふ者多かりければ、又其醫療に日を費して、十二月の初になりし時候、逸時も伴當等も、病著稍瘥りしかば、鄰尾殿に乞稟して、船を借得て還らまく欲する程に、猛可に巷の風聲あり。扇谷山内の兩管領、諸侯を連ねて、水陸より、安房上總へ推寄て、里見殿を攻伐まくすといふ、其言孟浪ならざれば、我們心うち驚れて、借たる船に皆うち乘つ、連りに水路をいそがすものから、幸なき上に又幸あらず、相摸灘を過る時、暴風又吹出て、船をやるべくもあらざれば、已ことを得ず帆をうち下して、新井の浦に歇りしかば、當城の番卒等訝りて、船を出しつ捕籠て、緊しく來歷を鞫問しけり。登時咱等と逸時は、悄地に示し合するやう、この地の城主三浦義同は、兩管領の親族なれば、他も亦我君の怨敵也。然るを今明々地に、里見の家臣也と名告らば、必那手に殺さるべし。箇樣々々にい

然也。曩に蜑崎生と共侶に、水路を京師に赴く程に、其船遠江灘を過る時、凶類や憑にけん。行も得やらず波濤に搖られて、既に反覆んと思ふこと、屢なれば誰もかも、更に活たる心地せず、皆死を極めて在りける程に、舵工等相占ひて、蜑崎と我們に告るやう、今この船の凶類は、其生年、壬癸なる人に在り。その本命の人々を、擇除て、蚤く雛舫にうち載て、流し棄給ひなば、自餘の人々は恙もあらで、この船又よく走るべし。いそがせ給へ。と惴立れば、大家驚き憂るのみ、默然たる那が中に、我們二人進み出て、蜑崎生に向ひていふやう、他人は知ず我們は、壬癸の生年にて、月も亦是に丁れり。この他伴當夫役にも、必なきことを得ざるべし。這船遊山翫水の爲にして、慿る孽あるならば、倶に天命也と觀念して、浮沈を河伯に儘もせん。共に君命を承りて、京師へ赴く海上にて、免れがたき命と知りつゝ、身を犧牲に做すを惜みて、其年ならぬ人をしも、殺さば不忠の至りこの上やある。疾雛舫をうち下して、我們二人を移し載よ。今さら隱すことかは、と必死の覺期に奨されて、遂に其生年の壬癸なるを告る者、伴當に五名あり、舵工に六名あり、我們と倶に十三名、迭に別を惜みあへず、下す雛舫にうち乘れば、蜑崎生もせん術なさに、只訣別の涙を沃きて、其天命に儘せらる。現舳公の口占も、時に稱へば當れる哉。我毎十三名、別れて雛舫に乘りしより、凶類立地に解

せよ。と四下に示す聲と共に、義同を牽立て、蚤く城樓を下り來て、刀を拔つゝ義同の、頸に楚と推當れば、正門の頭人其隊の城兵、いよ〳〵驚き、ます〳〵怯れて、やよや等ね。と叫ぶのみ、敢近づく者はなし。其間に逸時景能の、隊の兵十名有餘、門を開き橋を架渡して、出て大角を迎れば、大角幷に貞住等は、訝りながら、事の便宜に毫も猶豫せず、馬を蚤めて、倶に城に乘入るれば、從ふ兵七八百名、義武を牽立て、咄と噇きて稠入る勢ひ、崩るゝ丘に異ならねば、この城内に在りとある、士卒等齊一驚き噪ぎて、但蠕雛を散すが像く、皆後門より逃去りて、跡に殘されし婦幼の、號哭ぶのみ多かりと聞えしかば、大角先老兵に吩咐て、丌を一緒に集合せて、且慰め且勦らせて、士卒の亂妨を戒しかば、城中亟に靜になりぬ。恁而田稅逸時、苫屋景能は、生口三浦義同を、自家の士卒に渡し守らせて、且大角等に案内をしつゝ、城の正廳に請ずれば、大角則貞住等と倶に、軈て馬より下立て、設の席に就しかば、從ふ老兵武勇の毎、倶に鎧の袖を連ねて、左右二側に羅列れたり。恁而逸時景能は、又改めて大角と、貞住等に對面せんとて、倶に其席に入りしかば、大角はこの兩士の、功を賞て且いふやう、思ひきや、田稅苫屋、和殿等はいぬる比、蟹崎十一郎と共侶に、京師へ御使に立けるに、この城内に在んとは、神ならずして孰か知るべき。故こそあらめ、甚麽ぞや。と問へば逸時、先答て、

を赶蒐來て、意に鬪諍に及びしより、已ことを得ず、虜にして、則こゝに牽もて來れり。和殿速に先非を悔て、我を迎へて罪を謝しなば、我も亦和睦して、義武を返すべし。恁ても惑ひ醒ずして、拒みて防箭を射んとならば、先義武の首を刎て、手に唾して城を屠らん。甚麼ぞや。と問返すを、義同は聞も果さず、怒れる苛聲震起て、默れ尲尬兒、無禮也。我は是兩管領の親族にて、武勇をもて人に饒されしに、愛に溺れ子に顧て、今さら里見に從んや。といひつゝ傍に引付措たる、銕砲を悄と拿揚て、只一發に大角を、寃撃んと欲するに、火索失てあらずなりしかば、こはいかに、と心慌て、八郎無頭九、疾撃ずや。といひつゝ後方を見かへる處を、勇無頭九郎、草占八郎、乙と嚏きて背より、義同の左右の腕を、攉るばかりに無手と拿て、撻と捩伏せ登し蒐りて、宛虎を結柢るが像く、緊く索を被しかば、義同は吐嗟とばかりに、叫ぶも其甲斐あら索に、かゝる折から救ふべき、近習のなきを悔るのみ、呆れて眼を睜りて在り、遺恨やる方なかりけり。當下勇無頭九郎、草占八郎は、兩聲高く喚るやう、犬村主、諸軍兵、及城内なる人々も、耳を傾けて皆よく听ね。當城主三浦義同をば、安房の藩臣、田税戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能が、謀りて既に生拘たり。城内なる士卒等憖に、主を拯んとて手を出さば、先義同を結果けて、且若們を誅戮せん。我隊の兵們城門を開きて、犬村主を招待


義武を擒にして大角新井の城に逼る


大角
貞住

あり。姑且矢丸を飛すべからず。この義を主へ傳達せよ、いかにく。と喚門へば、正門を守る頭人等、うち聞て、先陝牕より透し見て、且驚き且慌て、隨卽草占八郎、勇無頭九郎と喚做たる、兩個の小頭人をもて、義同に恁と報しかば、義同一霎時沈吟じて、莞爾と笑つゝ額を撫て、兩個の小頭等に呫くやう、开は又幸ある事なりき。我今城樓にうち登りて、大角奴と問答せん時、鳥鎗銃を隱し持て、他が由斷を撃ならば、只一丸にて怨を復さん。なれども間近からぬに、撃外しなば後悔あらん。若們は新參にて、いまだ軍陣に倶せざれども、いぬる日武藝を試しに、弓箭火銃何くれとなく、人に勝れし本事あれば、倶に鋏砲を携て、我後方に從ひ躱れて、いかで那奴を寛撃ね。よくせよ、愆つべからず。と示し合せて準備しつ、いそぎて城樓にうち登れば、草占八郎、勇無頭九郎も、相從ふて後方に在り。當下義同は、城樓の窻を開せて、左見右見つゝ喚るやう、やをれ濫妨兒犬村大角、僞誑詐の計をもて、船を借り我子を擒にして、姦惡兇暴に倘飽ずや。勢に乘り城に迫りて、又何事をいはまくするや。と聲高やかに罵り問へば、大角馬を暫際に、扨めて徐に答るやう、奥州（義同をいふ）先よく怒を理めて、我いふよしを听給へ。我禮儀、軍師胤智の相計によりて、船を當城に借るといへども、陷るべき爲ならず。但是寄敵の大兵を、火攻して、扇谷定正主を、懲さまく欲せしに、仙郎義武主、慾に我

第百七十六回

禍福反覆して三士功を同くす
追兵壓逼りて忠臣主を拯ふ

却說、犬村大角禮儀は、既に十二分に謀り得て、戰ひ勝ずといふことなければ、權且路に士卒を憩へて、腰戰飯を披するに、敵の馬さへ獲たりしかば、秣を索めて飼せなどす。登時大角は、悄地に貞住に談ずるやう、我聞く三浦義同親子は、阪東一の勇將也。しかるに敗績二度に及ぶは、其智足らざる所以なれば、この勢ひを脫くべからず。我今義武を牽もてゆきて、城に蒞て恁々といはん。義同其子を思ふの故に、城を遞與して他鄉に去らば、そは自他の幸ひなり。他義の與に子を棄て、殘兵をもて防ぎ戰はゞ、別に計策をもて城を拔くべし。先義武を牽せ給へ。といふに貞住こゝろ得果て、隨卽兩個の雜兵を、舊海邊へ走せて、義武を守護の士卒に、告て那身を召よせけり。この時大角の隊の兵は、二度の降人を相加えて、約七八百名あり。敵の乘棄たる馬さへ得たれば、大角と貞住は、騎馬にて義武を牽せつゝ、新井の城へ推寄する、隊伍齊齊整々たり。恁而犬村大角は、新井の城の正門に造りて、馬を駐めつ塹を隔て、屹と城門を瞻仰れば、其意を得たる、一二の從兵聲高やかに喚るやう、誰か在る、當城の人々にものいはん、里見の防禦使犬士の一人、犬村大角禮儀來れり。當城の主三浦殿に對面して、說試んと思ふよし

く正城の鐵門より、橋を渡しつ驀直に、馬頭上を投して走らすれば、從ふ兵皆後れじとて、喘ぞ縮きける。恁而三浦義同は、怒に乘せて去向をいそげば、敵前後を見かへらず、駛馬もけふばかり、猶驚かりし心地して、只管に走らする、其路いまだ幾程ならず、左右に深く繁り立たる、冬樹の邊を過る時、思ひがけなき左右の限より、發出す鐵砲の、响きと共に忽焉と、喊聲大く起りて、なほも間なき銃响箭叫、敵の前後を撃亂して、顯れ出る、兩隊の軍兵、左のかたより犬村大角、右のかたより堀内貞住、士卒を駈て突然と、鋭尖き鎗尖、當るに前なき虎豹の威勢、驚き噪ぐ敵の衆兵を、刺仆し又撃破り、四下に响く聲も劇しく、恐なるかな、三浦義同黏に就く鳥、穽に入れる獸に異ならで、尚戰まく欲するや。命惜くば降參せよ。犬村大角こゝに在り、玆にあり。と名告かけて、推捕籠たる八面勁雄、聊も透あることなければ、義同は辛くして、稍一方を殺辟きて、馬を甚して逃走れば、況や士卒は立脚もなく、或は敵に生拘られ、或は命を免れんとて、降參しぬるも尠からず。この故に義同は、一騎辛くして城内へ逃籠りて、猛可に橋を除せ、城門を閉させて、大息吻てぞ居たりける。

(本書二八八頁に增松奮戰の繪あるべきを原本南彌六の像淡畫にして寫眞製版すべくもあらず仍て省略す)

村大角にて候ひき。然ば欺きて借得たる、柴薪をもて寄隊の艦を、燒盡さまく欲せしに、我郎君に抑留せられて、合期せざれば怨に得堪ず、みづから實の姓名を告りて、鬪戰に及しに、洲崎の方なる兵燹の、最も遙に甚散り來て、我艦多く燒しかば、是より自家利を失ひて、撃るゝ者尠からず。且郎君の御武勇なるも、御病後なれば、甲斐なかりけん、弓折れ勢窮りて、竟に擒になり給ひぬ。この他小磯眞砂五郎、及水崎蠻人は、戰歿せし歟、生拘られし歟、其は知ず候へども、惜からぬ身の存命て、阿容々〳〵とかへりまゐりしは、いかでこの義を報まつらん、と思ふばかりに候ひき。と勸解つゝ息を喲と吻けば、雜兵も喘を止めて、いふよし上に異ならねば、義同いよ〳〵怨に得堪ず、原來赤畾百中は、里見の犬士でありけるよ。鈍くも那奴に謀られて、多く士卒を喪ひしのみならず、我子を擒にせられしは、武門の恥辱この上やある。遠くは去かじ赶蒐て、衂にして怨を雪ん。疾陣徇して、人馬を聚へよ。いそげ〳〵。と近習等を、推立遣りつゝ慌しく、其身は奥へ退きて、時を移さず戎衣して、眉尖刀引提て廣縁へ、二たび出て來ぬる程に、素より武備に閑しからぬ、家風に從ふ勇士猛卒、皆犇々と擐甲して、蚤く廣庭に聚合ふ者、甲乙百許なるべし。尙聚ぬも多かれども、其を等べきにあらざれば、義同は馬をよせさせて、軈て閃りとうち乘りつ、後れし者は迹よりおこせせ。といひ棄て馬に拍れて、開

て、通五百餘名になりぬ。則是を二隊に分ちて、其一隊には、貞住な頭人とす。恁而大角は、生口義武等を猶船に在らせて、士卒五十名をもて守りとす。この他は皆艦を棄て、水際に登り立つ程に、天は明け、烏鳴渡りて、朝霜白く風寒かり。爾程に、新井の城主三浦義同は、其子暴二郎義武が、敢病後を勦ふことなく、今日水戰の先をせんとて、隊の軍兵を將て出てゆきしを、いかに〱、と思難て、再宿も得せでありける時候、近習等が慌しく、枕方に來て告るやう、目今澳の方に丁りて、猛火の光り雲に入りて、中天に映ずる、と告る者の候ひしを、船火事ならんと見る程に、羂に郎君に從ひまつりて、洲崎の戰場へ赴き候ひし頭人、甲良龜九郎と、其隊の雜兵兩三名、倶に痛痍を負ながら、城門を敲きつかへり來て、火急の注進候也。と告るを義同聞も果さで、褥兒反復し岸破と起て、そは安からぬことにこそ。先我听ん、袴をもちね。といそがし立つゝ身裝して、大刀を佩き手燭を秉する、近習をそが儘從へて、蚤く廣縁に立出て、其頭の雨戸を開すれば、召ぶを遲し、と甲良龜九、從ふ雜兵共侶に、身には刀瘡濡鎧の、吊腿重げに、庭門より、走り入りつゝ地上に坐すれば、義同蚤く聲を被て、やをれ甲良龜九郎、こゝろ許なき其身の刀瘡、故こそあらめ、いかにぞや。と問へば答て、然ン候。羂に御艦を貸給ひたる、那赤岩百中は、扇谷の加勢にあらず、實は里見の犬士と聞えし、犬

水崎蜑人、士卒も倶に、辛く他船に乗移りて、遁れ去まく欲せしを、犬村大角、堀内貞住、艦を風上より相挑めて、士卒を駈て攻戦ふ、大刀風烈しかりければ、敵の頭人龜九郎、蜑人、眞沙五、士卒まで、各痛痍に堪難て、首を並べて俯すもあり、或は海へ飛入りて、死活を知ずなるも多かり。當下三浦綦二郎義武は、火にも慌ず、敵にも怯まず、いよ〳〵士卒を罵獎して、近づく敵を刺仆す、闘戦こゝに劇しくて、其鎗竟に折れしかば、火光に就て大角の、乘たる船を佶と見て、いでや組んと身を跳らせて、螽の像く飛入るを、大角組せず身を反して、其手を拿て引投に、板子の上に投仆せば、自家の士卒折累りて、押へて索をかけにけり。義武擒になりしかば、敵の殘兵皆降參して、這里にも闘戦果にけり。登時犬村大角は、堀内貞住等を召集合ていふやう、我憶ずも、這鬼禍に拘づらひて、放火の時に後れしに、今さら洲崎の澳に造るとも、六日の菖蒲十日の菊にて、倒に要なかるべし。査するに、犬阪が逆謀りし、八百八人の術行れて、自家十二分の、勝軍にぞあらんずらむ。因て又意ふに、義同其子の我爲に、擒になりぬと聞知らば、必怨に堪ずして、時を移さず推蒐來て、拿復まく欲すべし。那を我切所に埋伏して、撃破らん事かたからず。其隊配は箇樣々々。と言詳に呫き示せば、貞住幷に老兵們も、皆欣然と諾なひて、倶に隊分を定るに、三百個の隊の兵に、降名の敵兵を相加へ

れて那期に後れし腹臠に、今先若們を鏖にして、新井の城を攻捕てん。みづから其愚を知るならば、兜を脱て降らずや、といはせも果ず義武は、且駭きますく怒りて、原来里見の間諜兒に、欺れしこそ悔しけれ。兵毎先其大角奴を、捉へて蚤く牽もて來よ。と脚踏鳴らして焦燥ども、既に新井の隊の兵們は、思ざりけるこの敵を、里見に名高る犬士の一人、犬村大角禮儀也、と名告るを肇て聞しより、勢ひ折けて左右なく进まず。義武いよく焦燥て、みづから鎗をうち振りうち振り、近づく敵を刺仆せば、水崎蠻人、甲良龜九、小磯眞沙五等、是に氣を得て、漕寄々々、艦を連りに进れば、惴雄の壯佼、本事ある老兵さへ、各先を爭ふまでに、或は敵の船に乘移り、或は又乘移られて、連りに挑戰ども、禮儀よく兵を用れば、小勢にして反て撓ず、貞住も亦衆に先だちて、奮戟突戰術を盡せば、義武隊兵三倍して、驍勇向ふに前なきも、勝を取ること易からねば、いまだ雌雄を分ざる折から、洲崎の澳なる兵燹は、風のまにく吹散されて、こゝへも亦飛來ぬるあり。既にして、一團の敵火閃きて、新井の船なる柴薪に、潑と降かゝる程しもあらず、其船忽地猛火と做りて、防ぐに術なき士卒等は、吐嗟とばかり驚噪ぎて、燒れて死するも多かるべし。然ば暴成す祝融の、祟は又只是のみならで、其火四下に飛移りて、義武の隊の船を燔く者、五六艘に及びしかば、甲良龜九郎、小磯眞沙五郎、

禮儀は、料らずも新井の澳にて、三浦暴二郎義武に抑留せられて、艦の前後を爭ひ已まず、角口に時移りて、天は明なんとしぬる時候、洲崎の澳には兩敵の、鬪戰起りぬとおぼしくて、猛火遙に天に升りて、餘煙這方へ靉靆きけり。以ある哉、初は勁風乾なりしに、其風猛可に吹變りて、既に巽に做りたればなり。大角これを瞻仰て、原來鬪戰那圖に當れり。今さら無益の口論に、時を移さば期に後れん。兵毎艦を疾遣らずや。と喚りつ刀を拔て、敵の掛たる舷の、鉤索托地と斫拂へば、堀内雜魚太郎貞住も、勇る聲を震起て、士卒を罵り促しつゝ、敵の掛たる鉤索を、斫拂ひ又斫斷せて、漕もて去らまく欲すれば、義武愈怒に得堪ず、噫、烏滸の白物毎、非如管領家の兵也とも、烏合の野武士に魁せられて、何をもて面目にせん。兵毎先那百中を擊捕て、蚤く水路を開ずや。と喚り哮る聲と共に、競ふ新井の三頭人、水崎蠻人、甲良龜九、小磯眞砂五は舵工に下知して、一霎間に、二十餘艘の戰艦を、獨樂の像くに漕繞させつ、大角が十艘の船を、遺なく捕籠て、擊んと找むを大角は、敢又物ともせず、四下に响く武者聲高く、義武听ね。我烏滸ならんや、若們反て烏滸技すな。我豈赤岩百中ならんや、實は里見肱股の臣、是八犬士の隨一人、犬村大角禮儀也。我定正を謀り得て、汝が親義同に、艦を借りしは要ある事にて、今朝しも寄敵の背より、火を放さまく欲せしに、こゝにて汝に抑留せら

れし敵を赶ざるもなければ、這頭に在るべくもあらず。獨軍師犬阪毛野が、一隊の戰艦數十艘のみ、洲崎の澳に錨兒を下して、一霎時士卒を憩へて在り。相距ること二三十町に過ぎざれば、九三四郎增松們は、この義を軍師に告んとて、則生口水禽隼四郎緣林、幷に錦帆八四九郎近範、大茂林小彥和中、濱川小渡銕久等の、首級亡骸を船に載て、漕ぎつゝ其里に赴きて、言恁恁と委曲を辭して、且生口緣林と、近範等が首級を、軍師の實檢に入れしかば、胤智賞感大かたならず、軈て九三四郎增松、阿彌七墜八等に對面して、其戰功を譽て且いふやう、就中聞くが如きは、增松が武勇拔群なる、是併、其養父南彌六の、神靈の致す所歟、義士の俠魂、死して亡びず、實に感ずるに餘りあり。我は徑に武藏へ渡して、敵に脚を止させじと欲す。汝等は、蚤く洲崎の御陣へまゐりて、俱に功を奏しまつりね。我も亦勝軍の義を告奉らんとて、隨即兩個の老兵に課せて、注進狀をまゐらするに、增松們が戰功の、美事さへに寫載たり。恁而件の老兵等は、增松等が船に乘て、俱に洲崎の港口なる、望洋臺に赴く程に、生口緣林は、深痍に堪ずして、船の內にて死にけり。然ば胤智の隊の頭人、小森高宗千代丸豐俊、浦安友勝、木曾季元等はさら也、後に件の奇談を听く者、義成主を首にて、七犬士四家老諸頭人、雜兵奴隸、士民莊客、婦女童蒙に至るまで、感嘆せざるはなかりけり。不題、この日の曉天に、犬村大角

よと見る程に、增松奮勇日屬に似ず、武藝剽姚向ふに前なく、矢場に勁敵近範を、斫て兩段に做しゝのみならず、又緣林に痍を負せつゝ、輙く他を生拘りて、且九三四郞と墜八を、拯ひ得たる戰功は、則是南彌六の、靈の致す所也。そを九三四郞墜八は、夢ばかりだも是を知ず、只阿彌七のみ近範に、蹴られて仆れたりし時、この奇異を認めしといふ、其言分明なるのみならず、增松は那時より、眼光さへ聲音さへ、よく南彌六に肖ざることなく、心術猛可に大人備たれば、誰か非とて疑ふべき。員明を首にて、墜八并に加役の雜兵、都てこの奇談を聞知る者、呆るゝまでに感嘆して、那南彌六が義俠なる、死して後も靈亡びず、冥助を其子にあらせしは、伏姬神の亞なるべし。と稱て美談にしたりけり。然ば亦幸に、九三四郞も墜八も、其痍窮所ならねば、疼痛甚しからず、倶に汗衫の袖を裂て、其痍口に卷などして、却緣林を責て、この兩個の姓名と、定正の存亡を問けるに、始は左右なくいはざりしかども、深痍の上なる笞に堪ねば、則其身と近範の姓名出處、又定正は、憲儀后綱等に援けられて、小舫に乘りて逃れ去りつらんといふ。又只この事のみならず、加役の船に引上たる、敵の屍骸多かる中に、扇谷の先鋒の頭人、大茂林小彥、濱川小渡等、この餘も有名の士多かるを、誰も知るよしなかりしに、こも亦この時緣林に見せて、稍是を知ることを得たり。この時自家の諸軍兵は、燬を発

と刀を拿直して、登し蒐りて刺んとするを、増松急に推禁めて、やよ、等給へ、天津主。權且這奴を活し置ずば、其姓名を知るよしも、定正主の存亡を、誰にか訊ね、誰にか問ん。惱るは要なき事ならずや。といふに貞明、有理と悟りて、然らば結掫ん、やよ墜八、索もて倶に手傳ひね、やよとく〱。といそがせば、墜八はやうやくに、痛痍を忍び身を起して、濱縄をもて、綠林を、いとも緊しく結掫りける。然ば又阿彌七も、近範に蹴られしのみにて、恙なければ、又艫を推つゝ船を寄來て、苦戰に勁敵降伏の歡びを舒などす。這他加役の雜兵們が乘たる船は、間遙に遠かりければ、這鬪戰を知るもあり、知ざりしも稍聞知りて、うち驚きつゝ聚ひ來つ、且増松が揮きの、拔萃なりしを稱贊す。爾るに這増松は、本性武藝を好めども、素是莊客阿彌七が、第二の子にて、且寒家に生育たれば、擊劍の技はしも、得學ざりけるに、約莫この日の揮きは、筑紫の八郎、(爲朝)鎌倉の源太、(義平)鞍馬の牛孺丸にも、伯仲すべき手段あり。那をいかにぞと原るに、上の出像に見えたる如く、初錦帆八四九郎近範が、這方の船に移り來て、増松危ふかりし時、怪むべし、其義父荒磯南彌六が、在し世の形貌變らず、身には細鎧の衫甲に、重鋲打たる肱甲、十王頭の脛盾して、黑金表裝の大刀を跨へ、忽焉として影の如く、立顯れつゝ近範を、遮り禁めて手を動せず、身は一團の陰火と倣りて、増松が口中へ、閃めき入る

に、軈て閃りと乗移るを、阿彌七は乗せじとて、械もて逆ふを近範は、隻脚を飛しつ蹴仆して、又増松を撃んとて、振晃めかす刃の電光、それかあらぬ歟、近範の、目前に燦と立つ陰燐の光りに、近範憶ず眼を射られて、苦と叫びつゝ乒乓く程に、増松得たり、と刀を拔て、撃つ手鋭く近範が、右の拳を斫落せば、近範恁ても猶弱らず、左の手をもて増松に、組んと找むを遣反して、鎧の透を撲地と斫る、手裏冴たる窮所の深痍に、近範竟に堪難て、臀居に撐と平張俯て、手脚を悶搔て死でけり。爾程に、又一船なる、天津九三四郎員明は、水禽隼四郎緣林と、刃を交へて刀尖より、火出るまでに戰へども、緣林素より猛者にして、武藝剽姚凡庸ならず、員明危ふかりければ、椿村の墜八は、倶に刃を打振々々、援けて連りに挑み戰へども、緣林威力壯にて、右に中り左に拄る、最も劇しき大刀風に、員明も亦墜八も、身に負ふ痛痍に堪難たる、墜八は憶ずも、腕亂れ拄難て、いよ〳〵危ふかりける程に、又只磯崎増松は、今剛敵を撃捕りしかど、蹴られて滾びし親阿彌七を、勦り慰るに暇あらず、又員明を援んとて、いそぎて船を漕よするに、旣にして員明は、只受太刀に倣れるのみ、吐嗟目今、撃果さるべく見えしかば、増松心焦燥て、間はいまだ近からぬ、水を隔て船より船へ、閃りと跿入る自得の剽姚、緣林是に驚きて、見かへる處を丁と斫る、斫られて緣林一霎時も得堪ず、刀を棄て仰ざまに、撐と輾べば員明は、得たり、

八四九郎近範は、原是海賊の頭領なれば、水戯至妙の本事あり。こゝをもて、敵の艦を燒れし時、倶に水中に火を逸れて、波濤を被けども、敢死なず。既にして、其艦は燒亡て、流るゝ板子を抱き身を浮せて、波濤のまに〳〵流れて在り。燒殘りたる艦に逢はゞ、うち乘て逃れ去らばや、と思ふものから盲龜の、浮木に似てあふことかたく、海廣く波暴ければ、いまだ便宜を得ざりしに、烽火臺なる加勢の雜兵們は、船より是を見出して、是も亦、敵歟自家の軍兵の、浮屍骸なるべしとて、手に〳〵釟兒を拿延て、搔よせて船に載しかば、緣林と近範は、倶にこの便宜を得たれども、猶も死したる面色しつゝ、一霎時氣力を頤ふて、共侶に衝と身を起す、其威勢初に似ず、腰に殘りし大刀引拔て、船なる敵の雜兵を、斫仆し又斫仆せば、こはいかに、とばかりに、驚き噪ぐ、餘の雜兵も、中る者なく散動きて、痍を負ふ者ぞ多かりける。當下天津九三四郎は、墜八と只二人、別船に乘て在り。今この異變に驚きて、倶に船を漕よせ來つゝ、件の船に乘移りて、やをれ白徒卒爾なせそ。と喚禁めつゝ刀を拔きて、水禽隼四郎緣林と、刃を交へて、一上一下と聲をかけつゝ殺結ぶ、程しもあらず、增松も亦是を見て、吐嗟とばかり、親阿彌七と共侶に、九三四郎を援んとて、船を這方へ漕もて來ぬるを、錦帆八四九郎近範は、はやくも是を見かへりつゝ、增松が童年なるを悔りて、敢又物とも思はず、近づく隨に其船

後陣に參り在るこそ幸ひなれ。情由は目今听れし如し。いかで增松と咱等が與に、堀内主にこの義を告て、舘の御免許を請し給ひね。やよいそぎてよ、憑むぞよ。といふに佳橘は異議もなく、そはこゝろ得候也。舘倘御許容なくば、小可走りて又來てん。來ずは障りなし、と思ふて、去向をいそぎ給ひね。と答て急に增松と、阿彌七と墜八等に、揖をしつゝ、君が在す、陣所を投て走りけり。爾程に天津九三四郎は、この烽火臺なる、本番の頭人に、增松等が情願と、目今詰茂佳橘をもて、舘に請まつらせたる事さへに、箇樣々々と告知せて、這臺下に維れたる快船二艘と、釚兒榜索さへ多く求得て、开が一船には、增松と阿彌七をうち乘せつ、又一船には墜八と九三四郎うち乘りつ、倶に艣を推し舵を操りて漕出すに、皆是上總人なれば、波の上自由にて、暴風激波をものともせず。又只這四個兩船のみならず、烽火臺の頭人は、倘總角なる增松が、忠勤を賞感して、倶に彼等を帮助んとて、別に快船十艘に、雜兵百十數名をうち乘せて、增松九三四郎等に從はせしかば、增松九三四郎等は、この日の挊きに便宜を得て、燒殘りたる敵の巨艦の、流るゝを赶留め曳綟して、這方の磯に維ぐ者尠からず。又釚兒をもて、海を撈りて兩敵の、亡骸を索るに、自家の士卒の戰歿は稀にて、敵の火に燒れ水に溺れたる、屍骸は數ふるに盡すべくもあらず。有恁し程に、扇谷の先鋒の小頭人、水禽隼四郎緣林、錦帆

たる自家の勇士は、敵の殘兵雛舫に乘りて、命を涯りに逃去るを、猶脫さじとて快船を、漕走らせて赴ふ程に、洲崎の澳なる兵燹絕て、敵の乘棄し巨艦の、或は過半焦たるあり、或は舟底のみ殘るもありて、波濤の搖動々々漂ふを、增松遙に眺望て、今那艦を拿らずもあらば、孰の時を等んや、と思へば心焦燥て、連りに嘆息しぬる折から、天津九三四郎貝明は、戰飯餽の所役果て、聊暇を得たりしかば、この日の水戰を見まく欲さに、伴をも倶せず、劍太刀、身は身甲に釬脛衣して、這頭の浦邊にうち出て、舊家老隷の老僕、詰茂作橘と相倶に、料ずこゝに來にけるに、增松等三人とは、前日洲崎の陣營にて、義成主に見參の折、迭に面を認りてあれば、增松は歡びて、いまだ口誼も果ざるに、件の意衷を恁々と、告て好歹を請問へば、九三四郎駭嘆じて、噫、和郎は、年尙十五に足らぬ、里の總角なりけるに、恁る忠勤を思ひ起せしは、恐らく南彌六の靈憑て、いはするにぞあらんずらん。我も亦、尫弱多病なる、主君の與に、舘今番の從軍を許させ給はず。纔に是戰飯司の、蛭兒所行してありけるのみ、本意なしとのみ思ひしに、今日は偶暇あり、いでや和郎と共侶に、那海上に燒殘りたる、敵の艦を拿集へて、那亡骸をも曳揚てん。然ども這情願を、先舘に請まつりて、御免許を稟るにあらずば、軍令を破るに似たり。といひつゝ後方を見かへりて、やよ詰茂、和老は、昨日堀內叟に從ふて、

られて、件の臺下に在りけるに、遙に眺亘す洲崎の澳の、水戰は自家十二分の大勝利にて、燒盡さるゝ、寄隊千百の戰艦の、燬を免るゝはいと稀にて、猛火と做りて、波上に、煽々たる光景は、寇戌る筑石の海なる、不知火にも似たるべく、敵の衆兵身を焦して、烟裏に、叫ぶ聲は、焦熱地獄の罪人の、呵責もかくこそあるべけれ、と思へば毛骨竦然て、人皆駭くそが中に、増松は總角なれども、性として武勇を好めば、自家の士卒の勝に乗る、揮きを羨みて、親と墜八に咡くやう、我們烽火の加役として、この處に侍れども、自家既に戰ひ克て、敵又寄すべくもあらざれば、烽火を颺て急を報ること、あるべくもあらずかし。いでや船を乘り出して、燒殘りたる敵の船を、流さで拿も留むべく、且水に溺れて命を殞しゝ、敵の亡骸を拿揚なば、幷が中には、那衆隊なる、大將品もなからずや。然らば仁慈を旨とし給ふ、舘へ致す忠信にて、手を空くして這臺下に、在らんには優なるべし。この議を思ひ給はずや。と言老實達て談ずるを、阿彌七急に推禁めて、そは亦要なき揮了也。汝は尙總角なれば、舘の憐み思食て、こゝの加役に做されしに、反て御軍令に違ひなば、後の御咎を爭何はせん、無用々々。と窘れば、墜八も亦この意を好として、倶に不の字をいへるのみ、從ふべくもあらざれば、増松はいひがひなし、と思ふものから爭ひ難て、默然として在りける程に、敵の衆艦は燔盡されて、鬪戰克

第百七十五回　南彌六靈を顯して子を祐く　禮儀時を失ふて時に爲こと有り

この日文明十五年十二月八日の曉天に、甲斐の武田信昌の代軍なりける、武田左京亮信隆は、豫欲するよしあれば、定正の衆艦と、共に纜を解ものから、胡意波土遥に後れて、那隊には從はず、浦河の澳に錨兒を下して、悄地に須風を俟つ程に、天は稍明なんと思ふ時候、戌亥の勁風起りしかば、是究竟と舵工們に下知して、前面に見ゆる鋸山の、麓路投て漕するに、正に相摸なる浦河より、上總の鋸山は最近くて、水行三里に過ざるに、須風に儘する便宜にあなれば、一瞬間に其衆艦は、件の浦邊に果にけり。當下信隆は、艦を棄、磯に登りて、隊の兵を皆從へつゝ、悄地に山路にうち入りて、己が故の城地なる、廳南へ赴きしを、地方の民等も知ざりけん、この事後に聞えけり。話分兩頭。この口洲崎の陣中には、荒磯南彌六が身後の螟蛉兒なる、磯崎增松は、其實父、菫野の阿彌七と、椿村の墜八と共侶に、烽火臺の加役に充

苦計を施さゞれば、この田地に居りがたかり。非如定正燬を免れて、城にかへり入るとても、只心怯れ胆落て、防戰の備をなさんのみ、亟に保質を、戮すに暇あるべからず。この義は心易かりてん。と解れて大家感佩す。但犬村大角が、三浦暴二郎義武と、爭ひの安危いまだ具ならず。开は又下回に、解分るを聽ねかし。

東良の首と其骸さへ、擡起しつ故の艦に移し載つゝ別を告て、順風に儘する帆を揚て、相摸地投て還りゆく船の、迹なき如く世間に。脆きは人の命也。かくて又毛野胤智は、高宗豐俊、友勝季元等の、この日の挊きを譽ていふやう、各戰功甲乙なし。千代丸生は舊罪を、償に足りぬべし。就中木曾生は、いはでもしるきことながら、杉倉翁の季子とて、武者助の弟なれども、尙青年なるをもて、今番初陣也と聞えしに、小幡東良と戰ひし時、水中の挊きは、實に奇にして亦妙なり。藍より出て藍より蒼き、久後賴しかりぬべし。和殿其肩尖なるは、淺痍なれども、潮水に入りたれば、夙く療治せよ。いで〳〵。といひつゝも、軈て准備の藥を拿出して、其鎗傷に塗らしける、勞勸等閑ならざれば、季元深く感謝して、心八入に勇みける。當下毛野は又いふやう、約莫この鬪戰に、大角が今まで出て來ざるは、故もやあらん、心許なし。獨那人のみならず、敵の爲に保質にせられたる、妙眞音音、曳手單節も、恙あらずや胸安からず。疾五十子の城に推寄て、一旦城を攻拿ずは、猶大敵を懲すに足らず。四婦女の安危を訪ふに由なし。今勢に乘らずして、竟にこの圖を失はゞ、蛇を殺して頭を遺す、後の患ひなからずや。疾柴浦へ艦を找ん。諸軍兵この意を得て、先腰戰飯を披くべし。といふを友勝等皆諾なひて、現那四個の婦女子は、今も五十子の城に在ん。定正逃て城に還らば、必敗軍の怨に堪ずして、四

で、我衆と倶に、今日の水戰に從ひしに、いまだ一戰に及ずして、既にこの大敗あり。主將の安危を知るよしもなく、我身一個免れたりとて、今さら何等の面目ありて、故の城地に還んや。君辱めらるゝときは、臣死すといへり。齊の田横、鳥取部の、萬の義烈には及ばずとも、我も亦然ばかりの、志は致すべし。已なん〳〵、是まで也。といひも訖らず傍なる、雜兵の帶たる太刀を、晃りと拔拿る手も見せず、項に楚と推加て、みづから首を斫落して、軀は撲地と俯たりける。思ふに優たる東良の、勇猛義烈に驚嘆ずる、友勝季元、士卒們はさら也、小森高宗、千代丸豐俊も、既に敵に戰ひ克て、船を併べて在りしかば、這爲體を視も听もして、倶に感嘆したりける。そが中に犬阪毛野は、憶ずも膝を拍鳴らして、嗚呼果せるかな、忠臣義士の、生を厭ひて、死を樂む志は、誰も恁こそあるべけれ。定正賢良ならざれば、行ひ都て道に違へど、猶其大夫に道灌あり、且那子に助友あり。又這小幡東良あり、こゝをもて、其大職を失はず。削らるゝことありといへども、いまだ亡びざる所以也。先や這亡骸を、宅眷に贈りて我君の、大仁大慈を知らしめん。やよ兵毎、其生口を解饒して、遺なく這意を告知せよ。といふに士卒こゝろ得て、恩赦の一義に及ぶ程に、毛野は又舵工に課て、那艦に相應しかるべき、舵一挺を擇出させて、小幡の士卒に取すれば、東良の殘兵は、頭を敲き恩を謝して、隨卽

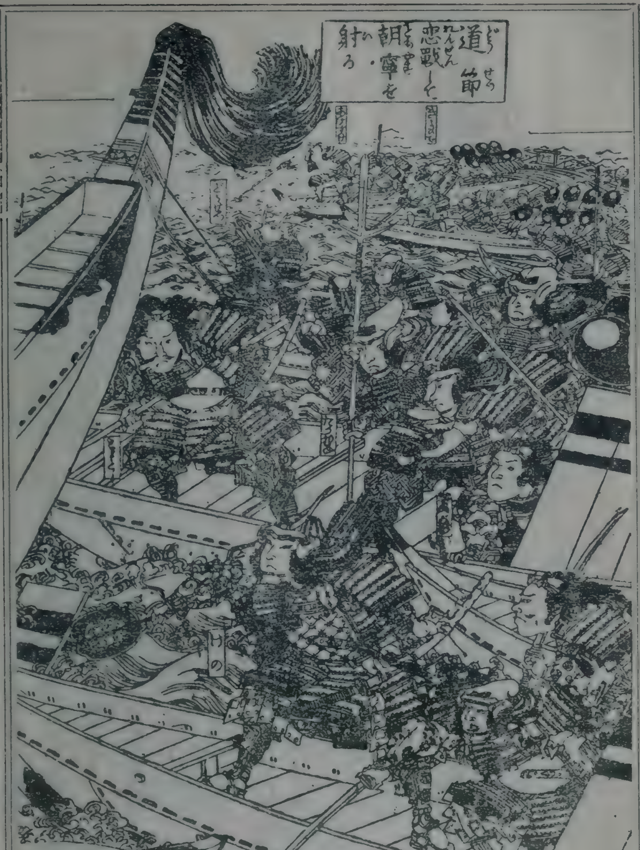
非如温順の君子といへども、不仁の心の起らぬはなし。其人を殺して、もて己を利する、方の教に由れば也。現兵は凶器なる哉。抑我兩舘里見殿御親子は、今の世に又得易らぬ、仁君に御座せども、我每敵を迎へて、死生を爭ふ、這戰場にて、何ぞ仁慈を行ふに由あらんや。是則亂を撥めて民保かる、湯武の心に同じかるべし。已なん〳〵。と獨言たる、貌を佗と更めて、却東良に向ひていふやう、小幡生今日の摔き、視を驚かすまでに最愛たし。我風火の謀をもて、寄隊の衆艦を燒きしより、定正主を首にて、其隊長諸頭人、雜兵に至るまで、敢敵に中る者なく、皆免れまく欲する故に、反て死する者多かり。然るを和殿は乘たる艦の、楫を燒れし故なるべけれど、敵に中りて血戰して、事のこゝに至りしは、瓦礫の內なる眞玉に似たり。我其武勇を愛るの故に、解恕してかへし得させん。和殿一個を饒したりとて、我勝軍の負べくもあらず。こは我君の御心也、我私の慈善とな思ひそ。兵每、やよ其索を、早く解ずや。といそがせば、執索の雜兵阿と答て、東良に被たる索を、手ばやく解て搔遣り棄れば、東良は身の福ひに、且恥且感謝に堪ず、姑且して毛野に向ひていふやう、思はざりける慈悲放免、現江湖上の噂に錯はず、里見殿君臣の、仁心こゝに至んとは。是に就ても恥しき、這回扇谷殿の攻伐は、佞人們の薦る所、我始より其歹を知れども、諫て聽るべきにあらざれば、心にもあら

許、季元竟に瀨五四郎を、ばらりずんと斫仆す。この時小幡東良は、鎗の尖頭に血を濺ぎて、近づく敵を幾名歟、刺殺して寄せ立ず、今瀨五四郎が撃れしを、見つゝ怨に堪ざれば、奮然たる鎗拿延て、耶と聲かけて、季元の、肩尖を愚煞と刺す。刺れて季元身を仰反せて、海へ汆と墜しかば、東良得たりと鎗拿直して、二たび刺んと推下すに、季元は水中にて、敵の鎗の蛭纏に、楚と携りつ身を浮せて、曳るゝ隨に敵の艦に、跳り入りつゝ其鎗の幹を、握拔て東良に引組で、揉仆さんと角へども、東良は阪東に、名高る力者也ければ、敢叉物ともせず、竟に季元を組伏せて、首を搔んと匕首を、撈りて拔まくせし程に、毛野は持たる軍扇を、礙と擲つ手術錯はず、東良眉間を打傷られて、颯と濆る鮮血と共に、眼眩みて仰反れば、季元下より反覆して、壓で索を被まくするに、東良膂力勁ければ、其手を抓で揮かせず。當下里見の雄兵等、及浦安友勝は、竟に木代漁傳太を、斫仆して、自家の士卒共侶に、季元を相援けて、折累りつゝ東良を、緊しく結梱りて牽居けり。然ば小幡の隊の兵等の、悍き者は旣に撃れぬ。其餘は敵に殺立られて、今東良の虜に做るを、拯ふに暇あらざれば、誰か亦よく敵に中らん。皆刃を捨跪きて、倶に擒に做りにける。恁而季元友勝は、生口小幡東良を、這方の艦に移し乘せて、軍師の實檢に入れしかば、毛野は只管嗟嘆に得堪ず、憮然としていへるやう、現孫子を讀む者は、

づく敵を、殺拂び殺退けて、竟に千代丸豐俊と、鎗を合しつ、一上一下と、迭の奮勇術を盡す。兩敵の船、寄ては辟き、辟きては合ふ、生死の、海に潮成す知死期時、孰先ぞ、と見る程に、豐俊既に、腕亂れて、那身危ふかりければ、小森高宗是を見て、蚤くも船をよせ合せつゝ、遂に九本望洋を、斷擊にしたれども、倶に軍令を守りて首を捕らず、敵の殘兵の降るを饒して、這鬪戰は果にけり。去程に浦安友勝、木曾季元は、兩隊の快船二三十艘を、飛が似くに走らせ來て、小幡木工頭東良の、沒舵艦を、笹木香桁の像くうち圍みて、拗んと競ひ蒐るを、東良は毫も怯まず、他は是管領四家老の一人にて、武勇拔萃の聞えあり。且其家臣、木代漁傳太名增瀬五四郎、と喚做たる、兩個の猛者ありけり。倶にこの隊にありければ、主僕力を勠せ敵を防ぎて、撓む士卒を罵辱る、刀尖鋭かりければ、友勝季元勇敢しといへども、尙鬪戰は互角にて、兩敵雌雄を分ざりけり。然ばこの時、犬阪毛野胤智は、小幡東良の猛勇なるを、豫より聞知りたれば、友勝季元卒爾にして、捕漏すこともあらん歟とて、其身も船を找ませつゝ、間近く寄せ合せて、舳頭に發兒を建させつ、鋘をもて輪緣したる、軍扇を採つゝ尻を掛て、端然として、うち見て居り。然ば里見の衆兵は、是に機を得て奮勇十倍、勝に乘たる弄が程に、浦安友勝、木曾季元は、倶に那兩們の猛者、木代漁傳太、名增瀬五四郎と、挑戰ふこと半晌

老舘（定正をいふ）にこそ御座すめれ。臣等を倶させ給はずや。といふを、道節明相凊英閧つゝ遙に佶と相て、原來定正ござンなれ、疾撃捕ん。と艄公們を、いそがし立てぞ赶蒐る。順風の舵に碍りなき、伊豆歟、相摸歟、武藏野の、逃水也とて逃さじ。と惴る心ぞ勇れける。案下この日里見の先鋒の頭人、小森但一郎高宗千代丸圖書助豐俊は、浦安牛助友勝と相倶に、寄隊の前後より火を放ちて、多く敵の衆艦を燒きしかば、扇谷の先隊の頭人、大茂林小彥瀦川小渡、其隊の士卒共侶に、燒れて命を殞さぬはなし。然ども寄隊の總大將扇谷定正は、大石源左衞門尉憲儀、箕田源二兵衞后綱、白峰麻生介廣原と、近習の儕のみにして、蚤く數箇の小舫に乘移り、疾五十子の城へかへり入らんとて、武藏を投て脫去る开が中に、第一の隊長なる小幡木工頭東良と、頭人九本佛九郎望洋の隊の兩艦は、辛くして燬を逸れしかども、既に其舵は燒亡て、小舫もあらずなりしかば、倶に澳に漂ひしを、小森高宗、千代丸豐俊、浦安友勝、幷に木曾三助季元は、其隊の快船數艘をもて、透間もあらせず赶蒐來つ、高宗と豐俊は、九本佛九郎が隊にうち向ひて、兵を拽めて攻戰ふに、佛九郎望洋は、本事ある猛者なれば、左右なく擊も伏られず。其隊の兵も皆死を究めて、免れがたしと思ひけん、敵の船に飛乘々々、或は引組で刺迭へ、或は倶に海に入る、在昔壽永の戰ひも、恁やありけんと思ふめる、望洋は近


火攻の功成て毛野
又東良を虜にす


道節恋戦して朝寧を射る

擇ず斫仆す。就中明相清英の大刀風に、中る敵兵あることなければ、多くは船の内に平張伏し、或は跪き頭を敲きて、命を乞ふ者尠からねば、明相清英うち笑ひて、無益の殺生すべからずとて、皆悉く結縛せけり。有恁し程に、道節は、艦を走せ赶もて來つ、這光景を見て喚るやう、小六太郎一、幵は要なし。其泛なる奴們を、降すとも生拘るとも、穀潰しのみ何にせん。器械艤舵を奪拿て、潮のまに〳〵流し遣りね。但等閑にせざるべきは、我射て墜したる一將也。他は必朝寧ならん。惜むべし遠箭にかけしかば、落て水底に沈みにけん、首を獲ざりし悔しさよ。先求獵んず、求獵ずや。と詞急迫しく罵示しつゝ、士卒に下知して、今朝寧の墜たる四下に、釟兒を入れて搔撈らするに、水底深くて届かねば、又小錨を下させて、那亡骸を索求めて、引掛させまく欲するに、流れやしけん、舩に契して、劍を求るに異ならず。竟に其功あることなければ、道節屢嗟嘆して、恁と知らば赶迫て、必撃捕るべかりしに、遠箭にかけし悔しさよ。と獨言のみ士卒等は、倶に慰難たりける。(前卷第百七十回に現八箭を拔て、水死の將を救ふとある段を照し見るべし。)當下明相清英は、敵兵の器械艤舵を、皆悉く捉棄て、結縛りし隨に流し遣る、沒架船の往方定めぬ、扇谷の士卒等は、恥を思はで蜻蜓の、命生きしを歡びて、流に儘する船の内より共侶に、伊豆相摸の方を見亘して、那見よ遙に那里へゆく船は、我

朝寧の近習外官の老兵、皆只主を撃せじとて、近づく敵を斫拂へば、朝寧も亦防箭射つゝ、且戰ひ且走る、逃るに順風の艦なれば、明相清英勇なきにあらねど、波の上自由ならで、撃漏すべく見えたる折から、犬山道節忠與は、定正を生拘んとて、連りに艦を拨る程に、と見れば落ゆく敵船あり。明相清英二隊の艦もて、赶へども竟に及ざりける、其敵の旌旗水幟は是紛ふべくもあらぬ、朝寧ならんと思ひしかば、心いよ〳〵いそがれて、他は則定正の、庶家子也。故主の爲には、寃家の半隻、さしも當君里見殿には、是獍敵の骨肉也、疾撃捕らずや印東荒川、噫手寛し。と焦燥て、且我舵工を罵勵せども、間遙に遠ければ、亟に赶もつきがたき、道節いよ〳〵焦燥て、那里に落ゆく敵の船は、扇谷式部少輔朝寧也と見しは僻目歟。恁いふ我は煉馬の舊臣、今は里見の股肱の臣、八犬士の隨一たる、犬山道節忠與なるを知ざるや。返せ〳〵。と喚りて、箭間は言に程あれども、豈脱さんや。と執る弓は、三人張に十五束、三伏なるに征箭うち刺ふて、最も易げに能彎固る箭尖を敵はしら波の、立たる隨に眉尖刀引提て、見かへる處を道節は、矢聲劇しく慓と射る。射られて朝寧一霎時も得堪ず、身を仰反せて大洋に、墜て水底にぞ沈みける。是にぞ驚く其隊の士卒は、吐嗟とばかりに、鈎兒をもて、主を拯ひ揚んとて、舵を留めてありける程に、印東荒川二隊の艦は、波濤を開きつ漕よせ來て、乘移り〳〵、敵を

放火の威勢一霎時もあらず、寄隊の艦に在る所の、柴薪に其火移りて、發と煙立つ程しもあらず、先鋒の衆艦発るゝ者なく、猛火と做りて煽々たる、軻遇突の威勢涯りもなきに、且猗浦安牛助友勝は、扇谷の柴薪を預りて、先鋒の艦の後方に在り。件の放火發ると見るより、同船の軍兵四五名を、斫仆し又斫伏せて、左右なる船の柴薪に、火を放ちて、猶も拄る敵兵を、中るに儘せて斫殺す、大刀風と共に聲震發て、愚をる哉定正憲儀、寄隊の衆兵皆所ね、豊俊焉ぞ敵に降ん。我は其舊臣なる、濱縣馬助と名告りしは實にあらず、軍師犬阪の密策に從ふて、定正を哄し得たる、實は里見恩顧の頭人、浦安牛助友勝なるを知ざるや。若們は是兎の群烏、這圏套に入りたれば、皆炙禽にならんのみ。笑ふべし〳〵。と喚りつ、みづから艪を推、衝と漕脱て、自家の先鋒に加りて、倶に敵をぞ攻撃ける。爾程に風火いよ〳〵煽にて、寄隊の艦は一箇として、其熸を受ざるもなかりしかば、將帥士卒の差別なく、こはいかに。とばかりに、慌噪ぎつ、度を喪ひて、熸を脱れんと欲りして海に入る者は、水に溺れて命を殞し、然らぬは猛火に身を焦して、発るゝ者極て稀なり。开が中に式部少輔朝寧は、心疾き小將也ければ、蚤くも艦を漕辟せて、風側よりして三浦のかたへ、脱れ去んとしぬる程に、印東明相荒川清英、倶に快船に乗走らせて、二隊の從兵七八百名、返せ〳〵と喚りて、透もあらせず追蒐來ぬれば、

六里に足らざれば、今はしも、一里許もやあるべからんと思ふ程、忽地に風歇ぎ波理りて、衆艦都て毫も走らず。是はいかに、と訝る程に、其風猛可に巽に變りて、いよ〳〵便宜を失ふ折から、洲崎の岸より突然と、快船十餘艘漕出て、前なる敵にはうちも逆はず、波を横ぎり、一瞬間に、武藏のかたへ漕去りける。是則別人ならず、小湊目堅宗が、鮠内葉四郎、狙問猿八等と、五百の雄兵を從へて、目今那地へ渡す也けり。當下軍師犬阪毛野は、一萬の軍兵一千有餘の戰艦を、三隊に分ちて鼓を鳴らさせ、幟を振らせて、連りに士卒を趲れば、則先鋒の頭人なる、小森但一郎高宗、千代丸圖書助豐俊が隊の兵三千、艦三四百艘波を開きて漕出す。第一番なる水幟に、降人千代丸豐俊と寫せしを、扇谷の先鋒の艦なる、大茂林小彦、濱河小渡幷に水禽隼四郎、錦帆八四九郎們、いへばさら也、後方に續く寄隊の衆艦、大石憲儀、小幡東良、將帥（定正）副將（朝寧）も是を見て、原來千代丸豐俊は、順風の便宜を喪ふ故に、里見の衆船の背より、火を放つこと得ならねば、胡意找みて先に立し歟、然るにても里見の士卒は、他を怪みて制る者なく、舵を連ねて近づき來ぬるは、故あることか、こゝろ得がたし。疾濱縣馬助を、召よせて問ずや。と喚る聲も果ぬ間に、小森千代丸が隊の頭艦は、射る箭の像く漕よせて、倶に准備の小柴に、火藥を夾みて敵の船に、投入〳〵攻寄すれば、折から烈しき潮風に、

せば、大家敢異議する者なく、共に言承をしぬる𪜈が中に、千代丸圖書助豐俊は、この日管掌兒、堀内許より召出されて、この隊に在り。嚮に義成主に見參を饒されて、且恩命あり。這回の闘戰に大功あらば、舊領城地を返し給ふべし。と仰らる。しかれども豐俊は、舊臣の浮浪して、安房上總に在る者は、いまだこの義を知ざれば、那身に一僕だもあらず。遮莫先鋒の次將なれば、面目あまりあるなるべし。恁而この夜は、篝火を燒して、既に曉天になりしかば、將師義成主は、望洋臺にうち登りて、明日の水戰を見まく欲す。致仕の老黨、堀内貞行を首にて、老兵士卒三千餘名、臺上臺下に、多く高張燈を掛亘して、最も堅固に備たり。水隊は軍兵一萬餘名、八日の曉天に至りて、一隊毎に、士卒咸艦に乘果て、敵のうち寄するを俟程に、天は向明としぬる時候より、乾の勁風吹出て、磯打激波凄じく、艦を遣るべき便宜にあらねば、士卒齊一感悟して、果せる哉、軍師の先見毫も違はず、既に乾の勁風發りぬ、敵推寄するに程はあらじ。恁てはこの風吹變りて、巽にこそなるべけれ。と思へば都て勇みあり。寒風肌膚を冐すを忘れて、弓弦を潤しつ火銃の、丸を籠つゝ敵を俟つ、威勢こゝに振然たり。爾程に、扇谷の諸軍艦は、既にこの順風を得て、歡び勇ざる者あらず、各正帆を七八分にして、風のまに〳〵走らするに、皆是巨艦なるをもて、猛風洪波にも危ふからず。三浦の澳より洲崎まで、水路五

ましく怨ずるを、毛野は听つゝ含笑て、否とよ和殿は、別に用る所あり。いそがざる事なれば、いまだ其義に及ざりき。耳をよせね。と膝を找めて、悄々やかに誨るやう、明日水戰の時に臨て、朝風必巽にならん。其折和殿は五百の雄兵と倶に、快船十餘艘にうち乗りて、敵に管はで驀直に、蚤く武藏の河崎へ渡すべし。鯱内薬四郎と、雜兵猨岡猿八は、倶に其故鄕は、武藏なる、矢口也と默いひし事あり、那里の地理に具なるべし。因て他等を從せん。那地に屆りて進退は、箇樣々々。と說示せば、小湊目は欣然と、承歡びつゝ退きて、事の准備をしたりける。恁而犬阪胤智は、犬山道節と共侶に、明日の軍兵を整るに、諸頭人と船長們に、君命を傳へていふやう、約莫明日の水戰は、各こゝろ得べき進退あり。意ふに黎明の時候より、乾の勁風起ることあらば、敵の大兵艦を找めて、驀直に推寄せ來つべし。然りとても我諸隊の艦は、猶皆岸に在りて動くべからず。其風變りて巽にならば、敵を逆へて火を放つを要とす。勿論舘の御軍令に、隨ひまつりて、縱勝に乗るとても、多く敵を殺すべからず、只生拘を全功とす。倘違ふ者あらば、立地に是を斬ん。艦には今宵、柴薪を積載て、旦開の戰飯は、各々艦に在て、握飯たるべし、且纏腰飯を忘るべからず。この義は天津九三四郎が、稻村より來て、炊飯の夫役等に指揮すべければ、事に凝滯あるべからず。この御旨を得よかし。と言嚴に說示

等は、或は陸地の敵を防ん與、或は悄地に謀を授けて、他方へ遣したり。そが中に、犬江仁、姥雪與保は、京師よりいまだかへり來ず、剩蜑崎照文と、田税逸時、苫屋景能を、重ねて京へまゐらせたれば、當陣に勇士多からず。義成も艦を出させて、倶に大敵を防ぐべしとありしを、軍師胤智禁め稟して、當陣に本事ある兵多からねども、事十二分に謀り得たれば、大敵も怕るゝに足らず。且明日の水戰に、君この處を動坐あらば、反て守衛薄くして、萬一の時誰かよく、陸にうち登る敵を防ん。且奸民郷兇の、野心も料りがたければ、猶この御陣に御坐すこそ、後安く候べけれ。と其理を舒て諫めしかば、義成この議を信容れて、曩に水戯水馬の調煉を、検覧の與に建させたる、望洋臺にうち登りて、明日の水戰を觀つべしと定めらる。折から瀧田の城より、堀内藏人貞行が、老侯の使として、安危を拜問の與に來にければ、義成歡びて對面あり。幸の事也とて、そが儘こゝに留めあらせて、瀧田へは、別に使をもて、この事を請せらる、明日貞行を、當陣の、一頭人に充んとて也。獨小湊目のみ、明日の隊配に漏しかば、痛く望を失ひて、思難つゝ毛野にいふやう、在下は原是老舘の、御使を承りて、瀧田より參りしかども、同僚東峯鮹船等は、既に用ひらるゝ所ありしに、在下をのみ、甚麽ぞや、明日の水戰に倶し給はぬは、用るとも益なし、と思るゝ故なる歟、こゝろ得がたく候。と喞言が

欲りし、胡元海を渡して、東に寇せし日も、恁やありけん戰世の、人の心は死活の、海を海ともしら波に、彼岸遠く後の世を、思ざるこそ薄情けれ。

第百七十四回

萬里一水道節小仇を射る
八百八人毛野大敵を鏖にす

却說、この時安房の洲崎なる、里見の陣營には、國守安房守義成主、昨十二月七日に至りて、軍師犬阪毛野、防禦使犬山道節、幷に兵頭小森但一郎高宗、及諸兵頭、老兵と、恩赦の罪人、故の上總の榎本の城主なりける、千代丸圖書助豐俊等を召集へて、明日の水戰の隊配を定めらる。印東小六明相、荒川太郎一郎清英、木曾三助季元、小湊目堅宗等も、倶に這席にぞ與りける。开が中に犬阪毛野は、獨君命を承りて、諸隊の前後を配分す。先鋒は則小森高宗に、千代丸豐俊を副として、毛野が謀る所あり、其船毎に、柴薪焰硝を積入れらる、放火を宗とすべき與也。次は犬山道節に、荒川清英、印東明相を、左右の副とす。次は軍師犬阪毛野にて、木曾三助季元是に從ふ。從軍の諸頭人の交名は、枚舉るに遑あらず。しかれども自餘の五犬士と、東辰相、荒川清澄、杉倉直元、田稅逸友、登桐良于、滿呂重時、鮹船茂足、東峯春高、堀內貞住

波高く艦搖めけば、この期を得たる寄敵の大兵、寒氣も倶に忘るゝまでに、孰か歡び勇ざらん。素破乾の順風吹出たれ。皆疾錨兒を曳抗て、寄せよ〳〵。と喚りて、伍還を守りて漕出す、先鋒は則當軍の兵頭、大茂林小彦和中、濱川小渡鋏久、士卒五千名、并に新附の海賊の頭領、水禽隼四郎緣林、錦帆八四九郎近範、其徒二千餘名を左右の副とす、共に雄兵七千餘名、其艦一百許なるべし。次は管領四家老の隨一なる、小幡杢頭東良、士卒三千名、次は上杉式少輔朝寧に、大石源左衛門尉憲儀を副とす、信城左傳達頼、九本佛九郎望洋等是に從ふ、其兵一萬餘名也。次は總大將、扇谷修理大夫定正、從兵三萬千百十數名、箕田源二兵衛后綱、白蜂麻生介廣原等、及阪東に有名の郡司鄉士の、是にしたがふ者尠からず。又降人千代丸豐俊の密使なる、那濱縣馬助すら、柴薪船を預けられて、先鋒に從ひて拔めども、武田信昌の名代なる、武田左京亮信隆と、新參の浮浪人、赤晶百中と、仁田山晋六武佐のみ、中途に障る事ある歟、この時までも其船見えねば、定正を首にて、朝寧憲儀東良等はさら也、機密を知りたる老兵は、今さら他等を俟んとて、躊躇ふべきにあらざれば、寄隊二三千箇の戰艦舵を轔らせ艪を鳴らして、整々として前後を亂さず、乾の順風に儘せてぞ、徑に洲崎へ推寄せて、稻村瀧田の城を屠りて、義成親子の首を捕んとて、勇ざる者なかりける。事の勢正に是、曹魏江に浮みて吳を吞まく

里見の士卒に怪しめられて、事の破れにや做り候はん。縦日今の御答を、豐俊に告ずとも、御同意にをはしまさば、事違ふべくも候はず、この義を稟し給ひね。と請へば憲儀又點頭て、隨郎友勝のいふよしを、又定正に告しかば、定正いよ〳〵感悦して、現其遠慮も謂あり。然ば其馬助を、憲儀汝の隊に隷よ。軍忠隨意なるべけれ。といふに憲儀異議もなく、御諚承り候ひぬ。柴薪を積たる船毎は、既に御伴に候へども、其頭人を課たる、家臣仁田山晋六は、いかにしつらん、いまだ參らず。第一義なる柴薪に、頭人なくば不便なるべし。然れば晋六が來ぬるまで、這馬助を代として、那役に充候はゞ、便利にこそ候はめ。この義怎麼。と請問へば、定正聞つゝ又點頭て、現他が主なる千代丸豐俊は、既に放火の頭人也。且主僕倶に安房人にて、波上の揮き自由ならんに、其一役を課なば、反て仁田山晋六に、優すこともあらん。退りて柴薪船を遞與しね。と得たり貌に吩咐れば、憲儀唯々と言承して、船を漕せつ退きて、却友勝に柴薪船を、預けて其進退を任せしかば、友勝は思ふに倍たる、事の首尾の十分なるに、笑を忍びつ歡び謝して、そがまゝこゝに留りけり。左右する程に絳皥引く、東天稍垂曉としぬる時候、風外道人の約束違はず、乾のかたに天引たる、横雲の間よりして、勁風颯と吹起りて、激

艨艦に、掛亘したる張燈は、波を照らし水に映じて、魚鼈もこゝに寄るなるべし。潜處に洲崎の方より、快船一艘漕もて來つ、降人と書寫したる、弦掛張燈を指抗て、うち振り〳〵喚るやう、是はこれ安房の降人、千代丸圖書助が密使にて、濱縣馬助と喚做す者也。火急の言上あるをもて、いかで直訴し奉らまく欲す。この義を稟し給へといふ、聲共侶に近づくを、扇谷の士卒小舫に乘て、出迎へつゝ鈎留めて、引て大石憲儀の艦の邊に將てゆきて、恪と注進しければ、憲儀則水幕を抗させて、出て濱縣馬助に對面す。這馬助は、浦安牛助友勝也。當下友勝がいふやう、豐俊豫約しまつりし如く、今日しも旦開の水戰には、豐俊里見の衆艦の背よりうち起りて、火を放ちて鏖にすべし。但しその折乾の順風の、最も烈しく吹き候はゞ、豐俊が放火は里見の衆艦に蒐らずして、向火反て我艦を燒ん。然れば豐俊は、里見の衆艦を漕脱て、逆て蚤く火を放さん。その折御艦を拔めさせて、倶に火攻し給はゞ、全勝十二分に候べし。この義を諜じまつらん爲に、復こそ推參仕りぬ。と實しやかに說瞞れば、憲儀听つゝ點頭て、軈て小舫に乘移りて、引て定正の艦に造りて、件の義を告しかば、定正悅び大かたならず、其義我よくこゝろ得たり。疾衆艦に下知を傳へて、旦開の進退を示すべし。豐俊主僕大功あらば、賞祿は異日の沙汰にあらん。先この旨を答諜して、馬助とやらゝをかへし遣りね。といふを友

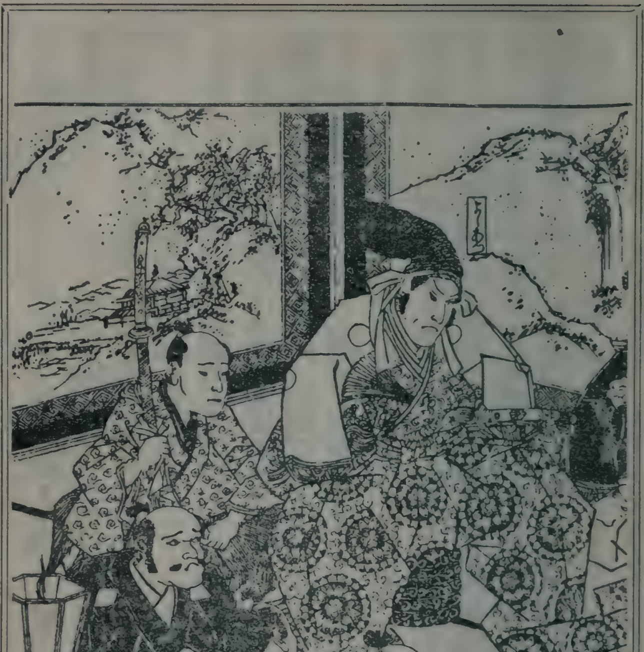
る聲高やかに、いはすればとて舌長し。軍神の血祭に首を捕んず、覺期をせよ。と刀の柄に手を掛るを、大角猶も怕るゝ色なく、非理の前には道理なき、威勢をもて克まくするや。和殿腰に帶劍あらば、我も亦身を護る、是この刃なきにあらず。已ことを得ざるときは、敢敵手を擇まねども、一朝の怒に其身を忘るゝは、是君子の愼む所、小人の悔る所也。然るを和殿事を好むは、敵に反忠するにやあらん。いまだ里見を攻伐ずして、同士撃を做すならば、何をもて管領家に忠とせん、義といはん。然る狂人には敵手にならず。といはせも果ず義武は、衝と身を起して舷に、脚踏掛つゝ大角を、斫らんと叫ぶ聲と共に、刀を晃りと拔放せば、左右に在りける老兵每、吐嗟とばかり推隔て、抱き禁つゝ諫る程に、猶且這隊兵頭水崎蜑人、小磯眞砂五等も、義武が怒言る、其苛聲に驚きて、船を傳ひつ移り來て、倶に義武を諫るやう、那赤畠百中が過言は憎く候へども、他も亦管領家の、御隊の兵で候に、同士撃を做されなば、非如今番の鬪戰に御軍功ありとても、後難免れがたかるべし。枉て饒させ給ひね。と理り切に和解れば、義武は老黨の、意見を聽ざらんはさすがにて、うち頷きつゝ退きて、刃を鞘に藏れども、尙理らぬ怒氣と共に、只諄々と罵りけり。話分兩頭、この日十二月八日の曉天に、扇谷定正の諸軍船は、三浦の澳に錨兒を下して、風外道人の風術をもて、起す順風を等つ程に、幾千の

浦陸奥守義同の嫡子なる、三浦暴二郎義武なるぞ、権且艦を止めよ。と喚り〳〵近づき來ぬれば、大家驚くそが中に、大角佐と見かへりて、毫も噪ぐ氣色なく、然也、赤嵓百中はこゝに在り。何等の所要候ぞ。と答る詞も果ぬ間に、義武の快船は、這方の艦に漕よせて、其隊の兵等鈎索もて、曳よせ曳寄せ掛留る、程しもあらず、三浦の伴船二十餘艘、水崎蜑人甲良鼈九、小磯眞砂五等、追風に儘せ推續き來て、犬村が十許艘の、艦の前後を挿圍みて、こも鈎索もて一箇も漏さず、皆犇々と掛留めけり。當下暴二郎義武は、犬村大角にうち向ひて、やをれ其隊の頭人、加勢の野武士、赤嵓百中は和郎なるよ。我名は豫聞つらん、我は親の名代にて、疾五十子の城へ参るべかりしに、憶ず風寒の病著ありて、出船遅々して、今に及べり。和郎は新附の加勢にて、我艦に乘るからは、宜く我隊に從ふべし。と威勢猛く宣権すを、大角聞つゝ冷笑ひて、开は謂なき爭ひなるべし。咱等は、いぬる日、五十子の城内にて、水路の郷導兒たるべし、と定められたる者なるに、今さら他人に讓らんや。這艦は、三浦氏より出されたりとも、我私に借たるにあらず、扇谷殿の處分にて、課て所要に充給へば、則是扇谷殿の船に同じ。然るを這艦に乘たればとて、和殿の隊に隷けといはるゝは、管領家をも憚らで、隊に從へまく欲する歟。年少しとも遠慮なきは、最烏滸也。と窘れば、義武満面朱を灑ぎて、怺難た

こゝに二三十艘維ぎてあり。番卒毎出迎へて、艦に柴薪焰硝を拏入れて、水轍を配建などす。當下義武は、其戰艦二十餘艘に、隊の兵五十名づつ分ち乘せて、其身は胡意快船にうち乘りて、大角の赤嵒百中を逐まくす。頃は十二月八日の曉天なれば、渺々たる大洋の、波瀾烏くして、星影移らず、刄成す寒風に、面を撲るゝ諸軍兵は、並て憶ず戰栗るゝ、肌膚粒疎色蒼然て、身は生ながら、鮫兒にやならん、と思ふ可に堪がたければ、弓拏る手さへ斫らるゝ如く、其弦凍て斷るゝもありしを、獨この艦隊の主將なる、三浦案二郎義武は、今茲十八歲の少年なれども、武勇力藝親に劣らず、勇は萬騎に敵すべく、膂力は千鈞を舉るに堪たり。遮莫今宵は病後にて、出陣心許なし、と思はぬもなかりしに、幸にしてこの嘌昏より、寒熱共に瘥りて、氣力衰へねば、夜風の烈しきを物ともせず、疾百中に赶著んとて、連りに舵工をいそがせける。然ば又犬村大角は、有恁るべしとは知るよしもなく、既に義同を欺きて、一十箇の艦を借得て、漕出せども、去向をいそがず。堀内貞住と、船を並てゆく程に、那城内にてありし事の趣、城主三浦義同と、問答議論の顚末を、悄語々々告知すれば、貞住以下の老兵まで、覺ず俱に含笑れて、愉快の事とぞ稱えける。浩處に新井の方より、漕もて來ぬる快船あり。忽地に聲を發て、其首へ漕ゆく衆船には、野武士の長と聞えたる、赤嵒百中もあるなるべし。恁いふ我は三

闘戰に、我は伊勢長氏の壓として、出陣を禁められ、加兵に親族をもて名代に、出せとある重役なれば、非如その義に及ばずとも、後に咎なかるべし、已ね〳〵。と窘れば、義武聽ず推返して、否我身この曛昏より、熱邪退きぬと覺しに、今は心地清やかになりぬ。縱病著復起るとも、武士たる者は、百萬の、大敵と血戰して、命を其首に捨てこそ、名を後の世に揚げもせめ。蒲團の上に起臥しつゝ、婦女童蒙に看病せられて、死するを本意に做すべきや。いはでもしるきことなれども、當家は平氏なりけるに、上杉氏より養嗣せられて、本領安堵したりしより、兩管領家は親族にて、藤原氏の血肉なるに、這回大事の闘戰に、不知出處の野武士們に、艦を貸たるのみにして、阿容々々として出ずもあらば、世の胡盧にならんのみ。この義ばかりは饒させ給へ。と詞烈しく答も果ず、衝と身を起し外に出て、急に隊の兵を召聚るに、慓雄の壯士等は、今宵出船なきを恨みて、倘兵頭を出さるゝ、こともやあらんと思ひしかば、甲夜より各甲冑して、戰飯に飽ざる者なく、今か〳〵と俟つ折なれば、這武者汰を聞くとそが隨、水崎蚕人、甲良龜九郎、小磯眞砂五郎なンど喚做たる、兵頭を首にて、弓手銃手、前後を亂さぬ、雄兵都て一千有餘、城の玄關の頭より、正門の內なる擴城に、處陝まで聚合しかば、義武は忻然と、鏁奴等が牽寄する、馬に搖哩とうち跨て、海邊を投ていそぐ程に、又是准備の戰艦、

備の艦十餘艘あり、其一艘には、焔硝柴薪さへありしを、船小屋より番卒出て、大角に遞與せしかば、貞住も共侶に、歡びを述受拿て、其艦毎に、士卒三十名づつ分ち乘するに、各々携來つる、弓矢火銃器械あり、且楫を拿り艪を操る、舵工さへ匱しからざれば、渺茫たる大洋の、闇きに迷はず齊々と、艪拍手揃へて漕出す、夜はまだ丑に過ざりけり。有恁し程に、三浦義同の獨子なりける、三浦暴二郎義武は、今宵も尙病牀に、垂籠て在りけるが、件の事の趣を、うち聞しより遺恨に堪ねば、襁兒搔遣りつ身を起して、枕方近く措せたる、鎧を拿て身を固め、太刀を佩き一具しつ、兜を看病の女房に持せつゝ、走りて親の身邊にゆきて、跪くすら暴やかに、奮然として稟すやう、當家は是人も知たる、兩管領の親族なるに、今番の戰に値ざるは、兒が病著の故にして、是非の及ばぬ所なれども、赤嵒百中とか喚做たる、相摸野武士に先を駈させて、我艦を貸て乘せながら、こゝより一隊の軍兵をだも、出し遣り給はざるは甚麼ぞや。今より艦を出させて、海に浮み躬方の大兵を、等得て明日の先鋒に找ん、暇稟すといひつゝも、旣に立まくしてけるを、義同急に喚禁めて、等ね義武、和郎の遺恨は然ることながら、身に猶熱邪を帶たるに、夜を犯し海に浮みて、暴き潮風に吹冷されなば、寒熱忽地再發して、太刀拔くことも克ぬまでに、狗滅を做さんのみ、そをしも勇士の本意といはんや。然ば這回の




ひくて
大角
大角謀て艨艦を借る
だいかくはかつていくさぶねをかる

けれども、我艦に我水幟を、建ずして人に貸さんや。且愚息義武は、頃者風寒に感冒されて、いまだ病牀を出ねば、兩管領家の催促に、從ひまつることを得ず。他はさら也我さへに、遺憾やる方なきものから、義武に代るべき、勇士なければ默止しに、和郎今我艦に乘りて、先鋒に進むこそ幸ひなれ。我も亦兩三人の兵頭に、雄兵四五百名を授けて、俱に戰ひを幫助くべし。といふを大角推禁めて、开は然る故も候はめど、小可今番、兩管領のおん爲に、死をもて敵を敗らまく欲するに、今さら他兵を雜へられんは、素より望む所にあらず。且小可は、扇谷殿の先鋒にて、當家の加兵にあらざるに、縱艦を借るとても、當家の水幟を建られんは、こも亦事の宜きにあらず、這理を思ひ給はずや。と氣色を變て論ずれば、義同一霎時沈吟じて、實にいはるれば其理あり。和郎一器量微りせば、這席上の孤客にして、我に對ひて斯までに、意衷を遺さで論ぜんや。武勇に顯て望に任せん。疾々退り候へとて、軈て士卒に吩咐て、准備の馬頭上に送らすれば、大角面を和らげて、开は忝く候なれ。郎君の御欠安を、猶も御保護あれかし。と口誼を舒別を告て、外面へ退り出れば、城兵五六名、蕉火を振照し、犬村主僕を角門より、出して馬頭上へ送る程に、堀内雜魚太郎貞住は、三百個の隊の兵と俱に、甲夜より這頭に俟て居り。這海邊に維れたる、新井の戰艦多かる中に、兩管領の需に應ずる、准

し燭臺は、晃く星に異ならず。上座には城主義同、発兒に尻を掛て在り、左右に侍る力士們は、狼の如くに見かへり、艴の像くに疾視へたる、面魂凡庸ならず。近習は主の後方に居り、孰も本事ある者ならん、と見えざるはなかりけり。既にして大角は、程よき處に跪くを、義同みづから聲を被て、赤岩百中とは和郎なるや。と問へば大角額衝きたる、頭を擡て、然ン候。顯定主の、齎せ給ひし、借船の符契こゝに在り。いかで戰艦十艘と、焔硝柴薪を借まく欲す、この義を仰付させ給へ。と乞へば義同點頭て、その義は豫心得たり。和郎の隊の兵幾名なるや。と問へば答て、然ン候。同盟の毎は、三百餘名候を、近き海邊に留めて將て來ず、小可が伴當は、僅に是十名のみ、夜分の懼りあれば也。といひつゝ聊退きて、軈て鎧の懐鍱より、符契を拿出て呈すれば、一人の近習身を起し來て、把て主君に呈閲しぬるを、義同やをら受拿りつゝ、近習に手燭を抗させて、懐よりして隻符を、出して自他合せ見て、相違なし〱。と獨言つゝ符契を藏めて、又大角に向ひていふやう、持參の符契に疑なければ、敢異議すべくもあらず。艦は昨日より准備させて、焔硝柴薪と共に、遠からぬ馬頭上に在り。旌旗水幟は甚麽ぞや。と問へば大角、然ン候。其二種は扇谷殿の、預け給はり候ひしを、相携て候へば、只御艦と柴薪をのみ、貸し給はらば物足りてん。と推辭を義同聞あへず、そはその准備あるべ

魚太郎貞住と共侶に、甲冑に身を固めて、隊の兵三百餘名を將て、新井の海邊に赴きつ、貞住の隊の兵等は、そが儘に這里に在らせて、却大角は、この宵初更の左側に、雜兵十名許を從へて、新井の城に赴きて、城門を敲きて、喚るやう、是は今番扇谷殿へ、新附なる野武士の頭領、赤岩百中と呼做す者也。年來足柄多武澤に候なる、同志の毎を駈集來て、明日の水戰に、我て先鋒たらまくす。この義前日山内殿より、當城へ通達せられしならん。顯定主の符契こゝに在り、この義稟し給へ。とぞ喚門ひける。當下門衛の士卒是をうち聞て、應と答つゝ左右なく容れず。隨即門卒を走らせて、慤と注進してければ、這新井の城主たる、三浦陸奥守義同うち聞て、この義は豫山内殿より、謀し合されたりければ、今さら疑ふべくもあらず。然ばとて、今の世の人心、由斷せば後悔あらん。咱先對面して、其符契を相て艦を借すべし。やよ兵毎、其赤岩百中と伴當一兩名をのみ、門內へ入ることを饒しね。必由斷すべからず。いで〳〵といひつゝも身甲の上に、衣獵烏帽子を拿裝ひて、小刀を腰に跨へつゝ、力士二十許を從へて、玄關に出る程に、近習は燈を秉て先に立ち、大刀を執て後に跟く、小心等閑ならざりけり。爾程に護門の士卒は、君命の趣を、大角に傳へ示して、那身と伴當一兩名を、角門より裡面に入らせて、玄關に案內をす。當下大角阿容たる色なく、引れて玄關にうち登るに、黠し連ね

しかば、大角深く感佩して、貞住に悄語くやう、聞くが如きは此一策は、則是苦中の苦にして、危しとも最殆かな。故何とならば、音音妙眞兩嫗と、曳手單節女兒弟が、千代丸豐俊の、密使と僞唱へて、柴浦へ至りし時、定正必保質にして、件の四人の婦女子を、城内に留め置くべし。慿而水戰の日に至りて、定正焼れて敗績すとも、脱れて五十子の城へかへり來ば、必怒に堪ずして、音音妙眞曳手單節を、戮さゞることを得んや。慿れば犬阪が計る所、則自家の勇婦四名を售て、徒其死地に入るゝのみ、抑又危ふからずや。然りといへども暦日に、危をもて黃道吉日とす、事危ければ必愼む、愼む時は失少し。犬阪この理を知ずして、叨に苦計を行はんや。因て又おもふに、大阪一擧に敵を破らば、逃るを追ひつゝ五十子の、城を抜べき手段ありて、この苦計を行ふならん。定正城に入ることを得ず、城兵防禦に他事なくば、何人か亦暇ありて、四人の勇婦を害せんや。己を知り又敵を知りて、犬阪が計る所、必や違ふべからず。非如他には及ばずとも、我も亦水戰の、一計に與れり。然るを四人の女流にだも、軍功及ばで二の町ならば、生て安房へ還るべからず。なからん後の思ひ出に、この義をこゝろ得給ひね。と告る意衷に貞住は、有理々々然也、然もこそ。と答て感嘆したりける。是より大家影を隱し、跡を埋めて俟つ程に、十二月七日に做りしかば、犬村大角禮儀は、堀内雑

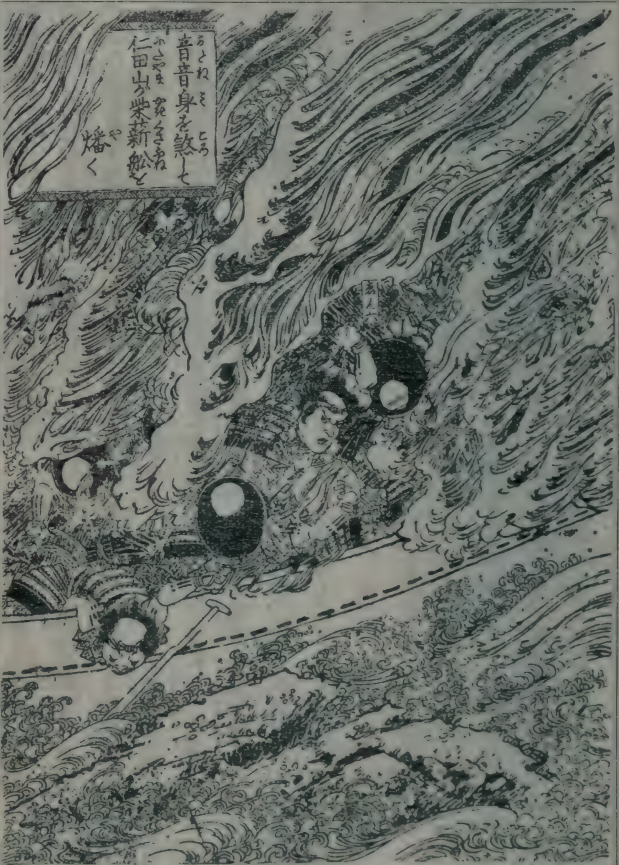
阪毛野に告げしかば、开がかへり來ぬるを俟んとて、軈て相摸路に赴きて、便宜の浦邊に在りし程、次の日の夜に至りて、兩人の使の雜兵と倶に、堀内雜魚太郎貞住は、隊の兵三百餘名を領て、快船にうち乘りて、約束の浦邊に來つ、犬村に對面して、則義成の密靛と、毛野の意衷を咡き傳れば、使に建ける雜兵は、毛野の囘翰を拿出して、先大角に呈閲し、且其反命を具にす。是に由り大角は、其言を聞其書を閲して、貞住等が乘りし快船は、安房へ返して一箇も留めず、隊の兵は皆東西へ分ち潛せつ、水戰の日を俟つ程に、既にして大角は、洲崎の陣の事の光景、及犬阪毛野を軍師に做され、自餘の七犬士は、防禦使たる事、幷に大角にも賜るべき、御大刀を現八に渡し給ひしに、犬飼は、犬塚と共侶に、國府臺に敵を俟つ、那地の防禦使たるをもて、毛野が是を與りて、權且藏措たりしを、則今番の便宜をもて、堀内貞住に是を遞與して、大角に傳へしかば、大角は其君命を承り、此賜を受まつる、其悅びいふべうもあらず。又只是等のことのみならで、犬塚信乃犬飼現八は、東辰相杉倉直元們と共に、義通君に倶しまつりて、國府臺の城に敵を迎る事、又犬川莊介、犬田小文吾は、行德口に出陣して、倶に敵を俟つと云、水陸の隊配この餘の事、千代丸豐俊に行はする、毛野が反間の計略、又此密策に預りぬる、浦安牛助友勝、音音曳手單節妙眞の、敵地に赴きし事までも、この時具に聞え

母、犬山道節が舊老僕にて、今は里見殿の家臣なる、姥雪代四郎が妻、音音は我也。武佐、汝も寃家の半隻、思ひ知るや。と明々地に、名告被つゝ銕砲の、火蓋を鑽て撐と發せば、那時遲、這時速、武佐いよ〳〵驚慌て、立まくしける程しもなく、吭を撲地と撃抜れて、叫びも果ず仆れけり。吐嗟とばかり隊の兵毎は、音音を捕捕んとて、推稠籠る、間もあらせず、音音は銕砲拿更して、船の内に積措れける、嚢の火薬に擲ちて、身を仰ざまに舷より、海へ夵と飛入りける。其水音と共侶に、火線の燧兒許多き嚢の焰硝に、爆と燃移る這時速し、猛火激烈、威勢迅速、現百千の雷霆の、一度に墜るに異ならず。人はさら也、柴さへ船さへ、一瞬間に燒盡されて、遺るは僅に船底のみ。水に遁れし音音すら、恙はなしや、あり磯潟、測り得がたき死活の、海には水澪の建られぬ、迹しら波とぞなりにける。

第百七十三回

數艘を借て大角義武を拄ゆ
降旗を建て豐後定正を愚にす

却說、犬村大角禮儀は、那日の早天に、五十子の城を立去りて、先谷山に赴きつ、丶大法師と商量して、隨即所從の雜兵二名を、安房なる洲崎の陣營へ遣して、那籌策の成れるよしを、犬


音音身を慇して
仁田山が柴薪船を
燔く



り。期に後れたる分說には、那保質の老女奴を、蚤く殺すにしくことなし。といふを小頭人等訝りて、𢌞は又何等の故なるや。と問へば答て、然ばとよ、我今船を走らせて、御艦に赶著奉りて、稟さんやうは、臣等御伴に後れたりしは、中途に禍事あれば也。其故は、前日臣等に預けさせ給ひたる、那千代丸豊俊が、保質の老女奴は、里見の間諜兒なりけん、隙を覘ひ胆太くも、臣等を刺まくしてけるを、搦捕んとせし程に、支黨の歹人數十名、忽焉として快船に、乘走らして援け來つ、這方の船に乘り移りて、老女を帮助て戰ひしを、臣等幷に隊の兵まで、力を勠せ奮勇して、敵を漏さず殺沈め、老婦を擊捕り候ひぬ。這鬪戰に時移りて、今に及び候ひき、と實しやかに哄稟して、首級を實檢に入れまつらば、必遲參の御咎を、免るゝのみならで、反て御感に干らん。這議什麽。と悄やかに、其計較を告る程に、船は柴浦を漕離れて、大茂林濱の感に出けり。登時件の小頭人每は、武佐が奸計を、皆听訖り額を分ちて、俱に憶はず含笑て、𢌞は最奇也妙なるかな。と譽て後方を見かへれば、音音は聽く其機を猜して、准備の銕砲、拿る手もはやく、銃口其方へ推向けし、雄胆魂氣聲悍やかに、若們驚き噪ぎなせそ、伎倆は既に聞知たり。今武佐が奸計は、反て是我實情也。我を誰とか思ふらん、曩に戶田の河邊にて、武佐が、兄仁田山晉五が、緝捕の多兵と血戰して、竟に戰歿したりける、十條力二郎尺八が

今寃家の覺るを俟て、計るが如く船を燒きて、脱れ去るべく暇なくば、我身も倶に火焔にならん。そは兩舘莫大の、御恩に報ひ奉る、老の命を惜んや。只兩個の孫、兩個の娘に、別は鴛鴦の劍羽や、竟には水に身を果す、過世にこそ、といへばえに、邑打つ波濤になみだの雨も、垂氷にならん冬の夜の、浦風寒み群知鳥、慰めはせで友喚ぶ聲の、往方は何處、星光り、天に餘波の銀漢、俯仰瞻つゝ點頭て、夜は丑三剋を過ぎにけん、這白徒等はまだ醒ずや。疾々覺よ、と思ふこと、言に出さで咳くのみ、寂焉として俟つ、長き夜に、蠟燭將に竭んとするや、船に掛たる張燈の火光小暗くなりにけり。然ばいよ〳〵更闌て、霜氷る夜の潮風に、吹醒るゝ武佐們は、稍明なんとしぬる時候、咽吭渇き睡り覺て、倶に頭を擡げつゝ、四下を見かへりうち驚きて、こはいかにせん鈍かりき。御主君尉殿（大石憲儀をいふ）の御船はさら也、兩舘（定正朝寧）は乘船まし〳〵て、洲崎へ推寄せ給ひけん、這頭に一箇も艦なくなりぬ。こよなき越度を致したり。と悔て頭を搔くもありしを、武佐噪がず深念をして、聲苛めしく喚るやう、既に時分を失ちて、御伴に後れたる、越度は勿論越度なれども、然りとてかくて在るべきにあらず、先疾船を出さずや。と焦燥しげにいそがせば、篙師們が稍覺て、阿と應つゝ遽しく、帆を揚げ纜を解く程に、武佐は又一二の小頭人を、身邊へ招きよせて囁くやう、我今卽妙の計あ

て、倶に漕去しを知らざれば、獨武佐が乘たる船のみ、舊の儘にて柴浦に在り。只音音のみ醉ざれば、枕を亂して熟睡をしたる、武佐們を見て嗟嘆に堪ず、肚裏に思ふやう、這仁田山晉六武佐は、六稔以前戸田川にて、我兒子等（故十條力二郎尺八なり）を害したる、仁田山晉六が弟にて、大石親子に仕へぬる、二代の權宰也といふ、人の噂に聞知りにき。然らでも這奴は火藥の頭人、自家の爲に害ある者也。這奴が預る火藥の船は、方僅寄隊に從ふて、多く漕去りたれども、時に臨みて這奴が在らずは、放火に頭人なき故に、先にゆきたる火藥の船は、必便宜を喪ん。然ばとてかくまでに、醉て睡りし晉六等を、醒しも果ず刺殺さば、嫐也とても、武士の妻に、似げなしとて人や挾せん。要こそあれ、と尋思をしつゝ、掛亘したる張灯の、光に就て、船床なる、銕砲一挺、悄と引よせて、火線を拿りつ火を移して、見れば這銕砲に、兩丸さへ籠てあり。こは究竟と开が儘に、右手のかたに引著て、臂近なりける長盆もて、覆ひ隱しつ今更に、轟く胸を、推鎭めても果しなき、いくそばくその物思ひ、曳手單節妙眞刀自は、曩に別れて、城内へ、捉籠られし後の事、安危什麽と人傳に、訪ふよしとても浪枕、身は浮舟の憂かりける、兩箇の愛孫いへばさらなり、我伕は今も恙なく、犬江腋子と共侶に、枯れにし冬野の草枕、旅宿して尙京師に在歟、と思ふのみにて、南末與美の、甲斐なき別になりけるかな。我

等ん。といふを大家うち聞て、そは辱き、御計ひに候也。然らば御酌仕らん。と答る間に奴隷の輩が、酒を盪め、酒菜を出して、按ぞ排る船の内なる、客の間特に陜ければ、音音も膝を竝べて居り。當下仁田山晋六は、酒盞を執抗げながら、音音を見かへり含笑て、昔は知らず、今は是、枯樹に降れる雪の白髮、額に寄る波濤松柏の、肌膚にこそと思へども、酌は婦女子に極れり、是篩てよ。と指出せば、音音も倶に微笑て、嗟夫御見出しに與りまつりて、恥しくこそ侍るなれ。足駄の端緒に敗藁索も、時の用には達にやあらん。相應しからぬ聆娘役、梅が香ならぬ枯野の密房、非如刺とも甲斐なしとて、不甘な喫しめされそ。と戲れながら十分に、篩ども溢さぬ老女の手煉に、大家ヤヤとうち興じて、受けつ流しつ行更す。現是酒は狂藥にて、禮に始り亂に終る。武佐素より強飲なるに、隊の兵も咸高量にて、吞こと宛大蛇の如く、刺こと恰も蜂に似たるに、音音は喫まず、よく提撕て、昔採たる杵柄の、舂謠にあらなくに、興を添たる早歌に、舌も遶らぬ武佐と、倶に衆兵亂醉して、舷に凭れて反吐を突くあり、額を敲きて呻吟くあり。艫の間に侍りたる、雜兵奴隷舵工篙師まで、罇を敲けて足ることを知らず、殺を竊みて好歹なきを思はず、皆悉醉臥て、喚べども應へず、掖けども起ず、死人に仁田山晋六們、既に日は暮れ更闌て、主將定正の衆艦はさら也、己が與る火藥の船も、皆定正に從ひ

三浦の澳に到るに、武田左京亮信隆は、船を出すに最遅ければ、始よりして諸艦に續かず、胡意遙に引下る。那身は隊兵のみを將て、艦を寛く行後れさせて、浦河の澳に錨兒を下しつ、風の便宜を俟たりしに、定正朝寧はさら也、諸艦の隊長士卒まで、波上の暗きに紛れて、是を知る者なかりけり。然ば寄隊の諸艦は、既に順風に吹送られて、この曉寅の初剋に、夙く三浦の澳に來つ、衆艦都て帆を縮し、錨を降し相歇て、風外が約束の、順風の亦復吹起るべき、其天の明るを俟にける。丌が中に、仁田山晉六武佐は、敵の戰艦を爇盡すべき、火藥の頭人なりければ、柴薪焔硝を多く積載たる、二三十箇の快船を掌り、且千代丸豐俊の保質なる、老婦人音音を豫り守りて、前日より柴浦に在り。しかるに這晉六武佐は、其性酒を貪りて、且酒癖ありければ、當役を承し日より、過失あらんことを怕れて、絕て酒盃を探ることなかりしに、既にして、十二月七日の下晡に造りて、同船なる隊の兵等に向ひていふやう、我はさら也汝達も、連日勤務多かりければ、さぞな疲勞たるならん。既に是今宵眞夜半には、大將御艦を出させ給へば、人も我も從ひまつりて、死活の境に赴くに、切て嗜る酒也とも、思ひの隨に喫ずもあらば、何をもてよく胆さへ肥して、宅眷を忘れて、死地に就く、忠戰を致さんや。この故に、我既に、奴隷毎に吩咐て、其頭の准備もしたる也。先や和郎等と獻酬して、醉を盡して解纜を

れ水に就く。柴浦より大森まで、海上遙に見亘せば、乘浮めたる千百の戰艦は、布備たる碁石の像く、五彩の旌旗、八色なる戰幟は、夜半の浦風に閃めきて、綠波も寄せあへず、晃々として星影に、光を爭ふ、八千鋒は、神代のむかし早蠅成す、魔軍降伏、天泰らけき、例もかくやと貿しく、思ふ衆心に勇みあり。然ば寄隊の大軍は、子二尅の時候よりして、衆艦漸次に漕出つゝ、三浦を望て走らする、第一番の先鋒の頭人、大茂林小彥和中と、濱川小渡銕久に、新附の海賊の頭領、水禽隼四郎綠林、錦帆八四九郎近範を副として、其隊の海賊と倶に五千餘名、巨艦四五十艘にうち乘たり。第二第三の隊は、小幡木工頭東良、士卒相從ふ者五千餘名、大石源左衛門尉憲儀、士卒八千餘名、有名の兵頭、是に從ふ者尠からず。第四番は、定正の長男上杉式部少輔朝寧を副將として、武勇の老兵、昵近の靑侍、華美に擐甲たる者一百餘名、雜兵と倶に一萬二千餘名たり。第五の隊は、總大將扇谷修理大夫定正、隨從の兵頭、箕田源次兵衛后綱、信城左傳達賴、九本佛九郎望洋、城峰麻生介廣原、是等を宗徒の隊長として、從兵二萬五千四名、總軍五萬に餘れれば、千百十數箇の巨艦に、眞帆揚て、白浪に轔る舵の响、篙工們が謌ふ棹の歌、皆野干玉の夜を犯して、衆艦三浦の澳邊に造るに、豫て風外道人の、契りし風術差ふことなく、猛可に順風吹起りて、投方便宜也ければ、舵工等は都て烏夜に惑はず、蚤く

く找み朝ひて、師父よ喃、大石憲儀が詣候也。嚮に教給ひぬる、水戰に宜き日は、既に是明日になりぬ、いよ〳〵那順風を賜ふべきや。船出は幾時候を好とせん、この義を諮問まつれといはれし、寡君の名代にこそ候なれ。教給へ。と請問へば、風外道人頷きて、善哉々々、信男信士、現明日は、八日になりぬ。貧道なでふ教を更んや。明日丑三の時候よりして、諸艦齊一漕出て、三浦の澳に錨兒を下しね。其折俺、大ならず、又小ならぬ順風をもて、蚤く那澳へ推もて遣ん。恁而其詰旦、黎明の時候よりして、俺又猛烈き順風を起して、敵を火攻に便宜を得させん。この餘の事は、前に示しゝ如し。やよな疑ひそ、勉めよかし。と言諄からず宣示せば、憲儀額衝き、阿と答て、示教うけばり候ひぬ。退りて寡君に反命せば、さぞな歡び候はむ。復こそ見參すべけれ。と告別しつ身を起して、山を下り馬を早めて、五十子の城にかへり來つ、隨卽前條の趣を遺なく聞え上しかば、定正いよ〳〵信仰して、兎毛の杪に置く露許も、敢疑ふ心なく、然らば疾艦汰して、這曛昏より諸軍兵を、分ち載するこそよかめれ。と詞急迫しく下知すれば、憲儀は唯々とばかりに、答て軈て退り出て、其隊毎なる隊長に、下知を傳へていそがするに、冬の日なれば短くて、夕陽西に淪みしより、士卒は反て准備に遑あらず。左右する程に七日の月の沒る時候に、五十子の城内なる、將帥、五萬の軍兵まで、皆悉出盡して、陸を離

郎助友が、父道灌の名代として、糟谷の舘より領て來ぬる、隊兵は僅に五百に過ぎず。況や今番水戰の、利害を論じ理義を詳にして、定正を諫るに、犯さゞることなかりしかば、定正怒に堪ずして、追退けて是を用ひず。遮莫定正親子に相從ふ、水軍の兵は、既に五萬餘に及びたる、开が中に、南海道より移り來にける、海賊の頭領に、水禽隼四郎緣林、錦帆八四九郎近範と喚做すあり。此は是嚮に三河の苛子崎にて、犬江仁、姥雪與保、蜑崎照文等に、對治せられし、海龍王修羅五郎、今純友查勘太と伯仲すべき、驕勇の手煆煉にて、船をもて家とすなれば、水戰の進退を、辨ずること極めて賢しく、且一千餘の支黨あれば、定正其罪を許して、則先鋒の頭人とす。威勢かくの如くにて、且赤喦百中（犬村大角が僞姓名なり）の如き者の帮助あれば、猶且敵の胆を、拉ぐ爲にとて、總兵五萬を僞りて、十萬餘騎とぞ倡へける。然れども這隊の水軍は、十二月八日の早旦に、洲崎の港口を攻破りて、稻村の城を拔くべし、と逆卜定たりければ、定正朝寧父子は、尙五十子の城内に在り。恁而七日の早旦に、大石源左衛門尉憲儀は、精進し沐浴して、鎧の上に淨衣を被て、駛馬にうち乘りつゝ、百個可の士卒を將て、いそぎて谷山に赴きて、軈て馬より下立て、攀登りつゝ山の半腹なる、洞内を覗ふに、那風外道人は、靑石の上に結跏趺坐して、香を燒き合掌して、經文を誦して在り。當下憲儀は、恭し

第九輯　卷之四十三、四

第百七十二回

定正水路に大兵を行る
音音江中に一船を燒く

誌表す這時武藏なる、五十子の城内には、十二月五日の早天に、陸地の諸將、山内顯定、其子憲房、足利成氏、扇谷朝良、千葉自胤、四家の隊長、白石重勝、大石憲重、横堀在村、原胤久等、各數萬の軍兵を將て、下總の葛飾なる、眞間國府臺、及行德を投てうち向ひしかば、今城内に在る士卒は、三萬餘名に過ぎざりしに、五日六日に至りて、甲斐の武田信昌の名代たる、武田左京亮信隆を首にて、近國の野武士、伊豆相摸なる海賊毎、勢を見て利を測り、多を負て敵を侮る、烏合雲集の、客兵無慮二萬餘名、倶に定正の隊に附まく欲りして、各先非を謝し、忠義を倡て、皆五十子の城に推參す。事の便宜は是のみならで、上總なる故の榎本の城主、千代丸圖書助豐俊が舊臣、濱縣馬助（浦安牛助友勝が僞姓名なり）を密使として、降書を齎し、且其家臣の宅眷たる、老弱四個の婦女子を、保質に參らせて、海上火攻の約束あり。獨巨田薪六

のみならず、亦是公事なりき。既にして、陸地二箇所の軍談は、こゝに說盡したり。是より又洲崎の澳なる、水戰は甚麼ぞや、分教あり。

赤壁阿瞞勢匆負。燒殫艨艦有周郞。

こは前板坂東將帥の像贊のみ。猶詳に知まく欲さば、又卷を改て、且下回に、說分るを聽ねかし。




小文吾

下の宿所へ立よりて、報知せまく思ひしかども、人に知れんことを怕れて、果さゞりき。とうち勸解れば、又次團太鮒三は、毛野が智計の幇助にて、再生たる歡びを、いふべき便宜なかりしに、今番やうやく時至りて、安房へ赴くと云、歡びを告などす。又荘介小文吾以下の毎は、孝嗣の人と爲りを、最慕しく思ひしかば、其饗待犬江姥雪等に異ならず。又親兵衛には、昨日餽られし神藥にて、原胤久の深痍はさら也、この他も刀瘡兒に用ひて、即効あらずといふ者なし。但惜むらく、戰死せし、敵自家の士卒の骸は、慌りて皆埋めしかば、神藥こゝに至るといへども、其死を起すことを得ず。何どてかく幸なきや。意ふに皆是命數歇きし歟、然らずば業報ならんと云、主客の相譚ひ闌なる時、滿呂再太郎と安西就介が、酌を執て、盃を勸る程に、日景は既に欹きしかば、親兵衛急に別を告て、且同作の衆人を、いそがし立つゝ、青海波の、馬を牽せて今井河、今又渡す船果て、上總路投て立出けり。然ば親兵衛が、この日の進止、さぞな待らん、安房に在す、君と親とを等閑にして、只其情義の故をもて、這頭に路草を喫けるは、相應しからずと思ふ者もあらん。开は人を知ざる也。蓋這陸地二箇所の鬪戰に、一箇も軍監なし。親兵衛は、悄地に東辰相と商量して、且義通君の命を稟て、其職を兼たれば、異日軍功を娼む者の、誣言を防んとて、故意行德へ立よれる也。然ばこの小集は、私の所以

朝寧主の口中にてしるければ、今さらいそぐは要なしとて、今番は路を貪らず。先犬川犬田を訪ふて、那里の勝軍の事の光景を、よく尋問ひ聞知りて兩舘へ稟上んとて、この日行徳へ立寄りけり。然ばこの時荘介小文吾は、猶今井河原の柵に在り。昨日盾持傔杖朝經と、一二の精兵を洲崎の陣へ、急遞脚の使にうち起せて、闘戰全勝の㕝、幷に生口の交名を注進しけるに、この日石濱の、千葉の老黨士卒は、自胤擒になりぬ、と聞知りて、驚き怕るゝこと大かたならず、然では這孤城を久しく抱へがたしとて、主君の妻妾、諸臣の宅眷と、資財什物を、各舫に執乘せて、城を棄て落亡けり。この義を夙く河原の柵に告る者ありしかば、荘介小文吾うち笑ひて、我より捉るにあらねども、开が儘閣かば、野武士山賊の據ることもあらんかとて、隨即登桐山八郎良于に、隊兵一千二三百を分ち授けて、亟に石濱へ遣して、件の城を守らせけり。有恁りし程に今日とは知ざる、犬江親兵衞、姥雪代四郎が、政木大全、石龜次團太、越鮒三と、新附の野武士、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎們を相伴ひて、國府臺より來にければ、迭の歡びいふべうもあらず。軈て柵の大廳に、賓主の席を設つゝ、月屬會話に、時の移るを覺ず。滿呂復五郎、再太郎、安西就介、大樟村主も、這席末に列りて、倶に歡びを盡すめり。當下荘介小文吾は、次團太にうち對ひて、曩に稻戸津衞が好意にて、片貝の躱處を脱れ去りし時、足

或は戰死せし者は、皆是其君の爲に命を惜ねば、忠臣也、豈是を憐ざらんや。この故に臣等が祕藏の、神藥を施行して、君が隊の兵と聞えたる、科革七郎望見一郎、この他、寄隊の士卒の死を救ふて、其還らんと願ふ者は、饒して其主に復しにき。敵の士卒すらかくの如し、君に於て何かあらん。義成安房へ迎まつりて、舊交を脩め候はん。と言叮嚀に慰れば、信乃現八も復共侶に、臣等君を辱めんとて、父祖の上さへうち出て、云云と稟すにあらず、只其忠義の心操を、知せまつらんと思ふのみ。又こそ見參すべけれ。と告別しつ外面へ、うち連立て退出けり。この時左右の檻室に在る、憲房爲景、盛實等はさら也、守護の士卒に至るまで、這三犬士の忠孝博愛、始を推て故を忘れぬ、眞面目は是なめりとて、感服せざるはなかりけり。恁而犬江親兵衛は、この宵東辰相に意衷を告て、義通君に身の暇を請ふ程に、眞間井秋季、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太們は、施藥の事果てかへり來にけり。こゝをもて親兵衛は、次の日の早天に、信乃現八、并に直元逸友以下の隊長、諸頭人に相別れて、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太們の伴當夥兵、政木孝嗣、石龜次團太、越鯽三、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎と、其隊の兵六十餘名を將て、名馬青海波にうち跨りつゝ、洲崎の陣營へ赴くに、昨日の朝洲崎へは、夥兵兩三名を參せて、歸東の義を注進し奉りしに、洲崎の澳の勝軍は、既に

の時に臨みて、駈て背にうち駝せて、我公子義通の、陣營に致せしは、神明佛陀の冥助にて、信乃と臣等が始を忘れぬ、胡馬の北風燕鵲南枝の、心を監み給ひけん、一大奇事にて候ひき。といはれて成氏いよ〳〵羞て、連りに額に汗するのみ、いまだ答に及ばざりしを、信乃は又慰めて、君知し召れずや。嚮に横堀在村と、新織素行は、御陣の敗を見かへらず、二騎連立て落亡せしを、底不知野の邊にて、臣等赶蒐て、射て斃しにき。然るを地方の莊客が、其首を斬もて來て、實檢に入れ候ひき。寡君這回の軍令に、只當の敵を撃ことを許して、敵の首を捕る者を功とせず。然るを在村素行は倶に死首を土民に捕られて、軍門に梟られしは、年來君を惑して、賢を害ひ民を虐げて、家を富したる、天罰にこそ候はめ。と解れて成氏嘆息して、いはるゝ顚末、皆金玉に異ならず。我不明にして始より、和郎等の賢良英才なるを思はず、棄て鄰國の寶に做したる、悔は楚懷の憂に同じ。烏の頭は白くなるとも、生て滸我へ還りがたけん、覺期は既に究めたり。と答て嗟嘆に堪ざりけり。登時犬江親兵衞は、找み出つゝ拜していふやう、やよ殿さのみな嘆せ給ひそ。臣等も里見の防禦使なる、犬江親兵衞仁に侍り。言自負に似て候へども、寡君義成が仁義の家風に、相從ふ我們まで、惻隱忠恕辭讓是非の、行ひにあらずといふものなし。こゝをもて、咋今の鬪戰に、自家はさら也、敵の士卒の、或は深痍を負ひ、




成氏擒になりて
夜三犬士に弔
慰めらる

緝捕を課しかば、臣等則芳流閣上に攀登りて、組打の顛末は、目今信乃が口狀に具也。然ば
その折氣絶して、船行徳へ流れ來つ、我に復りて由來を問ふに、信乃は疎忽の失あるのみ、搦
捕らるべき罪にあらず。且臣等が實父糠介は、則信乃と同鄕にて、信乃を紹介の手簡あり。
奇遇は、又只これのみならで、信乃と臣等は宿因あり。異姓の弟兄たりぬべき、徵は迭に身の
內に痣ありて、形牡丹の花に似たり。又感得の靈玉あり。小文吾と親兵衞も、同因同果の痣あ
り玉あり、八人たるべきそが中に、この日この時、小文吾等と、四人相逢ふことを得たり。嗟
れば信乃は罪なき者也、必搦捕るべからず。然ばとて、臣等只一人、阿容々々として滸我へ還
らば、又其罪を議せられて、必在村が手に死ん。進退維谷りぬ。この故に信乃と倶に、躱れ
て行徳の古那屋に居り。是より浮浪六稔を歷て、義兄弟等と共侶に、召れて安房へ參りしは、
こも亦信乃が口狀に具也。薄情やな、君は只、在村が奸虐私論の誣言をのみ、信容させ給ふを
もて、今も猶信乃と臣等を、憎しとのみ思し召すらめ。信乃と臣等が意衷はしからず。非如恩
仇地を易て、今君命に依るといへども、舊君故主を敵とし逆へて、箭を飛し鋒を舞して、死を
爭んは、本意にあらず。この故に始より、君が一隊の御陣へは、杉倉武者助直元、田稅力助
逸友をのみ指向て、信乃と臣等は、顯定親子の隊と戰ひしに、料らず靈豬の援あり。君が敗軍

を告まつらずは、不幸ならんと思ひしより、言憚りなく候ひき。と心の誠うち出て、言爽に說果て、やをら後方を見かへりつゝ、身を退かせて座を讓れば、現八やをら膝を找めて、成氏主にうち向ひて、額衝て且告るやう、臣等は素是微賤の小卒、愆る瀨に立候はずば、御視徹を饒されんや。然るを咫尺し奉りて、名告るは烏滸に候へども、本貫は上總にて、武藏なる豐島大塚の氓（他鄉より流寓の民を氓といふ）糠介が獨子なりしを、襁褓の中より御內の走卒、犬飼見兵衞に養れて、許我の藩中にて成長り候ひぬ。養父歿して、卑職を嗣て、則犬飼見八と喚れしは一霎時の程にて、今は里見の防禦使なる、犬飼現八金碗信道にて候也。臣等貴藩に在りし日は、兵員ならぬ卑職なれども、君に仕へて私なく、忠義を盡すに至りては、祿の多少と職の尊卑に、依るべくも候はず。是をもて、髫歲たりし初より、師を擇み技を勵みて、兵法七書、弓馬劍術、緝捕白打に至るまで、學び得ずといふことなし。然りけれども、御內の家宰、横堀史在村は、能を娼みて賢を擧げず、反て臣等が媚ず、求ることなきを憎みて、職を轉じて獄吏に做しぬ。臣等は牢獄の小吏たること、其情願にあらざれば、屢辭ひ侍りしを、在村不敬の罪とし誣て、臣等を牢獄に繫ぎたり。恁而一日、犬塚信乃を緝捕の力士們、芳流閣上に挑み負て、死を致す者多かりしかば、在村則計ひ稟しつ、臣等を獄舍より饒し出して、件の

死ざることを得たれども、滸我にて受たる刀傷の、破傷風に做りしかば、身は病臥て古那屋に在り。古那屋は則小文吾の親、文五兵衞が歇店の號也。折から横堀在村が沙汰として、御内の侍新織帆大夫素行が、臣等を緝捕の頭人を奉りて、夥兵を多く從へて、行德へ來て穿鑿りしかば、臣等が窮阨逼迫て、免るべうもあらざりしを、小文吾が妹夫、這里に侍る犬江親兵衞が父也ける、義士山林房八が、其妻共侶身を殺しゝ、其鮮血をもて、臣等が瘡に濺ぎしかば、奇藥の效愆たず、我破傷風亟に愈て、身は只恙なきことを得たるのみならず、房八が面影の、よく臣等に肖たるにより、小文吾則其首をもて、新織帆大夫を欺き還して、再厄運に解けたれば、義兄弟と共侶に、遊歷浮浪六箇年を歷ぬる程に、臣等は同因果の義兄弟、俱に犬をもて苗字に做せる者、八人なるべきよしも知られ、且未生以前より、里見殿に宿因ありて、家臣たるべきよしを悟れども、いまだ其時至らざりしに、今玆の夏四月の時候、君臣の天緣竟に熟して、皆共侶に安房へ徵れて、寵遇特に淺からず。愿而這回の鬪戰に、臣等と犬飼現八は、義通の隊に隷られて、則這地の防禦使たり。聊螳臂を抗しより、連勝して這田地に至れり。遮莫微功に誇んとて、家の賤譜を稟すにあらず、只父祖の忠魂義胆を、御聽に入れんとて、多辯に及び候ひき。其將六日の菖蒲なるべく、十日の菊に似たれども、この折をもて先人の、志

僻たり。且我父の姉龜篠も、同惡にして憑しからず。父が年來祕藏せる、村雨丸の名刀を、言に假托け術をもて、奪拿らまく欲せしを、父は猜して防げども、既にして年闌て、病痾旦夕に身に逼るをもて、命長からじ、と覺期して、一夕臣等に父祖の忠義と、村雨の大刀の傳來を、說示すこと右の如く、汝成長りし時、滸我の御所へ參上りて、這名刀を獻りて、且其大刀の傳來と、父祖の忠義を聞え上て、仕官を願ひ奉れ、と敎る詞の露ならで、光玉なす刃を拔て、腹掻斫て俯侍りぬ。この時臣等は十三歲、親の遺訓に從ふて、憑しからぬ伯母夫婦許、養れつつ堪がたき、艱苦を忍ぶ年を歷て、身は稍成長りしかば、今玆より六稔以前、文明十年夏月の時候、臣等滸我に赴きて、隨即御所に伺候しつ、村雨の大刀を進らせしに、猶思慮足らずして、其名刀は、歹人に、拔易られしを悟らざりき。然ば橫堀在村が、贋物也、と看破りて、一言半句も分說を听ず、反て臣等を隣國の間諜兒なるべしとて、猛に居多の力士に課て、搦捕せんと欲せしかば、臣等勢ひ已ことを得ず、緝捕の力士を殺拂ひて、芳流閣とか喚做たる、高樓の屋上に攀登りて、脫れ去まく欲せし程に、御內の力士、犬飼見八が、登り來ぬるに組打して、兩失脚しつ、滾落て、閣下なる河邊に在りける、船に受られ、纜斷離れて、身は氣絕して在りし程、船は急湍に推流されて、行德の浦に寓りしを、當日地方の豪傑、犬田小文吾親子に救れて、

擾亂に、結城十萬の義兵三稔を歴て、竟に弓折れ勢竭て、兩公達は敵の爲に、俘囚と做り給ひし折、臣等が大父三戌は、殺て出猶戰ふて、陣歿をしてけり、と口碑に傳へたり。當時番作十八歳、父の遺訓により重圍を殺脱、像見の名刀村雨丸を、腰に帶つゝ兩公達の、去向を悄地に跟まつりて、美濃の垂井に至る程に、痛しきかな兩公達は、金蓮寺にて御事あり。番作は其御終焉を、見るに得堪ず、奮然と、跳り出つゝ劊手の武士を、只一刀に斫仆して、兩公達の御首級を、奪拿りつゝ辛くして、多勢の勢を殺脱て、信濃路に來にければ、路傍なる道場に、兩公達の御首級を、悄地に瘞め奉りぬ。爾るに當晩番作は、宿を投めし草庵にて、手束と喚做す少女に逢ぬ。开は結髪の妻にして、其父も亦結城にて、匠作と倶に陣歿しつ、母さへ早く世を去りて、所寓なき身の今さらに、天縁の熟する所、遂に迭に捨るに忍びず、則是臣等が母也。折から父は金蓮寺にて、受たる痛痍に堪ざれば、筑摩に赴き湯治して、稍刀瘡は愈たれども、是より行歩自由ならねば、夫婦相携て、辛くして故郷なる、武藏の大塚にかへり來つ、是より氏を改めて、犬塚と做喚して、兵法武藝を郷黨に、敎へて年を歴る隨に、臣等を生候ひぬ。幸なきは只是のみならで、母は臣等が六七歳の比、舊病重りて身故りにき。父も年來多病なりしに、則父の姊壻なる、大塚蟇六と做喚せし細人は、則大塚の郷の莊官にて、其心術便

ば、親兵衛は明日の早天に、代四郎以下の儕と、孝嗣次團太鮒三等、寄舍五郎壇五郎、その黨さへ相伴ひて、安房へ還まく欲す。恁遽しき折なれば、親兵衛が京師にてありし事、又歸路の事は、義通君にも辰相にも、告るに具ならざるものから、事に觸ては聞知る者あり。然らでも信乃等が聞つる隨に、義通君に告稟せしかば、人皆これを知ざるはなく、奇異に驚き武勇を譽て、もて茶話にぞしたりける。閒話休題。爾程に信乃親兵衛は、敵といへども生口の敗將、隊長を侮り卑めず、義通君に聞え上て、其欵待に等閑なく、警固の士卒を儆めて、無禮なることを饒さゞりしかば、現八も共侶に、三四室なる囹圄を看輪りて、憲房爲景、盛實等を問慰るに、憲房爲景は、羞て頭を擡げ得ず、衣うち被ぎて、陽睡して居り。又成氏の身邊に造るに、是も亦、警固の士卒にうち圍れて、燈燭の下なる衵の上に坐して、手を叉き頭を低て在り。當下信乃現八親兵衛は、鎖を衛子等に啓せて、倶に檻室の内に找み入て、額衝き拜して安否を諮へば、成氏は驚きながら、手を解き急に禮を返して、和殿等は、是誰ぞ。と問ふ、問れて信乃は膝を找めて、敬て答るやう、早くも忘れさせ給へる歟、臣等は則生人ならず、君が兄に御坐せし、春王君安王君の、小傅なりける、武藏國豐島郡の人氏、大塚匠作三戌が孫、犬塚番作一戌が獨子なる、犬塚信乃金碗戌孝にて候也。恁稟さば、言故にたれど、往時嘉吉の

次團太鮒三等と倶に、見參の禮果て、兩國河原へ退らんと請ひしを、義通固く留め給へども、他們は只氣を使ひ、任俠を磨くのみにて、武士たる事を欲りせず、熟たる活業も候へば、枉て身の暇を賜るべし。と願ひ稟すにより、親兵衛孝嗣も、是を禁るに術なきよしを聞え上しかば、則五十三太素手吉等六七十名には、當坐の賞祿を多く賜りて、異日稲村より召れなば、必まゐるべし。と仰らる。この時亦孝嗣も意衷を陳て、既に犬江に代らまく欲りしし志は果したり。今は犬江のかへり來て、且寄敵落亡たれば、この地に所用なき身になりぬ。向水們と共侶に、退るべしといひしを、親兵衛何でふ饒すべき。義通君も、其言を傳へ聞て、放ち給ふべくもあらず、管待いよ〳〵厚かりければ、孝嗣は今さらに、辭ひ稟さんはさすがにて、只得次團太鮒三等と倶に、當城に留りけり。爾程に犬飼現八は、寄隊敗軍の往方を穿鑿果して、田稅逸友と倶に、假名町を退陣して、當城へかへり來ぬる程に、箭斫河にて、思ひがけなき、水路の敵將、扇谷式部少輔朝寧の水死を甦生らせて、更に擒にしぬるよしは、既に上に見えたる如し。現八及力助逸友等は、敵將足利成氏を、靈野豬が斷齎して、義通君の初陣の、華に倣せしといふ奇談に、胆を潰しつ相賀して、逸友と共侶に、義通君に見參す。又眞間井樅二郎、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等は、神藥施行の事果て、この日の曛昏にかへり來にけれ

と議すれば、二犬士この意に儘せて、直元と共侶に、退りて連署の注進狀を、筆吏に寫せなどす。既にして曉天になりし時候、振照倶敎二弘經は、義通君の命によりて、夥兵幾名か領て、行德口なる、犬川犬田が陣營に赴きしに、那里より莊介小文吾の使として、滿呂再太郎信重が、安西就介景重が隊の兵を將て、快船にうち乘りつゝ、暴河を泝り來て、犬川犬田が勝軍の告文と、信乃現八へ與る書狀を呈閱す。是によりて、這再太郎は、滿呂復五郎重時の、養嗣たるべき者なるよしも、又就介は、安西出來介が、獨子なるよしも知られて、那里の鬪戰に、莊介小文吾が、千葉自胤と大石憲重原胤久等を擒にしたる事、胤久は深痍にて、命危きよしも、告文に載たるに、且再太郎就介が、口狀にて具也ければ、東辰相歡び譽て、這兩個の少年を、見參に入れしかば、義通則再太郎就介に、牽出物を賜りて、則這里よりも、方僅振照弘經を遣せしかば、若們が還りいなざる以前に、這方の事は知らるべし。只この上は、舘へ注進をいそぐべし。と仰合させて、身の暇を賜ひけり。この時犬江親兵衞は、那里にも刀瘡兒多しと聞て、則神藥一盒を、莊介小文吾に餽り遣せしかば、那隊の士卒の重瘡はさら也、原胤久の如き必死の人も、死ざることを得たりけり。恁而纜橋綿四郎喬梁と、犬江親兵衞が夥兵每は、この朝安房へ急遞脚の使を承りて、洲崎の陣營へ赴きけり。有恁りし程に、五十三太素手吉は、

て養置ける莊客們に、米錢許多賜りしかば、皆國恩を拜戴して、歡ざるはなかりけり。こは是後の話也。却說、この宵國府臺なる城内には、信乃等が云云と、議し稟す程に、小夜深しかば、親兵衛則計ひ稟しつ、政木大全は、苦戰の疲勞あらん、疾憩室へ退りて、睡に就べしとて、身の暇を賜ひしかば、案内者等孝嗣を倶して、外面へ退出にけり。登時信乃は、又辰相等に談ずるやう、この地の大敵皆散落して、稍靜悄に垂とす。明日は夙めて急遞脚の使者を、洲崎の御陣へまゐらせて、先この義を告まつり、且那里の御安危を、伺ひ奉らずはあるべからず。但し行德口なる防禦使、莊介小文吾はいかなるや。先他等に仰合されずは、不便にこそ候はめ。と議すれば亦親兵衛も倶にいふやう、臣等は京師より、御使を果し來て、いまだ稻村へ進らざれども、縡に信乃に傳達せられて、防禦使たるべきよしの、台命を奉り、且御大刀さへ賜りたれば、寄敵この地に在らん程は、鬪戰を援け奉るべし。寄敵旣に退たるに、猶當城に掩留せば、怠れるに似て、不忠なるべくや。といふ議論を、辰相うち聞て、二犬士の意見其理あり。然らば行德へは、振照倶敎二を遣して、那里の安危を問すべし。又洲崎の御陣へは、繼橋綿四郎をまゐらせて、この地の勝軍を注進せん。犬江生は從來の夥兵兩三個をもて、歸東の由を告奉りて、寄隊彌在らず做なば、その折稻村へ參るとも、いまだ遲きにあらざるべし。

と挑み戰ひ、現八は亦繼橋喬梁を副として、憲房主と戰ふて、却成氏主の一隊には、杉倉と田稅を指向て、三面倶に戰克しは、靈猪の援によりてなり。爾るにかの折直元逸友兩個をもて、成氏主を擒にせば、臣等が做すにあらねども、臣等は防禦の正使にて、其軍配は外ならず、則臣等が隊配なれば、五十歩百歩の差池あるのみ、臣等が擒に做せしに同じ。この故に神明地靈、那靈豬をもて、成氏主を駈駝せて、岡山なる御陣へ饋りて、もて郎君の御手に入れて、這回郎君初陣の、御手柄に做されしかば、臣等は故主を擒にすと云、惡名を得ずなりにき、と今こそ悟れ其奇其妙、凡智に量知られんや。必是伏姫神の、神通廣大にして、物に憑給ふ、冥助に疑なかるべし、と思ふも疎に候はめ。と心の誠うち出て、言細やかに解諭せば、義通感悦いふべうもあらず、況や辰相直元孝嗣等は、說れて思旋らせば、信乃が誠心、始を忘れず、曩には飽まで情なかりし、那君をしも怨ることとなき、理義分明なる高論は、人の惑ひを醒すに足れり。こも學問の力にこそ。と感嘆すれば親兵衞も、有理々々然也。と點頭て、巵言也。とぞ稱へける。然ば義通凱陣の後、この義を嚴君、義成主に告給ひしかば、義成則、箭斫河原なる摩利支天神へ、堂料五十貫文を寄布し給ひて、且其堂内に、伏姫神の神號木主を置くことを、許すべし。と制度せらる。是によりて、摩利支天の別當西妙、幷に初那野豬六十五頭を、虛舟より援陟し

當城内へ倶して來つ、則一室に屏籠て、番士を置て守らせたり。獨那君のみならず、犬飼犬江が擒にして、當城内へまゐらせし、憲房主あり、爲景孺子あり、又齋藤盛實あり、こも貴人也、隊長なれば、各檻室を異にして、衛士多く附置きぬ。城内賓客多かるは、是和殿們の手柄也、愛たき事にあらずや。と告るに感ずる、親兵衛はさら也、直元はうち驚くまで、且呆れ、且歡びて答るやう、原來かの折、成氏主も、靈野豬に駈られて、岡山へ將て去られし歟。臣等は、鬪戰稍克得て、敵を漏さじと思ひしのみ、然る光景を見ざれば知らず。さても〳〵。とばかりにて、悟るに由もなかりけり。當下信乃は、謹みて、辰相に答るやう、目今創て承る、那靈豬の掙きは、實に奇中の一大奇事にて、人のよく做得べき事にあらず。初臣等は、箭斫河をうち渡して、寄隊を逆へて戰ひしかども、成氏主の一隊には、直元逸友をのみ相向はせて、臣等は一トたびも箭を飛し、鋒を交へ候はず。其故如何とならば、那君は、臣等が大父、大塚匠作の主筋にて、父番作も當初は、其餘祿をもて成長れり。又義兄弟犬飼現八が爲には、是現在の故主也。今は恩仇地を易て、讐敵の思ひをせらるゝとも、只君命をのみ倡て、鋒を交へ箭を飛し、戰ひ克て、或は生拘り、或は其首を捕らば、人其是を何とかいはん。君子の忍びざる所なれば、正人には悄るべし。この故に今日の再戰にも、臣等は、眞間井秋季を將て、顯定主

御褒賞は倒にて、當りがたく候。と謝するを義通君推禁めて、信乃、其靈豬の事はしも、又一層の奇事あり、六郎具に告ずや。と仰に辰相阿と應て、膝を找めて談ずるやう、犬塚犬江、自餘の人々も听ねかし。嚮に郎君岡山より、御歸城の議定りて、既に出んとし給ふ程に、怪むべし、一個の野豬大きさ犢に等しきが、一個の武者の鎧の表帶を、牙に引掛け背に載て、走る事飛鳥の如く、岡に登りつ、郎君の、御馬前に來にければ、伴の衆兵吐嗟と騒ぎて、防ぎ禁んとせし程に、野豬は背なる、武者を撻と振墜して、走りて往方は知ずなりにき。こは未曾有の奇事なれば、咱等則雜兵に、件の武者を扶起させてよく見るに、大將品の人なるべし、戎衣都て綺羅やかなるが、既に半生半死にて在りしかば、藥を與へ勦せて、且其姓名來歴を鞫問するに、其武者いはざることを得ず。則寄隊の大將にて、滸我の左兵衞督成氏也。嚮に自家敗軍の折、鈍くも暴豬に馬を仆されて、身も駈られき、と思ひしのみ、こゝへ將て來ぬるを覺ず。意ふに這里は敵陣ならん。命運の傾く所、今更兎るゝに路あらず。左も右もせられよ、と陳じ給ひしかば、咱等則答ふらく、御推量の如く這地方は、岡山の陣營にて、目今義通歸城の折也。御心易く思召ね。寡君義成は仁人なるに、父祖の舊交も候へば、御命に及ぶべくもあらず。先國府臺の城へ倶しまつらん、卒給へ、と慰めて、そが儘馬に扶け乗せて、士卒に緊しく守せて、

擒にして、當城へ進らせしは、我面をしも起したる、這大功は、信乃現八に、拮抗すといはまくのみ、孰れを伯とし孰を仲とせん、只感悦の外あらず。と年には倍て恰悧くも、詞委なく稱へ給へば、辰相是を執合して、御諚畏う承り候ひぬ。抑三犬士の才幹武勇は、左右いふべくも候はねども、就中犬江仁が、殺伐攻戰の場に于て、仁慈の心を喪はず、敵に施藥の一條は、宋襄の仁に似たれども、武をもて人を征する者は、威勢必長久ならず、徳をもて人を征する者は、十世の後まで川流して、淳和せずといふことなし。則是舘の御本意なるを、親兵衛がよく仕りぬ。と譽るを親兵衛推禁めて、御家老、仁を羞殺なし給ひそ。舘の御盛徳は格別也、臣等は今日來て今日承りし、御軍令に從ふのみ。細人の威勢あるは、敢忌憚ることなし。懲して新に倣すにあらずは、爭ひ已ときなかるべし、と思ふばかりの所行なりき。と辭ふを信乃は諾なひて、其言愚意も相似たり。譬ば那靈豬の如きは、牙に蕉火を結著たれば、戰車を燒きしは然ることなれども、其折一頭も火に死なず、又敵にも撻殺されず、征方も知ずなりけるに、亦再戰の折に顯れ出て、自家を援けて敵の騎馬を、斯仆し又斯破りて、搔消す如く見えずなりにき。意ふに恠る奇事は、則當家を守り給ふ、伏姫神の冥助ならずは、猛き獸のいかにして、恠る擀きを倣すことあらんや。畢竟我君年來の、御善政の餘福にて、臣等が功德ならざるを、

犬飼現八、田稅逸友、姥雪代四郎等がかへり來て、義通君に拜見の後、別に皆召出されて、功を譽させ給ひけり。間話休題、この宵義通君は、犬塚信乃、犬江親兵衛、杉倉武者助、繼橋綿四郎、政木大全を召よせて、兩茶の禮を賜るに、東六郎執達たり。給侍には、七浦六郎、朝夷三彌、白濱七郎ぞ侍りける。當下義通は、信乃親兵衛、大全等が、軍功を譽させて、うち譚ひ給ふやう、嚮には犬飼現八が、齋藤兵衛太郎を生拘りて、當城へまゐらせたる、是軍功の首にて、今日は又寄隊の副將、上杉五郎憲房を擒にして、岡の陣營へ牽せしは、其勳功、全く現八にあるに似たり。然りけれども、信乃が火豬の謀をもて、寄隊の戰車を燒にあらずは、今日の全勝を得がたかるべし。有恁れば其軍功は、正副伯仲すといはん歟。是に似るべくもあらぬ、咱等は二犬士と、直元逸友等が、鬪戰を援んとて、曩に岡山より出陣しける、途に長尾景春の、三隊の勍兵に撞見して、鬪戰難義に及びし折、思ひがけなき政木大全が、親兵衛と交遊の義に仗りて、他に立も代らんとて、同憂同宿の義士、次團太鮒三、五十三太素手吉とかいふ者と共侶に、其徒六七十を從へて、突然として援け來て、那鋒尖を折けども、尙勝負を分たざりしに、又幸ひに親兵衛が、京都よりかへり來て、伴當夥兵、新參の義士們と倶に、數十名をもて援て、一瞬間に那勍敵を、殺頽し撃走らして、剩景春の愛子と聞えし、長尾爲景を

行して自家の、士卒は更也、敵といへども忠死の者は、死を起し生に回して、降らんと請ふ者は是を留め、本貫に還り去まく願ふ者は、饒して放ち遣るべき事、但し濟我の佞臣、横堀在村、新織素行は、信乃に射て斃されし時、士民が、其首を捕て、齎せし積惡天罰の事、又犬飼現八は、猶殘燼を鎭ん爲に、權且假名町に在陣の事、又眞間井樅二郎、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太は、或は施藥の頭人を奉り、或は施藥の裁領として、猶昨今の戰場に在勤の事、今朝しも寄隊の三將再戰の時、那野猪六十五頭、又忽焉と見れ出て、自家を援けて、寄隊を敗りし、出沒不測の事までも、漏すことなく告稟しょかば、義通感悦いふべうもあらず、この宵正廳に出まして、信乃親兵衛、并に直元喬梁、正木孝嗣さへ、召よせて、對面し給ひけり。この他、犬飼現八、田税逸友は、猶假名町の陣中に在り。又潤鷲手古内美容は、深痍を負ふて、臥てこの城内に在りしを、親兵衛が來ぬるに及びて、又神藥の奇效によりて、亟に愈ることを得たり。只手古内のみならず、嚮に義通の從軍たる者の痍を負へるは、皆親兵衛が神藥にて、一人も恙なかりけり。又次團太、鮒三五十三太、素手吉們は、義俠といへども町人也、又直塚紀二六、漕地喜勘太は再臣なり、又須々利壇五郎、一二四的寄舍五郎們は、他鄕の野武士なり、こも亦倶に功はあるべけれども、防禦使及隊長等と、必同列なるべからずとて、是等は次の日、

第九輯　巻之四十二下

第百七十一回

神變を操りて伏姫猶子の初陣を華やかにす
舊君に謁して信乃父祖の忠義を詳にす

是より先に、犬塚信乃戍孝、杉倉武者介直元、及犬江親兵衛仁等は、新參の義士、政木大全孝嗣并に石龜次團太、越鮒三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉、須々利壇五郎、二四的寄舍五郎等の義士と、其徒さへうち合せし、隊の者多く從へて、十二月八日の下晡に、岡山の陣營にかへり來ぬる程に、義通君は、自家勝軍のよし聞えし時、東六郎辰相が薦め稟すによりて、岡の陣營には、鳥山眞人以下、老煉の士卒、一千有餘を留め戍らせて、既に國府臺の城へ、還らせ給ひぬ、と聞えしかば、信乃等は徑に、箭斫河を舫渡りして、臺の城に歸陣しつ、隨即東辰相に就て、寄隊は皆敗績して、迹なく落亡せし事、政木孝嗣們が、義侠勤軍戰功の事、犬江親兵衛が歸東、武功拔萃の事、并に姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等が、武勇の挊きの事、又二四的寄舍五郎、須々利壇五郎們が忠戰の事、又犬江親兵衛が意見をもて、神授の靈丹を施

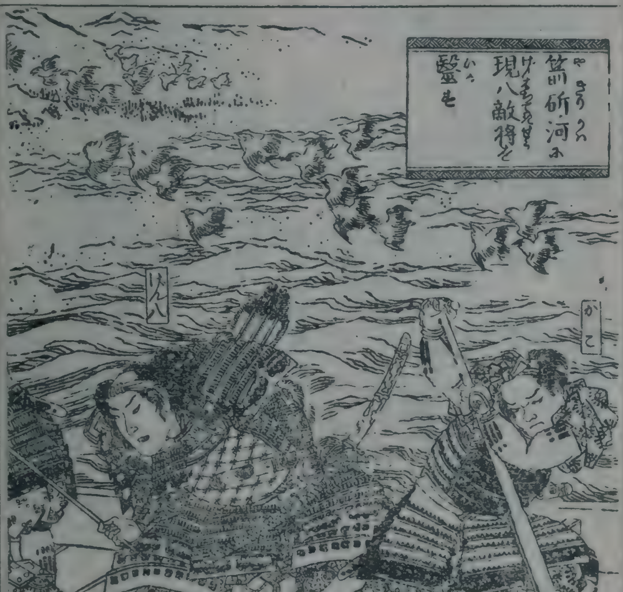
を招了しけり。是によりて這人は、管領定正の、庶長子なる、式部少輔朝寧なるよしも、正可に知られし、又昨日洲崎の澳の鬪戰に、寄隊敗績しける事の光景も、那里の告を待ずして、這里には夙く聞えけり。夫得と失とは天に在り、又人に在り。求るときは則得、棄るときは則失ふ、こは其得失の人に在る者也。又不用意にして得ぬるあり、小心して、反て是を失ふことあり。這得失は天に在り、人のよく做す所にあらず。譬ば老氏の所云、泰山に貨あり、貨に心なき者、これを得るといふが如し。看官こゝに意せよ。蓋這陸路二箇所の鬪戰に、滿呂復五郎重時は、寄隊の大將朝良を、深川の磯に赶蒐逼りて、旣に擒にすべかりしを、反て犬阪毛野に獲られたり。這得失は人に在り。又洲崎の澳の水戰に、犬山道節忠與は、上杉朝寧を射て落したれども、矢場に其首を捕るに由なく、反て現八に其敵を獲られて、剩親兵衛が神藥にて、朝寧は再生たり。這得失は天に在り、人のよく作す所にあらず。是故に曰、得と失は天にあり、又人に在り。よく思はずはあるべからず。世の人この理に暗ければ、惑ふて且天を怨み、人を咎めざるはなし。那を醒さまく欲するは、作者の老婆深切にて、是本傳の、本傳たる所以也。越に先其緒を解く。道節朝寧を射る事は、後回水戰の段に具也。看官前後を照して見るべし。

時、やをら推居させて是を見るに、初は土の如くなりける、面部總身、稍血色を出し來て、中脘溫熱あるに似たれば、親兵衛うち歡びて、恁ては這人必生くべし。徐に城內へ舁入させて、臥さするにしくことなし。といふに現八こゝろ得て、又雜兵を城へ走らせて、轎子一挺舁せ來させて、則其轎子に、件の武者をうち乘せて、舁せて臺の城へ遣すに、現八親兵衛は、左右に立てゆく程に、犬飼が隊の兵每も、艦より出て、轎子を、うち守りつゝ齊整たり。恁而犬飼現八犬江親兵衛は、俱に國府臺の城にかへり來つ、則犬塚信乃に、件のよしを告知せて、且東辰相に就て、義通君に聞え上て、却水死の少武者を、そが儘閑室に臥しめて、士卒に是を守らするに、約二時許にして、那人遂に甦生りて、手を動し又脚を動しなどする程に、稍我に復りけん、やをら頭を擡げつゝ、己を守る士卒を見て、うち驚くのみ所以を知ず、其身のこゝに在るよしを、悟難つゝ士卒に問へば、士卒則其義を告るに、心いよ〳〵驚れぬる、身は憖に蘇生して、果敢なく敵の城內に、俘囚に做りし悔しさよ、と思ふものから可爲もなし。恁て現八親兵衛信乃等が、義通君の旨を請まつり、且辰相に告て、直元と共侶に、這蘇生の少武者を、城の問注廳に召出して、其姓名來歷を鞫問するに、詞を卑くし禮を正しくして、叮寧に問慰めしかば、少武者は里見君臣の、仁に愧義に服して、賴陳ずることを得ず、言皆其實情

しかば、軈て一個の雜兵を、臺の城へ走らせて、親兵衞に義を告て、那神藥を乞せしかば、親兵衞聞て、時を移さず、伴當才に二三名を將て其使と倶に來にければ、現八則親兵衞を、艦に請乘せ席を讓りて、告ること上に寫しし如く、且其意衷を解示して、件の死骸を見せしかば、親兵衞隨卽檢し畢て、現八に向ひていふやう、犬飼和殿の推量妙也。こは寄隊水軍の副將と聞えし、朝寧なること遑ふべからず。この人命數いまだ盡きず、且平生隱慝なく、死して二十四時を過ずは、活すに生ざることあらんや。然ば今この死を救ふて、拘置かば、那大敵を、いよいよ懲すに足りぬべし。この義を異日犬山が、傳へ聞知ることあらば、さぞな腹を立べけれども、こは道節が仇の子にて、正敵にあらざれば、飽まで盡すは要なき所行也。實に和殿の意見の如く、是等の人を活し置ずは、館の仁慈、天地に等しき、御盛德に違ふべし。兵每早く此死人の、戎衣を脫せよ。といふに雜兵こゝろ得て、拯み寄る者兩三名、左右して水死の武者の、戎衣を解き果しかば、親兵衞則腰を捞りて、不死の神藥を拿出つゝ、先死人の口中へ、兩三番推入れて、又その矢傷へ推入れつ、そが上に又藥を布きなどして、又其胸膈へ塗らし畢て、却筋力ある雜兵に吩咐て、死人を倒に抱せて、いと徐に推立せて、其腹內に在る所の、潮水を吐するに、譬ば壜器を輾したるごとく、其口より出る水、幾斛なるを知ず、既にして吐盡せし

をやをら拔拿りて見るに、箭幹に漆せし、四箇の細字ありて、犬山忠與と讀れしかば、現八思ず愕然たる、肚裏に又思ふやう、原來昨日水路の寄隊と、水戰の勝負ありし時、この朝寧を、道節が射て水中へ落せしならん。然ばこそあれ這死骸、安房歟、相摸の浦よりして、流々て一宵經て、この暴河へ漂ひ入りて、今我艦に、掛りしより稍是を知る事、不用意にして、不用意ならず、前より約束あるが如きは、噫奇なるかな妙なるかも。この人一身甲胄したるに、水底に沈ずして、浮流れしも亦奇也。意ふに這鎧は薄鉄にて、水に入りても沈ずといふ、那南倭刀の類なる歟、然らずは琴高が浮劍の類歟、そは左まれ右もあれ、是によりて猜するに、昨日洲崎の澳には、必寄隊定正主の、大軍と水戰ありて、犬阪が謀る所の、八百八人行れて、敵を鏖にせしならむ。しかれども昨日這里には、寄隊の士卒の陣歿したるすら、犬江親兵衞が仁術をもて、多く生して返せしに、この人は是、寄隊の總大將たる、定正主の愛子ならんに、知りつゝ其死を救はずは、我君大仁博愛の、御盛德に欠たる所あるに似て、後に悔しく思ふこともあらん歟、是も亦知るべからず。然ばとて、この人矢傷を身に負ふて、水中に落しより、大洋數十里を漂流れて、既に一夜を歷たらんに、非如犬江が神藥なりとも、救ひ得がたかるべけれ。とは思へども先親兵衞に、告て商量するには不如、と肚に問ひ腹に答て、主意既に決り


かこ
水死の武者


箭斫河に現八敵将を鑿も
げん八
かこ

らむ、頭鎧の火形は白銀なるべし。眉額は黄金なる歟、水に透徹りて、隠々と光く光景は、宛小年魚の走る如く、澤瀉の花の淪むに似たれば、現八いよ〳〵訝りて、肚裏に思ふやう、昨日も亦隔昨も、岡山下の闘戰に、寄隊は一個の仂武者也とも、謬て此頭の河に、陷て溺死すべくもあらず。今引揚てよく檢せずは、我疑ひを解くよしなけん、と尋思をしつゝ聲を立て、やよ兵毎、今この艦に流れ係りてある、那屍骸を掖揚よ。と叫べば篙師們阿と應て、一人蚤く鉤索をもて、件の屍骸を掛止れば、自餘の篙師力を勠して、連りに艦を漕ぐ程に、艦は、軈て、前方の岸に寄りけり。然ども現八は倚岸に登らず、今係留たる浮死骸を、艦に掖登させて是を見るに、果して寄隊の大將にぞあらんずらむ。這人年齢は、二十許にて、面の色白く眉厚くして、相貌野しからず、身には上精絨の、薄鋏の鎧の上に、梧桐の鳳凰の浮紋ある、故金襴の戰袍を被下して、皐皮の尻鞘掛たる、黄金裱裝の大刀を佩たりし、幵が乳の上三寸許、腸托の外を射られたる、征箭一枝、篦深く立てそが儘これあり。且頭鎧の眉額を又よく見るに、純金にて彫做したる、篁に群雀の花號ありければ、原來是この後生は、豫聞、行德口へ寄隊の一將、扇谷定正主の嫡子なる、上杉五郎丸朝良主歟、然らずは定正の庶長子にて、洲崎へ寄する水軍の副將と聞えし上杉式部少輔輔寧主なるべし。要こそあれ、と尋思をしつゝ、其箭

の壤をもて、件の坑を塡め果し時、國府臺の守城の頭人、眞間井樅二郎秋季、繼橋綿四郎喬梁等、相謀て、那坑の迹なる塚の上に、石像の地藏菩薩一軀を造立しかば、土俗、是を底不知の、千人塚とぞ喚做しける。こも亦後の話也。却說、犬飼現八信道は、隊の兵多く從へて、權且假名町に陣を移して、寄隊の三將、顯定、成氏景春の、敗北の往方を探り極るに、皆大河をうち渡して、往方も知ずなりしと云、民の愬紛れもなきを、現八聞て、しからんには、こゝに居らんも亦要なし。疾岡山へ參らんとて、次の日の曉天に、田稅力助逸友と共侶に、假名町を退陣して、連りに士卒をいそがせつゝ、岡山に近くなる隨に、先雜兵を走せて、陣營に告稟しょに、義通君は、昨日自家の全勝の聞えありし時、東六郎が計ひ稟して、國府臺へ歸城し給ひぬ。この故に當所の陣營には、老煉の士卒一千有餘をもて、守らせ給ふと聞えしかば、現八力助等は、岡山へ至るに及ばず、這方の岸に、多く維ぎ措れたる戰艦に、先逸友と士卒を載て、前岸へ渡し果させて、却現八は、故意隊の兵二三十名を將て、徐に艦にうち乘りて、漕て前面へ渡しけり。こは士卒搗合て、混亂させじと思へばなり。浩處に、擐甲たる一個の武者の浮死骸、海のかたより流れ來て、今横走る艦に堰れ係りて、流れもあへずありけるを、現八は心ともなく、見つゝ疑ひ訝りて、眼を定めて猶よく見れば、寄隊の大將品たる者にやあ

其本貫へ還らまく欲する者は、隨意返し遣さるべし。この義によりて主張せよ。と言叮寧に諭し示せば、大家夢の覺たる如く、其大仁と、神藥の經驗卽妙なるを歡びて、感淚坐に拭むまでに、敬服せざるはなかりけり。然れども、有名の勇士等は、この再生の恩によりて、降參せんはさすがにて、放ち遣られんことを、願ふ者も亦尠からず。秋季與保この義を以、信乃現八親兵衞に報て、且義通の下知により、放免せらるゝ寄隊の頭人は、薙內外助、建柴浦介、樋口小二郎、梶原後平二、荻野五九郎、科革七郎、望見一郎是也、この餘猶あるべし。然ばこの頭人等が、異日君邊にかへり來て、里見の仁心、箇樣々々と、神藥施行の事までも、詳に告しかば、顯定景春駭嘆じて、懲りて、後悔せざることなし。こゝをもて、里見數世の後までも、山內扇谷の兩管領は、敢境を侵さずなりしは、只この一舉によりて也。閒話休題、この日又神藥の奇效によりて、再生たる、寄隊の雜兵の泛々なるは、降らんと願ふも多かり。是等は皆國府臺の城へ駈入れて、軍役に充られけり。或は又敵の士卒の神藥の效あらで、甦らざる者の亡骸は、是命數限りある者歟。然らずは其性不仁にて、積惡の者なるべし。那在村と素行が、死首を土民に捕られて、再生の便著あらずなりしは、これ天罰の甚しき者なれども、亡骸のみは人並に、聚合て底不知野なる、坑に藏めて葬るに及ばず。恁而この次の年に、岡山

足利成氏の近習、科革七郎、望見一郎等、深痍數箇所ならぬはなし。又長尾景春の先鋒の頭人、樋口小二郎維龍、梶原後平二景澄、荻野五九郎泰儀等、處々に分散して仆れて在り。そが中に梶原景澄は、犬塚信乃と鎗を交へし時、小鬢の外を刺れたれども、幸にして痍深からざりければ、腦を破るに至らず、又荻野泰儀は、項を刺れしに、こも其食道を外れて、左の方を傷られたるのみ。こゝをもて、恁る必死の毎も、共に亦再生の藥の驗あり。代四郎は腰に帶たる神藥を、一個々々に其舌に塗らして、且瘡口に藥を布くに、輕きは即時に甦生るもあり、重きは一時、或は二時、三時の程に呼吸出て、皆我に復らぬはなし。登時秋季與保等は、再生の敵兵を勦り慰めて、里見殿の軍令は、箇様々々。と仁義の要領を說示すに、鬪戰は、已ことを得ざる所行にて、其本意にあらず。こゝをもて自家の士卒に令して、專當の敵を擊果すとも、首を捕るを功とせられず、既に勝負定りて、鬪戰果ても、首實檢を行れず。仁慈はこのよしのみならず、非如敵の士卒也とも、戰ひ難義に及ぶ時、君の爲に戰死しぬるは、則是忠臣也、誰か憐むべからざらん。其陣歿の毎は、犬江親兵衛が神授の仙丹をもて、生して返し遣すべしとある、御曹司の御諚によりて、我們施藥の頭人たり。汝達降んと願ふ者は、則留めて召使はるべし。又

嘆せざるはなかりけり。有恁りし程に、季冬の晷の、稍伸たるも短く覺て、大陽斜に倣りけるを、現八瞻仰て信乃にいふやう、寄隊は遺なく敗績して、この地に在らずなりしといへば、我們恁而居らんは要なし。和殿は杉倉と共侶に、犬江幷に政木以下、新參の人々を相伴ふて、岡山へ還り給はずや。御曹司の犬江等を、さぞな待不樂給ふべけれ。咱等はこゝより、假名町頭に赴きて、寄隊は既に大河をうち渉して、遠く逃走りたるや、否を穿鑿り果して、後にこそ參るべけれ。といそがし立るを、信乃諾なひて、其議寔にしかるべし。嚮には御曹司の御危戰を、我們其折知らざりければ、いまだ歸陣の歡びを稟し上ず、且全勝の後易きを、注進し奉らずはあるべからず。いで〳〵といひつゝも、軈て親兵衞と直元孝嗣們に、こゝろ得させつ、逸友と、隊兵過半をこゝに留めて、現八の帮助とす。配分亟に定りしかば、信乃は則親兵衞と、孝嗣次團太、舩三、五十三太素手吉、寄舍五郎、壇五郎、幷に手下の野武士篙師等を從へて、杉倉直元と共侶に、二隊の士卒と、犬江の夥兵と、伴當を相從せて、岡山を投てかへりゆく程に、現八は亦逸友と共侶に、隊兵一千七百名を領て、假名町へとていそぎけり。爾程に眞間井樅二郎秋季、姥雪與保、直塚紀二六、漕地喜勘太等は、秋季の隊兵每と共侶に、其地其地の莊客們に、夫役を課て、自他陣歿の士卒を檢するに、自家は雜兵のみにして、有名の兵は、

の御盛德、感ずるに餘りあり。敬服至極仕りぬ。と謝すれば親兵衞信乃現八も、孝嗣は今番のみならず、曩に素藤を對治の折も、敵の首を捕ずと聞えし、心操をぞ譽にける。當下直元逸友は、信乃現八に向ひていふやう、兩君は、いかに思ひ給ふやらん。約莫這回の一大奇事は、那野豬に候はずや。初寄隊の戰車を燒て、三面敗績しぬる時、那野豬は、敵に刺れず火にも燒れず、搔消すごとく見えず做りしは、最怪むべき事なるに、寄隊の三將返し來て、三面各死を爭ふ、戰ひ闌なりし時、件の野豬六十五頭は、又忽焉と出て來て、寄隊の騎馬を駈仆しける、帮助によりて、倏速に埓は開にき。倘那野豬微りせば、他人は知ず、卑職等は、成氏主の一陣を、敗り難かる勢ひ也き。と告れば現八點頭て、开は亦咱等も同意也、那野豬の帮助によりて、然ばかり骨を折らずして、寄隊の副將を生拘にき。寔に可賀々々。と祝せば信乃も笑扃に入て、却親兵衞に恁々と、靈豬の事の顚末を、告れば親兵衞感嘆して、咱等も亦京師に在りし時、故畫の虎に靈憑て、拔出て山に入りしを、管領政元主の爲に、對治しける奇談あり。其首尾は箇樣々々。と德用堅削の毒惡、政元主僕の奸詐、幷に五虎の確執橫死、又秋篠廣當が、賢才の計議まで、當時の崖略を、詳に說示せば、信乃現八はいふもさら也、大家耳を欹て、親兵衞が弓馬の本事は、天助神祐あるに似たると、其畫の虎の奇譚に、軍旅の疲勞を慰めて、感

ならんや。倶に神人なるべしとて、いよゝ憑しく思ひけり。恁而施藥の頭人等は、五百個の隊の兵と、村長莊客們を領て、又戰場へ赴くに、施行の神藥は、曩に親兵衛が分ちて、代四郎に預けたる、一藥籠にて事足ればとて、今さら別に授るに及ばず。只親兵衛は、代四郎紀二六喜勘太們を、叮嚀に警めて、人の命は千金より重かり。叟よ、直塚も喜勘太も、いふまでにあらねども、今日の施藥は我私の、生賢もて做すにあらず、便是舘の御本意にて、怨に報ふに德をもてして、其覺るを俟義あれば、敵なりとても等閑なく、一人も多く救ふを善とす。隈なくものせよ、いそぎね。と諭示せば、代四郎紀二六喜勘太們、秋季も亦共侶に、こころ得果てぞ罷りける。姑且して五十三太素手吉は、曩に政木孝嗣が、樋口維龍を刺斃したる、鎗の精妙、事の光景、箇樣々々といひ出て、三犬士に説示すを、孝嗣急に推禁めて、已ね已ね、やよ哥々等よ、あればかりの事、何かあらん。といひつゝ親兵衛にうち向ひて、在下今日の鬪戰に、長尾が隊長雜兵さへ、幾人歟斃ししかども、素より名利の爲にせねば、其首を捕らず候ひき。恁て後に承りぬ。里見殿の御軍令に、敵の首を捕る者は、是軍功の二の町にて、必重賞すべからず、と掟させ給ひし、と人の告るにこゝろ得がたく、虛言ならんと思ひしに、和君所藏の神藥をもて、敵の死をだも、救んとある、至仁の計議に照して見れば、實に仁

第百七十回

神藥施し得て敵兵再生す
現八箭を拔て水死の將を救ふ

この日犬江親兵衛は、博愛仁恕の心をもて、敵自家の差別なく、刀瘡兒及陣歿の兵毎に、神授の仙丹を施して、もて死を起し、生に回さまく欲するに、則信乃現八等と商量して、眞間井樅二郎秋季を、施藥の頭人にして、代四郎、紀二六、喜勘太の三名をもて其副とす。他等は這神藥を用るに、よく其事に熟たれば也。然ば眞間井秋季は、隊兵四五百名を從へて、代四郎、紀二六、喜勘太等と共侶に、這葛西なる、村長莊客毎を案内にして、既に立出んとしける程に、嚮に長尾景春と戰ふて、倶に痍を負ふて仆れたる、須々利壇五郎、二四的寄舍五郎は、手下の野武士等に扶掖れて、索ねて這里に來にければ、親兵衛勞ひ勦りて、腰に吊たる藥籠より、又神藥を拿出して、其痍に布するに、疼痛立地に袪き痍愈て、心地淸やかに做りしかば、寄舍五壇五は歡びに堪ず、二度の恩惠再生の幸ひありと云、親兵衛に感悅の詞を竭して、且信乃現八直元逸友秋季に、初對面の歡びを演などす。迭の口誼は具にせず、看官是を査すべし。當下村長莊客們は、仁が神藥恁までに、卽效の至妙なるを見て、胆を潰しつ感佩して、其君仁慈に御座せば、其臣に亦かくの如き、神藥をもて敵自家の、死を救ふ神童あり。是豈凡夫の所爲

の功成らば、愚公の山を移すに至ん、然は思ずや。とうち譚へば、信乃現八等いへばさら也、直元逸友秋季も、政木姥雪以下の毎も、件の論議を感佩して、其英才をぞ羨みける。こゝをもて義成主は、この次の年より、葛飾二郷の民に課て、五十四田の岡を鋤除せて、底不知の坑を塡めさせ給ふに、民皆其盛德を慕ふの故に、招ざれども聚合來て、其役を懋めしかば、僅に一稔可にして、件の岡を鋤執畢りて、件の坑を塡め果しかば、義成主又土民に、五稔の調貢を饒して、其頭の曠野を遺なく鋤せて、新田開發の義を教給ふに、民皆歡びて、勉ざる者なかりしかば、幵も二稔可にして、新田を開くこと、數百貫に及びしかば、永く公私の有益になりけり。然ばこの課役は、葛西二郷の衆民と、安房藩中の吏人と、心を同にし力を勠せて、害を除き利を興ししかば、時の人その新田を名づけて、二郷藩とぞ喚做しける。後の人二合半に作るは、同所ならん歟。且今も、葛西假名町の邊に新田村あり、是等も其餘波ならん歟。左まれ右まれ、道德仁義の、君臣の迹仰ぐべし、こは是後の話也。看官前後を照して見るべし。

は、命數盡て免れざる者歟、然らずは積惡隱慝の、歹人にこそあるべけれ。其甦らざる亡骸は、集めてこの野の大坑に棄よ。就て我疑ひ思ふよしあり。那底不知とか喚做す坑は、繁き茅萱に掩れたれば、愆て陷る者の、年々にあらんに、若們何どて埋ざるや。と問へば村長等答ていふやう、其義仰では候へども、那坑は、昔より、埋めまく欲するに、底深ければ、そのかひあらず。試に石を投入れ候へば、水音幽に聞ゆる折あり。然れば底は地黎耶にて、捺落にや續きけん、にゝをもて誰いふとはなしに、底不知とこそ喚做候なれ。と言眞實立て陳ずれば、親兵衛聞つゝ沈吟じて、开は亦奇き事なりき。我嚮に愆て、騎馬にて那坑に陷しに、下に受る者ありし歟、底まで至らざる故に、其水あるやなきやを知らねど、力を竭し日を累ねなば、埋めて埋らぬ坑あらんや。と詰るを、信乃は諾なひて、我もしかこそ思ふなれ。因てこゝに愚案あり。嘗聞五十四田河原の岡山は、原是土民們が、暴河の州を淩ひし折、其壤の遺る方なさに、心ともなく築成たりといへり。遮莫那岡は、僅に暴河を隔るものから、國府臺と相對へり。敵倘那岡に据ることあらば、城を守る爲に、害ありて利なかるべし。然らでも禮に云ずや、國に壘多きは、卿大夫の恥也。我異日凱旋の折、この義を舘に聞えあげて、必那岡を崩させん。非如その路近からずとも、民皆畊稼の暇ある毎に、日を累ね年を歴るまで、一簣一車

る苗の、甘雨を得て勃然と、起よりも速なる、其經驗はいぬる比、素藤に撃れたる、御曹司の伴當們の、皆甦生りしを見て知るべし。この義什麼。と請談ずれば、信乃は听つゝ歡びて、現犬江が揣る所、婦人の仁に似たりなンど、いふ者もあらんを、我思ふよしはしからず。夫博く愛するは、則天地の心也。敵ながらも仙丹もて、活して還し遣さば、必や兩管領も、後竟に我君の、大仁至德に感服して、悔て怨を解なるべし。意ふに今日の鬪戰に、返し合せて戰死したる、寄隊の遊軍、蕝内外助、及建柴某乙、又滸我の近習なる歟。望見科革なンど喚做たる壯佼は、倶に恥を知り君を奬して、恩義の爲に陣歿したり。倘是等を活しなば、善を勸る一術ならん。と議するを現八推禁めて、そは亦咱等も同意なれども、犬江が所云不死の神藥は、僅に一箇の藥籠に、藏めたるのみならんに、敵と自家の刀瘡戰死千百人に、遺なく用るに足るべきや。と詰るを親兵衛聞あへず、其疑ひは理りながら、我神藥は、幾千人に、用るとも盡ることなし。曩には自家の刀瘡兒に、多く是を用ひし折も、後にも屢是を用ひて、剩分ちて一藥籠を、姥雪の腰に帶させたれども、故の隨にて毫も減らず、この義は心易かるべし。と解れて現八感服して、又いふよしもなかりけり。登時犬江親兵衛は、村長等にうち向ひて、若們目今聞つらん。我不死の藥をもて、敵と自家の兵の死を救まく欲す。なれども用ひて驗なき

身矢傷に死したるが、乗たる馬の鞍局に、俯たる隨にて來にければ、分捕仕り候ひぬ。他は民を虐げたる、奸佞の聞えある者にて、既にして死したれば、小人每里見殿へ、孝順の證にせんとて、其首斬て、持參仕り候ひしに、又今來ぬる路にて、亦矢傷に死したる落人あり。他は則在村が次職にて、同惡の佞人、新織帆大夫素行なるを、知れる者の告しかば、其も首捕てもて參りぬ。いかで實檢を賜ひね。とおそる〳〵愬て、二級の首をまゐらするを、信乃は引よせて得と檢て、這在村と素行は、嚮に我が射て斃せし也。我君仁義の御軍令あれども、這在村素行は、君を惑し國を謬し、罪死を容ざる惡人なれば、必梟首せらるべし。大義にこそ。と勞らへば、現八も亦村長等にうち向ひて、若們こゝへ來つるこそ便宜なれ。約莫今日の鬪戰に、敵はさら也、自家にも、陣歿の者なきにあらず。其亡骸を拾集めて、便宜の寺院へ瘞むべし。といふを親兵衞うち聞て、犬塚犬飼兩賢兄はいかに思ふやらん。殘に克殺を去るは、則舘の御本意ならずや。然ば今日の鬪戰に、自家はさら也、敵といふとも、陣歿して還ることなきは、皆是忠臣ならぬはなし。然るを其死を救ずして、埋めて壤に做ならば、長く怨を結んのみ。各位も知るごとく、我に不死の仙丹あり、姫神授與の神藥にて、深痍に死したる者といふとも、二晝夜二十四時の中に、蚤く是を用れば、死を起して生に回すこと、譬ば旱天に枯た


けん八
しの


信乃松下に君命を親兵衛に傳ふ

りしに、館聞召て、其は我思ひ足らざりき。現八は返璧の菴にて、大角に値遇せしより、他も亦犬士たるべき、明徴あるを知れりと歟聞しかば、この縁故あるをもて、件の大刀を現八に與らせたりけれども、今隊配を定るに方りては、實に是不便になりぬ。其はその儘毛野に渡しね。大角には別人をもて、遣すべしと仰ありしかば、那御大刀は洲崎にて、そが儘返しまゐらせて、犬阪に遞與したり。と聲低やかに答る折から、姥雪代四郎、直塚紀二六、漕地喜勘太等の作當夥兵、幷に政木大全孝嗣、石龜次團太、越鮒三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉、且二四的と須々利が手下の兵までも、長尾景春の隊長たる、直江包道、宇佐美職政と力戰して、擊敗り追走せて、四下に敵の在らずなりしかば、倶に隊の兵を從へて、猶親兵衛を援んとて、索ねて這里に來にければ、親兵衛是を勞ふて、孝嗣以下新參の毎を、則現八、幷に直元逸友秋季等に、恁々と告て引合するに、大家其義旗勤軍の、大功あるを稱贊す。浩處に、葛西二鄕藩なる村長故老莊客毎、釬脛衣して、鎌竹槍を携たるが、幾隊か里見の防禦使を索ね來て、倶に勝軍の壽詞を唱て、且いふやう、小人毎は、年來里見殿の仁政を、慕ひまつり候へば、嚮に寄隊の敗北しぬるを追擊て、一人も脚を立させ候はず。なれども敵の首を捕ることを饒し給はず、と傳聞て候へば、首級は齎し候はず。其が中に、滸我殿の權臣なる、横堀史在村は、那

又大角に賜るを、現八に預け給ひき。こゝをもて咱等この地に出陣の始より、其御大刀さへ腰に帶て、身に帶刀の多きを歎はず、且青海波の名馬さへ、牽せ來つる心操は、嚮に解示せし如し。爾るに和殿折もよく、今日の御陣にかへり來て、且軍功の拔萃なるは、いまだ君命を承らずして、防禦使の大任虚しからず、求ずして舘の御本意に稱ひぬる、武門の冥加あまりあり。一期の面目羨むべし。卒々御大刀を遞與んず。といひつゝ軈て腰を撈りて、三刀佩たるそが中の、一刀を取すれば、親兵衛は謹て、受戴きつゝ腰に佩て、身を退せて答るやう、臣等京師にて、權相の爲に豪留せられて、亟に御使を果し得ず、危急存亡の時をも、知らで、この身は他鄕に在りけるに、君恩當務の義兄弟に異ならぬを、仰ぎまつれば身を措に、所なきまで辱く、拜戴受納仕りぬ。却犬村は何等の故に、他鄕へ遣し給ひしや。と問ふを信乃は推禁めて、否この義は、些事由あれば、今明々地に告がたかり。そは後にこそ知らるべけれ。と答て現八を見かへりて、犬飼は、那折犬村に賜るべき、御大刀はいかにしつる。今も猶これあるや。と問へば現八、然ばとよ、那仰ありし後、異日隊配を定められて、咱等は和殿と共侶に、御曹司に從ひまつりて、この地の寄隊にうち向へば、犬村とはいよゝ遠くなりぬ。然ば役果ざれば、他に件の仰を傳へて、御大刀を遞與すべくもあらず。因て當日軍師に就て、悄地に御旨を請奉

木孝嗣、石龜次團太、越鮒三等が、再生の事の顛末、及向水五十三太、枝獨鈷素手吉が義侠の事、幷に孝嗣は、義に仗りて、次團太鮒三、五十三太素手吉等と倶に、多く其毎を將て、義通君の闘戰を、援けて軍功ありし事、都て繁を芟り言を約にして、漏すことなく告しかば、現八以下の頭人隊長、听つゝ倶に感佩して、美談也とぞ稱へける。當下信乃は笑しげに、親兵衛にうち向ひて、犬江よ、原來那青海波は、昨宵盗兒に牽去られしを、やうやくに今覺得りにき。遮莫昨宵岡山の陣營は、三面寄隊に戰車もて、圍れたれば、鼠も暢はず、且背の方は暴河なるに、他いかにして潛入て、馬さへ竊出しけん、神變不測といはまくのみ。現活馬の目拔郎が、竊術こそ怪しけれ。といふに大家堪難て、齊一咄と笑ひけり。姑且して信乃は又、親兵衛に向ひていふやう、犬江、這里は曠野にて、君命を傳るに、宜き地方ならねども、明日まで閣くべきにあらねば、謹て承まつりね。といふに親兵衛、阿と應て、身を引降して跪けば、信乃がいふやう、曩に洲崎の御陣にて、舘みづから、軍令を定させ給ひし時、犬阪毛野を軍師に做され、幷に和殿と我們七名は、倶に防禦使たるべし、と仰渡されて、且節刀に擬せられたる、御大刀を、各一口賜りて、這回軍旅の間、倘軍令に違ふ者あらば、先斬て後に告よ、と掟させ給ひにき。爾るにかの折、和殿と犬村大角は、御使して他郷に在れば、和殿に賜るべきを、則咱等に遞與給ひぬ、

憎り。曩は我芳流閣にて、和殿と組撃の事微りせば、竟に那奴に虐げられて、牢獄中に命終ん。又新織帆大夫も、常に在村に媚諛て、曩には和殿の絆挿を請承、行徳に來て求獵しかば、惜むべし、犬江の爺孃は、死して和殿を救ふに至れり。爾るを今番那奴等を、撃漏しなば、彌勒の世まで、後悔其甲斐なからんに、天羅張得て、路を讓らず、和殿に誅戮せられしは、造化の小兒の算帳精細、寔に脫落あることなし。況や和殿が山林に、報恩の前言を、今番の役に果さすべしとは、神ならずして誰か知ん。そを待難て云云と、催促しぬる人しもあらば、鄙語にいふ親の心を、子知ずにこそあるべけれ。といひつゝ呵々とうち笑へば、親兵衛は愀然たる貌を改め、且信乃等にうち向ひて、犬塚よ、犬飼も听給へ。咱等が京師に在りし時、政元主に抑留せられて、憂苦の中に日を渉りける、其事の顚末は、一朝に盡しがたかり。开は且く言省てん。我厄解けてやうやくに、華洛を辭し去りしは、十一月二十四五日の時候なりしに、憶ず路に掩留して、今朝稍この地に馳就ける、首をいへば、箇樣々々、尾は又箇樣々々。と名馬走帆の事、又信濃路にて、這回の役あるよしを聞知りし事、又千住河原にて愛馬青海波の、河を渉して來ぬるに逢し事、并に馬盜兒、活間野目奴九郎の事、及二四的寄舍五郎、須々利壇五郎の事、又親兵衛們が、長尾景春を敗り走らせし事、且再戰して、長尾爲景を生拘りし事、亦政

赶つゝこの野邊に來て、料らずも必死の厄ありしを、幸ひにして犬塚に、拯れて、今這里に來つ。といふを現八聞あへず、丌は又奇也、最芽出たし。御曹司の御出陣も、まだ聞知らぬ事ながら、時過たれば乙も甲も、寛やかにこそ听べけれ。今の急務は管領の、往方を求猟て懲さずは、異日又寇すべし。卒共侶に立給へ。やよとく／＼といそがするを、信乃は禁めて徐にいふやう、犬飼さのみ惴りなせそ。這回館の御軍令に、只防禦を旨として、殘忍慘刻の揮きを饒し給はず。非如寄隊の將帥也とも、逃なば脱すも寛仁大度の、御旨にこそ稱ふべけれ。といはれて現八忽地覺得て、然也々々、我愆ぬ。爾らばこゝに人馬を憩へて、敵は一人も在らずなりなば、岡山の陣所へかへるべし。と答て後方を見かへれば、直元逸友こゝろ得て、秋季と共侶に、找みよりつゝ親兵衛に、歸國の歡びを舒などす。當下信乃は現八等に告るに、在村と素行を、射て斃しける事を首にて、親兵衛が謬て、人馬等しく野中へ坑へ、陷りし折、信乃が來て、其兩敵を斃しし事、又親兵衛が、坑中より、吹起す猛風に吹出されて、騎馬の儘にて恙なく、出來し事の尾まで、其大略を說示せば、大家听つゝ感嘆す。丌が中に現八は、笑片向て信乃にいふやう、犬塚、和殿の揮きは、都て至妙にあらぬはなけれど、就中横堀史在村と、新織帆大夫素行を、射て斃せしは愉快也。那在村が奸佞なる、君を惑し民を虐げ、能を媢み賢を

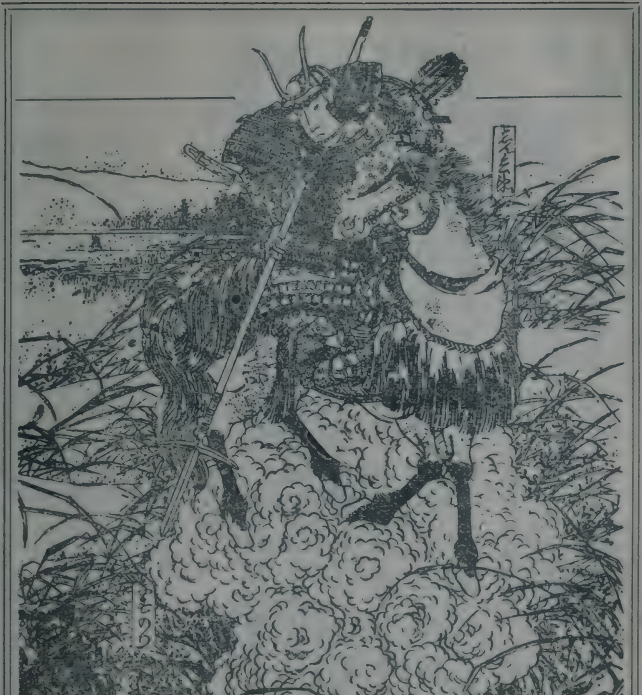
長尾を拄えて力戰せし事、都て是等の事までも、會話いと多かれども、恁枯草繁き處では、下馬しても、尻を掛る石だに見えず、那里に故たる松の下は、結縷草ありて、憩ふに宜し。卒給へ、那里にて、倶に意衷を罄すべし。といふに信乃も見かへりて、現那松陰こそよかんめれ。和殿に据りて肇て知りぬ、原來御曹司も亦御出陣ましく〳〵て、長尾と戰ひ給ひし歟。鄙語に云燈臺は、倒に下闇くして、今肇て聞く鈍ましさよ。況や政木、石龜等が事はしも、最も芽出たき珍説也、蚤く听ずはあるべからず。卒々といひつゝも、倶に馬を步行せて、徐に松の邊に造りて、下馬して餘談に及ぶ折から、犬飼現八、杉倉直元、田税逸友、眞間井秋季、頭人隊長陸續と、信乃が兵をも從へて、寄隊の兩將顯定成氏の、敗れ走りしを赶捕へんとて、索ねてこゝに來にけるに、信乃が一個の若武者と、共侶に憩ひ居るを、遙に見て、現八は自餘の隊長と、倶に馬より下立て、我よりつゝ信乃にいふやう、犬塚、和殿は顯定主を、那里へか赶亡したる。咱等は副將憲房を獲たれば、繼橋綿四郎們にうち守らせて、臺の城へまゐらせにき。卒立給へ、共侶に、索ねて顯定を捕へんず。といひつゝ親兵衛を見かへりて、胆を潰しつ、又左見右見て、犬江、和殿は幾間に、京師よりかへり來て、這戰場に在りけるや。と問へば親兵衛微笑て、然也。咱等は今朝この地に馳就て、御曹司の御危戰を、援けまつりて敵兵の、逃るを

噫天なる乎、時なるかも。和殿この地に在らざりしかど、この事一霎時も胸に絕ねば、和殿の愛馬を、牽せ來つるは、是も亦和殿に代る二扮の、防禦使たらん、と思へば也。又只この意味のみならず、見給へ、我掛たる這幌は、和殿の爺妳の血染の衣也。我年來艱苦の中にも、身に添て失はず、深く藏め措たりしを、這回幌に作らせしは、其芳名を自家の士卒にも、敵にもいかで知せまく、欲するまでの所行なりき。と心の誠うち出て、告もしつ、問も尋る、閑談細やか也ければ、親兵衞馬上に頭を低て、听つゝ坐に感淚の、進むを覺ず長嘆して、果せるかな果せるかな、至誠は必や神の如し、犬塚主の孝順忠信は、人の及ばぬ所なれども、誠心誠意𢙣までに、最厚しとも敦からずは、こゝに不測の援を得て、相逢ふ事を得べけんや。我身は必敵の鎗に、刺れて身はこの坑に命終らば、人知ずこそなるべけれ。然ばこそ再生の洪恩を、千言萬句に盡すとも、噦るべうもあらずかし。寔に此上なき幸ひなる哉。就て咱等は嫂雪直塚們の作當夥兵を領て、今朝しもかへり來ぬる程に、科らずも得にける這馬の、足搔に任せて御曹司の、御危戰を援け奉り、且勍敵長尾景春を、擊破り走らせて、其子長尾爲景を擒にせし事、又那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣、石龜次團太、越鯽三と、三人は共に、幸ひにしてかの折死なず、月屬兩國河原なる、向水五十三太が宿所に在りしに、我より先に御曹司の、鬪戰を援けまつりて、

に牽もて來たるに、昨宵其馬はおのづから、絆を解きて走りし歟、然らずは人に竊れし歟、往方知れずと聞えしかば、後悔臍を噬るのみ。當晩は我火猪を放ちて、寄隊を敗まく欲する折也ければ、其を索るに遑なかりしに、見れば件の青海波は、則和殿が乗て在り、こも亦大奇といひつべし。我は方僅那滸我の佞臣なる、横堀史在村と、新織帆大夫素行が、只二騎落てゆくを赶蒐て、射て斃すことを得たれども、在村は馬より墜ず、そが儘乗せて馬の走るを、赶捕へんとてこゝに來つ、憶ず和殿に兩敵あり、馬をかへしつ鎗をもて、坑なる和殿を刺まくせしを、遮り制めて戰ふて、斃して和殿の窮阨を、拯ひ得てける歡びは、何事歟亦是に優すべき。忘れも得せぬ六稔の昔日、我身行徳の古那屋にて、必死の窮阨ありし時、和殿の先人山林が、我身に代りし義死の臨終、我只感謝に堪ざれば、その折は年四才なりし、和殿をやをら引よせて、我山林に誓らく、後年この子成長りて、倶に戰場に莅む事あらば、我箭面に立ち、死にも代りて、今日の恩義に答ん、といひし言葉の露霜は、代謝て六稔まで、いまだ便宜なかりしに、今茲この冬君家の軍役、倶に防禦の使命ありて、水陸三箇所の大敵にうち向へども、爭何せん和殿は京より還らねば、安危を倶に倣しがたし、と思ひし者を思ひきや、不測に越に折を得て、這里に和殿の窮阨を、釋きも拯ふて、我前言を、全く果して世になき人に、後易くならんとは、噫



底不知野に信乃親兵衛を救ふ



第九輯 卷之四十二上

第百六十九回

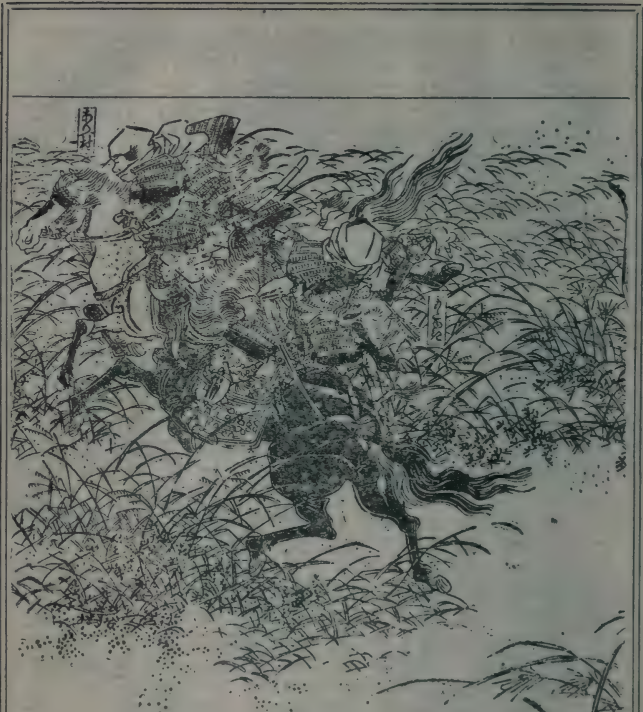
野坑を抬出されて親兵衛賜を受く
風葉を帚除して諸勇士立談す

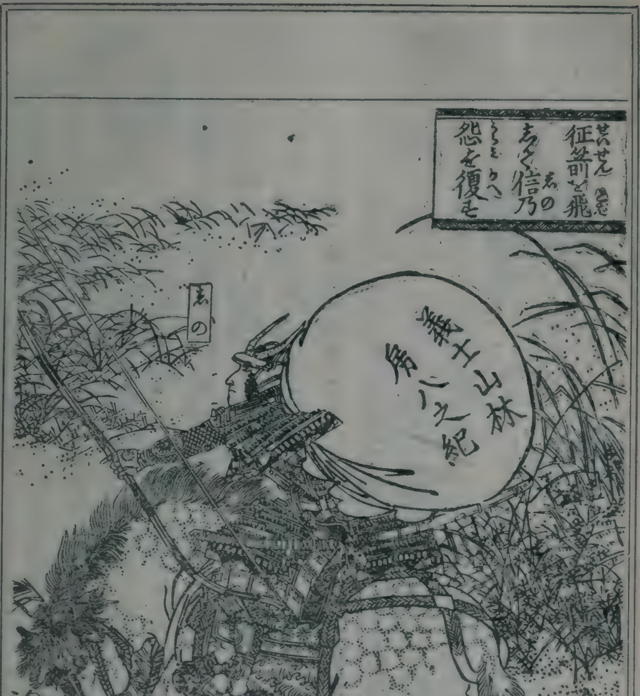
話表す犬塚信乃戍孝は、料ずも葛西なる、底不知野の頭にて、犬江親兵衛仁が爲に、二騎の敵を斃し得て、他が親山林夫婦の、舊恩を報ひしのみならず、底不知の坑に陷たりし、親兵衛も亦恙なく、件の坑より吹起す、勁猛風に吹騰されけん、人馬故の儘にして、出ることを得たりしかば、信乃が歡びいふべうもあらず。眼を定めてつら〳〵と、見つゝ忻然として先問ふやう、犬江和殿は幾の間に、京師よりかへり來て、今番の役に參り會たる、況や二騎の敵を赶來て、謬てこの坑に、陷りて見えずなりしに、特に奇きは坑中より、白氣立升ることありて、且猛可に聞えし風の音、雷霆の响と共に、自然に出ることを得たるは、必是其身を衛る、靈玉の大奇驗と、伏姫神の冥助にあらずは、いかにしてこの幸あらんや。只這奇事のみならで、曩に和殿が、稻村なる、御厩人に預け置きたりし、其名馬青海波は、我和殿を憶ふの故に、這回の陣中

に喚るやう、方僅謬て、這坑へ陷りし騎馬武者は、犬江なるべし、親兵衞ならずや。恷いふ我は犬塚信乃也。既に和殿の兩敵は、我鎗尖もて刺滅たり。いかで我這鎗の幹當に、携りて蚤く出よかし。と告喚被ること兩三番、やをら鎗を坑中へ、手繰下さまく做す程に、怪むべし這坑中より、起騰る白氣あり、隱々として煙の如く、天に冲ると見る程しもあらず、又忽焉と風雷の、轟く如き音聞えて、颯と吹出す猛風と、共に犬江親兵衞は、人馬ひとしく抬出されて、聊も身に恙あらず。馬も亦故の儘にて、主を乘せつゝ端然と、坑の畔に立しかば、信乃は二たび胆を潰して、且呆れ且歡びに堪ざりし、眼を定め熟視て、原來犬江、恙なかりき、不思議の面會なりけるかな。昔我行德にて、和殿の親の終焉に、誓ひし言の虛しからで、今日果しぬる娛しさよ。と報る言の葉いと繁き、この段特に長やかなれば、又卷を易て下の回に解分るを聽ねかし。

は、猶も横堀在村を赶捕へんとて、只管に、馬を走らせて來ぬる程に、と見れば三騎の武者これあり、一騎は其兩敵を赶ふ者にて、この地に在るべしとは思ざりける、犬江親兵衛に似たりしかば、且訝り且歡びて、それかあらぬ歟、とばかりに、聲を掛んとしぬる時、其武者は忽焉と、叢隱なる坑中へ、人馬等しく陷しかば、後れて走る一騎の敵、突然と返し來て、鎗もて坑なる勍敵を、刺殺さん、と馬を寄するを信乃は吐嗟と馬馳よせて、やをれ白人、手な下しそ。と罵りつ、鎗を晃めかして、刺んと找めば、景澄うち見て、儞は誰ぞ。と問せも果ず、信乃答て、儞知ずや、我は是犬江親兵衛が義兄弟、里見殿の御内にて、八犬士の一人たる、犬塚信乃戍孝也。原來好敵、ござんなれ。我は白井の隊長なる、梶原後平二景澄是也。當の敵にはあらねども、勝負を決せん、いざうれ。と名告かけ相喚りて、鎗を交へて戰ふ程に、既に迥に逃延たる、荻野五九郎泰儀は、這光景を見かへりて、只得馬を乘復し來て、又景澄に力を勠せて、連りに挑み戰へども、信乃は撓る色もなく、左右に敵を受ながら、劇しく中る鎗法に、兩敵共に腕亂れて、引外さんとせし程に、泰儀は項を刺れて、馬より仰ざまに墜しかば、景澄是に驚怕れて、透もあらば逃まく思ふに、聊も其便りを得ず、反て信乃に小鬢を刺れて、こも亦馬より墜にけり。登時信乃は兩個の敵の、死活を敢見もかへらず、坑の頭に、馬を找めて、聲高やか

て死ンでけり。是にぞ怕るゝ在村は、項を縮め泥障を蹴鳴らし、馬を馳つゝ逃んとするを、信乃は透さず赶蒐る、馬の足掻も彌疾き弓勢、箭接速なる弦响と、共に横堀在村は、項の邊を丁と射られて、苦と叫びて落もせず、只鞍局に俯たる儘に、走れる馬に乘せられて、死活は知ず做にたる。又那四個の鏃奴は、主より先に逃亡せしを、信乃は二たび赶まくするに、矢種既に盡きしかば、只得從兵の續くを俟て、持せし鎗を搔拏りつゝ、若們は我かへり來るまで、權且這里に居よかし。といひ捨鞭をうち鳴して、又在村を赶蒐けり。浩處に犬江親兵衛は、嚮に長尾景春の隊長なる、梶原後平二景澄と、荻野五九郎泰儀が、親兵衛と戰ひ負て、逃るを連りに赶蒐る、勢ひ已ことを得ざりしかば、心ともなく葛西なる、底不知野に來にけるに、這里は茫々たる曠野にて、茅萱枯芒花彌が上に腹累りて、路去りあへぬ地方なれども、逃る者は路を擇まず、又赶ふ者は、青海波の、駿足に乘たれば、荊棘延蔓の野草を物ともせず。既にして親兵衛は、兩個の敵に近づく隨に、蓬し返せ。と喚かけ〳〵、繁き枯草踏躪く、馬をいよ〳〵跳らせて、後れて馳る景澄の、背を鎗もて刺まくする時、怪むべし、この叢の繁きが中に、最大きなる坑ありしを、知ねば馬蹄を踏や掛けん、人馬愕然と陷りて、在りとも見えずなりしかば、景澄是に氣力を得て、馬乘返して、鎗をもて、刺殺さん、と拿直す。恁る折から犬塚信乃





征箭を飛
志の信乃
怨を復
志の

て、往方を索ねて、只一騎、赶もて來ぬる、馬の左右に、從ふたる、雜兵僅に五六名、喘々ぞ續きける。折から前面を見亘せば、足掻を早めゆく二騎の落人あり、倶に兜を脱捨けん、皂裂もて頭を裹める、一個は錦綉の戰袍也、一個は則絳白なる、段々間道ある戰外套を被て、うち相譚ひつゝゆく人馬の背骸、五六町西に見ゆめり。信乃はうち相て、歡びに堪ず、那錦繍の戰袍を被たる落武者は、必是山内の、管領にぞあらんずらむ。といふを從兵うち聞て、知る者ありて告るやう、否他は、管領に候はず、小可豫相記あり。戰袍被たるは滸我の權宰、横堀史在村也。又戰外套は、其次職なる、新織帆大夫素行に、紛れもあらず候。といへば信乃又歡びて、爾らば、亦是我仇也、いで〳〵。といひつゝも、箙に殘りし二枝の、表挿の征箭拔出し、弓拿直して馬を走らせ、聲高やかに、其里に落ゆく騎馬武者は、滸我の佞臣横堀在村、新織帆大夫素行ならずや。我は是犬塚信乃金碗戌孝也。若們奸佞邪智の本性、曩には我を虐げて、搦捕まくせしのみならず、新織素行を緝捕の頭人として、我行德の客舍まで、穿鑿ることの急なりければ、義士山林房八が、我死に代りし血染の衣は、幌に綴りて我背に在り。今こそ復す舊恩舊怨、思ひ知るや。と喚れば、在村素行うち驚きて、馬を駐めて見かへる處を、能彎固めて瞟と射る、矢局差はず素行は、左の耳より頤まで、箆深く射られて叫びも果す、馬より墜

隊兵を找めて、中るに任せて斫仆せば、敵兵多く逃亡て、科革望見の黨のみ、僅に陣歿したりける。爾程に、横堀史在村、新織帆大夫素行は、成氏の軍令に從ひて、一二の陣の敗軍を援んとて、五六千の隊兵を領て、いそぐ程に、顯定親子は戰ひ敗れて、今さら拯ふべくもあらず。又後方を見かへれば、我一陣も、亦敗軍にや逮びけん、自家なる士卒の落てゆく、後影多く見えしかば、在村は嘆口氣して、馬を駐めつ素行を、喚近づけて囁くやう、帆大夫和殿はいかに思へる。こゝのみならで我陣も、亦敗北の兆見えたり。我君は恙なきや、陣歿し給ひし歟知らねども、左ても右ても三たびの負を、又建復すべくもあらず。然るを猶恁て在らば、必敵の俘にならん。滸我には、各宅眷あるに、疾かへり行て安危を揣らずは、後悔臍を噬んのみ。といふを素行うち听て、賢慮寔にその利あり。然らばおん件仕らん。と應て軈て間道より、千住のかたへ赴く程に、葛西の底不知野を過る時、從ひ來ぬる四五千の、士卒は蚤く落亡て、才に四個の鏕奴のみ、今も猶馬前に在り。在村と素行は、倶に呆れてうち呟く、心細さは涯りもなきを、迭に然らぬ面色して、好々、負しからぬ那奴們は、亡こそ結句優らめ、といふより外に術もなく、見亘す限り遙なる、この野をとく〳〵踰んとて、倶に馬をぞ早めける。有恁し程に、犬塚信乃は、嚮に顯定を撃も果さで、走らせたりける遺恨に堪ねば、自家の士卒に先だち

ち乘つゝ、現八に、歡びを述相別れて、牽せて軈て義通君の陣所を投ていそぎける。案下、この時寄手の一將、足利成氏の一隊は、那野火も飛移らず、又野豬の怪異もなかりしかば、猶直元逸友等と、連りに挑戰ふ程に、猛可に自家の兩隊、顯定憲房、父子の陣より亂れ譟ぎて、敗績しつと聞えしかば、成氏うち驚きて、則在村と新織素行に、件の父子を援けよとて、隊兵を分て遣しけり。この故に成氏の、士卒減少したりけるに、敵はいよく勢を得て、攻撃つこと甚急也。滸我の士卒は、一二の陣の、敗軍に氣力折けて、撃るゝ者尠からず。其餘は多く落亡て、成氏の旗下に相從ふ、近臣股肱の毎なる、科革七郎、望見一郎、是等を宗徒の精兵にて、五六百名に過ずなりしかば、成氏嗟嘆に堪ずして、今はしも是まで也、戰歿せん。と麾うち揮つゝ士卒を我めて、敵の隊長、杉倉武者助直元の、一隊を逆へて推蒐る、這時遲し、那時速し、颯と降し來る狂風に、沙石を飛し、樹枝を鳴らして、天さへ暗くなる隨に、走りいで來る一箇の野豬、大きなること犢に等しく、疾こと虎にや似たらん歟、と思ふ可の猛威もて、成氏の乘たる馬を、斷仆し主を滾して、起んと蠢く甲の表帶を、牙に引掛け背に載て、往方も知ずなりにけり。然ば今この光景を、敵も自家の士卒們も、正可に見て知る者なければ、只狂風に驚き怯れて、活路をのみ索れば、いまだ刃を交へずして、勝負は既に決然たる、直元逸友

ん、痛楚を忍び身を起して、逃る雜兵にうち交りて、蚤くも影を躱せしかば、現八見つゝ冷笑ひて、思ふにも似ぬ白徒なりき。といへば士卒も喬梁も、憶ず咄と笑ひけり。然ば山内憲房は、近習僅に五七名を從へて、假名町の方へ落てゆく程に、現八は只一騎、士卒に先だち赶蒐來つ、喚禁め窘めて、鎗を拈て噎て蒐れば、憲房の近習們は、已ことを得ず、敵を迎へて、手々にうち振る刃の電光、一騎の敵と侮りて、倶に勇みしかひもなく、皆現八が鎗下に、仆るゝもあり、俯すもありて、竟に羽翼を喪ひし、憲房は逃るとも、他逃さじ、と覺期の大刀風、馬を馳違せて、一霎時は、挑戰ふものから、原是婦人の手に生育て、艱苦を知ず、民情を査せず、心驕りて身は柔弱なる、貴介公子のいかにして、犬士の敵手に足る者ならねば、持たる大刀を打落されて、怯むを現八馬乘よせて、掻抓み引著て、宙に吊して動かせず、四下を佗と見かへる折から、繼橋綿四郎喬梁は、五百個許の士卒を將て、馬を走らせて來にければ、現八ヤヤと喚近づけて、やよ、繼橋生、この生口は寄隊の副將にて、多く得がたき賓客なれば、手暴くなせそ、逃すべからず。這が今乘捨たる、馬の鞍局に縢著て、牽もて去りて、族郎君の御陣營へまゐらせ給へ。といふを喬梁歡び承て、馬より下りて士卒と倶に、弱り果たる憲房を、抱き拿り推縮めて、件の馬にうち乘せて、韁を解きて十の字に、緊しく縢げて、又故の、己が馬にう

亂れし寄隊の衆兵、野猪に驚き野火に赶れて、恥を思はぬ雜兵は、皆四零八落に、逃て跡なくなりにける。幵が中に白石城介重勝は、先鋒の頭人霧布五六と、いかで主君を後安く、退陣させんとのみ思ひしかば、殘兵四五千を推團めて、程よき處に野火を避て、信乃が一隊と血戰す、其勇なきにあらねども、寄隊の士卒は皆胆落て、透もあらば逃まく思ふ、網裏なる魚鼈に似たれば、敢戰ふ擬勢なく、僅に一千許なる、犬塚が隊の兵に、撃破られ立脚もなく、事急なるは、敵に加りて、反て自家を射るもあれば、白石霧布防ぐに甲斐なく、倶に馬を射させ痍を負ひしかば、逃る士卒にうち雜りて、迹を埋めて落亡けり。有恁りし程に、寄隊の副將、山内五郎憲房は、靈豬の野火の禍鬼に、憶ずも辟易して、二たび總頽にならまくせし折、犬飼現八信道は、繼橋綿四郎喬梁と倶に、隊兵を推拢めて、突然として衝て入る、馬上の鎗頭、向ふに前なく、剩野火と野豬に、寄隊の士卒は防ぐに術なく、右往左往亂走るを、這隊の頭人、闇蚊野汶八夏盛と喚倣す猛者、鷹裂八九郎と共侶に、罵辱しめ喚返して、馬を跳らせ二騎相並て、肩尖刀をもて敵を芟る、猛勢凄じかりければ、敢近づく者なきを、現八は好敵なめり、と思へば繼橋喬梁と共侶に、馬をよせ鎗晃めかして、うち向んとする程に、汶八八九郎は、後よりして突もて來ぬる、二三頭の野豬に、馬の後脚を蒐られて、忽地撲と落しかば、能はじとや思ひけ

時候になるまでも、雌雄を分たざりしかば、顯定頻りに焦燥て、屢軍使を走らせつゝ、左右の二將に謀じ合せて、三面一度に火箭を飛して、信乃現八們が籠りたる、茂林を燒まく欲するに、白石重勝、及隊長等、よくこの事を掌りて、士卒に下知して火藥を集め、既にして幾百枝の、火箭を一度に、射出さんとする程に、今朝より烈しく吹く風に、鈍くも火線を吹奪られて、其火反て四下なる、枯草に移りしかば、弓手はさら也、雜兵們は、こは什麼、とばかりに、驚慌て、倶に其火を撲滅さんとて、或は鎗、或は棒を、執るに儘せて枯茅萱を、撻ば憶ず打出す、茅萱の裏に獸あり、是則別物ならず、鬐に牙に蕉火を結著られて、戰車を燒し大豬、數も減らず六十五頭、忽焉として前後左右なる、高萱枯草踏闢きて、顯れ出て雜兵を、牙に掛つゝ投飛せば、彌驚く衆兵隊長、主將も倶に胸を潰して、野豬を殺しね、火を消留よ。と喚ど叫べど屆ぬ下知と、怪異に亂るゝ三面一禍の、野豬は皆成暴れ哮りて、又貝寄隊の騎馬武者の、馬足を牙もて突折けば、人馬俯累りて死するもあり、然らぬは野火に逼られて、身を焦して叫ぶもありしを、信乃現八等は、是を見て、歡び勇ざる者なく、直元逸友三面一致の、隊兵を扨めて攻入たる、中央は犬塚信乃、幷に眞間井縦二郎、勇士猛卒前後を爭ふ、勢ひ宛破竹の如く、今日顯定を擒に做さずは、何の時を待んやとて、縱横無礙に擊散せば、然らでも

じ、と思ふ心を鬼にしつ、只得馬を乗旋らして、矢聲を發つゝ親兵衛と、鎗を交へて戰ふ程に、景春は犬江が本事を、既に是よく知りぬ、勝ことかたしと思ひしかば、今景澄が、他と戰ふや否やを見もかへらず、走れる馬に鞭を中て、命を涯りに落亡ける。爾程に、梶原後平二景澄は、犬江親兵衛と戰ふこと、いまだ久しからずして、腕衰へ鎗法亂れて、既に危く做りし時、景澄の從父昆弟にて、荻野五九郎泰儀と喚做す壯士、こも亦景春の往方を索ねて、料らずこゝに來にければ、今景澄が敵と鬪戰の、危きを見て毫も擬議せず、馬を馳寄せ相援けて、挾みて撃まくするに、親兵衛は物ともせず、精神ます〳〵加りて、右に中り左を拂ふ、神出鬼沒の慓姚に、景澄泰儀驚怕れて、俱に引外し馬を退けて、鐙を鳴らして逃走らするを、親兵衛は猶逃さじとて、心ともなく自家の衆に、離れて逈に葛西なる、冬枯野邊まで赶ふたりける。話分兩頭。この朝犬塚信乃、犬飼現八、杉倉武者助、田税力助等は、寄隊の三將顯定、成氏憲房の、總軍既に敗績して、亂れ走るを赶蒐來つゝ、葛西なる假名町より、半里許這方なる、林原の頭にて、又寄隊の三將と、再戰の事の趣は、既に前回に見えたり。然ば信乃們は、僅に二三千の小兵なれども、地理を揣り切所に据りて、よく戰へば破られず。又寄隊の三將は、一旦敗軍の殘燼なれども、猶三萬餘の士卒あれば、先度の恥を雪んとて、三面齊一競ふのみ、未牌の

包道、宇佐美職政、殘兵二百餘名を將て、主將を索ねて返し來つ、推蒐る敵を受禁て、入亂れつゝ戰へば、景春は今この虎口を、士卒に讓りつ、退きて、馬の喘を休る程に、梶原後平二景澄も、殘兵二十名許を將て、主を索ねて返し來つ、景春を見て、身邊近く、馬を馳よせ、禮を做て、詞急迫しく諫るやう、思ふにも似ざりける、今日の鬪戰機を失ふて、郎君擒になり給ひしに、君亦陣歿し給はゞ、長尾の家は斷絶せん、この義を思し召されずや。卒おん伴仕らん。といひも訖らず鞭をもて、景春が乘たる馬の、尻を礑と撻しかば、馬は撻れて驀直に、葛西のかたへ走りゆく。後方に從ふ梶原景澄、殘兵每も共侶に、皆後れじとて走る程に、又赶近づく敵兵あり、是則別人ならず、犬江親兵衞仁也。向水五十三太と、枝獨鈷素手吉、其隊の壯佼、數十名を從へて、連りに馬を走らすれば、景澄只得殘兵を、留めて敵を防がせて、是より主從僅に二騎、汗する馬に鞭ちて、逃るを親兵衞屹と見て、他は必景春ならん、と思へば敵の殘兵を、五十三太們にうち任せて、這小輩を見かへらず、馬に拍れ敵中へ、乘入れつ亦馳脫て、遙に延たる二騎の敵を、走らせじとて赶蒐る。馬は名に負ふ青海波の駿足なれば、射る箭の如く、一瞬間に近づく隨に、四下に响く聲震立て、景春返せ仁なるぞ。犬江を知ずや、蓬し返せ。と喚りつ、鎗を拈て馳よする、然しも勇士の威勢に、中るべうもあらざれど、景澄は主を擊せ

を濺ぐ。力戰に時移るまで、こゝを先途と挑みしを、政木孝嗣遥に見て、適敵やと嘆賞しつゝ、鎗挾み走り來て、名告かけつゝ刺んと找めば、維龍鎗をうち振り手拔て、馬を馳寄遣差へつゝ、一上一下と挑み戰ふ、迭の武藝劣らず優らず、他雜もせで死を爭ふ、勇悍對應せざるにあらねど、維龍は數度の闘戰に、疾勞れて眼や眩みけん、孝嗣が閃めかす、鎗を拂ふに遑なく、鎧の透を刺串れて、馬より撻と落しかど、孝嗣は其首級を捕ず、只馬をのみ分捕して、牽留めつゝうち乘りて、猶も敵をば赶ふたりける。爾程に長尾景春は、亂れて走る自家の士卒を、禁めもあへず共侶に、馬の足搔に信せつゝ、脆くも二たび敗績しぬるを、須々利壇五郎、二四的寄舍五郎は、手下の野武士十人許と、簇々と赶蒐來つ、喚禁め罵辱めて、推捕籠て擊んと競ふを、長尾の近習五六名、返し合せて防ぎ戰ふ、音も劇しき劍戟鎗棒、寡をもて衆に敵しがたかる、長尾の近習は、痍を負ぬもなく、二人は寄舍五、壇五郎の、鎗に縫れて仆れしかば、景春怒りに得堪ずして、馬を馳入れ手を下す、鎗尖銳かりければ、只この一騎に斷亂されて、痛痍に仆るゝ者多かれば、寄舍五郎も壇五郎も、倶に景春に中り難て、或は肩尖高股を、刺れて臀坐に仰反たり。浩處に政木孝嗣、姥雲與保、直塚紀二六、石龜次團太、越鮒三、里見の士卒四五百名と、倶に景春を赶蒐來て、走り近づく多勢の敵に、免れがたく思ふ折から、直江

我隊を亂して、赶逼るを擊ん爲ならん。豫計りし事なるに、皆緩やかに赶ふべしとて、隊を亂さず徐々と、是を赶へども、敢逼らず、間近くなるときは、五十三太素手吉、乾兒們と、俱に罵りうち笑ふて、小石を抓で擲つを、景春見かへりて怒りに得堪ず、那奴們我を怕るればこそ、近くは赶も擊ずして、侮り遊ぶ投石三昧、いまだ那期に至らずとも、疾駈向て、鏖にせん。兵每返せと喚りつゝ、乘たる馬を推旋らして、鎗挾みて敵に向へば、景澄維龍いへばさら也、慓雄の壯佼等、近習外樣の差別なく、俱に怒に堪ざれば、咄と噇て駈向ふを、政木孝嗣、向水枝獨鈷、須々利二四的、其每も共侶に、敵を挂えて且戰ひ、胡意敗れて亂れ走れば、親兵衞代四郎、紀二六等も、獵場の獸の列卒繩を、踰るが如き馬に鞭ち。足に信せて逃走るを、景春は猶漏さじとて、隊兵を挨めて息をも養れず、那里までもと赶ふ程に、後に响く敵の銃音、連發てる程しもあらず、長尾の騎馬武者五六人、擊れて人馬共侶に、象棋倒になりしかば、是にぞ驚く諸軍兵、將帥士卒並て皆、胆を潰しつ吐嗟と叫びて、譟ぎ亂るゝ癖なれば、後なる敵を見も定めず、潑と頽れて逃走れば、豫期したる犬江の隊の兵、齊一咄と執て返して、中るに任して擊仆せば、敵はいよ〳〵度を失ふて、虛滅しつゝ馬に踏れて、果敢なく命を殞すも多かり。其が中に、樋口小二郎維龍は、いかで主將を延さん、と思へば一騎敵に中りて、鎗の尖頭に血

這里也けり、と聞く隨に、景春は馬を駐めて、と見れば、敵はまだ退かで、一町許前面にあり。隊長は那犬江なるべし。我又推寄來ぬるを聞知たる歟、布備たる陣の光景最奇くして、擊べき所なきに似たり。其爲體、八方に八流の楮幡を建て、其下に軍兵多くあり。例ば八箇の陣門ありて、開閉時なく、四方相當り、四隅よく守るが如し。但隱々として雲霧の、其四下に起升りて、推包むにやあらんとぞ怪しまる。景春見ること稍久しうして、急に左右を見かへりて、景澄維龍等にいふやう、若們他をいかに思ふや。我聞、唐山古昔の陣法に、諸葛孔明が八陣あり、とばかりにして、何なるや、我いまだ學び得ざれども、其八陣は攻伐つ者、生門よりうち入て、又生門より出ざれば、必失ありといへり。那陣這に似たるにあらずや。縱八陣ならずとも、那八犬の奴們は、よく幻術を行ふとかいへば、今厭勝の法をもてせで、漫に擊ば、他が圈套に掛らるゝことなからずや。この故に我又憶ふに、今戰ずして退かば、敵は必隊を亂して、追蒐て擊まくせん。其逼るを引受て、自家急に建更して、推包て拗がば、他は小勢也、我は大勢也。那犬江奴を擒にせんこと、枝なる果實を挑が如けん。蚤く後陣へ傳へよ。と鼻蠢めかして說示せば、景澄維龍感佩して、隨卽包道職政に、下知を傳へて後陣より、退せつゝ引返すを、親兵衛見つゝうち笑て、然ばこそあれ、思ひしことよ。景春果して我陣を、疑ふて是を擊ず、又徒に退き去るは、必

だも漏すべからず。或は又景春、この陣を知ずとも、他も亦然る者なれば、其機を査し、且疑ふて、戰はずして退かば、只緩やかに是を赶ふべし、必急に追撃つべからず。他我赶ふことの遲きを見て、焦燥て急に反し合せて、三七二十一に突もて蒐らば、胡意輕く戰ふて、詭り敗れて走るべし。却我五個の夥兵と、喜勘太等の伴當は、始よりして、八陣の備に管はで、各銕砲を携て、這頭に故りたる並松の、中枝に躱れうち登り居て、敵の進退を張ふべし。若我後案の如く、景春八陣を突ずして、反て我詭りて、敗れ走るを赶ふてこの處に至りなば、遣り過して後陣なる、敵の馬を撃仆しね。景春是に驚き慌て、退かんとしぬる時、我急に引返して、其亂るゝを攻撃たば、勝ずといふことあるべからず。大家この意を得よかし。と言叮嚀に說示せば、衆兵都て感服して、指揮に從ふそが中に、孝嗣は殊更に、親兵衛が宏論智計に、いよよます〱敬服して、かくの如き少年は、和漢今昔一人のみ、後の世も類あるべからず。と感じて敵を俟にけり。爾程に長尾景春は、二たび犬江親兵衛と、死戰して、擒にせられし其子爲景を、とり復さんと思ひ惴れる、怒に堪ねば毫も擬議せず、みづから眞先に馬を趁る、左に樋口小二郎維龍あり、右に梶原後平二景澄あり。直江莊司包道と、宇佐美三郎職政は、其後陣にぞ續きたる。軍兵約三千餘名、天をも掩ふ勢ひにて、故の戰場を投て返し來つ、爲景が事ありしは、

疑ひなかるべし。這頭には繁柆たる、冬樹の蔭あり。今在下に隊兵を分ちて、二三百名を授け給はゞ、埋伏して敵を敗らん。この義甚麼。と請問へば、親兵衛頭を欹けて、其策歹きにあらねど、古の聖王の、不從を征し給ひしを思ふに、正路に就て奇兵をもてせず、湯の桀を放ち、武王の紂を誅しゝ如きは、王者の軍といひつべし。然ば後の世といふといへども、賢君有道の正兵をもて、那亂虐を鎮るに方ては、亦當にかくの如くなるべし。我嘗富山に在りし時、姫神授與の陣法あり、孫子の八門遁甲の陣是なり。蜀漢の諸葛武侯、よくこの陣を布設て、もて照烈の危窮を救ひしかば、那里の俗は、是を孔明が八陣とも、又八卦の陣ともいへる也。其陣法は箇樣々々。と即地に畫して、孝嗣幷に頭人等に、教示して又いふやう、今こゝに在る隊の兵は、振照倶教二の分ちし者五百名、五十三太が從類六七十名、二四的須々利の從兵六十餘名、都ては六百三四十名なるべし。今是を八十餘名づつ八に分ちて、八門を守らしむべし。這一門毎の隊長は、政木生姥雪叟と、直塚須々利、二四的五十三太、素手吉と我と、八名にて足れりとす。其進退は、我這軍扇をもて指揮せん。皆よく我手に從ふて、景春を擒にすべし。景春倘この陣をよく知りて、東方、生炁の門より入りて、北方五鬼の死門を突破り、又生門より出るならば、其鬪戰互角ならむ。他知ずして死門より入らば、嚢の物を探るが如く、必一人

諫難て、猛可に下知を傳へつゝ、馬には多く豆草を飼せ、士卒には皆腰戰飯を使せて、急に人馬を調へけり。却小可等は、敵の雜兵にうち雜りて、景春の身邊まで、紛れ入ることを得たりしかば、聞くこと具に候ひき。と詞ひとしく注進しぬるを、親兵衞はさもこそあらめ。とばかり答て頷くのみ、騷ぐ氣色はなかりけり。

第百六十八回

三陣を衝突して靈豬再功を奏す
舊恩を報答して戍孝前言を全す

登時三個の彫兵等が、景春二たび推寄せ來つべしといふ、注進を側聞せる、姥雪代四郎以下の衆兵、直塚紀二六、漕地喜勘太、石龜次團太、越鮒三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉、須々利壇五、二四的寄舍五郎等に至るまで、皆愕然と目を注して、胸安からずぞ思ひける。那が中に、政木大全孝嗣は、敢驚く色もなく、徐に親兵衞に向ひていふやう、淺智の論辯、助言に似て、憚りなきに候はねども、敵は敗られて再聚なるも、猶三千の雄兵あり。自家は僅に五六百なる、而も疲勞れし士卒をもて、怒氣奮勇始に倍せる、敵を迎へて野戰せば、恐らく勝こと難かるべし。誠に愚案に候へども、怒る者は誘ひ易かり。今奇兵をもて他を征せば、一戰必勝

祿子孫に傳るに足ん。寔に賀すべし、賀すべし。と連りに感嘆したりける。浩處に、嚮に犬江親兵衛が、夥兵三名に吩咐て、敵の去向を見て來よとて、遣したりける其兵每、走りかへり來て、跪居て親兵衛に告るやう、小可每は、命ぜられしごとく、敵將長尾景春が、敗れ走りし迹を尋ねて、葛西のかたへ赴き候ひしに、景春は、戰に敗れしより、北走ること遙にして、やうやくに旗を建て、散ばひたる、士卒の集るを待に、一霎時の程に皆聚合來て、其兵又三千有餘に倣りたり。有恁し程に、其子爲景の殘兵の、擊漏されたるが、幾名歟逃かへり來て、事恁々と告しかば、景春聞つゝうち驚きて、且怒り且怨に得堪ず、隊長たる直江宇佐美、梶原樋口等を、遽しく召近づけて、爲景の事箇樣々々。と告知せて且いふやう、我慭に獨立の、志ある故に、山内の隊に附ず、獨岡山の壘を襲ふて、臺の城を拔まく欲しゝ、計較早く齟齬ふて、乳の臭耗ざる義通に、戰ひ負たるのみならず、今番爲景は初陣なるに、漫に血氣の勇を負みて、みづから殿したればこそ、那小猴子犬江とやらんが、辱に値にけめ。我子を敵に虜にせられて、阿容々々として恁てのみあらば、滸我山内に笑れん。先や今亦推寄せて、犬江を殺して、義通を、捕へて怨を復すにあらずは、生て二たび還るべからず。とく〳〵せよ。と敦圉き暴く軍扇をもて、膝うち鳴らす、臂を張り眼を瞪らし、連りに焦燥つ威勢に、隊長每は

す、感服至極に候。と祝せば、代四郎紀二六們、夥兵伴當いへばさら也、寄舍五壇五と、其隊の兵等は、耳新しき心地しつ、この人にして這友あり、寔に得がたし〳〵。といはぬ者なんなかりける。當下犬江親兵衛は、甲乙の會話をつら〳〵と聞果て、且歡び答るやう、命芽出たき和殿等の再會、我のみならで犬阪犬山、犬川犬田自餘の犬士も、歡び必等しかるべし。以ある哉政木主は、是忠孝の俊傑也。又石龜の義俠なる、且鮒三が其師に孝順なる、又五十三太素手吉が、善に與して任俠なる、積善餘慶の天助虚しからず。或は縲絏の寃屈に陷れられて、白刃頭に涖むといへども、或は不測の敵の矢丸に撃れて、急河に陷たりといへども、其死を起し生に回すに及びて、乙をもて甲を救せ、丙をして丁を援けしむ。因あり緣ある、同忠同義、造化の默契、妙なる哉。政木生は、曩に我が、素藤對治の日にも戰功ありしかば、只管奉仕を薦めしかども、猶云云と意衷を演て、從ふべくもあらざりしに、今日は又咱等に代りて、御曹司の危かりける、野戰を援けまつりて、劫敵長尾景春を、防ぎ禁めし挊きは、實に一人當千也。矧又石龜師弟、向水枝獨鈷弟兄が、其徒と共侶に、政木生に從ふて、當家の爲に忠戰は、始あり終あり。其舊緣を推すときは、いまだ仕へずといふといへども、皆是里見の家臣に同じ。この義を以聞え上なば、御曹司はまうすもさら也、兩舘（義實義成を云ふ）御感大かたならで、恩

の、資助によりて再生の、歡び四度に及べども、いまだ安房へは得もゆかで、御身は格別、犬田犬川、犬阪主にも告ざりしは、今政木主の云云と、陳じ給ひし情由なれば、いかで饒させ給へかし。と陪話れば亦鮒三も、舒る口誼を孝嗣は、推禁めて又いふやう、犬江主聞給へ。我兩敵の勝負を覘ひしに、昨日までは鬪戰互角の聞えあり。這曉に至りては、寄隊の三將戰車を燒れて、敗績しつと告る者あり。爾るに長尾景春は、那三將の隊に附かず、今朝しも猛に旗を建て、岡山のかたへ赴くを、我聞知りて思ふやう、景春一箇の隊兵をもて、岡山のかたへ推寄するは、那里の空虚を覘ひ知りて、攻拿まく欲するならん。倘那壘を奪ひ略られなば、臺の城の大害也。悄地に後に跟て行て、機に臨みて撃破らんず、と思ふ心を我衆に、告て悄地に將て來にけるに、豈計んや、義通君の一軍は、中途に景春に相逢ふて、他兵を雜へず野戰あり。里見の士卒勇なきにあらねど、景春も亦然る者なれば、早く士卒を三隊に分て、義通君の備在す、其隊をみづから撃亂して、鬪戰難義に見えしかば、咱等孤軍の壯佼等をもて、景春を相拄えて、力戰時を移せしかども、我隊兵は俠客のみにて、軍陣に熟たる者なく、且戎衣も器械も、眞物眞劍ならざれば、勝を拿ること難かりしに、折よく和君の馳著給ひて、一瞬間に景春を、敗り走らせ給ひぬる、そが上に、再戰の獲さへありけるは、我黨の及ばぬ所、雲と壤とに異なら

談しぬるやう、那犬江は我恩人也、爾るに京師へ使して、今番の大事に逢ずならば、さぞ口惜く思ふべからん。我今那人に成も代りて、里見殿の御爲に、いかで一臂の力を盡して、那恩義に報ふべし。恁はいへども、扇谷殿は、是我舊君也、既に恩怨地を易て、讐敵に等くとも、那隊に向て弓を彎き、箭を飛さんは我本意にあらず。聞くに國府臺へ寄隊の大將顯定父子と成氏主には、我稟たる恩なく、義もあらず。況や國府臺の城には、里見義通君大將にて、防禦使犬塚犬飼が、城を出て寄隊の大軍を、逆るといふにあらずや。然らば尤便宜の地なり。先や那里へ赴きて、時分を料り變に應じて、里見を援けて、寄隊を敗らん。この義什麼、と談ずれば、石龜師弟、向水弟兄、悦び勇みて、他議に及ばず。主人は悄地に乾兒義子に、徇示しつゝ集合るに、僅に半日許の程に、來會しぬる自家の壯佼、六十餘名に及びける。と告るを次團太受續て、却小可は越路の市人、悍く勇る物部の、八十宇治河の瀬には立ねど、少き時より角觝を好みて、老ても俠耗ねばや、始は犬田犬川主に、知られまつりし歡びあり。其後淫婦奸夫に誣られて、身は罪ならぬ罪人に、做りて牢獄に繫れしに、舳三がゆくりもなく、犬阪主の救ひを得て、罪を免れし歡びあり。其後又兩國河原にて、御身に値遇し候ひしより、政木主と共侶に、舘山の城攻にも、又結城の法會にも、伴れたる歡びありしに、左右川橋にて必死の大厄、向水弟兄

の、盤纏を費し米を買せて、養るゝ日も多かりき。といふを孝嗣咳して、禁めて親兵衛に告るやう、我們三名が薄命なる、且再生の事の顛末は、目今這弟兄が、口状に具なりき。然ば是等の趣を、いかで和君に告ばや、と思ふものから夏果るまで、疾愈ざれば筆も把られず。又七月の比より歟、和君は京師へ使して、安房に在ずと聞えしかば、歸藩の便宜を待のみにて、向水等が義俠の帮助に、我のみならず石龜等さへ、心にもあらぬ長逗留して、做す事もなくありけるに、今番里見家危窮の軍役、敵は則扇谷、山内の兩管領にて、大軍水陸より攻伐まくすと云、檄文を市に掲げて、隱もあらず聞えしかば、咱等はさら也、石龜等も、うち驚きつゝ人に問へども、和君は京より還れりや、いまだなるやを、誰もかも、知るよし絶てなかりしに、本月の五日に至りて、扇谷の間諜兒の、安房よりかへり來ぬるあり。原是向水の乾分なりければ、五十三太隨卽他を哄誘して、兩敵の祕事を撈るに、犬江主は、京よりいまだ還らず。この他、犬阪は軍師にて、六犬士は防禦使たり。寄隊は則箇樣々々、と水陸の隊配を囁き說示さるゝに、國府臺の寄隊の大將は、山内顯定主と、足利成氏主と兩旗にて、副將は山内憲房主也。兩隊の軍兵六萬餘騎、實は四萬有餘なるべし。今朝しも五十子の城より發向して、龜蟻に陣すといひしとぞ。咱等この義を傳聞て、猛可に主人弟兄と、石龜師弟を閑室に、聚合て密

所へ歸著きしかば、政木主們三人の爲に、醫師を招き、療治を請ふて、膏藥を打せ湯劑を薦るに、死も果ず活もせず。この比又小可は、悄地に結城へ赴きて、和君達の安危を撈るに、那里の風聲隱れもあらず、那一疋寺の惡住持德用、結城の家臣、長城枕介惴利、堅名衆司經稜、根生野飛雁太素頼們が、法會を亂妨の事、且件の僧俗奸虐人們は、皆八犬士に擊懲されて、活恥を曝せし事、又八犬士と、大庵主は、反て結城殿に譽られて、那里を退り給ひし事まで、聞得てかへり來ぬる比より、政木主石龜師弟は、やうやく痊可に赴くものから、擊れし脚の筋縮りて、起居不自由なりければ、垂籠てのみ在したり。といふを五十三太又續て、恁て三伏の夏過て、秋八九月になりし時候、安房より來ぬる商舶に、八犬士達の上を諮問ひしに、今はしも八人ながら、里見殿に仕まつりて、瀧田の城内に在り。开が中に犬江主は、七月の比使を奉りて、京師へ赴き給ひきといへり。この時三個の客人達は、舊瘡皆なごりなく愈て、手脚自由に走行も、生平に異なくなり給ひしかば、咱等弟兄折々薦めて、いかで安房へ赴きて、里見殿に仕給へ。那里には犬士達の在るなれば、事成るべし、といひしかど、政木主も石龜叟も、倶に云云と意衷を演て、從ふべくもあらざりき。非如幾まで我家に、歇船にて在りとても、开が厭しきにあらねども、素より富る我身ならねば、錢なく米なく做る折々は、反て這個の客人達

死に胸潰れて、さても〳〵、とばかりに、小可も亦手傳ふて、三個の屍骸を左右して、皆船へ曳乗せて、見れば孰も身體に、銃瘡二三ヶ所づつあり。なれども猶幸ひに、面部胸腹なンどの竅所にあらず、只是腢と手脚のみ也。然る故にや三人倶に、死したるごとく見ゆれども、胸膈は溫にて、推せば動脈あるに似たり。原來いまだ死絶ざりき。疾水を吐せよとて、一個々々に舷へ、推掛て、倒にして腹を推すに、孰も多く水を吐きにき。しかれども氣息なし。登時小可素手吉と商量するやう、この人々は昨日關宿にて相別れしより、犬江主に作れて、結城の法會に赴きけんに、皆瘡を負ふて水に陥りしは、必是故なからずや。我意ふに、今日那里には、不測の禍鬼起ることありて、鬪諍にや及びけん。倘果して爾らんには、犬江主の安危心許なし。然ばとて、這九死一生なる三人をうち棄て、陸を走りて結城へゆくとも、只其安危を知るのみにて、鄙語に云、喧嘩果たる杖三昧になるならば、事に益なきのみならで、反て犬江主に恨みられん。所詮船を漕戻して、宿所へ還りて、この人々を、活さば結城の安危も知れん、女々しくものを思んや。といひつゝ傍を見かへれば、素手吉詞を受接て、愚兄の了簡中準なれば、軈て船を漕戻すに、急流の降船は、其勢ひ創に似ず、射箭の如く蚤ければ、其曛昏に關宿まで、戻りつ、猶も力を勠せて、通宵漕もてゆく程に、其詰朝両國河原なる、宿

て退らん。この議什麽と談ずれば。といへば素手吉語を續て、小可是をうち听て、开は最要ある主張也。和子に知られて、叱らるゝとも、分說はいくらもあらん。然らば蚤く遣復せよとて、猛可に舵を拿更して、又關宿へ漕戾す程に、旣にして日の暮れしかば、只得那里に船を歇て、其夜の明るを俟にき。といへば五十三太、却听給へ、恁而次の日の早天より、那枝流へ船を漕入れて、結城を投て泝るに、川幅のいと陜くて、流急ければ、船膓まず。或は左右の岸に繁り立たる、樹の枝に掩れて、去向見えわかぬ處あり、或は流淺く船涂りて、竿を使ふに由なき處あり。其頭は素手吉を岸に陟せて、船を曳せて溯るに、然らでも猶膓ぬ折は、弟兄水に下立て、船を肩擔ぎつゝ辛くして、推もて遣ること幾町なりけん、恁る辛苦に時移りて、日長き四月のかひもなく、結城へは尙二三里もあるべからんと思ふ比、日影は既に斜になりぬ。心連りに焦燥ども、其頭は特に流陜くて、せん術もなき折から、と見れば人の浮屍骸、一人ならず三人まで、船に歇りて流れもあへず。噫忌々し、と呟きて、竿をもて突流さまく欲するに、細流なれば、遣も反らず、只得又素手吉は、呟きながら湍に下立て、竿をもて其死骸を、突流さまくせし程に、忽地一聲苦と叫ぶを、小可聞つゝ驚て、見つゝ衣を脫捨て、下立て、又其浮屍骸をよく見るに、果して是政木主と、石龜屋の乾父乾兒也。訝しくも亦痛ましき、相識逹三人まで、恁る横

城に屆る時、和君の歩の蚤ければ、一町あまり後れつゝ、左右川とか喚なせる、野水に架たる圯橋を、渡りゆく程に、誰とは知ず發出す、幾十挺の鉄砲に、撃れにけり、と思ひしのみ。といへば次團太語を續て、身を水中に撃墜されて、推流されし歟、沈みし歟、我にもあらで候ひき。といへば舩三咱等も同容、是より後の事はしも、哥々具に説出しね。といひつゝ傍を見かへれば、五十三太含笑點頭て、却小可弟兄は、關宿に船果し時、結城へ伴を饒されねば、只得船を漕退けて、家路を投て還るものから、遺憾さに堪ざれば、家弟素手吉と商量すらく、和郎はいかに思ふやらん。曩に犬江和子に値遇せしより、乾兒們と共侶に、水路を上總まで送りゆきしかど、素藤とやらんを對治せらるゝ、戰場へは伴れず、僅に落人を搦捕て、賞祿に米を賜りにき。恁て又犬江和子は、友人三名を伴ふて、結城の法會に赴くと聞えしかば、我們又是を送りて、水路を關宿までゆきながら、法會の伴を饒されず。勿論辛苦錢也とて、金幾枚歟惠れしかど、錢財は咱等の本意にあらず。修羅の戰場菩薩の法會、其伴にしも省れて、阿容々々としてかへりいなんは、恥赫奕しき事にして、乾兒們に侮られん。我聞關宿より柴船の、結城へ暢ふ小流あり、急流なれども廣からず、其地々々の莊客が、用水にしぬるのみ。この故に巨船は、漕容るゝことを得ざれども、幸ひにして今日我船は、快船なれば易かりてん。いでや結城へ赴きて、躱れて法會を見

ありて過ることを得ず、只得間道を尋索めて、今朝しも武藏豐島なる、千住河まで來にける折、這方へ來ぬるに逢しかば、訝りながら思ひがけなき便宜にあなれば、軈て這馬にうち乘て、千住河を渉す程に、姥雪直塚、夥兵若黨奴隷毎は、或は馬の尾に携り、或は連枷に身を浮して、泅ぎて前面の岸に屆るに、料らざりける小敵あり、戰ひ勝て降參の折、其姓名を肇て聞知る、即野武士の頭領にて、其里に侍る寄舍五郎と壇五郎等也。原是當家へ歸服の情願あり。是によりて青海波の、來歷も粗知られしかば、只この一隊を從へて、馬の足搔に儘せてぞ、心ともなく御曹司の、御危戰の折に騎著て、勍敵長尾景春を、芟拂ひつゝ復這里に、再戰の勝を得て、和殿等五個の舊識に、再會の歡びあり。我上は先かくの如し、和殿幷に石龜師弟の、再生は故こそあらめ、いかにぞや、いかにぞや。と問るゝ孝嗣次團太等はさら也、側聞せし向水枝獨鈷、この隊の壯佼等も、又二四的須々利の兵毎、五百有餘個の軍兵まで、皆駭然と舌を卷く、奇談に感嘆したりける。姑且して孝嗣は、親兵衛に向ひていふやう、適愛たき和君の高運、妙用自然に稱ひしは、忠心義胆の致す所、神佛の冥助なからずや、但感心といはんは烏滸にて、幷て敬服の外候はず。就て我們三人の上は、いはでもしるき四月の時候、倶に和君に從ふて、那日結

右川橋を渡りも果ず、敵の連發ちぬる、銕砲に撃墜されて、推流されし歟、沈みし歟、後に求獵れども知るよしなければ、我のみならで義兄弟等、七犬都て最惜て、今に至て忘るゝ時なし。このよし舘も聞し召て、最忝き御諚ありき。然ば又我們八人は、結城よりかへるさに、故ありて穗北なる、落鮎の宿所に居り、程もなく舘より、丶大師父を御使にて、稻村へ召させ給ひて、恩遇孰も淺からず。开が中に我仁は、京師へ使を奉りて、七月の下旬より那地に在り。舘の願せ給ひし如く、掛向は最も畏き朝廷より、我們八人に、姓氏を賜りて、金碗宿禰になされき。忝過分き歡びあれば、不測の憂ひなきにあらず。管領政元主の計ひ稟して、副使に參りたる、蜑崎十一郎にのみ、身の暇を賜りて、我身は還ることを饒されず。伴當也ける、那姥雪代四郎叟と、蜑崎の若黨直塚紀二六と、夥兵五名と、若黨奴隸六七名、倶に京師に淹留して、前月廿四五日時候まで、同じ憂に沈みて在りしに、我兩舘の御盛德と、諸神菩薩、伏姫神の、冥助にや依りたりけん、虎妖對治の功をもて、稍厄釋て主僕皆還ることを得たりしに、路にて愛馬走帆の、病て客舍に斃れしかば、是等の故に又日を費して、稍信濃路まで來にける程に、我君不慮の軍旅の風聲、漸々に具にて、鎌倉の兩管領、諸將を連ね兵を合せて、安房上總を攻略まくすといふ、事の趣聞えしかば、うち驚きつゝ去向をいそぐに、上毛より東には、新關

り返し來つべき歟、是も亦知るべからず。卑職は二三百個の雜兵を從へて、其生口を牽せて退らん、この義を饒したまはんや。と請ふを親兵衞聞あへず、否とよ鬪戰の勝負は、隊兵の多少に依るにあらず、機に臨みよく變に應じて、其進むこと脫兎の如く、其退くとき處女の似く、未戰に安危を知る者は、必勝ずといふことなし。なれども上の御意とあるを、推辭まつらん、は最も畏し。爾らば隊兵五百を留めて、其餘は倶して退り給へ。しかすれば上の御意に悖らず等分なれば越度なかるべし。と諭すを倶敎二强難て、竟に其議に任せつゝ、精兵五百名を拔出して、是を親兵衞に遞與し從せて、却孝嗣次團太鮒三、五十三太素手吉們に名對面しつ、今日の義戰を、叮嚀に勞ひ謝して、且親兵衞に歡びを舒て、そが儘爲景を受拿りつ、隊の兵に牽せて隊伍齊整と、馬をはやめて暴河原なる、岡山を投し退りけり。爾程に犬江親兵衞は、猶思ふよしあれば、夥兵三名を召よせて、事恁々と吩咐れば、皆こゝろ得て直走りに、葛西のかたへぞ赴きける。恁て又親兵衞は、喜勘太に吩咐て、敵の棄たる革袱を、五六枚拿よせて、爰に主客の座を儲て、然而孝嗣們を請ひ坐らせつゝ、其身も坐して對面す。登時親兵衞がいふやう、政木料らざりける政木主、石龜師弟、向水弟兄、恙もあらで、いと愛たし。就中訝しきは、政木主等三人の上也。いはでもしるき事ながら、今玆四月某の日に、和殿等三名は、結城なる、左

餘名と相共に、又親兵衛を相援んとて、今稍こゝに來にければ、親兵衛は孝嗣們に、面談を先闍きて、隨即倶教二們を迎へ勞ひて、却剛才この地方にて、敵の殿の隊長を、擒に做しゝ事の顚末を、箇樣々々。と告知せて、又いふやう、我豫より人の噂に聞知りぬ。長尾景春の冢子に、太郎爲景と喚做すあり、少年なれども胆勇にて、武藝十二分の本事ありとかいへり。意ふに今我生拘りたる、勇少年は、必是爲景ならむ。和殿は他を牽せ還りて、この義を聞え上給ひね。我は舊友政木大全們に、料ずも再會の情義を磬して、伴ふて御陣へまゐらん。景春遠く逃亡たれば、這里に多兵は無益也。隊の兵は皆倶し給ひね。といふに弘經敬服して、且羞て答るやう、卑職等は和殿と昨今にて、對面は今を始なれども、其武略勇敢の、今古に獨步し給ふよしは、豫聞しに違ざりける、和殿のみかは犬塚犬飼、倶に是豪傑の士にて、萬人の敵といひつべし。其儔にはあらざりし、卑職等は斗筲の細人、驥附の功を欲するものから、响の鬪戰に散ばひし、隊の兵亟に聚合ざりしかば、後の戰ひに得あはずなりしは、面なくこそ候なれ。と勸解れば寄舍五壇五郎も、亦共侶にうち侘て、遲參の罪をぞ謝しにける。當下倶教二又いふやう、今は當所に要なしとても、卑職が預りまつりて、將て來にける隊の兵を、遺なく倶してかへりいなば、上の御旨に違ふに似たり。景春愛子の生拘られしを、聞かば怨に堪ずして、途よ

見えしかば、爲景の老黨近習、十名許返し來つ、主を援けて親兵衛を、撃んと競ふ程しもあらせず、政木孝嗣、姥雪與保、五十三太等が隊の乾兒の毎、齊一咄と走り來つ、推隔相拄えて、六七人に痍を負せ、殘る三人を五十三太們が、械の冴にぞ斃しける。當下犬江親兵衛は、既に疲れし爲景を、刺さば一鎗に殺すべきを、素より仁慈の本性なれば、猶一霎時疲勞せて、怯むを得たり、と横に拂へば、爲景は鎗を持ながら、馬より撻と薙落されて、俯平張りつ蠢きて、身を起さんと掙扎しを、親兵衛透さず馬上より、鎗拿直し幹當もて、爲景の背を押えて、毫も動せざりしかば、爲景は面を赤うしつ、耶と聲かけて幾番歟、反起まく欲するに、譬ば千曳の石をもて、壓に措れしごとくにて、喘も出ずなりにけり。浩處に直塚紀二六は、漕地喜勘太以下の伴當、及五個の夥兵と倶に、走りてこゝに來にければ、親兵衛ヤヤ。と夥兵を喚て、頤もて虜兒を指示せば、夥兵等は、唯々と應も果ず、下累りつゝ爲景に、緊しく索を掛にける。然ば長尾の士卒們は、或は撃れし、或は落亡て、四下に敵のあらずなりしかば、親兵衛は孝嗣次團太鯽三が、恙もあらで剩、五十三太素手吉其毎さへ、義通君に從ひまつりて、這戰場に在るを見て、且訝り且歡びて、軈て馬より下立つ程に、振照倶教二弘經は、東六郎辰相の、指揮に依て、一千有餘の隊の兵と、新參の野武士、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎、幷に其從兵六十




親兵衛馬上に為景を擒ふ
ためかげ

撃落させんと構たり。こは退口の草伏とて、赶來ぬる敵の猛將勇士を、撃捕るべき爲なるを、親兵衛蚤く猜すれども、敵に望みて今さらに、止るべき勢ひならず。況や名馬青海波の、疾こと飛鳥に彌增たれば、憶はず近くなる隨に、那草伏の歩兵等も、枯芒花の裏よりして、火蓋を鑽て撥と發せる、鉄砲の覘ひ皆錯て、那身に中らず怪し甚だり。以ある哉八犬士は、各身を衛る靈玉あり。然ばこの時親兵衛が、胸邊より粲然たる、靈光兩三道晃めき出て、那歩兵等の眼を射ければ、歩兵等は憶ずも、吐嗟とばかりに鉄砲を、捨て驚き立つ程に、五十三太素手吉胞弟兄は、倶に長械を挾みて、走りてこゝに來にけるを、親兵衛馬上に見かへりて、やよ那奴等を饒しなせそ。といふより早く五十三太素手吉、こゝろ得たり。と長械を、拿直しつつうち向ひ、悍く勇る勢ひに、中るべくもあらざれば、逃んとせしを走らせず、胞弟兄長械振閃めかして、件の三個の敵兵を、矢場に殴き仆しけり。其間に犬江親兵衛は、馬を敵中へ乘入れて、群立つ敵の衆兵を、鎗もて多く薙仆す。一騎の奮勇四下を拂ふて、縱橫無㝵に駈破れば、長尾の士卒驚き怕れて、憶ずも逃走れば、長尾爲景怒りに得堪ず、士卒を罵る聲も烈しく、獨馬上に親兵衛と、鎗を合せて、一上一下と手を盡す。少年なれども、獍勇にて、堅を摧く本事あり、武藝足らざるにあらねども、然とて犬江に敵し得んや。鎗法漸々に衰へて、既に危く

害なからずや、量りがたかり。疾岡山へ還らせ給へ。意ふに長尾景春が、其隊の兵を多く將て、此路條へ出て來ぬるは、岡山の御陣に戍兵寡きを、他夙く聞知りて、攻拿まく欲せしにや候はむ。那里は君の知し召す如く、國府臺と相對ひて、涯るに箭斫河をもてしぬる、要害の地にて候を、倘敵に据られなば、臺の城も後竟に、守りがたくや候はむ。とく〳〵還らせ給へかし。と理り切て諫しかば、義通は景春の、敗れ走りしを、赶も果さで中途より、還んことの本意ならねど、豫父君の嚴命ありて、身の後見に隷られたる、家の老の諫言を、听ざらんはさすがにて、信乃現八等が鬪戰の、安危什麽と左に右に、今も心にかゝれども、現岡山を喪はゞ、後悔其甲斐なかるべし、と思ひ復して默然たり。當下東六郎辰相は、士卒を整 歸陣を示して、倶に義通に相倶して、岡の陣營に返し入るゝに、自家の刀猹兒は、潤鷲手古内を首にて、士卒に多くこれあれども、皆幸ひに窮所を外れて、死に至る者なかりしかば、辰相 則 雜兵數十名に相舁せて、臺の城へぞ遣しける。爾程に犬江親兵衛は、自家の士卒に先だちて、乘たる名馬靑海波の、蹄に信せて驀直に、敵を赶ふこと急なりければ、旣に逈に退き去れる、長尾景春の一軍は太郎爲景 殿 して、五百個の士卒を領て、後陣に在り。今赶近づく犬江親兵衛の、小勢なるを見かへりて、冷笑ひつゝ毫も譟がず、枯芒花いと深き處に、銃 手 の步兵を兩三名伏置て、

第九輯　巻之四十一

第百六十七回

奔馬北るを遂て犬江暴雛禽を籠にす
再戰場に親兵衛五知己に會す

再說、犬江親兵衛は、長尾景春の堅陣を、一瞬間に殺潰して、逃るを透さず赶ふ程に、政木大全、姥雪代四郎、直塚紀二六、石龜次團太、越鯽三、向水五十三、枝獨鈷素手吉、漕地喜勘太、犬江の夥兵等、又伴當に至るまで、勝に乘たる勢ひ劇しく、皆後れじとて相從へば、義通の先鋒の頭人、振照倶教二弘經も、刀瘢に撓まず兵を找めて、奔馬に鞭を鳴らしけり。當下亦義通も、みづから敵を赶んとて、馬を其方へ乘向給へば、辰相急に走らせ來ぬる、馬より閃りと下り立て、主の鑣に携りていふやう、料ざりける中途の勍敵、闘戰難義に逮びし折、豫其名を聞知りたる、正木孝嗣とやらんが義旗の援けあり。是だに得がたき幸ひなるに、又思ひかけざりし、京師より犬江親兵衛が、折よくこの地へかへり來て、然しも勍敵景春を、伐敗走らせしは、是十二分の御利運に候はずや。然るを飽ず思食て、漫に逃るを赶ひ給はゞ、窮貓狗兒を爪被る、

根はひとつ葉ずゑはやつにおく露のあはにつどひて玉となりぬる

粟と安房とは同訓にて、盧生が夢は、五十年、又吾戯墨も五十年、只一炊の隙ならで、嗚呼久しい哉、吾衰へたる、吾夢にすら思ひ寐の、腹稿將に盡さまくす。後序に代たる口状は、老の諄言なが〳〵しとて、飽れやすらむ。已なむ、已なむ。

天保十一年陽月　　蓑笠漁隱

里見八犬傳。一百八十一回。以多歲苦樂將盡稿。因而自贊曰。知吾者。其唯八犬傳歟。不知吾者。其唯八犬傳歟。傳傳可知可知。傳可癡可知。(上傳以下十一言。讀以音)敗鼓亦藏革以傚良醫。

辛丑孟春　　七十五翁　蓑笠又戲識

茲も亦懲りずまに、文化三年丙寅の春出たる吾舊作、大師河原撫子話てふ畫冊子を、又恣に再板して、本文の畫を減し、端像二頁を附增て、像賛をさへ書加え、詞書をも增減して、畫は舊刻に由らず、事皆恣にして、是を新板と偽り記しゝを、告る者あるにより、速に其偽を咎めて、云云といはせしかども、素より利の爲に理義を辨知らぬ、烏滸の癡漢なれば、只強情を事として、亟に承服せずと聞えたり。畢竟兒戲の冊子なれば、恁る僻事をせらるゝとも、久しく世に貽るべくもあらず。三十五年前の舊作なれば、今の婦幼は欺れて、新板也と思ふもあらむ。又吾舊作なる物の本を、多く藏めたる壯佼達は、ふるしといふとも、必知るべし。然るを一時の瞋怒に乘して、彼烏滸人の己が自恣、傍若無人にて、理義も廉恥も辨知らぬに、しうねく懲さんは大人氣なし、と思ひ棄てものせざれども、實に是憎べし。彼も此も吾虛名を愆り知らるゝ、戲墨久くなりぬれば、名號をしも誣て賣らるゝ烏滸の僻事を、見も聞もしぬるうるさゝよ。本傳既に末三卷六回になりにたり。速に局を結びて、四方の看官に、彼杣木樵る斧の柄の、朽しを知せまく欲りす。然らでも老眼衰眊して、編述不如意になりたれば、爰に戲墨の筆を絕つべし。嚮に畫工佐藤正持が、武北の旅舍にて、八犬士を畫きて、贈り來せしに題する歌、

旨に違はず、釋氏の所謂善巧方便、五百の阿羅漢、二十五の菩薩の功德に伯仲す、といふとも過たりとすべからず。しかれども水滸の如きは、彼土なる具眼の者も、よく其深意を悟れるなし。況や此土の俗客婦幼は、漢文俗語を一行も、讀得べきにあらざれば、通俗解語の一書なきは、其書舶來して、久しくなりぬるも、其趣を覘ふに由なし。只俗客婦幼のみならず、をさをさ戲墨を事としぬる名人達も、よく唐山の俗語を讀得て、師としぬるや、否を知らず。吾其冊子を一卷だも、取て閲せざれば也。但作者の用心は、寧勸懲の二字にあり。然るを淫娃を旨とせる者、時好に媚、時好に稱ふて、書肆の鄽を賑せるは、吾羨ざる所也。因て昨の非を知るよしあり。寬政文化の間に、吾戲墨なる臭冊子てふ、合卷物の畫本には、いと恥かしきまでに、いかにぞや、と思ふもなきにあらず。然れども近曾は、年々に吾編次ぬる合卷物の本は、新編金瓶梅を除くの外、一書も新作あることなければ、小利を欲する似而非書肆等が、吾舊作なる物の本を、恣に再板して、畫を新くし、書名を更めたるもあり、更めざるも、皆新板と僞り記して、看官を欺き作者を蔑如にしぬるあり。是等はいかなる心ぞや。既に去歲の冬も、文化中吾舊作なる、養八丈てふ、繪冊子の畫を改めて、恣に翻刻して、新板と僞り記しゝもの、出たりと聞えしかば、吾是を詰りて新板の二字を削らせにき。然るを其書肆、今

利に附かず、富貴を羨まず、同好同志の友稀なれば、但いにしへの聖賢を師とし友として、隱居放言、春日秋夜を長しとせず、常に書を著して、もてみづから其智を籠にしぬる者あり。元の羅貫中、淸の李笠翁是に庶とせん歟。是よりの下、唐山にて云稗官者流、國俗の云戯作者是なり。そが中に、彼大筆と隨筆あるは、猶白狐と野狐あるがごとし。桂も柴も一膦に、人見て並て狐と呼べども、白狐は野狐の野に遊ばず、功德無功德殊なればなり。然るを、柱に膠せる村學究は、玉と石とを擇も得せず、或は彼才を忌み、或は彼名を娟む者、其書の出ると聞く毎に、遮りに眉をうち顰めて、是等の漢、かくの如き學問ありながら、何どて儒になりて章句を誦し、子弟に敎て、眞の道を傳へざるや。只是意匠を費し紙筆を費し、多く梓棗に災して、世を誣ひ俗を惑せる、是憎むべし、厭ふべし、と呟くも間これあり。是等は腐儒の偏見而已。蓋博く學得て、退きて戯墨に遊ぶ、彼大筆なる作者は然らず。大凡經籍詞章の學びは、和漢の先哲、叮寧に注疏して、學者を敎導くものから、世俗は皆敎を厭ふて、無用の空言を歡び、或は又奇を好みて、人の好歹を聽まく欲す。こゝをもて、達者の戯墨に遊べるや、事を凡近に取て、諠を勸懲に發し、空言以塵俗の感ひを覺す者、水滸西遊、三國演義、平山冷燕、兩婚交傳の五奇書あり。文章巧致至奇至妙、其深意を推考れば、則齊諧を鼻祖として、反て三敎の

第九輯下帙下套之中後序

智は知也、人生れて耳目の及ぶ所、物として知ざるはなし。知るといへども其理を極めて、是を辨ずるにあらざれば、智の要を爲さず。格物致知は、則學者の先務也。雖然是を知る而已にして、慧なき者は悟るに由なく、才なき者は智を致すこと得ならず。この故に智慧と云、才智と云、佛說に所云般若は智慧也。智と慧と具足して、悟るべく致すべきを才と云。智慧も亦大なる哉。蓋智と慧と、相佐けて用を做すや、譬ば人の身に魂と魄と有るが如し。魂は則心神也、魄は則神系也。人の心の欲する所、魄の資助にあらざれば、手を動し足を運し、動靜云爲、座臥行止、一も其如意ならず。智慧と才幹と相佐けて、譱致すことあるも、是理りをもて知るべき而已。然るに智に上智あり、邪智あり。上智は、良善の事に用ひて、毫も奸惡の事に移らず、進退必度に稱ふて、動くといへども跌かず、是を賢才睿智といふ。才は智の乖なる者也、是を以難しとす。才なく智なきは、則下愚なり。又邪智は奸惡の事に用ひて、仁義の心なく、進むを知りて退くことを思はず、動くときは人に害あり。奸民盜兒の才あるは、多く是なり。或は又良知にして心正しく、博く學び得て奇才あれども、命凶にして用ひられず、且勢

れども、今よく思へば、本傳百七十囘にては局を結ぶに尚足らず。然しも夙案の腹稿は、譬ば紈ねたる緒の如し。是を文に倣すときは、其緒を解延すに似て、思ひしより、長くならざることを得ず。こゝをもて、今より初念を改めて、一百八十許囘にして、大團圓に倣まくす。然れば言又この義に及べり。

飼現八、杉倉武者助等が、寄隊の敵將、顯定成氏憲房と、三面二度の鬪戰ありて、いまだ勝負を決するに逮ばず。又里見義通の、野戰難義の時、政木孝嗣、石龜次團太、越卿三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉と、其徒數十名を以て出て來て、義通の苦戰を援る話說ありて、いまだ孝嗣次團太卿三等の來歷を、こゝに具に寫すに遑あらず。この故に、第百六十七回までを、今番續出して、是等の事を詳にして、看官に蚤く示さまく欲しけれども、刊行の書肆は、一板毎に、五卷を可として、六卷を欲せず、一卷多くて價を增せば、賣買の爲に妙ならずといへり。こも亦故ある事なれば、愚意を枉て、其好に從ざることを得ず。敢請、江湖上億兆の君子達、那鬪戰の勝敗と、孝嗣們の來歷を知まく欲さば、又復後板五卷を續出す日を竢ねかし。

作者又云、本傳は始より、九輯百七十回にして、必局を結んとおもへり。こゝをもて、九輯は四十五卷也。是を先例の如く、一輯五冊に做すときは、則十三輯也。又第七輯八輯の七冊八冊なると、又分卷を加え數まへて平均せば、十六七輯に至るべし。そを九輯に約めしは、初念の已ことを故ざる故なれば、回の數も只管に、百七十回にして、筆を絕まく欲せし故に、本編は一卷に一回なるもあり。或は一回を釐て二卷に做たるもこれあり。しか

む須々利と隊の兵等さへ、奮撃突戰せざるもなければ、里見の先陣後陣の隊長東六郎、振照俱救二、及義通の隊下なる、鳥山眞人、朝夷三彌、白濱七浦是に氣を得て、奮勇始に十倍したる、士卒一致の大刀風に、然しも長尾の勍敵なるも、三陣一度に殺頽されて、或は痍を負ひ或は擊るゝ、鮮血に辷り盾に跌き、皆蜘子雛を散せる像く、潑と敗れて逃走れば、景春爲景怒りに堪ず、罵禁れども甲斐なかりける、梶原樋口、宇佐美直江も、逃る士卒に誘引れて、將帥步兵の差別なく、葛西のかたへ亂走しぬるを、犬江親兵衛政木大全、其隊兵㚑雪直塚、須々利壇五に二四的、當る時運に向水、水に由緣の石龜も、藻束鮒三、枝獨鈷も、自家の衆に先だちて、刈拂ふ敵に息をも養れず、漏さじとてぞ逐たりける。畢竟犬江親兵衛が、歸東の忠戰、時を得て、石陣鐵馬も湯と做すまでに、鋒先殊に剛かりし、長尾判官景春の、勝誇りたる數千の勍兵を、一擧に敗り走らせて、義通君の初陣に、武門の花を開せぬる、後の話説甚麽ぞや、分數あり。

奔馬追レ北犬江籠二暴禽一。舊恩報得戌孝完二前言一。

こは後回の題目のみ。猶詳に知まく欲せば、又下回に、解分るを聽ねかし。

作者云、この編は必六卷にして、續出すべきものなり。何とならば、本回に犬塚信乃、犬

たる少年あり、今茲十五歲の初陣にて、其獍雄親に劣らず、父に倶してこの地に來つ。この日は爲景遊軍にて、隊兵僅に三百餘名、弱からん方を援んとて、敵の隙を覘ふ程に、里見の先鋒の頭人なる、潤鷲手古内振照倶教二は、この時既に戰ひ疲勞れて、隊竟に亂れしかば、爲景得たり、と士卒を找めて、自家の隊長梶原景澄樋口維龍を相援けて、透もあらせず殺頽す、勢ひ宛虎彪の像く、爲景みづから鎗を舞して、只一刺に手古内を、馬上より突落して、又倶教二に傷を負すれば、一陣竟に亂れ靡きて、總敗軍にならんとす。浩處に、葛西のかたより、擐甲たる武者一騎、驀直に走せ來ぬる勢ひ、宛飛鳥の像く、從ふ兵五六十名、皆神行の術をや得けん、疾走ること駿馬に後れず、衆に先だつ騎馬武者は、近づく隨に聲震立て、其里なる敵は旗の花號にて、しるき白井の景春ならん。恁いふ我を知るや知らずや、里見殿の御内にて、八犬士の隨一人、犬江親兵衛尉金碗仁こゝに在り。同藩の老兵姥雪代四郎與保、蜑崎の若黨直塚紀二六、新參の野武士の隊長、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎們こゝに在り、こゝにあり〳〵。と名告被け、相叫りて、手々に引提し銕砲を、拿直し敵に向ひて、連發てる銃响と、倶に揚たる喊聲に、驚き見かへる衆敵の、眞中へ親兵衛馬乘入れて、鎗もて四方八面を、中るに儘せて薙仆し、毆き伏せ、刈拂ふ、奮勇獨步の擲きに、代四郎紀二六喜勘太們、夥兵件當二四的、找

者なく、深山を出る若鷹の、振鷲を驅る威勢奮然、其儔にはあらかねの、土に臂冷され五名、合せて七十九名たり、一百名に足らねども、勇將の下に弱卒なければ、皆大敵を怕るよ

て、立まくすれど、跛兒の、命活野目奴九郎は、身さへ人をも怨たる、面を皺めて日送りけり。

目奴九郎の事、この下に話なし。爾程に、この朝里見太郎丸義通君は、信乃現八等が、二た

び寄隊と鬪戰の、危きを援んとて、みづから岡山の陣營より推出て、其方を投て士卒を我る、

其路いまだ遠からぬ、相川の松原にて、長尾判官景春が、岡山へと推寄來ぬる、數千の獍兵に

相逢て、前後中央三隊に鳌れし、鬪戰遑あることなければ、里見の隊長東六郎、潤鷲手古内、

振照倶教二、白濱七浦朝夷們はさら也、突然と來て里見を援る、政木大全、石龜次團太、越鮒

三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉、其手に從ふ篙師舵工、倶に長械をうち振て、苦戰に時を移

したる、就中、政木大全孝嗣は、文武兼學べる壯士にて、弓箭執ては、爲朝の、猿臂を旋らす

手段あり。器械に緣る剽姚は、牛牆丸にも劣らざるべき、一人當千なるものから、景春も亦東

國にて、一二を爭ふ勁將なるに、且軍學に疎からず、孫子の兵法、諸葛の八陣、鞍馬八流、

楠氏の七策、習ひ得ずといふことなければ、士卒を使ふに手脚の如く、みづから屢敵に中り

て、力戰いまだ雌雄を決せず。有恁りし程に、長尾景春の最愛の子に、長尾太郎爲景と、喚做

から便宜といひつべし。臂近にあるならば、拿出しね。といそがせば、寄舍五郎等歡び承て、隨即手下の兵每に、恁々と吩咐れば、其兵每身を起して、遠からぬ茂林の內より、最大きなる笭箵を、十箇あまり背駝來つ、蓋を開きて拿出す、甲冑十二三領、銕砲七八挺ありけり。則之を呈すれば、親兵衞聽て代四郎等に、分ち與へて擐甲しむ。當下代四郎紀二六、喜勘太夥兵伴當們は、寄舍五郎壇五郎と、其每に名對面して、歡びを述て身を固る時、親兵衞がいふやう、我隊の兵は、皆連枷あれば、器械に事を欠ねども、然しも侍品たる者の、農具をもて敵に向んは、面正しくもなき所行なるべし。見るに銕砲も、七八挺あるならずや。幵を叟と直塚と、喜勘太と夥兵五名は、携てゆくこそよかめれ。伴當六名は故のごとく、連枷を放つべからず。とく〳〵せよ。といそがせば、大家唯々と諾なひて、準備はやく成りしかば、親兵衞樹抄を仰瞻て、憶ず時を移しゝかば、朝日は既に高く昇りぬ。辰牌にやなりぬべからん、いで〳〵。といひつゝも、騎馬の泥障を蹴鳴らして、青海波々々々、我今御方の陣所にゆかまく欲す。然ども、いまだ其捷徑を知らねば、去向を儞に任せてん、やよ疾我を導きね、大家續け。と喚かけて、馬に拍れ走らすれば、皆後れじと相從ふ、親兵衞が隊の兵は、姥雪代四郎を首にて、伴の奴隷に至るまで。僅に是十四名、今是に加るに、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎、其每六十

不具で在るならば、一生涯無異にして、其天年を終るべし。この故に我は他にのみ、敢神藥を與へざるは、是情なきにあらず、反て慈悲也、仁の術也。憖ひを取て、怨なせそ。と理り切て解諭せば、目奴九郎は敍頸して、悲しやしからば、我のみ歟、坐脚車に法衣、世に墨染の住不樂て、鉦を敲きて終りやせん。哀しきかな。と伏沈む、程しもあらず、傷瘡兒們は、神藥こゝに卽効あり、傷愈痛消散して、氣力日來に十倍の、歡びに堪ざれば、皆聳然と身を起して、跪きつゝ親兵衞を、伏拜こと數囘、奇也々々。と稱贊の、聲を合せて感ずれば、夥計の衆兵、いへばさら也、寄舍五郎壇五郎は、倶に奇に驚き敬服して、親兵衞に向ひていふやう、寔に大人の妙用巧致、華陀蒼公もしかざるべき、活人の手段、不可思議なる哉。就て稟し試んと思ふ一議あり。恁いへばとて目奴九郎が、諛言に倣ふにあらず、小可們は、這人數の外に、猶甲冑十四五領、弓矢鳥嘴銃あり。いかで今日御加兵の贄代に、伴當達にまゐらせまく欲す。この義を饒し給はんや。と請ふを親兵衞うち聞て、現和殿們は、我君の、盛德を仰ぎまつりて、新參の義あれば、今よりして後、我も伴當們も、則是祿を與にすべき、朋輩なれば、介意すべくもあらず。況や今日の戰場に、我隊の士卒に素肌の者あらば、人必怪むべく、且外聞も宜しからず。然るを今幸ひに、和殿們兵具に餘りあるをもて、开を贈んといはるゝは、折

ず、原來是和殿們は、孰も義俠の人也けり。既にして我君の盛德を慕ひまつりて、倶に歸服の情願あるを、我豈汲引せざらんや。夫賢を薦め士を擧るは、人の臣たる職分也。事由を聞え上なば、必や用ひられん。我初は和殿等を知ず、一霎時相戰ふ程に、撻仆しける傷痍兒幾名歟、こゝに在り。遮莫我に神授の仙丹あり、是を用ひば時を移さず、皆立地に愈つべし。先其手下の衆人を、召集へずや。といそがせば、寄舍五郎と壇五郎は、怡悅に堪ず言承しつゝ、倶に後方を見かへりて、招けば出來る手下の衆人、樹間藁塚の蔭よりして、陸續として近づき來つ、皆親兵衛にうち向ひて、跪居て額を衝ぬはなし。當下親兵衛は、代四郎を喚ていふやう、叟よ、和老の腰なる藥籠に、殘れる仙丹猶有ん。其を些ばかりづつ傷痍兒們に、施して起せずや。といふに代四郎こゝろ得て、腰を探りて藥籠より、那神藥を拿出せば、紀二六喜勘太手傳ふて、傷痍兒們に嘗さするに、喜勘太は又日奴九郎にも、施さんとしてけるを、親兵衛急に喚禁めて、やをれ喜勘太其奴は闇きね。我今其奴一人を、憎みて情なきにあらねども、其奴撲傷亟に愈て、身の搟き自由にならば、必又竊盜をせん。嚮に我に諛ふに、人の戎衣を剝拿て、那身再生の恩に報ふべし、といひしは盜兒根性ならずや。有恁れば上には我敎諭に、從ふに似たれども、歹き癖の改めがたき、底意は今の一言にて知られたり。こゝをもて、他今より、尫弱

老兵を殺走らせて、奪略る所の戰粟千幾百苞歟、咸是を船に積載て、且暴河を溯り、漕もて去まくせし程に、追隊の兵に殺禁られて、其船を乗淪め、剰和女九郎瘤四郎は、里見の隊長田税力介とやらゝに搦捕られて、竟に首を刎られたり、といふ風聲によりて是を知りぬ。然ば我們は、始より、夥計不合せし故に、憶ず時日後れしかば、國府臺の城へ參り加るべき、情願を得果さず、只得這頭に屯しつ、寄隊倘うち負なば、有名の落人を、擇撃に撃捕て、开を功にして義通君の、御陣へ齎し愚意を演て、請て那仁君の、御蔭に依まく欲せしに、嚮に活間野目奴九郎が、牽もて來て賣んといひし馬を、贓物とは猜しながら、其毛の模樣波濤に似て、異相なるのみにあらず、兩眼背梁蹄まで、一箇も虧たる所なき、實に稀世の良馬にあなれば、愛惜の惑ひ醒るに由なく、漫に大人に敵對して、こよなき罪を釀せしを、今さら後悔の外候はず。近曾里見殿の御内人に、八犬士と稱らるゝ、文武兼備の壯夫達、八名ありとは人傳に、聞しは名のみ、今ぞ知る、大人の仁心、武藝の精妙、今古獨歩の英雄たる、驥尾に附せて倶し給はゞ、夥計の兵毎を從へて、今日の軍に微力を盡さん。この言倘詐謟あらば、身は天雷に打摧れて、來世は畜生道の苦を稟べし、天神地祇も照監あれ。急々如律令。と唱へつゝ、倶に箭を折り誓を做せる、迭代の胸忠口誼、誠心氣色に見れしを、親兵衛馬上に听果て、感ずること大方なら

人ならず、剛才親兵衞に撃散されて、逃て命を免れたる、當敵野武士の頭領なる、二四的寄舍五郎、須々利壇五郎にぞ有ける。既にして這兩個の頭領は、犬江の馬前に近づき來て、跪居て倶に訴るやう、小可等眼ありながら、恁る豪傑を認り得ず、漫に其馬を欲する故に、弓を彎き箭を飛し、毛を吹き疵を求めしを、後悔の外候はず。既にして犬江親兵衞と、名告給ひしに心づきて、皆逃たれども遠く得去らず、悄やかに還り來て、樹陰に躱れて便宜を待けるに、君が愛馬を竊みたる、這活間野目奴九郎をすら、饒し給ひし寬仁大度に、いよゝ景仰の思ひ切なれば、這身の罪を見かへらで、出て願ひ稟すよしあり、いかで海容し給へかし。抑小可等は、原是當國千葉の退糧兒にて、倶に氣を使ひ俠を立る故に、乾兒たる者數十名あり。又年來交を結びたる、野武士の頭領に、高飛車和女九郎、劍峰瘤四郎と喚做すあり。他等は原是常陸國の人民にて、其隊に從ふ破落戸、亦是一百十數名あり。しかるに這回、扇谷山内の兩管領、里見殿と兵を構て、寄隊當國に發向すと聞えし比、小可們は、里見殿に、從ひまつらまく欲りししに、和女九瘤四は、この議を用ひず、他們は滸我殿に從んとて、路次に迎へて、恁々と請稟しゝに、猶疑るよしありて、いまだその義を饒されず。この故に和女九郎們は、里見の戰粟を奪略まく欲して、五十四田の陣營の、空虛なる折、急に推寄て、陣門を打破り、守陣の

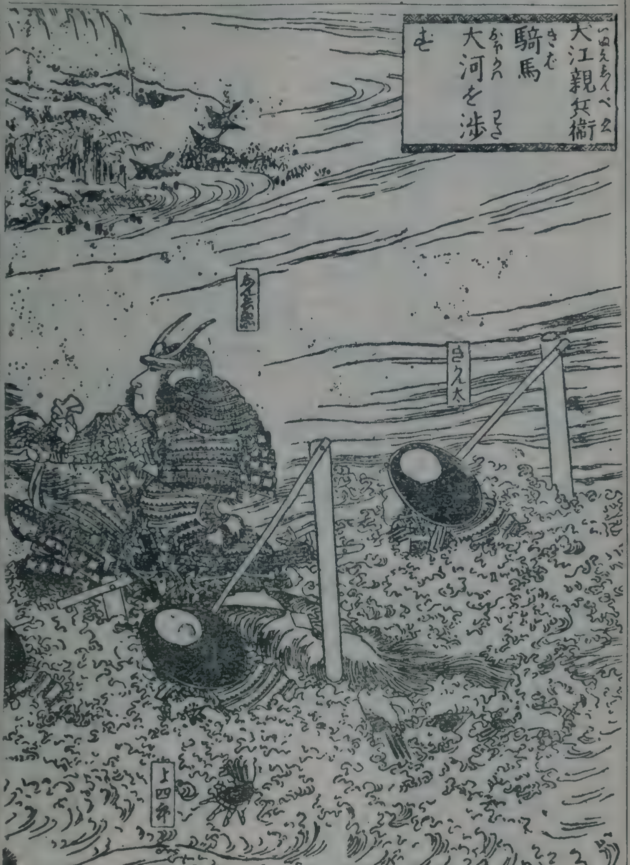
うち向ひて、やをれ盗兒いまだ知ずや、是この馬は、曩に我老舘の、我仁に賜りける、青海波てふ名馬也。然るを儞胆太くも、竊拿り牽もて來て、悄地に賣まく欲りしたる、其罪萬死に當れども、幸ひにして、この馬の、我に返りて、今日戰場の用に達ことは歡ぶべし。因て首を接し得させん。今より志を新にして、人並なる世を渡りね。尚竊む疾耗ずして、非義不良の錢を欲りさば、儞が頭顱はなきもの也、生涯この義を忘るゝな。こゝろ得たる歟。といひ懲せば、目奴九郎は唯々とばかりに、大地に額を推下げて、仰承り候ひぬ。旣に隻脚を折れて、起居自由ならざるに、何でふ暴挊を做候はんや。助りがたき罪饒されし、御洪恩の歡びに、何をがな呈せん、と思へども、今路次なれば、些ばかりの東西もなし。見るに御作當は、素肌なるが半に過ぎたり。こゝより戰場へ赴き給はゞ、那仆れたる傷痍兒們の、甲冑を被せて將てゆき給はずや。といふを親兵衛冷笑ひて、現盗兒は、盗兒相應なる、口誼をしもいふ奴かな。勿論軍陣に臨む者、名ある敵を擊捕れば、其器械を相添て、實檢に備るを、分捕としもいふめれど、我は然ることを欲せず。古の君子廉士は、盗泉を掬ばず、瓜田に履を容れず、這似非甲冑を、剝拿て何にせん。卒ゆくべし。と代四郎等を、いそがして立する折から、背のかたなる、樹の蔭に人ありて、やよ犬江大人、等一等給へ。と喚留めて、走り出來る二個の武者あり。是則別

前面より來ぬるに逢ひぬ。因て馬を售らまく思ひて、見せて價を定むる程に、馬は猛可に暴嘶きて、走りて河へ跳り入りしを、趕へども逮ざりしかば、呆れて長視て在りけるに、豈計んや其馬を、大人に獲られつうち跨て、伴當達も共侶に、這方へ渉し給ふになん。寄舍五壇五等の衆人は、矢場に大人を射て落して、馬を拿んと構へしに、大人の勦勇、一人當千、伴當達さへ手煆練にて、暖息間に多人の敵を、毆散し擊仆して、事竟にこゝに至れり。有恁れば是小可は、那夥計には候はず。いかで饒させ給ひね。と勸解つゝ只管口說きしを、親兵衛つら〳〵聞果て、代四郎に向ひていふやう、叟よ、我この馬の來歷を、今こそ思ひ得たるなれ。こは必犬塚か犬飼が、我這回の鬪戰に、遇ざるを最惜みて、切て我愛馬なる、這青海波を戰場の、乘馬になさまく欲する故に、遙に安房より牽せ來て、却陣營に繫ぎ在せけん。倘爾らずは這馬の、いかにして、岡山なる、陣所に在りて這盜兒、目奴九郎とやらンに竊れて、こゝに至れる由あらんや。因て又憶ふに、この馬昨宵目奴九郎に、竊れずして陣所に在るとも、或は又犬塚歟、犬飼がうち跨て、今日の戰場に莅むとも、今我御陣へ參まくする、當用には達がたきに、折よくこゝに竊れ來て、我を乘せしは塞翁が、馬にも似たる、倚伏の自然、奇かる事にあらずや。といへば代四郎紀二六等、夥兵伴當推並て、倶に感嘆したりける。當下又親兵衛は、目奴九郎に

堤に馳陟るを、敵兵們は相逆へて、推捕籠て撃んとす。當下親兵衛聲高やかに、若們は是何人ぞ。里見の八犬、随一人、犬江親兵衛仁を知ずや。知ずは本事を見せんず。といふより早く鎗拿伸て、打拂ひ又打仆す、向ふに前なき勢ひに、猶懲ずまなる川烏の、群立つ像く挑む程に、姥雲代四郎、直塚紀二六、濟地喜勘太、伴當夥兵も、推續きつゝ渉し來て、敵を擇まず連枷にて、毆伏せ撻折く、利便の器械其機に稱へば、敵は亂れて逃走るを、猶洩さじと赶蒐るを、親兵衛急に喚返して、叟よ直塚も惴るべからず。無益の敵に時を移して、御陣へ參る期を喪はゞ、後悔其里に達がたからん。因て憶ふに、今この地方に、這頭の敵のありけるは、必故なからずや。我猜するに這奴們は、寄隊の士卒ならぬ、野武士山豪の類にぞあらんずらむ。幵が中に巨瘡を負ふて、仆れたる這奴們の、尚死ざるもあるべきに、其來歷を責問ずや。といふを夥兵もうち聞て、一個の傷瘡兒を左右より、引起しつゝ撻惱して、出處來歷を責問ふに、始は頼陳じしかども、緊しく撻れて苦痛に堪ねば、竟に招了しぬるやう、刀禰們やよ實を吐ん、姑且答を饒し給へ。小可は、這衆の、夥計には候はず、實は活間野目奴九郎と喚做るゝ、馬盜兒で候也。然ば昨宵岡山なる、里見の陣へ潛び入て良馬一頭を竊得て、牽もて這頭へ來ぬる程に、豫相識る野武士の頭領、二四酌寄舍五郎、須々利壇五郎と喚做す猛者等が、支黨五六十名を將て、

歟幻歟、奇かる馬にあらずや。と稱て感嘆したりしかば、代四郎紀二六、以下の伴當、夥兵もひとしく一唱三歎、この神童にあらざりせば、恁る奇特に遇ふべしや、と思へば心勇れて、縱今日百萬の、大敵に中るとも、何でふ勝ざることあらんやとて、皆憑しき附驥の情あり。當下親兵衛又いふやう、昔唐山齊の管仲は、深雪の山路に迷ひし折、老たる馬のゆくに信せて、還ることを得たりとかや。我も亦この青海波の、ゆくに靮を儘せなば、必や御曹司の御陣に蚤く屆るべし。各は馬の尾に携り、或は鐙に手を掛て、倶に渉しね。溺れなせそ。と云つゝも鎗を突充、馬に閃りとうち跨りて、腰靮しつ鐙を蹬拍て、河へ颯と騎入るれば、代四郎紀二六以下の伴當、夥兵も倶に身を跳らせて、續きて飛入る河水は、現神藥の奇效なるべし。溫にして冬を覺ず、且水技を知ざる者も、身はよく浮て易かりける。其が中に親兵衛は、靈夢によりて水戲水馬の、術をよく倣すのみならず、馬は名に負ふ青海波の駿足この時見れて、水中陸より易かりければ、代四郎等に、先だつこと五六反、前面の岸に近づく程に、思ひがけなき小敵あり。其隊僅に五六十名、皆鮫皮甲冑に身を固めて、槍棒眉尖刀を引提たるあり、眞弓角弓を執れるあり、東の塘堤に立見れて、親兵衛をうち瞰みつゝ、彎固め又彎固めて、射被る征箭は雨より滋く、射て落さん、と競へども、親兵衛は毫も怕れず、兜を傾け馬を泅せて、前面の塘




大江親兵衛
騎馬
大河を渉む

郎いへばさら也、紀二六喜勘太、自餘の伴當、他は甚麼。とばかりに、倶に訝る开が中に、親兵衛は眼敏く代四郎にいふやう、叟はいかに見たるやらん、那馬の毛は我愛馬なる、青海波に似たるならずや。开は左まれ右もあれ、那馬必駿足ならずは、今大河をうち渉すに、聊も撓むことなく、半身波より上に出て、其速なることを得んや。我今戰場へ赴くに、良馬を得ぬるは幸ひなる哉。登るを待て駈駙めずや。といふに代四郎紀二六等、喜勘太伴當相諾なひて、行李に附たる麻索を、解きつ伸しつ相構て、登るを遲しと俟程に、件の馬は水を出て、汀渚に立ち身震しつゝ、敢又走りもせず、徐に這方へ來にければ、大家倶に立蒐りて、輒くこれを牽駐めけり。登時親兵衛立よりて、見つゝ憶ず含笑て、叟よ、今我いひしに違はず、こは是紛ふべくもあらぬ、我馬青海波にぞ有ける。曩に我、御使を奉りて、京上りしける日は、水行なる故に是を牽せず、厩櫪掌管に預け置しに、京師にて政元主の、那走帆を賜りしより、虎妖對治に我を帮助けし、功に愛て捨るに忍びず。然とても這青海波を、忘れたるにあらねども、現兩雄は雙立ず、晝夜は同時に長からず、那馬去て、這馬來にける、抑得失は、天也時也。然るにても、這馬遙に安房より來にけん、この鞍鐙は、老侯の、臣等に賜ひし隨にして、上總を過り、下總を歷て、こゝに我身を迎るは、忠信情義、那走帆に、勝れること十級、百級、夢寐現

みにして、喜勘太が拿もて來ぬる、連枷を手々に受取て、准備立地に成りしかば、親兵衞は先に我みて、千住河原を投てゆく程に、後方に續く代四郎を、屢見かへりつゝいふやう、叟よ、我いぬる夜の夢に、姫神我に水技水馬を、教給ふと見てしより、既に是其術を、學得し者に似たるは、今日の所要に達させんとて、夢にや入らせ給ひけん、幽冥人間異なれども、今もなほ影に立ち、形に添て恁までに、慈愛給はする、神恩の過分きを、仰ぎまつるも猶畏し。といへば代四郎點頭て、然也々々、寔に然なり。那御神の恩德は、小可一家も相同じ。實に是天地父母、國土君上、師授神佛の、六恩を兼給ひぬ。と答る間に千住なる、大河邊に來にければ、親兵衞後方を見かへりて、夥兵伴當們にいふやう、這大河を渡りゆけば、則下總にて、那里は今、闘戰の最中なれば、這頭に船の渡すべきなし。恁れば皆憑涉して、前岸へ至らんこと勿論也。縱今、玄冬大寒の時なるも、各々も既に皆、我神藥を服したれば、水に入とも凍ることなけん、この義は心易かるべし。約莫水技を得たるも、亦得ざるも、倶に神藥の奇特にて、溺るゝ者はなからんに、或は連枷に相連り、或は迭に手を携へて、我に續きて涉すべし。いで〳〵。といひつゝも、既に水際へ我む折から、怪むべし前面の岸に、走り出來る一箇の馬あり。疾こと宛鵃の像く、河へ夾と入るよと見る間に、其馬殊に逸早く、這方を投て近づく程に、親兵衞代四

てありし、鬪戰の勝敗、又暴河堤なる岡山にて、攻擊の𡸴までも、街談巷說にて知られしかば、親兵衞はこゝに至て、代四郞紀二六、喜勘太夥兵伴當們を、遺なく身邊へ招きていふやう、既に聞知る舘の御大事、いよ〳〵是逼りたり。今日岡山の御陣に參りて、御曹司の御先途に、遇ずは後悔臍を噬ん。然ばとて捷路を、欲りして墨田河を渉りゆかば、石濱の城兵等が怪みて、赶蒐て擊捕まくせん。亓は怕るゝに足らねども、無益の敵に拘づらはゞ、今日の鬪戰に値がたからん。この故に、千住河を憑渡して、龜蟻葛西に造りなば、岡山へ近かるべし。黎明なれば、人稀也。各こゝにて戎衣せよ。長柄の器械を執ずもあらば、敵に蒞みて不便ならん。見るに那里の白屋の、背門に倚かけたる連枷多かり。連枷は軍陣に、是を用ひて其利ありといふ、この事唐山の書籍に見えたり。然とても農民の田器を、奪拿るべきにあらず、價を遺さば罪なけん。喜勘太この義をこゝろ得て、其殘れる連枷に、是を結附てよ。といひつゝ懷を搔撈りて、方金二片歟三片歟、紙に拈りて拿すれば、人皆並て親兵衞が、慤る折にも等閑あらで、心正しきを感じけり。當下犬江親兵衞は、伴當に駝し來ぬる、甲冑櫃をうち開せて、鎧を擐け兜を戴き、大刀を跨身を固めて、且伴當が肩にしたる、鎗を執て挾めば、代四郞以下の衆人も、皆遽しく戎衣するに、代四郞紀二六は、行李の內に身甲あり。其身甲なき者は、皆鈈脛盾の

怨るのみ。因ておもふに、武藏より船を求めて、安房へ還らまく欲りしなば、必敵に拄られて、渡ることを得ざるべし。下總なる眞間國府臺は、則是今番の便路にて、且御曹司の那城を守らせ給ふといふなれば、上野を歷て武藏に至りて、千住河をうち涉さば、那城に參り易かるべし。今よりして日夜を分かず、長途を走りて疲勞なき爲には、姫神傳授の神藥を、服するにしくことなし。我這一隊に分ち與へて、神行を俱にせずは、後るゝ者に怨みられん。やよとく〳〵。といそがせば、代四郎この義を諾ひて、腰に吊たる藥籠より、那仙丹を拿出つゝ、紀二六幷に喜勘太、夥兵伴當們に、些ばかりつゝ嘗させて、我身も又是を嘗るに、心地いよ〳〵淸爽にて、千里も一日にゆくべき勢ひあり。然らばいそげと皆共侶に、この處を立出て、走ること奔馬の如く、幾十里數ひと日に來にけん、この日の下晡に、薄氷の麓に造りしに、這里に新關ありて、門戶を鎖て、東へ過る人を饒さず。親兵衛們はこゝに至りて、只得其頭に歇店を求めつ、詰朝早天より、歇店を出て悄やかに、人のかよはぬ山路に入りて、峯に陟り溪に降り、夙く武藏に至らまく欲すれども、路に迷ふて投すかたに出ず、山路に旦し暮せども、神藥の奇效にて、主僕俱に餓ず疲れず、心ならずも三四日を歷て、十二月八日の黎明に、武藏なる、石濱の城に程遠からぬ、千束村の邊に來にけり。然ば昨日より、山內里見兩敵は、葛西假名町に

多かり、其勢六七萬なるべし。通計は一十五六萬の大兵を以、海と陸より攻られなば、哀れ安房殿(義成をいふ)滅亡ならん。といへば一人が、然ばとよ、里見殿は今の世に、稀なる仁君也と云、噂は逆聞えしに、八犬士とかいふ猛者あれば、非如軍兵多からずとも、手を束ねて徒やは負ん。聞くに洲崎に敵を逆る、水軍の大將は、國守里見殿にて、軍師は犬阪、防禦使は犬山犬村隊長多かり。又行德へは犬川犬田、國府臺へは國守の公子、義通君を將として、東六郎後見たり。防禦使は、犬塚犬飼、この餘も隊長多かり、といふは實言歟虚言歟。开は左まれ右もあれ、左右村には事なかれ、歳梢莊客暇ある、骨休せで夫役に差れ、軍要金さへ召るれば、今玆は餅も搗がたからん。それは御互々々。と兩咗の郊原問答、勤しき中に空言を、噂く高聲、山里人の、忌憚りも拊肩と、材槌天顱掉低げて、卒と許りに東西へ、別れて亦復走りけり。爾程に犬江親兵衛は、心ともなく件の言の、首尾を聞知りて、胆を潰しつ、代四郎等に、目を注するのみ、言には出さず。代四郎蚤くこゝろ得て、茶博士に幾十文歟、茶錢を還せば、紀二六等は、發兒を放ち外に立て、夥兵共侶親兵衞に、相從ふて、ゆくこと十町許にして、山陰の樹粒深き處に、山神廟ありけり。這里は乾淨たる處にて、人煙遠く便り宜しければ、親兵衞こゝに立よりて、代四郎們に呀くやう、叟等も具に耳に入りけん、我君危急の一大事を、人の噂に聞知りて、趨なき身を

ざれば善しがたかり。勉めよかし、と諭し給ふ、と思へば曉の鐘枕に响きて、忽焉と驚き覺にき。覺ての後に是を思へば、實によく學得て、此身に備る者に似たり。意ふに異日館の御爲に、水戯水馬を用ふべき、時しもある歟、心得がたし。と告るを代四郎うち聞て、夢は五臟の疲勞に成る。と人はいへども和子の夢は、久しく京都に抑留せられて、日をふる鄉を思ひ宿の、所以のみにはあるべからず。水戲自得の實事あらば、必是姬神の、神謨なる、靈夢にこそ候はめ。と言正首に答る折から、忽地四下閙しく、人東西に奔走す。其が中に土民們が、這茶店の邊に立在て、且相告るをうち聞くに、其人のいふやう、和主聞ずや、今番扇谷の管領家の、安房の里見を怨み給ふよしありとよ。この故に山内の管領家と和睦し給ひて、且近國の諸侯を連ねて、海と陸より、安房上總下總さへ、一時に攻拿んとて、いぬる日猛可に這頭へも、軍役を宛られしに、今朝亦再度の催促あり。水路は扇谷殿御父子向せ給ふ、軍兵約莫五六萬なるべし。又陸路の寄隊を聞くに、下總なる行德口へは、扇谷の御嫡子朝良君と、千葉自胤主と兩大將にて、大石兵衛尉殿副將たり。(大石石見守憲重は、始兵衛尉たり。このこと本傳第四輯に見ゆ。後に石見守に轉任したれども、この地の民は、なほ舊稱に依れるなり)こも亦其勢三四萬なるべし。又國府臺の城へは、山内殿御親子と、滸我の御所と兩御旌旗にて、從ふ城主隊長

骸を、褁せ給へ。と吩咐れば、代四郎听て異議もなく、噫和子の博識なる、今稍こゝろ得候ひぬ。咱等が富山で那靈馬を、埋めし折は、嵒崛の内に東西なきに、然る故事を知ざれば、直埋にて候ひき。と答て軈て退きて、却紀二六と夥兵等にも、件の義を傳示して、形の如く執行ふに、鞍と鐙の遺りしを、親兵衛則逆旅主人に、こゝろ得させつ預らせて、異日この地の道場なる、馬頭觀音院へ藏めけり。然ば這夜芟、瘞埋の事果しかば、其詰朝、親兵衛は、代四郎と紀二六と、喜勘太作當五個の夥兵等を相從へて、只管に路次をいそぐに、この時十一月は既に盡て、十二月五日になりにけり。この日親兵衛は、一霎時茶店に憩ひし折、代四郎に叫くやう、我は姫神の冥助にて、文學武藝何くれとなく、自得せざる事はなきに、只水戯水馬の術をのみ、いまだ學得ざりしかば、曩に苛子崎の賊難に、既に溺るべかりしを、叟の援けによりて恙なかりき。开を朽惜く思ひしに、昨宵我夢裡に、身は又富山の嵒崛に在り。姫神出現ましまして、水戯水馬の一術を、教給ふこと叮寧にて、且宣ふやう、我始より這一術を、汝に教ざりけるは、胡意欠く所をもて、懲してみづがら其箴に、なさしめんとて也けり。然りけれども、今戰國の時に當りて、水戯水馬を學び得ずは、戰場に臨むといふとも、何を以てよく波を被ぎ、水を渉して敵を征せん。或は君將の危きを拯ひまつり、或は身の亡ぶべきを保つに至るも、水を知

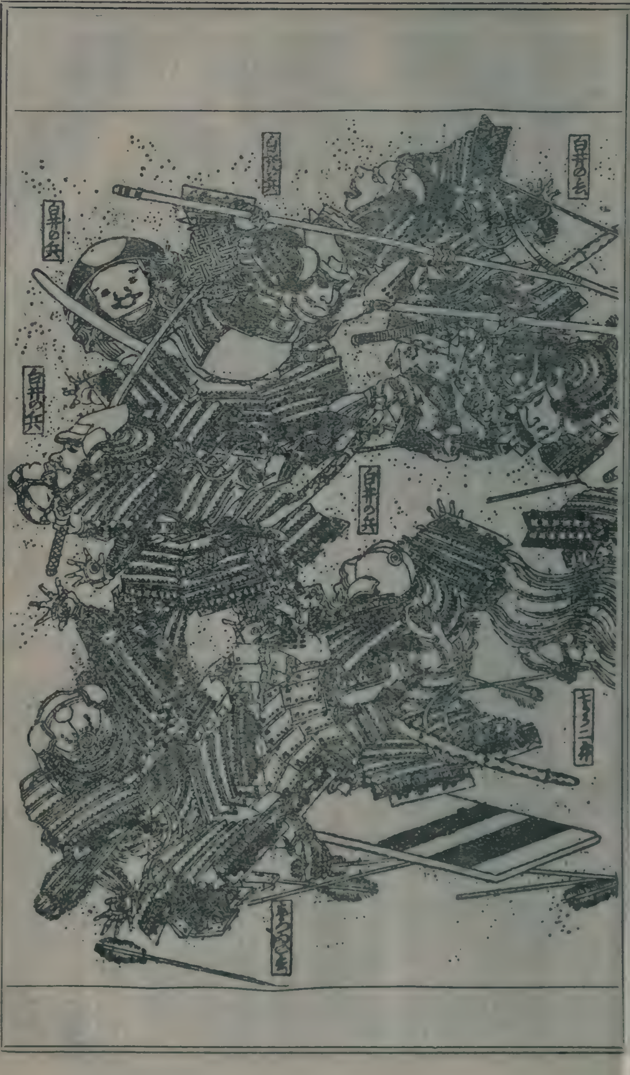
て棄てゆかば、不仁不義の甚しき者、心牛馬にだも不如といはれん。この故に我は走帆を、政元主の賜也とて、敢鍾愛しぬるにあらず、只那大功あるをもて、今其死活を見定めずして、棄るに忍びがたかるのみ。然はあらずや。と解諭せば、代四郎紀二六感服して、又いふよしもなかりしを、潸地喜勘太、伴當夥兵們さへに聞知りて、現這神童にして這仁義あり。今古和漢に獨歩すとて、感嘆せざるはなかりけり。恁而この次の日に、病馬走帆は斃れしかば、親兵衛只顧嗟嘆して、この馬異日戰場に用ひなば、關羽の赤兎馬にも優んに、緣薄くして其里に至らず、嗟夫惜むべし〱。他今馬籠の鄕にして、命空くなりけるは、昔義仲の愛馬を牧せし、因あり緣あり、名詮自性歟、こも亦一奇といはまくのみ。と獨語つゝ遽しく、逆旅主人を召よせて、件の馬の容骸を、今宵近き片山陰に、瘞ん事を相譚ふに、敢旋陀羅の手を借らず、皮を拿せじと思へば也。當下親兵衛は、代四郎を喚ていふやう、叟は曩に富山にて、令娘達を駝來にける、那靈馬の亡骸を、瘞め給ひしその折は、いかにし給ひしやらん。今开に倣ふにあらねども、我聞唐山古昔の制度に、狗を埋るに蔽蓋を以し、馬を埋るに蔽帷を以すといへり。この事禮記の檀弓に載てあり。蔽蓋は敗たるきぬがさにて、蔽帷はやぶれしたれ布也。有恁れども今我は、旅にしあれば、然る東西なし。大袱はあるべきに、兩箇許綴り合て、走帆の亡


白井の兵
白井の兵
白井の兵


孝嗣大に景春と戦ふ所

病る容にて、豆草なども多く喫はず。路をゆくこと遲く做りしかど、親兵衞は心長閑く、よく是を勦りて、敢亦うちも乘らず、夥兵等に是を牽せて、只其行に儘せしかば、一日僅に四五里にして、歇店を投る夕多かり。左右する程に、稍信濃の馬籠に至りて、歇を客店に投めし宵より、走帆は、疾病いよ〱重くなりて、臥たる隨に起も得ざれば、親兵衞痛く是を憂ひて、伏姬授與の神藥を、拿出て其舌に塗らして、手親これを飮するに、人畜其差ある故に、馬には其効あらざる歟、或は是死病にて、神藥の至妙なるも、及ざる者なる歟、と思難つ〱徒に、只這病馬の故をもて、逗留三四日に逮びしかば、代四郎紀二六心焦燥つ隨に、倶に親兵衞を諫ていふやう、和子の慈善は今に創めず、愛顧畜生にすら厚かるは、人の及ぬ所なれども、漸京師の厄解て、還ることを得給ひしに、又那病馬に拘づらひて、逗留して日を費し給ふは、只是智者の一失歟、仁義も時に因るべきのみ。遙に安房の事を思へば、兩館は言も更也、妙眞刀自犬士達の、朝居夕居に企て、さぞ俟不樂て在さんに、この義を思ひ給はずや。と迭代に説出て、卿言がましく急せば、親兵衞是をうち听て、然也。我も亦其頭の事を、思はざるにあらねども、爭何せん那馬は、虎妖對治に大功あり。那時他よく我を駝せて、進退自由ならざりせば、我何をもて那功を奏して、安房へ還ることを饒されんや。然るを那馬病臥たりとて、去向をいそぎ

亦是犬士に由縁ある、石龜次團太、越鮒三、向水五十三太、枝獨鈷素手吉乾父乾兒共侶に、里見殿の加兵ぞ。と名告かけ相叫りて、多勢に撓ず先を爭ふ、其隊の壯佼五六十名、持たる長械振閃めかして、敵の乘たる馬の脚を、薙仆し拂ひ落して、起んとするを撃殺す、勇悍一致の揮きに、長尾の士卒は驚き譟ぎて、憶ず潑と亂るゝを、孝嗣得たり、と劃て入る、鎗の尖頭に血を濺ぎて、瞬息間に敵幾名歟、毆伏せ又刺殺せば、次團太鮒三、五十三太素手吉皆共侶に氷成す、大刀を手に〳〵拔翳して、敵に中りて術を盡せば、里見の老黨近習の每、鳥山眞人、白濱十郎、七浦二郎、朝夷三彌、以下の雄兵、是に氣を得て裝更す、刃頭尖からぬもなければ、長尾景春怒に得堪ず、馬上に聲を苛立て、蓬き自家の兵每哉。敵に加兵のあればとて、一百名に過ざるに、何でふ怕るゝことやある。疾推包で擊果さずや。と哮り喚り近づく敵を、鎗もて拂ふ奮擊突戰、猛將の下に不勇士なければ、景春の隊の兵は、又この一句に罵勵されて、建更しつゝ挑戰ふ、三陣の野戰互角にて、勝敗果しなかりけり。話分兩頭。爾程に犬江親兵衞は、前月の下澣に、秋篠將曹廣當と、那石藥師の頭にて、既に相別れしより、則廣當の敎により、敢東海道に赴かず、尾張を過りて信濃路より、上野及武藏下總を歷て、蚤く安房へ還んとて、媼雪代四郎以下の伴當夥兵們を、いそがし立てゆく程に、この次日より、那名馬走帆は、何となく


白井の兵
白井の兵
白井の兵
白井の兵



義通善射　勍敵を驚す

て斃す、矢繼速の手煆煉にあなれば、弦に應て紊々と、斃れざる者なかりけり。現この君は童年にて、年尙十五に足ざれど、世家良將の兒孫にて、且先祖義家朝臣の、少年たりし時にも似たれば、自家の士卒いへばさら也、敵も亦心ある老兵は、舌を卷つゝ感ずるあり、或は叉勇ありて、名を好む壯士は、敢其死を見かへらで、箭前に找むも多かりけり。然は這亂軍に、義通危かりければ、里見の先陣後陣の隊長、東辰相、潤鷲手古內、振照倶敎二、以下の頭人武勇の毎、疾這敵を擊退けて、主將を拯ひまつらん、と心彌悍に惴れども、前後の敵に嚼締られて、毫も違あることとなければ、士卒の胸臆皆安からず。怯れたるにあらねども、竟には敵に推戾されて、總敗軍にならんとす。浩處に誰とは知ず、西北のかたなる岐道より、走り出來る一隊の客兵、其隊僅に一百許、擐甲たるあり、然もなきは、皆身甲に釬脛衣して、手に長械を挾み、一刀にして騎馬武者なし。亓が中に只一個、頭領ならんと見えたるあり。其人靑年二十可り、面の色白くして、骨相特に賤しからず。身には、烏革絨の敗全甲を擐て、火形打たる頭鎧を戴き、腰に大小の二刀を跨て、手に雙鉤の鎗を執りたる、相貌堂々、威風凜々、衆に先だつ聲高やかに、やをれ景春無禮なせそ。里見八犬士の知音たる、武藏國の浮浪人、政木大全孝嗣こゝに在り。退けやッ。と喚れば、左右に從ふ老壯四個の、猛者們も衆聲苛めしく、我其數にあらねども、

力を盡して、動すれば勝に乘る、勢ひ優りて見えにけり。有恁し程に景春の、後陣の隊長、直江莊司包道、宇佐美三郎職政は、隊兵一千餘名を將て、悄地に間道より近づき來つ、里見の後陣東辰相が、義通君を守護しつゝ、馬を立士卒を纏めて、敵と自家の鬪戰の、勝負甚とうち觀て在りける、這一隊の背のかたより、咄と噇て攻蒐るを、辰相毫も驚く色なく、譟ぐ士卒を推鎭めつゝ、蚤く備を建更て、敵を逆へて挑み戰ふ。這後陣と先陣は、間二三町の中に在り。兩所の鬪戰遑なければ、義通の騎馬の邊には、老黨近習を除くの外、從兵四五百に過ざりけり。然ば長尾景春は、夙く是を覘ひ知りけん、雄兵八百餘名を將て、岐道よりして忽焉と、驀直に義通の、隊を薙て推蒐る、疾こと宛飈の如く、短兵急なる勁敵に、里見の士卒は吐嗟とばかり、皆蒐逆ひ推隔て、撃ちつ撃れつ血戰す。義通の近習白濱十郎、七浦二郎、朝夷三彌、老黨烏山眞人なンど喚做す者、就中善敵に中りて、士卒を勵し踏入々々、こゝを先途と縻結ぶ、刀の鍔音馬蹄の響、沙を蹴起て刃頭より、火出るまで戰ふものから、景春も又東國に、其名聞えし猛將なれば、銳を摧き固を劈く、義秀親衛の勍勇なきにあらねば、みづから馬上に鎗打振て、近づく敵を突伏々々、透もあらば大將に、組んと找む虎威狼風に、里見の士卒は心ならずも、辟き靡きつ撃散されて、既に危く見えしかば、義通馬を東西に、馳遶らし馳返して、敵を擇ず射

ならで、勝負區々なりし事、其後寄隊は二犬士の籠りぬる、岡山の陣營を圍み攻るに、既にしてこの曉天に、寄隊は戰車を敵に燒れて、總敗軍に及ぶ時、又那長尾の間諜兒が、走りかへりて告しかば、景春滿面うち笑れて、爾ならんには里見の犬士們は、必敵の逃るを赶ふて、岡山の陣營空虛に做ん。我その虛に跟入りて、蚤く頭里を伐捕りて、國府臺に攻入らば、顯定主は鼻を開て、兵權立地に我手に入らん。さはとて猛に狼煙を颺て、近き四下に隱し在せし、自家の兵を集るに、梶原宇佐美、直江樋口なンど喚做す隊長、各其從兵を領て、時を移さず聚合來にければ、其兵三千七八百ありけり。景春是を二隊に分ちて、梶原後平二景澄を先鋒の頭人として、樋口小二郎維龍をもて其副とす。則隊兵二千を授けて、眞先に是を投せたり。却景春は、後陣にて、宇佐美直江們以下の勇士と、雄兵一千八百有餘を從へて、河原の岡山を投て推來ぬる程に、料ずも今這里にて、里見義通の、信乃現八等に、力を勠せんとて、亦岡山より出陣して、連りに士卒をいそがする、其一軍に逢る也。閒話休題。却說里見長尾の兩敵は、迭に其旗旐にて、夙くも猜して、叙次互し、と思ふものから、毫も礙議せず、近づく隨に、銕砲を、發ち蒐け發ちかけられて、姑且挑む程こそあれ、長尾の先陣梶原樋口は、倶に士卒を罵勵して、殺頽さんとて競へども、里見は先鋒の頭人なる、潤鷲振照よく相拄つ、勇士猛卒死

にして、端なく一隊の敵兵あり。其勢約三四千有餘。兩矢筈の花號染成たる旗を找めて、這方へ來ぬるに撞見けり。此は是別人ならず、上野國白井の城主長尾判官景春が、今番の役の先鋒の頭人、梶原後平二景澄と喚做す者也。爾るに景春は、嚮に扇谷定正の催促に從ふて、既に出陣の聞えはありながら、五十子へは赴かで、猛可に涌出せる如く、今この地に在る事の情由を、什麽と後に原るに、他は獨立の志あり。この故に定正の、軍兵催促に從ひながら、敢佻々しく那隊に附かず。且其水路より安房へ攻入まくすといふ、風聲を傳へ聞て、冷笑ふのみ、言には出さで、肚裏に思ふやう、扇谷は、淺智の將也。昔より例もなき、海を渡して、安房の稻村へ、攻入らまく欲するは、時をも地理をも思はざる、是淺智の致す所、凶多くして吉少なからん。山内は聊思慮あり。倶に水路より找まずして、國府臺を攻まくすなるは、迂遠きに似たれども、必是其利あり。然ばとて、今さら那隊に從はゞ、縱戰功ありとても、我は二の町三の町にて、一歩の地だも得がたかるべし。要こそあれ、と尋思をしつゝ、白井の城を出しより、胡意中途に掩留して、敢五十子に來會せず、且間諜兒をもて、寄隊この地へ著陣の、事の形勢を覘知りしかば、景春則隊の兵を、或は百名二百名づつ、この地に遣し潛せて、那身も既に來著したれど、迹を埋め影を躱して、猶も動靜を覘ふ程に、前日の鬪戰に、寄隊の戰車如意

るべからず。且國府臺の城郭は、是當郡の根本にて、這岡山は咽吮也。然るを今この岡を棄て、敵に向ふて勝ことなくば、寄隊必この岡に据りて、我咽吮を扼ん。然るときは臺の城も、守がたきに至ん歟。是を思へば危しとも、最殆くこそ候べけれ。君この所に御座さば、犬士們が退口ありて、必後易かるべし。臣等一二千の雄兵を領て、駈向ひ敵に中りて、信乃現八們に力を勠せん。この議に任させ給ひねかし。と詞を盡して諫るを、義通聞つゝ頭を掉りて、否とよ、我弱冠の身を見かへらで、今只漫に賢だちて、耆老の諫を拒むにあらねど、犬江親兵衛に比れば、年二三の兄なればこそ、この地の主將を命ぜられて、闘戰兩度に及ぶまで、いまだ敵の旗を見ず、自家の闘戰危きを、聞知りつゝ、出ずもあらば、異日何を面目にして、舘の見參に入るべきや。縱擊とも擊るゝとも、犬士と安危を倶にせん。この義ばかりは饒しね。と喞言がましくうち勸解て、搗尻しつゝ慵り給へば、辰相竟に諫難て、しからんには是非に及ばず、衆皆御伴仕らん。と應て更に陣徇しつ、從ふ士卒四千餘名、潤鷲手古内振照俱敎一を、先鋒の頭人として、辰相則後陣たり。義通の騎馬の前後左右には、事熟たる老兵、近習の毎、皆華麗に擐甲たる、姓名寫すに遑あらず。翩翻たる白旗三四流、寒けき風に吹靡せて、氷成す器械の鞘を外して、朝日に赫奕く、隊伍齊々整々と、那戰場へいそぐ程に、行こと十七八町

老兵のみ城を守りて、其餘は這出陣に從ざる者なく、暴河の這方の岸に維置ける、舫幾十艘にかうち乘りて、岡の下にぞ渡しける。恁而義通は、東六郎辰相を先に立して、岡山の陣營に至り給ふ程に、潤鷲手古内、振照倶教二は、隊の士卒を將て出迎へて、幔幕引匝したる、儲の発兒に就まつりて、今曉二犬士と、直元逸友等が、勝軍の事の趣、且野豬の奇異大功、猶且寄隊の逃るを赶ふて、葛西の方に赴きける、自家の進退箇樣々々。と迭代に聞え上れば、義通歡び大かたならず。辰相も是をうち聞て、後の安危を知ん爲に、蚤く斥候を遣せしに、約莫半晌許にして、其斥候かへり來つ、寄隊は假名町の這方にて、ひとしく返し合せけん、今恁々の地方にて、闘戰の最中也、勝敗いまだ安定ならねど、寄隊大勢なるをもて、自家危く見え候ひき。と告るに義通驚きて、しからんには這陣營に、安座して居るべきにあらず、疾其地方へ馳著て、信乃們を援けて、雌雄を決せん。いでいで。といひつゝも、既に立まくし給ふを、辰相急に推禁めて、現御幼年には有がたき、御勇武の傑出たるを、感心の外候はねども、萬々金にも易がたき、貴介公子の御身をもて、危しと知食ながら、今大敵に向せ給はゞ、物體なく候はずや。窮寇は追ふべからずといふ、兵書に本文あるよしは、犬士等が知る所なれども、只其勝に乘る勢もて、竟に件の愆あり。犬士すら右の如し、況犬士ならぬ者をや。よく思ずはあ

現八も亦直元逸友も、三陣倶に退きて、或は水田を前にしつ、或は樹粒多かる地方に、備を建る程しもあらせず、寄隊は三將、隊長頭人、三隊に別れて、驀直に返し來つ、攻破らまく競へども、樹粒水田に遮られて、人馬の進退自由ならねば、矢戰にのみ時を移すを、白石重勝焦燥て、士卒に下知して、巨盾を、幾ともなく深田の氷へ、投布々々人馬を渉して、短兵急に拗まく競へども、二犬士幷に直元們は、樹粒の間に敵を拄て、左右なく攻めも破られず、一進一退其機に稱ふ、士卒は宛手脚の像く、出沒不測の術を盡せば、寄隊は撃るゝ者多かり。なれども大勢なるをもて、又立替り入亂れて、時移るまで戰ひけり。話分兩頭。この朝、國府臺の城には、昨夜田稅逸友が、義通君に見參の折、犬塚信乃の意衷を傳へて、明日の戰鬪の進退を、箇樣々々といひしに違はず、まだ明やらぬ比よりして、岡山の方に兵火起りて、箭叫び喊の聲までも、蝿々として聞えしかば、義通君は東辰相と、近習五六名を將て、自親城樓に升り、是を見て、原來田稅力助がいひしごとく、信乃が火緒の計行れて、敵の戰車を燔くにやあらむ。卒然らば、我も亦疾出陣して岡山に、旗を建て軍威を資ん。高間の山の雲ならぬに、こゝより見てのみ已ことかはとて、遽しく城樓を下立給へば、東辰相豫より、この意を得て出陣の准備あり。士卒咸戎衣しつ、戰飯さへ使ひ果て、主將の出るを待程なれば、聊も時を移さず、只

惟定と喚做す者、其副の頭人なる、建柴浦之介弘望と、只二騎馬を乘駐め、兩聲高く喚るやう、蓬き自家の逃走哉。多寡の知れたる敵の爲に、火攻をせらせしとて、逃て那里へ行まくするや。志あらん者は、我に續け。と辱め哮りて、馬上に槍を打振々々、惟定は、信乃が隊にうち向ひ、又弘望は、現八を、拄えて倶に血戰す。然ば其隊に相從ふ、雄兵僅に二三百名、主を帮助て死を見かへらず、一霎時は挑戰ふものから、二犬士の先鋒の頭人、眞間井秋季、繼橋喬梁、倶によく兵を用ひて、中を開きつ捕籠て、息をも養れず攻しかば、惟定と弘望は、太刀折れ勢ひ究りて、倶に陣歿して名を遺し、其隊の兵も多く撃れて、命を免るは稀也けり。有恁りし程に、山内顯定は、逃る士卒に推立られて、憶ず遙に延たりけるが、此光景を見かへりて、他撃すな。と喚りつゝ、馬を返して馳向へば、隊長白石重勝等、陣りに士卒を罵奬して、其里より返し合する勢ひ、始には似ざれども、猶二三萬の士卒あり。然ば成氏も憲房も、且羞且稍是に氣を得て、倶に備を建更しつゝ、三面齊一返し來ぬるを、信乃はうち見て毫も譟ず、隨即人を走らせて、現八と直元們に示すやう、現窮寇は逐ふべからず、寄隊はこゝに返し合せて、兩度まで敗軍の、耻を雪めまく欲するならん。遮莫他既に其戰車を燔れて、今は脚なき蟹に似たり。又何事をかよくせんや。各 切所に引受て、其疲勞るゝを撃んといふ、急牒その利あるをもて、

を交へて嚢にせしを、手に〳〵多く携て、其火に蘸で擲ちければ、火勢立地に激發して、車上の武者も、車下の人馬も、燒れて免るゝ者幾稀也。將是に加るに、且明の風さへ吹出て、軻遇突智の暴涯りなければ、寄隊三面の大將たる、顯定成氏憲房はさら也、其隊長、重勝在村素行等、錐布五六、鷹裂八九、頭人老兵近習まで、こは怎麼いかに。とばかりに、敢戰ふ擬勢なく、亂れて譟ぐ士卒と倶に、火を避け煙に卷れじとて、或は繫ぎし馬に鞭ち、或は弦斷たる弓を執り、或は一條なる鎗に、兩三人手を掛て、相爭ふて捫擇す。开が正面より犬塚信乃、幷に眞間井樅二郎、左右は則犬飼現八、繼橋綿四郎、杉倉武者助、田稅力助以下の勇士等、三面一度に隊兵を拔めて、煙の隙より攻入々々中るに儘せて撃仆せば、野猪も亦自家を幇助て、慌て叫ぶ敵の雜兵を、牙に引掛け擲つ勢ひ、人畜進退合期して、出沒不測の开が上に、寄隊は都て風下に在り。僅に遯れ烟に噎びて、面を向べき由もなければ、將師士卒の差別なく、咸直頽れに敗走るを、二犬士幷に直元逸友、秋季も喬梁も、三面一致の遲速なく、猶脫さじと赶ふ程に、霜冰る夜の長かりしも、朝風寒く明にけり。この日は十二月八日にて、扇谷定正の、水路を安房へ推渡りて、稻村の城を屠んと、豫契りし本日にあなれば、こゝにも寄隊四萬のそが中に、然しも恥を知り名を惜む、勇士なきにあらざれば、山内の隊の遊軍の頭人に、菴内外進

第九輯　巻之四十

第百六十六回　衆俠を以孝嗣源公子を援く　西使を果し來て仁景春を敗走らしむ

爾程に、寄隊は兩夜安き間なく、敵の爲に駭されて、眠りも得せずありけるに、この夜眞夜半過る時候よりして、岡の陣營靜にて、戰鼓の音もせず、篝火の光さへ細くなりしかば、原來二犬士は落後れて、又翌の夜を俟にやあらん、と思ざる者もなければ、或は盾を布き、或は箙に臂を持せて、打眠る者多かりけるに、既にして、天は明なんとしぬる時候、敵陣猛可に起り立て、金鼓間なく天地を動す可の喊聲と、共に矢を射出し鐵砲を發被て、三面一度に攻下る、其威勢始に似ず。剩最大きなる野猪幾十頭歟、牙に蕉火を結著たるを、眞先に我めて、三面齊一寄隊の陣へ放入るゝに、其野豬は殊に猛くて、寄隊の多勢を憚らず、敵の先陣に備たる、戰車の下に潛り入て、突と前方へ走り出るもあり、然らぬは車を跳踰て、人馬を擇ず馳仆せば、牙なる蕉火散亂して、蚤く戰車に燃移るを、里見の士卒は豫より、信乃が准備の餘硝に、小石




火猪の大功
信乃現八雙々
寄隊を破る

五百個の士卒と倶に、這岡山の陣營にあり、倶に喊聲を颺げ、戰鼓をうち鳴らして、自家の軍威を帮助けり。有恁りし程に、信乃が鏁奴等は、青海波の名馬を喪ひしに、幸にして其誅戮しからず。罪免れしを歡びて、代るに信乃が跨座なる、連錢葦毛の駿馬に、雲珠鞍置て牽もて來ぬれば、信乃は負ふたる箙の箭に、染血の幌をうち掛つゝ、重籐の弓を握持て、現八直元、逸友秋季、番梁們と共侶に、各馬にうち跨りける。約莫這兩防禦使四頭人の、鎧の絨絲、太刀器械、釬脛衣に至るまで、打扮前日に彌增せるを、細に名狀すべからず。恁而二犬士兩隊長は、三面に立わかれ、各一千五百の兵を、前後左右に從へて、炬を附たる野豬を、各眞先に牽せつゝ、まだ明やらぬ星影寒き、樹間々々に張亘したる、幔幕一度に斫落させて、岡の下なる敵陣へ、勇る火豬の數を盡して、放ち蒐放ち遣る、勢ひ脫兎に異ならず。人畜一揆せるごとく、野豬は數萬の寄隊を怕れず、前に備へし戰車の下へ潛り入り、亦走り出る程に、牙に附たる蕉火は、蚤く戰車に燃移りて、先陣忽地煽々たる、この日の勝負甚麽ぞや。幵は下の回に、解分るを聽ねかし。

もなく、迹もあらず。意ふに那馬絆を外して、脫て敵陣に走り入りし歟、然らずは自家に盜兒ありて、轉して他鄕の人に售りし歟、孰にしても我們が、罪免れがたく候へども、這塹もなく塀もなき、露陣に在りて寄隊を防ぐ、生死の境に候へば、自然に守衛の屆ざりしを、いかで饒させ給へかし。と異口同調にうち勸解るを、側聞せる現八等、自餘の頭人老兵まで、さても〳〵。とばかりに、呆れて、口を鉗て在り。況や信乃は驚きを、胸を理めて愀然と、現八を見かへりて、犬飼、和殿はいかにおもへる。我慭に親兵衛を、おもふの故に青海波を、這陣中に牽せ來ずは、かゝる憂苦はなからんに、と悔て及ばぬ火急の攻口、今は天明に程もなし。先我馬にうち跨て、敵に逆ふて戰ひ勝たば、異日又青海波の、往方を穿鑿る術あらん。各既に戰飯は、飽まで腹に充たりとも、猶腰餉を忘るべからず。眞間井繼橋兩頭人は、疾從兵に吩咐て、這野猪の牙毎に、皆蕉火を附させて。其餘の准備隊配は、箇樣々々。と宣示せば、現八この義を好とし答へて、敢又多辯せず、各目今定めたる、攻口へとてうち向ふ。中央は犬塚信乃、副將は眞間井秋季にて、從ふ雄兵千五百餘名、野猪二十五頭を牽せたり。左右の二隊は、犬飼現八、副將は繼橋喬梁也。又其一隊は杉倉直元と、田稅逸友を兩將とす。二隊の雄兵三千餘名を、分ちて一千五百を從ふ。野猪は二十頭づつ、皆蕉火を牙に附たり。又潤鷲手古內、振照倶敎二は、

に跨り、這幌を掛て、寄隊を敗らまく欲す。那見給へ。と意衷を示して、前より雑兵に持せたる、幌を取出てうち開けば、現八は聞毎に、感嘆せずといふことなく、直元逸友等の諸頭人と共侶に、篝火の光に就て、先其幌を熟視るに、現かの折より記ある、信乃が病中に被たる夏衣にて、房八が血の塗れしは、其色六稔の今に至りて、毫も變らざりけるを、則幌に做しし也。猶睛を定めてよく見れば、幌の中央に大書して、里見八犬士隨一人、犬江親兵衛金碗宿禰仁先人、義士山林房八之紀といふ、二十八言を、四行にぞ誌したる、用心正首なりければ、直元逸友、秋季喬梁、手古内倶教二に至るまで、當時の情由を、云云と、知るも知らぬも推並て、感じ思ぬ者ぞなき。就中現八は、踧然として信乃にいふやう、那行徳に旅宿の折、和殿と倶に艱苦を嘗しは、我と犬田と只是のみ。然ば山林が義俠の死を、悼む六稔の久しきも、只是一日の如くなれども、報恩正に時を得にける、和殿の忠信至れり盡せり。我は及ばず及ばず。と只顧嚮て已ざる折から、又那兩個の鑣奴は、倶に呆れし面色にて、來つゝ跪居て、おそる〱、信乃に向ひて告るやう、剛才仰付られし、那靑海波を牽もて來んとて、十繫孤屋に造りしに、那馬其頭に在ざれば、うち驚きつゝ訝りて、四下に多く憩ひ居れる、雑兵に問候ひしに、大家知ずと答るのみ、其往方詳ならず。然りとて閣べき事ならねば、陣中隈なく求猟りしに、其影

遙に京に赴きしより、今に至るまで歸り來ず、這回の大事に逢ざれば、さこそ朽惜かりぬべけれ。切て他が馬也とも、這戰場に伴ふて、本意に充んと思ひしかば、往る日稻村を出陣の折、廐掌管にこの義を告て、牽せ來て玆に在り。又只這意味あるのみならず、親兵衞が親なりける、義士山林房八は、身を殺して仁を做しゝ、我が再生の恩人也。然ば六稔前つ夏、行德なる古那屋にて、他が將に死せんとせし時、我恁々と誓ひし義あり。こゝをもて房八が、鮮血に染たる夏衣は、我その折より藏め措て、年來艱苦の中にだも、敢喪はざりけるに、料らず今番の役あり。不肖の我身、防禦使の、大任を稟まつりて、這地の敵にうち向へば、この折をもて他が義名を、いかで世に顯して、命の親なる洪恩の、其萬一に報ん、と思ふばかりに准備しつ、他が染血の夏衣を、幌に縫せてこゝに在り。幌は則母の衣、親に等しき舊恩を、背に罩て敵に中らば、身は一箇にして、名は兩箇、且親兵衞の馬に乘らば、則三役兼帶の、任重けれども已べからざる、義の攸る所あれば也。爾るに隔昨の鬪戰は、只是敵の强弱を、試んと思ひしのみ、いまだ晴の軍陣ならねば、那日は犬江の馬に乘らず、亦山林の血染の幌を、掛ずして在りけるに、時なる哉今日の鬪戰は、兩家の雌雄こゝに在り。我略計行はれて、寄隊の三將を虜にせん歟。然らずは拙策齟齬ひて、敵に首を捕らるゝ歟、兩箇に一箇の大殺なれば、那馬

は滸我殿（成氏をいふ）と憲房主也。そが中に滸我殿は、いはでもしるき和殿の舊君、又我ためには、大父大塚匠作の、主筋にて御座するに、今は舘の仇なりとも、那隊に向ひて、戰功を見さんは本意にあらず。この義什麽。と談ずれば、現八答て寔爾也。和殿は防禦の正使なれば、山内の隊に向ひ給へ。我は其子の隊を敗らん。杉倉生と田税に、滸我殿の隊を任しなば、迭に後易かるべし。と解れて信乃は再議に及ばず、又潤鷲手古内と、振照倶教二を、急に身邊へ召ていふやう、和殿等は、倶に五百の士卒を領て、權且這陣營を戍るべし。我火攻の謀行はれて、煙天に冲りなば、御曹司も出陣ましく〵て、當所に御旗を建給はん。その折かの隊に從ひまつりて、後の進退は、東の翁の指揮に依りね。と訶いそしく宣示す。其言訖りて、左右なる、秋季喬梁を見かへりて、和殿等は、御曹司の、御意を稟奉りしと云、野豬を護送の頭人なれば、誰が隊になりとも從ふて、倶に軍忠を見し給へ。といはれて秋季喬梁は、相歡びて、防禦使達の、隊に屬給へと請にけり。當下信乃は雜兵をもて、鑣奴を召ていふやう、我が安房より牽せたる、犬江親兵衛が愛馬青海波に、飽まで多く秣を飼ふて、蚤くこゝへ牽よせよ。いそげ〳〵。と立し遣りて、又現八に向ひていふやう、和殿も豫知れるごとく、那青海波は、老舘の、曩に親兵衛に賜りたる、東國一の駿足也。しかるに犬江親兵衛は、この秋使に立られて、

贊す。當下現八がいふやう、約角ある獸の、よく人に觸れて力あるは、則牛と羊なり。鹿は其角牛より長くて、其角に枝あれば、我蕉火を結著るに、最宜きに似たれども、其性痛く人を怕れて、物に觸るゝの勇なければ、幵を敵陣に放つとも、必逃て、度を失はゞ、何をもてよく、戰車を燒んや。しかるに野豬は、角なけれども、牙長ければ角に代べし。況や其勇ありて、痍を負ふときは、奮勇十倍、敵手を擇まで駈まくするを、獵夫も制しがたしとす。こゝをもて、匹夫の勇士を、野豬武者といふならずや。這を思ひ那を思へば、今宵の所要牛にも勝れり。寔に珍重々々。と譽れば、大家然也。と答ふ。信乃も听つゝ點頭くのみ、含笑れたる面を復して、發兒を放ちて端然と、衆野豬に向ひていふやう、如是畜生、今猜するに、安房にてありし獵競の、獲なりせば、我君の、御仁慈をもて流させ給ひし、其舫この地に漂ひ來て、又西妙們が慈愛にて、死ざる事を得たりしに、我鬪戰の幇助にすなれば、今敵陣に放つに及びて、或は寄隊に搏殺され、或は俱に火に燒れて、命を其里に殞すもあらん。遮莫仁君不殺の報恩、其軍功は勇士に勝りて、永く竹帛に載られん。勉めよかし。と說諭せば、野豬は孰も聞知るごとく、日を抗て見つ、點頭に似て、ゆかまく欲する勢あり。然らば隊部を倣さんとて、且現八に向ひていふやう、犬飼和殿は思ずや。寄隊は圍みて、岡の三面に在り。其正面は顯定主にて、左右

に刱ぬ事ながら、牛を求て牛を得ず、反て思ひがけもなき、野猪の老たるを、多く得ぬるは是も亦、人力人智の勢をもて、致すべき事ならんや。且其野猪を憐て、留めて社地に畜措ける、摩利支天の別當西妙と、那加賀の白山の社僧齋明と、字は異なれども、唱は似たり。こも亦因果自然に出て、今古約束あるが如し。名詮自性といひつべし。是しかすがに、我兩舘仁義の御餘德、我伏姫神の冥助ならずは、這妙用に至んや。といひつゝ側を見かへれば、現八、然也。と點頭て、卒とばかりに共侶に、塵淨手しつ、相並びて、洲崎のかたと富山の方にうち向ひ遙拜して、其恩德を謝しまつる、默禱訖りて、信乃は又、逸友を勞ひて、我急策に意外なる、火牛に易るに火豬をもてせる、この義は和殿の功なるに、等閑にして時を移さば、天は明て空にやならむ。先野猪と護送の頭人、眞間井繼橋、隊の兵まで、疾喚集めて、准備をせずや。といふに逸友こゝろ得て、岡を下りつ水際に至りて、秋季と喬梁によしを告て共侶に、其隊兵に野猪を、牽せてかへり來にければ、信乃現八は、秋季喬梁に、今宵の加役を勞ふて、倶に其野豬を見るに、實に六十五頭あり。且聞しには彌增て、形大きく牙長く、よく人にさへ狎たれば、敵を敗るに究竟の奇物、この上やあるべき、と思ふ二犬士の歡びはさらなり、直元手古內倶教二個、暇ある老兵まで、咸篝火の下に聚ひ來て、これを觀る者駭嘆じて、神所行なめり。と稱

秋季と、繼橋綿四郎喬梁に、雄兵一百名を相授けて、船中和殿の帮助にせん。然るときは御曹司の、賢慮にも違ひまつらず、又犬塚が意見にも、稱ふて兩全穩當ならん。といふに、逸友重て異議せず、隨即辰相と共侶に、又義通君の身邊に造りて、事恁々と聞え上て、退りて秋季喬梁に、示し合する其言訖て、自他百十名の從兵に、野豬六十五頭を牽せて、悄地に城を出、水際に立て、准備の快船三四艘に、其野豬を載せ、人も皆うち乘りて、漕せて前同の岸に到るに、今宵も信乃が時分を量りて、連りに敵をうち驚する、最中にてありければ、寄隊は都て立噪ぎて、外を見かへるべくもあらず。こゝをもて逸友は、船も人も多くなりしに、素より津近ければ、時を移さず首尾を得て、看咎る者なかりけり。恁而田稅逸友は、尙秋季喬梁と、其從兵と野豬を、そが儘一霎時船に在せて、十個の隊の兵をのみ從へて、悄地に岡の陣營にかへり來つ、則信乃現八に、前條の崖略を、箇樣々々。と告知するに、言約にして反て漏さず、初は牛の得がたかりし事、後には野豬の奇事ありて、六十五頭を得たる事、且義通君の賢慮をもて、眞間井繼橋兩頭人に、隊の兵一百名を從せて、野豬を牽せておこし給ひし、事の首尾を報知するに、現八武者助が歡び、いふべうもあらず。側聞せる手古内倶教二一、頭人老兵推並て、奇也々々と稱贊す。當下信乃は忻然と、逸友に向ひていふやう、寔に物に奇偶あるは、今

び言承しつゝ、うち連立てぞ退りける。恁而義通君は、奥に退きて、辰相を召て仰する義あり。辰相則承り、是を逸友に傳へていふやう、今宵犬塚が計る所、那野猪にて物足るべきや、否いまだ知るよしなければ、御曹司倘御配慮あり。眞間井樅二郎と、繼橋綿四郎を、加勢の頭人として、雄兵一千五百を授けて、目今野豬を、載遣すべき、悄船に推續きて、戰粟約一千苞を、岡の陣營に入れさせむや、こは御曹司の賢慮也。この義什麽。と談ずれば、逸友答て、然ゝ候。其義は信乃が遠慮あり。然る御諚もあるならば、辭ひまつれ、といはれにき。故いかにとならば、今の急務は寄隊の戰車を、燒果さまく欲するのみ。其火攻の計行れて、戰鬪勝ば求ずして、敵の貯たる戰粟は、必我有にならん。然るを今慭に、加勢の士卒を遣されて、且戰粟を入れさせ給はゞ、潛ぶとすれど敵に知られて、反て火攻の謀は、空になり候はめ。然ば加勢の兵も、亦戰粟を遣さるゝも、目今は倘早かり。先疾野豬を賜りて、退りて信乃が火攻の謀成るならば、煙天に沖るべし。御曹司は开を暗號にして、士卒を從へ御船を拵めて、文明の岡に御旗を建て、自家の軍威を資け給はゞ、犬士はさら也、士卒の勢ひ、必や十倍せん。全勝疑ひなかるべし。此は是豫より、信乃が庶幾ふ所也、今愚意をもて稟すにあらず。御許容あらば幸ならん。と請ふを辰相うち听て、其議は都てこゝろ得たり。然らば眞間井樅二郎

伏姫神の冥助もあるべし、何の疑ふことかは、と尋思をしつゝ然氣なく、多次兵衛にうち向ひて、牛に代るに野猪は相應しからず思へども、大きなるは犢に等しくて、牙長からば試に、用ひらるゝ事もあらん。儞は蚤く立かへり、西妙にこの義を告て、其野猪を皆まゐらせよ。迅速せよ。といそがせて、則雜兵一百名に、こゝろ得させて、多次兵衛と、倶に箭斫村へ遣しつ、這他の村長故老には、身の暇を取せしかば、皆歡びて退出にけり。然ばこの時次の間にて、件の奇談をうち聞たる、田税逸友が歡びいへばさら也、義通君も辰相が、聞え上るに駭嘆じて、且感悅大かたならず。隨即加船の准備をいそがせて、其野猪の來ぬるを待給ふに、既にしてこの夜亥中の比及に、件の百個の雜兵は、多次兵衛幷に西妙と、莊客等を從へて、六十五頭の野豬を、牽せて城にかへり來つ、事恁々と聞え上れば、辰相則其野猪を、書院の庭に牽入させて、義通君に見せまつるに、逸友及直間井、繼橋們の諸頭人も、侍坐して倶に是を觀るに、現聞つるに彌增て、形大きく牙長かり。且其人に狎たること、牛馬に異なるべくもあらざれば、義通君を首にて、大家奇也。と稱つゝ、いと憑しく思はぬはなし。當下東辰相は、多次兵衛西妙們にうち向ひて、若們皆承れ。牛に代るにこの物は相應しからず思召せども、倘用ひらるゝよしありて、其功あらば恩賞は、必異日の御沙汰に依ん。罷り立ね。といそがせば、大家歡


摩利支天河原に西妙流猪を憐む



れん。況やこゝは名にし負ふ、摩利支天神の社地なれば、神の憐給はして、依させ給ふ歟、是も亦凡慮に量り知るべきにあらず。人々こゝに心せよ。と諭せば大家又諸なひて、究竟なる壯佼十名許、或は其船に乗移り、或は水際に立つもありて、左右して其野猪を、遺もなく岸に扶登して見るに、都ては六十五頭あり、孰もその大きなること犢に等しく、牙の長きは尺にあまり、短きも七八寸、八九寸ならぬはなし。剛毛項に逆立て、現怕るべき猛獸なれども、其人を慕ふこと、豚兒の母に逢るが如し。軈て咸其索を解捨て、物を喫するに、麥の冷飯のみにて足るべくもあらざれば、黍まれ稗まれ拿出し來て與るに、喫ふこと始のごとく、並て悦服の心あり。又試に牽立て、故來し舫に載せんとするに、皆逡巡して從はず。次の日山へ遣棄んとて、牽まくすれば、毫も動かず。原來摩利支天の惜ませて、使せ給ふならんとて、其が儘にして遂もせず、則村にて養ふと云、這一奇事を、言詳に、多次兵衛聞え上しかば、辰相听つゝ感嘆して、肚裏に思ふやう、我君の御仁心、猛き獸の上にしも、及せ給ふ盛德を、仰ぎまつればいよ〳〵高かり。昔唐山姬周の時、齊の宣王は牛に易るに、羊をもてせよといへり、亓は只鐘に釁ん爲のみ。是は大敵の戰車を燒くべき、牛に代るに野豬也とも、其牙尺に庶しといへば、今宵蕉火を結著るに必や便宜ならん。今不用意にして這物あるは、我君仁義の御餘福にて、且

りしを、摩利支天堂の別當なる、西妙と喚做す修驗者は、殊に慈善の本性なるが、倶に河原に立出て、其野猪を相ていふやう、衆人よく他を觀よ。猛き獸も恁做りては、皆是涙唔みて、人に救ひを求るに似たり。各位はいまだ知ずや、昨日安房よりかへり來にける、人の噂を聞しに、屬日安房にては、國守の山獵ありけるに、素より稀なる仁君にて御座せば、其獲の多かるも、只生捉らするのみにして、敢一頭も、殺すことを饒し給はず。そが中にも、豺狼野豬鹿などの、或は人を害ふ者、或は田圃を暴す者をば、皆舫にうち載せて、流し遣り給ひきとぞいふなる。然らば這野猪も、亦是國守の流させ給ひし、獵の獲でありけん歟、是も亦知るべからず。先試に一二頭、やよ疾這里へ助け登して、何まれ物を喫せずや、といへば大家有理と悟りて、壯佼每三四名、軈て其船を引よせ維ぎ留めて、特に飢たらんとおぼしきを、二三頭岸に援上しつ、四足の索を解く程に、西妙則宿所より、麥の握飯を拿よせて、軈て是を投與るに、短き尾を掉り拜する像く、喫ひ盡せども、逃もせず、四足を屈て睡りて在り。船なるは是を見て、羨しきや鼻を鳴らして、立まくすること屢なり。西妙いよ〳〵憐て、又衆人に向ひていふやう、既に這二三頭、索を解ても逃もせず、人を害する心なきは、痛く先度に懲りたるならん。然るを那殘れるをも助ずは、守の御仁心に似るべくもなき、不慈不善の人といは

局の内へ、其村長故老們を召入れさせて、みづから虚實を質し問ふに、皆其稟す所始に違はず。馬は黄金に牧あれども、牛は他所より、求め候故に、價直馬より廉からねば、人皆欲せず候。と陳謝の詞を罄すのみ、伴詐ならず聞ゆれば、辰相いよ〳〵困じ果て、計の出る所を知らず。姑且していふやう、牛に亞て角あるは、則鹿と羊也。羊は皇國の獸ならねば、這頭に在るべくもあらず。倘遊樂に大鹿を、家に畜ふ者は是なきや。と問へば大家あらずと答ふ。そが中に、箭斫河の邊なる村長にて、多次兵衛と喚做す者、膝を找めて稟すやう、目今尋させ給ひぬる、鹿を飼ふ者とては、あることを聞ず候へども、老て最大きなる野猪の、よく人に狎たるが、我村に多くあり。角はなけれど、牙長かり。こはいかゞ候べからむ。御用に達ず候歟。と眞實立告て請問へば、辰相訝り眉を顰めて、幵は亦奇しき事也かし。鹿は京鎌倉の茶店にて、巽鳥と共に飼狎して、人に觀するもありとし聞けども、野猪は猛獸也、人に狎つべき者ならぬに、幵を畜措るは故こそあらめ。其義を告よ、甚麽ぞや。と問復されて、然ン候。今玆十月の時候、最大きなる野猪六十餘頭、皆四足を結枷りし儘、虚舟に載せられたるが、箭斫の摩利支天河原の岸へ、流れ著き候ひぬ。是を觀る者驚き怪みて、打殺せとて罵るもあり、否々殺すは無益也。然ばとて、助けて陸に升しなば、遂に田圃の害を做さん。只突流せといふもあ

かるに其夜、岡山の陣營より、田税力助逸友が、信乃現八の使に達て、十個の從兵と倶に、悄地に臺の城に來つ、則東辰相に就て、信乃が計略を告稟し、且牛を求ること急なりければ、辰相所つゝ歡び感じて、敢亦他議に及ばず、逸友並に從兵們を勞ふて、件の衆議の趣と、兵粮饋りの准備ある事までも、詳に示談せしかば、逸友則義通君に見參して、稟すこと始の如く、牛を欲りするの外に、敢他議なかりしかば、義通君は事の危窮に、一たびはうち驚き、又信乃が謀る所、微妙なるを歡び感じて、六郎蚤く那需に、應ずべしとていそがせ給へば、辰相奉り退り出て、次の日の早天より、軈て近郊なる、村正莊客に下知して、其家毎に在る耕牛を、今一日に駈集めて、疾當城に、牽もて參るべし。必過分の重賞あらん。倘愆て、隱して呈らせざる者あらば、其罪免るべからず。と最も緊しく掟つゝ、催促連り也けれども、下晡に至るまで、牛一頭も牽もて來ず。四境の村長故老們、うち連立て、城に詣て、おそる〳〵稟すやう、今朝疾仰付させ給ひし、耕牛の事はしも、一村毎に徇示して、隈なく募り候ひしに、約莫這四下なる莊客は、田圃を鋤せ候にも、東西を駝せ候にも、皆馬をのみ用ひて、牛を使ふ者とては、哀れ一人も候はず。上總には牛多くあれども、路近からねば爭何せん、今日の御用に達がたかり。いかで饒させ給へかし。と異口同樣に陳じしかば、辰相これをうち聞て、开は安からぬ事かな。と呟きつゝ、

手に拿る如く聞えしに、剰自方の戰粟は、恁々の故ありて、多く暴河の水底に、淪みし事の幸なきを、誰いふとなく知られしかば、義通君を首にて、宿老頭人士卒まで、いよ〳〵心安からず。軈て衆議を凝させて、夜に紛れて岡の陣營に、戰粟をや入れさせん。然らずは城内に在る所の、士卒を盡し船を出して、御曹司に倶し奉り、二犬士を相資けて、雌雄を一時に決せん歟と云、意見區々なりけるを、東辰相うち聞て、各こゝに意衷を盡すは、義勇あるに似たれども、寄隊は四萬の大兵にて、是に加るに、那駢馬三連車の、堅陣をもて攻るにあらずや。虎に翼を添たる如き、勍敵也と知りながら、當城五六千の士卒をもて、河を渡して伐まくせば、毛を吹て疵を求る、悔なきことを得ざるべし。然ば翌の夜甲夜過て、烏夜に乘して戰粟を、入れさするにしくことなけん。幸にして岡の這方なる、水際には敵の圍なし、是究竟の便宜也。意ふに我八犬士は、各身を衛る靈玉あり、且伏姫神の冥助もあらん。縱窮阨の中に在りとも、大なる、敗なかるべし。然ばとて河を隔て、長視て可惜日を過さば、轍鮒を枯魚の市に訪ふ、寬急の理に暗き者也。先戰粟を入れさする、頭人を擇むべしとて、則眞間井樅二郎と、繼橋綿四郎に課て、翌の夜丑三の時候、戰粟千苞を、二三十箇の大平舵舫にうち載て、雄兵約莫一千餘名、急に暴河を横ぎり渡して、岡の陣營に届るべし、と定めさせて、この日の衆議は果にけり。し

而この次の日も、寄隊は又只三連車を、岡の下に相連ねて、攻ることいよ〻緊しきを、信乃現八は、物ともせず、敵の箭丸を幕に受て、推登らんとする猛者あれば、或は弓箭、或は鋏砲、或は石を投かけて、岩より是を撃墮すに、皆中らずといふ者なければ、この日も寄隊に傷痍兒多くて、終日挑戰ふのみ。冬の日なれば短くて、又いたづらに暮にけり。然ばこの宵も信乃現八は、逸友がかへり來つべき時分を料り、士卒に下知して、又攻下るべき勢を、示すこと昨宵の如く、金鼓間なくうち鳴して、寄隊を連りに驚すに、寄隊は都て先度に懲りて、敢近くは找まねども、然ばとて由斷せず、只攻口を守るのみ、河を渡し來て岡に入る、敵ありとしも知ざりけり。爾程に、田税力助逸友は、この夜子二刻の比及に、國府臺よりかへり來て、信乃現八に報るを聞くに、那身は昨夜障ることなく、臺の城に入ることを得て、隨即東六郎辰相に急を告て、牛を欲とる事情を、詳に聞え上しに、那里には、嚮に那現八が、生口盛實をまゐらせし折、義通君感悅淺からず。有恁れば自家小勢といへども、猶全勝の聞えあらんとて、最憑しく思ひ給ふに、寄隊は那巧做せる、三連車を多く先にして、五十四田を臨て推寄來ぬる、備鋏石に異ならねば、二犬士の武勇なるも、勢二たび中るに由なく、文明の岡山に執登りて、其英氣を避ると云、風聞これあるのみならず、箭叫銃响喊聲まで、河を隔て夜となく日となく、

ばとて、我方寸の及ぶ所、獨賢達て計るにあらず。這義は既に犬飼と、商量して右の如し。天も明ば甲斐なけん。やよ、とく〳〵。と言叮寧に、說示しつゝいそがせば、現八も倶にいふやう、臺の近郊に求る牛の、多少はいまだ知ねども、寧一頭も多きを好とす。其も明日只一日にあり、企てこそ待べけれ。と心屬れば、直元等、頭人老兵感佩して、辭して持口へ退りけり。恁而田稅力助逸友は、この夜丑三の左側に、隊兵十名を從へて、岡の下なる枯蘆の裏に、維ぎたりける快船二艘に、うち乘りつ悄やかに、國府臺の城に赴く程に、信乃現八は士卒に下知して、猛可に戰鼓をうち鳴らし、喊の聲を颺て、目今急に攻下るべき、勢を示せしかば、寄隊は吐嗟と驚譟ぎて、哀れ犬氏は、戰栗竭けん、夜驅して落んとするぞや。遣るな、迯すな、推包で、一人も洩さず擊捕りね。と相罵りつゝ、戰車を連ねて、大刀を拔持ち、鎗を挾み、旗を推建箭を飛し、銕砲を連發ちて、透もあらせず構るに、敵は徒其勢のみにて、權且して音もせず。原來那奴們出後れて、翌の夜を俟なるべし。無益なりき。と皆呟くのみ、各其兵を解て、憩睡まく欲するに、敵は又戰鼓をうち鳴らし、喊の聲を咄と颺て、驚すこと始の如し。寄隊は是に睡りも得せで、こゝに這夜を明せしかば、他所を見かへる暇あらず。この故に田稅逸友が、船に乘り河を渡して、國府臺の城に赴きしを、寄隊に知る者なかりけり。恁

て、戰ひ利ありし事由は、阿彌陀寺本平家物語、巻の第十三に具也。又源平盛衰記、長門本平家物語、印本平家物語に載する所、異同なき事を得ざれども、こゝに參考せんは要なし。那齋明は、素是加賀なる白山の社僧にて、始は義仲に從ひしに、又平家に降りて、這事あり。其心術は表裏にて、なつかしからぬ者なれども、那謀は拙しとすべからず。然ば和漢に火牛をもて、勍敵を破りしは、那田單と這齋明あるのみ。我も亦其顰に倣ふて、火牛を放ちて戰車を破ん。田税生は、今宵事熟たる隊の兵、十名許を從へて、那枯蘆裏に隱し措たる、兩箇の快船にうち乘りて、臺の城に參上り、東の翁にこの義を告て、眞間國府臺の近郊なる、莊客の家に在るべき、牛を多く召よせて、幵を亦悄地に船に乘せて、翌の宵這岡へ牽もて來給へ。今宵はさら也、翌の宵も、我其時分を料り、金鼓を鳴らし、大く寄隊を驚さば、河原に餘念及ずして、和殿の往復易かるべし。といひつゝ指を僂へて、今日は十二月六日也、新月は既に入りぬ。翌の宵も月は亥中に沒ん、潛ぶ爲には烏夜こそよけれ。八日には定正主、水路を歷て、洲崎に推渡らまくすと云、風聲豫しるければ、寄隊は這里も行德口も、其日を契り、期を推て、必勝を急ぐならん。犬川犬田は、いかなるや、倶に是這暴河の、河筋に在りながら、迭に見かへる暇なけれど、犬川也、犬田なり、那里に愆あるべくもあらず。今の急務は火牛の事のみ。然

在り、この故に、反て傷損多かり。然ばとて只一戰にして、敵の弱るべくもあらず。倘恁地にして、日を過さば、自家は必戰粟竭て、夷齊が首陽の蕨も甲斐なく、勾踐が會稽の、恥を雪るに由なかるべし。因て熟思惟るに、寄隊の專憑む所は、只那戰車のみ。蚤く是を破り除かずは、何の日にか大敵に克得ん。しかれども、百十數乘なる那車を、一時に皆擊破らん事は、力をもてよく做すべくもあらず。於是再以るに、初犬阪が獻りし、八百八人の一策は、只水戰の爲のみならず、這里にも亦この時に於て、風火の資助を借るにあらずは、連り建て多かる戰車を、誰かよく一時に除ん。なれども岡の上よりして、蕉火などを投下さば、その間近からぬ、車には火の移らずして、反て敵に打滅されん、この義什麼。と談ずれば、大家ひとしく感佩して、賢慮寔に其理あり。とばかりにして多かる戰車を、一時に咸燒くべき手段は、我們いまだ思ひ得ず、敎給へ。と異口同樣に、膝を找めて請問へば、信乃は然こそ。と點頭て、諸君聞ずや。昔唐山戰國の時、燕齊兩國の鬪戰に、齊の將田單が一夕火牛の謀を以、尤く敵に勝ける故事あり。火牛は、聚合し牛の角毎に、蕉火を結附て、放ちて敵を驚し、其亂るゝを擊し也。又我大皇國にては、源平兩家の戰鬪に、木曾冠者義仲が、義旗を北國に揚げし時、平家の方人齋明が、亦火牛の謀をもて、富樫太郎宗親と、林六郎光明が、篭りし城を夜伐し

といへば、他みづから路を斷つ也。我今騈馬三連車をもて、岡の三方を拿圍まば、遂に活路なかるべし。寄せよ、漏すな。と士卒に下知して、其攻口を定むるに、則岡の正面は、顯定みづから將として、鷹裂八九郎等の頭人雄兵、多くこの隊に在り。右のかたは成氏にて、横堀在村、新織素行、及科革七郎、望見一郎等、近習外樣の從兵尠からず。左は則憲房にて、白石重勝、錐布五六郎等、隊長たる者多く從ふ。總軍通て四萬餘名、百十數乘なる三連車を、一隊毎に先に備て、推登せまく欲すれども、岡高ければ、車馬捗まず、倶に箙を敲き、喊の聲を揚げ、箭を飛し、鐵砲を連放ちて、息をも養れず攻るものから、信乃現八は毫も噪ず、垂たる幕に箭丸を受れば、士卒に一個も傷損なし。敵又盾を被ぎ連て、攻登らまく欲すれば、弓箭鐵砲をもて、射て落し撃滾し、或は大石を投下して、韲粉に做すも尠からねば、寄隊は崇痍兒其數を知らず、矢場に命を殞すも多かり。慇挑戰ふ程に、冬の日蚤く暮れしかば、寄隊は些し攻口を甘げたれども、猶稻麻竹葦の如く、繞焉として圍を解かず。三所の陣營、白晝の如く、倶に篝火を燒續けて、明なば又攻んとす、勢ひ撓ず振然たり。爾程に、犬塚信乃犬飼現八は、この宵直元逸友等の諸頭人を、一緒に聚へて信乃がいふやう、今日の鬪戰、主客の勢ひを思ふに、自家は小勢なれども、高きに處り、こゝをもて防ぐに利あり。寄隊は大勢なれども低きに

爾程に、寄隊の大將顯定、成氏憲房は、里見の防禦使犬飼現八が、大勇大武の、謀に權されて、四萬の士卒立足もなく、逃て假名町まで退きしを、且怒り且耻て、うち呟くのみいふかひなし。姑且して、顯定は、更に斥候を遣して、現八が後の形勢を覘せしに、長阪川の上には、敵退きて一人もあらず。只橋を截流して、路を斷たるのみ也。といふ。顯定是をうち聞て、原來現八奴に謀られたり。他那橋を截流せしは、我大軍を怕るゝのみ、別に計策あるにあらず。蚤く樹を伐りて、那小川に架渡しね。明日は未明より五十四田に推寄せて、今日の怨を復さんず。兵毎いそげ。と下知すれば、成氏も憲房も、是に氣を得て勇みあり、倶に士卒を奬して、先途の不覺を償めけり。恁而寄隊は其詰朝、三將四萬の大兵をもて、五十四田を臨て攻寄するに、敵は故の陣所にあらず。文明の岡に籠れる事、又昨日高飛車和女九郎、劍峯瘤四郎が、敵の陣營を襲ひし事、那身は戰歿したれども、敵の戰粟、什が七八は、恁々の故をもて、荒河の水底に、沈みしといふ事も、この時夙く聞えしかば、顯定馬上に、掌を、うら鳴らしつゝ悦びて、成氏と憲房に、この義を告て且いふやう、那犬塚信乃、犬飼現八等は、我三連車に懲りたればこそ、高所に逃登たれ。遮莫戰粟滅銷して、什が二三になりしといへば、幾までかよく支ゆべき。四五日を歷ば飢疲れて、自滅せん事疑ひなし。況や船を奪れじとて歟、咸退けてあらず

溝壑に在ることを遺れず、勇士は其元を喪ふことを忘れず。今何の暇ありて、沈みし戰粟を拿揚んや。且事こゝに至るといへども、自他の勝負はいまだ知られず。既に生口盛實を、臺の城へ呈らせしに、幾程もなく事の不の字を、恁々と告稟して、御曹司又東の翁に、物を思せまつらんは、忠臣勇士の本意にあらず。先疾防戰の備を做すこそ、今の急務なるべけれ。と道理を舒て說諭せば、現八を首にて、直元逸友諸頭人們は、倶に感激して、敢異議せず。然らば准備をいそがんとて、諸隊を分ち狹間配りしつ、岡なる樹間々々には、幔幕多く援亘して、寄隊の箭丸を防ぐ爲にす。當下信乃又謀りていふやう、五十四田の河原に多く維ぎし、我諸船を那儘あらせば、必敵に奪れん。然ればとて、這岡の背なる、水際に移すも亦要鬪。憖に船あらば、戰難義に及ん時、士卒皆うち乘りて、逃まく欲する心起らん。古の勇將は、船を沈め、竈を毀ちて、死戰を訣せし例あり。只是進むのみにして、其退くに路なくば、士卒の心一致して、奮勇日屬に百倍せん。こゝをもて、在る所の船は、咸前の岸に退けて、國府臺の下に維ぐべし。そが中なる、快船一二艘をこゝに留めて、這岡の背なる、枯蘆の中に隱し措かば、臺の城へ、事の火急を、告まつるに便宜ならん。こもいそぐべき事ならずや。といふを現八諸なひて、軈て士卒に下知しつゝ、准備遺なく成し果しかば、この宵は篝を燒明して、徐に寄隊を竢にけり。

し程、在下料ず還り來て、事の趣を知るとそが儘、矢場に隊兵を推拢めて、和女九郎と瘤四郎と、其餘類さへ擊捕りしかば、禍鬼夙く鎭りぬ。然れども戰粟一千數百苞は、皆暴河の底に沈みしを、亟に採揚ぐべくもあらず、殘るは二百七十五苞あり。其七十五苞をば、壯客們が忠戰奇特の、賞祿に齎せ遣しぬ。且陣營に在りし老兵們は、薄痍負たるのみにして、死に至りし者あらず。此故に戰粟は、形の如く減鎖して、今岡に運登させしは、二百苞の外候はず。と一五一十を告知せて、和女九郎と瘤四郎の、首を實檢に入れしかは、痍負ざりける老兵們も、其漏たるを補ひて、陳謝の詞を罄しけり。思ひがけなき這一擧に、信乃が驚き、いへばさら也、現八も眉をうち顰めて、兇徒を卽時に擊朿げしは、尤愉快の事なれども、戰粟失て復らずならば、是第一の憂也。蚤く船を乘浮め、水底を撈らせて、咸引揚ずは後悔あらん。といへば直元も俱にいふやう、計るにこゝに在る所の、士卒は五千有餘なるに、二百苞の戰粟にては、僅に三日を支ゆべし。水底なるを採揚るに、其事亟に做しがたくば、疾臺の城へ告稟して、戰粟を乞まつるに、しくことや候べき。と議するを信乃は聞あへず、其義は無異の日にあるべし。今多く船を漕出させて、水中を撈るとも、或は使を臺の城へまゐらせて、戰粟を乞まつるとも、今宵の中によくせんや。其事いまだ做し得ざる時、大敵急に推寄來ば、何をもて是を防ん。志士は

國府臺の城に呈せし事、并に今日の鬪戰の事の趣を、注進せしよしを告るに、信乃は其移させける戰粟の、思ふにも似ず減銷して、僅に二百苞許なるを見て、訝りて其故を問ふに、逸友答て、然ン候。料ざりける禍事あり。陣所なる戰粟の失たりしを、いまだ告るに遑なければ、訝り給ふも理り也。嚮に土民等が愬を听ぐに、近國なる野武士の頭領に、高飛車和女九郎、劍峰瘤四郎と喚做すあり。其徒一百七八十名を將て、這回成氏主の隊に附まく欲しゝに、疑るゝ事やありけん、衆議いまだ是を許さず。然るを横堀在村計ひて、若們殊なる功をもて、倶に志を見さば、必重く用ひられん。箇樣々々にせよかし。と悄地に誨たりしかば、和女九郎們皆承悦びて、當陣の隙を覘ふ程に、今日しも葛西の鬪戰に、當陣營を戍る者の、寡きを覘ひ知りけん、件の和女九郎瘤四郎を首にて、其徒百七八十名と共侶に、間道より推寄來つ、且陣門を撃破り、我老兵を攻擊散らして、剩陣中に在る所の、戰粟を奪略りて、雜措たる我船に、打載々々暴河を、泝り漕去まくせしを、這地の莊客聞知りて、百十數名援け來つ、我老兵們に力を勠せて、齊一船を乘り出して、赶蒐て戰ふ程に、賊徒は竊みて船毎に、積入れし戰粟の殊に多かりければ、巨舫四五艘乘淪めて、賊徒の溺れ死する者、百幾名なるを知らず。亓が中に、那高飛車和女九郎と、劍峯瘤四郎は、猶遺れる戰粟を攫んとて、船に乘後れて在り

那戰車は怕るべし。しかれども、今暴河をうち渉し、城に篭りて、他を防がば、寄隊戰車の奇巧あるも、用るに由なかるべし。但恨る所は、我們二人、强てこの地に敵を待ながら、甲斐なく城に逃篭らば、獨我と和殿の恥のみならず、御曹司初陣の、花を散すに是似たり。蚤く這義を思ふをもて、我既に主張あり。和殿も豫知れる如く、箭斫河の這方の岸に、一座の新岡あり。こは今より十稔有餘前つ比、暴河數度の洪水にて、多く砂石を推上て、田甫の害に做りしかば、土民們力を勠せて、其沙石を鋤除くに、愚公が山を移す辛苦を歎はず、約莫三稔許にして、沙石を一所に裒めつゝ、一座の岡に做しゝかば、文明の岡と喚做したり。這岡山、高さ數十仭にて、上極めて平坦なれば、數千人を住しむべし。況や今は年を歴て、自生の嫩樹多くあり。是築ざる城郭に似たり。然ば我一軍、蚤く件の岡に據りて、寄隊の戰車を防ぐべし。この故に方僅田稅力助に、隊の兵三百名を從せて、五十四田へかへし遣せしは、那里にある糧粟兵器を、文明の岡に移させん爲也。那漢、萬の事に逸蚤ければ、今はしも好時候ならん、卒々。といそがせば、現八听つゝ嘆唱して、しかるべしと答つゝ、隨即信乃武者助と共侶に、各隊兵を推立せて、五十四田河原の上なる、文明の岡にうち登れば、田稅力助逸友は、隊兵三百名と倶に、先だちて這岡に在り。則信乃現八等を相迎へて、那生口盛實をば、士卒十名許に吩咐て、

今に刱ぬ事ながら、約四萬の大敵なるに、身は只一騎、隊の兵三十、一呼吸の間にして、言下に大敵を威し退けたる、其勢を推量るに、全身都て胆にあらずは、何人か能せんや。實に我邦の張飛なる哉。戍孝が及ぶ所にあらず。然はさりながら惜むべし、和殿の思慮足ざりき。何とならば、數十乘なる那車を、うち摧くこそ時をも移さめ、燧嚢は持つらんに、火を鑽出して車を燒かば、大敵返し來ぬるとも、煙に堰れて躊躇ふ間に、和殿の退口易かるべし。敵に車あらずなりなば、後戰に自家の利也。亦只この事のみならず、橋を毀しは拙策也。何とならば、那長阪川は小流なり。寄隊は四萬の大兵あり、其橋あらず做りぬとも、或は樹を伐りてもて投渡し、或は埋草をもて川を埋るとも、做し易かるべき技ならずや。然るを和殿憖に、橋を毀たれば心を知られて、實は寄隊を怕るゝ者也。外に計策あらじと思はん。寄隊四萬の大衆中に、一個の智者なからんや。那折橋を斷流さで、其儘にして退き給はゞ、寄手必訝りて、猶謀ありと思はん。然らば漫に那橋を、うち渡りて追逼るべからず。この理を懐ひ給はずや。と憚る色なく論ずれば、直元以下の頭人老兵、這宏論に敬服して、現智は犬塚優れり、と思ざる者なかりけり。既にして現八は、憶ず信乃に解曉されて、脫落にけり、と悔て及ばず。什麼いかにして可らんや。と問へば信乃答ていふやう、然ばとよ、四萬の敵は怕るゝに足らず、只

遣して、其勝敗を覘せしに、和殿は既に名ある敵、一人を生拘りつ、猶大敵を摧し退けて、後安く做さんとて、反て隊兵の多きを欲せず、銕術に修煉せし、雄兵三十名を那里に在らせて、其他は從ふことを饒さず。其隊の兵們のかへり來て、事情も知られしかば、いかにするや、と思ふのみ、我さへ遠く去難て、和殿の來ぬるを待て居り。しかるに那生口を知れる者あり。他は顯定主の家臣、齋藤左兵衛佐高實の家子にて、兵衛太郎盛實と喚做す者也。衛の彌子瑕に異ならぬ、主君の寵淺からねば、戰車の頭人たりといへり。然らば是要ある者也。この餘も思ふよしあれば、則田稅力助に、隊の兵三百名を從せて、五十四田の陣所へ遣しにき。和殿の首尾は甚麽ぞや。と問へば現八、然ればとよ。我箇樣々々に計ひて、敵の胆を拗ぎしに、多勢を憑む烏合の弱兵、一禽投石に駭きては、衆鳥飛去ざる者あらず。將も士卒も驚き譟ぎて、一個も遺なく逃亡にき。迹に棄たる戰車數十乘あり、皆うち摧きて、且其馬を奪略らば、後の戰に利あるべけれど、其頭の所爲に時を移して、寄隊の返し來ぬるに逢はゞ、其同は防ぎ易からじ、と思ひかへして敢せず。長阪橋を截流して、寄隊の路を斷たるのみ、そが儘退り候ひき。と告れば杉倉直元等、頭人老兵側聞して、胆を潰しつ面を汗して、さても〳〵。とばかりに、舌を卷つゝ感服す。开が中に犬塚信乃は、踧然として、却いうやう、犬飼、和殿の胆勇は、

第九輯　卷之三十九

第百六十五回下

この題目は既に前卷に出たり所云野
豬を放ちて信乃戰車を燒く卽是也

今一回を釐て二卷に做すこと、其例なしといへども、本傳は一百七十回にして、團圓たらまく欲する故に、是より下は回每に、長編ならざることを得ざる也。

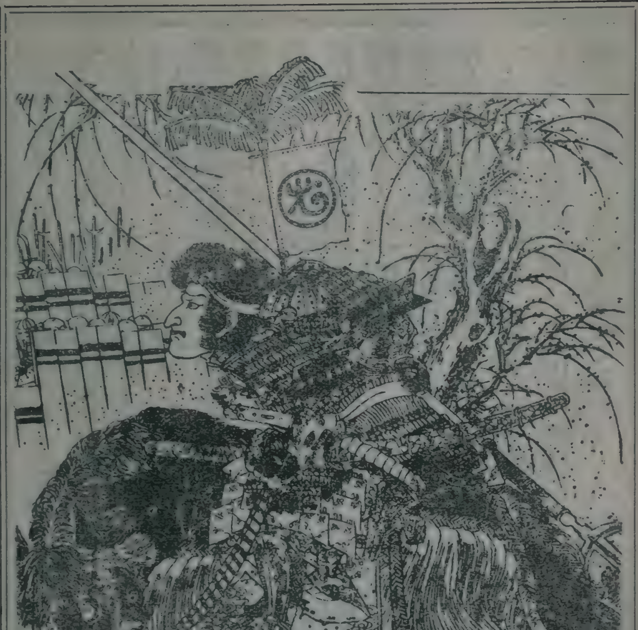
却說、犬飼現八は、則三十個の隊の兵を、馬の前後に從せて、五十四田を投ていそぐ程に、と見れば、前面に屯せる、四五千の軍兵あり。敵歟躬方歟、とばかりに、近づく隨に又よく見れば、是則別人ならず、犬塚信乃戍孝が、杉倉直元等と共侶に、こゝに現八を待也けり。嚮に現八が還しける、一千有餘の隊の兵も、皆來てこの隊の中に在りしかば、幷が小頭人老兵們は、俱に犬飼を相迎へて、信乃が用意を告などす。現八是をうち听つゝ、軈て馬より下立て、隨卽信乃に對面す。當下信乃がいふやう、嚮に我、寄隊の戰車を擊破り、且一方を殺開きて、杉倉田稅を拯ひ得たれども、和殿の安危心に掛れば、遠くは去らで、這里に在り。悄地に斥候を

の碑誰もかも、武勇今古に獨歩す。といはぬものなんなかりける。

作者云、本回は、文いよ〳〵多きをもて、奮て前後二月とす。一回を分ちて二月に做すこと、いまだその例なきものから、本傳刊刻の書肆、文溪堂の好に儘せて、全部九十六冊にせまく欲すれば也。蓋分巻は、作者の本意にあらねど、腹稿猶餘りあるをもて、既に定めたる巻冊も回の數も、又愸に多くやならん。开は吾ながら前定しがたき、筆の自然は省くべからず。看官是を思ひねかし。

の進止、勇なる哉。昔漢末、三國の始に方りて、劉皇叔玄德が、荊州の鬪戰敗れて、曹操が百萬の、大軍に逐れし時、劉備（玄德）の勇將、燕人張飛（字は翼德）が、身只一騎、馬を駐めし、長阪橋の上にて、其百萬の敵兵を、罵退けける其勇一對、橋の名さへに相似たる、事の勢愉快を見はす、和漢今昔多からぬ、前硯あれば、後筆なきにあらず。看官坐に含笑れて、後回誰何と思ふもあるべし。閒話休題、登時犬飼現八は、四萬の寄隊、立足もなく、車を棄鋒を倒にして、逃て一人もあらずなりしかば、伏たる隊兵を招きよするに、隨卽三十個の雄兵は、又鐵砲を携て、物の蔭より出て來つ、造化至妙。と散動くを、現八急に喚近づけて、若們那圖を差へざりける、挊きは極めて好。那見よ、寄隊の棄たる戰車、猶那里に多くあり、皆打摧きて、馬を奪略らば、後戰に其利あらむ。然とて其頭に時を移して、寄隊返し來ることあらば、其回は防ぎがたかり。夙く犬塚に赶就て、この首尾を報知せなば、更に又寄隊を破る、計策もあらんかし。橋を斷ね。と吩咐て、徐に前回の岸に造れば、三十個の兵們は、承りぬ。と應つゝ、力を勠せ左右して、長阪橋を毀流しつ、梁も遺さず倣しゝかば、現八馬上に是を見て、今はしも心易かり。疾々來よ。といそがして、五十四田を投てかへりゆく。現八がこの口の退口、飽まで敵にかつしかや、思ひのまゝに程遠からぬ、手古名の墳にあらなくに、口


長阪橋ニ
現ハ單騎にて
大敵四萬を
懲退を


げん八

大兵隊伍を亂して、相呼く者多かりけるを、現八遙に相濟して、鐙踏張り、鞍橋に立揚りつゝ、聲高やかに、寄隊の人々疾蒐けずや。滸我殿の御内には、倭人在村を首にて、我を認れるも多からんに、今更名告るは要なけれども、山内殿には初見參也。我姓名を笠表に、寫して各護身符にせよ。昔は滸我の一小卒、其罪にあらずして、久しく縲絏の中に在りし身の、隋玉卞和の選擇に逢ふて、今は里見の防禦使なる、犬飼現八金碗宿禰信道は、即我也。寄隊四萬の衆中に、恥を知り名を惜む、勇士はなき歟、猛將はあらずや。只是一騎の敵に怕て、進む者なきは、甚麼ぞや。疾々撃ね。と喚れば、成氏憲房怒りに得堪ず、倶に采配うち揮て、蒐れ蒐れ。と先鋒を罵る、其聲遲し、那時速し、左右に隈ある小森の蔭、敗稻塚の透よりして、犬飼が隊兵等の、齊一撐と發出す、二三十挺なる大銃に、寄隊の戰車七八乘、車上の兵も、御者馬さへ、倶に齏粉に打摧れて、免るゝ者あることなければ、恙なかりし士卒まで、胆を潰して、苦と叫ぶ、聲共侶に帆太夫は、憶はず鐙を踏外して、馬より撐と墮しかば、衆兵都て咄と頽れて、引板に驚く群禽の、潑と立つ像く逃しかば、先鋒の頭人、後陣の三將、重勝在村いへばさら也、成氏憲房顯定は、こは什麽。とばかりに、勢ひ禁る據もなく、崩れ蒐りし躬方の爲に、推戻されて罵るのみ、心ともなく亂走しつゝ、假名町までぞ退きける。意ふに犬飼現八が、この日

べからず。卒爾大將の御旨を伺ん。疾後陣へといそぐ程に、顯定成氏憲房も、大兵を將て來にければ、重勝と在村は、馬より下立相迎へて、倶に後方を見かへりつゝ、遙に現八を指し示して、其進退を請問へば、顯定成氏憲房は、倶に馬上に頸を伸して、うち望むこと半晌計、疑惑の眉を顰るのみ。とばかりならで成氏は、尋思に憶ず傾けし、頭鎧に手をかけ緒を締て、顯定に向ひていふやう、那奴は咱等が舊臣なれば、心術本事を知ざることなし。非如今少許の、計略ありとても、寡は衆に敵すべからず。戰車を先に轉し蒐て、撃たば勝ざることはあらじ。と惴るを顯定推禁めて、开は勿論の事ながら、見給へ那里に小川あり。現八橋をうち渡して、那方の岸に退かば、戰車を行るに甲斐やはある。といへば憲房も倶にいふやう、加以那圯橋は、最小にして危げなるに、車を遣らば中絶ん。那奴は其地の利に據りて、我を侮り遊べるならん。憎さも憎しと敦圍くのみ。三將隊長諸頭人、重勝も在村も、錐布五六、鷹裂八九、士卒も倶に思難て、皆計の出る所を知らず、徒呆然と口を鉗みて、不覺に時を移しけり。有恁りし程に、犬飼現八は、豫て計りし所に差はず、寄隊四萬の大將士卒、戰車を多く先に建て、那里まで來て敢我まず、俗に云。不動の禁綁縛歟、然らずは禁足の祈禱に遇へる、衆狂人歟、群盗に、異なるべくもあらざれば、現八然こそ。と含笑て、程を料りてうち見て在り。既にして、寄隊の

股肱の俊傑と、いはでも知るき面魂、坡堤の芒花霜に枯れて、招くともなき寒風は、馬の邊を避て吹く、威風正可に凛然たり。爾程に、寄隊山内潜我の兩老黨、白石城介重勝、横堀史在村は、先鋒三連車の頭人たる、錐布五六、鷹裂八九、新織帆太夫が、幾千百なる兵を將て、馬を赶せ車を轢せ、那二犬士を挿籠て、衂にせんとていそぐ間を離れず、倶に馬をぞ早めたる、二隊の軍兵二萬餘騎、又是に加るに、兩大將一副將、顯定成氏憲房も、各其隊の士卒を找る、大兵都て四萬餘名、長阪川近く來ぬる程に、先鋒の隊長、重勝在村は、こゝに至りて士卒と共に、と見れば、前面なる橋の邊に、甲冑たる武者一騎、馬を這方に推向けて、端然として敢動かず。其鎧の絨色は、紛ふべくもあらぬまでに、我も士卒も認得ある、現八なるべく思ひしかば、他は什麼。とばかりに、御者と士卒を喚禁め、車を些推戻させて、止々とばかりに警れば、錐布五六、鷹裂八九、又新織帆大夫も、衆兵都て疑惑ふて、眼を睜り、息を籠して、敢一歩も找む者なし。开が中に白石重勝は、馬を横堀在村の身邊に乘よせ、うち向ひて、和殿はいかに思ひ給へる。那現八が只一騎、那里に我大兵を、誘引まく欲するは、必是計略あらん。然るを漫に推蒐て、倘又失あるならば、再犯の罪を爭何はせん。といへば在村點頭て、然ばとよ、その義なれ。那犬飼現八奴が、梟雄なる、本事は豫我よく知りぬ。一騎也とて侮る

には、處々に掛亘したる、敗稲塚多くあり。繁り立たる細竹の、冬樹の小森に雜れるあり。是我兵を用ふべき、究竟の地方也。若們は、手に〳〵鐵砲を携て、稲塚小森の裡に躱れて、敵の赶蒐來ぬるを俟ね。寄隊戰車を先にして、那里まで來て我を見ば、疑ひ惑ふて躊躇ふべし。その折我恁々、と喚るを暗號にして、左右齊一大銃を、放ちて戰車を擊破りね。寄隊必驚き慌て、一旦は退くべし。敵退くとも赶ふべからず。若們その折早く引揚て、我に俱して五十四田へ還りね。今我方寸に計る所、大かたは差ふべからず。胆を肥して怕るゝことなく、皆よくせよ。と解諭せば、大家凝議せず其意を得て、別れて件の物蔭に、躱れて敵を俟にけり。恁而那身は只一騎、自若として橋の邊に在り。現八この日の打扮は、草緣絨の札よき鎧に、龍頭ある五枚兜の緒を締て、猪頸に戴き、石靑の故金襴の戰袍套に、黑金裝の大刀、戒刀柄の匕首を腰に跨へ、細目鑞鏉の釬、十王頭の脛衣に、夏虫の上總緬の、重底なる戰鞋の緒高きを、紉短に穿做て、驪馬の太く逞しきに、深絳の厚總垂て、貝錦の磨鞍に、白と紫を染分たる腰靮して、寛にうち乘り、左手に三刃尖の鎗の、丈二柄なるを挾みて、前面を佗と見亘したる、馬上の居長最高く、其武者態凡庸ならず、臥蠶の眉丹朱の脣、眼は雙べる星の如く、齒は瓠の實に似たる、面の色淺黑く、髯の迹蒼かりける、這個蓋世の大丈夫、南總八犬隨一人、里見氏

る圯橋あり、長阪橋即ち是なり。閒話休題。然ば現八は這橋の、上まで退き來ぬる時、權且馬を推駐めて、挾みたる齋藤盛實を、士卒に遞與し縛らせて、却隊の小頭人們を、馬の左右に召ていふやう、寄隊の先陣白石重勝們は、鈍くも我に權されて、得赶ずしてありけれども、顯定必怨怒りて、大軍を將て、赶蒐來つべし。我生拘りたる其壯佼を、知る者ありて、告るを听くに、他は齋藤高實の家子にて、齋藤兵衛太郎盛實、と喚做す者即是也。初顯定に扈從して、龍陽の寵あり。今も其餘波にて、重く用ひらるゝといへり。然らば顯定他を惜て、とり復さまく欲するならん。非如顯定戰車をもて、去向の路を斷まくすとも、豈怕るゝに足る者ならんや。我猶一霎時こゝに待て來ぬる敵を推退けん。然ばとて多勢は要なし。汝達は、其生口盛實を、隊の兵毎に、牽せて皆共侶に、退りて是等の趣を、疾犬塚に報告せて、我還るを待ねかし。犬塚必城には入らで、戰車を防ぐ備を做さん。この餘の事は箇樣々々。と意衷を示しつ究竟なる、士卒三十名を這里に在らせて、多兵の從ふことを饒さず。寔に現八が大胆なる、いかにするやと思ふのみ、心許なき所行なれども、否といはんはさすがにて、大家只得應をしつゝ、却盛實を牽立て、五十四田を投て退き去るを、現八一霎時目送りつ、則馬の左右に在らせし、雄兵三十名に指示すらく、若們皆先那里を見よ。這里を距ること一二町なる、那里の路の左右

て信乃を相資けて、倶に亡命したる也。又犬塚信乃は、曩に村雨の贋刀をもて、我を欺まく欲せしのみならず、剩那時、我滸我の舘を閙せて、多く士卒を害ひける、兇奸無頼の歹人なれば、捕へて罪を正まく、思ふも久しかりけるに、一霎時も那奴等を敵に拿りて、對陣せんは堪がたかり。今より酒家先に找みて、犬追物の故實もて、獵箭に被て射て斃さん。いで〱。と遽しく、在村素行にこゝろ得させつ、軈て隊兵を繰替て、みづから眞先に找むにぞ、顯定是を勇とし譽て、則白石重勝と、錐布五六、鷹裂八九等を召近づけて、若們も亦先に找みて、滸我殿（成氏をいふ）を相帮助て、倶に先度の恥を雪めよ。この回も亦不覺の搾きあらば、其罪決して赦しがたかり。いそげ〱。と苛立れば、大家忻然と言承しつゝ、時を移さず成氏と、隊兵を合せて、現八信乃を撃捕んとて、戰車を牽蒐〱、轟然として赶ふ程に、顯定も亦憲房も、士卒を率て陸續たる、總軍約莫四萬餘名、騎馬はさら也歩兵も、後れじといそぐ勢ひは、只暴波の磯打つ如く、五十四田を投て赶ふたりける。この時犬飼現八信道は、既に寄隊の衆兵を、思ひの隨に權懲して、五十四田の陣營に退くに、當時假名町の茂林邊を距ること、約十七八町にして、徑二丈許なる小流あり。土人是を、長阪川と喚做したり。長阪村に近ければ也。其水原は遠くもあらぬ、猴股河より引もて來て、田甫の用水にしつるならん。こゝに架た

內顯定は、戰車の進退其圖に當りて、一旦は其利ありしに、犬塚信乃に擊破られて、先陣重勝們が、既に敗績の聞えあり。剩齋藤兵衛太郎盛實は、犬飼現八に虜にせられて、將て去られし、と聞知りて、怒りに堪ねば一霎時もあらず、萬騎に先だつ後陣より、馬を走らせこゝに來て、猶其顚末を質問ふに、重勝幷に錐布五六、鷹裂八九、諸頭人們は、信乃現八が獍雄なる、他們は、里見の先鋒の兩頭人、杉倉直元、田稅逸友の、敗軍を援るに、間道より不意に出て、戰車に横鎗を入れ候ひしに、路陜ければ、大車の進退、敵又自由ならず。且三連車の、總括たる盛實は、那茂林の頭にて、現八奴に虜にせられて、戰車に頭人あらず倣りしに、那現八を追伐たば、反て盛實を殺されん、と思ふばかりに士卒を制めて、御指揮を請まつりぬ。と異口同調に陳ずるを、顯定听かず、聲苛立て、そは分說になることかは。路陜ければこそ究竟なれ、夙く戰車を先へ推させて、他們が歸路を遮らば、我大軍後より、差挾み攻伏せて、且盛實をとり復して、敵を鏖にすべかるに、小勢の犬士に氣を呑れて、阿容々々として盛實を、拯ひ得ざるこそ不覺なれ。好々他們遠くは去かじ。我追蒐て伐捕りてん。と敦圉き暴く罵る程に、成氏も亦在村素行等の、老黨士卒を從へて、共侶に聚ひ來つゝ、隨卽事の趣を、聞つゝ顯定を寬解ていふやう、那犬飼現八は、我舊臣にて罪ありしを、赦して信乃を搦捕せまく欲せしに、反

て、後に若們を鏖にせん。我を誰とか思ふらむ、里見殿の御内にて、然る者ありと知られたる、犬士の隨一、この地の防禦使、犬飼現八信道なるぞ。我身に佩たる靈玉あれば、弓箭鉄砲も中ることなく、刀劍にも傷られず。然るを若們鼠の輩、愁に虎鬚を、捋まく欲せば、同士撃に似て這奴を殺さん。いかにぞや〳〵。と罵哮りて盛實を、抱きし儘に、兜の眉庇、推仰反せて指示せば、吐嗟、と驚く寄隊の衆兵、就中白石重勝は、慌て隊の頭人と、錐布鷹裂們を招きていふやう、他を見ずや。敵の爲に、掠られたる那壯佼は、紛ふべくもあらぬ當家の權宰、齋藤左兵衞佐高實の冢子なる、齋藤兵衞太郎盛實なること疑ひなし。盛實は故ありて、舘の鍾愛大たかならぬに、今現八等を撃捕るとも、那寵臣を亡れなば、舘は怨み給ふべけれ。惴りなせそ。と解諭せば、錐布鷹裂、頭人等、諸兵に傳へて、敢動かず、車に添たる儘にして、皆睨て在りしかば、現八は然もこそ。とうち笑つゝ聲高やかに、若們知ずや、里見殿は、世に罕なるべき仁君也。又我職分は防禦使也。當の敵にあらざれば、撃もせず殺しもせず、這奴は安房へ將て還りて、我兩舘の御旨に依らん、先々。といひつゝも、頤で下知して隊の兵を、先に立して馬乘旋らし、疾犬塚に追就んとて、五十四田を投て退き去りしを、寄隊の士卒は、勇も不勇も、只這英氣に拗れて、阿容々々として、長視て居り、敢赶ふ者なかりけり。爾程に、山

犬飼現八信道は、嗣才齋藤盛實が、犬塚信乃に推破ば、亟に赶ふことを得ざりけり。爾程に、犬飼現八信道は、嗣才齋藤盛實が、犬塚信乃に推破られて、不覺に他を過らせし、恥をやこゝに思ひけん、怯れし隊兵を裝返して、猶も赶まく欲せしを、やをれ等ね。と喚かけて、馬を眞先に走せ來つ、隊兵を截めて殺立れば、盛實が隊の兵多しといへども、又現八が一千の、雄兵に撃散されて、備斑に倣りしかば、現八竟に盛實と、鎗を合せつ、一上一下と、戰ふ事久しからず。盛實已に勢究り、鎗を戞喤と撃落されて、怯むを現八衝と寄て、馬上に生拘り、肱脇に引著け、左手に抱きて動せず、信乃に力を勠せんとて、そが儘大路に出る時、寄隊の先陣重勝們は、信乃に損れたる、破車と人馬の屍骸を、雜兵等に遣棄させて、其路才に開きしかば、亦復戰車を推出して、信乃們を赶へ。といそがす程に、現八はその脇路より、咄と嘖きて見れ出る、勇士猛卒の大刀風に、當るべうもあらざりける、寄隊の士卒驚き噪ぎて、逃んとするを、白石重勝、鷹裂八九、錐布五六、怒れる聲を震立て、蓬し兵毎、小勢の敵に、然まで怕るゝことやある。早く戰車を牽かけて、捕稠て皆撃ずや。と連りに喚り罵勵せば、駢馬の車兵、御者雜兵、是に氣を得て、許多の車を、遣被遣被銕砲を、發出さん、と構るを、現八見つゝ冷笑ひて、若們いまだ是を知ずや。我方僅來ぬる路にて、生拘たる這壯佼は、是若們が頭人ならむ。今倘洒家に敵對せば、先這奴から首捩斫

に鎗を挾み、一千有餘の隊兵を將て、胡意明々地に大路を適かず、側の茂林にうち入りて、敵の戰車の後に出で、うち破らんと走する、後方に續く現八も、隊兵一千百十數名、樹柆も路の凸凹も、擇までいそぐ騎馬歩兵、後るゝ者はなきものから、信乃は眞先に馬を拔めて、夙く戰車に近づく程に、齋藤盛實其機を查して、茂林の盡處に路を橫斷る、其隊の兵二三千、出ば伐んと備へしを、信乃はうち見て毫も凝議せず、群立つ敵に馬乘入るゝ、鎗の尖頭は電光の、嵒に碎る勢ひに、從ふ士卒も死を見かへらで、踏入々々攻靡けける、刀頭鋭からぬもなければ、盛實は隊兵と倶に、憶ずも辟易して、其路颯と開けしかば、信乃が一隊は衝と走脱て、逸友們が圍れたる、數十乘なる車の後より、車上の敵を斫落し、馬を斃し車を摧く、勇士猛卒力を勠せて、手を盡したる掙きに、其一方を殺頽されて、敢近づく敵なければ、退くべき路開けにけり。當下信乃は聲高やかに、杉倉田稅、自餘の人々、無益の鬪戰すべからず、我に續け。と喚りて、隊兵を團めて、決然と、人なき鄕を立出て、人なき鄕に還るが如く、敢憚る氣色なければ、直元逸友いへばさら也、潤鷲手古内振照倶教二、兩隊の士卒この氣を得て、復生たり、と歡びの、踵を旋して退き去るを、白石重勝見るに得堪ず、錐布鷹裂と共侶に、又只戰車を推拔めて、追擊まく欲するに、目今信乃に打摧れたる、車横り人馬轉輾して、戰車自由に轔らね

がにて、倶に士卒を勵しつゝ、力を勠せて防ぎ戰ふ、程しもあらせず寄隊の先陣、白石城介重勝は、機を見て夙く取て返して、錐布鷹裂共侶に、車戰を帮助て攻んとす。登時里見の遊軍なる、田税力助逸友は、この爲體に心慌て、隊兵を拔めて直元を、援けて戰車を擊破らんとて、慓る去向の茂林の裏より、又推出す敵の戰車に、憶ず路を遮られて、一歩も拔むことを得ず、只得前なる車に逆ひて、擊退けんと角へども、又推出し推出す、車極めて多かれば、逸友は隊兵と倶に、前後左右を圍れて、出べき路はなかりけり。況や杉倉直元は、潤鷲振照二士と倶に、只其駢馬三連車に、銕壁の像く圍れて、前に中り後を拂ひ、右を遮り左に返せど、齋藤盛實修煉して、よく車を行るのみならず、車上の雄兵、御者までも、連車齊一その機に稱ふて、弓箭銕砲に透もあらせず、近づく敵をば、鎗もて殪し、嵩より蒐れば、盾に隱るゝ、進退精妙、奇兵の術に、直元が二千の軍兵、又逸友が一千の、隊の兵さへに、拉れて、面を向べきよしもなく、身は只敵の的に做りて、痍を負ふ者ぞ多かりける。有恁し程に、犬塚信乃犬飼現八は、相距ること二三町、備を建て後陣に在り。寄隊戰車の奇巧をもて、自家敗軍に及ぶべき、事の勢ひに駭然たる、信乃は、現八を招きていふやう、今直元逸友們を、救まく欲するに、路一條にて廣からねば、横鎗を入れがたかり。箇様々々に計ひてん、續き給へ。といそがしつゝ、馬上

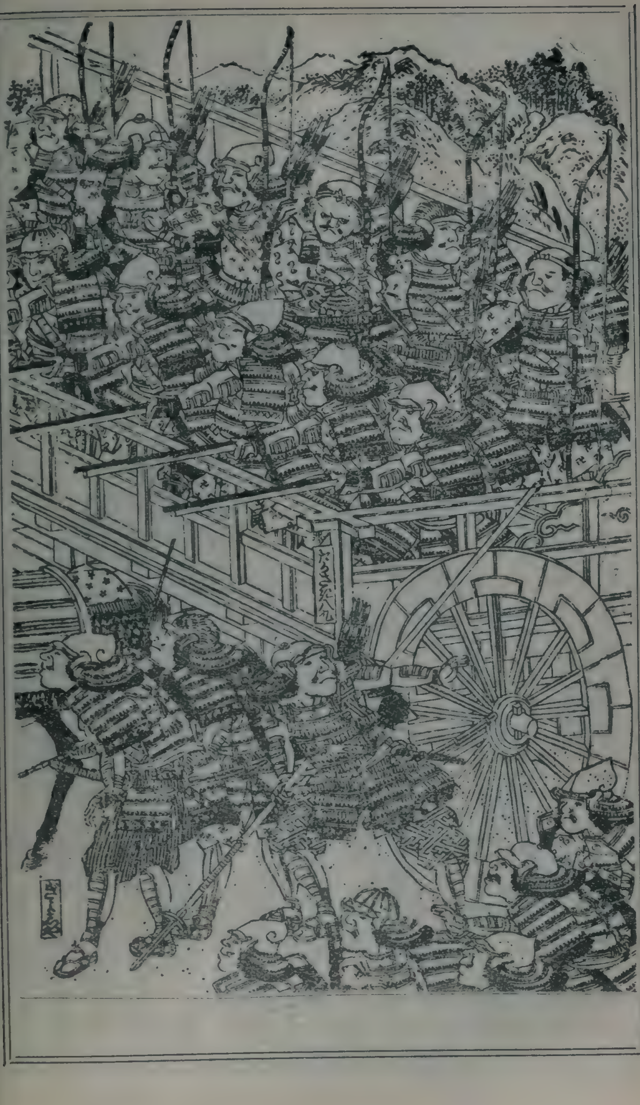
詰朝、信乃現八は、拵みて敵を逆んとて、杉倉直元を先陣として、國府臺の守城の小頭人なりける、潤鷲手子內、振照俱敎二を副として、隊の兵二千餘名の將とす。又田税逸友に、兵一千を從せて、遊軍として直元們の次に在り。信乃現八は、各一千餘名を將て、俱に後陣にぞ續きける。爾程に、葛西新驛、假名町の邊にて、兩敵夙く相臨み、迭に戰鼓をうち鳴らし、且箭を發ち、銕砲を連放ちて、挑戰ふ程しもあらせず、寄隊の先陣、白石城介重勝は、敵の小勢なるを見て、破るにかたきことやはある、と思ふ馬上に麾うち揮りて、兵每拵め。と訔獎せば、左右に從ふ小頭人、錐布五六郎、鷹裂八九郎、鎗を拈り馬を馳て、數千の隊兵共侶に、競ふて蒐る虎彪の勢、當るべくもあらざりしを、杉倉直元毫も怯まず、手子內俱敎二相共に、隊兵齊一斷合せて、陽に開けば陰に閉る、魚鱗鶴翼隊を亂さず、射れども突けども物ともせざりし、刀尖銳かりければ、寄隊は憶はず殺頽されて、一町許退くを、直元は敵赶はず、豫信乃が警あれば、馬を駐め士卒を制して、姑且息を吻く程に、去向に連る粒樹の蔭より、敵の暗號とおぼしくて、轟然として、四下に响く、銕砲の音と共に、推もて出す顯定の、准備の奇巧愆ず、所云兵馬三連車を、幾乘となく牽蒐〳〵、直元們の一隊に向ひて、弓箭銕砲透間もなく、路を塞ぎて攻寄すれば、直元手子內俱敎二們は、驚きながら今さらに、引退んはさす

陣しける。人は勇み馬は嘶く、兜の星は燦めきて、曉殘る霜に赫奕き、氷做す刀劍は、毛骨竦然寒風に、殺氣中天を掩ふめる、威勢破竹に異ならず。秦主八十餘萬の大兵、長く斷り江を渡して、東晉を呑まく欲する、那時にも似たるべし。爾程に、五十四田の陣に敵を待つ、犬塚信乃戍孝、犬飼現八信道は、夙く斥候の注進に因て、寄隊の大將顯定成氏は、總軍四萬の大兵を將て、昨日瓶蟻に著陣しぬる事も、今朝は假名町の邊まで、推出し來つべきよしも、既に其告ありしかば、信乃は隨卽現八と商量して、且直元逸友等の諸頭人に、この義を示して、信乃がいふやう、寄隊四萬五六千の大兵に、自家の士卒を比れば、僅に是什が一也。奇をもて是を破らずは、全勝を得がたかるべし。しかれども、王者の軍は、敵奇偶を做すことなし。仁人君子の敵に偶へるも、恁地ならんのみ。是我君の御本意也。左まれ右まれ中一中て、敵の剛柔巧拙を試ん。倘勝がたくば退きて、計るとも遲きにあらず。我聞ぬ、新驛假名町の間には、左右に水田あり、林原あり、路一條にて廣からねば、大軍の進退は、必不便なるべきに、寄隊其里に推出して、我を誘引まく欲するは、悄地に計る所あらん。非如鬪戰勝に乘るとも、漫に功を貪りて、必逃るを赶ふべからず。只防ぐをもて要と做さば、後に至りて全勝を得ん。先よくこの意を得給ひね。と言叮寧に警れば、直元逸友等皆承服して、其隊配にぞ從ひける。恁而這

いふやう、唐山にては今も昔も、馬に車を架て牽すれども、皇國は牛車のみにて、昔より馬を要せず。然れどもよく習すれば、我邦の馬也とて、車を牽得ざるにあらず。譬ば北狄の狗兒は、よく雪舟を牽くが如し。習ひの性になるも多かり。且馬は奔走神速にて、軍陣至用の物なるに、我馬は皆車を行るに、熟たるを、這回多く牽せたり。と解れて成氏感じて已まず。史什麽、と見かへれば、在村も倶に感服して、現未曾有なる御妙策、この名を何と呼び候や。と問へば顯定含笑て、然ばとよ。我這戰車を、肇て造り果せし折、命けて駢馬三連車とす。則是馬を駢せ車を連ねて要を成す、其議をことに表するのみ。因て我又意ふに、葛西假名町新驛の間には、或は左右に樹林繁く、或は左右に水田あり。路一條にして衡坦也、と聞ぬ。是我駢馬三連車を用るに、究竟の地方なるべし。明日は那里へ推出て、那二犬氏們を、鏖にせん。先や隊配を做すべしとて、白石重勝を先陣として、錐布五六郎、鷹裂八九郎を其隊の副とす。成氏則後陣たり。滸我の老黨横堀在村新織素行、近臣科革七郎望見一郎等是に從ふ。總大將顯定、副將憲房は、一萬五千の士卒を得て、其中央に在り。又齋藤盛實を、駢馬三連車の總轄として調煉熟得の雄兵三千五百餘騎をもて、進退宜く機に臨みて、敵を撃破れとぞ下知しける。總軍約莫四萬餘名、十二月六日の早旦に、瓶蟻より推出して、新驛假名町の間なる、曠野に造りて



顕定駢馬三連車と作る
英泉画



でも、皆是車戰を宗とせり。こゝをもて軍と云陣と云、其字車に從ふ者也。然るを秦漢よりして後は、敢亦戰車を用せず。但三國の時、諸葛亮孔明が、四輪車に乘りけるは、古風に則るに似たれども、用意戰車と同じからず。我大日本は、神代より、軍陣に車を用ひず。是を知る者なしといへども、今も那法則を推考て、戰車を作りて敵に中らば、非如堅陣鐵壁也とも、破れざることなかるべし、と思ひにければ豫より、匠に課て戰車を造らせ、悄々地に士卒に敎て、調煉已に事成りし折、憶ず當陣に臨むに及べば、我鎌倉を出る折、齋藤高實に吩咐て、件の車數百乘を、筏に組せ海に浮めて、科革浦に在せしかば、今朝我船に推續きて、漕せて當所に執寄たり。是見給へ。と誇貌に、說示しつゝ畫圖を取出て、やをら席上にうち開けば、成氏在村、素行等、滸我の君臣は殊更に、耳新しき心地しつ、膝の拔むを覺ぬまでに、齊一其畫圖を見るに、車は高三四尺にて、俗に云大八車に似たるを、三輛相連ねてもて一車とす。那が上に勾欄あり、是に相乘れる武者一十二名、其六人は前に在り、六名は則後に立り。是中央は弓手にて、左右は則銃手なり。馬六疋をもてこれを行しむ。車の左右に兩個の御者あり。鎗を挾み、鞭を執れる、人はさら也、馬も皆、薄鐵の面罩馬鎧を、透間もあらず、身に擐ける、用心等閑ならざれば、成氏並に在村等は、奇也々々。と稱讚す。當下顯定便面をもて、畫圖を指示して

を慕ひ來つ、或は去向に立迎へて、皆顯定の隊に屬しかば、甲乙士卒四萬に餘れる、勢ひ彌〻振然たり。恁而山内兵部大輔顯定は、這日先間諜兒を、箭斫河の上に遣して、國府臺の城の虚實を撈らするに、敵の大將里見義通は、東辰相後見して、國府臺に籠城したり。從ふ兵四五千なるべし。この他の防禦使犬塚信乃、犬飼現八は、杉倉直元、田税逸友們と倶に、箭斫河をうち渉して、五十四田の邊に陣したり。是も亦其隊の兵、五六千なるべしといふ、事紛れもなく聞えしかば、顯定隨卽、成氏を請招き、重勝盛實、在村等を召集へて、敵の動靜を箇樣々々と具に告て且いふやう、臆思ふにも似ざりける、這地の敵は小勢也。他等倘一致して、要害に據り、煞所を斷塞ぎ、倶に籠城して我を防がば、日に損傷ありといふとも、猶半月は扗えつべし。然るを何ぞや、今一萬の小兵を分ちて、河を渉して我を防ぐは、蟷螂の車を避けず、夏虫の火に入るに似たり、我大兵一たび蒞まば、一擧して伐破らん事、石をもて卵を、推すよりも易かるべし。爾はあれども、嘗て聞く、那二犬士等は奸雄にて、且智術ある者なり。必計る所あらん。然ばかりの利害を知ずして、漫に河をうち渉して、水を背にして我を待んや。那韓信が囊沙の術、亦思はずはあるべからず。この故に、我逆より製作したる。必勝の戎具あり。正に今是をもて、連ねて他を破るべし。我嘗唐山古昔の軍旅を思ふに、周末戰國の時ま

に議せず、沈吟じつゝ信乃がいふやう、恐れながら御曹司は、尙總角にて御座せども、御父祖に劣り給はざりける、智勇の御本性自然に知らるゝ、目今の御掟畏うも、感服仕り候ひぬ。然はいへども、寄隊はいまだ當所に到らず。然るを今佻々しく、城を離れ河を涉して、敵を逆へ給ふは、夙かるべくや候はむ。といふに現八も膝を找めて、戌孝が稟す義は、愚意も亦異ならず。臣等先前岸に、敵を待て、寄隊いで來なば、中一中て其强弱を、先試候はん。寄隊の勢ひ剛くして、鬪戰難義に候はゞ、その折にこそ御出陣を、請まつるべく候なれ。といふに辰相點頭て、義通に稟すやう、御出陣の事はしも、御掟理にをはしませども、約軍陣の進退は、豫舘の御下知あり。事皆犬氏に儘せよ。と定させ給ひしかば、權且御意を枉られて、那議に就せ給へかし。と詞穩しく諫れば、義通只得信容れて、前議に從ひ給ひしかば、大家其温順寬裕を、稱て歡ざるはなかりけり。爾程に、この地へ寄隊の兩大將、鎌倉の管領山內顯定、前關東管領足利成氏、幷に副將上杉五郎憲房は、相從ふ其隊の偏將白石城介重勝、齋藤兵衛太郎盛實、(高實の冢男)横堀史在村們と倶に、三萬五六千の軍兵を將て、十二月五日の早旦に、五十子の城をうち出つゝ、水路を千住河に溯りて、下總國葛飾郡瓶蟻の頭に造りて陣する程に、這水陸の路次にして、其地々々の野武士兇民の、勇にして名を好む者、或は迹

波を披きて岸に就く、勢ひを得て我に中らば、誰か克防ぐべき。といへば現八も倶にいふやう、約這葛飾の一郡は、當家自得の新領なるに、定正主横領して、千葉自胤に隷まくすめり。恁れば、矢斫河をうち渉して、拔みて葛西に寄隊を待つとも、敢敵地を犯すにあらず。勿論宿老(辰相をいふ)は、御曹司に從ひまつりて、當城を守り給ふべからん。我們兩個は、防禦使たれば、明日は夙めて河を渉して、拔みて敵を防ぐべくや。と議するをうち聞く直元逸友、秋季も喬梁も、皆この議を可とし稱て、倶に辰相に薦めていふやう、兩防禦使の意見、寔に其理あり。我們先鋒たらまく欲す、いかで仰付させ給へ。と請へば辰相點頭て、目今二犬士の議する所、愚意も亦相同じ。則雄兵五千をもて、二犬士の隊に隷ん。杉倉田税兩頭人は、二犬士に從ふて、倶に一陣に拔むべし。又眞間井繼橋兩生は、素より守城の頭人なれば、姑且御曹司に從ひまつりて、後の加勢たるべしと云、衆議既に定まりしを、義通君うち听て、防禦使河をうち涉して、前岸に敵を待たば、我も亦旌を拔めて、倶に後陣に備ん歟、我身幼少なればとて、犬江親兵衛には年兄なるに、這地の摠大將でありながら、敵の旗をだも見ることなく、徒阿容々々と這一城に、籠り在んは本意ならず。と怨ずる如く宣へば、辰相は、阿とばかりに、答難つゝ遽しく、信乃と現八を見かへりて、この義什麼。と意見を問ふに、二犬士も亦容易

秋季喬梁、この餘も從軍の老兵勇士、席末に侍る者多かり。登時東辰相は、二犬士に向ひていふやう、咱等昨日この地に來ぬる程に、先間諜兒をもて、敵の動靜を揣らせしに、この地に寄隊の大將は、山内顯定主と、足利成氏主にして、副將は顯定の嫡子、上杉五郎憲房是なり。相從ふ四家老の旗頭、長尾判官景春、白石城介重勝、滸我の老黨横堀史在村、新織帆太夫素行們、枚擧るにいとまあらず。そが中に景春は、いまだ來會せざれども、諸隊の軍兵三萬餘騎、日ならず五十子の城より隊分して、當城を攻伐んとすと云、風聲既に聞えたり。意ふに這國府臺の一城は、是暴河を帶にして、要害堅固なるものから、始よりして地を縮めて、籠城して敵を待べくもあらず。然ば暴河を前にして、敵の渉す央を撃んや。或は河をうち渉して、然所に因て防んや。この議什麼。と談ずれば、二犬士所て信乃がいふやう、下問誠にその所以あり。約大河を前にして、敵を防ぎ戰へば、其利あるに似たれども、治承の頼政、元暦の義仲、又承久の官軍に至るまで、宇治の大河を前にして、橋を斷ち流を負て、一霎時こそ戰ふたれ、寄隊河を渉すに及びて、攻破られずといふ者なし。今此地の暴河は、世の人坂東太郎と稱て、宇治河に優る急流なれども、今は冬の盡にて、水涸たれば、淺湍あらん。這囘も倘亦寄隊の陣に、高綱（佐々木四郎）忠綱（田原又太郎）に相似たる勇士あらば、必渉さん。他既に犀象の、

第九輯　卷之三十八

第百六十五回

一虜を挾て現八橋梁を斷つ
火猪を放て信乃戰車を燒く

却說。この時下總なる、國府臺の城に敵を俟つ、兩個の防禦使、犬塚信乃戍孝、犬飼現八信道は、東六郎辰相、杉倉武者助直元、田税力助逸友等と共侶に、義通御曹司に具しまつりて、十二月三日の未下刻、臺の城に來ぬる程に、上總下總の路次にして、鄕士鄕民の催促に後れしが、漸次に附從ふ者、こゝにも亦尠からねば、初は九千餘名なりし軍兵に、加えて一萬一二千になりにける。恁而此國府臺なる、守城の頭人、眞間井樅二郎秋季、繼橋綿四郎喬梁と喚做す者、この朝より士卒を領て、城を出て、義通君を迎まつれば、義通則二犬士、幷に辰相直元逸友等と、士卒を將て城に入て、秋季喬梁に仰する義あり。當城の軍兵四百餘名あるを、そが儘この兩頭人の隊に附て、城の衛に備らる。當晚は人馬の疾勞を憩へて、次の日軍議を定めらる。義通は只出席あるのみ、尙髫歲なるをもて、辰相萬事に後見たり。二犬士幷に直元逸友、

らずや。其言忠告に似たりといふとも、予何をか驚ん。非除予が悉壽なるも、いまだ耄に至らず、前に約束ある事を、いかにして忘るべき。鄙語に云細工は流々落成を見て、漏あるならばその時いふべし、其折譴つべし。

げて、倶に暴川を渉し來つ、其功を稱へ德を仰ぎて、敬賀する者甚多かり。始小文吾莊介が、鹽濱に在陣しける時、犬田を相識る者といへども、寄隊大軍の聞えあるをもて、其成敗を料り難て、詣來るは稀なりしに、今全勝の勢を見て、蟻兒の甘に就に似たり。一貴一賤交情を見る、孤獨多福勢同じからず。小文吾は是を見て、嗟嘆するのみ敢受けず、其已ことを得ざるには、東西を取せて還しけり。畢竟犬川犬田兩防禦使の、全勝の戰功は、既にこゝに具にしつ、又洲崎國府臺、水陸二箇所の鬪戰に、自他の勝負甚麼ぞや。开は漸次に後々の、回まで解分るを聽ねかし。

作者云、約這水陸三箇所の鬪戰の勝敗結果は、皆是十二月初の八日にて、同日の事也。然ども今詳に、是を編次るに及びて、三所を駁雜して、綴るべくもあらず。こゝをもて、初に行德口なる、二犬の戰功を具にし、畢て、次に國府臺、又其次に、洲崎の水戰を具にす。一戰終て又一戰始るにあらず、倶に是同日の事なるを、看官宜く照見るべし。蓋この水陸大兵大戰の一擧は、予が腹稿二十餘年の今に至りて、一事も遺れ漏すことなし。然るを人或は、いまだ結局大團圓まで閲せずして、第四輯に約束ある事を、予が遺れて漏せし歟とて、遙に人傳をもて、其書を作者に見せまく欲して驚しおくなどと、いはるゝは無禮な

を移さず、猛可に其諸邑なる、莊客を聚合、下知を傳へて、よく其事を致しけり。有恁りし程に、北兵先鋒の兩頭人、妻有復六、荻野井三郎は、昨日兩國河原の鬪戰に、北兵竟に敗績して、那身は倶に痍を負しかば、いかで敵の頭人に、組て刺んと思ふをもて、胡意倒れて、撃れし者の、屍骸に交りて俯て在り。既にして稲戸由充は、朝良と共に、僅に二騎、辛く命を免れて、深川のかたへ落亡せつ、士卒は撃れ、或は逃去りて、敵皆退陣して、其本意を得遂ず。この故に復六と三郎は、倶に悄地に身を起しつ、當晩深川に赴きて、由充の往方を攪るに、他は水軍の援兵有て、朝良と共侶に、載て漕去りにきといふ、其頭の民の噂を聞て、心安しとおもふにぞ、次の日悄地に津を求めて、倶に武藏へ赴きけり。この他、始より朝良に從ひし那隊の頭人、入間九郎、松山五六は、陣歿の聞えあり。又宿尻城戸介、萬戸月十字七、及朝良の近習某甲某乙等は、皆殘兵と共に逃亡て、脫棄たる甲冑、執遺しける大刀鎗のみ多くて、撃れし屍骸あるは稀也。況里見の士卒の撃れしは、什が一にて、刀瘡見も亦多からず。是も亦里見の君の、殘に克殺を去まく欲りし給ふ、俊德の致す所なるべし。と心ある人はいひけり。爾程に、這葛飾の民每は、各々簞食壺漿して、五本松なる陣營に、來賀せざるはなし。那が中に、行德鹽濱、幷に鄰里近鄉の民までも、倶に小文吾の故鄉兒と相唱へて、手に〳〵罇を齎し魚菜を捧

のかたに脱てゆく折、我又是を追蒐けしに、其兩人の敵、一人は、恩人由充なるをもて、胡意一歩の路を譲りて、那舊恩に報ひしに、他又入江の邊にて、滿呂復五郎が一隊の爲に、赶逼られて、免るべくもあらざりしに、折から他に水軍の援兵あり。其艦十艘、雄兵三四百名許、始に漕よせし一箇の快船に、朝良と由充をうち載しを、うち守りつゝ漕去にき。と一五一十を解示せば、莊介も亦那水軍は、自家の士卒なるを悟らず。聞つゝも驚嘆じて、原來敵に援兵ありて、朝良を捕得ざりしは、遺憾き事なれども、幵も亦稻戸由充に、報恩の第一義にて、我のみならず、和殿さへ、德に報ふに德をもてする、志を果せしは、實に迭の歡び也。非如朝良を漏しぬとも、寄隊の副將自胤を、和殿の隊に獲給ひしは、第一番の軍功たるべし。這里にも亦鬪戰の、顚末は、箇樣々々如此々々也とて、今朝憲重の伏兵を、重時して伐破らせし、事の始より、莊介が一隊をもて、朝良を攻伐走らせて、竟に大石憲重を、虜にしける事の終まで、遺もなく報知すれば、小文吾深く感嘆して、本意ある事とぞ稱ける。恁而當晩は陣門に、篝火を燒明し、猶且自家の刀瘡兒を勦りて、其療治等閑ならず。既にして天の明しかば、莊介小文吾は、隨即地方の村正と、故老等を召て、昨日この邊と兩國河原にて、戰死したる自家の士卒、及敵の亡骸を執集て、其四下なる、寺院に埋葬るべき旨を課するに、皆こゝろ得退りて、時

名を生拘りしに、敢一人も殺さずして、船に載せて流し遣りにき。恁れば今我も亦、然しも汝を憎しとて、首を刎るに忍んや。異日安房へ凱旋の日に、命乞して得さすべし。然でも陳ずる義ありや。と問譴られて憲重は、羞て答ることを得ず、頭を低て跪居たるを、屢問れてやうやくにいふやう、榮枯寵辱地を易て、身は囚に做りし今さらに、何事をか陳ずべき。實に昨日の非を知るに足れり、後悔の外候はず。幸ひにして首を續れば、永く徳澤を仰ぐべし。と謝するを莊介うち聞て、滿呂再太郎に向ひていふやう、汝は隊兵一百名を將て、這生口大石憲重を、今井の柵へ牽もて行て、權且那里へ捕籠措くべし。路次にして日の暮れんず、多く爇火を準備せよ。此餘の事は箇樣々々。と言詳に吩咐れば、信重則憲重を、推立せつゝ退けて、軈て隊兵一百名に、うち守らせつゝ路次をいそぎて、今井の柵へ將てゆきけり。恁而當夜四鼓の比及に、犬田小文吾は、滿呂重時、盾持朝經、大樟俊故等、三四隊の士卒を相從へて、五本松の陣營にかへり來にければ、莊介これを勞ふて、勝軍の事の趣を、諮問ふに、小文吾則、小梅の戰ひに、自胤を虜にして、今井の柵へ遣せし事、竝に澁谷柿八們を、誅戮せし顚末を告て、又いふやう、爾後又朝經俊故が、兩國河原にて、朝良主僕を追伐し時、稻戸由充の援兵あり、暫時勝負あらざりしに、由充も亦重時に、後よりして攻破られて、那身は主僕僅に二人、深川

し程に、滿呂再太郎、安西就介は、鬮に虜にしたる、大石憲重を、大床の下に牽もて來て、犬川莊介に、實檢を請ひしかば、莊介則諸士を將て、出て牀几に尻を掛て、憲重を佐と見て、石州（憲重をいふ）汝は是、鎌倉兩管領の、四家老の、其第一老にして、豐島大塚の城主なるに、年來其惡を佐けて、もて君の非を正さまく要せず。剩丁田町進、卒川菴八、籞上社平、軍木五倍二、仁田山晉五なンど喚做したる、奸虐の酷吏、讒訴の佞人をのみ親愛して、賞罰其道に違へるを、思はざりしは甚麽ぞや。我髫歲たりし時、逆旅に母を喪ひて、この身の所由なかりしかば、當時大塚の郷士たる、大塚蟇六が小厮にせられて、年來他に仕る程に、東人夫婦の讐敵を、撃得て恩義に報ひしに、汝は敢是を賞せず、反て叉那奸黨が、忠義を賊情といひ做せる、誣言を信容れて我を罪するに死刑をもてして、法場に牽れし折、幸にして我義兄弟、犬塚犬田犬飼の、救ひによりて萬死を免れ、且那寃家們を殺し得て、今日に至れる也。我儕里見殿に、未生の夙因あらずして、義兄弟等と共侶に、今番の防禦使を奉らずは、言に汝に對面して、舊怨を復す日あらんや。夫一飡の惠にも、必報ひ、睚眥の怨にも必報ふは、志士の辭せざる所にして、勇者の本意とする所也。しかれども我君里見殿は仁君也。こゝをもて、鬮に犬田小文吾が、妙見島の柵を拔きし時、汝の家臣、彦別夜叉吾と、其隊兵百十數




荘介
荘介鎗をとりて捷く且憲亘を生拘る

する者あらん。看官さへに欺れて、こゝに至りて愕然と、覺て卷を掩ふもあるべし。休題却說、犬川荘介は、この日大石憲重が、朝良を易く延さんとて、死力を竭して戰ひしを、敢又物ともせず、滿呂再太郎、安西就介、この他勇士猛卒をもて、息をも養れず攻る程に、初逃たる寄隊の頭人、宿尻城戸介、萬戸月十字七、入間九郎、松山五六、幷に憲重が一二の家臣、菅孤三布七、關口小田八、岸藻雜四郎なンど喚做す兵毎、返し合せ相拄えて、一霎時は挑戰ふものから、心後れし癖なれば、終には亦復伐破られて、或は擊れて命を殞し、或は逃亡て恥を見かへらず。既にして憲重は、千騎が一騎になるまでも、と屢士卒を罵勵して、馬上に鎗を打振々々、近づく敵を突伏せて、奮然たる老武者の、本事に中る者あらず。荘介遂に是を見て、怺ず馬を馳よせて、憲重と鎗を交へて、一上一下と術を盡す、犬士自得の刃尖に、憲重竟に爭ひ得ず、鎗を戛喱と反飛されて、大刀を拔んとせし程に、荘介透さず鎗をもて、片頰を托地と撻しかば、憲重は横ざまに、馬より撻と打墜されて、一霎時は起も得ざりしを、安西就介、滿呂再太郎、倶に遙に是を見て、飛が似くに走り來つ、折累りて犇々と、壓えて索を被にける。憲重虜に做りしかば、殘兵も皆逃亡て、こゝにも鬪戰果にけり。恁而犬川荘介は、五本松なる陣營に退きて、則犬田が勝軍して、かへり來ぬるを待んとす、方僅其報あればなり。有恁り

覘ひしに、果して八日に至りて、寄隊敗軍に及びしかば、はやく其頭を退きて、走りて兩國河原に行て見るに、こゝに架たる舫橋を守る、扇谷の雜兵は、自家の敗軍を傳聞けん、遁て一人もあらず倣りしかば、依介これに便宜を得て、軈て件の舫橋を、斷流し、又斷棄て、這首に舫一艘もあらせず、夙く深川（今はふかがはと唱ふ。周防の深川も同名なり）にかへり來て、復枯蘆の中に居り。恁而この日朝良と由充が、滿呂重時に酷く赶れて、深川に津を欲りする時、依介先快船を寄せて、件の主僕をうち載せしに、重時は依介を認らず。恁而其船澳に至る時、貝六萠三が戰艦、又枯蘆の中より漕出て、倶に朝良と由充を、うち守りつゝ將て去りしに、この時黄昏なりければ、重時は、其戰船に、東峯鰆船等が在るを認得ず、又滿呂と犬田と、隊兵等まで、この義を曉得ざりしのみならず、由充も亦朝良も、この日は、瞑昏より天結陰りて、八日の新月影見えず、波上いと暗くて、投方安定ならざれば、只是援兵の、艦なりけりと思ふのみ。其詰朝這諸船の、安房の洲崎に果るまで、身は是虜にせられしを、毫も知る由なかりけり。恁てぞ莊介と小文吾の、一報恩の義を果させて、敢其情を傷ることなく、反てこゝに別人をもて、寄隊の大將を虜にして、北兵加勢の頭人なる、由充さへに迎執りしは、軍師智玉の遠謀より出て、勝ことを千里の外に、決する手段あるにあらずは、誰か其機に先だちて、這奇を呈

且朝良由充は、援の兵船多く出來て、載て漕去りし事の赴を告しかば、朝經俊故隊兵まで、臆ず倶に嗟嘆して、由充を饒すとも、朝良を漏せしは、恨なきにあらずといひしを、重時が恁恁と、犬田の意衷を告るに及びて、大家感服したりけり。然ども、この時自家の與に、軍師犬阪毛野胤智が、豫計る所ありしを、小文吾はさら也、重時朝經俊故も、是を悟る者なかりけり。开を甚麽ぞ、と原るに、始洲崎の陣營にて、毛野が悄地に思ふやう、行徳口へ寄隊の大將、扇谷朝良、千葉自胤に相從ふ、加勢の隊長多かる中に、犬川犬田の恩人なる、稲戸津衞由充もこれあり、と聞えたり。由充倘朝良歟、自胤の隊に附られて、戰ひ利あらで共侶に、敗績に及ぶとも、犬川犬田は恩義の與に、由充を饒し落さんとて、反て朝良自胤さへ、擊漏す事のなからずや、と逆尋思をしたりしかば、則東峯萌三と、鱆船貝六郎に、計策を授けて、且雄兵三百餘名をもて、共に悄地に市河なる、犬江屋依介許遣して、件の謀計を行せしかば、萌三と貝六は、則依介に、件の機密を傳示して、倶にその事を料る程に、旣にして十二月六七日の時候に逮りて、依介は、同宿なる舵工等と倶に、豫隱し置たる、快船戰艦十艘有餘を出し來つ、是に貝六萌三と、隊兵三百餘名を分ち載て、悄地に深川の畔に至るに、共に枯蘆の中に躱れて居り。开が中に依介は、單うち乘りたる快船より出て、當晩（七日）より、敵身方の、鬪戰の光景を

を今愁に不義の功を功として、愛て譽させ給はんや。嚮に義兄弟義任も、那恩人に撞見して、旗の緒を射けるも心は同じ。我は馬を射て、人を射ず、共に是私ならぬ、一箭は猶已に勝れり。この義を思ひ給はずや。と諭せば重時感服して、及びがたし。と稱へけり。然ば是より後後まで、犬川犬田が報恩の、椿事を傳て美談とす。そが中に、識者或は評すらく、那時莊介小文吾が、倶に舊恩舊義の爲に、由充を射て殺さゞりしは、昔唐山姫周の時、衞の庾公之斯が、鄭の子濯孺子を、射ざりし事と、又江尹商陽と陳棄疾が、呉師を追ひし事に似たり。且庾公之斯は、師恩の爲に、輪を扣き金を去て、もて空箭を發ちて、子濯孺子を射ざりき。(孟子離婁の下に見えたり)こは莊介が鏃を拔棄て、由充の旗緒を射ける心操と相同じ。又工尹商陽は、只呉の雜兵三人を射て斃して、敢呉の將を射ざりき。(禮記檀弓の下に出たり)こは小文吾が由充と、朝良の馬を射て斃して、人を傷らざりしと相似たり。倶に禮あり、且義に仗る所、和漢今昔、君子の行ひ、正に符節を合する如く、一揆也とぞいへりける。間話休題。却說犬田小文吾は、この夕、滿呂重時と、其隊兵を皆相從へて、朝經俊故が、北兵に戰ひ克たる、兩國河原にかへり來ぬる程に、既にして朝經俊故は、北兵を皆殺散し、且逃るを赶棄て、河原に多く篝火を、燒せて皆共侶に、出て小文吾を迎へけり。登時小文吾は、件の兩頭人の戰功を譽て、


一歩を譲りし小文吾は
舊恩を復す


小文吾

左右をうち圍みて、造化精妙と霏々めきて、西を投てぞ漕去りける。この時日は沒果て、朧々と見えわかぬ。澳を長視る重時は、且呆れ、且遺恨に得堪ず、敵に援の軍兵多きを、我身單波を凌ぎて、赶蒐るとても甲斐やはある。已ぬる哉。と呟く折から、犬田小文吾悌順は、又稻戸由充の、安危甚麼と胸休からねば、猶重時を諭さんとて、隊兵を將て赶つゝ來にけり。當下重時は、小文吾に報るやう、在下剛才朝良に、赶近づかんとしける折、始は箇樣々々の快船あり。朝良と由充をうち載て、はやくも澳へ出せしかば、江を泅ぎて其船を、曳續さまく欲しゝに、又十箇の戰艦あり、其艦毎に援の軍兵、都ては三四百名なるべし。朝良命運かくの如く、多く援兵を得てけるに、我身に人魚の奇藥ありとも、隊兵們は然る準備なし。身單にては甲斐あらじ、と思ひかへして候ひき。と告るを小文吾うち聞て、开は遺憾しかるべけれど、大事に莅て大功あるも、七八分なるを好とす。我毎今日の鬪戰に、則寄隊の副將たる、千葉自胤を虜にしたるに、又朝良を擊捕らば、开は十二分といひつべし。物盈る時は必溢る、功多ければ、禍なきことを得ず。我は那由充に、報恩を思ふの故に、遂に朝良を擊洩せしは、君に仕へて忠ならぬ、貳あるにあらず。非如赶得て那主僕を、擊果すとも、虜に做すとも、恩に叛かば人にあらず。況や我兩舘は、其御行ひ大小となく、都て仁義にあらざることなし。然る

大刀の刃のあらん限り、敵を殺して戰歿せん。いふにや及ぶ。と相奬して、立逆へん、と身を構ぬる、折から這江の處々に、繁り立たる、枯蘆の中よりして、快船一艘忽焉と、漕出し來て水際に寄せつゝ、其篙師が喚るやう、喃御曹司に御坐ずや。御伴當も共侶に、疾この船に乘らせ給へ。敵近づきて候ぞ、やよ疾々。といそがすを、朝良と由充は、齊しく急に見かへりて、鄙語にいふ、津に船の歡びに堪ざれば、敢一句一言の、問答に遑あらず、身を跳らせつゝ共侶に、件の船に乘徙れば、篙師棹を拿直して、はやく澳へぞ漕出す。程しもあらせず重時は、衆卒に先だちて、馬を馳つゝ赶もて來つゝ、既に水際に屆る時、那船は漕辟れて、及ぶべくもあらざれば、續く隊兵を見かへりて、那見よ敵は脫れたれども、我豫より、人魚の膏油を、多く身に塗たれば、この江を泅ぎて赶とても、敢凍ず溺るゝことなし。料るに敵は篙師と、共に才に三人のみ、波を潛りて那船を、歇めて那奴們を虜にせん。いでいで。といひつゝも、馬より閃りと下立て、鎧の袖と吊腿を、解捨んとて慌る程に、又見る這江の頭なる、處々の枯蘆の、中よりして、突然と漕もて出す、戰艦十艘許、其艦毎に、擐甲たる、武者三四十名乘たれば、都ては三四百個の軍兵あり。其舷に建たる盾は、遮瀾の板より繁く、波に晃く鎗鋒眉尖刀は、刺昇る月の影に似たり。然ば件の艦なる士卒們は、皆朝良由充の、乘たる快船の、前後

馬は額を射られて、主共侶に轉輾べば、由充驚き立よりて、扶けてやをら掖起せば、幸にして恙もあらず。朝良は且羞て、疼痛を忍びて立にけり。當下犬田小文吾は、從ふ隊兵を見かへりて、我馬疲勞れぬ、箭も亦盡たり。且窮寇は逐ふべからず、汝等一霎時憩ずや。といふ詞いまだ訖らず、忽地後方に騎馬武者あり、是則別人ならず、滿呂復五郎重時也。當下重時聲高やかに答るやう、犬田主犬田主、和君は今憖に、那舊恩に覊されて、こゝに用捨の心ありとも、咱等に任しね、代りて赶ん。去向路なき江畔にて、手に入る敵の敗將を、見捨ていなするよしあらんや。昔は昔今は今、恩も情も時にこそ依らめ。我生拘るを見給へ。と嘈きつ後れし隊兵の、聚ふを遲しと馬に拍れて、驀直に赶蒐れば、小文吾は、吁嗟。とばかりに、喚禁れども听ざりけり。然ばこの時重時は、既に北兵們に戰ひ克て、猶朝良を赶んとて、則こゝに逸早く其隊兵を將て、目今已に來ることを得て、犬田が意衷を猜せしかば、代りて朝良を追ふ也けり。爾程に、稻戶由充は、犬田が仁義に再生きて、朝良を扶掖きて、ゆくこといまだ遠からず、亦復一隊の敵兵の、我を追蒐來ぬるあり。房總防禦使後陣の隊長、滿呂復五郎重時こゝに在り、返せ返せ。と喚りたる、其兵約莫八九百名、陡然として赶逼る、勢ひ猛く見えしかば、朝良と由充は、目を注せつゝ嗟嘆して、稍龍尾を免れ來て、亦這虎腮に逢へり。今はしも是まで也、

ながら、主僕疲れし馬に任せて、那里へとて敗落給ふ。开方に路はなき者を、返して勝負を決しね。と喚り〳〵赶來ねれば、吐嗟とばかりうち驚き、見かへる朝良と共侶に、稲戸津衛由充は、馬を仡轔哩と乗旋らして、遙に小文吾に向ひていふやう、絕て久しき犬田生、それとは知るや我は是、北越の由充也。我今和殿を敵に取りて、這里にて戰歿せん事は、素より望む所なれども、爭何せん、偶再度の危窮を拯ふて、俱しまゐらせし這御曹司（朝良をいふ）は、我箙刀自御前の、外孫なるに、人もこそあれ、和殿の爲に、我身と俱に、蜻蜓の、命空しくなり給はゞ、我舊恩は倒に、今日の仇に做れるのみ。是豈自他の本意ならんや。和殿那義を忘れずは、いかで一步を讓らずや。と請ふを小文吾うち聞て、馬を駐めて答るやう、开はいはるゝまでもあらず、往日犬川莊介は、報恩三舍を避しと聞ぬ。我羨し所也。しかるをこゝに便宜を得たるに、仇もて恩に報んや。曩に必死の厄を思へば、今我防禦使の大任は、那再生の惠に在り、則和殿の賜也。しかはあれども今日の鬪戰は、寡君の大事に與れり。我私の恩義をもて、何でふ敵の大將を、赶つゝ伐たで已よしあらんや。いで〳〵。といひつゝも、箙に殘りし二條の、箭を拿りやをら弓に刺ふて、能彎固めて骠と射る。矢局錯ず由充の、乘たる馬は、脚を射られて、嘶きながら撻と伏し、主は閃りと下立ける、程しもあらず又二の箭に、朝良の

石憲重以下の敵に、戰ひ既に克しかば、又朝良を追伐んとて、隊兵九百を從へて、尋ねてこの邊に來にけるに、折から朝經俊故が隊兵をもて、稻戸津衛由充と、鬪戰正に闌なるを、適に見つゝ左右なく捄まず、馬を間道へ乘走らせて、由充の陣の後より、矢丸を飛して擊亂す、破竹の勢ひ急なりければ、北兵是に驚き慌て、後を防げば、前より攻られ、前に中れば後より破らるゝ、前後の敵に度を喪ひて、多くは河へ追墜され、或は痍を負ひ命を殞す、亂軍の中に身を躲して、逃去りしも亦尠からねば、由充憮然と嗟嘆して、我始より這敗軍を、思ざるにあらざれば、今陣歿は覺期の上也。然ばとて死をいそがんや。我偶この君に俱しながら、竟に拯ひ果さずは、異日我大刀自御前の、さこそ歎かせ給ふらめ。疾この處を退きて、津を求るにしくことあらじ、と思ふ心を如此々々。と朝良に告げ、惴るを諫めて、目今妻有復六と、荻野井三郎が、殘兵をもて立直して、敵を防ぎて戰ふ程に、由充は心ならずも、朝良に俱して、只この二騎のみ、河原に添ひつゝ寇くも、津を尋て落てゆく、其路いまだ幾ならず、東のかたより忽焉と、又赶來ぬる一隊の敵あり、是則別人ならず、犬田小文吾悌順也。雄兵約千二三百名、士卒に先だつ馬を走せて、近づく隨に聲高く、那里なるは寄隊の大將、朝良御曹司にぞあらんずらむ。恁云我は、里見の防禦使、犬田小文吾金碗悌順なり。正なくも、敵に背を見せ

る、勢ひ宛餓たる虎彪の、兎に逢るに異ならねば、朝良主僕驚きながら、免るべきにあらざれば、只戰歿と思ひ決めて、馬を其方に推向て、寄來る敵を待つ程に、忽地東のかた、相距ること、二三町許なる、田中の茂林の裏よりして、顯れ出る一隊の軍兵、こも亦一千五百許、其隊の將の騎馬の頭に、颯と推建る旌に、矢筈の花號ありて、北越片貝軍代、稲戸津衞由充と寫せし文字見えしかば、朝良主僕含笑て、又活たりとて歡びの心が倶に勇みける。然ば朝經も亦俊故も、遙にこの旌旗の文字を讀得て、他は是豫卒く、犬川犬田の恩人也。遮莫今はしも、我私の遭際ならぬ、君の爲なる這闘戰に、由充也とて饒さんや。兵每戕め。と競ふて蒐れば、由充の先鋒の頭人、妻有復六荻野井三郎、倶に隊兵を相戕めて、刃尖より火出るまで、入亂れてぞ戰ひける。登時稲戸由充は、馬上に聲をふり立て、やよや扇谷の人々にものまうさん。在下思ふよしあれば、權且這頭に退陣して、風寒の疾病を養ひしに、果して危窮の御役に、逢つ事を得たる也。辰巳の河邊には船あらん、今這敵をば咱等に任して、疾御曹司(朝良をいふ)に倶しまつり、深川の海畔へ赴きて、船を求めて渡させ給へ。やよとく〳〵。と叫れども朝良は今更に、捨ていなんはさすがにて、いかでかは然る僻事をせん。兵每續け。と馬を戕めて、由充の陣中に、馳入りつゝ力を勠して、其闘戰をぞ資助ける。浩處に滿呂復五郎重時は、大

り、揉合せつゝ攻たりける。是にぞ朝良憲重は、士卒多く落亡て、颱過る杪の像く、隊疎落に做りしかば、朝良は辛くして、一方を殺披きて、兩國河を指て逃走るを、荘介は猶脱さじとて、滿呂安西等を先に拔めて、拄る敵を伐つ程に、初逃たる寄隊の伏兵、宿尻城戸介建隆は、其隊兵一千餘名と共侶に、この時やうやく返し來つ、先度の恥を、雪んとや思ひけん、憲重の隊に加りて、扶けて倶に戰ひけり。是に依りて氣力を得たる、大石憲重、入間九郎、松山五六、萬戸月十字七等は、倶に朝良を延さんとて、猶殘兵を奬して、齊一死力を竭したる、その間に寄隊の大將、五郎丸朝良は、纔に從ふ近習八九名を、騎馬の左右に相立せて、落て兩國河原に來にけるに、甚なる野心の者の所爲にや、架たる船橋は、斷流されて、船一艘もあらずなりしかば、朝良は近習と倶に、こは什麽。とばかりに、呆れて馬を駐めつゝ、四下を遙に見かへれば、淺草河の方よりして、二隊の軍兵出來れり。是則別人ならず、犬田が先鋒の兩頭人盾持傑杖朝經と、大樟村主俊故也。既に小梅を退陣の中途にて、又這寄隊敗軍の、風聲早く聞えしかば、落ゆく敵を漏さじとて、路を料りて今この河原へ、連りに馬を走らする、其兵一千四五百許、倶に前面をうち見るに、兩國の河邊に主僕とおぼしき、騎馬と歩立の武者八九名、渉を求めてありしかば、他は必敗軍の落武者に疑ひなし。好物得つ。と隊兵を拔めて、驀直に赶逼

立々々、那里までもと赶ふたりける。登時滿呂重時は、走る寄隊に目も遣らず、九百の士卒を一度に興して、咄と嘯きて左の茂林へ、三七二十一に稠人々々、連放つ銕砲の、透もあらせず駈立れば、目今顯れ出んとしたる、寄隊の伏兵不意を打れて、こは什麼、とばかりに、驚諤ぎ亂れ走りて、敢戰ふ擬勢なく、或は敵の火銃に撃仆され、或は樹根に跪輾びて、己が刀劍に身を傷る。然ば伏兵の頭人たる、宿尻城戸介建隆は己が名に負ふ不覺にて、逃て大路に出しかば、里見の先鋒に撞見して、前後の敵に中るに由なく、いよ〱亂れて逃走るを、復五郎重時は、隊兵を駈て赶ふ程に、寄隊の大將朝良が犬川荘介と挑戰ふ、その後に出にけり。爾程に朝良憲重は、謀りし伏兵合期せざれば、始は佯りの敗北も、竟に實の敗れになりて、既に危かりけるを、憲重才に裝直して、敵を手づから突伏せ〱、這里を先途と戰ふ程に、朝良も倶に手を盡して、馬を東西に馳融し、又南北に走らせて、近づく敵を射て仆せば、近習の弱輩有名の者、倶に敵の箭面に、立塞りつゝ、主を佐けて、命を涯に戰へども、敵は名高る犬士の一人、文武兼備の防禦使に、誰かよく雄飛せん。主客の勢ひ地を易て、寄隊は防ぎ難たる折から、滿呂復五郎重時は、敵の伏兵を赶蒐て、樹間立潛き、直推に、件の茂林より捷徑を、走りて早く寄隊の陣の、後の方に出しかば、逃る伏兵を赶捨て、九百有餘の隊兵をもて、疲れし寄隊の背よ

右の茂林には、繁鳴く鳥の聲聞ゆるに、左の茂林には、禽翔らず、今熟視れば、殺氣あるに似たり。意に、必是左の方には、敵の伏兵あるならん。然ば今日の闘箭に、寄隊佯て逃走らば、我みづから赶撃ん。和殿は逃る敵に拘はで、左の茂林を衝ねかし。必獲あるべけれ。と諭せば重時こゝろ得感じて、隊兵八九百を引纒て、胡意左に隊へけり。爾程に、寄隊の總大將扇谷朝良は、この朝副將千葉自胤に、墨田河なる敵を撃拂せんとて、一萬餘騎を分ち授けて行しめしに、然らでもみじかき冬日なれば、是等の軍議に時移りて、既に巳牌になりしかば、朝良心焦燥て、聞るが如く里見の隊に、千葉孝胤加勢して、この地の民さへ我に叛かば、事の難義になりぬべし。敵に加勢の附ぬ間に、夙く犬士を撃捕れとて、先鋒の頭人入間九郎佑啓と、松山五六郎時永、并に萬戸月十字七行益等に、下知して諸隊を扱めけり。憑而佑啓時永行益は、五本松に推寄て、箭丸を飛し敵を亂して、鎗を入れんと欲するに、犬川が先鋒の頭人、滿呂再太郎、安西就介は、少年なれども、噪がず慌ず、倶に義任の敎を守りて、隊兵を勵す進退賢しく、閉ては開き、開けば閉る、諸葛が八陣鞍馬の八流、學ざれども得たるが如く、其機に稱ふのみならず、老兵勇士是を帮助て、連りに挑戰ひしを、寄隊は猶も誘引んとて、豫憲重が謀りし隨に、故意と敗れて逃走れば、信重景重、いへばさらなり、荘介も亦推續きて、諸勢齊一蒐

隨卽二挺の轎子を、雜兵八名に舁せつゝ、且隊兵に守せて、今井の柵へいそぎけり。恁ても小文吾は、尙この寺の門前に在り、軈て役僧を召よせて、寺號を問へば、役僧答て、當山は則禪宗にて、他生山一樹寺といふといへり。小文吾聞て、しからんには、憑むべき一義あり、我は里見の防禦副使、犬田小文吾悌順是也。約莫今日の鬪戰に、敵は戰歿の者多くあり。自家にも傷損なきにあらず、倶に是悼むべし。和僧この義を住持に傳へて、這地方の夫役に課て、件の屍骸を當山に、聚合て葬り給はるべし。この義は住持に面談すべく、且地方の村正を召よせて、必課すべき該なれども、大敵なほ在陣しぬれば、去向をいそがざることを得ず、宜通達を憑むのみ。且件の埋葬の、諸雜費は異日の沙汰に在ん。この義もこゝ得候へかし。といひつゝ軈て墨斗の筆を、染つゝ則證文一通を、手ばやく寫て取せてぞ、卒とばかりに、凳兒を放ちて、牽寄する馬にうち乘れば、朝經俊故、以下の從兵、列を正して齊々と、去向は更に犬川を、資て亦朝良を、伐破らんとていそぐ程、勇ざる者なかりける。話分兩頭。この日、犬川莊介義任は、五千の士卒を三隊に分て、尙五本松の陣に在り。既に朝日の昇る時候、一町許推出て、寄來つべき敵を待つ程に、莊介は馬上より、前面を東西と瞻仰て、滿呂重時を召ていふやう、和殿はいまだ心屬かずや、去向の左右在る茂林は、是一虛一實也。何となれば、

りしに、馬加大記常武が、媢嫉奸詐の故をもて、身は只籠中の禽の像く、他が別亭に禁錮せられて、楚囚の怨に堪ずありしに、登時はいまだ見も知ざりける、同因同果の義兄弟、犬阪毛野胤智が、復讐の便宜を得て、倶に那里を脱れ去て、過世ありける里見殿に、徴れていまだ久しからず、然而今日に至れる也。恁れば今我私の、再會に候はゞ、和君を悄地に石濱へ、還しまゐらすべけれども、いかにせん、防禦の大任、這躬に在り。然ば輕き情義の爲に、重き君命を虚くやはせん。權且安房へ倶しまゐらすべし。君は我に一介の、舊恩あるにあらねども、何でふ情なくものせんや。況寡君里見殿は仁者也。必しも賓客の、禮をもて迎らるべし。この義御心易かりてん。と理義明々地に慰れば、自胤いよ〳〵羞慚みて、惘然たること半晌許、やうやくに答るやう、言るゝ趣、寔に爾也。我一方の將として、逆徒の辱に逢りける、菲德を思へば今さらに、得死ざるを怨と做すのみ。命運の致す所、左にも右にも計れよ。といひつつ嗟嘆に堪ざりけり。當下又小文吾は、士卒に下知して、寺僧に請はして、轎子一挺を借拿て、則是に自胤と、胤久を扶乘せて、却良于を召ていふやう、和殿はこの君臣二名を、今井の柵に將て行て、士卒に宜く守らすべし。胤久は深痍也、那里に至らば、醫師を招き、痍を縫して、且療治等閑にすべからず。這餘の事は箇樣々々。と遺もなく宣示せば、良于都てこゝろ得果て、

は、其徒と共侶に慌し聲をふり立て、我們何等の罪あらんや。欲する所は、里見殿へ、反忠して、我大將を、生拘りて進らせたれば、今日の軍功第一ならんに、非如然ばかりの賞祿はあらずとも、搦捕らるゝ事かは。といはせも果ず小文吾は、睨まへたる聲高やかに、やをれ、這白徒大胆也。若們は、相馬郡領將常の從兵ならずや。我聞相馬將常は、自胤主の親族にて、則千葉の家臣也。若們是に仕へなば、自胤主の陪臣也。縱自胤主不仁にして、恨しく思ふとも、この戰場より身を免れて、故主將常の往方を尋ねなば、そは切てもの事ならんに、今其軍敗るるに及びて、情なくも這君を、犯して功を賣まくしぬるは、是弑逆に異ならず。傳に云ずや、君は君たらずといへども、臣は以臣たらずはあるべからず、父は父たらずといふとも、子は以子たらずはあるべからず。抑我君里見殿は、仁義を旨とし給へば、我們も殺伐を、敢好むにあらねども、倘是をしも忍びなば、何事をか忍ざらん。兵每はやく其奴們を、牽出して首を刎よ。と言苛高く下知すれば、良于の隊兵等、承りぬ。と應つゝ、足脫と其徒と、六名を牽退け、且推竝べて、則皆其首を刎て、是を自胤にぞ見せにける。當下犬田小文吾は、自胤に被たる索を、手親遽しく解捨て、恭しく上坐に、推薦めつゝ跪坐ていふやう、思ざりける今日の見參、傴れば、六稔の昔になりぬ。在下浮浪たりし時、淺草野路の頭にて、料らず邂逅し奉

く索を被にけり。この時犬田小文吾悌順は、思ひの随なる勝軍して、兵火も既に滅しかば、小梅の道場の門前に、旌旗騎旐を建させて、士卒の聚合を待程に、盾持朝經と大樟俊故は、千葉の先鋒の頭人　引船綱一郎師範を、相撃にしたれども、殺伐は已ことを得ざるのみ、舘の御本意にあらざればとて、首實檢を欲せず。又登桐良于も、千葉の兵頭、兩三名を射て落せしかども、开が随にして、首級を拿ず、反て那原播磨介胤久が、十四五箇所の深痍を負ふて、枯蘆の中に仆れて在りしを、心ともなく見出しゝとて、そが儘戸盾に乘せ、雜兵に舁せて随即這里に將て來つゝ、この義を犬田に告しかば、小文吾は、胤久の忠戰を憐みて、准備の膏藥を出し與へて、其刀瘡を包ませなどす。浩處に、澁谷柹八郎足脱は、其徒五六名と共侶に、自胤を生拘りて、そが儘こゝに牽もて來つ、則事の趣を、犬田小文吾に愬るやう、己們は、相馬將常の殘兵なりし事、慥々也。然れば自胤の、亂政非法を怨る故に、反忠を仕りぬ。其義は亦箇樣々々。と言詳に諛告て、倶に恩賞を乞ひしかば、小文吾听つゝ且歡び、且怒に堪ねども、先朝經に、自胤を受捕せて、革裲の上に坐らせつ、佗と良于を見かへりて、這足脱們は逆賊也。漏さず搦捕りねといふ、激しき指揮に良于は、應も果ず我隊兵と、倶に突然と身を起して、駭譟ぐ足脱們に、走蒐りつ打居て、一人も漏さず結柤りけり。登時澁谷柹八郎足脱

なりける、澁谷柹八郎足脫們百十數名は、この旦、禁獄を赦されて、當陣に駈入られたれども、猶自胤を恨みしかば、始よりして精戰せず、豫其徒と、悄々地に商量するやう、千葉殿血氣の勇に誇りて、敗軍の士卒を饒さず。この故に將常主は、本陣へ得還らで、夙く逐電し給ひしを、我們は知ずして、鈍くも御陣にかへり來て、慘刻く禁獄せられしに、却猛可に赦されて、今日の役に從へども、倘又負なば、向腹立れて、必しも我每の、首を刎るにぞあらんずらん。闘戰不の字になるならば、逃て他鄕へ走んず、と示し合せてありけるに、既に敗軍に及びしかば、多くは夙く逃亡て、敵の放ちし火に裹れず、只柹八足脫と、其徒五六名は、後れて兵火に路去りあへず、せん術なければ風脇なる、樹立の蔭に濡藁被ぎて、敵の退くを待て處り。爾程に千葉介自胤は、既に敗軍に逮びしより、身に從ふ近臣すら、四零八落に做りしかば、免れがたしと思決めて、近づく敵を幾名歟、殺拂殺脫て、小阜き處に馬乘捨て、腹を斫ん、と座を占る、背に張ふ澁谷足脫、こは奇貨と含笑つゝ、其徒五六名と、呫き呫く火速の逆心、先や這敗將を、我生拘りて、里見へ降りて、功を賣んと計較つ、諜合せて近づくを、得知ざりける自胤は、鎧を草褥に脫棄つゝ、短刀晃りと拔持て、肚へ突立んとせし程しもあらせず、足脫等は吐嗟とばかりに、咄と寄來て組禁て、刃を奪ひつ推伏せて、折累りつゝ兩手を綟りて、緊し




小文吾
小文吾小梅に自衛を破る

種の涯り射て斃せども、敵は視に餘る大勢なれば、朝經も俊故も、其刃尖に挑難て、竟に總頽に倣らんとす。浩處に里見の伏兵、三匝田の西の方、一叢繁き枯蘆の中よりして、忽焉と連放つ、火銃の音夥しく、千葉の士卒を幾名歟、撃仆し撃白ませて、見れ出る其隊の頭人、登桐山八郎良于は、十百に近き雄兵を、挵めて自胤の背より咄と噇きて競ひ蒐れば、多勢も今さら負むに足らざる、千葉は前後の敵に攙れて、自胤も師範も、齊しく撥と辟き靡きて、拄ゆべくもあらざりしを、後陣に續きし原胤久、恁と見るより隊兵を挵めて、鉄砲を放蒐々々、勝誇りたる敵を撃散せば、自胤も師範も亦この新隊に勢ひを得て、前後の敵に息をも養れず、短兵急に戰ふ程に、又忽焉と左右なる、枯蘆の中に猛火起りて、煙の裏より顯れ出るは、是則別人ならず、犬田小文吾悌順なり。一千有餘の隊兵をもて、胤久が隊の眞中を、縱横無㝵に攻破る、一人當千向ふに前なき、武勇萬騎に抜萃して、人なき境に入るごとく、瞬息間に縻頽せば、又良于も、朝經俊故も、士卒齊一勇を奮ふて、克戰ざる者なきに、朝風酷く吹暴れて、樹ともいはず、草ともいはず、猛火限なく燃廣がりて、逃る寄隊の路を斷つ、火花那隊に落蒐れば、千葉の士卒は度を失ひて、或は撃れて頭顱を喪ひ、或は燒れて斃り仆れ、然らぬははやく落亡て、胤久も師範も、亂軍の中に撃れし歟、是を知る者なかりけり。爾が中に、相馬將常が殘兵

これを二隊に分ちて、原胤久を後陣とす。恁而千葉介自胤は、一萬有餘の士卒を將て、みづから先陣に馬を抶めつゝ、柳島を投ていそぐ程に、里見方なる加入の隊長盾持傔杖朝經、大樟村主俊故は昨日犬川莊介の、計策を受けしより、この朝二隊の兵一千四五百名を從へて、墨田河原に造るべしとて、小梅三匝田の邊に來にける時、自胤迥にこれを見て、他は必里見の奴們が、墨田河をうち渉して、我城を攻んとて來ぬるならん。然るに敵は小勢也、駈破りて鏖にせん。兵每いそげ。と鞭をもて、指示しつゝ馬を走らすれば、從ふ騎馬も步武者も、皆後れじとうち向ふ、其勢ひ極めて急也。この時朝經俊故は、逆期したる事なれば、敵の近づくを見かへりて、今來ぬる敵の旌表に、月星の花號あれば、問はでもしるき千葉也けり。犬川主と計る所毫も錯はず這圖に入れり。兵每備を疾立よ。と喚りつ共侶に、敵を逆へて、銃丸を飛し、箭を射出して寄せ立ず、間を透して擊んとす。當下千葉自胤の先鋒の頭人、引船綱一郎師範は、その隊の兵一千餘名を、魚鱗に備へ、盾を被せて、射れども突けども物ともせず、競ふて蒐る激波の勢ひ、當るべくもあらざるに、自胤も亦推續きて、馬上に麾をうち揮り〳〵、先度の恥を今この時に、雪めずは何をか待ん。抶め〳〵。と烈しき下知に、從ふ士卒五六千、各先を爭ふて、驀直に推蒐るを、朝經と俊故は、深田を前にし、茂林を後にして、敵の脚を立させず、矢

順は、柳島より墨田川をうち渉して、石濱を攻討んとす。又莊介義任は、五千の雄兵を領て、尙五本松に在り。但是のみならず、這地の民皆里見に從ひて、二犬士の隊に附ん、と欲する者尠からず。又千葉孝胤主も、里見に諜し合されて、日ならず出陣しぬるといふ、土民の巷談右の如し。敵其加勢を得ざる間に、夙く伐破り給はずは、難義に及ばせ給はんと云、其言孰も紛れなければ、朝良憲重驚きて、さてもさても。とばかりに、軈て軍使を走らせて、自胤に恁と告れば、自胤も亦駭慌て、みづから朝良の陣營に來て談ずるやう、聞くが如きは敵の軍配、將に難義に及んとす。石濱の城には、我宅眷あり、且幼少の兒子さへ在るに、倘萬一の事あらば、後悔臍を噬むとも及ばじ。孝胤は風聲のみ、いまだ這地に出陣せず。この地鄕士兇民等の、いまだ那隊に加らざる其間に、我等柳島にうち向ふて、那里の敵を伐破らん。然れども我隊兵は多からず。加勢の士卒を借し給ひね。と詞急迫しく請求れば、朝良憲重異議もなく、しかるべし。と答つゝ、隨即扇谷の兵頭、引船綱一郎師範を頭人として、雄兵七千名を授るに、自胤は、倘一人も多からむことを欲りして、曩に陣中に囚措たる、相馬郡領將常の隊兵、澁谷柹八郎足脫等、百十數名を赦して、そをしも從へんとて請ひしかば、朝良則饒しにけり。是等に自胤の隊兵と、加勢の野武士、上水和四郎、赤熊如牛太の遺兵と共に、無慮一萬餘名也。自胤

聞て、石見が意見寔に爾也。明日は是十二月八日になりぬ。我老舘（定正をいふ）水路より、安房の稻村の城を攻捕るべし、と豫より議し給ひし、約束の日に至れり。然るを這里には纔なる、小敵を破難て、水陸の鬪戰合期せずは、異日我何をもて、老舘に見參せんや。明日は必我先陣して、那二犬士の首を得つべし。宜く隊配を定めよ。といふに憲重再議に及ばず、承り候ひぬ。敵は大勢ならずといへども、猶小心にしくことなし。今宵先間諜兒を、那這へ遣して、敵の虛實を撈らすべく、且明日は奇兵をもて、二犬士を生拘り候はん。其隊配は箇樣〳〵、如此々々にもや仕らん。といへば朝良頷きて、軈て其議に任せけり。恁而其詰朝寄隊の摠大將扇谷五郎丸朝良は、みづから先陣たらんとて、兵頭入間九郎佑啓、松山五六郎尙永を、先鋒の頭人にして。且萬戶月十字七行益を副とす。又宿尻城戶介建隆に、雄兵一千を從せて、五本松の這方なる、茂林中に埋伏して、鬪戰闌ならん時、橫鎗を入れよとて、是をば諸兵に先だてゝ、其夜中に出し遣りけり。この他は、千葉介自胤、原胤久を後陣として、朝良憲重先陣たり。摠軍二萬五千餘騎、旣にして、十二月八日の朝未明に、人馬を繰出さんとしぬる時、昨夕大石憲重が、敵の虛實を撈れとて遣せし、間諜兒等がかへり來て、報るを听くに、里見の二犬士義任悌順は、反て千葉殿の、石濱の城を捕んとて、一萬餘騎を二隊に分ちて、小文吾悌

其隊の軍兵を將て、明日は早天に墨田川へ赴きて、渉まくする勢ひを張るべし。其計策は箇樣箇樣。と悄やかに解示せば、小文吾も倶にいふよう、我妙見島の柵を守せたる士卒は、三四百名あり。今は那里に要なければ、那柵は速に、皆火を放ち燒却て、其兵毎をもて、今井の柵を守すべし。爾すれば、今まで今井の柵に、在る所の軍兵は、又朝經俊故に從せて、墨田河畔に向ふに足るべし。其を三四百名、分ちて和殿の隊に加へよ。然らば和殿の隊兵は、八九百名になりぬべし。只神速を至妙とす、こゝろ得てよ。と急せば、良于は忻然と、言承をしつ退きて、從ふ隊兵を待に及ず、各足に信せよ。と云捨て騎馬に鞭を鳴して、今井の柵へぞ走らせける。爾程に、寄隊は酷く敗績せし折、稍南本所に旗を建て、散失ける士卒を待つに、幾程もなく聚合しかば、軍兵敢初に劣らず。姑且英氣を養ひたる、其次の日（十二月七日）兩大將朝良自胤は、即便憲重胤久等の、老黨兵頭を聚合て、再戰の意見を問ふに、大石憲重がいふやう、言憚りなきに候はねども、約莫昨日の闘戰は、千葉殿自家の多勢なると、上水赤熊の勁勇を負み給ひし、由斷よりして敗軍に及べり。然りけれども猶幸ひに、士卒に傷損罕なれは、敗れたるのみ故の故し。必明日の闘戰には、當家先陣に扨み給へ。先度の恥を雪ん事、易かるべくや候はん。と得たり顔に論ずれば、自胤は恥たる色にて、頭を低て默然たり。朝良これをうち

の人通て愆を、飾らぬは稀なるに、愆ならぬ愆を、愆としてみづから貶せる、心操こそ憑しけれ。意ふに犬田が今日の擧動は、匹夫の勇と知りながら、那便宜をもて犬川に、正將の上座を、返さんとての所行なるべし。と喟々感ずれば、重時いよ〳〵敬服して、登桐の精評も、多く得がたき巵言也。當れり〳〵。とぞ稱へける。間話休題。恁而この次の日（十二月七日）の朝早天に、犬川莊介は、犬田小文吾と倶に、五本松の陣營に在り。先斥候を遣して、敵の止る處を知まくするに、姑且して其斥候、馬を走らせかへり來て、寄隊は兩國河を背にして、南本所に陣したり。其軍兵初に劣らず、猶二萬四五千も候はん。と報るを莊助うち聞て、亦小文吾に談ずる義あり。言既に訖て、卽便登桐山八郎、滿呂復五郎等の、諸士を召聚ていふやう、寄隊は昨日の戰ひに、痛く敗績しぬれども、多く士卒を喪ねば、倘掎角の勢ひを張るべし。計るに寄隊は兩大將にて、二萬五六千の大兵あり。自家を他に比れば、三分にしてその一にだも、足るべくもあらずかし。夫小兵をもて大敵を、破らまく欲するは、奇を出すにしくことなし。敵は一日人馬を息へて、明日は必推寄來つべし。然ば明日の戰ひには、必寄隊の軍兵を、分ちて合期ならざらしめて、自胤朝良を擒にすべし。登桐生は、隊兵五百名を從へて、今より今井の柵へかへり行て、那里の頭人、朝經俊故に我計畧を相傳へて、各

殿殺戮の手を禁め得ず、且逃る將衡を赶もて行て、寄隊の大軍近づきけるを、思はざりしを失として、みづから貶して副將の席に、就給ひしを禁め難つゝ、我身只得今までは、正使の上坐を汚せしに、我も亦今日の闘戰に、危殆を見かへらで、且殺戮を事とせし、愆は和殿に倍て、漫に舘の御本意に、背きまつりし者に似たり。這失をもて那失に、易て今より防禦使の、上坐を返しまゐらせん。いざ〳〵。と推薦めて、其身は又故のごとく、副將の席に就きしかば、荘介は云云と、一霎時こそ推辭たれ、理の當然に爭難て、僅に那意に儘せてぞ、又立替りて正使に做りける、謙遜辭讓、義あり禮あり、人の及ぬ這美事を、感ぜぬ者なんなかりける。开が中に登桐良于は、悄地に滿呂重時と、這二犬士を評すらく、犬田は多力、諸犬に勝りて、且武勇は餘りあれども、智に足らざる所あり。又犬川は、智計あり、武勇は犬田に伯仲すれども、膂力は及ぶべくもあらず。舘は人を知り給ふ、良將に御座せば、田と川との二犬をもて、正副の二將に做し給ひしは、那餘りある所をもて、這足ざる所を補ふ、御軍配なりけんを、那二犬士は、みづから居らず、迭に其小過をもて、或は正將の席を讓り、或は正將の席を返して、其褒貶を士卒に示すは、則是忠臣の、眞面目といはまくのみ。犬川犬田が殺伐の、一擧は舘の御本意に、違ふの故に、みづから貶して、倶に愆としぬれども、事皆勝利ならぬはなし。世

五本松に在り。敵の棄たる陣營に入替りて、士卒の軍功を尋るに、登桐山八、滿呂親子、安西就介們、この餘も諸士に分捕多かり。しかれども犬田が那二勇士を撃果して、寄隊二萬五六千の、胆魂を挫ぎける、其武其功に及ぶべき者あらず。莊介これを嘆賞して、且小文吾に向ひていふやう、和殿今日の揮きは、和漢に儔多く得がたし。是をもて敵はさら也、自家六七千の小勢をもて、二萬五千の大敵を、只一呼吸に殺頽せしは、和殿一箇の力に依れり。我及ざる所なれども、和殿は、當陣の、上將でありながら、士卒の爲に自愛して、始終の勝を思ひ給はずや。縱其功ありとても、匹夫の勇を事として、敢士卒に讓る事なく、那二勍敵と戰ひ給ひしは、いと危しとも危かりき。那時倘寄隊の陣より、覘近づきて箭を飛さば、和殿防ぐに由なからん。孔子に語道に似たれども、愚意の及ぶ所をいふのみ。こは後の爲なればと、理を演て諫れば、小文吾听つゝ感服して、教諭寔に其理あり。我も亦始より、思ざるにあらねども、那上水和四郎、赤熊如牛太は、其名粗聞えたる猛者なればこそ、將衡と村禽は、果敢なく撃れて、良于も亦危かりき。敵倘勝に乘るならば、今日の鬪戰いかゞあるべき。勝敗いまだ知るべからず。この故に我已ことを得ず、一臂の力を盡せしのみ。敢武藝を見はし、譽を求めて、匹夫の勇を好むにあらねど、和殿の諫は千金にて、我愆を知るに足れり。嚮には今井の戰ひに、和

時速し、小文吾は我馬の斫られて仆れんとしぬる時、仆しも果ず身を飛して、今東三に放れてありける、馬に閃りと乗移りて、那八角なる鐵撮棒を、振上る手も見せず、赤熊如牛太猛勢の、肩尖項骨被て、力に儘して撃しかば、いかにして堪在るべき。猛勢は肩骨摧けて、握り持たる鉞兒を、落して人馬共侶に、地上に撐と撃伏られて、そが儘息は絶にけり。然ば犬田が這日の揮き、敵も自家も目を驚して、其緒を接んと欲する者なし。登時犬川荘介は、執たる麾をうち揮りて、蒐れ〳〵と士卒を裑る、軍の潮前、時こそよけれ、と勇む登桐山八郎、滿呂復五郎再太郎、安西就介、いへばさら也、雜兵伇歩者に至るまで、皆洪水の衝く如く、又大山の崩るゝ像く、咄と揚たる喊の聲と、俱に前後を相爭ふて、面も振らず鎗の尖頭を、揃て寄隊の陣中に、突蒐り衝頽す、勢ひに誰か中るべき。寄隊は、萬夫に捷れり、と然しも負しく思ひたる、上水和四郎、赤熊如牛太を、犬田に撃せて力を喪ひ、勢ひ折けて忙然たりしに、又犬川に先を駈られて、始て事の起りしごとく、驚き亂れて、辟易す。一陣既に敗れては、大將自亂、原亂久も、又立直すことを得ず、返せ〳〵。と喚るのみ。逃る士卒に誘引れて、頹れて後陣へ牀れ蒐れば、朝良も憲重も、こは什麽。とばかりに、制むべくもあらざれば、竟に摠敗軍にぞなりにける。然ば里見の二犬士は、逃る寄隊を遠く赶はず、程よく士卒を喚返させて、人馬を衆へて、

既にして犬田小文吾は、左右に敵を受れども、毫も怕るゝ氣色なく、左を拄へ右に中り、受ては流し、流しては撃つ、神出鬼沒の手を盡せば、人馬の進退一致して、兩敵の器械を打拂ひ遣返す、生木の棒は翩々と、宛虛空に閃く如く、孰を其と分がたき、鬪戰闌也ければ、寄隊の士卒も、里見の諸兵も、呆然として醉るが如く、手を空くして長覩て在り。恁而上水和四郎は、今一雄の帮助を得たれば、疲勞れし氣力を勵して、相夾みて撃まくすれども、小文吾は、這兩敵を左右に受し、精神始に彌增して、岌より蒐る勢ひに、誰かよく勝よしあらんや。譬ば唐山三國の初に、冀州の刺史袁紹が、萬夫不當と負みたる二勇士、顏良文醜が、關雲長と戰ひしも、恁やとぞ思ふ奮激突戰、細に名狀すべからず。既にして犬田小文吾は、這兩個の勍敵を、思ひの隨に疲勞して、甲乙倶に腕の、亂るゝ透を得たりしかば、乙と喚きて撃つ棒を、束三拄るに遑なく、鈍くも項を礙と撃れて、頭鎧も骨も碎けけん、苦と一聲叫びも果ず、馬より撞と墜る時、小文吾が生木の棒も、中より弗毀、と折れしかば、小文吾早く、束三が鐵撮棒の杪を抓て、地上に落さず拿留ける、程しもあらせず赤熊猛勢、朋輩の仇逃さじ。と叫び進みつ鉞もて、犬田が頭を撃んとするに、毫も透をあらせざりける、小文吾馬上に身を反せば、猛勢が撃つ鉞兒は、篦外れて、小文吾が、乘たる馬の鬣かけて、頸を托地と斫落す、那時遲し、這

南總里見八犬傳

東都　曲亭主人編次

第九輯　巻之三十七

第百六十四回

殘兵刃を奪ふて窮君を賣る
水軍艦を寄せて敗將を載す

再說、犬田小文吾悌順は、寄手第一番の猛者と聞えし、上水和四郎束三と、馬を相寄せ棒を合せて、他雜もせず戰ふ程に、束三竟に腕疲れて、連りに噎き叫ぶのみ、既に危く見えしかば、又寄隊の陣中より、一個の騎馬武者馳出るを、と見れば是れ亦束三に、劣らざるべき大漢にて、蚺眼虎髯、骨逞しく面黑かる、身には皂革絨の鎧擐て、腰に三尺の大刀を跨へ、手に大鉞を執れりける、面魂苛しく、銀の左纏の緇額して、胡意兜を被ざりけり。恁而這猛者馬を趚めて、近づく隨に聲震立て、上水憩ね、我代ん。やよや東西の千士萬卒、今我赤熊如牛太猛勢が、本事を見よや。と喚りて、馬を馳よせ、鉞を、振閃して小文吾を、只一撃に斫んとす。

南總里見八犬傳目錄　終

南總里見八犬傳 目錄 六

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジヨンソン

南總里見八犬傳

六

粵南

皇覽八大剸

六

